

【完結】 猫娘と化した緑
谷出久

炎の剣製

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

緑谷出久は過去にとある事故にあう。

ただど何とか生き残った彼は中学三年生のとある事が切欠で遅れ咲きの個性を開花させた。

さらには憧れのヒーロー、オールマイトからも力を託されてヒーローを目指すことになる。

これは最高のヒーローを目指す少年（少女？）の物語である。

執筆中のツルギ君が内容が思いつかずに息抜きに書き始めた話です。

こちらが主に活動していく方かと思えます。

決してゲゲゲの鬼太郎の猫娘が可愛いという影響を受けたわけではない……はず。

政田正彦様より挿絵を頂きました！

制服姿の出久ちゃんです。

政田正彦様よりまたまた挿絵を頂きました！

改修したコスチューム姿の出久ちゃんです。

政田正彦様より第三弾の挿絵を頂きました！

水着姿の出久ちゃん+αです。

2018／09／17の追記

感想でよく見るし、勧められもしたので試しに『輸血パック必須』のタグを付けてみました。

これで少し様子を見ます。

『暁』様でマルチ投稿をしていますので、もしよろしかったらそちらもよろしくお願います。

2020年8月14日に完結しました。

―追記―

続編を書き始めました。

転スラとのクロスオーバーでタイトルは『転生したらまたしても猫娘だった件』です。そちらもよろしくお願います。

<https://syosetu.org/novel/234967/>

— 追記 —

9月16日の深夜にpixivでも掲載を始めました。
おいおい全部投稿できると思います。

目次

猫娘と入学編

NO. 001 覚醒 | 1

NO. 002 猫娘 | 12

NO. 003 修行と日常生活の苦難 | 19

(前篇) NO. 004 修行と日常生活の苦難 | 19

(後篇) NO. 005 雄英試験 | 27

NO. 006 結果と告白 | 45

NO. 007 夜の出会いと入学 | 45

NO. 008 個性把握テスト | 52

NO. 009 戦闘訓練での組み合わせ | 57

せ | 70

NO. 010 爆豪との戦い、新たな | 76

個性 | 76

NO. 011 訓練終了後と放課後の | 84

一幕 | 84

NO. 012 クラス委員長 | 95

猫娘とUSJ編

NO. 013 USJと敵 | 104

NO. 014 水難ゾーン | 112

NO. 015 爆豪の過去の汚点とト | 121

ラウマ | 121

	N O . 0 1 6	大猫変化、そして……。	131		N O . 0 2 2	第二種目・騎馬戦開始	185
	N O . 0 1 7	事後処理と微睡みの夢	142		N O . 0 2 3	お昼と轟の過去	
	猫娘と雄英体育祭編				N O . 0 2 4	心操戦。苦しい戦い	
	N O . 0 1 8	雄英体育祭に向けて	151		N O . 0 2 5	フオウという猫の恩返	203
	N O . 0 1 9	雄英体育祭開幕。そして全国へ……。	160		N O . 0 2 6	第一回戦の試合模様	211
	N O . 0 2 0	第一種目・障害物競走	168		N O . 0 2 7	衝突する出久と轟	218
	N O . 0 2 1	第二種目・騎馬戦	177		N O . 0 2 8	思いは唐突に	225
	ム決め						234

288	NO. 034	合同職場体験・一日目	279	NO. 033	職場体験先を決めよう	
				267	NO. 032	ヒーローネーム考案
					猫娘と職場体験編	
				259	NO. 031	終わる雄英体育祭
				250	NO. 030	プライドにかけて
				242	NO. 029	出久と飯田の戦い
					NO. 035	合同職場体験・一日目
					の夜	
					NO. 036	幕間・男達の葛藤と思
					い	
					NO. 037	合同職場体験・二日目
					出久自身の戦い方	
					NO. 038	合同職場体験・二日目
					出久と冴汰	
					NO. 039	合同職場体験・三日目
					保須市混乱	
					NO. 040	合同職場体験・三日目
					vs ステイン	
					NO. 041	合同職場体験・三日目
340						
305						
297						

N O .	0 7 2	個性：変化つて実は万	664	N O .	0 7 1	合宿二日目からが本番	654	N O .	0 7 0	合宿一日目の終わり	643	N O .	0 6 9	強化合宿の始まり	猫娘と強化合宿編	631	N O .	0 6 8	プールでの遊びと訓練	620	N O .	0 6 7	とある夏のひと時	611	の対応			
N O .	0 7 9	回想と反転	745	N O .	0 7 8	走馬燈	734	N O .	0 7 7	戦闘と失うもの	715	N O .	0 7 6	マスキュラーの襲撃	706	N O .	0 7 5	肝試しと開關行動隊	698	N O .	0 7 4	出久と爆豪の悩み	687	N O .	0 7 3	強化訓練後の風景	672	能個性？

N O .	0 8 7	嵐の記者会見	828	りの始まり	917	
N O .	0 8 6	淀む空気	819	N O .	0 9 5	
達は…。			808	取り・その2	900	
N O .	0 8 5	出久救出に向けて生徒	799	N O .	0 9 4	
				とある掲示板でのやり		
N O .	0 8 4	個性の再認識と目覚め	890	N O .	0 9 3	
猫娘と神野区異変編				出久の個性の真価	880	
N O .	0 8 3	最悪の結末	783	N O .	0 9 2	
N O .	0 8 2	狂気と略奪	775	N O .	0 9 1	
			764	真実	869	
N O .	0 8 1	暴走する個性と対処法	754	N O .	0 9 0	
				供給過多	858	
N O .	0 8 0	混乱する各地の状況		849	N O .	0 8 9
				N O .	0 8 8	
				オール・フォー・ワン	837	
				突入		

猫娘と回想、I・アイランド編

- NO. 096 回想《1》 I・アイラ
ンドへ 925
- NO. 097 回想《2》 メリッサと
の出会い 933
- NO. 098 回想《3》 デヴィッ
ト・シールド 944
- NO. 099 回想《4》 集まる者た
ち、その1 954
- NO. 100 回想《5》 集まる者た
ち、その2 965
- NO. 101 回想《6》 信頼できる
友 976
- NO. 102 回想《7》 メリッサの
研究室にて 985
- NO. 103 回想《8》 レセプショ
ン・パーティー 995
- NO. 104 回想《9》 出久達の
決断 1005
- NO. 105 回想《10》 走る出久
達 1015
- NO. 106 回想《11》 奮闘
1025
- NO. 107 回想《12》 サムの狂
気と出久の背負うもの 1035
- NO. 108 回想《13》 制御プロ

グラム正常化

1044

NO. 109 回想《14》終息

1053

猫娘と最終章：さらに向こうへ

NO. 110 救い上げる思い

1067

NO. 111 家庭訪問

1077

NO. 112 引き継がれる思い

【最

終話】

1090

猫娘と入学編

NO. 001 覚醒

「だい、じょうぶ……う？」

まだ小学生くらいのおぼさぼさした緑の髪の少年が血だらけになりながら必死に守った命があつた。

そこで少年——緑谷出久の命は尽きかけようとしていた。
だけど……。

それから時は経って、出久は中学三年生になっていた。

過去の大けがの事もあって半年は入院をしていた出久の事を母・引子以外には意外にも一番気にかけていたのはいつも出久が『無個性』だからとイジメていた爆豪勝己——
| かつちゃんその人だった。

表面上はやっぱり出久の事を下に見ていたけど、出久が事故に遭う光景を間近で見て

しまっていた彼は……無個性なのに迷わず飛び出していった出久の姿がいつまで経っても頭から離れずにいてしまい、今ではそっけない態度を取りつつもいじめの頻度は減っていた。

しかし、だからといってこの世界総人口の8割以上がなんらかの個性を持つ社会では無個性の出久はやはり舐めた視線を浴びることは多々あり勝ちも己のヒーローの夢を目指すためには夢を諦めていない出久は少しばかり目障りな存在の一人だという事は変わらない事実だった。

そんな折に、学校の授業で進路希望が行われて当然、爆豪が雄英高志望という事を聞いてざわめくクラスメイト達。

「当然だ！俺はなあ、雄英に行つてオールマイトをも越すヒーローになつて高額納税者ランキングに名を刻むんだよ！」

爆豪はそれはもう楽しそうにそう語る。

それを見ていた出久は体を丸めるように縮こまりながらもそれを聞いていた。
『すごいな、かつちゃんは……。でも、僕も！』

出久もわずかな希望を胸に雄英高を希望をしていたのだ。

だけどそれが先生の口から話された瞬間に沸き起こる笑いの声。

なにより出久が受けることを知らなかった爆豪はすぐに怒りの眼差しを出久に向け

る。

「デエクウウ!? なあに考えとんじや!? 無個性のお前がヒーローになると!」

「そ、そうだよかつちゃん。僕も……やってみなきやわからないだろ!」

「……そうかよ。まあ前にお前が助けそこなつたあいつみたいになるのが関の山だと思
うがな」

「ツ!!」

爆豪のその一言に出久は必死の睨みをする。

「けっ……まあどうせ落ちるんだから構やしねえけどな。ただし俺の邪魔だけはすんな

よー!」

「……」

出久はなにも言い返せずにただただ胸中は悔しさを滲ませていた。

その放課後に出久はいつもの癖で付けているヒーローノートをカバンに仕舞おうと

して、そこでまたしても横から爆豪にノートを取られてしまう。

「かつちゃん！ 返してよ！」

「ヒーローノートか……ほんとに諦めていないんだな。フンツ!!」

「ああつ!!」

あろうことか爆豪はヒーローノートを燃やしてしまった。

「諦めるデク。お前じゃ誰も救えねえ……それに、またあんな思いはしたくねえだろ……?」

それは偏に爆豪なりの多少残されている優しさだった。

「だけど出久はそれに気づく事が出来ずにただただ「それでも、諦めたくないんだ!!」と叫んだ。

涙を流す出久に対して爆豪はただ無言で燃えたノートを放り投げて取り巻きとともに教室を出て行った。

取り巻きの少年たちは爆豪に対して、

「いいのかよ爆豪？ あいつは結構必死っぽかったけど……」

「いいんだよ。あいつは無鉄砲が過ぎるからな……無個性でよかったんじゃないか？」

とある過去を思い出しつつ、「胸糞わりい……」と吐き捨ててそのまま帰っていく。

出久はとぼとぼと帰りつつ、溜息を吐いていた。

『かつちゃん馬鹿野郎……僕だって、僕だって……あの時ほんとだったら』

出久も過去を思い出すけど、救えなかった事実は変えられない真実のためにそれ以上は考えることをやめていた。

そんな時だった。

出久の背後に影が出来て、

「Mサイズの……隠れミノ……」

「ッ!？」

出久はとつさに振りむいたけどヘドロのようなヴィランは出久に纏わりついてし

まった。

そこから聞かされる体に乗っ取るという発言に、出久は死の恐怖を抱きながらも助けを求めた。

そんな時に頭にどこからともなく響いてくる声……。

『……………イカイ……………』

「えっ……………?」

その謎の声に耳を傾けようとして、その前に、

——もう大丈夫だ少年。私が来た!!

その力強い言葉とともに出久の憧れのヒーロー・オールマイトが出久を助けてくれたのであった。

「H A H A H A H A H A !!」

颯爽とヴィランを捕まえて軽快に笑うオールマイトが出久にサインや言葉を贈ってその場を立ち去ろうとしたのだけど、出久はオールマイトに掴みかかっていた。

「少年!? 離れたまえ!」

「嫌です! その前に僕の話聞いてくれませんか!」

出久の必死の言葉にオールマイトは少しだけ考えて、

「オーケイ。だからどこかに降りるとしようか……コフツ! (まずいな……)」
オールマイトはわずかに血を吐きつつそのままビルの屋上へと降り立った。
そして、

「オールマイト……個性がなくとも、ヒーローはなれますか……?」

出久の心から来る願い。

母には思った言葉は言われなかった。

だけどオールマイトならば!

だがしかし、その答えを聞く前にオールマイトは萎んでしまっていた。

大いに驚く出久。

仕方がないかとオールマイトは語りだす。

自身の過去にあった事件で重傷を負った事とヒーローはいつも命がけだという事を。

「夢を見ることは悪い事ではない。だがな少年、それ相応に現実を見なければならぬ

……」

期待した応えは返ってこなかったことに對して出久は絶望を味わう。

僅かな希望だったオールマイトに縋つても結局は無個性ではこの世の中ではほそぼそと生きていかなければいけないと思ひ知ってしまったのだ。

絶望に打ちひしがれる出久は様々なクラスメートの言葉を思ひ出して「もう、諦めるしかないのかな……？」と思ひ、

「フオウ……僕はもうしたら……」

かつて救えなかった子の名前を呟く出久。

ただどこかで爆発音が響いてきて気乗りしないけどいつもの癖で行ってしまう

出久。

そこで目撃したのは先ほど自身を捕えようとしたヘドロヴィランがまた暴れている光景。

どうして……という思いと同時に見てしまう。

捕まっている人が爆豪勝己だという事に。

「(かっちゃん!?)」

気づけば出久は駆け出していた。

「バカヤロー!! 止まれー!!」

ヒーローの叫ぶ声が背後から聞こえてくるけど出久はただ走った。

だけど瞬間、出久は自身の動きがスローモーションのようになっている感覚を味わう。

そしてまたしても先ほどの声が語り掛けてきた。

『——イズクは、カレをスクイタイノ?』

『当然だよ!』

『カレは、イズクの事をイジメていたんだよ……?』

『それでも!』

『それでも?』

『助けを求めているんなら助けるのがヒーローだろ!!』

『そっか……。うん、わかった。イスクは相変わらずだね……。それじゃ、私からプレゼントを上げるね』

それを最後に謎の声は聞こえなくなっていた。

スローモーションから解放され、何かの力が湧いてくる感覚を出久は覚えながらもヘドロヴィランに飛び付いた。

「何でてめえが!! っていうかなんだその姿?！」

「なんでって……。君が助けを求める顔をしていたから!!」

「もう少しなんだよ! 邪魔するな!!」

ヘドロヴィランが腕を振るってくる間際に出久は自然と腕を振り上げていた。

次の瞬間、ヴィランの苦しむ声が響いた。

出久はなにごと!? と思っただけどころにそこにオールマイトの声が響いてきて、

「君を論しておいて……。己が実践しないなんて!! プロはいつだって命がけだ——
!!」

オールマイトの一撃によってヘドロヴィランは吹き飛び、その風圧で起こった上昇気流で雨が降り注いできた。

「オールマイト……。よかった……」

「おい、デク!! なんだその姿と力は!? 目を覚ましやがれえ!!」

爆豪の声が聞こえてきたが出久はそれを見届けて静かに気を失った。

NO. 002 猫娘

出久が次に目を覚ましたのは事件が解決した後だった。

見れば爆豪はヒーロー達に「すごいタフネスだ！ それにその個性！」プロになった
らぜひ事務所の相棒サイドキックに！」と称賛の言葉を贈られていた。

だけど出久が目を覚ましたのに気付いたのか、一人のヒーローが近づいてきて、

「少年……いや、今は少女なのか？ とにかく君を個性無断使用の疑いで一回警察まで送らないといけない。着いてきてもらっても構わないかね？」

「……え？ 個性？ そんなはずは……僕は無個性ですよ？」

「は？ そんなまさか……だってしつかりと個性が出ているじゃないか」

ヒーローにそう言われて出久は困惑した。

ただどさらにそこに爆豪が出久に掴みかかってきて、

「おい、デク!! お前無個性じゃなかったのかよ!! 今まで俺の事を騙していたのかよ!!」

「ちよ、待つて待つてかつちゃん！ かつちゃんが知っている通り僕は無個性だよ!?」
「だったらこれはなんなんだ!？」

爆豪は思わず出久のある部分を掴んでいた。

「痛い痛い痛い!？ かつちゃん、どこを掴んでるのさ!？」

「どこってお前……はっ？ マジで気づいていねえのか?。」

爆豪のどこか抜けた声にさらに困惑の色を強める出久。

そこに状況を見守っていたヒーローがまた声を出して、

「爆豪君、一つ聞くが……本当にこの少年？は無個性なのかね?。」

「……ああ。医者にもそう言われたはずだ。デクから聞いたからな」

「ふうむ……遅^{おそ}咲きの個性という事かな?。」

「あ、あのー……本当に僕は無個性ですよ?。」

「そうか。しかしこれでは埒があかないな。Mテレデイ、いるか?。」

「なにかしら……?。」

そこに通常のサイズに戻っていたMテレデイがやってきた。

「なにか手鏡か映し台みたいなのは持っているか?。」

「あるわ。少し待つていてね」

しばらくしてMテレデイが一人分が映る鏡を持ってきた。

「それじゃ……えっと、あなたのお名前は？」

「み、緑谷出久です」

「出久ちゃんね」

「出久ちゃん!?!」

いきなりのちゃん付けにさらに戸惑う出久。

「とにかくこの鏡を見てちょうだい。その訳が分かるから」

「わ、わかりました……」

それで恐る恐る出久は鏡を見た。

そこには頭に猫耳を生やしてお尻の方からは二股に分かれた尻尾が生えていた。

指の爪は鉤爪のように鋭く尖っている。

なにより大きな変化は自身の性別は男のはずなのに腰まで伸びた癖のある髪。盛り

上がった胸。くびれた腰。細い手足。

目つきなんて少し猫のように丸くなっていて従来の地味さが減って可愛くなつてし

まっていた。そばかすが残っているのは唯一の救いといえれば救いか……？

冷静になってきて気づけば声も高くなってしまっているではないか。

「な、なああああああ!!?!」

その大きすぎる変化に出久は思わず女性の様な大声を上げて叫んでしまった。

だけどすぐに意識を別の物に置き換えて即座にとある部分を触ってみた。

「……な、ない……」

そう、男の大事なものが消えてしまっていたのだ。

それにはさすがのMテレデイも気の毒そうな表情をしながらも、

「個性の開花とともに性別まで反転してしまったのね……可哀想に」

気が遠くなるような気持ちでそのまま出久は警察ではなく病院へと連行された。

そして診断結果は、

「……ふむ。緑谷出久君の個性は『雌猫』だね」

「め、雌猫……」

その診断結果に出久はシユンツ……と猫耳が垂れ下がってしまった。

そして、今回は突発的な個性の発動という事で警察沙汰にはならず釈放された。

出久は半ば放心状態のまま家までの帰り道を歩いていた。

だけど背後から聞こえてくる「おいっ!!」という怒声。

見ればそこには少し息が上がっている爆豪の姿があった。

「かつちゃん……待っててくれたの?」

「ふざけんなクソナードが！俺は言いたい事があつただけだ！」

そう言つてデクの胸倉を掴みながら、

「運よく個性が発動したからつてな！調子に乗んなよ！てめえは昔も今もクソナードに変わりはねえんだ！それに誰がてめえなんか助けて求めたよ!?」

それから一方的に愚痴を零しまくる爆豪に、でも出久は別の思いを抱いていた。

「ありがとう、かつちゃん……」

「ああん!!?」

「こんなに見た目が変わつちやつたのに今までと変わらず僕に接してくれて……」

「クソデクはクソデクだ！男だろうが女だろうがてめえはてめえだろうが!!」

「うん……」

それだけで出久はどこか救われる気持ちになつた。

「ああ、つたく……調子が狂うぜ。いいか!?個性が発動したからつて所詮は訓練もろくにしてねえ付け焼刃なんだから雄英なんざ受けるんじゃないぞ!?それだけ言いたかつたんだ。じゃあな」

最後まで爆豪は爆豪のままだった。そのまま帰つていく彼を見ながらも、だけど、出久はそれで思い至つた。

「そうだ……個性が出たつて事は、僕はヒーローを目指せるつて事?」

——その通りだ緑谷少年！

それに反応が返ってきて振り向けばそこにはオールマイトの姿があった。

「オールマイト!?!」

「うむ。それよりありがとう緑谷少年。いや、今は少女か？ まあいい。君の身の上と示した行動がなければ私は惨めなニセ筋になるところだったよ」

「それって……でも、僕は個性が発動するまではただの無個性だった……ヒーロー達の邪魔をしてしまつて……」

「そうさー！ あの時、今は個性が発動したからよかつたが無個性だと思ひ込んでいた小心者の君だったから！ 私は突き動かされた！」

オールマイトは語る。

「トップヒーローは学生の頃から逸話を残している。彼らの多くが話をこう結ぶ……『考えるより先に体が動いていた』と……」

それを聞いて思い出す過去の出来事。

『ゴメンねえ出久ごめんね』という母の言葉。

そしてもう一つは無謀だろうと、血だらけになろうと助けたいと思つたあの時……。

その思いが今、ここに集約されようとしていた。

「君はヒーローになれる!!」

オールマイトのその言葉に出久は盛大に涙を流した。

これは、様々な数奇な運命の巡り合わせによつて緑谷出久が最高のヒーローになるまでの物語である。

NO. 003 修行と日常生活の苦難（前篇）

『君はヒーローになれる!!』

そう言われた時の出久の気持ちと云ったらそれはもう計り知れないものがあつた。

さらにはオールマイトの力を継ぐことが出来る事に対しても高揚感のようなものを感じていた。

だけど、それとは別にしてオールマイトは悩んでいた。

「しかし……雄英入試まで約10カ月。それまでに君の身体を仕上げないといけないが、まずは日常生活にも慣れないといけないからな」

「どういう事ですか……?」

「そうだね。君はまだそんなに自覚はないだろうけど今までの男性の暮らしをしてきたから仕方がないが、今日からは女性として暮らしていかないといけない」

「あつ……」

オールマイトの言い分は分かる。

身体が個性の影響で性転換してしまったせいで日常生活に支障を来すことは大いに考えられる。

最悪心が身体を拒絶をしてしまい碌に動けなくなってしまうかねないからだ。

「さて、どうしたものか……」

ふむう……と顎を擦りながら悩みだすオールマイトに出久も他に頼る当てがない上はただ見守る事しかできないでいた。

やがてオールマイトは一つの決断をした。

「そうだな。期限も限られてくるから荒療治で仕方がないけど生活面では君のお母さんに任せるしかないだろうな」

「母さんに……?」

「そうだ。何事も一番君を理解しているのは母親なのではないかね?」

「まあ、そうですね……」

「だから私との修行の間、並行して君の母親から女性としての暮らし方をレクチャーしてもらいなさい。実を言うと子育てをした事がないから私ではそっち方面は教えることが出来ないからね!」

HHHHH!と誤魔化すように笑うオールマイト。

「だけどそれなら仕方がないと出久も割り切った。

「とにかくこれから大変な修行になるけど覚悟はあるかね？」

「あります！ 頑張らせてください！」

「よろしい。それではまずは明日一日で親に女性としてのレクチャーを受けたのちの明後日に海浜公園で君を待っているよ」

「はい！」

それで一旦はオールナイトと別れた出久だった。

そして家に帰るなり今日の出来事を母に相談してみたところ、

「そっかー……。よかったね出久。女の子になっちゃったのは仕方がないけどこれであなただのヒーローの道が開けたんだね！」

思いの外簡単に出久の状態を受け入れられてしまい出久は思わず拍子抜けしてしまった。

「その……母さんは僕の事が気持ち悪くないの……？」

「何を言うかと思えば……バカねえ。自分の子供を嫌う親がいるものですか。それよりこれからが大変だよ出久。残り少ない中学生の間は仕方がないけど高校に入るまでには女子の仕草とか制服とかにも慣れないといけないからね」

「うっ……それもそうだね」

「出久が言うには明後日から個性の使い方在必死に勉強するんでしょ？」

「うん。早く慣れないといけないからね！」

「だったら明日は一日女子としての行動を勉強しないとね！ 頑張りなよ出久！」

「わ、わかった……その、頑張る！」

出久は苦笑いを浮かべながらも答えた。

「あ、でも言葉使いは出久は優しい子だから直さなくてもいいからね？ 今更無理そう

だしね」

「だよね。あはは……」

出久の想像の中では女言葉を使う自身を想像して思わず目を逸らしたい気持ちになつた。

女の子になつただけで黒歴史なのにこれ以上の恥辱は勘弁である。

翌日になつて出久は引子から女性としてのレクチャーを教わつた。

トイレの仕方や生理用品などの使い方、ブラなどの使い方など……。

ただでさえ女性との接触が母親以外に今まで碌になかった出久には未知の世界が過ぎた行いだった。

女性化したというのが神秘的なのは分かるけど胸も基準以上に大きくなったのだからブラをしないと擦れて痛い。

出久は一日で詰め込むかのように女性としての知識を学んでいった。

もともと学習肌なのも幸いしてなんとか基本的な事は学んだ出久は、もうすでに精神的に疲れた顔をしながらも翌日に海浜公園へと足を運んでいた。

ちなみに引子は学校や役所に性別の書き換え申請を行ってしまっただ。

もう、男には戻れないと静かに涙を流した出久であった。

「やあ元少年ー！」

海浜公園に来てみればそこには案の定オールマイトの姿があった。

「オールマイト……！」

「どうしたんだね元少年。その、一日の間にあらゆる苦痛を味わった様な暗い顔は？」

可愛い顔が台無しだぞ」

オールマイトに可愛いと言われてもいまいちピンと来なかった出久。

それより気を紛らわすかのようにオールマイトに修行内容を聞くことにした。

「そうだね。まずは君の体作りもしないといけないけど、女性になった事で筋力も落ち

ている事だろうしこれは大変な作業になるぞ！」

「そうですね」

実際、女性になった事で筋力が落ちたのは言いようもない事実である。

そこも今後の成長課題である。

「そして君のその個性も鍛えないといけないからね。何分異形種など教えたことがないからそこら辺は独学になってしまっただろうが……」

「そこら辺はなんとか大丈夫です！ 昨日のうちに個性を発動してみてどういものかは何となく理解しましたから」

「ほう……ちなみにどんな力があつたんだね？」

「はい。今のところ把握しているのは猫の爪の伸縮自在や硬化によつて鉄を引き裂くくらいには強化出来ました。

次に身体能力……主に脚力の強化。高速移動に加えて昨日試しに飛んでみたら四階建てのビルの屋上まで飛んじやいました。

他には人より優れている目、耳、鼻などの五感の強化……。特に猫の特性なのか物音に敏感になって暗闇の中も夜目が働いてそつなく移動することが出来ました。

それに驚く事に……」

「驚く事に？」

出久は一回オールマイルトから目を外して、ちようど近くにいた野生の猫を手招きして、なんとニヤンニヤンと猫の様な声を出していた。

すると猫の方も出久の言葉に反応してか同じように声を出している。

しばらくして、

「という感じで猫の言葉が分かるようになりました」

「そ、そうか……ちなみにさっきの猫はなんて？」

『オールマイルトの秘密をゲット、ヒヤッハー！』とか叫んでいました」

「待ちなさい！」

オールマイルトは焦った。

動物とはいえ自身の秘密を知られるのは看過できないからだ。

「あ、大丈夫です。ちゃんとバレない様にとキツク言及しておきましたから」

「それなら、まあ……安心なのかな？　だがたった一日でそれだけ把握できているとはやるな元少年」

「まあ、今までのヒーローノートとかで動物種とかのデータの下積みとかもありましたからなんとか……」

あははー……と何事もないように笑う出久を見て、内心オールマイルトは戦慄していた。

結構強力な個性じゃないか、と。

これにワン・フォー・オールが加わったらどう化けるか見物である。

とにかくその日から出久とオールマイトによる修行（ゴミ片付けによる肉体作り）が始まったのであった。

NO. 004 修行と日常生活の苦難（後篇）

何事も勉強にも力を入れて修行と両立をしないといけない。

そうでないと試験でえらい目に遭うよ？とはオールマイトの言葉である。

だから出久はいつも通り……いつも通り？学校へと通う。

しかし残り一年にも満たない中学生生活で今更女子制服などを買う事などお金の無駄とも言う。

だから出久は少し胸が苦しい思いをしながらも男子制服を着て通うことにした。

先生達にもその旨は伝えてあるので大丈夫である。

しかし、出久は良くてもクラスメイト達にしてみれば驚愕の事だったようであり、出久が教室に入るなり奇異な視線を浴びせるのはまあ仕方がない事なのである。

今まで無個性として下位に見てきた出久がいきなり個性を会得して、しかも女体化したという事に一同は付いていけない。

結果、特に親しいわけでもなく仲が良いわけでもないので遠巻きに見ているだけに留

まっているのが現状。

今までと特に変わりはないからいじめが起きないだけマシだと出久は思うことにした。

それに、出久の胸の中には爆豪の『クソデクはクソデクだ！ 男だろうが女だろうがためえはてめえだろうが!!』という言葉がしつかりと刻まれていたために悲しくはなかった。

爆豪を見れば「フンツ……」とそっぽを向かれたけど、それだけでもいつも通りのままで出久はそれだけで我慢できると思った。

「……と、学校生活ではこんな感じですかね」

「悲しいなあ……やはり無個性というレッテルがある限りいじめも絶えないという事か。世も末だな……」

出久は海浜公園で廃棄物のごみを運びながらオールマイトにそういう話をしていた。日常の会話をしながらもゴミ掃除を頑張る出久は果たして結構鍛えられていたりする。

それは思い起こすに修行を開始して一か月ぐらいが経過したころに出久は心の中で思った。

「（こんなんじやだめだ！ もっと、もっと力を付けないと！）」

出久は踏ん張るように何度も倒れながらも立ち上がってはごみを運んでいた。

「元少年！ こんなペースだとすぐに十カ月なんて過ぎちまうぜ！」

「は、い!!」

オールマイトの鼓舞の言葉でやる気を再度出し始める出久。

だけど体は悲鳴を上げていて碌に物も運べない。

雌猫の個性は脚力強化以外では現状では壊すことに特化している為に体力作りには向いていない。

だからどうしても腕の力が足りなくて力尽きてしまうのだ。

そして出久は思った。

「（脚力だけじゃなくて全身の強化も出来たらいいのに……ッ!）」
と。

そんな事を思った矢先だった。

『それじゃイズクがこれから必要になるような個性をあげるね』

「えっ……?」

咄嗟に出久は後ろを振り向いた。

だがそこにはオールマイトの姿しかなかった。

「どうした元少年? 動きが止まってしまったようだが……」

「はい。あの、今オールマイトは僕に『それじゃイズクがこれから必要になるような個性をあげるね』って話しかけました?」

「いや? そんな事は一度も言っていないが……それに私は出久などと呼び捨てはしていないぞ?」

「ですよー。それじゃ今の頭に語り掛けてきたような声は一体……? んっ?」

そこで出久はふと自身の身体になにかが湧き上がってくるような感覚を感じる。

それはまるで爆豪をヘドロヴィランから助け出そうとした時と同じようで――。

変化はすぐに起こった。

まるで自身の身体が一気に軽くなるような気分させられたのだ。

「元少年……? なんか先ほどより女性に対して失礼だと思いが体つきが変わったよう

に感じるぞ?」

「え?」

出久はそれで自身の腕や足を見てみる。

体操着から覗く素肌が盛り上がっているように見えるのだ。

「もしかして……」

話は早いが出久は腕に力をこめるイメージをした。

そして今しがたまで運んでいた重いゴミを持ち上げてみた。

するとまるで十分の一くらい为重さに感じる位で持ち上げられたのだ。

それには出久もオールマイトも驚愕の表情をした。

「お、オールマイト! これってどういう事ですか!」

「わ、分からない……この短時間で君の身体に何が起こったのだ?……そうだ。試しに

そのゴミをどこでもいいから投げ飛ばしてみてくれないかね?」

「投げ飛ばす!? む、無理ですよそんな事!」

「いいから! もしかしたらもしかしてかもしれないからな!」

オールマイトにそう言われて出久は投げ飛ばすイメージをしながらゴミ集積所の場

所まで投げた。

瞬間、その粗大ゴミは放物線を描きながら綺麗にゴミ集積所まで飛んでいって「ド

ガッ！」と音を立てて墜落した。

それにはさすがの出久も自分の手のひらを何度も握り返してを繰り返して不思議そうに表情を曇らせていた。

当然、見ていたオールマイトも驚愕の内容だった。

確認のためにオールマイトはワン・フォー・オールの感覚を出久に教えることにした。

「……元少年。もう一つ確認をさせてもらってもいいかな？」

「は、はい……」

「今の力を全身にくまなく行き渡らせるイメージは出来るかな？」

「や、やってみます」

出久は一回深呼吸をして一気に力を全身にこめる。

それによって出久の身体は蒸気が上がりだして彼の野菜人みたいに体つきが強化されていった。

「これが本当に……僕の力？」

「ふむ……これは『身体強化』か？ それとも『怪力』なのか？ まあどちらでもよいが……」

元少年。ワン・フォー・オールを会得するまではそれを雛形として可能な限り維持できるように努力してみなさい。

「どうやら同種の力みたいだからな」

「わかりました！」

それからしばらくは出久は力を維持しながら粗大ゴミを運んでいた。

しかしオールマイトは内心穏やかではなかった。

「（元少年が聞いたという謎の声とともに新たに会得した力……。果たしてこの声の主は元少年にとって天使か、それとも悪魔のような存在になるのか……。？ 監督役の私が最後まで見届けないといけないようだな）」

そんな事があったがそれ以降、出久はこの『身体強化・怪力』を維持し続けて気づけば八カ月でもう海浜公園の粗大ゴミはすべて浜辺から消え失せてしまっていた。

「なんてことだ……。グレートだ！」

「お、オールマイト……。僕、出来たんですよ!？」

「ああ、そうだ元少年！ 君はよくやった！ これで身体も出来上がった事だ。後の残り二カ月はワン・フォー・オールの習得に時間を回せるな！」

「はい!! 僕のこの個性達とともに頑張っていけます!!」

そして出久はオールマイトのDNAが宿っている髪を食べてついにワン・フォー・オールを継承し、残り二カ月の期間を習得に費やすのであった。

NO. 005 雄英試験

出久はついに雄英試験会場へと足を運んでいたのである。

オールマイトからは個性もまだフルカウルは10%しか会得していないから大丈夫かと相談してみたけど、むしろ『君を越す子は少ないんじゃないかなあ……?』と太鼓判を押されてしまった始末だった。

そして、『頑張つて来なさい!』と言われたので頑張る以外の選択肢なんて度外視だ。

「よし! 頑張ろ——……!」

「どけデク!!」

気合を込めようとした矢先に背後から爆豪が歩いてきた。

睨みを出久に利かせながら、

「俺の前に立つな、殺すぞ!」

とまで言われて出久はなんとか「お互いにガンバロウネ」と片言で返したけどそのま

ま先へと行つてしまった。

周りからはそんな爆豪の出久に対する態度に、

「前にテレビで見たけど女子に対して感じ悪いよね」「あの子も災難だな……」「あんなに可愛いのかな。なんであんな言葉を吐けるのか」

と殆どが出久を擁護する言葉ばかりだったので出久もどこか悲しくなった。

でも、いつまでもじつとしていられない。

そう思い出久は少し走り出そうとして、しかし途端に地面に足を取られて倒れそうになる。

だけどそこで自分の体が浮いている感覚を味わって、

「大丈夫？ ごめんね、うちの個性で助けちゃった。やつぱり転ぶなんて縁起悪いもんね？」

「あ、ありがと……その」

「それよりお互い頑張ろうね！」

そう言つて助けてくれた少女はその場を立ち去っていった。

それで出久は「女子と喋っちゃった！」と少しの嬉しい気持ちとすぐに「自分も女子だったんだ……」と猫耳と二股の尻尾を垂らして落ち込む。

でも気を取り直して受験席に座る出久。

でもなぜか隣が爆豪で己の不幸を呪うばかりである。

雄英の試験は倍率が300を優に超えている。

そして試験会場には雄英に入るため多くの受験生が受けに来ていた。

その中で爆豪と隣席に座るといのは何という確率か。

「ま、あまあなんとかなるよね？」

それから筆記試験も終えて手応えを感じたまま実技試験の説明に入る。

実技試験の説明にはプロヒーローであるプレゼント・マイクがその任を預かっていた。

『今日は俺のライブへようこそ！エヴィバデイセイハイ！』

プレゼント・マイクの叫び声に、しかし試験前ともあり応えるものはいない。

このような場所でなければ出久は素直に叫んでいただろう。それくらいの自制心はあるのだ。

『こいつあシヴィー——!!! 受験生のリスナー！ 実技試験の概要をサクッとプレゼン

するぜ!! アーユーレディ!』

出久は返したい精神を何とか耐えた。

しかしもうすでに感動に打ち震えている。

いつもの癖でぼそぼそと小言を話してしまうので隣の爆豪に「うるせえ」と言われる

始末。

『入試要項通り！ リスナーにはこの後！ 10分間の『模擬市街地演習』を行つてもらうぜ！ 持ち込みは自由！ プレゼン後は各自指定の演習会場に向かつてくれよな！』
その説明を受けて爆豪が言った。

「同校同士で協力させねえって事か。それじゃてめえを潰せねえじゃねーか？」
「怖いよかつちゃん……」

その間にも説明は続いていく。

『演習場には仮想敵を三種、多数配置してありそれぞれ『攻略難易度』に応じてポイントを設定してある！ 各々なりの“個性”で“仮想敵”を行動不能にし、ポイントを稼ぐのが君達リスナーの目的だ！ もちろん、他人への攻撃等アンチヒーローな行為はご法度だぜ！』

プレゼント・マイクの説明に、しかし横槍を入れる眼鏡の青年が立ち上がった。

「質問よろしいでしょうか？ プリントには四種の敵が記載されています！ 誤載であれば日本最高峰の恥ずべき事態です！ 我々受験者は規範となるヒーローのご指導を求めてこの場に座しているのです！」

「尤もな意見だと出久は思った。」

確かにプリントを見れば四種と書かれているのが見て取れる。

「だけどプリントを見ていた出久に対して眼鏡の少年が「ついでにそのポニーテールの猫種の女子！」と声を荒げて、

「説明中にさつきからブツブツとうるさいぞ！ 物見遊山で来たのならすぐにここから帰りたまえ！」

「うっ……」

それで周りの視線もあつて涙目になる出久。

その反応に眼鏡の少年は慌てたようで、

「す、すまない！ だがここはもう試験会場なのだ。だから静かにしてくれと助かるのだが……」

「すみません……」

「わかつてくれたのならいいんだ」

なんとか沈静化したのを確認したプレゼント・マイクは、

『痴話喧嘩ならいつでもできるぜー!? 今は試験に集中しな。まあそうだな。受験番号7111くん。ナイスなお便りサンキューな！ 四種目の敵はOP！ そいつはいわばお邪魔虫だ！ 各会場に一体！ 所狭しと大暴れするよう『ギミック』よ！ 戦わず逃げることをお勧めするぜー！』

「ありがとうございます！失礼いたしました！」

それで着席する眼鏡の少年。

『俺からは以上だ!! 最後にもリスナーへ我が校の校訓をプレゼントしよう。』

かの英雄ナポレオンⅡポナパルトは言った! 『真の英雄とは、人生の不幸を乗り越えていく者』と!!

更に向こうへ! “Plus Ultra!!” それではよい受難を!!』

それから試験会場の場所へと移動していく一同。

その中を出久は歩いていきながら、

「大丈夫……オールマイトとの特訓の成果を出し切れればいいんじゃないか。僕は出来る!」

その中で先ほどの眼鏡の少年と助けてくれた女の子の姿も確認できたけど、さっきのように注意されないようにと出久は我慢した。

その時だった。

『スタートだ! イエー……イ!!』

いきなりのプレゼント・マイクの叫びに頭が一瞬で戦闘モードへと移行した出久は、

「(脚力強化!!) いくぞ! 高速移動!!」

出久はそれぞれが走り出す中で誰よりも先行して前を走っていた。

「なっ!!」 あの子、さっきのドジっ子じゃないのか!」「速すぎる!!」「この俺よりも速いだと!」

各々の声を置き去りにしてさっそく現れた1ポイントの仮想ヴィランに出久は爪を伸ばし硬化させて一瞬の間に引き裂いた。

「脆いな……でもこれならやれる!!」

そして出久は普段は使用していない猫耳に神経を集中させて機械的な足音を頼りに次々と仮想ヴィランを見つけて引き裂いていった。

残り時間は5分と告げられて「この調子なら平気そうかな……?」と安心している時だった。

ビルとビルの間を圧潰させるように0ポイントの仮想ヴィランが出現したのだ。

「あれが0ポイントの仮想ヴィラン……」

出久の周りの受験者達はあれよあれよという間に逃げ出してしまっていた。

それで出久も一瞬の判断を迫られた時だった。

「いったあ……」

先程崩れた瓦礫の影響で出久を助けてくれた女の子が倒れてしまっていたのだ。

「助けなきや!!」

出久は迷いもなく少女のもとへと高速で移動した。

「大丈夫……?」

「あ、うん。その、うち……」

「待つて。安全な場所に移動させるから!」

そしてすぐさま受験者達が避難している場所へと女の子を運んだ後、

「0ポイントでも仮想ヴィランだ。放っておくわけにはいかない!」

向かっていこうとする出久に、だが背後であの眼鏡の少年が大声を上げてきた。

「君! 待ちたまえ! あれは別に倒さなくてもよいものだから……!!」

そう言われて出久は眼鏡の少年に笑顔を浮かばせながらも振り向いて、

「それでも、あれを放っておくと町が壊されちゃうでしょ? だから僕は行くよ!」

走っていく出久の姿を眼鏡の少年はただ頬を赤くさせたまま見送るだけであった。

少年の心に芽生えた気持ちはなにかなにか……?

そんな事は知らない出久は、左手の爪を最大限まで伸ばして現状で最高の硬化をさせ、ワン・フォー・オールを全身に巡らせて右手を強く握る。

そして最後に高速移動をして0ポイント仮想ヴィランの前まで来ると、脚力強化をして頭上まで飛び上がり、体を捻り重力に任せて降下し一気に爪を振り下ろした。

結果、0ポイントヴィランは身体上半分まで引き裂かれた。

「(チツ……浅かったか。)でも! スマーーーーッシュ!!」

溜めていた右の拳を一気に振り抜いて今度こそ0ポイント仮想ヴィランは粉々に砕け散った。

『試験終了ーーーー!』

終了のアナウンスが流れ、これにて雄英試験は終わったのであった。

出久は帰り道に猫耳をびよこびよこ動かしながら喜びを表現していた。

「これならオールマイトにも認められるくらいの出来たったかな……?」

「あ、あの……ッ!」

そこで背後から出久が助けた女の子が走ってきて、

「その、さつきはうちのこと助けてくれてありがとう!」

「うん。ケガとかない?」

「うん。リカバリーガールって人に捻挫も治してもらったんよ」

「そっか。よかった」

「はわー……」

女の子は出久の表情に見惚れていた。同じ女の子だというのに。

「じゃなくって！ 自己紹介しよう！ うちの名前は麗日お茶子です！」

「わかった。僕は出久。緑谷出久っていうんだ」

「出久ちゃんか。もし、受かったら高校生活をよろしくね！」

「あはは。まだ気持ちがいよ。受かっているか分からないのに」

「いんや、出久ちゃんは絶対受かつとるよ！」

「そう、かな……？」

「うん！」

それから二人は軽く会話をした後握手をして別れた。

お互いに結果が楽しみだねと言って。

NO. 006 結果と告白

雄英高校教師陣達は本日行われた試験の結果を見ながらそれぞれ満足そうに頷き合っていた。

「いやー、今年は豊作かもしれませんね」

とは一人の教師の言葉。

そして映像に映し出されるのは出久の姿であった。

「過去に立ち向かったものはいましたけど、あそこまで見事にあの仮想ヴィランを粉々にするなんて……」

彼女はヴィランポイントもさることながらレスキューポイントも断トツの一位ですから総合で一位確定ですね」

「爆豪勝己という少年もヴィランポイントは高かったのだがレスキューポイントが0というのもある意味すごいですな」

「この二人は資料によれば同じ中学だそうで……」

「ほう。それはそれは……」

全員がこの二人の資料に視線を向けていた。

他にも向ける子はたくさんいるのだけどやはり二人の戦果があまりにも大きいので後回しになってしまっているのは仕方がない事だ。

「ですが他にも興味深い事が……緑谷出久という少女は約一年前までは無個性だった。さらに言わせてもらえば性別も男性だった。

個性の発動とともに性転換をしてみたというのは可哀想な事実だろう。

しかし、この年頃だと男女の意識の違いで悩むものだろうがそれも踏まえてこの一年であそこまで個性を仕上げたのは相当の努力をした事が窺えるというものだ。きっと彼女はいいヒーローとして成長してくれる事だろう」

「俺も彼女のあの一撃を見た時には大声で叫んじまったぜ！　ありや磨けば光る原石だぜー！」

『違うない！』

ほぼ全員一致の意見だった。

ただ、一人だけ言葉を発していなかった教師……イレイザー・ヘッド もとい相澤消太はプレゼンで出久が話した複数の個性一覧の中に『猫との会話ができる』という点で良好な関係が築けたらしいな……という思いをしているのであった。

一方、出久は家で結果が来るのを今か今かと待っていた。

「出久うー……少しは落ち着いたらどうなの？ 満足な結果を出せたんでしょ？」

「そうなんだけど、やっぱり結果が来ないと落ち着けなくて……」

それで気を紛らわすために猫耳やしっぽのお手入れなどをしている出久だった。髪の毛の手入れをしない辺りどうなのだろうか……？

まあそんな感じで日にちは過ぎて行つてある時に母・引子が慌てた感じで一通の手紙を持つてきた。

出久はすぐに受け取つて部屋で投影マシンを起動させた。

『私が投影された!!』

「オールマイト!?!」

いきなりドアップで投影されたオールマイトの顔に驚きの表情をする出久。

そしてオールマイトはこの春から雄英高校で教師をすることになったという話をし

て、出久はこれからも教えを乞うことができると内心喜んだ。

『さて、少し早いですが君の結果を話そうじゃないか』

それを聞いてゴクリツ…と喉を鳴らす出久。

『筆記試験はいい成績だった。グレートだ。』

さらには実技試験ではヴィランポイントは一番の75ポイント。それに加えてレスキューポイントという隠された項目があるのだが、君は女子を救うために0ポイント仮想ヴィランを倒した。

それが採点されたために60ポイント。

合計135ポイント……よって緑谷元少年……いや、もうこれからはこう呼ぼう。緑

谷ガール！

君は雄英試験トップ通過だ。おめでとう!!

来いよ、緑谷ガール！ 雄英が君のヒーローアカデミアだ!』

「ツ、はい!!」

晴れて出久は雄英高校への進学が決まった瞬間だった。

すぐに引子にその事を話してその晩は盛大にパーティーを振る舞われた。

そしてその夜にあの時に電話番号を交換しておいた麗日お茶子と電話で話し合っていた。

「麗日さん！ 僕、合格できたよ！」

『そっか！ うちもなんだけどなんとか合格できたんよ。なんか怪我してる子がいたんで運んであげたのが幸いしたのか合計でギリギリでいけたよ！』

「そっか！ それじゃ春から雄英でよろしくね！」

『うん！』

しばらくそれから話し合っていた二人だったけど、ふと出久は隠し事はしたくないという気持ちで、

「麗日さん、ちよつといいかな？」

『うん？ どうしたん、出久ちゃん？』

「うん。麗日さんには話しておこうと思つて……僕ね、今はこんな女の子だけど実は元は男だったんだ」

『ええ!!? 嘘やん!!?』

「ホントホント……今からその時の写真を送るね」

送った後にしばらくして、

『た、確かに面影があるね……でも、なんで?』

「うん。ヘドロ事件の事を知っているかな?」

『あ、オールマイトが活躍した事件だね』

「そう。その時に僕は幼馴染を助けようとして無個性だったのに飛び出しちゃったんだ」

『出久ちゃん、無個性だったの!?!』

「あはは……うん、まあ。で、その時になんか眠っていた個性がいきなり出てきちゃって今の姿になっちゃったんだ」

『そうだったの……?』

不思議そうな声が電話先から聞こえてきた。

「それでね、もう友達だと思っっているけど、だから聞いておきたいんだ。僕の事気持ち悪くないかな……?」

『そんな事ありえへんよ! 昔はどうあれもううちと出久ちゃんは立派な友達だよ!』

気持ち悪いなんて思わないからね!』

「そっか……。えへへ、ありがと麗日さん」

『うん! もしこの話をこれからクラスメイトになる人達に話すようだったらうちを

頼ってね。力になるから！」

「うん！」

そんな感じでお茶子との友情がもうすでに出来上がっていることに出久は喜んだ。新生活が楽しみで仕方がないと思う出久だった。

NO. 007 夜の出会いと入学

合格通知が来た翌日の夜に出久はオールマイトとまた海浜公園で出会っていた。

出久はもうそれは嬉しそうに「オールマイト！」と出会えた事に対して喜んでいただけ、たまたま海浜公園にデートをしているカップルがいたために、

「人違いー！」

「(あつ!) 人違いでしたー!!」

それでなんとかその場しのぎだけど誤魔化せることが出来た。

そして落ち着いた頃合いになって、

「その、オールマイト! 本当に僕が入試主席なんですか!?!」

「そうだと。自身の結果を誇りに思いなさい」

それで出久はようやく実感が沸いてきたのか「はい!!」と大声を張り上げていた。

「しかし……たった10カ月前まではもやしもいところだった君がここまで成長でき、私は自分の事のように嬉しいよ」

「そんな……オールマイトの教えがあったからですよ。もし僕だけだったらここまで出来なかつたと思います」

胸に手を当てて出久はそう心からそう話す。

「それと……オールマイトが雄英の教師になるって聞いた時は本当に驚きましたよ」

「それな。元々後継者を探していたところにこの話が舞い込んできたのでちよいどいいかなとも思っていたのだけど、君という真のヒーローの原石に出会えたことはとても良かったと思う。結果オーライだ」

「それならこれからも教えを乞うことが出来るんですね!？」

「ああ。だからな、緑谷ガール……強くなっていこうな」

「はい!」

「時に緑谷ガール、雄英には個性に関してはまだ未知数と書いたらしいけど、やっぱりあれの事かな?」

「あ、はい」

出久は雄英のプレゼンで自身の個性を言う時に隠し事をしても碌なことにならないと思つたのでワン・フォー・オール以外の個性は全部話した。

そしてさらにこれからも増える可能性があるからとも言つた。

「……あの謎の声が誰なのか分かりませんが、僕に力をくれたのは本当の事ですから」
「そうだな。しかし……緑谷ガール。その誰かの力を当てにし過ぎない方がいい。」

時・場所・状況などでランダムに増える個性なんて大概碌なものではない。

それにもし君の何かを犠牲にして増えて行くのだとしたらそれは悪魔の所業に等しいものかもしれないんだよ？」

——そう、オール・フォー・ワンみたいだね。と、口には出さないけどオールマイトは思った。

出久は多少臆病だけど真面目で優しい子だ。

そんな子に何のリスクもなく力を与える存在が果たして善悪なのかいまだに判明できない。それだけがオールマイトの不安点だった。

「わかっていきます。現状でも満足な個性達があるのにこれ以上は高望みですから。

でも、もしまた増えたらすぐに教えますね」

「わかった。まあどうやら君に好意的な存在みたいだから今のところは様子を見ようか。さて、それでは話を戻して……緑谷ガール。春に雄英で待つてるぜ！」

「はい!!」

そして出久は爆豪とのちよつとしたいざこざはあったものの中学を卒業してついに雄英への登校初日の朝になった。

「出久！ 忘れ物はない!？」

「ないよ！」

「しつかりとスカートは穿けている!？」

「う、うう……少しスースーするけど大丈夫だよ！ それより麗日さんと待ち合わせしているからもう行くね！」

それで家を出て行こうとする出久に引子は最後に大声で名前を呼んで、

「超カッコいいよ！……いや、もう出久は女の子なんだから、そうだね……超カワイイよ！」

「あ、あはは……うん！……行つてきます！」

出久は泣きそうになりながらも元気よく家を出て行った。

そして校門の前まで到着するとそこにはお茶子の姿があった。

「出久ちゃん！ おはよう！」

「麗日さん！ おはよう！ よろしくね」

「うん。よろしく！」

二人は仲良く校舎の中へと入っていった。

道中で、

「でも、出久ちゃん制服とか大丈夫？ 慣れてないんじゃないの……？」

「そうだね……尻尾も出す穴もだけど色々大変だったよ……中学まではずっと男子制服で過ごしていたからまだ落ち着かないのが正直な所だね」

ぴよこりぴよこりと猫耳と尻尾を動かしながら出久はそう話す。

お茶子も大体想像は出来ていたので触りたいモフりたいわさわさしたい欲は抑えながらも、

「そうだよねー。これから色々女子について教えてあげるねー」

「よろしくお願いします」

そんな感じで二人は「A」と書かれたどデカイ扉を開いた。

そこにはあの眼鏡の少年と爆豪が言い争いをしている光景を目にして、

「(最初から前途多難!?)」

まさかの苦手意識を持つ二人が一緒とはどうなっちゃうの!?!と出久は己の運のなさに後悔をしたのであった。

NO. 008 個性把握テスト

「机に足をかけるな！ 雄英の先輩方や机の製作者に申し訳ないとは思わんのか！」

「思わねえよ！ テメーどこ中だよ？ 端役が!!」

いきなり爆豪と眼鏡の人が教室の中で喧嘩をしている光景を目の当たりにして出久とお茶子は互いに苦笑いを浮かべていた。

しかし爆豪が出久が入ってきたのに気づいて、

「てめえデク……なに俺の許可なくこの教室に入ってきてんだあ？」

「ひうっ！」

威圧の言葉に怯えてしまっていた出久。

猫耳も恐怖で垂れ下がってしまったいた。

「あつ……出久ちゃん!? ちよつと君！ いきなり酷いんじゃないの!?!」

「うっせえまるがおー！」

「まるがお!?!」

「君は礼儀を知らないのか!? すまない、その……ぼ、俺は飯田天哉だ」

眼鏡の人、もとい飯田が名前を名乗ってきたので、

「えっと、緑谷出久です……」

「麗日お茶子だよ」

「緑谷君に麗日君だね。それより爆豪君、いきなり女子に対して失礼だとは思わないのか!？」

「うっせーよ！ 俺の勝手だろうが！」

「君って奴は！」

飯田の怒りのボルテージが上がってきたところで、いきなり下の方から声がしてきた。

「喧嘩をする元気があるなら先に進めてしまっても構わないか……?」

『わっ!?!』

教室のドアには寝袋に包まれている男性がいた。

男性は壇上まで歩いて行って、

「ハイ。静かになるまで8秒もかかりました。時間は有限だ。君達は合理性に欠けるね」

やっとの事静かになったので男は名乗りを上げる。

「俺は相澤消太……このクラスの担任だ。よろしくな……さて、早速だが体操服を着てすぐにグラウンドに集合だ。急げよ? 時間はすぐに減っていくんだからな」

出久たちはそれで急いで更衣室で体操服に着替えてグラウンドへと向かうのであった。

ちなみに出久はまだ女子との着替えを一緒にした事がないためにお茶子が見えないようにしてくれたので今回はどうにかなった。

「出久ちゃん、慣れて行かないとアカンよ？」

「そ、そうだよね……でもやっぱり罪悪感というかなんというか……」

「そうだよね。後でみんなに事情を話そうね」

「うん……」

「お二人とも。早くグラウンドに行きませんかと相澤先生が怒りますわよ？」

「あ、はいー！」

少し丁寧な言葉使いの女子にそう急かされて二人もすぐに着替えて向かっていった。

そしてグラウンドに到着してみれば、相澤はこう話した。

「それではこれから個性把握テストを行うぞ」

『個性把握テスト!? 入学式とかは!?!』

「ヒーローになるならそんな悠長な行事なんて時間の無駄だよ」

とは相澤の弁である。

でも出久は内心ホツとしていた。

もしかしたら首席代表とかの挨拶をしないといけないのではと思っていたからだ。

「雄英は自由な校風が売り文句だ。当然、それは先生側にも適用される。覚えておく事だな」

それから話される個性把握テストの内容。

ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50m走、持久走、握力、反復横飛び、上体起こし、長座体前屈。

この八種で個性ありきで測定していくという。

「そんじゃ試しに……主席入学の緑谷。個性を使つて円の中から投げってみろ」
「えっ、あ。はい！」

出久が呼ばれて前に出て行くのだが同時に声が上がった。

「あの女の子が主席入学!」「男子ならともかく女子に負けるなんて……」「デクう!」
「めえどんなインチキかましたんだ!」

と、皆それぞれ声を上げていた。

それで出久は少しだけ胃がギリギリする思いであった。

そこに相澤が一同に向かつて、

「緑谷が女子だとかそんなのは関係ねえ。ただ結果が一位だった。それだけの話だ。合理性に欠ける言葉なんて出すんじゃないよ。緑谷は気にせずぶん投げろ」

「は、はい……」

なんか妙に僕に優しいなあ……と出久は思いながらも、

「それじゃ……せえのー……スマーツシユ!!」

身体強化・怪力とワン・フォー・オール・フルカウル100%を同時に発動させ、脚の踏み込みとともに一気にボールを投げた。

ボールはすごい勢いで飛んでいってフェンスに直撃してなお威力を発揮していたために、

「ふむ……さすがだな緑谷。いきなり測定不能を叩きだすとは」

相澤が素直に褒めている一方で、

「おいおいおい!! あの女子の細腕からどうやったらあんなに飛ぶんだよ!」

「彼女にはなにか隠された力が……?」

「さすが主席という事か……」

出久の実力に素直に驚いている者、考察する者、褒める者と多様だった。

そんな中で、

「デクてめえ! 個性は猫じゃなかったのかよおー!」

「うわあああ!!」

手から爆発を起こして向かってくる爆豪。

だがそこで相澤が布を爆豪に巻き付けて動きを封じる。

「この個性つて!! まさか!」

出久が驚く。

この個性には見覚えがあつたからだ。

抹消ヒーロー。その名も、

「イレイザーヘッド!」

「ああ、そうだ。だから俺の武器はこの炭素繊維に特殊合金の鋼線を編み込んだ『捕縛武器』だ。俺はドライアイなんだからそんなに何度も個性を使わせるなよ?」

一同は思った。

『そんなすごい個性なのにもつたいない!』と。

「それと爆豪。緑谷の個性は猫だけじゃなくて身体強化・怪力というものがある。覚え
ておけ……」

「なんだよそれ!? おいデク、いつそんなのを身に着けやがった!」

「えつと……僕も分からないんだけど修行中に発現したっていうかなんていうか……」

「ふざけんな!!」

出久の説明にもいちいち反論する爆豪の姿を見て他のみんなは、

「なんだよあいつ。教室の時もそうだったけど女子に対してやることじゃねえよ」とは

背の小さい男の子、峰田実の発言。それに頷く一同。

「あー……うるせーぞ爆豪。いい加減大人しくしないと、除籍させんぞ?」

「ッ!」

相澤のその一言でようやく大人しくなった爆豪。だけどまだ出久には睨みは利かせたままだった。

まあなにはともあれ出久の実力を垣間見た一同は競技内容も含めてつい「面白そう!」と発言してしまう。

それがまた相澤の逆鱗に触れることとも知らずに……。

「面白い、か……これからの三年間でそんな腹づもりでいく気なら、そうだな。こうしようか。トータル成績最下位の生徒は見込みなしと判断して除籍処分にしてやろうか」

『ッ!?!』

その発言に一同は一気に焦らされる。

理不尽にも程があるからだ。

「理不尽というが、世の中さまさまな災害やヴィランの暴走といった唐突な事件が発生する。その度に迅速に対応できないと世の中やっていけねーぞ? それも踏まえて覆していくのがヒーローってもんだろ?」

放課後に遊びたいと思っているなら諦める。これから三年間、俺達教師陣はお前たち

に様々な苦難を与えて行く。それを乗り越えてこそヒーローになれるつてもんだ。プルス・ウルトラの精神で頑張れよ。でないとすぐに振るい落としていくからな」

それで気持ち引き締まった一同はさっそく競技に入っていく。

出久も頑張ろう！と張り切った。

第一種目の50m走では各々が実力を見せて行く中で出久はというと、

「いっくぞー！」

身体強化・怪力にワン・フォー・オールに加え脚力強化を付随し、一気に高速移動をしてタイムは1秒01という堂々の一位を叩きだした。

「くっ……緑谷君は足の方も速いという事か！ さすが個性が猫なだけあるな！」

飯田に素直に褒められていた。

第二種目・握力測定。

「ふんっ！」

先程と同じように個性の合わせ技で出した結果は、600kgw。

一位は万力を創造した八百万だったが、それでも二位だった。

「俺の記録を抜かれるとは思わなかったな……」

怪力では自信があった障子目蔵が静かにそう話す。

第三種目・立ち幅跳び

「おい！ 軽く100mは跳んだんじゃねーか？」

「すごい脚の力してるな……」

「すごいですわね」

一位でぶつちぎった。

第四種目・反復横飛び

「移動系ならー！」

「ケロ。緑谷ちゃん、分身しているようにも見えるわ……」

結果、峰田と同時で測定不能。

高速移動は伊達ではない。

第五種目・ボール投げ

これに関しては先ほどとあまり結果は変わらないが二位だった。

ちなみに一位のお茶子は∞の数値を叩きだして抜くものがいなかった。

「麗日さんすごいね！」

「出久ちゃんもすごいよー！」

二人はあははと笑いあっているけどすごい一言である。

爆豪の目つきがすごいことになっているのが何よりもの証拠だ。

第六種目・上体起こし

これはさすがに出久も常人くらいの回数だったので逆にすげーと言われていたり。

第七種目・長座体前屈

ここで猫の個性が日の目を浴びた。

身体が柔軟なために足に手が完全に引っ付いているのだ。

その件で脚に埋もれている胸を見て、

「緑谷の押し潰れた胸……！ はあはあ……！！」
と峰田の気持ちを高ぶらせていた。

第八種目・持久走

これに関してはまだスタミナはそんなになるので普通の結果だった。普通というにはすごかったけどもね……。

そしてすべての競技が終わって、結局総合一位は出久だったので、

「主席はすごいな……」

「見た目に騙されちゃいけないな」

「本当におんなじ女子なお？」

と言われていたり。

ちなみに相澤の言った除籍というのは嘘で、合理的虚偽だったことが告げられて最下位の峰田はホツとしていたとかなんとか……。

それから色々あつて下校時間になった。

「でもー、やっぱり出久ちゃんはすごかったねー!」

「そんな事はないよ。でも今までの努力の成果って奴なのかな?」

と、お茶子と一緒に帰り道を歩いている時だった。

後ろから、

「緑谷君に麗日君、ちよつといいかい?」

「あ。飯田君だ。どうしたの?」

「いや、一緒に帰ろうと思ってね。ところでさつそく聞きたいのだが緑谷君。爆豪くんが言っていた『デク』というのはどういう意味なんだい?」

「ああ、それね……。あはは、それって昔からかつちゃんか僕の事を無能なデクって感じで呼んでいたんだ」

「蔑称か……。あの男はつくづくどうしようもないな……」

「本当だよ! でも、デクって良い響きだと思ふな! なんか頑張れって感じのデクって感じで!」

「デクでいいです!」

「いや、いいのかい!?!」

飯田は思わずツッコミを入れる。

「それじゃこれからデクちゃんと呼ぶけど、いいかな?」

「うん。そつちの方が色々な意味で呼ばれ慣れてるから大丈夫だよ」

「俺は緑谷君で通させてもらうからな。本人はいいと言っけていても元は蔑称なんて使えないからな」

「うん、わかったよ」

そんな感じで三人は仲良く下校していったのであった。

ちなみに他の人の視線だと飯田が一人だけ女子に交ざっている感じだったので妬みの視線を浴びせられていたとか……。

NO. 009 戦闘訓練での組み合わせ

個性把握テストから翌日の事、午前中は普通の授業だったものの、プレゼント・マイクの授業ということもあり出久はしっかりと学んでいた。

こういうところがしっかりと実力に出てくる辺りやはり努力家というのは出久に当てはまる言葉だろう。

もう分かり切っている事だが一年前まで無個性で通して来たのだから個性の訓練なんてできるわけもなし。

それがオールマイイトの助力があつたとしても、やりきつたのは出久本人の努力の賜物だと言える。

だけどその分、怠っている部分があるといえはあるのだが……それは後に改善してくれる仲間が出てくるので今は本編を語っていきましょうとする。

それはヒーロー基礎学の時間だった。

「わーたーしーが——!!」

という猛々しい声が響いてくるとともにドアが開かれそこからオールマイトが姿を現し、

「普通にドアから来た——!!」

オールマイトの登場に騒ぎ出すクラスメイト達。

出久もそれに漏れず喜びの眼差しを向ける。

そしてオールマイトがこれから行われる行事を言う。

「これから君達には戦闘訓練を行ってもらおう!!」

おー——!!とさらに騒ぎ出す一同。

そして出現する戦闘服。

「それに着替えて順次グラウンド・βに集合だ！ 待つてるぜ！ とおうっ!!」

急いで教室を出て行ってしまったオールマイトの事など気にもせず全員は各自更衣室で着替えをしに移動し始める。

「デクちゃん、早く行こう!」

「うん。麗日さん!」

お茶子にすぐに誘われたので出久も移動を開始し始める。

ただどすぐに出て行ったオールマイトの事も心配していた。

「(活動限界があるからすぐに出て行ったんだらうな……早く安心できるように強くな

らないとね!」

グツと拳を握る出久。

そして更衣室ではすでに着替えを終えている女子たちもいたのだが、そこで八百万や蛙吹が出久にあることを尋ねていた。

「緑谷さん、昨日もそうでしたけどなぜか着替えるのが遅いようですが……どこか体調でも悪いのですか?」

「そうよ。ヒーローになるなら着替えも速さが一番よ?」

「そ、そうなんだけどね……ちよつと深い事情があつて」

顔を赤くさせる出久に不思議そうにしている女子たち。

耳がシュンと垂れているのが可愛いぞ!とは芦戸三奈の感想である。

そこをお茶子がカバーを入れる。

「そのね! デクちゃんはちよつと秘密があつて少しの罪悪感を感じちゃってるんだ! だからすぐにいくからちよつと待つてもらつてもいいかな?」

「まあ! もしかしてお体に見せたくない傷でもあるのですか?」

「いや、そういうわけじゃなくつて……その、今日の帰りに僕の秘密をみんなに話しておきたいから待つてもらつてもいいかな……?」

「緑谷ちゃんの秘密……? 気になるわね」

「あたしもー!!」

「ウチはそこまでは……でも教えてくれるんなら聞くけど」

「私は知りたいかなー!!」

と、キヤイキヤイと騒ぐことになったが結局出久はみんなより少しだけ遅れて着替えたのであった。

そしてグラウンドに来てみればもうすでに全員揃っていた。

「遅いぞ緑谷ガール! まあ事情を知っている身とすれば致し方がないがな!」

「オールマイトー! 緑谷の事情ってなんですかー!?!」

そこで気になったのか切島が手を挙げて発言した。

「なんだ。まだ話していなかっただのか……いつまでも話さないといずれ亀裂が生じてしまうから早く話しておくのだぞ? そうすれば友情はより深まるからな!」

「は、はい! オールマイトー!」

一同は出久の秘密に興味を抱いていたけど、爆豪と麗日だけは事情を知っている為に、爆豪は「ふんっ……」と鼻を鳴らし、麗日は「きつと大丈夫だからね」と出久を励ましていた。

それで気持ちを切り替えてヒーロー基礎学の時間が始まった。

内容としては屋内での対人戦闘訓練。

だが、

『緑谷・麗日 VS 爆豪・飯田』

という事になってしまい、出久はマジかー!?!と己の不運をまたしても感じていた。対する爆豪も、

「(けっ……少しは力は付けたらしいが、俺の前では無力だって思い知らせてやるぜ!)」
と、もうすでに自分の勝利に何の疑いも持っていないかった。

ここでもう少し慎重になっていればあのようなことにはならなかっただろうと後に爆豪は思う事になるのかは、さて……。

NO. 010 爆豪との戦い、新たな個性

訓練が始まって先に爆豪と飯田が入っていき、その5分後に出久たちが屋内へと入っていった。

さらにはその地下フロアでオールマイトと生徒たちがモニターで様子を窺っている。もし何かの不祥事が起きたらいつでも訓練を停止できるようにオールマイトも逐一チェックは欠かさないでいるのだ。

「(さて、緑谷ガール……今は一生徒として採点させてもらうぞ? とは言え、カツコいいところを見せてくれよ?)」

オールマイトの見るモニターの先では中へと侵入してきつそくなにかを試している出久の姿が映し出された。

出久は猫耳を動かしているみたいであり、おそらく音などを確認しているみたいだ。

「なんか、見ていて可愛いよな緑谷。ああやって耳を動かしているところも萌えるぜ!」
「だよなだよな!」

上鳴がそう言って笑みを浮かべて和んでいて、峰田も同調したのか何度も頷いていた。

女子たちもそんな緑谷の動きに癒しを感じていたり。

「ですが……緑谷さん、大丈夫でしょうか？ 爆豪さんとはなにかの因縁がある様子ですが……」

「だよね。個性把握テストでも突っ掛かっていたしね」

八百万の発言に他のみんなも同じ気持ちだった。

あれはかなりのものがあると誰から見ても明らかであるからだ。

「まあ君達。今は様子を見てみようか。爆豪少年がなにか不祥事を起こすかもわからんが、いざって時は中止にすればいいからな」

オールマイトの言葉に全員は頷いた。

室内へと入っていった出久とお茶子はさっそく調べようとしていた。

「デクちゃん。ここからどうしよう？」

「待って。今から音を確認するから……」

出久は猫耳をピーンと伸ばして爆豪と飯田の現在位置を割り出している真つ最中だった。

そして分かった事は、

「飯田君はここから五階のフロアの中心にいるね」

「つて、ことはそこに核爆弾があるんだね！」

「多分……そしてかつちゃんは……もうすぐそこに来てるね！ 多分奇襲をしてくると思う」

「どうして分かるの……？」

「良くも悪くも長年の付き合いだからね。僕が相手をするから麗日さんは隙を見て上に向かって僕が来るまで隠れていて！」

「うん。わかった！ 頑張つてねデクちゃん！」

そして二人は先へと進んでいき、思った通り曲がり角で爆豪がいきなり飛び出して真つ先に久へと攻撃してきた。

だが久は先読みしていたので危なげなく爆豪の腕をかわして腕を掴み、そのまま力をこめて壁へと投げ飛ばした。

投げ飛ばされた爆豪は壁にぶつかる直前に爆破をして激突を免れたが、その目つきは怒りに燃えていた。

「てめえデク……。俺の動きを読んでやがったのか!？」

「忘れた？ かつちゃん、今の僕は猫なんだよ？ 音に敏感になっているからかつちゃ

んの居場所なんてすぐにわかっていたよ」

「てめえ……」

もうすでに爆豪の目には出久しか映り込んでいなかった。

それを見越して、

「麗日さん、行つて!!」

「うん。待つてるねデクちゃん!」

お茶子はそれで上の階へと進む道を上つていった。

「よそ見とは余裕だな、デクウ!!」

「そんな事はないよかつちゃん。でも……」

出久は爪を伸ばして硬質化させて構える。

「言つておくよ、かつちゃん。僕はもう『雑魚で出来損ないのデク』じゃない! 『頑張

れつて感じのデク』なんだ!」

「そうかよ……。それになんだあその爪は……? それも個性つてか? ふざけてる

ぜ。むかつくなあ! デクのくせして!! ぶち倒す!!」

こうして爆豪は出久へと爆速で突っ込んでいった。

だけどその時、出久は妙な違和感を覚えていた。

「(かつちゃんの動きが、遅い……?)」

そんなまさか、と出久は感じていたがそれは当然のことであった。

猫の個性が発動した事によって瞬発力、反応速度が底上げされている為に、本来爆豪だけが得意とする『見てから動ける』を出久も知らず知らずのうちに会得していたのだ。さらには個性が発動してからというものの体を鍛えるという事はやってきたものの、オールマイトは敢えて対人戦の経験を積ませなかった。

それが帰結して今の出久の違和感の正体に繋がる事になった。となれば話は早く。

爆豪が大振りの右手の大振りいっもの癖を振ろうとした時には、出久はすでに爆豪の背後に移動していきついパンチをお見舞いしていた。

「ぐおっ!？」

しっかりと調整されているワン・フォー・オールのためにしっかりとダメージは通っていて爆豪は思わずもんどりを打つ。

しかしなんとか片足で踏ん張る爆豪は出久に憎しみのこもった視線を浴びせながら、「そうかよ……てめえがそこまで強くなってるならもう手加減は不要だよな?」

そう言つて爆豪はまるで手榴弾のような籠手を出久に向けて構える。

出久は何が来るのか警戒しながら見ていたが、観察していたオールマイトは使用方法を知っていたために思わず叫んだ。

『爆豪少年！ それは今は使ってはいけない！』

「うるせえ！ 当たらなきゃ死なねえだろ！」

そうして籠手についているピンを抜こうとしたのを確認した出久は、悪寒が走って逃げ場を探したが一直線の道で防ぎようがない事を悟って、また例のスローモーシヨンの感覚に陥る。

「(どうする?! きつとあれは遠距離用の武器だ！ あれを防ぐためには!)」

『イズク、空気をめい一杯吸い込んで!』

「え!？」

『いいから早く!』

出久は条件反射のように息を吸い込んだ。

『大きく叫んで！ 猫のように!!』

「にゃあああああああー!ー!ー!ー!ー!ー!!!!」

爆豪がピンを外して爆発の衝撃波が迫ると同時に、出久の叫びによって発生した衝撃波が衝突して相殺し、場は沈黙が支配した。

当然それを見ていたオールライト達は驚愕の顔をして、勝つ自信があつた爆豪はなおの事一瞬呆けてしまった。

しかし、出久だけはその動揺の中ですぐに思考を復帰させ、すぐさま確保テープを手

に取って高速移動をし、爆豪の周りの壁を何度も跳躍しながら次々に巻き付けて行った。そして、

『ば、爆豪少年……確保されたためにリタイア!』

「はあはあ……やった!」

「うぐぐ……デクてめえ……」

「かつちゃん。今回は僕の勝ちだね」

「……………」

それでも爆豪は何も言えずに俯いてしまっていた。

そんな爆豪の姿を見たかったわけでもない出久は罪悪感に襲われるが、

「先、行くね……」

出久はその場をあとにしたのであった。

その後はお茶子と合流した出久は二人で挑んでいき、出久は難なく飯田を確保してお茶子が爆弾を回収していた。

その結果を持って、

『ヒーローチーム、WIIIIIIINッ!!』

オールマイトの叫び声で緑谷・麗日チームの勝利で訓練は終了したのであった。

そんな中で出久は先ほどの新たな個性について考え込むことになったのは当然のことだった。

NO. 011 訓練終了後と放課後の一幕

訓練終了後に出久たちはモニター室へと移動していた。

そこで反省会とも言おうべき話し合いがされていた。

「さて、それでは今回のベストは誰だと思う!？」

と、わざとらしくみんなに聞いてくるオールマイト。

それに八百万が挙手をして、

「間違いなく緑谷さんだと思います」

「その通りだ! ちなみに理由とかはあるかい?」

「はい。緑谷さんは屋内に入ったと同時にすぐに爆豪さんと飯田さんの居場所を特定していました。そして流れるような戦闘のすえに無傷で爆豪さんを制覇しました。」

高速移動での屋内での確保テープの使い方はとても良かったと思います。

その後も飯田さんとのやり取りでお茶子さんと一緒にスマートにやっていたものは良かったと思います」

「概ねその通りだ」

「次に飯田さんはヴィラン役としてしっかりと行動ができていましたので良かったと思

います。麗日さんも緑谷さんの指示をしつかりと守って身を潜めていたのもいいですね。

最後に、逆に言わせてもらえば爆豪さんは私怨丸出しで飯田さんとの連携プレーも出ていませんでした。独断先行に加えて緑谷さんの機転の攻撃が功をそうしたものの屋内での大規模な攻撃でもしかしたら大怪我を負っていた可能性がありますのでマイナス点だと思います」

「う、むう……（思っていたより言われた）……まあ大体正解だ。ありがとう！」

「いえ……」

そんな感じで評価も終わったので次の人達の訓練を見ようとしていたんだけど、出久は爆豪の顔を見ることが出来なかった。

茫然自失の様なその俯いた顔。

あんな自信を無くしているような顔は出久は一度も見た事がなかったからだ。

爆豪は出久との試合を思い出しながら、八百万の評価を黙って聞いていた。

そのほとんどが反論も出来ない程に滅多打ちしてきて爆豪の自尊心に傷をつけた。

「俺は……確かに全力で戦った……それでも……デクには敵わなかった……」

それに、デクの奴は決して爪での攻撃をしてこなかった。

もし、もし……これが本当の戦闘だったら俺は……やられていた……?」
爆豪の脳内では自分が一番強いというヴィジョンが崩れてきていた。

それに追い打ちをかけるように次の戦闘訓練を見ていた時に、

『わりい、レベルが違い過ぎた』

轟によってビル全体が凍り付いてしまえば悠々と回収している光景を見て、あいつには爆豪は勝てないかもしれないと……そう、一瞬でもそう思ってしまった。

「俺は……俺は決してモブじゃねー!!」

かろうじて心の中では自尊心を守るためにそう言い続けているしかなかった。

そして全訓練が終了して、

「みんな、お疲れさん!! 特に誰も大きな怪我をしなかったのはとても嬉しい事だ。初めての訓練にしちや上出来だったぜ!」

オールマイトの言葉に、

「相澤先生の後になんまっとうな授業……なんか、拍子抜けと言うか……」

「むむむ……相澤君はどんな訓練を……まあそれぞれ個性的な授業があるさ。それもまた教師の自由という事さ。それじゃすぐに着替えをして教室に戻りなさい! ではッ

!!」

そう言つてオールマイトは駆け足でその場を去つていった。

そんなオールマイトの姿に苦笑いを浮かべる出久は、そこで爆豪に話しかけようとして、

「その……か、かつちゃん……」

「……………」

爆豪は出久の声にも耳を傾けずにそのまま無言で更衣室へと向かつていつてしまつた。

そんな出久の姿になにかを感じたのか切島が出久に、

「緑谷！ 爆豪の事は俺に任せておけよ！ なんとかしておくからさー！」

親指をグツと出して切島は爆豪の後を追つていった。

「デクちゃん……今はそつとしておこう」

「うん……」

それで出久たちも更衣室へと向かつていくのであつた。

そのまま時間は過ぎて行つて放課後の事。

待つてました！と言わんばかりにみんなが揃つて出久の周りに集まりだして、出久は

困惑の表情をした。

「出久ちゃん！ すごかつたぜ！」

「そうだな。あんなものを最初に見せられたら燃えるよな！」

それでみんながそれぞれ名前を覚えてくれたりして出久は一気に友達が出来た感じで嬉しく思っただけだ、

「あ、あれ？　ところでかつちゃんは……？」

「ああ、爆豪か。ゴメン、緑谷。反省会に誘っただけだけど即行で教室を出て行っちゃった……」

そう言って手を合わせて謝ってくる切島に出久は感謝しつつ、

「それじゃまだ敷地内にいるんだね!?　みんな、ごめん！　ちよつと事情は話すのを待っててもらってもいいかな!?　かつちゃんのところに行かないと！」

出久はそう言っけ駆け足で行った。

そんな出久の姿を見て、

「邪険にされてるのになんだかんだで放っておけないんだな……健気だぜ！」

「聞くところによるとデクちゃんと爆豪君は幼馴染らしいんよ」

「なるほど……それじゃあれも仕方がないという事か」

と、話していた。

出久はなんとか爆豪が校門の前にいるのを発見して、

「かつちゃん!!」

「ああ……?」

なんとか引き留めたけど睨みを利かされてしまう。

それに少し怖気づいてしまうけども、

「聞いて、かつちゃん……僕は一年前までは本当に木偶の坊だった。だけど個性が発動して力を開花できた。そしてとても偉大な人に教えを乞うことが出来て今の僕があるんだ。今回は僕が勝っちゃったけど……かつちゃんの方が絶対強いと思う!」

「慰めてんのか貶してんのかどっちだよ!? 今日、てめえに負けたのは確かな事なんだ! 半分野郎にも勝てないかもつて一瞬思っちゃった……。ポニーテールの奴の意見にも納得しちまった! くそッ……クソッ!!」

半分やけくそのようにそうぶちまける爆豪。

それに出久は「かつちゃん……」と言葉を零す。

「えつと……ね。だけど追い打ちをかけるみたいでいやだけど今度もかつちゃんに勝りたい! だから、だからこれから僕も僕の憧れのままのかつちゃんできて!!」

その告白まがいのセリフに爆豪はというと、出久の正面に振り返って目に涙を浮かべながらも、

「なあ……！ てめえもだ！ デク！ こっからだ!! 俺はこっからだ!! いいか!!俺はここで一番になってやる!! もう二度とてめえにも負けねえからな!! クソが!!」
爆豪なりのけじめの言葉と決意に、出久はこれでこそかつちやんだねと思った。
そんな時に背後から、

「いたアアアアアアアア……!!! 爆豪少年!!!」

突風とともにオールマイトが駆けてきて一気に爆豪の肩を掴む。

「ぜー……はあ……言つとくけど自尊心つてのは大事なもんだ！ 君は間違いなくプロになれる器を持っている！ 君はまだまだこれからだか r——……」

「離してくれ……オールマイト……歩けねえ……言われなくても俺はアンタをも超えるヒーローになる……!」

「あれ?……あつ……うん……(すでに立ち直つてた……)」

そしてオールマイトは思った。

教師つて難しいね!、と。

その後に久と会話をしている光景を見ていたみんなはというと、

「あれつて……どういう事だろう? 無自覚の告白……?」

「青春ね……いいものを見れたわ」

と、女子陣がキヤイキヤイしていた。

その後に出久は教室へと戻って爆豪以外のみんながまだいることに感謝しつつも、
「えつと……それじゃみんなに僕の内緒の事情を話そうと思う」

「待ってました!」

と、切島が叫んで、

「緑谷の秘密……なんだろう? この背徳感……?」

「女の敵!」

「ギャツ!」

耳郎にすぐさまイヤホンを刺されていた峰田だった。

「それで緑谷……お前の事情ってなんなんだ……?」

轟がそう言っ出て出久の言葉を促す。

出久はそれで覚悟を決めて、

「これは絶対にみんなに話しておかないとって思っていたんだ。と、その前にヘドロ事

件の事を誰か知っているかな……?」

「ヘドロ事件……? あ、もしかして爆豪が人質になったって事件の事か!」

「うん、そう。僕ね……その事件が起きるまでは自分の事を無個性だと思っていたんだ……」

『えっ……』

突然のカミングアウトによって静まり返る教室。

「医者にも無個性だつて診断されてかつちゃんや他の人達にも馬鹿にされてきたけど、でも、ヘドロ事件の時にかつちゃんを助けたいって思つて駆け出していたらその時の中に眠っていた個性が発現して、僕は元々男だったのに女の子に性転換しちゃったんだ」

「性転換つて……マジで!」

「うっそお!! 緑谷つて男子だったの!」

「あ、それですと更衣室での反応も納得いきますわね。元は男性だったのですから罪悪感を感じてしまうのは当然の事ですわ」

それぞれが大なり小なり納得の頷きをしている中で、

「麗日さんにはもう話して受け入れてもらえたからよかつたんだけど……聞いておきたいんだ。元は男だった僕の事、気持ち悪くないかな……?」

出久の必死のその言葉に一同は、

「……つたく、水くせえぜ？ 昔はどうあれ今はもう女の子なんだろう？ だったらそれでいいじゃねーか？」

「切島の言う通りだよ！ むしろ教えてくれてよかったって思うー！」

「だな……。もしこのまま隠していたままだったらいずれは緑谷君に軽蔑の眼差しを向けていたかもしれないからな」

「でも、緑谷ちゃんはしつかりと話してくれた。それだけでもう信頼に通じるものよ」

「そうだそうだ！」

と、全員が出久の事を受け入れてくれていた。

あまり言葉と話さない轟や障子なども頷いていたのでいい事だろう。

しかし、そこで峰田がいやらしい目つきをしながら、

「それじゃ緑谷！ 元男って事はおさわりオツケーってことか!?」

「ちよ!! なんでそういう結論になるの!? 嫌だよ恥ずかしい……」

思わず顔を赤くさせて胸を手で隠す出久の姿に全員は顔を赤くさせた。

そんな反応をされて、

「うおっ……本当に元男かよ？ しつかりと女の子してんじゃねーか……」

「もともと素質があつたのね……」

「デクちゃん、カワイイよー!!」

と、放課後はそんな感じで見んなに受け入れられて出久は心から喜んだのであった。

NO. 012 クラス委員長

オールマイトの雄英高校の教師としての赴任。

これだけでマスコミにとつてはこれでもかどでつかいネタであったために連日、メディアは雄英高校の正門前へと押しかけていた。

それでいつものようにお茶子と合流して一緒に中に入ろうとしていた出久も当然、メディアからの質問を受けていた。

「オールマイトの授業とかどんな感じですか!？」

「えつと、その……とつても頑張れる気になれます!」

と、無難に答える出久だった。

一緒のお茶子は、

「様子? うーんと……筋骨隆々?」

と四字熟語で答えていたり。

それでマスコミから解放された二人はというと、

「はあー……緊張したね」

「そうだね。でもデクちゃんも大変かもね」

「え？　なんで…………？」

「だってこれからなにかと入試主席とかでもめ事に見舞われるかもしれないから」

「あ、あはは…………そうだった」

それですでに胃がぎりぎりしていた出久だった。

そんな感じでHRで相澤が昨日の結果を吟味しながらも話をする。

「昨日の戦闘訓練は、まあお疲れ様だったなと言っておこうか。特に誰も怪我をせずやりきったというのは教師側からしてもできていいからな」

それで全員は思った。それでいいのかイレイザー・ヘッド？と…………。

だが相澤は「ただし」と前置きをして、

「爆豪…………お前だけは少しやんちゃが過ぎるくらいがある。能力は十分に備わってんだからガキみてーな感情を振りまくなよ」

「……………わかってる」

苦虫を噛み潰したような表情をしながらも爆豪は素直に返事をした。

「それじゃ今回のHRでの本題だが、急で悪いがお前らには…………」

それでゴクリツと飲み込む音がする。

個性把握テストでの一件があり、またとんでもない事をさせられるのではないかとい

う不安から来るものであった。

しかしその内容とは、

「学級委員長を決めてもらいたいと思う」

『学校っぱいのキター!!』

それで次々と手を上げる一同。

普通科なら面倒くさい雑務を手伝わされる事が多いだろうが、ここはヒーロー科。皆を先導するという意味ではぜひなりたいと思うのも自然の摂理である。

だがそこに大声が轟いた。

「静粛にしまえ!!」

とは飯田の声である。

そして説明される。

周囲の信頼あつてこそその役目、だから等しく平等に決めるために多数決を取ろうという発案だった。

……かく言う飯田自身も腕はそびえ立っていたけどここでは触れないように。

それによつて投票が行われて結果は、

「僕が三票もある!?!」

一番が出久であつた。

入れたのは自分と飯田にお茶子だけど、それでも周りのみんなは納得の顔をしていてた。

「なんでデクに入ってたんだこらあ!？」

「まあお前に入れるよりはマシだろ?」

「あー……出久ちゃんならいいと思うぜ? 咄嗟の判断力とかいいし、それに戦闘能力も強いしな」

という感じで総合で委員長は出久に決まって副委員長は二位の八百万に決まったのであった。

ちなみに飯田は当然0票だというのは明白だった。いと哀し。

それからお昼になって出久、お茶子、飯田の三人で食堂で昼食を摂っている時だった。「……でも、僕に務まるのかな?」

今までそう言った経験には無縁だった出久。今後の人生でもなる事は絶対にならないだろうと思っていた大役にガチガチに固まっていた。猫耳も緊張からかピーンとなっている。

そんな出久にお茶子と飯田はというと、

「大丈夫だよー。デクちゃんならきつと務まるって！ 雄英試験の時みたいにカッコいい感じで大丈夫だよ」

「麗日君の言う通りだよ緑谷君。君なら大丈夫さ。今までの君の行動を観察させてもらって大丈夫だと僕が思ったのだから入れさせてもらった事だしな」

「僕……？」

出久とお茶子の声が被る。

それでやばいという顔をしてしまった飯田だったがあとの祭りである。

お茶子には「もしかして飯田君って坊ちゃん……？」と言われてしまったのだ。

それで弁解の意味も込めて自分の家事情を話す飯田。

「インゲニウムを知っているかい？ 俺の家族なんだ」

「うん、知ってるよ！ インゲニウムといえば……」

そこで出久のヒーローオタク節がさく裂して、それを聞いた飯田も気を良くしたのか笑みを浮かべていた。人間自分の家族の事を褒められて気をよくしない人なんていないだろう。

「俺は兄さんのようになりたいと思って雄英に入った。だけどまだ委員長というのは荷が重いんだろう。だから緑谷君になら任せられるよ」

「飯田君……うん。ありがとう」

それでほにやつと笑顔を浮かべる出久に飯田は思わず顔を赤くさせて、

「み、緑谷君……君はそれはわざとじゃなくって天然なのかい？」

「え？…何の事……？」

訳が分からず首を傾げる出久。

それにお茶子も「分かるよー飯田君。デクちゃんは可愛いから」と何度も頷きをしていた。

まだ女の子になって一年足らずの出久だが元来より持っている優しい笑みがこうしていい方に作用している為に誰でも見惚れる感じになってしまっているのだ。

ただでさえ猫耳があざといのに卑怯である。

そんな時だった。

大音量の警報が突然鳴り響いて出久は猫耳を必死に押さえながらも「にやああああつ!?」と叫んでいた。

そのままうずくまってしまい、

「デクちゃん!?!」

「緑谷君!?!　そうか！　猫の耳は人の数倍以上の音を聴き取るから緑谷君には弱点だったか！」

それで周りはずでに食堂から退避しているのに三人は取り残されてしまっていた。

警報はもう鳴り止んでいるが外ではたくさんの生徒でごった返している光景を見て、

「どうするか……今からでは避難は困難だな」

「い、飯田君……」

「緑谷君、大丈夫かね？」

「うん……それより僕の耳が感じ取ったんだけど外にいつぱいの人の気配が感じられたよ」

それで窓の外を見てみるとそこには大勢のマスコミが押しかけていた。

「あれは朝の！」

「ど、どうしようデクちゃん!？」

「少し待って……考えるから」

それで考えること二秒ほどで、

「麗日さん！ それに飯田君！ ちょっといいかな!? 二人の力が必要だ」

「うん、任せて！」

「内容を教えてくれ緑谷君！」

「うん。麗日さんの個性で飯田君を浮かばせて飯田君は個性でどこか目立つところに張り付いてマスコミの事をみんなに教えてほしいんだ！」

「なるほど！ わかったよ緑谷君！ 麗日君、頼む！」

「任せて！」

それで出久の指示通りに二人は動いて飯田が大声で生徒たちに外の様子を教えろとなんとか沈静化して事なきを得たのであった。

その後にマスコミは警察が到着して撤退していったとか。

そんな事があつたがそれで帰りにHRで、

「他の委員長を決めたいと思うんですけど、その前にやっぱりここは飯田君が適任だと思ふんです」

と出久は話す。

それに当然飯田は「待った！」をかけた。

「緑谷君。気持ちは嬉しいがお昼の事は君の指示があつたから出来た事であつて俺一人だけではどうにもできなかつただろう」

「それでもだよ。僕はどうしてもみんなの前だと緊張してしまつてガチガチになつちゃうけど飯田君は誰よりもきはきはきと声を出してみんなをかつこよくまとめられると思ふんだ。だから……お願いしてもいいかな？」

出久は懇願するように飯田に言う。

「……………女子にそこまで言われて断つてしまったらダメだな。わかつた。それでは委員長の指名なら仕方がない！ これからよろしく頼むよ！」

という感じで飯田が正式に委員長に決まったのであった。

猫娘とUSJ編

NO. 013 USJと敵

先日のマスコミの雄英敷地内侵入に伴い、学校側は色々と警戒をしていた。

内通者が侵入を手引きした可能性があるが誰とまでは発覚していないから余計に神経をとがらせないといけない。

そんな中で出久たちーAは午後の事、ヒーロー基礎学の時間に、

「えー……それでは本日のヒーロー基礎学は俺とオールマイト、そしてもう一人が見ることになったのでしっかりと学ぶんだぞ」

「(三人体制での訓練? なにかあったのかな……? やっぱり先日の件が関係しているのかな?)」

出久はそんな事を思っていた。

相澤がそれで本日の訓練内容を言う。

「今回は災害水害なんでもござれの人命救助訓練だ」

「レスキューか……俺はこういうの苦手かもな」

「ねー!」

上鳴と芦戸の二人がそう話していた。

何分二人の個性は限定的なもので余計に拍車をかけている。

「ケロ。出久ちゃん、こういう時はあたし達の方が役立つかもしれないわね」

「そうだね。梅雨ちゃんは水難場だと効果を発揮するし……」

「出久ちゃんだと山岳地帯とかで役立つそうよね」

「そう、かも……。救助訓練、憧れに近づくための訓練だから張り切ろうかな！」

それで各自コスチュームに着替えて移動するバスへと向かっていく。

ちなみに出久のコスチュームは上半身は母特製のジャンプスーツ、下はスカートにスパッツを穿いていて、グローブは爪を出し入れするために指ぬき製で、咄嗟の閃光に弱いためにフラッシュ対策にゴーグルを付けている感じである。

「バスの席順でスムーズにいくように番号順で二列で並ぶようにしよう！」

飯田がさっそく委員長の仕事をしていたので任せた出久は満足げだった。

「ただ、中に入ってみれば縦に席が分かれているものではない方の構造であったために、」

「こういうタイプだったか、くそー!!」

飯田、男の悔し叫びである。

それからバスで移動の中で、

「出久ちゃん、アタシ何でも思ったことを口にしちゃうの。だから聞いていいかしら？」
「あ、梅雨ちゃんいいよ」

「それじゃ出久ちゃんの個性ってどんなものがあるのかしら？ 複数持っているみたいだけど……」

「うん。僕の個性は猫で出来ることなら出来るかな？」

爪の伸縮自在ができてさらには硬化も可能だし、脚力強化による高速移動もできてビル四階くらいなら屋上まで跳べる。

目、耳、鼻などの五感の強化も出来ているんで少しの音でも聞き分けたり夜には夜目が働いて暗闇の中でもすんなりと動けるよ。

なんか先日の戦闘訓練では叫びによる衝撃波が出来ることが分かったし、後は身体強化・怪力っていう増強系の力も持っているよ」

「多いのね。でも、出久ちゃんの個性はどちらかというところと災害救助向けなのね」

「そうだね。後、一つだけ特殊なのがあるんだけど……」

そこで口ごもる出久にみんなは不思議そうな顔をしながらも、

「緑谷。その特殊な能力ってなんなんだ？」

「うん、切島君。そのね？ 猫と会話が出来るの……」

出久が恥ずかしそうにそう言うとなんか何名かの瞳が光ったような気がした出久だった。

特に相澤が聞き耳を立てていて密かに身体を震わせていた。

「デクちゃん！ それって、もし猫さん達に頼めば触らせてもらえるのかな!」

「うん。何故かは分からないけど今まで出会って来た野生の猫さん達って必ず僕の言う事は聞いてくれたんだ。だからもし猫さん達に協力を仰げばその町の猫さん達の情報網ですぐに探し物とか見つけられるね」

「「ほー……」」

それで感心する一同。

「緑谷さんのその個性は優しいものなのですね……少しだけ羨ましいですわ」

「出久ちゃん、もしかして猫達にとっては憧れの存在になってるんじゃないか?」

「いわゆるアイドルという奴か……」

そんな感じでみんなの個性も紹介していく中で爆豪の力も強いよなって会話になったのだが、はつきりものを言う蛙吹の、

「爆豪ちゃんてキレてばっかだからあまり人気でなそうね」

という発言で当然爆豪はキレていたが、それをみんなが面白おかしくからかっている光景を目にして出久は思った。

「(かつちゃんがいじられている!?! さすが雄英!)」と。

それからなんとか気分を落ち着かせた相澤の言葉で到着する事になったので敷地内

に入っていく一同。

入った敷地内はなんと、

「すっげー……！！！！ USJかよ！！」

そこにはあらゆる災害現場が再現されているエリアがあった。

そこにはスペースヒーロー『13号』の姿があった。

「ここは水難、土砂災害、火事その他の場所を再現した演習場……名付けて『U S J』
ウソの災害や事故ルーム
 です」

「『USJだったー！！』」

あまりにも安直なネーミングにほとんどの者が叫んでいた。

だけどみんなの関心は13号に集まっていた。

特に出久は当然としてお茶子はファンらしく、

「スペースヒーロー『13号』だ！ 災害救助で目覚ましい活躍をしている紳士的なヒー

ロー！」

「わー、うちの好きな13号！」

各自でテンションが上がる中、相澤はあることを尋ねた。

「13号、オールマイトは？ ここで待ち合わせるはずだが……」

「それがですね、先輩。通勤時間に制限ギリギリまで活動したみたいで……」

13号はそう言いながら指を三本立てる。

「仮眠室で休んでいます」

「不合理の極みだな、オイ。……仕方ない、始めるか」

それで13号がみんなの前に立って話をし出す。

「えー、始める前にお小言を一つ二つ……三つ……四つ……」

(増える……)

いくつ話すつもりだろうと思う一同だった。

「皆さんご存知だとは思いますが、僕の個性は『ブラックホール』。どんなものでも吸い込んでチリにしてしまいます」

「この『個性』でどんな災害からでも人を救いあげているんですよー!」

「ええ。ですが、しかし簡単に人を殺せる力です。みんなの中にもそういう『個性』がいるでしょう?」

それで何人かが頷く。

「超人社会は『個性』の使用を資格制にし、厳しく規制することで一見成り立っているように見えます。」

しかし一歩間違えば容易に人を殺せる『いきすぎた個性』を個々が持っていることを忘れないでください。

相澤さんの体力テストで自身の力が秘めている可能性を知り、オールマイトの対人戦闘訓練でそれを人に向ける危うさを体験したかと思えます。

この授業では心機一転！ 人命のために“個性”をどう活用するのかを学んでいきましょう！ 君たちの力は人を傷つけるためにあるのではない。助けるためにあるのだと心得て帰ってくださいね。」

(……………13号、カツコイイ!!)

出久は素直にそう感じた。

それは他の者も同様だ。

13号の言葉はとも世の中を表している現実だからである。

「以上……ご清聴ありがとうございます」

それで起こる拍手喝采。

そこで相澤は訓練を始めようとしたのだが、嫌な気配を感じ中央の広場を見る。

そこにはなにやら黒い霧のようなものが出現してそこからたくさんの人が出てきたのだ。

これも余興の一つか？ とあまり状況を理解していないものもいるが、相澤はみんなに警告した。

「一塊になって動くな！ あれは……………ヴァイラン敵だ!!」

こうして悪夢の時間が始まったのである……。

NO. 014 水難ゾーン

雄英高校敷地内だというのに次々とヴィランが侵入してくる現状に相澤は頭を痛くしながらも思う。

「(やっぱり先日のゲートの件は奴らの仕業か!)」

それで一度相澤は生徒たちを見る。

そこにはいきなりのヴィランの登場に困惑する生徒達だらけであった事に……。

「(まだこいつらにはこんな経験は早すぎる! 俺達でなんとかしてやらないとな……)」

相澤はすでに決断をしていた。

出久たちもヴィランの登場に困惑しながらも、それでも出久は考える。

「これはやっぱり昨日の一件が原因だね」

出久の発言に轟が反応して答える。

「そうだ緑谷。センサーも反応しねえって事はそれだけ用意周到に事を運んでいたんだろ。うな。あつちにはそういう個性持ちがいるってとこか……？」

「それに悪い感じに校舎と隔離されていて、さらに僕達クラスが入る時間の襲撃……生徒か教師の誰かがリークしたんだ」

「頭の回転が速くて助かる……さすが入試主席だな。とにかく奴らはバカだがアホじゃない。何らかの目的があつて然るべきだな」

そこに相澤が13号に生徒の避難と個性での通信を試みるように頼んだ後に、一人で戦いに行くという。

それに出久たちはイレイザー・ヘッドの戦闘方法じゃ無茶だ！と言うが、

「安心しろ……なにも死に行くわけじゃねえ。それに一芸だけじゃヒーローはやっていけねえ。大人しく見ている」

そう言った後にヴィランの中へと飛び込んでいった。

「相澤先生……」

出久は心配をしながらも13号の誘導で避難を開始し始めるのだが、

「させませんよ……」

出久たちの前に黒い霧のヴィランが突如として出現し、

「初めまして……我々は敵^{ヴィラン} 連合と名乗っています。僭越ながら本日はヒーローの巣窟である雄英高校に入らせていただきました目的は……平和の象徴オールマイトを亡き者にするために参りました」

『ッ!?!』

オールマイトを殺すというヴィランに出久たちに緊張が走る。

「ここにはオールマイトがいるという情報でしたが、なにか事情が変わったのでしょうか……? まあ構いません……私の目的は……」

ヴィランがなにかを言う前に爆豪と切島が先制攻撃を仕掛けていた!

「おらぁ! 死ねー!!」

「おとおおおー!!」

「かつちゃん! 切島君!」

二人の攻撃は直撃した……ように見えて霧の様な体には一切ダメージが通っていなかった。

「怖い怖い……生徒とはいえ優秀な金の卵である事には変わりありません。ですので

……」

「みんな、下がって!」

13号が何かをしようとする前に黒い霧が出久たちの周囲を覆い尽くした。

「散らして翱り殺します……い！」

黒い霧に包まれたもの、なんとか回避できたものはいるだろうけどそれで出久は一瞬意識が途絶える。

そして出久が次に意識を取り戻したのはなんとプールがある水難ゾーンだった。

「水難ゾーン!?! まずい!」

なんとかしようとするけどそもそも足場がないために空を飛べない出久はそのまま水の中に落ちるしかなかった。

別段出久は水の中は猫になったとはいえ、そんなに苦手ではない。

だけど水の中で目を開けてみれば目の前には水中タイプのヴィランが迫ってきていた。

「恨みはねーけどここでサイナラだ」

「モガッ!」

水の中では踏ん張れないために出久はワン・フォー・オールで身体強化をしようとしたがその前にそこに蛙吹が現れてヴィランを蹴り飛ばしていた。

「梅雨ちゃん!?!」

「出久ちゃん、今助けるわ!」

そのまま出久を掴んで足場がある船のところまで運んでくれた。

見れば峰田の姿もあつてこの水難ゾーンにはこの三人だけが飛ばされたのだろう。

「カエルの割になかなかどうして……………おっぱいが……………」

そんなうわ言を言っている峰田はそのまま勢いよく投げられていた。

「ありがとう梅雨ちゃん」

「どういたしまして。それより大変なことになったわね」

「そうだね。さつきに轟君と話してみたけどあつちに内部情報が知られていたのは明らかだね」

「そうね。それよりこれからどうしようかしら？ さつきの件でもう気づいていると思うけど私達の周りには大勢の水中型ヴィランがうようよしているわ」

「その場に合ったヴィランを配置しているんだね。やっぱり用意周到だ」

「おいおい!? 梅雨ちゃんに緑谷も！ なんでそんな冷静に会話できるんだよ!? おいら達今もこうして殺されかけてんだぞ!」

「峰田君……………」

「峰田ちゃん……………」

この場で冷静なものが二人もいた事が幸いした。

もし峰田だけだったら確実に殺されていただろう。

「梅雨ちゃん、峰田君を助けてくれてありがとうね。そうじゃないときつと本当の意味で

「捌り殺しに遭ってた」

「そうね」

「マジでー!？」

「それより今から僕達はどうかしてここを無事に脱出しないとイケない。だからヴィラン達をどうにかする方法を考えないと……」

「本気かよ緑谷!」

「うん。じゃないと僕達は確実に狩られるからね」

「そうよ峰田ちゃん。三人で話し合いますよ。それにここで男は峰田ちゃんだけなのよ? カッコいいところを見せてちょうだい」

「お、おう……わかった!」

それで話し合いを開始する三人。

出久の個性の件はバスの中で話した通り。

蛙吹もカエルの個性だからカエルが出来ることなら大体はできるとの事。

そして最後に峰田の個性のもぎもぎ。

これは引つ付くことが出来る優れものだと出久は即座に理解した。

「……………うん。どうにかできるかもしれない」

「どういうこと出久ちゃん……? あちらはこちらの個性を把握していると思うから

きつと対策されていると思うわよ?」

「いや、それはないと断言できるよ」

「な、なんでだ!?!」

出久は理由を話す。

この水難ゾーンに蛙吹がいることがその証明だと。

「もし、梅雨ちゃん個性を知っているんだつたらわざわざ水難ゾーンにしないで火災ゾーンに送ったと思うから。きつと生徒の個性までは把握していないんだと思う」

「なるほど……一理あるわね」

「だけどそれでどうするってんだよ!?!」

「落ち着いて峰田君。ここを突破する方法を今から二人に教えるから」

出久はそれで二人に攻略法を話す。

この攻略には峰田の力が必要不可欠だという事を。

それで重大責任を負わされた峰田はガチガチになってしまっていた。

「む、無理だよ……おいらじゃあんな大軍に向かう覚悟が出来ねえよ……」

弱音を吐く峰田に出久は峰田の手を握ってから一言。

「今は峰田君だけが頼りなんだ。お願い、力を貸して……」

「み、緑谷……」

その必死な表情に峰田の心の中で何かが灯った。

「よーし！ やってやろうじゃねえか!!」

燃えている峰田の姿を見て蛙吹は出久の事を感心していた。

「出久ちゃん、なかなか女の子の武器の使い方を分かっているのね」

「え？ どういう事……？ ただ頼んだだけなんだけど……」

「無自覚……出久ちゃんつてもしかして魔性なのかしら……？」

蛙吹は出久の鈍感とも言える反応に頭を悩ませるのであった。

まだ女子になって一年。

「男だったらこうしたら喜ぶ」反応なんて学ぶ機会なんてあるはずがないゆえに、こうして感覚が少し鈍感になってしまっているのであった。

これはこの難関を乗り切ったら女子のみんなで女子力の勉強会を開いた方がいいわねと決意していた。

それはともかくとして作戦通りに出久は水中型ヴィランの頭上へと飛び跳ねた。

それでヴィラン達は獲物が向こうから来たぞ！と攻撃を仕掛けようとするが先に出久が仕掛ける。

「即興命名！ ハウリング・インパクト!!」

にやあああああああー！！！！

出久の起こした衝撃波によって一点集中された音は海面に直撃して大渦を発生させる。

そこに蛙吹に抱きかかえられた峰田が、

「おいらだつて！ おいらだつて！！」

と自分の頭の出血を厭わないでもぎもぎを次々とヴィラン達に投げて行った。

効果はすぐに現れた。

大渦はすぐに元に戻ろうとしてヴィラン達ともぎもぎも吸いこんでいく。

結果はヴィラン全員がもぎもぎに引っついて一塊になってしまい戦闘不能を実現したのだ。

蛙吹はまだ空中を飛んでいる出久をカエルの舌で拾いながらも、

「とりあえず第一関門突破ね。すごいわ二人とも」

こうして三人は無事に水難ゾーンを脱出することが出来たのであった。

NO. 015 爆豪の過去の汚点とトラウマ

「校長先生……なにか嫌な予感がひしひしとするのですが……」

「慌てない慌てない。今は体の回復に努めなさい。まだまだ不調なんだからね……」

「はあ……」

校長だって連絡が取れない事に不安は感じていた。

だが今の状態でオールマイトを行かせたらまずい事になるのは明白だ。

よってパワーが戻るまではどうやってもここにいさせる腹積もりだった。

この校長の判断がよりによって本来なら向かっていいるだろうオールマイトの妨げになつてしまったのである。

爆豪と切島の二人は倒壊ゾーンでやはりヴィランと戦っていた。

だが、二人にとって相手をしている奴らは所詮は下級ヴィランのために簡単に打ち倒していた。

「……………これで全部か。弱えな……………」

「そういう事を言うのは大本を倒してからにしようぜ爆豪！ きつと俺達以外にもみんなはUSJ内に飛ばされてるはずだからな！ きつとまだ戦ってるぜ？ 攻撃手段に乏しい奴らが心配だ。それになんかさつき遠くの方から小せーけど緑谷の叫び声が聞こえてきたような気がしたし……………」

それはきつと水難ゾーンでの出久の『ハウリング・インパクト』を使った瞬間だろう。

切島にも聞こえたのだから当然爆豪にも聞こえているはずだ。

「……………デク。また無茶をしてんじゃねーだろうな…………？ とにかくさつきと向かうぞ。俺はあのワープ野郎をぶっ殺す」

「こんな時に自分事を優先してしないで助けに行こうぜ！」

「うっせえ！ どうせ全員広間に向かっていけば合流できるんだ。弱くても雄英に入れてんだ。こんな三下どもなんざどうにかしてるだろ！」

「爆豪、お前……………」

切島は爆豪の事を勘違いしていたのだ。

どうしても頭に浮かぶのはいつも怒鳴っていて特に出久に対しては昔からの馴染みでもあり容赦なく暴言を吐く破壊者の様な物……と思っていたが、その実――Aの全員の事をしっかりと冷静に見ていた事を先ほどの発言でわかったのだ。

「意外だぜ……お前ってすぐに怒鳴り散らすところがあるけど結構冷静じゃねーか？」

「んだとごらあ!？」

「そうそう! やっぱお前はそうじゃないとな!」

そう言つて二人で話し合う感じで背後に一人だけまだヴィランが潜んでいることに気づいているのかいないのか。

そのヴィランはすぐさま仕掛けに行つただけで、それは爆豪の油断を装つた罠だつたために炙り出されたと気づいた時には時すでに遅く目の前に手のひらがあり、その後にはもう意識は消えているといった感じであつた。

「すっげえな……やっぱお前って緑谷が絡まないとまともだな」

「今更気づくな! デクがいなけりや俺の天下は決まっていたんだよ」

そう吐き捨てて爆豪は広間へと向かおうと歩き出す。

そんな爆豪の後を追う切島はというと、

「でもよー爆豪。なんでお前はそんなに緑谷の事を邪険に扱うんだ……? そりゃ男の

時代から知っていけば変化はないだろうけどよ」

「うるせえな……俺は俺の信条に肩入れしているだけだ。それにデクの奴に言っちゃまったんだよ……」

「なんて……?」

「……他の奴らには……特にデクの奴にはオレが言ったって言うなよ?」

『クソデクはクソデクだ! 男だろうが女だろうがてめえはてめえだろうが!!』ってな。だから俺はあいつがどんな事になっちまっても態度を変えらるつもりはねえよ」

「ほー……見直したぜ。爆豪って実は義理堅い性格だったんだな」

「うっせえ! だから言いたくなかったんだ! ぜってー言うなよ!」

「あいあい♪」

切島はそれで爆豪の意外なところを知れて、これなら気兼ねなく対等に話が出来るかなと思っていた。

爆豪はそこで心の中とある事を思う。

「(それに……もう俺はデクのある光景を見たくねー)」

爆豪が思い起こすのは小学5年生の時の事だった。

出久が無個性だと分かかってからというもの、出久は迫害を受け続けていた。

それでも出久は健気に毎日学校に通っていた。

普通なら不登校になってもいいだろうに毎日顔を合わせれば弱気な声で『おはよう、かつちゃん』と言ってくるのだ。

それがどれだけ爆豪にとって目障りだったことか。

だから爆豪は「ああ……」と不機嫌そうに答えるだけで決して『おはよう』とは言わなかった。

出久はそれでも反応されているだけで嬉しかったのか席に座ってはまたヒーローノートを取りだしては眺めているのを爆豪はただただ見ているだけだった。

爆豪はこう思った。

なぜそこまでされているのにこうも元気でいられるんだ？と……。

気づけば爆豪は放課後に出久が何をしているのか手暇半分に追うようになっていた。取り巻きも付いてこさせないでただただ出久がどこに向かっていのかを追った。

そして出久がやってきたのは古臭い神社だった。

その茂みに入っていくのを見て、爆豪は隠れながらも覗いていた。

そこには出久と一緒に一匹の猫の姿があった。

『ぎ、フォウ。今日の食事を持ってきたよ』

そう言うてよく残しては持ち帰っていた給食の残りをその猫に上げていた。

『(馬鹿かあいつは？ 猫がそんなもん食うわけないだろ……?)』

そう思っていたが猫はそれをとでも美味しそうに食べているのを見て『マジかよ……』と思った。

普通ならキャットフードとかしか食わない猫が人間の食べ物を普通に食べているのだ。

あいつはそれを承知であげているのか？

爆豪の疑問は尽きなかった。

話は変わるがこの頃、巷では主にペットなどの猟奇殺人をするヴィランがよく出現していた。

警察やヒーローも必死に探していたのだが手掛かりが見つからずに手を焼いていたのだ。

もし、そんな奴があつた猫の存在を知ったら嬉々として殺しに来るだろう。

爆豪が出久を隠れて見ている中、そいつは現れてしまった。

『坊や……その動物を私にukれないかい？ 悪いようにはしないよう……?』

『な、なんですかあなたは……?』

出久は怯えながらもフォウと呼ばれている猫の事を庇うように立っていた。

『ただ私はね、殺したいだけなんだよ……その猫を!』

男はすぐに本性を現して不気味に猟奇的な笑みを浮かべた。

それを陰で見っていた爆豪は『あいつはやべえ!! ぶっ倒す!』と出て行こうとした。

だが、足が震えてしまい声も出せずに必死に隠れている自分がいて、

『馬鹿か!?! アホか!?! なんですぐにあいつを倒さないんだよ!?!』

いつもならすぐに個性を発動して大人でも倒そうとする爆豪なのに、今は不思議な事に体が震えて仕方がない。

この時は知らなかった事だが、この男は周りにいる人たちの恐怖心を増幅させるという個性を持っていた。

そのために爆豪もそれにはまってしまい、知らずのうちに男に恐怖を抱いてしまったのだ。

だが、そんな環境下の中でも出久は猫を守ろうと必死に立ち向かっていた。

『おやあ……? 私個性に耐えるのですか? それでは仕方がないですねえ……あなとも地獄行きです!』

男は鋭利な包丁を出久に向けて刺そうとした。

だがそこでフォウという猫が出久の前に飛び出した。

『フォウ!?!』

『ウウウウツ!!』

フオウという猫は男に威嚇をしていたのだ。

それに男はニヤリと笑みを浮かべながらも、

『その反抗的な声、いいですねえ! いいでしょう。思う存分に切りつけてあげましょう!』

男は包丁を出久とフオウに向けて何度も振るつた。

出久はフオウを必死に腕の中に庇って男の包丁を受け続けた。そして……。

『……私はただ猫を殺したかっただけですのに、あなたが悪いんですよ? まあ、今回はその猫は見逃してやりましょうか。もう聞こえていないでしょうがね……』

そして男はその場を立ち去っていった。

それからしばらくして爆豪は個性の縛りから解放されたのか、やつと動いた足で出久の事を起こしに行った。

体中が傷だらけで見えるに堪えないとはこの事かと言わんばかりの惨状だった。

爆豪は涙を浮かべながらも必死に大人達を呼びに行った。

己の不甲斐なさを痛感しながらも……。

その後に男は爆豪の通報が早かったのかすぐに逮捕されていた。

その後、出久は病院に運ばれて最高のとある名医の治療を受けてなんとか一命は取り留めたかのように見えた。

だが、

『……お母さん。今夜が峠だよ』

『そ、そんな……!!』

それで泣き崩れる引子。

そんな光景を幼くして見た爆豪は心にこびりつくように汚点がついてしまった。

しかし、奇跡的に出久は回復した。せつかく必死に守ったフォウという猫が死んでしまったという事実があったとしても……。

「(あいつは無個性のまままでよかったんだよ。俺は……デクのある光景をもう見たくねえんだよ……)」

出久は爆豪の心にトラウマを植え付けてしまっていたのだ。
かなり特大の。

そして爆豪と切島は広間が見える場所までやってきた。

そこではなんと出久が脳が剥き出しのヴィランに打ちのめされている光景を目にして、爆豪の怒りが一気に頂点に達した。

「デクになにしとんじゃ、てめえ!!!」

爆豪は駆けた。

もう二度とあの時の様な過ちを繰り返さないために！

NO. 016 大猫変化、そして……。

少し時間を遡って飯田は13号や仲間達の援護もあつて抜け出すことに成功し、なんとか校舎の方まで全速力で走ってきてすぐさまに職員室に駆け込んだ。

「先生方！ 一大事です!! USJにヴィランの軍団が!!」
『ッ!?!』

飯田の一言で即座に動ける者達は全員支度を始めた。

それは隣の校長室の部屋にいるオールマイトと根津校長にも聞こえていたために、オールマイトはすぐさま飯田にマッスルフォームになつて駆け寄つた。

「飯田少年……よくぞ教えてくれた」

「オールマイト！ 早く、早くみんなの事を！」

「わかつた！」

オールマイトはどの教師よりもすぐにUSJへと向かつていった。

オールマイトの顔には焦りの色が見えていた。

「やはり直感に従つた方がよかつたか！ 緑谷ガール、それにみんな、無事でいてくれ

よ!!」

今出せる全速力でオールマイトは走って行くのであった。

出久は脳内では今か今かとやばいやばい、という緊急信号が鳴り響いていた。

ヴィラン達のおそらくリーダーだろう男——死柄木弔は改人『脳無』を相澤と戦わせてその圧倒的な強さに相澤は完全に倒されてしまっていたのだ。

「対オールマイト専用のヴィラン、脳無の出来栄えはどうか？ イレイザー……？」

「ツー！」

相澤は何とか抜け出そうとするがそれをさらに上回るように押さえつけている脳無が相澤の腕を折っていく。

出久たちはそんな光景を隠れながら見ているしかなかった。

「やべえよ緑谷……あいつ先生をあんなにしちまつてるよ……」

「うん……。どうにかして助け出さないと相澤先生が殺されちゃう……」

「助けるっていうけどどうするの出久ちゃん？ あれに対抗できる手段は限られているわよ?」

「うん……ここにオールマイトがいない以上対抗手段は少ない。だけど……」

そんな時に久の猫耳がヴィラン達の声を拾った。

生徒の一人が脱出してもう少しすれば教師たちがやってくるだろう、と……。

久はそれに希望を持った。

オールマイト達が来るのならやれる事が増えるからだ。

だが、そんな折に死柄木弔がある事を言った。

「あーあ……ゲームオーバーか。仕方ないな……それじゃ帰る前に少しでも——」

瞬間、久はピリツとした悪寒を感じ取って一気に空気を吸い込んだ。

そして死柄木弔がこちらに走り出す瞬間と、久がハウリング・インパクトを放つタ

イミングが完全に重なった。

「にゃあああああああ!!」

「ちいつ!? ぐあつ!!」

先んじたのは久の方だった。

真正面から衝撃波を食らった死柄木弔は大きく吹き飛んでいき岩盤に背中から打ち付けられてずると崩れ落ちていた。

「死柄木弔!! おのれ、生徒と侮って油断しましたか! 脳無、彼女の相手をしてやりな

さへ」

「……………」

黒い霧のヴィランはほぼ戦闘不能状態の相澤先生をもう眼中にいれずに死柄木甲の方へと向かっていった。

命令された脳無はそれで出久たちの方へと向かってくる。

「…………やるしか、ないみたいだね」

「出久ちゃん…………」

「緑谷…………」

出久の言葉に蛙吹と峰田は心配の声をかける。

「二人はすぐに無防備の相澤先生の事を連れてみんながいるところまで逃げて…………僕があれいと戦って時間稼ぎをするから！」

「で、でもよお！」

「峰田ちゃん！ 今は出久ちゃんの言葉に従いましょう。戦闘能力が低い私達では足手まといになってしまうから」

「くう…………おいらにもっと力があれば…………！」

それで男泣きをする峰田。

しばらくして二人は無防備に晒されている相澤の方へと向かっていった。

脳無という改人は出久と相手をしろと命令をされたようで二人には眼中がない事をこれ幸いと思いつながらも出久は構えた。

身体強化・怪力とワン・フォー・オール100%を同時に発動して全身を強化して脳無に向かつて駆ける。

「いくぞー!!」

「……………」

脚力強化で高速移動をした出久はそのスピードを乗せて一気に脳無へと拳を見舞った。

「スマーツシュ!!」

だが脳無はその拳をただ棒立ちで受けた。

出久は不気味に思いつながらも今出せる全力のスマーツシュを叩き込んだ、そう思っていた。

しかし、脳無はまったくダメージを受けている気配がなく、

「(馬鹿なっ!?)」

一瞬の思考の停止によって次に脳無から見舞われた反撃の拳をもろに受けて出久はなんとかガードだけはしたものの大きく吹き飛ばされていった。

「ダメージが、通っていない!? どうして!」

出久がそう言うがそれは目を覚ましていた死柄木弔が岩盤に背中を預けて上半身だけを起こしながらまるでおもちゃを自慢するかのよう語りだしていた。

「そいつは『シヨック吸収』って能力を持つてんのさ！ オールマイトのフォロワーかなんか知らないけど猫女、さっくりやられちまえよ！」

「シヨック吸収！ それなら！」

出久は爪を伸ばして硬化させて高速移動をして通り過ぎ様に一気に脳無の腕を引き裂いた。

さらに追撃とばかりに何度も、そう何度も脳無の周りを旋回するたびに飛びかかっていつて爪を立てていつて脳無の身体に次々と傷を刻んでいく。

この有事に圧倒的脅威である脳無の事なんて気にはいられない。

殺しさえしなれば後でどうにでもなる、出久は冷徹にそう判断して爪を立てることをやめなかった。

だが、ふとおかしい事に気づく。

先程から傷を付けても付けてもまるで無かったかのように傷が無くなっているのだ。

「なんで！ なんで！」

「なかなかやるみたいだな……もう一つ教えてやるよ。脳無には『超再生』って能力もあるんだよ！」

「超再生!？」

出久の動揺も分かる。だけどそれで雑念が入ってしまい脳無の拳をお腹にまともに受けて出久は「かはっ!」と血を吐きながら地面に転がっていく。

「うっ……ぐう……」

「出久ちゃん!」

「緑谷!」

相澤を必死に運んでいた蛙吹と峰田がそんな光景を見せられて思わず叫んでいた。

このままでは……!

そう思った時だった。

「デクになにしとんじや、てめえ!!!」

突如として爆豪が脳無に突っ込んできて爆発を食らわせる。

だが、それでも脳無は無傷で立っていた。

「まあ生徒が一人やってきたか……構う事はねえ。脳無、全員殺しちまえ!」

「この俺を簡単に殺せると思うなよ! 逆に殺す!!」

それで爆豪が攻撃を開始し始めるが、出久は『かつちゃんだけじゃ敵わない』と即座に判断した。

「(どうすれば、どうすれば!?)」

そんな時だった。

またあのスローモーションのような感覚に陥る出久。

そしてまたしても聞こえてくる謎の声。

『イズク……真の力を使つて』

「真の、力……?」

『今から頭に使い方を送るね。でも、今のイズクの実力じゃ使っても5分が限度……全力を振るえるけど使いすぎには気を付けてね』

瞬間、知識が出久の頭に流れ込んでくる。

「(これは!)」

即座にまだ未知数の力を理解をした出久。

それでなんとか立ち上がって、

「かつちゃん! 今からそこを離れて!!」

「ああツ!? いまこいつをどうにかしようとしてんのになんでだよ!!?」

「いいから!!」

いつになく鬼気迫っている出久の言葉に何かを感じ取った爆豪は即座に爆破を吹かせてその場を離脱する。

それで出久は右手を前に添えて叫ぶ。

「猫又、解放!!」

出久の周りが白い煙に包まれていく。

その煙は次第にどんどんと規模を拡大させていき、それが晴れた時にはその場には5mはあるであろう巨体な二股の尻尾の緑色の猫の姿があった。

「な、なんだあ!?!」

爆豪より遅れてやってきた切島は思わず叫んでいた。

あれは出久なのかと……そんな思いを抱きながらも。

「はっ……? なんだ、あいつ……?」

それを見ていた死柄木弔も茫然とその巨大な猫を見やる。

「死柄木弔……なにか不味い予感がします」

「黒霧……あいつはなんだ!」

「わかりません……ですが、直感で奴は危ないものと感じました」

黒霧の予感はずぐに的中する事になる。

その巨大な猫は脳無をその手で何度も地面へと叩き潰していた。

次には脳無を掴んで空へと放り投げる。

そしてその猫の腕が光っていた。

だが、まだUSJ内には複数の下級ヴィランが生徒達と戦っていたためにオールマイトの後にやってきた教師たちによってなんとか死人も出さずに全員確保することが出来たのであった。

最後に出久は……………もとの猫娘の姿に戻っていてあまりの力の行使による負荷で気を失っていた。

NO. 017 事後処理と微睡みの夢

死柄木弔はアジトにワープで帰ってくるなり荒れていた。

「なんなんだあいつは!? 平和の象徴とすら戦えずにおめおめと逃げ帰って来ちまって……」

『おや。どうしたんだい死柄木弔? やけに荒れているではないか?』

死柄木が荒れているとモニターの向こう側から誰かの声が聞こえてきて死柄木は思わず悪態をつく。

「先生……話が違うじゃないか? 脳無は生徒にやられちまったぞ」

『なに……? オールマイトをも超すパワーを備えた傑作が、か……?』

「ああ……。生徒の一人で緑髪の猫女にやられちまったよ……」

『猫女、か……脳無を倒すとは興味深いな。一度会ってみたいものだな』

「そんな悠長な構えで良いのか……? オールマイトを倒すどころか返り討ちにまで遭っちまったよ先生」

『見通しが甘かったみたいだな……作戦を立て直すか。我々は自由には動けない……』

じっくり、じっくりと精銳を集めようじゃないか』

こうして悪の組織は静かに胎動をする。

ヴァイラン

敵 連合と名乗る集団が立ち去ってから少し時間が経過した。

現在警察も到着して捕まえたヴァイラン達を送っている真つ最中だ。

脳無も無抵抗で確保されたというから安心だ。

だが、一番酷い傷を負った相澤は今現在病院で治療の真つ最中との事。

生徒達にも出久が気絶して保健室送りになっている以外は特に被害はない。

「あの、出久ちゃんは……?」

「大丈夫。彼女はただの疲労困憊で意識を失っているだけだから。時期に目を覚ますことだろう」

「よかったわ……」

蛙吹はそれで安心する。

相澤がああいう結果になったために絶対的な安心はできずとも、それでもあんな事があつたのに誰一人死人が出なかつたのは幸いな事であつた。

それで安心したのか峰田が一言。

「しっかし……緑谷も人が悪いぜ。あんな隠し玉を持っていたなんてな」

「いえ、出久ちゃんとの反応を見ていたから分かるわ。あれは戦闘訓練の時と同じであの場で気づいた力なんだわ、きつと。土壇場の力が出た感じね。でないどと気絶なんてしないでしょうし……」

「た、確かに……」

蛙吹と峰田がそれで考察も兼ねて二人で話し合っている中で、それを横から黙って聞いている爆豪は不機嫌そうに表情を歪めている。

「おい、爆豪。緑谷が心配なのはわかるけど少しは機嫌を直せって」

「誰がデクの心配をしているだっ!? 俺はなー!!」

爆豪が反論しようと口を開こうとしたが先に切島がある事を呟いた。

「デクになにしとんじや、てめえ〜」

「ツツツツ!!!」

見る見るうちに顔が赤くなっていく爆豪は「クソがツ!」と暴言を吐きながらも切島を殴っていた。

その切島も顔を硬化させていたのでダメージはゼロであるために、これは面白いネタを手に入れていた気分だった。

他の生徒達もそれで各自色々話し合いをしていた。

保健室では出久が深い眠りについている。

そんな出久にオールマイトが椅子に座りながら寄り添っていた。

「緑谷ガール……君には毎度驚かされるよ。まさかあんな力を持っていたとは……」

あんな、とはまだ出久がもとの姿に戻る前までの姿である大猫の姿の事。

あれにはさすがのオールマイトも度肝を抜かされたに等しい姿であったからだ。

これもまたあの謎の声で発覚した力なのだろう。

そう考えている時だった。

「おんや。よく見ればあの時の少年じゃないかい？」

「リカバリーガール？ 緑谷ガールの事をご存知で……う？」

「まあね。5、6年前にヴィランに襲われて命に関わる大けがを負ったこの子を治療したのは私だからね」

「命に関わる!？」

「そうさね……奇跡的に回復したけどあれは私もさすがに匙を投げかけた事案だったか

らね」

「そのような事が緑谷ガールの過去にあったのですか……」

「ああ……」

リカバリーガールはそれで今の変わってしまった出久の姿を見て、

「(お前さんはいま、そこにいるのかい……?)」

そう謎の事を考えていた。

お前さんとは一体だれの事なのか……?

出久は夢を見ていた……。

そこは上下左右が分からない浮遊空間で出久はそこをただ浮いているといった感じのふんわりとした夢だった。

『()は……』

『ここはイズクの夢の中だよ』

『僕の、夢の中……?』

『そう』

そんな空間にどこからかあの謎の声が聞こえてくる。

『それにしても、イズクはまた無茶をしたね』

『ご、ごめん……あの時はあれを使わないと勝てないって思ったから……。それより君は一体誰なんだい？』

『分からないかな……。？ まあそうだよ。いずれは分かるよ』

謎の声はそう言つて続けてこう言つた。

『この際だからちようどいいからこの場でイズクに教えられる個性をほとんど教えてあげるね。まあ、もうあつても一個か二個しかないんだけど』

『それつて……。？ 僕に悪影響とかはないのかな……。？』

『ないよ。だつてもうこの個性達は全部イズクのものなんだから宿主を傷つけるわけないよ』

『そ、そうなんだ……。それじゃ教えてもらつてもいいかな？』

『うん！』

それから出久は謎の声の主から残り二個の個性の使い方を教わつた。

しばらくしてこの空間にいる出久がふと眠気に襲われる。

『あつ……。……。もう時間切れだね。もうすぐイズクが起きる時間だよ』

『そつか……。』

『イズク。安心して……私は絶対にイズクの味方だから。それだけを伝えたかったの』

『うん。信じるよ。ありがとう……僕にこんな素敵な個性達をくれて』

『うん。それじゃもう当分は会えないかな……』

『またいつか会えるよね?』

『当然だよ。だって私とイズクは——……』

最後の言葉が聞き取れずに出久は眠りから目を覚ます。

目を開けてみればそこは暗いが保健室の中だという事に気づき、さらにはオールマイトが半分眠っているのかトウルーフオームの状態で船を漕いでいるという知らない人が見たら恐怖映像間違いなしな光景があった。

そんなオールマイトの姿に出久は安心してながらも上半身だけを起こして、

「オールマイト……」

「……………む? 緑谷ガール? 起きていたのか。心配したんだぞ」

「すみません……」

「いや、謝らなくてもいい。それより今日の活躍はみんなから聞いたよ。よくぞ負けな
いでいてくれた。そして、間に合わずにすまなかつたな」

「いえ。なんとか敵^{ウイラン}連合を撤退にまで追い込めたんですからよかったです」

「しかし敵^{ウイラン}連合か……そんな連中がいるとはな。バックには何が潜んでいるのやら

……」

「そうですね。あ、それよりオールマイト。聞いてください。例の謎の声の人からほんどの力の使い方を教わりました」

「なんと！もしかして夢の中ですかい？」

「はい。今まで僕がピンチか願わない限りは表に出てこれないという事でしたけど、僕に力を受け渡したのか今後はもうほとんど出てこれないそうです」

「そうか……君に力を与えてくれた者は悪しき者ではなかったのだな？」

「はい」

出久はそれだけは自信を持って言えた。

まだ謎は多いけどとにかく悪い人ではないという事だけでも分かっただけ良かったと思う。

「わかった。それでは後でその力も教えてくれな。個性の上書きもしないといけないから」

「はい」

「しかし……」

そう言ってオールマイトは出久の頭を撫でながら、

「もう一度言うが君達が全員無事でよかったよ。相澤君はまだ治療中らしいが復活は早

いという事らしいしな」

「そうですか。よかったです」

それで笑いあう出久とオールマイト。

「緑谷ガール。これからも強くなっていこうな」

「はい！」

こうして出久たちはまた新たに歩き出した。

猫娘と雄英体育祭編

NO. 018 雄英体育祭に向けて

敵^{ワイラン} 連合と名乗る組織の雄英高校への侵入というある意味学校の失態。

これによって侵入された翌日は臨時休校を余儀なくされたがそれからまた一日が経過して、出久は気が休まる事なく学校へと登校した。

「デクちゃん！ おはよう！」

「おはよう麗日さん！」

二人はいつもの待ち合わせの場所で合流して学校の校門をくぐった。

「うん。それより昨日は大丈夫だった……？ なにか一昨日はデクちゃん目を覚まさなかったって聞いたけど……」

「うん。あはは……あんな強力な力を使った反動が思った以上にでちゃったみたいで昨日は個性の使用が制限されていたんだー」

出久はそう話すけどお茶子は大変そうな顔をして、

「やっぱり、あの巨大な猫ちゃんの姿になるのにはリスクはあるんだね……」

「そうみたい。今の僕だと持っても5分くらいが限度だから追い込まれた時の最終手段

でしかないかな……？ あの後に起きて個性を使用してみたらさつきも言った通りに能力のほとんどが弱体化していて使い物にならなかつたから……」

「そっかー……。でも少し安心したかも……？」

「なんで？」

お茶子は出久の顔を覗き込みながら、

「デクちゃんはどんどん強くなって私より先にいつちやつたら一緒に肩を並べられないからね。私、デクちゃんと一緒に強くなっていきたいんよ」

「麗日さん……うん！」

それで出久とお茶子の周りにはなにやら不可視の結界が展開されていたとは近くを歩いていた生徒の証言である。

「これが百合つてもんかよ。いいもんじゃねーか！」

と、峰田少年もよだれを垂らしながら思っていたらしい。とてもどうでもいい……。

そして朝のHRの時間。

いつもの通りに飯田がみんなに席に座るように促していた。自分が座っていない辺りかなりアレだけど。

さらには予鈴がなったら教室に包帯ぐるぐる巻きの相澤が入ってきて騒動になる。

「先生!? もう大丈夫なんですか!」

「……………ああ。なんとかな」

そう答える相澤だったが時折身体が震えている辺りまだ痛みが残っているのだろう。

リカバリーガールに治療を受けてもらったとはいえ、全快はせずに後遺症も残るかもしれないとは出久もオールマイトに聞いた事であった。

「俺の心配はしなくてもいい……………それよりお前たちの戦いはまだ終わってねえぞ?」

『ツ!?!』

相澤のその一言で一気に教室内が緊張を高める。

また敵ヴィラン連合が攻めてくるのかと一触即発の空気が広がったかのように見えて、だが相澤から出てきた言葉は、

「雄英体育祭が迫っている……………」

『クソ学校つぼいのキター!!』

緊張したムードから一気にお祭り騒ぎに気持ち移行する辺り、やはり学生の手精神はタフネスだ。

だが、ヴィランに攻められた直後でこんな催しをしても大丈夫なのか?という当然の疑問も出てくる辺り現実を見れている子も多い。

それに相澤はこう答える。

「それもあるが、気にするな。逆に開催する事で雄英は体制が盤石だということを見せるんだろうな。警備も例年に比べて5倍相当に増やすそうだからお前たちはただ勝利を勝ち取る精神だけを蓄えておけ。それにこの体育祭は……お前たちにとって最大のチャンスだろう?」

相澤はこう語る。

個性が世の中に発現して以降、かつてのオリンピックという競技は公正を保つことが難しくなって次第に縮小していき形骸化した。

その代わりに個性使用ありきでのいわゆるお祭り騒ぎ……オリンピックの代わりとなって誕生したのが雄英体育祭だと。

三年間の学生生活で三回しか行われないビッグな行事であるためにスカウト戦争も白熱する。

トップに近い成績を残した生徒はそのほとんどがトップヒーローの道を開いている。No. 1ヒーロー、オールマイトやNo. 2ヒーロー、エンデヴァーもそれで上を目指して今の実力と名声を手に入れてきたのだ。

「だからな。ヒーローを目指すのなら必ず通っておいて損はねえ催しだ。俺のクラスの生徒であるお前たちには立派に戦って戦果を上げてもらいたい。俺からは以上だ」

それでHRは終了して時間は過ぎて行ってお昼休みの事。

出久は少し悩んでいた……。

もうすでにオールマイトに師事している以上はこれ以上ないくらい良い環境で、果たしてこの雄英体育祭にそんな中途半端な気持ちで臨んでいるのかという事を……。

だが、飯田とお茶子と三人で食堂に向かう前にお茶子があるとある宣言をする。

「デクちゃん、飯田君……雄英体育祭、頑張ろうね!!」

そこにはいつもの麗かな顔ではなく言つては悪いが獰猛な感じの顔のお茶子の姿があった。

「全然麗かではないぞ麗日君!」

「ど、どうしたの麗日さん……?」

「うん。ちょっと私にも譲れない思いがあつてね」

それでお茶子は自身の家の事を語る。

お茶子の家は建設業をしているのだが最近仕事がなくて財政難を抱えている事を。

それでお茶子はヒーローになってお金をいっぱい稼いで親達の暮らしを楽にしてあげたいと思っている事を……。

「だからね、このチャンス逃したくないの」

それを聞いて出久にも心に宿るものがあつた。

「(そうだ………みんな、理由は違えどヒーローになるために精一杯努力している。飯田君だって立派なお兄さんの事を目標にして頑張っているのに、僕ときたら……)」

それで出久は拳を握りながらも、

「うん。僕も頑張る！ 麗日さんみたいになにかを目指せる人になりたい」

「おお！ 緑谷君も立派だな！ それじゃみんなで頑張るとしようか！」

三人でえいえいおー！としている時だった。

「緑谷ガール!!」

そこにオールマイトが姿を現してきた。

手にはお弁当の包みが握られていて、

「一緒に、ごはん食べよう？」

ギヤップがあり過ぎる姿にお茶子は思わず「乙女やー！」と叫んでいた。

出久はそれでオールマイトについていったのだけど、それをたまたま見ていた轟が少し考え込むように見えていた。

「(緑谷はオールマイトのお気に入りか何か……？ 家族か親族って訳でもないしな。

個性も全然違うしな……。だけど……それなら緑谷にも勝たないといけないかもな。

親父を見返すために……)」

轟はそれで少し考えを巡らせていた。

主に現状知っているクラスメート達の個性の把握など。

特に出久に関しては自分でもおかしいと思うくらいには調べていた。

「あの巨大化猫はリスクが高いらしいのは気絶したのからあきらかだ。だからおいそれと使えねえだろ……あれを使われたら俺ももしかしたら負けるかもしれねえからな」

と、轟は考えを巡らせていたのであった。

とある部屋で一緒に食事を摂っていた出久とオールマイトはというと、

「しかし、やはり君の個性はすごいものがあるな。巨大化の猫の時限定だけど私と同等の力を振るえるのは凄い事実だ」

「あはは……でも5分くらいしか持ちませんし、その後もエンプティしてしまつて個性が半日以上は使い物にならなくなつてしまいますから雄英体育祭には多分実践投入は難しいと思います」

「そうか……だが、代わりに今の状態でもワン・フォー・オールのフルカウル状態の上限が上がったんじゃないかね？」

「……………よくわかりましたね。はい、今までは100%だったのが巨大猫化してから力

が活性化したのか15%まで引き出せるようになりました」

思いがけない成長にオールマイトは満足そうにしながらも、

「わかった。それでは雄英体育祭では頑張りたまえ。なにやら麗日ガールと飯田少年と話をして意欲はすでに高まっているようだからな」

「はい。みんなは考えは違えど必死にヒーローになろうと頑張っているのに、僕だけやる気を出さないのは恥ずかしいと思ひまして……」

「うんうん。いいと思うよ。ここだけの話だがね……私がヒーローとして活躍できる期限はもう残り少ない」

「ッー！」

そのオールマイトの告白に出久は顔を辛そうに歪ませる。

「だからな……君は私の力を継いだ以上は目指さないといけない。雄英体育祭、またとないい機会だ。『君が来た！』って事を世の中に知らしめてほしい」

「!!」

出久はそれで気持ちを高ぶらせた。

オールマイトはそれで『ニイツ』と笑みを浮かべて、

「なあに。今の君なら十分トップに入れる力を持っている。自信を持ちなさい」

「はいー！」

それから放課後に他のクラスとの生徒達ともめ事はあったが、そこでも出久は爆豪の気持ちを知れる機会を得られて「頑張ろう！」と思うのであった。

ちなみに帰り際に相澤に選手宣誓の挨拶は緑谷だと言われて出久は思わず「えええええ!?」と叫んでいた。

NO. 019 雄英体育祭開幕。そして全国へ……。

二週間という短い期間を静かに時は過ぎて行つて、そして雄英体育祭開催当日。

今か今かと観客やプロヒーロー達が会場内へと入り込んでいた。

何と言つてもやはり今年の目玉は1年生の部だろう。

ヴィラン侵入という災難に見舞われながらも、それでも全員が心折れずにこうして体育祭を迎えられた。

それだけで荒事の経験を積んだという箔がもうついているのだ。

それで普段なら3年生の方に集中する目線が1年生に集中するのは分からなくもない。

場所は変わつて、生徒達選手控え室。

そこでは出久達みんながもうすぐ始まる行事に思いを馳せていた。

特に選手宣誓をする予定である出久は別の意味で緊張している。

出久は今日のためにある決断を抱えて今日まで過ごしてきたのだ。

その内容はもうクラスのみんなにも伝えてあるために今のところ一番の友達のお茶子

が出久の手を握ってあげながら、

「デクちゃん……無理して言う必要はないからね？ 普通の宣誓でもいいんだよ？」

「ありがとう麗日さん」

それから他の女子たちも、

「そうよ出久ちゃん。無理して全国が見ている前で言う必要はないのよ……？」と蛙吹。

「そうですわ。それでもし緑谷さんが変な目で見られでもしたら私達も心苦しいですわ」と八百万。

「そうだよ緑谷。だから無理そうだったら言わないでいいんだからね？」と耳郎。

「もし変な事を観客が言ってきたら酸をぶっかけてやるんだから！」と芦戸。

「そうだよー！ だからそんなに重く考えない方がいいよ？」と葉隠。

女子たちみんながそう言っただけで出久に一声かけていく。

男性陣も出久のやる事を知っている為にただ何度も『頑張れ』と声をかけていった。

それで出久は少し心が軽くなった気持ちになつて、

「ありがとうみんな。でも、もう言おうって決めているんだ。ここまで来れたのはみんなのおかげでもあるし、僕を鍛えてくれた人にも感謝の言葉を贈りたいから……」

ガチガチに緊張しながらもしっかりとそう言いきる出久に全員は感心をしていた。

そこに爆豪が声をかけてくる。

「おいデク……」

「かつちゃん……」

それで他のみんなは爆豪がまた出久に何か変な事を言わないか静かに見守っている中で、

「てめえが決めた事だ。だからもう俺も何も言わねえよ。だがやるって決めたからにはもう後戻りはできねえって事だけは覚えておけよ？」

「わかってるよ、かつちゃん。大丈夫。みんなだけでも分かってくれているだけで僕はもうそれだけで満足だから……」

それでニツと笑みを浮かべる出久。

爆豪はそれだけ言いたかったのか「そうかよ……」ともう出久のこれからやる行いを止めることはしなかった。

そこに『選手達は入場してください！』とアナウンスが流れてくる。

よし、いくぞ！と出久は気合を入れてみんなとともに会場へと向かっていく。

会場内では実況役としてプレゼント・マイクが席について今か今かと待ち望んでいる観客達とヒーロー達に向けて話し始める。

『さーてついにやってきたぜ！ 雄英体育祭一年生の部。どうせてめえらのお目当ては

これだろう!? ヴィランの襲撃にあっても折れない精神で立ち向かっていく超新星達!
! ヒーロー科一年A組だろー!?!」

その言葉とともに出久達が会場内に姿を現す。

それをテレビの前で見えていた母・引子は出久の話すことも知っている為に『どうか出久を信じてあげてください……』と祈りを捧げていた。

それからヒーロー科B組、普通科、サポート科、経営科と次々と入場していく。

A組以外の生徒達はどうせ引き立て役扱いだろうと顔を曇らせているが、これから聞かされる出久の選手宣誓で果たして何を思う事か……?」

壇上に18禁ヒーロー、ミッドナイトが立つて、

「それじゃまずは選手宣誓をしてもらおうよ! 1-A緑谷出久!!」

「はい!」

それで出久は壇上へと歩いていく。

それを心配そうに見守るクラスメイト達。

他のクラスの生徒はただただ壇上に上がっていく出久に対して嫉妬の目線を向けていた。

そしてそれを外のモニターで見っていたMt.レディは一年前に見た出久の姿を確認してあの時に一緒にいたデステゴロと話をしていた。

「デステゴロ！ 見て！ 一年前のあの子よ！」

「おー……あの時の性転換してしまった子か。確か、緑谷だったな。あの子が主席だとはな……この一年で頑張ったんだな」

「そうね。私はあの子の事を応援しているのよ。だからどんな宣誓をするのか楽しみだわ！」

二人が盛り上がっている中、出久は選手宣誓を行う。

「宣誓！ 私達選手一同はヒーローシップにのっとり、正々堂々と戦うことをここに誓います!!」

と出だしはテンプレの様な内容で他の生徒達は、

「普通だな……」「普通だ……」「逆にスゲーと感じちゃうな」

と、言葉を漏らしていた。

だが、まだ出久は言いたい事があるのか「それと話は変わりますが——」と前置きをする。

それを聞いてーA女子達はもう胸が張り裂けそうになるくらい緊張をした。

男性陣も女子ほどではないが、それでも緊張をしている。

特に爆豪はただ無言で聞いているだけだった。

「ご存知の方もいるかもしれませんが、僕こと緑谷出久は今はこの姿になっています

が一年前までは無個性でさらに言わせてもらえば性別は男性でした」

その出久のカミングアウトに会場内はざわめきとともに静まり返る。

「とある事件をきっかけに遅咲きの個性が発動して今の姿となりました。ですがそれまで僕は無個性だと思い込んでいたためにオールマイトの様なカッコいいヒーローにはなれないと半ば諦めていた節もありました。

でも、こうして今ここに立っていられるのは性転換してしまつてこんな姿になつてしまつた僕に以前と変わらずに接してくれる幼馴染の存在。そして家族達……」

それを聞いて爆豪の表情が少しだけ歪む。多少の恥ずかしさもあるがそれ以上に出久の覚悟の告白にある意味で関心をしていた。

「そして主席入学してここに立つに至るまで、『君はヒーローになれる！』と言つて一生懸命僕を一から鍛えてくださったとある偉大な方の存在……」

それを聞いてオールマイトは表情を緩める。

君に決めてよかつたとオールマイトは心の中で思う。

「他にも僕を支えてくださった人達の恩義に報いるためにも、この雄英体育祭はまたとない絶好の機会です。だから……僕はプルス・ウルトラの精神で1位になれるように一杯頑張りたいと思います!! 以上、選手宣誓、緑谷出久でした!!」

出久は言いきつた。

もう半分涙目だがそれでも最後まで言いきったのだ。
それを恥に感じる事などない。

出久は全国が見ている中で己のしたいことをやり切ったのだ。

だから、しばらく静かだった会場内はU—Aのみんなが拍手する音とともに次から次へと拍手が巻き起こった。

それを会場の外で警備しながらも聞いていたMt.レディももう「あの時の子がここまで立派になって……」と出久の成長に涙目になっていた。

『覚悟のあるカミングアウト！ とてもよかったぜ緑谷！ 頑張れよ！ 事情を知っている教師陣は少なくともお前の味方だからな!!』

と、プレゼント・マイクが実況席で声を張り上げる。

他のクラスの生徒達も出久の言葉に感動したのか先ほどまで感じていた嫉妬などといった感情はほとんど消え失せていた。

無個性だった子がたった一年でここまで上り詰めてきたのだから自分達も頑張らないとな！という感情もある感じだった。

ミッドナイトはそんな会場の空気をなるべく変えないように、「いきなりのサプライズだったけど、それじゃ興奮もやまない中でそろそろ第一種目に移らせてもらうわね！」

と、自然な感じで競技に入るように生徒達を誘導する。

その際に、出久は他のクラスの生徒達から「頑張ろうぜ!」「立派だったね」「私だけじゃあきつと言えない……」と声をかけられていたために出久は受け入れてもらえて笑顔で浮かべていた。

こうして雄英体育祭は出久にとって最高のスタートダッシュとなって幕を上げたのであった。

NO. 020 第一種目・障害物競走

出久の選手宣誓は生徒達だけではなくもちろんプロヒーロー達にもとてもウケが良かったとも言える。

「あの子は普通なら隠していてもいい事をわざわざ全国が見ている中で言うなんて……大した度胸だ」「それに選手宣誓って事は入試主席って事だろ？ 腕も相当のものがあるんだらうな……」「あの子はたった一年で個性を把握して鍛え上げたという事か。性別問題で苦しかっただろうに……」「あの子は要マークだな」

と、さつそく出久はヒーロー達に良い意味で目を付けられていた。

その出久はというとお茶子達と話をしていた。

「デクちゃん！ とつてもよかつたよ！」

「ああ。緑谷君、君の選手宣誓には感動させてもらった。だが、これからはライバルだ。本気で行くからな？」

「うん！ 僕も頑張るよ！」

仲良し三人組でそんな会話をしている一方で、

「緑谷出久……いきなり目立つなんて、ずるいなあ……」

B組の物間寧人が親指の爪を噛んでいて、

「こら。一世二代の告白を妬まないの!」

と、同じくB組のクラス委員長である拳藤一佳にズビシツ!とチョップを食らわされていた。

他にも、

「緑谷出久……一年前まで無個性だった奴……。そんな奴がたつた一年でここまでやってきたのか……。俺も、この個性でも……。一生懸命鍛えればいけるのか……。?」

普通科の心操人使が出久に対して羨ましいという感情を抱いていた。

他にも出久の事をよく思うもの、悪く思うもの、あまり気にしないものと多数あったが、それでも時間はどんどん過ぎて行く。

ミッドナイトがモニターを見ながら、

「それじゃ第一種目を発表するわね! これは所謂予選よ。ここで多くの者達が篩にかけられて脱落して涙を流すわ。その第一種目は——これよ!」

モニターには『障害物競走』と表示された。

そして説明を受ける。

このスタジアムを一周して帰ってこれたものが次の競技の切符を掴む。

だが道中であらゆる障害が行く手を阻むために、それを自らの力で乗り越えてゴールして見せよ！

コースさえ守れば何をしても構わないバトルロイヤル。

ようするに個性で戦い抜けという訳だ。

「それじゃ全員位置について！ スタート!!」

ミッドナイトの言葉によって一斉に走り出す、経営科以外の10組ものクラスの選手達。

だが、走り出した途端に地面が一斉に凍り始めて足を捕られるものが多数でてしまっていた。

「わりいな……さっそくふるいにかけてさせてもらおうぜ」

一番ダツシユを決めていた轟が先んじて出ていた。

だが、そうは問屋がおろさないとばかりにA組の生徒達は各々でこの攻撃が来ると読んでいたために地面から跳んでいた。

出久もその自慢の脚力ですぐに飛び跳ねて躲していた。

「そう上手くいかせねえよ半分野郎!!」とは爆豪のセリフである。

それを聞いて轟は内心で予測していたために慌てずに先を走っていく。

しかし、突如として前方を立ちふさがる物が出現した。

それは、入試試験でのOP仮想ヴィランの大群だった。

峰田がそれでどつきを食らって跳ね飛ばされていたが些細な事である。

それでも、轟にはなんの障害にもならないと感じたのかすぐに仮想ヴィランを凍らせて先に進んでいた。

他の生徒達も轟の作った道を通ろうとしたのだが、重さで倒れようとしている仮想ヴィランに、

「おおおおおー！ー！？」 あの野郎！ 潰されちまうだろう！？」

「轟の野郎！ それも狙いか！？」

と、個性ただ被りの切島とB組の鉄哲徹鐵が来るであろう衝撃に耐えようとしたその瞬間だった。

背後から一人の影が飛び出してきた。出久だった。

「爪牙……一閃！！」

出久がその倒れてくる仮想ヴィランをもう鋼以上も切り裂く爪で八つ裂きに切り裂いていた。

それをただブーツと見ていた切島に出久が話しかける。

「大丈夫!? 切島君！」

「あ、ああ……ありがとな緑谷」

「よかった……それじゃ僕は先に行くね！ 高速移動!!」

切島に安堵の表情を浮かべた後に出久は轟に追いつくために高速移動で先を進んでいった。

出久が通る先々では仮想ヴィランが次々と自慢の爪で粉々に切り裂かれていつているのだ。

それによって一直線に通る道が出来上がっていたために、

「すげえな……。さすが入試主席の力だな。まあ人にはともあれ、これで道が出来たぜ！」「緑谷君に後れを取るな！」「さっすが緑谷！」

と、次々と主にA組の生徒達を筆頭に先を進んでいく生徒達。

計らずして出久は人助けを行っている結果になった。

『おいおい……しかし、あの緑谷の爪攻撃強すぎじゃね……？ あれでも入試の仮想ヴィランなんだぜ？』

『緑谷の実力なら十分じゃないか？ 入試でも破壊していたしな……あれでもほんの一部の力なんだから未恐ろしい』

プレゼント・マイクの隣で一緒に座って解説している相澤だった。

その解説を聞いていたヒーロー達も、

「あの爪は鋼をも切り裂くのか」「見たところ爪は伸縮自在な感じだな」「強度も相当ある

だろうな」「エンデヴァアの息子もすごいが、あの子もすごいな」

と、もうすでに分析を始めていた。

「B組や他の生徒達もそれなりに速いが……」

「だが、様々な困難に一度晒された経験が今も活かしている。A組の奴らが抜きんでているな」

相澤の言葉は的を射ていた。

もうほとんどのA組の生徒達は第一関門を突破していたのだ。

そして待ち受ける第二関門は落ちたら失格！『ザ・フオール』。

綱を渡って障害を駆け抜けろ！

だが、ビル四階相当のものをも飛び越えることが出来る出久は轟に追従しながらも綱など使わずに足場から足場へと跳びはねていた。

『おーい……綱が意味を成してねーぞ？ 猫って普通、あんなに跳躍力ってあるっけ？』

『話によれば個性が出てからすぐにビル四階相当はジャンプ出来たとか言う話だ』

『マジで……？』

ある意味呆れているかのような会話。

『おおっと！ 轟と緑谷のデッドヒートかと思われたがそこに爆豪が二人に追いついた！』

『あいつはスロースターターだからな。そろそろ上がってくる頃だと思ったよ』

「デクに半分野郎!! いつまでもいい気になってんじゃねーぞ!!」

「かつちゃん!」

「来たか爆豪……」

それによつてほぼ三人が並ぶように走り出して、もう後続との距離は結構離されていた。

『とにかくにも、これでもう残すは最終関門だー! 内容は一面地雷原! 怒りのアフガンだ!』

見渡す限りの地雷原。

これをどう突破するかが鍵になってくるのだが、出久は走りながら弱点の猫耳を押さえつつ大きく息を吸い込んでいた。

それを見て即座に前に出るのはやばいと感じた轟と爆豪は左右に分かれた。

そして、

「にゃあああああー!!!」

出久のハウリング・インパクトがさく裂し、前方の道に埋まっている地雷原を悉く破壊しつくした。

「手間が省けたな……」

「行かせねえぞデクう!!」

またしても三人が一齐に並ぶように走り出す。

『これはまた……俺のシャウト並みの威力じゃねーか。おまけに後続にも道を作ってあげている辺り見上げた人助け精神じゃねーか緑谷！ イレイザー、お前のクラスの奴らはスゲーな!』

『勝手に強くなつていつているからな……』

そして最後の一直線。

ここで出久は本気を出した。

「高速移動……二倍速!!」

「あっ!? 待ちやがれデク!!」

「ツ！ 追いつけない!」

先程よりさらに加速した出久に、爆豪と轟はそれぞれ個性を最大限に使って追いつこうとするが、それでも出久の足には追いつくことが出来ずに、

『選手宣誓での宣言通り、最初にゴールにたどり着いたのは……緑谷出久だー!ー!ー!ー!』

それで一気に観客が歓声に沸いた。

この時点で出久は出せる力を最大限に使用して一位を勝ち取った。

爪による切り裂き、脚力による足場から足場への驚異的なジャンプ力、地雷原もその

口から発せられる衝撃波によって悉くを破壊……おまけに人助けも実践しているというナイスプレー。

ヒーロー達がそれで感心している中で、早速この競技に参加しないで見学していた経営科が活動をしていた。

「彼女の数々の個性はすごいな……」「ああ。エンデヴァアの息子にも負けていない」「彼女を売り込むと仮定してどうやるかさっそく話し合おうじゃないか」

と、すでに考えが違うところにシフトしている辺りさすが経営科。

オールマイトも聞き耳を立てていたために、

「(さっそくやっているな!)」

と感心していた。

「(とにかく、緑谷ガール……人助けもしながらの一位通過おめでとう。だがまだ本番はこれからだぞ?)」

オールマイトが見る先では後からゴールしたお茶子達に囲まれている出久の姿があり、他には爆豪が悔しそうにしていたのも印象的だった。

NO. 021 第二種目・騎馬戦チーム決め

会場はすでに大盛り上がりであった。

出久はもちろんの事、エンデヴァーの息子である轟焦凍と怒涛の接戦を繰り広げた爆豪勝己。

この三人がもうすでに複数のヒーロー達のスカウト候補にエントリーしているくらいだからだ。

そんな中で、

「二位は緑谷さん、二位は轟君、三位は爆豪君……それから42位までの結果はこんな感じね」

モニターに各順位が表示される。

それを見て爆豪が、

「デクならともかく半分野郎にまで負けるなんて……ッ！」

と、少々……いやかなり頭にきていた。

そんな爆豪になるべく今は話しかけない方がいいだろうと思った出久は黙ってミツ

ドナイトの話を聞いていた。

「次からが本戦よ！ みんな、気張っていきなさい！ そしてその内容は——これよ！」

モニターには『騎馬戦』と表示された。

一同はそれで少し考え込む。

個性ありで騎馬戦とはどうやればいいのかと……。

だがそれを説明しない程薄情ではないのでミッドナイトは説明していく。

そして話を聞いていく内に、出久の表情は緊張に包まれる。

なんですか？

そう、一位の選手にはポイントが1000万も振り込まれるからだ。

どうぞ狙ってくださいと言わんばかりの点数に一瞬にして全員の視線が出久に集中する。

「ふえっ……」

それで猫耳と尻尾がピンと逆立ってしまった。

そんな出久のあざとい姿に男子女子も含めて何人かがハートを射抜かれていたのは、まあ話さない方がいいだろう……。

そんな感じで騎馬戦のメンバーを決めるためのタイムが設けられたのだが、出久はす

でに困っていた。

「(組もうとすると避けられちゃう……)」

出久が誰かに声をかけようとすればフイツとそっぽを向かれてはまた落ち込むを繰り返すという状況。

そんな光景を何回も繰り返していればさすがに出久も自身のポイントが障害になっているのは分かるというもの。

………実際は、出久が誰かに声をかけようとすれば緊張からか猫耳と尻尾が逆立ったままで、断られるとシユン……と垂れ下がるという、猫好きからしたら堪らない光景が広がっていた。

そんな出久の姿に客観的に見学していたプロヒーロー達は、

「あの子、いい素材持つてるわ……」「やつぱり猫耳つて至高よね」「お持ち帰りしたいなあ……」

と、同志が同志を呼ぶ感覚を味わっていた。

それは生徒達も同じくでもうなんとか堪えているという感覚だった。

主に、周りには隠しているが猫好きの心操人使も、そんな出久の光景を目にして利益より先に優先してしまいかねない感情に悩まされていた。

そこに、

「デクちゃん！ 私と組もう！」

お茶子がそう言ってきたくれたのだ。

それには出久も嬉しくなつて、だが考える。

「で、でも……僕と組むと絶対狙われちゃうよ？ 特にかつちゃんとか、かつちゃんとか、かつちゃんとか……」

「デクちゃん、どんだけ爆豪君の事怖いの……？」

大丈夫、デクちゃんが本気で逃げたら

だれでも捕まえられないって！」

「そう、かな……？」

「うん。それに、仲いい人とやった方が楽しいよ！」

「麗日さん……！」

それでまたしても出久とお茶子の間で不可視の空間が出来上がっていた。

それに目敏く反応する者は今はいないがそれでも注目を浴びるのは仕方がない事で

……。

それから出久は頭の中で考えていた人に声をかけた。

相手は飯田だった。

「緑谷君……？ 俺と組みたいのか？」

「うん」

出久はそれで自身の考えている戦法をお茶子を交えて話し合う。

その内容は普通なら納得いくものだと言った。飯田も考えた。

だが、今回は勝手が違う。

「すまないが、緑谷君。今回ばかりは断らせてもらっても構わないか？」

「えっ……」

それで少し悲しそうな表情になる出久。

そんな出久の顔を見て飯田は弁解するかのようによく言う。

「勘違いしないでくれ。もちろん緑谷君という可愛い女子に頼まれたら普通なら断らないさ。だが今回はライバルとして緑谷君と対峙したい。入試から今まで事あるごとに俺は君に敗北をしてきた。だから今回は挑戦者として君と戦いたいんだ」

「飯田君……うん、わかったよ」

「わかってくれたか。それに、実はもうメンバーは決まっているんだ」

飯田が進んだ先には轟、八百万、上鳴の三人の姿があった。

轟の視線が出久を見据える。

絶対に勝つという気迫が感じられるからだ。

「デクちゃん、どうしようか……」

「うん……」

それで二人で考え込む。

そこに一人の女子が出久達に近づいてくる。

「もし、よろしかったら私と組みましょう！ 1位の人!!」

「わっ!?!」

出久とお茶子はそれでびっくりした。

それに構わず女子は紹介をしってくる。

「私はサポート科の発目明です！ 宣誓の時も目立っていましたから貴女と組めば私のベイビー達の事も大きく宣伝できそうですので利用させてください！」

「あ、あけすけだね……」

「はい。それはもう……」

それから発目は自身の作り上げた作品の数々を出久達に紹介していく。

出久はそれでサポートアイテムについても詳しく調べている経験があつてすぐに発目とは気が合っていた。

話に加わることが出来ないお茶子は少しだけ拗ねていたけども……。

「これでは防御力がある人がいいんだけど……必然的に僕は騎手になるからスピード戦には加われない。かと言ってハウリング・インパクトは妨害行為になりそうだから使えないから、だから後は……!」

それで出久は周りを見回してまだ残っている生徒を探る。

そしてついに相性がいい人物を見つけた。

「常闇君。僕達と組んでもらっても構わないかな?」

「緑谷……? ふむ、理由を聞こうか」

「うん。常闇君には前に入ってもらいたい。そしてほとんどを防御に徹してほしいんだ」

「ほう……? なかなかいい選択じゃないか」

「えっ?」

それで常闇は自身の個性とその弱点を教えてくれた。

その内容を出久は吟味して、発目のサポートアイテムとお茶子の無重力の個性を合わせ、

「うん。これならいけそうだね」

「考えは纏まったようだな。緑谷、俺を選んだからにはうまく使ってくれよ?」

「任せて!」

出久達がメンバーが決まった事によって、こうして盤石とは言えないが防御と逃げ方面に関してはかなりのパワーを発揮する面子になった。

そこにミッドナイトがチーム決めタイム終了の声を上げる。

『さーて、ついに始まるぜ！ 関の声を上げろ！ 今から激しい戦いが幕を上げるぜ!!』
出久達はそんなプレゼント・マイクの声を聞きながら、

「麗日さん！」

「うん！」

「発目さん！」

「はいー！」

「常闇君！」

「ああ！」

「三人とも、よろしくね！」

こうして騎馬戦が始まろうとしていたのであった。

出久はまだみんなに話していない能力も今回は使っていないかと考えていた。

NO. 022 第二種目・騎馬戦開始!

騎馬戦のチーム分けが決まり、ついに戦闘が始まろうとしていた。

出久達ももう攻めてこられると思つてすでに身構えていた。

常闇の黒影ダークシャドウも前面に出して、サポートアイテムもしっかりと装備している為に準備は万端!

『3……2……1……スタート——!!』

というプレゼント・マイクの声とともに一斉に出久達に突っ込んでくる生徒達。

それは爆豪も例外ではない。

「デク!! おめえから必ず取るぞ!!」

ともう血気盛んに突っ込んでくる。

「追われしものの宿命さだめ、選択しろ緑谷!」

妙に中二っぽいセリフの常闇に、でも今は気持ちは本気モードの出久は「うん!」と可愛らしく返事をした。

「もちろん最初は逃げの一手だよ! 時間を稼ぐんだ!」

「了解!」

それで動こうとする出久達騎馬だったが突然地面に足が沈んでいく。

「くっ！ 誰かの個性！ 麗日さん、発目さん、避けて！」

「うん！」

「はい！ 存分に使ってください！」

出久は背中のブースターを展開して沈む地面から逃れて、すぐに出久が爪を伸ばして遠くの地面に外れないように刺す。

「少しスピード着地するけど転ばないでね！」

そして爪を刺したまま地面まで一気に爪を縮めて行きその分加速して移動した。

「麗日さん！」

「うん！」

お茶子が足に装着しているホバーでゆっくりと着地する。

それを見ていたプレゼント・マイクと相澤はというと、

『なんと！ てつきり攻撃一辺倒だと思われていた爪をまるで鎖鉤爪のようにして遠くまで一気に移動した!?!』

『緑谷は頭の回転や発想がとてもいいからな。ああいう使い方もすぐに考えたんだろ
うな』

そんな説明が入る中、

「もう一回飛んで移動するよ！ 常闇君、索敵お願いね！」

「任された！」

もう一度空を飛んで地面から地面へと移動をして、常に黒ダイクシャドウ影で周囲を警戒して移動をする出久達。

これなら空を飛べない生徒は手も出せないだろう。

………例外はいるだろうけど。

「デク!! 空を飛べるのがお前たちだけだと思ふなよ!」

「げっ! かっちゃん!」

そこにはなんと爆豪が、騎馬もいないのに一人だけで爆破の勢いで飛んできた。

「ッ! 黒ダイクシャドウ影!!」

かろうじて黒ダイクシャドウ影で爆豪の爆破を防ぐが、まだ周りには知られていないがこれが黒ダイクシャドウ影の弱点だとはまだ気づかれないところだ。

そのまま爆豪は不発で落下していくが、それを騎馬の一人である瀬呂がテープを伸ばしてうまくキャッチしてもとの場所へと戻している。

「あれってありなの!」

「テクニカルなのでセーフよ!」

出久の叫びは無情にもミッドナイトによってセーフにされてしまった。

「くっ！ 空はまずい！ これからはなんとか地面だけで移動しよう！」
それで着地をした途端、

「ん!? デクちゃん、足が何か動かない!」

「えっ!?!」

お茶子の履いているホバーをよく見てみれば足裏に見た事のある紫の丸いモノ。

「これは峰田君の!」

「そうだぜ緑谷……っっていうか、常闇! てめえ何一人ハーレム築いてやがんだよ!!」
と、障子の腕に覆われながら血涙を流している峰田の姿があつた。

よく見れば一緒に蛙吹の姿も確認できる。

出久はその瞬間、即座に顔を逸らした。

遅れて逸らした個所に蛙吹のカエルの舌が伸びてきていた。

「ケロ。やっぱり反射神経がいいのね出久ちゃん」

障子の姿はまるでタンクのようにあの鉢巻きを取るのは至難の業だろう。

「(やばい! もうかなりの乱戦だ!)」

その通り、すでに鉢巻きを取られているものもいるがそれでも諦めずに特攻を仕掛けてくるものもいる。

無くすものがないのなら強気に動けるといふものだ。

それでまた爆豪が突っ込んできそうになったのだが、そこで物間のチームに取られて煽りに煽られて爆豪はそっちの方に集中してしまったために、とりあえず出久は爆豪の脅威から逃れることが出来たと安堵した途端、

「緑谷、来るぞ!!」

「!」

出久達の目の前には轟たちのチームが立ちほだかっていた。

「轟君!」

「取るぞ……緑谷」

そこから二チームによる激しい攻防が始まる事になる。

「(轟君はなぜか左側の炎は戦闘には使わない!　そこが突けるところだ!)　みんな、なるべく左側に重心を置いて!」

「ツ!　察しが早いな……さすがだな」

轟が氷しか使ってこない事を察しているのか、出久はそれで三人に何度も指示をしていき、避ける避けるの防御姿勢を取る。

途中で突っ込んできた他の生徒も轟達の攻撃ですでに凍り付いていて、さらには囲むように氷のバリケードが展開されている。

ホバーにバックパックも壊れた今、出久達に勝機は薄い。

だが、出久はここで、

「それじゃ使えるようになってから隠していた力を使おうかな！」

出久は手のひらを前に出して集中する。

そこから出てくるのは燃える炎。

「なにっ!？」

「バカなっ!!」

轟と会場で見ていたエンデヴアーが叫ぶ。

当然だ。

今まで炎を使うものは轟だけだったのに、出久がそれを使っているのだから。

「緑谷、その炎は……」

「うん。最近使えるようになったのが分かった猫又の炎だよ！ えいっ！」

そう言いながらも出久は凍り付いている道を炎で吹かして溶かして逃げ道を作ろうとしていた。

「させねえ！」

「轟君、落ち着くんだ！ まだ時間はあるのだから！」

轟がまた氷を出そうとしたが、そこで飯田が妙案があると言って一気に駆けようとする。

それに気づいた出久は悪寒に従って身構える。

「これを使ったら俺はもう使いモノにならなくなる! 必ず取れよ!」

そう言っただんと吹かす音が聞こえてくる。

出久の猫耳にもしつかりと駆動音が聞こえてきていたために、

「させない! 変化!!」

出久もさせまいと、煙幕で四人を包み込む。

またあの時の大猫に変化するものだと思つた轟は、

「愚策だな緑谷。そんなんじや地面に落ちて失格になるぞ?」

「いくぞ! レシプロバースト!!」

煙幕にも負けずに鉢巻きの位置は把握していた轟は、飯田の必殺の超加速を使いながらも出久の頭の鉢巻きを取つた……かのように思えた。

だが、

「手ごたえが……ねえだと!」

出久達を通り過ぎた轟達は慌てて振り返る。

そこには、尻尾は二股なれど、普通の子猫の姿になっていた出久の姿があった。

「なっ!!? 縮むことも可能なのか!」

「にやっ! (その通り!)」

そしてすぐにもとの姿に戻る出久。

「この子猫モードはそんなに消耗しないから本来なら潜入任務向けの力なんだけどね！」

「デクちゃん！ 後でまたなつて！ 触らせて!!」

「緑谷も己の中に獣が潜んでいたか……」

「いいですねー!!」

と、出久達はそれでまた逃走を開始していた。

さっきも言った通り、飯田は一度使ってしまったえばエンストを起こしたかのように排気筒から煙を吹かせてしまっており、移動に難が出てしまっていた。

『緑谷、なんだその個性!? 炎も使えたり猫になれたり幅が広いな!』

『一応使えるようになった能力として体育祭前に緑谷から申請があつたぞ?』

『うっそ！ 見せて!!』

『後にしろ。それよりそろそろ時間だ』

『そうだった！ 時間は後5秒！ 4……3……2……1……タイムアップだ!!』

プレゼント・マイクと相澤の漫才みたいなやり取りもあつたが出久達はなんとかキープして逃げ切れていた。

「ふう………なんとかなつたね」

「よくやったぞ緑谷。この戦は我らの勝利だ」

「デクちゃん! 猫になってなって!」

「ふふふ……これで私のベイビー達の紹介が出来そうですね」

と四人が勝利を讃えあっている中で、

「くっ……取れなかったか」

「すまない轟君……」

「いや……。もう過ぎた事は変わらねえ。それでも2位になれたんだ。良かったと思おう」

「轟さん……」

「ウェーイ……」

轟はそれでも出久の炎の能力を使う光景に何とも言えない憤りを感じていた。

他にも3位には爆豪チームがなんとか物間から全部奪い取って勝利をしていたがそれでもやるせない表情で、

「デク! あんな力まであったのか!」

「すげえな緑谷……あの轟に一泡吹かせたぜ」

「あいつも才能ガールか? 多数の能力といい、たった一年で使いこなすところといい……」

「緑谷、なんかすごい数の力使えるねー」

そして4位の心操も思う。

「(やっぱり才能って奴か……いや、努力の才能って奴なのか？ 普通の鍛錬じゃ使いこなせねえぞあんな複数の個性……)」

それぞれの思いが交錯する中で試合は終了となり、そのままお昼休憩と相成った。当然出久はみんなに詰め寄られる事になるがそれはまた今度……。

NO. 023 お昼と轟の過去

大盛り上がりで終了した騎馬戦。

それを見学していたヒーロー達は口々にある事を言う。

「出久ちゃん！ 本物の猫になったわ！ 可愛い!!」「あれは確かに彼女の言うように潜入任務向けだな……」「轟君の反応からして巨大化もできるのか……?」「エンデヴァーと同じ炎の能力も使ったぞ?!」

と、また他の選手の個性もそれぞれに吟味しながら考察が行われていた。

所々で噂されている出久はというと……食堂で無理やり猫姿にさせられていた。

「デクちゃんの毛並みは最高だね!」

「その、緑谷さん……ねこじやしを創造してみたのですが、どうでしょうか?」

と、主にA組の女子にしつちやかめつちやかにされていた。

この状態だと猫の言葉しか喋れないのでどうにもならないのである。

おまけに八百万の創造したねこじやしによつて出久は野生本能が刺激されていて何度も飛び跳ねているではないか。

それを見てさらに癒される一同。

そんな癒しの空間にとある男子が顔を出してきた。

「緑谷、飯食う前に少し話があるんだがいいか……？」

轟がそう言ってきたので出久はもとの姿に戻った。

それでお茶子達が「あゝ……」と残念そうな溜息を吐いているのは仕方がない事だ。

「轟君、うんいいよ。それでなに？」

「ああ……少し場所を移動しようか」

「……？ うん」

出久はそれで移動する轟の後に着いていく。

それで芦戸とかこういう展開好きそうな子達がなんの話をするんだろうね？とキヤイキヤイしていたり。

場所は移動して裏の道に続く入り口で二人は向かいあう。

「それで……なにかな？」

「……ああ。こういう話はお前には少し重たい話になるが聞いてもらいたい。なぜかお前には話しておかないといけないって気がしたんだ」

それで轟は話す。

己の過去の事を。

親であるエンデヴァーはオールマイトを超えるヒーローを作るために金と実績で母親の個性を手に入れるために個性婚をした事を。

それで複数の子供が生まれて二人の個性が同時に発現したのが自分だと。

さらに左側の火傷は母親から「お前の左が醜い」と言われ煮え湯をかけられて出来た事も……。

「それって……」

「ああ。酷い話さ。親父のただの自己満足だけで俺は生まれたんだからな。だからって事は関係ないんだが緑谷が炎の能力を使った時に見当違いのどうしようもない憤りを感じちまった……」

「轟君……その」

「謝らなくていい。お前はお前でその力を普通に使ってくれて構わない。だけど、俺は親父の“個性”は使わない。右^{*}だけでトーナメントを勝ち進む。それだけをお前に知っておいてほしかったんだ」

「なんで、僕にその事を……?」

「なんでかな……? ただお前の選手宣誓に感化されたって訳じゃねえが、一年前まで無個性だったのにどうやったらそこまで強くなつたのか知りたくなつてな。それで交換条件ってわけじゃねえけど……よかつたらお前を鍛えてくれたのは誰か教えてくれ

ねえか？ 俺の予想が正しいならこんな短期間でそこまで上げてくれるのはどうやっても該当するのは一人だけだからな。この間見たが一緒に昼飯食べるような仲が普通な訳ねえしな」

「っー」

出久は思った。

ワン・フォー・オール以外の事は大体見透かされていると。

それで轟の事情を聴いた後でどう答えたらいいかと悩んでいるがなかなかいい回答が思い浮かばない。

「その……」

「別に話せないんならそれでも構わない。だが、俺の予想が正しいんだつたら……俺はお前にも勝たないといけない。氷だけの力だな。時間を潰しちまって悪かったな」

それで轟はその場から離れて行こうとするが出久が声を出す。

「轟君！ うまく言えないんだけどね……僕も君には負けないよ。いろんな人たちの助けがあつて今の僕があるんだ……だから。それにできることなら轟君にも全力を出してもらいたい。そうすればきつと君の悩みも解決できるかもしれないから」

「……ああ。右だけでの全力で相手をしてやるよ」

「そうじゃないの！ エンデヴァアの個性を引き継いでいたとしてもそれはもう君の――」

……

大事な事を出久は伝えたかったけど、もう轟はその場を離れて行ってしまっていた。こんな時に大事な事をしっかりと伝えられなかったことに、出久は少しだけ後悔の念を感じていた。

さらにはそんな二人の会話を爆豪が隠れて聞いていた事など、出久達は知る由もないだろう。

そんな会話をした後で食堂に戻った出久はお茶子に少し心配そうな表情でこう言われた。

「デクちゃん。轟君となにかあったの……？ とっても深刻そうな顔してたよ」

「うん、まあ。でもこれは親しい人にも話せない内容だから、僕だけでどうにか解決してみるね」

「思いつめないでね？ いつでも相談に乗るよ」

「ありがとう、麗日さん……」

どうにかそれで笑顔を浮かべるくらいには、気持ちも回復した出久。

そこに峰田と上鳴がやってきた。

「おい緑谷に麗日！　なんか相澤先生からとある話が来てんぞ！」

「そうそう。相澤先生を怒らせると怖いから従っておいた方がいいぜ！」

二人はそれで怪訝そうな表情を浮かべながらも内容を聞く。

出久は思った。

「(相澤先生、本気ですか!?)」と……。

それからお昼も終わりレクリエーションが始まったのだが、そこでなんと――A女子全員がチアガール姿で登場していた。

それにはさすがの相澤も呆れの声を上げて「なにしてんだ、あいつら……。」と呟いていた。密かに出久の姿に何かの感情を覚えていたが顔には出さないでいる。

ちなみにしっかりと出久は尻尾穴も完備しているのでチア服を創造したヤオモモは仕事が出る女である。

「やっぱり峰田君の策略だったか……先生がこんな事を言うわけないもんね」「何てこと……どうしてこうも峰田さんの言葉を信じてしまうのでしょうか」

どんよりとした空気が女子たちに漂う。

葉隠なんてもう自棄になって踊りだしている始末だ。

「とんだハプニングだけど、その前にトーナメント決めでもしましょうか！」

ミッドナイトがそう言ってくじ引きで決めようとしたのだが、そこで尾白とB組の生徒が辞退を申し出たのだ。

理由は騎馬戦での出来事をほとんど覚えていないから出る権利がないと言う。

それに皆もせつかく見てもらえる機会なんだから思い直せというけれど、プライドが許さないという事。

主審のミッドナイトがそれで、

「そう言う青臭いのは好み!!」

といって受諾して二人は辞退と相成った。

代わりにB組の鉄哲徹鐵と塩崎茨が入る事になった。

「それじゃ決めるわよー！」

各自でくじを引いていき、出久の最初の対戦相手は心操人使になった。

二回戦にも進めれば轟か瀬呂のどちらかに当たる事になったので、出久はもし一回戦を勝ち抜いて、瀬呂が負けて轟と戦う事になったら、先ほど言えなかった事を伝えようと決心したのであった。

こうして出久はその後にレクリエーションの間に心操対策として尾白に話を聞いて

いた。

一回戦から波乱が起きそうな幕開けである。

NO. 024 心操戦。苦しい戦い

出久はレクリエーションの時間の間に尾白と部屋で騎馬戦の時の話を聞いていた。
……チア姿のままです。

それに尾白は多少顔を赤くさせながらも話す。

「緑谷。とにかくあの心操という奴の声には耳を傾けるな」

「傾けるな……？ 騎馬戦の時になにかあったの？」

「ああ。さっきも言ったけど騎馬戦が始まった時にあいつの声を聞いて返事をした以降、もう記憶がぼぼないんだ。ここからさっするにあいつの個性は……」

「洗脳の類……かな？」

「多分そのまんまの個性だと思う」

洗脳と言っても多岐にわたる。

だがそのまんまの洗脳なら対策はもう決まっている。

「つまり心操君がなにかを言ってきたても無視を決め込んでいけばいいんだね？」

「そうだ。緑谷なら余裕で可能だろ？ そして速攻で仕掛けて場外にでもしてしまえば

いい」

「そうだね。ただ、心操君はきつと僕になにかしらの揺さぶりをかけてくると思う。そこをどう凌ぐかで対処は変わってくるかな……?」

「そうだな。とにかく頑張れよ緑谷」

「うん!」

「ッ……!」

笑顔を浮かべながら答える出久の表情に尾白は速攻で心を奪われそうになったがなんとか耐えた。

もつとチア服が際どかったら危なかっただろうと後に尾白は語る。

それから時間は経過してセメントスによる闘技場作成もほぼ完了し、ようやく試合が始められる。

『セメントスサンキュー! そんなじゃそろそろ始まるぜ! やっぱり最後はガチンコ勝負つしよ! 己の力を信じて最後まで戦い抜けよ!!』

プレゼント・マイクの叫びが聞こえてくる中で出久は会場に入る前の通路で呼吸を整えていた。

そこに背後からオールマイトがやってきた。

「緑谷ガール……ここまでこれで私としても嬉しい限りだよ」

「オールマイト……」

「だからな。ここまで来たんだ。最後まで駆け抜けてみるよ！ 君なら十分やっつけていけるぜ！」

「はい！ 頑張ります！」

オールマイトに見送られながらも出久は会場の中に入っただけだった。

『それじゃ一回戦を始めるぜ！ まずは障害物競争や騎馬戦で優秀な成績を収めた多分

1-Aの人気者、ヒーロー科、緑谷出久！』

それで会場内のヒーロー達も、

「待ってました！」「出久ちゃん、頑張つて！」「応援してるぞ！」

と次々と声をかけられていって少し……いやかなり恥ずかしい気持ちになっている出久。

『VS 対していまのところ目立った活躍はしていない能力は未知数の男子！ 普通

科、心操人使！』

プレゼント・マイクがこの戦いでこの戦いのルールを説明している中で出久と心操がそれぞれで向かい合う。

まだ試合開始のコールは言われていないがすでに心操は出久に話を振ってきていた。

「なあ緑谷……もうここからは心の勝負なんだよ。将来の為には形振り構っていちやいられない。だから女だろうと攻めていくぜ」

「……………」

出久はそれを無言でなんとかやり過す。

「そういえばさっきの辞退した尻尾の奴だが、プライドがどうか言っていたが、チャンスをドブに捨てるなんてどうかしているとは思わないか？」

「……………ツ!!……………ツ!!」

出久は必死に口を押さえて耐える。

その反応にさすがの心操も対策がされていると気づいた。

だから出久に対してのあまりしたくはないが悪手を使わせてもらうことにした。

「……………とところで、性転換したつていうが、男子から女子になった気分はどうだった

……………？ さぞ自分がだんだんと女になっていくなんて怖気が走るだろう……………？」

「ツ!! そんな事はない!! 僕はそれでも僕……………」

出久はそこまで動きが止まってしまった。

「これで、終わりだな……………わりいな。お前の弱みを突かせてもらった」

『おおつと!! 最初の戦いでいきなり緑谷、完全停止!? これはどういうこつた!!』

今の出久には周りの声が頭に霽がかかったかのように聞こえてこない。

そこに心操の声が聞こえてきて、

「そのまま振り向いて場外まで出て行ってくれ……」

「……………」

出久はそれで振り返ろうとして、だがそこで出久の動きがまた止まる。

その反応にさすがに心操も焦ったのか、もう一度同じセリフを言うが出久の身体は命令に逆らっているかのようにプルプルと震えている。

「バカなっ?! 俺の洗脳に耐えているだ?!」

心操は出久の精神力の強さにひどく驚いていた。

そして今の出久の頭の中では謎の人達の影と、それにとある猫の姿が映し出されていた。

謎の人達は何も語らないが何も言わなくても目が語っていた。

『こんなところで諦めていいはずがないだろう』と……。

さらには猫の方がこう言ってきた。

『イズク……諦めちゃダメだよ。君は私のヒーローなんだから……だからこんな洗脳なんかには負けないで!』

その一言に、出久の精神は急速に靄が晴れるように開けた。

そして出久はワン・フォー・オールを起動して腕を思いっきり地面に叩きつけた。

出久の拳で盛大に陥没するステージ。空へと巻き起こる嵐……。

そんな光景に会場の全員は驚いた。

まるでオールマイトのような、そんな錯覚を覚える。

ジンジンと叩きつけた拳が痛む感覚を味わいながらも出久は意識を取り戻して心操の方へとゆつくりと向き直る。

「く、羨ましいな！ たとえ一年しか鍛える期間がなかったとはいえそこまでの威力を発揮できるなんてな！」

「……………」

出久は答えない。

ただひたすら高速移動をして心操の服を掴んでそのまま身体強化・怪力でステージ場外まで投げ飛ばした。

心操は抗える術などなくそのまま場外まで落ちて尻餅をついていた。

「心操君、場外！ これによって緑谷さんの二回戦進出！」

『意外と地味だったけどこれにて終了だ!!』

そして再度二人は向かい合って、

「……………まあ、お前の気にする事を言っただけ悪かったな」

「いいよ……………苦しかったのは本当の事だったから。それより心操君はどうしてヒーローに……………」

「なりたいたいと思ったんだから仕方がないだろう……………」

それを聞いて、もし個性が目覚めていかなかったら出久にも何か言えたのだろうかけど、今では彼に話しかける言葉は少ない。

だが、それは代わりに同じ普通科のクラスの生徒達が彼の事を褒めていた。

『お前は普通科の星だよ』と……………。

それだけで心操は少しだけでも嬉しい気持ちになった。

ヒーロー達も心操の個性は対ヴィランに使えろと言っていたので、見てもらえている事がなによりも将来の役に立つことになる。

「確かにヴィランみたいな能力だろうよ。それでも俺はヒーローとして駆け上がってやる。いつか絶対にヒーロー科に上り詰めてお前らより立派なヒーローになってやる……………それまで足元揃われないように注意しておけよ？ 入試主席さん？」

それだけ言い終わって心操は会場から出て行った。

出久はただただ苦しい戦いだっと思った。

通路に戻るとそこにはまたオールマイトが立っていた。

「オールマイト……僕、僕……」

「いいんだ緑谷ガール。苦しかっただろう……だがこれも糧に君はまた成長できる。まずは勝利を喜ぼう」

「はい……」

「それから少し拳をリカバリーガールに見てもらおうか。きっとフルカウル制御時以上の力を出していたと思うからね」

「わかりました」

こうして出久にとって苦しい第一回戦は終了した。

それとさっそくステージが壊れたので修復作業で少し時間を使うとの事であった。

NO. 025 フォウという猫の恩返し

一回戦を終えて出久はオールマイトに連れられながら医務室へと訪れていた。

リカバリーガールにステージを陥没させたときの拳の傷つき具合を見てもらっていたのだが、

「うん……これといって激しい損傷はないさね。綺麗な手だよ」

「ほっ……ありがとうございます」

「それよりあんな力任せに力を振るつたのに腕に何も損傷がないのが気になるねー。あなたはと思う？ オールマイト？」

「そうですね」

リカバリーガールにそう聞かれて答える今のオールマイトの姿はトゥルーフォームである。出久もいるのに。

これに関してはリカバリーガールが他の生徒達と違って出久達の関係を知っている為に隠していない節もあるのだが、出久もこれに関してはもう知られているという感じ

で黙って聞いていた。

「ところで緑谷ガール。あの洗脳をどう掻い潜ったんだい？ 私でも嵌れば容易ではないものだが……」

「はい。その……幻覚が見えたんです」

「幻覚……？」

「はい。僕の目の前に八人か九人くらいの影と、それと一匹の猫の姿……影の人達はなにも話しかけてこなかったんですけど目で言っていました。『こんなところで諦めるな……』と。」

それと一匹の猫の方がこう言っていました。

『イズク……諦めちゃダメだよ。君は私のヒーローなんだから……だからこんな洗脳なんかには負けないで！』って……」

出久は二人にその内容を伝えると、オールマイトはうーん……と悩んでいた。

「そうか。私にも以前にそう言う経験はあったよ。おそらくワン・フォー・オールに宿っている先代の残留思念か何かだと私は思うな」

「残留思念……」

それで出久は拳を握りしめる。

それだったら先代の方々に感謝をしないといけないな、と……。

「それと猫の方はどうしても私では見当がつかないな。リカバリーガールは……?」

「そうだねえ……。そろそろ緑谷には話しておいてもいいかもしれないかもね」

意味深な言葉を吐くりカバリーガールに出久はなにかを知っているのか知りたくなかったので、

「お願いします、教えてください」

「わかったよ。その前に緑谷は5年前に自分で遭遇した事件は覚えているかい……?」

そう聞かれて出久はそこで初めて悔しそうな表情をする。

手で顔を覆いながら、

「忘れもしません……。動物を私欲を満たすために殺していたヴィランからとある猫を守ろうとして死ぬかもしれない重傷を負った事は……」

「緑谷ガール。そんな事があったのかい……?」

「はい、オールマイト。なんとか僕自身の命は助かったんですけど僕が守ろうとした猫は死んでしまつて、僕は一晩中泣き続けました……」

「そうか……」

小さい生命とはいえ命に変わりはない。

そんな死に遭遇してしまつた出久にオールマイトは自身の過去も思い出そうとして
いる時だつた。

「……………緑谷。一つ訂正を入れていいかい？」

「はい？ どこを訂正ですか…………？」

「私はあの時に緑谷を治療したものだよ」

「ええ!？」

出久は知らなかったために盛大に大声を上げていた。

まさか命の恩人がリカバリーガールだったなんてという思いだった。

「私はね、あの時必死にお前を助けようと努力はしたよ。でも、緑谷の傷はもう私の個性じゃ治せない程にズタズタだった。個性を使って回復させようにもその体力が緑谷にはほぼ残されていないなかったからもうどうしようもなかった…………。」

お前の母親には申し訳ないけど『今夜が峠だよ』と言ってしまったほどだからね…………」
リカバリーガールはそれですまなそうに俯く。

「でも！ それじゃどうして僕は今もこうして元気でいられるんですか!?! 後遺症が残っていてもおかしくはないのに…………」

「まだ続きがあるけどいいかい?」

「あ、はい…………」

そう言つて出久は椅子に座り直した。

リカバリーガールは過去を思い出すかのように空を見上げながら話す。

「ホントはね……緑谷が助けた猫はほとんど傷もなく健康体だったんだよ」

「えっ……」

「だけど緑谷がもう死ぬ寸前かのように息絶えだえだった病室を一回私は見に行っただよ。そこで不思議な光景を目にした」

リカバリーガールは話す。

出久の身体の上で猫は涙を流しながらもしばらくして自身の身体からまるで魂が抜けだすかのように白いオーラが出てきて出久の身体にスウーツと入っていったのだと。

すると奇跡でも起きたのか包帯があちこちに巻かれて痛々しい姿だった出久の身体の傷がどんどんと塞がっていったのだ。

2、3分もしないうちに出久の身体は治って呼吸も正常に戻っていた。

リカバリーガールは慌てて出久の傍らにいる猫を抱きかかえてみたが、もうすでに猫の身体は死んでしまったために冷えてしまっていた……。

『お前さんは……いったい』

猫に問いかけるがもう答えるものなどいないという事実のリカバリーガールは静かに涙を流した。

その猫の遺体はその後に嚴重に火葬をして埋葬したと話す。

「それが緑谷が健康体でいる正体だよ。その猫の個性だったのかもしれないけど今では

もう確かめようがないね。でも、今こうして緑谷は個性が出てそんな姿になった。だからもしかしたらその猫は今も緑谷の中で生きているのかもしれないね」

「なるほど……それで緑谷少年は緑谷ガールになったのですね。その猫の正体がまだわかりませんが、おそらく何かしらの特別な個性を身に宿していたために緑谷ガールに持つていた個性を譲り渡していたと……まるで私と同じ、だな……」

そう考察するオールマイト。

だがその話している内容は出久にはほとんど聞こえていなかった。

ただただ自分のために命を捨てた猫。

出久が付けた名前は『フオウ』。

彼女は今も出久の中で生き続けている……。その事実が出久にはとても嬉しかった。それで涙を流し続けていた。

「リカバリーガール……教えてくれてありがとうございます。フオウが今も僕の中にいるのかは分かりませんがもし今度話しかけてきた時は聞いてみたいと思います」

「そうかい。そりやよかったよ」

「それと影の中にオールマイトの様な人もいました。……それで僕は思いました。今の僕にはオールマイトだけでなくフォウの意思も宿っているんだから無様な結果は残したくないって……だからこの後の戦いも全力で挑みます！」

「頑張りなさい」

「はい！」

それで出久はみんなが待っていると行って観客席の方へと走っていった。

それを見送った二人は静かに、

「あんたもいたってさ……」

「いい事だと思えます……」

出久のこれからの成長にまた一つ大きな望みを抱いたオールマイトだった。

NO. 026 第一回戦の試合模様

出久の壊したステージの修復も終わって、いざ第二試合。

轟 VS 瀬呂の試合が行われようとしていた。

轟はステージへと向かおうと歩いていたがふと目の前の壁に寄りかかるように、父・エンデヴァアの姿があった。

轟は目障りだと言わんばかりに、

「邪魔だ……」

と、エンデヴァアに言い放った。

そんな轟の態度にもエンデヴァアは一切怯まずに、

「焦凍……醜態ばかりさらして無様だぞ」

「うるさい……」

「いいや。言わせてもらうぞ。たとえこの一回戦を勝てたとしよう。だが次のあの少女との試合は氷だけだと不利になるぞ」

「んなことはわかっている……だが、俺はてめえの個性は使わねえ」

「いつまで意地を張っている？ お前は最高傑作なんだぞ」

「……………てめえはそれしか言えねえのか？ 俺はなにがあっても炎は使わねえ」

「ココでは通用してもいずれば限界が来るぞ…………？」

「……………」

もうそれ以上は言葉は聞きたくないと言わんばかりに無視を決め込んで轟は会場へと入っていった。

そして始まる試合。

向い合う中で試合開始とともに瀬呂がテープを速攻で伸ばして場外狙いの先制攻撃を仕掛けたものの、イラついていた轟の大氷結によって一瞬で決着がついた。

ヒーロー達の「ドンマイ」コールが起きる中で、こうして出久との試合が決定したのであった。

続く第三試合。

上鳴電気とB組の塩崎茨との戦い。

上鳴は最初から放電を繰り返したが、塩崎の個性であるツルでとことん電気は外に逃がされて最終的にはいつも通りにウエイと言いながらツルに捕まってしまつて終了。

そして第四試合。

飯田と出久達と一緒に騎馬戦を勝ち抜いたサポート科の発目の戦い。

これはもはや戦いというよりプレゼンに近い形となった。

発目が用意したサポートアイテムを飯田が装備して、試合開始とともに次々と飯田を翻弄しながらもサポートアイテムを紹介していくという。

そして10分間をプレゼンに費やして満足したのか自らステージの外に出て決着。

飯田は「だましたな——!!」と叫びを上げまくっていた。

まあ、勝てたのだから結果オーライである。

第五試合。

芦戸と青山の戦い。

最初は青山のネビルレーザーで避けることに専念していたが、隙をついて近距離戦に持ち込んで自慢の酸攻撃でサポートアイテムを溶解してそのままグーパーで芦戸の勝利。

第六試合。

常闇と八百万の試合。

これは事前に八百万が武器を創造していたにもかかわらず、常闇の黒ダークシャドウ影による連続攻撃には歯が立たずにそのまま常闇の勝利となった。

第七試合。

これは切島と鉄哲の試合なのだが、互いに硬化と鋼鉄化というダダ被りの個性のためにはぼ殴り合いのために実力も拮抗していたためにダブルノックダウンと相成った。

これに関しては後に腕相撲で決着が行われて、鋼鉄化は鉄分を摂取しないと継続が難しいために硬化を維持してられる切島に軍配が上がり切島の勝利となった。

出久はそんなみんなの試合を必死にメモしながらも、やっぱりみんながみんなすごいな……と思いつつも、第一回戦最終試合であるお茶子と爆豪の試合のために、出久はお茶子に対策を教えようとしたが、ズルしたくないし真つ向勝負で戦いたいというお茶子の気持ちを汲んで送り出した。

だが最初の方は予想通り何度も爆豪の爆破に晒されて苦戦を強いられていたお茶子。そんな爆豪の女子に対しての苛烈な扱いにヒーロー達もさすがに見ていられなかったのか爆豪に酷いブーイングの言葉を何度も投げかけたが、そこで解説の相澤が、

『今、遊んでいるっていったのは何年目のプロだ？ 本気で言っているなら帰って転職サイトでも見ることで』

と、言い放った。

爆豪は決して油断をしていないので本気でお茶子と戦っている。

それだけ油断も出来ない戦いなのだという。

それは本当の事だった。

今まで爆破が続いていた爆豪の散らしたステージの破片をお茶子は空に浮かばせて、さらにはそれを最後まで爆豪に気づかせなかった。

そして準備が整ったお茶子は爆豪に捨て身の流星群を叩き落とした。

これでなんとかすれば勝てる！そう思っていたお茶子だが、爆豪はなんと空の破片全てを爆破させたのだ。

これにはさすがのお茶子も堪ったものではなく、そして爆豪もお茶子の事を認めただうに、今まで『丸顔』と呼んでいたのを初めて『麗日』と呼び、本気で挑もうとした。

だが最後にはお茶子の許容重量オーバーで動けなくなってしまうそのままリタイアとなった。

出久はすぐにお茶子のもとへと向かった。

初めてできた友達。

その人の心配をしないでいたら友達失格だ。

だが見に言ってみればあつげらかんと「負けてしまいました」と笑顔を浮かべているお茶子。

それでも無茶をしている事にすぐに気づいた出久はそんなお茶子の事を胸に抱き寄せて、

「麗日さんは頑張ったよ……大丈夫。今は僕しかいないから。だから……」

「デクちゃん……！　う、うえっ……」

お茶子はそこで出久の優しさに触れて涙を流した……。

そしてそんなお茶子から次は頑張つてね！と言われて送り出された出久。

出久が外に出た後にまた電話しながらの嗚咽の声が聞こえてきたために、

「麗日さんの分も僕が頑張らないと……！」

と、出久は次の試合を頑張ろうと決心した。

だが道中ではエンデヴァーが待つていた事に、出久は驚きとともに、エンデヴァーは出久の事を轟の成長のためのテストベッドと呼んだ。

エンデヴァー自身は出久の事を少しは見込んでいた。

同じ炎を使うという事で鍛えたら強くなるだろうと思うし、さらにはもしこのまま焦凍との仲がよくなれば、あわよくば……という打算や計算に基づく汚い思いもあった。

だから出久は少しだけ頭にきていたために、

「轟君はあなたの道具じゃない！ 轟君だって一人の人間です！ だからあなたの思う通りに動くのは癪ですけど、僕は轟君に言いたい事があります……それを言うためにも、僕は轟君に勝ちます！」

「そうか……まあ頑張りましたまえ」

エンデヴァーはそれでその場を去っていった。

出久は改めて轟に気づかせてやらないとという気持ちになり、ステージに向かっていった。

始まる第二回戦第一試合……。

向い合う出久と轟。

ここから壮絶な戦いが始まろうとしていた……。

それをテレビで見っていた死柄木弔は先生と呼ぶ人に、

『これから君の障壁になりえるかもしれない者達だ。しっかりと見ておきなさい……』

「先生、それは本気ですか……？」

『ふふふ。まあね』

かく言う先生と呼ばれた人物もとある事を考えていた。

「緑谷出久……彼女は、まさか……いや、そんなまさかな……あの子にそんな個性は与えていないはずだ。だから私の勘違いか……？」

そう言いながらも、だが、それでも出久に多少の興味を抱いていた。

NO. 027 衝突する出久と轟

『さーて、お待ちかねだ！ 本日の戦いで注目のカード！ 素朴だけど可愛い猫娘、ヒーロー科、緑谷出久！ VS その冷えた眼差しは何を映す？ ヒーロー科、轟焦凍!!』
プレゼント・マイクの叫びによつてまたしても観衆は大盛り上がりを見せている。

二人とも、今日の数々の種目で実力を見せてつてきたのだ。
この盛り上がりは当然の物である。

ただし、様々な力を見せてきた出久に対して轟はほぼ先制で凍り漬けにしてきているだけなので見栄えはどちらがいいと言う疑問は、まあ話さない方が吉である。

そんな中で出久と轟はお互いに目を合わせながら、

「轟君……この戦いで君に話したい事があるんだ。聞いてもらえるかな……？」

「なんだ……？ また左の事か？ その件はもう話したはずだが……」

「うん。でも、僕つて自分で言うのもなんだけど結構お節介焼きなんだ。だから……轟君には出せる力の全力で挑んでほしい」

「親父に何か吹き込まれたか……？ だが生憎とその手には乗らないぞ？」

「違うんだ！ でも……」

二人が戦闘が始まる前からすでに白熱している様子にプレゼント・マイクも気づいたのだろう。声を上げてきた。

『すでに両雄ともなにかしらの話し合いモードだ！ だけでもう始めさせてもらうぜ！?』

それでカウントに入るプレゼント・マイク。

「どう言われようが俺は使わない」

「意地でも使わせるよ！」

二人が構えた瞬間に、『スターーーーート!!』という叫びがなされた。

先に動いたのは……轟だった。

一回戦と同じく開幕でブツパをしてきたのだ。

『いきなりの開幕ブツパ！ これにはさすがの緑谷も!?!』

『いや、もうあいつはいないぞ』

そう、出久が立っていた場所にはすでに出久はおらず、気づけばステージ右側の方に移動しているのだ。

身体強化・怪力に脚力強化による瞬間移動、加えてワン・フォー・オール15%の三つの相乗効果によって出久はとてつもないスピードで回避を行ったのだ。

「早いな……炎は使わないみたいだが、だが次はねえぞ?」

轟は次は左右に広がるように氷を展開した。

これなら逃げられる場所はないと普通は思うだろうが、出久はそこでさらに空へと飛び跳ねた。

空へと昇っていく出久はその両手に爪を展開させて、さらには、

「爪牙……炎熱！」

『おおっと!? 緑谷、轟対策なんだろうが爪の個性に炎の個性を上乗せして炎上させた!』

『普通の爪だったら凍らされちまうからな。咄嗟に思いついたんだろうな』

二人の解説とおり、出久の両爪は炎を纏ってそのまま轟のところまで自然落下していく。

「くっ!」

轟は空に上がってしまえば後は重力によって落ちてくるだけだろうと出久にまるで突き出た氷山みたいな氷を展開した。

だが出久はそれも見越して燃える爪を構えて、

「そう上手くはさせないよ!」

押し迫って上昇してくる氷山を出久はそのまま爪を振り下ろして一爪のもとに切り裂き溶かした。

一気に氷が溶かされた影響で蒸気が発生するステージ。

地面へと着地した出久は速攻で轟のもとへと駆けた。

ただでさえ狭いステージの中なのだから出久の足ならばすぐに轟との距離を詰めることは可能だ。

だが、それでも轟は氷を展開して出久の接近を拒んでいた。

だが、先ほどよりも氷の出力の展開が弱まっていることに出久は気づいて、出久は足を止めて言う。

「……………轟君。威力が弱まっているよ？ それに体も震えているよ？ 個性だって身体機能の一つだから使い過ぎれば体が冷えてしまっていくってしまう。だけど、炎を使えばそれを解決できるんじゃないかな…………？」

そう話す出久の目は轟ばりに少し冷えていた。

「うるせえ…………俺はそれでも親父の個性は使わねえ…………」

「轟君…………君の気持ちは分かるよ。でも、エンデヴァーだけに視線を集中してしまつて僕達の事を正面から見ていないでしょう…………？ 気づいてる？」

「そんな事は…………」

「そうだよ。だって、今も視線はエンデヴァーの顔色を窺うように観客席に向いている…………轟君、お願いだから本気で戦つて。僕の事を真つすぐ見てよ!!」

そう大声を上げる出久。

それを観客席で見ているーA女子陣はというと、

「ひゃー……デクちゃん大胆だね」

「……？ 麗日さん、緑谷さんは轟さんにただ本気で挑んでほしいだけなのでは……？」
「ヤオモモ、ピユアか……。だけど周りで見ていたら捉え方はまったく違って見えるもんなんだよ」

「出久ちゃん、それを自覚して言っているのかしら？ やっぱり魔性なのかしら……」

「いや、あれは天然だね。間違いない」

「聞いてて恥ずかしくなるねー」

と、出久の天然トークに気持ち恥ずかしくなっていたり。

そんな少し空気が変わっている中で、

「……………俺の心にずかずかと入ってくるんじゃないやねえ！」

まだ轟は氷を展開してきて出久に放ってくる。

だが、威力が弱まってきている状態での氷など今の出久には躲すのは容易い。

だが敢えて出久は真正面から炎を手に宿して特攻を仕掛ける。

氷を溶かしながら前進してくる出久は轟にとって脅威に映るだろう。

そしてついに出久が轟に肉薄する。

爪ではなく拳を握って思い切り轟のお腹にボディブローを見舞った。

「ぐあつ!？」

それでステージ外へと吹き飛ばされていく轟。

だが直前でなんとか氷の壁を展開してリングアウトは免れた。

「くっ……なんでそこまで俺に炎を使わせたがる」

「僕はね。ずっと強くなりたいつて思ってきたけど無個性でその夢は絶たれていた。だけど、個性が出て僕は力を得た。」

そしてそんな僕を鍛えてくれた人に……自慢できるように期待に込めたいんだ!

でも、轟君は半分の力で全力を出さないで一番になろうとしているのはダメだと思
う。完全否定なんてしちやダメなんだ!」

「うるせえ! 俺は親父の個性なんて……!」

「違うよ! 確かに轟君の個性はエンデヴァーから引き継いだものなのかもしれない。
それでも! もうその力は轟君自身の力じゃないか!!」

その出久の叫びに、込められた気持ちに……轟は今まで忘れてしまっていた過去のと
ある光景を思い出した。

何度もエンデヴァーに修行と称して無茶苦茶やらされて、鍛錬が終わればいつも母の
もとへと泣きついていた頃だった。

その時、ちょうどオールマイトの特集がやっていた。

母は轟少年にこう言った。

『でも、ヒーローにはなりたくないでしょ？ いいのよ、血に囚われることはなくならない自分になったって……』

さらには特番でオールマイトはこう言っていた。

『——個性というものは親から子へと引き継がれていくものです。ですが大事なのは血ではなくその繋がり……自分の血肉であり、そして自分であるという証明の証……。ですから私は自分に言い聞かせるようにそういう意味も込めていつもこう言ってます。』

私が来た！

てね』

轟がいつの間にか忘れてしまっていた情景、それがトリガーとなって、次の瞬間には吹き上がる炎。

そう、轟は左の炎を使っていたのだ。

「俺だつて……ヒーローになりたいんだ!!」

そんな光景を目の当たりにした出久は笑みを浮かべながら、

「やつと、気づけたんだね……」

と、まるで慈愛の様な眼差しを自分の事のように嬉しそうに轟に向けていた。

その出久の表情に轟は内心で心動かされるものがあつたが、もう今は感情に付き従うだけだ。

外野でなにかしらエンデヴァーが叫び声を上げているが二人には今は届いていないだろう。

「敵に塩を送ったんだから……お前も本気を出せよ？」

「うん！」

出久は全個性を総動員して力を溜める。

轟も全力で振るえるようになった氷を展開していき、左手には炎を宿す。

そして二人は同時にぶつかり合う！

轟の炎の波が迫ってくる中、出久は微かに聞いた。『緑谷、ありがとう』と……。

大量の氷の波が一気に熱で溶けてステージは爆発でも起きたかのように、いや、実際ステージは爆発して衝撃が爆風とともに会場中に広がっていった。

「きやああああああああ！」

「どうなってますの！」

「なにこれええええええええええ！」

と、ほとんどの人達がその爆風に晒されていたが、次第に収まっていく中で、

『なに、いまの……お前のクラスなんなの？』

『今までさんさんに冷やされた空気が二人の炎の力で熱せられて一気に膨張したんだ』
『それでこの爆風………どんだけの熱量だよ！………つたく、なにも見えねえぞ！』

勝負はどうなった？』

果たして結果は、少し息切れを起こしているものしつかりとした二の足で立っているのは出久であり、逆に地面にうつ伏せに倒れているのは轟という光景だった。

己も爆風によって吹き飛ばされていたがなんとか戻ってきていたミッドナイトが近づいていって確認をして、

「轟君、気絶によって……勝者、緑谷出久さん！」

それによって先ほどまでの空気が嘘のように会場が盛り上がりを見せて、こうして第二回戦第一試合は終わったのであった。

NO. 028 思いは唐突に

出久は思った。

かなりギリギリだったと……。

あの時に轟が放った最大限の超爆風はさすがに掻い潜るには骨が折れそうだったために、瞬間的にハウリング・インパクトで前方の炎を打ち消して、大技を撃った直後の技後硬直でから空きだった轟のお腹に特大の一撃をお見舞いしたのだ。

だが、それはなんとかなったために出久の服が少し焦げているだけで済んでいたのであつた。

「はあ、はあ……」

轟が全力を振るつたように出久もほぼ全力だったために息切れが激しかった。

でも、

「なんとか勝てた……」

その言葉を吐き出すのが精いっぱいだった。

そしてうつ伏せに倒れている轟に近づいて、

「ありがとう轟くん……なんとなく、だけど今の僕の現状の限界値も知れた気がするよ」

それで医療班がすぐに来て、轟が運ばれていくのを目にしながらも、出久も大観衆が見ている中でお辞儀をしてステージを後にしていった。

最後まで礼儀正しかった出久の姿にヒーロー達は、

「まさかエンデヴァアの息子を破るとはな……」「炎を使わないでいた最初の方は圧倒していたしな」「瞬時の判断力も相当の物だな。しっかりと対応できていた」「一回戦での戦いの地味さから評価を下げるどころだった」

と、純粹に出久の実力を実感しているものが多かったが、女子ヒーローは少し感想が違っていた。

「甘酸っぱいわね……」「これが若さってもものなの……?」「あの二人って結構いい感じなのかしら……?」

と、出久と轟の仲に何かを感じているものが多かった。

そして観客席に戻った出久はI—A女子達に囲まれていた。

「デクちゃん！　すごかったよ！　でも、なんていうかすごく大胆だったかも……」

「え？ 何の事……？」

「あ、やっぱり自覚してなかったのか……こりや勘違いが増えそうだね」

「え？ え？」

出久が困惑している中で正直に物事を話す蛙吹が代表して出久に説明を始める。

それを聞いていつて次第に顔を赤くさせて行く出久。

「——というわけよ。出久ちゃん、あなたがした事は結構なものなのよ？」

「そ、そんな……僕は、僕はそんなつもりは……えっ、でも、今の僕は男子じゃなくって女の子だから……あれ？ あれえ!」

盛大に混乱をしている出久だった。

自覚をしなければ後は落ちていくだけの状況で、そんな場面に問題の人物が遅れて帰ってきた。

「緑谷……」

「ひゃい!? と、轟君!? も、もう大丈夫なによ……？」

「ああ。幸いケガはほとんどなかったからな……」

轟は普段通りに出久に接しているのだが、先ほどの説明で今なのだから出久の思考力はかなり低下してしまつて言葉も囁んでいた。

それを周りで見ていた一同はというと、

「これは……いい展開かもね！」

「うんうん、わかるよー！」

芦戸と葉隠が二人でニヨニヨと笑みを浮かべながら（葉隠は透明だから判別できないがおそらく同じ顔だろう）成り行きを見守っていた。

「緑谷……お前のおかげで忘れていた事を思い出せたよ。ありがとう」

「そ、そんな！ き、気にしないで！ 僕のただのお節介なだけだから」

「それでも、だ……」

「う、うん……」

それでなんとか丸く収まりそうなところで、

「おい、半分野郎……残念だったなあ」

「爆豪……」

「お前の家事情とか関係ねえけどもうナメプなんかするんじゃないぞ？ デクなんか悟らされやがって、てめえ対策を考えていたのがこれでおじやんだぜ」

「そうか……」

爆豪がそう話すがそれだけやはり轟の事を警戒していたための言葉だった。

そんな言葉を言われたのにどこか静かな感じの轟に爆豪は調子が狂う感じで口を開く。

「んだよ……？ てめえならもつと突っ掛かってくるもんかと思っただがな……」
「いや、今はどうしても考える事があるんだ。だからよ、それが解決したらお前とも本気で戦ってやるよ」

「お、いい面するようになったじゃねーか？」

どこか昔からの悪友みたいなやり取りに出久は見ていて「かつちゃんに轟君、なんか楽しそう……」と思う。

だが、そこで轟が爆弾を落とした。

「……………そういうえば爆豪。確かお前は緑谷と幼馴染だったな？」

「あ？ それがどうしたってんだよ……？」

「お前がいつまでも緑谷に対してそんな態度なら……先に行かせてもらおうぞ」

「は……………？ どういう意味だてめえ!？」

「さあな……」

それですまし顔になる轟。

そんな話を間近でされた出久はまた「え？ え？」と困惑する。

女子達はそれで「キヤー！」と黄色い声を上げる。

そこにさらに核燃料を放り込むかのように、エンデヴァーがわざわざ生徒の観客席にまでやってきて、周りは先ほどまでの雰囲気もなりを潜めて少しの緊張感を漂わせる。

「焦凍、ここにいたか」

「……………んだよ？ 俺に何か用か？」

エンデヴァアの登場にすぐに剣呑な雰囲気になる轟。

「なあに、息子が負けてしまつて情けの言葉をかけに来ようと思つたのだが、ふむ……………気が変わった。緑谷出久といったな……………」

「は、はい！」

「焦凍との試合前に君に対してテストベッドなどと言つた事を今謝罪しよう」

「てめえ！ やっぱり緑谷にちよつかいをかけてやがつたな!？」

「まあそう怒るな焦凍。それも踏まえて緑谷。将来的に焦凍の嫁になる気はないかね？」

君なら私も認められるぞ」

「うええ!？」

出久はもうそれで盛大に顔を赤くさせてしまい、轟は轟で『個性婚』という言葉を書き添えて、

「てめえはどこまでも！ 俺の将来は俺自身で決める！ 緑谷に迷惑をかけるな！」

「そうだてめえ！」

そこになぜか割り込んでくる爆豪。

「さつきから黙つて聞いてりや都合のいい事をグチグチと！」

「ほう……爆豪といったな？ 君も緑谷の事が好きなのかね？」

「ばっ!! バカ言つてんじゃねーよ! 誰がこんなクソナードの事なんか!」

自ら突つ掛かつていって盛大に自爆をする爆豪。

エンデヴァーは内心で「これは面白いな……」と思う。

さすがにエンデヴァーの方が歳も経験も年季も格上なために、素直になれない男子二人とも思うことが出来たために、

「ははははっ! そうかそうか。俺はお節介だったわけだな。早々に立ち去るとしよう。あ、そうそう。緑谷、職場体験はぜひ俺のところに来てくれ。面倒を見るぞ」

と、豪快に笑いながらその場を後にしていったエンデヴァー。

だが出久の心にある意味爆弾を投げまくった結果となったために、お茶子に泣きついていた。

「う、麗日さん……僕、どうしよう!」

「うんうん。デクちゃんはなんも悪くないよ……今はゆっくりと考えようね」

と、出久の頭を撫でてやりながらも轟と爆豪に睨みを利かせるお茶子はこう話す。

「轟君に爆豪君……デクちゃんを泣かしたら承知しないよ?」

「麗日さん!! それ、どういう意味なの!? ねえ!」

と、お茶子は出久の心が決まるまでは出久の事を守ろうとそこで思い至った。

もう、なんとというかカオスな状況になりつつある中で、

「なんだよ……なんなんだよ!? これはよ!」

と、爆豪は想定外の状況に混乱の極みだった。突っ掛かっていつてしまった自業自得である。

さらにはそれを蚊帳の外で見ていた峰田が、

「おいらもあの輪の中に入りてえ……」

「諦めろ峰田……次元が違うぜ」

と、砂藤に慰められていた。

もし、次の試合が飯田の場合ではなくこの場にいたら、風紀の乱れだと嘆いていたのだろうか……? いや、さらにカオスになっていたかもしれないだろう……。

NO. 029 出久と飯田の戦い

少しの間、出久達の席周辺は微妙な空気になったが、ようやくステージが修復されて試合が開始される。

ただでさえ出久と轟の試合でステージが壊滅的被害に陥ったのだからセメントスには頭が下がる思いである。

そして始まる第二回戦第二試合。

これに関しては飯田とB組の塩崎茨の試合だったのだが、多くは語ることは無いだろう。

開幕で飯田がレシプロバーストをしてあつという間に場外へと投げ飛ばしたのだから。

第三試合の常闇と芦戸の試合も同じようなものでやはり常闇の黒影ダークシャドウによって何度も場外まで持っていかれて酸攻撃もまともにできずに場外リタイア。

そしてあつという間に第二回戦第四試合。

爆豪と切島の戦い。

これは切島が持久戦をさせないために体を最大限硬化させて爆豪に挑んでいき、そのタフネスで耐えながらも仕掛けていたが、爆豪の爆破がそれを上回って気張り続けている身体も耐えることが出来ずに最後には「死ねえ!!」という言葉とともに爆破を食らってダウンしてしまった。

これによって、ベスト4の四人が揃った事になった。

出久と飯田、常闇に爆豪の四人である。

全員が1-AのためにB組の面々は心底残念がっていたが、こればかりは結果がすべてであるためにしようがないという事だ。

しかし、そんな面々の中で残っているのは一人だけが女子なのでやはり注目を浴びている出久だった。

始まる第三回戦第一試合。

出久と飯田の試合。

『さーて、このまま最後までノンストップで行くぜ！ 第三試合は第二試合の苛烈な戦いに生き残った唯一の女子であるヒーロー科、緑谷出久 VS その足は果たして緑谷より速いのか、ヒーロー科、飯田天哉!!』

『飯田は最初のスタートダッシュが要になつてくるな。緑谷は瞬間的に加速できる術を持つているからな……』

その相澤の話を聞いて納得していた飯田も、

「確かに……俺は初動がエンジンゆえに遅れるかもしれないが……負けてやる気もないぞ緑谷君！」

「僕も頑張るよ飯田君！」

先程の観客席のダメージはまだ抜け切れていないものの、なんとかお茶子達の努力も甲斐あつて落ち着いた出久であった。

『恐らくスピード対決になると思うから決着は早いかな！ 始めるぜ!!』

プレゼント・マイクのスタート! という言葉で二人は瞬間移動を開始した。

出久はもうおなじみの三種の個性の重ね掛けで一気に飯田へと迫り、対して飯田は出久の脚力に加えての怪力も警戒してか大回りに移動をしていた。

『これは……! 緑谷の怪力を警戒しての隙をつく作戦か!』

『飯田は加速が要だが同じスピード系には慣れていないようだからな』

その評価通り、まだレシプロバーストを使うタイミングを計りかねている飯田だった。

そんな飯田に出久は先に仕掛けた。

足をいきなり止めて、飯田が走り抜ける場所を予測して照準を定めて空気を吸い込む。

飯田はくるか！と走りながら身構える。

「にゃあああああああ!!!」

出久のハウリング・インパクトの衝撃が飯田へと迫る。

だが、飯田はこの瞬間を待っていた。

たとえば衝撃だと言っても当たらなければどうということはない。

なんとか掻い潜ってここでついにレシプロバーストを展開した。

「レシプロバースト！ うおおおおおおお!!」

狙いはやはり出久の場外狙い。

すばやく服を掴もうとして……その手は空を掴んでいた。

「なっ!？」

レシプロバーストでまだ加速中の飯田はすぐに振り返るが、そこには子猫の姿になって回避していた出久の姿があった。

「くっ！ またしても同じ手を食らって!! だが!」

まだ8秒の時間があつた。

その間に決める! そう心を決めた飯田だったが、そこで出久は子猫の姿から一気にまるで虎の様な人間と同じ大きさに変化して飯田に向かってタックルをかました。

これによってさらに小回りが利くようになった形態だ。

「ぐっ！ そのような中くらの変化も出来たのか!?」
「にやう!!」

タツクルをかまして飯田が吹っ飛ばされてレシプロバーストも時間オーバーで終了してしまい、出久はそのまま人の姿に戻ってワン・フォー・オールを使って飯田を思いつきり殴り飛ばして地面に倒れたところを馬乗りになって押さえつけて爪を出して顔の前に晒しながら、

「これで……決めかな？」

「確かに……もうレシプロバーストを使いきってしまったては俺は太刀打ちできない。降参だ……」

「飯田君！ 降参によって緑谷さんの勝利！」

それによって出久の決勝進出が決定した。

峰田とかが「飯田あ、馬乗り羨ましいぞ！」と叫んでいたが特殊性癖を患っているものしか反応していなかったり……。

出久がすぐに始まるだろう決勝戦を控え室で爆豪の戦いを見ながら、見学していた。

爆豪と常闇の戦いは先ほどとは違い、終始常闇の防戦一方だった。

出久はそれはどうしてか？というのはすぐに気づいていた。

「かつちゃん……無意識に常闇君の弱点を分かっている」

そう、常闇の弱点は炎、光と光る物なのだ。

闇を保つことが出来ずにどんどんと黒ダークシャドウ影が弱くなつてしまふのだ。

だからたとえ暗闇の中でも光系の攻撃を受けてしまえばすぐに弱体化してしまふ。

そこをどう克服するのが今後の常闇の修行次第だろう。

そしてあつという間にフラッシュをくらつてしまい、爆豪に押さえつけられる反対の手で爆破を続けられてしまい降参した。

『爆豪の勝利！ これにて決勝戦への切符を掴んだ二人が決まった!!』

プレゼント・マイクがそう叫ぶ中で、爆豪はとある事を思っていた。

「(デク！ 戦闘訓練の時の中途半端に終わっちゃまった戦いのリベンジをつけてやるぞ!!)」

と、気合を入れていた。

それを観客席で見っていた一同はというと、

「次は緑谷君に爆豪君か……決勝戦とはいえあまり見たくない戦いかもしれないな」

「飯田君、そうだね。デクちゃん大丈夫かな……？」

「きつと大丈夫だろう」

そう話していた時に突如として鳴る飯田の電話。

お茶子に断りを入れて静かに聞こえるところまで行った飯田は電話に出る。

「もしもし……」

『天哉！ 落ち着いて聞いてね！ 天晴が、兄さんがヴィランに……！』

「ツ!？」

それによって飯田の心に濁りが出来てしまう事になる。

出久がいる控え室に飯田はすぐに向って、

「緑谷君……」

「飯田君？ どうしたの？」

「……………ああ。決勝戦前にすまない、突然だが早退して緑谷君の試合を見れない事を許してくれ……」

「なにか、あったの……？」

「インゲニウムが……兄さんがヴィランにやられた」

「インゲニウムが!？」

それで出久も顔を蒼白にする。

「決勝戦前に不安な事を言ってしまったすまないと思っている。だけど、緑谷君は気にし

「ないで決勝戦を挑んでくれ」

「で、でも……」

「頼む。俺の分も全力で戦ってくれ……」

その飯田の言葉に、出久は無言で頷き、

「うん。飯田君の分も頑張る……インゲニウムの無事を祈っているね」

「ありがとう。ではな！」

飯田はそれで早退をしていった。

出久はインゲニウムの無事を祈りながらも決勝戦へと臨むことになった。

NO. 030 プライドにかけて

爆豪勝己は天才肌である。

雄英高校に入るまで己より上の存在などいないと本気で思っていた。

だが、それは戦闘訓練で出久に敗北して、さらには他にも強い奴らがいるという事実
に爆豪は打ちのめされた。

もう一度言う。

爆豪勝己は天才肌である。

もともと才能があつたのに、それをキツカケにして爆豪はクラスの連中の動きを、個性を……よく観察するようになった。さらには今まで以上に鍛錬を重ねていった。

USJでは出久の見せた大猫変化にもすぐに対策を立てていた。

騎馬戦では己の個性を最大限に活かせるメンバーを知らないふりをしながらも確実に選んでいった。結果はままならなかったものの、それでも勝ち上がった。

トーナメント戦でも全員の動きを観察していった。

特に勝ち上がってきた奴ら……出久も含めて戦い方を学んでいった。

それを活かせるような対応策もすぐに思いついていた。

轟と出久の戦いではまさか出久が勝ち上がってくるとは思っていなかったが、ならばせてもらおうと出久の動きを特に観察した。

そして、そんな出久はトーナメント戦で決勝まで勝ち上がってきて、今……己の前に立っている。

それだけで今までの努力は無駄ではなかったと爆豪は確信した。

ゆえに、

「デク……俺は今日お前に勝つてあの時の敗北を清算する！」

いざ、始まるうとしていた決勝戦で出久にそう言った。

『さーて、いよいよ最後だ！ これで雄英1年の頂点が決まるこの一戦！ 爆豪勝己

V S 緑谷出久だ！』

会場はそれでももうヒートアップをしていたためにあちこちから声援が聞こえてくる。

お茶子達A組女子は出久の応援を、男子たちはどちらも応援を。

プロヒーロー達ももうこの時点で出久と爆豪のデータは大体収集している為に後はただ楽しもうという意気込みで見っていた。

出久は爆豪にそう言われて久々に武者震いを感じていた。

今、目の前に立っている爆豪はあの時の比じゃないくらい強くなっていると肌を感じていた。

ゆえに、出久はすぐに決着をつけるようにすでに三種の増強系の個性を最大限高めていた。

『スターート!!』

ゴングが鳴る。

始まった早々で爆豪が仕掛けた。

出久の目を潰すために閃光弾スタングレネードを放った。

一瞬で会場は真っ白になり、だが出久はしっかりと対策をしていた。

「かつちゃん！ それは常闇君の戦いで見たよ！」

腕で咄嗟にガードをして目つぶしは免れていた。

そして出久が動き出そうとした瞬間だった。

「おらあー！」

「ッ!？」

いきなり背後に爆豪の姿があり、出久は『いつの間に!?!』という感想を抱いた。

なんとか出久は腕を交差させてガードをしたが、その上から爆豪が爆破をしてきた。それで吹き飛ばされる出久。

「ぐうー！」

なんとか場外には出なかったものの、いきなり腕が火傷を負っていたために動きが鈍くなる。

『爆豪！ あの一瞬でどうやって緑谷の背後に回ったんだ?!?! 閃光で分からなかったぞ!?!』

『あいつ、閃光を放つタイミングですでに反対の手で爆破を連続で行って緑谷の背後まで回っていたな』

『マジで?!?! それじゃ緑谷の読みをさらに読んでいたってか?!?!』

事実、その通りだ。

そんな爆豪に出久は笑みを浮かべながらも、

「すごいね、かつちゃん……それじゃ僕も本気で行くよ！」

「かかってこいや！ 俺が取るのは完膚なきまでの1位なんだよ！」

出久は瞬間的に加速をして爆豪の周りを何度も跳躍する。

「それはあの脳みその時に見たぜ！」

だが爆豪のすさまじい動体視力はそんな出久の動きを正確に捉えていた。

だんだんと慣れてきた出久の動きに合わせて、爆豪は爆破を出久が拳を振るってきたタイミングに合わせて放った。

そんな爆豪の爆破攻撃に出久は何とか後ろに退避する事で避けた。

その後ろに下がるジャンプをしながらも空気を吸い込んでいたのだが、

「その衝撃波も息を吸い込むというワン動作があるぜ！」

「ッ！」

それでわざわざ外れると分かっているのならやっても無駄と思いい、出久は衝撃波を止めて、代わりに爪を展開してさらに炎を宿す。

「これなら！」

「はっ！　まだ習得して精々二週間もないんだろ!?　そんな付け焼刃が利くかよ!!」

爆豪は出久の燃える爪を悉く避ける。

そんな戦いを見て相澤は静かに解説する。

『爆豪の奴……しつかりと対策を立てて緑谷の個性を一つ一つ封じていつてるな……』

『マジかー……緑谷、俺でも結構強いと感じてるんだぜ？　それを爆豪はさらに上に

行ってるのかよ』

『げに恐ろしきは天才肌の爆豪だな。あいつはただでさえ才能はあるのに努力を本気で

したら強くなるのは明白か』

『やっぱ緑谷の一年だけの鍛錬だけじゃ埋められねえ差つてもんがあるんだな!』

そんな解説を片耳で聞いていた出久は内心でどう挑もうかと必死に模索していた。

だが爆豪はそんな時間を与えてくれない。

出久の至近距離で爆破をして出久をまたしても吹っ飛ばす。

地面に転がる出久に爆豪はこう言った。

「おいデク! 本気を出して来いよ! まだあるだろ!? 化け猫形態が!」

「それは! でも……!」

「どうせ半日もありゃ回復するんだろ! だから使つて来いよ!? その上で叩き潰して

やるよ!!」

変化の個性の弱点と回復期間まで察せられている現状に出久は覚悟を決めた。

「……………後悔しないでよ、かつちゃん?」

「いいからこいや!!」

出久は腕を前に添えて言葉を発する。

「猫又、解放!!」

その言霊とともに出久の姿は5メートルもの巨大な猫の姿へと変わる。

「にゃあああああああああ!!」

変化して開口一番に衝撃波を放つ。

それは何倍も増幅されている為に広範囲で爆豪も防ぎようがないだろうと思われるが、それでも上へと爆破をして飛び上がって避けた爆豪は、

「あと280秒！ おらあ!!」

猫出久の顔面に爆破を食らわせ怯んだところに、体が大きくなって幅が広がり隙が増えたお腹に何度も爆破を繰り返した。

それにはさすがの猫出久も苦悶の声を上げながらもなんとか猫の腕を振り下ろして潰そうとする。

だがそれでも爆豪は止まらない。

来ると分かっていたら避けられるのは簡単だ。大振りなら尚更である。

「あと230秒!」

「にやあ!!」

猫出久の猫パンチが何度も爆豪を襲う。

この時だけは出久もワン・フォー・オール100%を振るえるのだ。

しかし、それでもまだ経験が浅いために避けられてしまう。

『まるでB級の怪獣映画だが、爆豪の先読みのセンスはさすがというしかないな……』

『なんか、俺見ていて目を背けたくなってきた……』

そんな解説がされていく間にも避けては爆破を食らわせるといふ行為が繰り返されて、5分があつという間に経過して時間切れで出久は強制解除でもとの姿に戻つてしまふ。

もう体中は爆破を受けまくって息も絶え絶えであつた。

「おら……もう個性も弱体化してきつきまでの力も振るえねえだろ？ もう、休め！」

そんな声を聞きながら、だが出久は拳を握り、

「まだ、戦える……！」

そう、出久の猫の個性とワン・フォー・オールは別物の扱いのよう弱体化はしないために最後の一撃をするために力を溜めていた。

「そうかよ……なら次で最後だ！」

「負けない！」

そして二人は同時に駆けた。

榴弾砲・着弾!!
ハウザーインバクト

「スマーシューシュー!!」

二人の技がさく裂した。

それでまたしても衝撃でステージが破壊される。

しばらくして立っていたのは……、

『あつと……立っているのは爆豪だ！ これで爆豪の優勝が決まった！』

そんな解説が聞こえてくる中で、出久は朦朧とした意識の中で、

「やっぱり……かつちゃんは、すごいね……」

と、言い残して気絶した。

そして医療班に運ばれていく出久を見ながら爆豪は呟いた。

「当たり前だ、クソナード……」

と。

こうして今日の種目は全部終了となり、後は授与式と閉会式だけになった。

NO. 031 終わる雄英体育祭

「それではこれより表彰式に移りたいと思います！」

ミッドナイトがそう宣言するが、会場の空気はそんなに盛り上がりを見せなかった。

まあ、仕方がないといえば仕方がないが決勝戦の内容が内容だけに素直に受け入れられないものが多いという感じである。

飯田が早退をしたために、常闇、出久、爆豪が表彰台に登っているのだが、出久の恰好が色々酷い。

特に後遺症が残るようなケガはなかったのだが、とにかく爆豪による爆破の火傷がひどいのなので皮膚を露出していた腕とかには包帯を巻いてあり痛々しさが垣間見える。

本気の勝負なのだから……解釈すれば、まあこのケガも勲章物だろうと半分以上のプロヒーロー達は無理やり納得している節もあるのだが、残りのものたちはそれでも麗日戦でもそうだったがもう少し女子に対して紳士的に対応できなかったのかという爆豪への批判が立ち込めていたりする。

だから拍手はあんまり起こっていなかった。

それでもミッドナイトは場の空気より運営を優先して話を進めていく。

「飯田君も本来ならここにいるはずなのですが、お家の事情で早退となりましたのでご承知ください」

そうして司会進行を進めていき、

「それではメダル授与式を行います。当然授与するのはもちろんこの人！」

その瞬間、どこからともなくオールマイイトが式場へと飛び出てきて、

「私がメダルを持ってやってk「我らがヒーロー、オールマイイトオ!!」……」

オールマイイトとミッドナイトの声が被ってしまい、微妙な空気になってしまふのはあの意味で様式美である。

だが、オールマイイトの登場により少しだけ変な空気は一掃されていた。

そしてオールマイイトは咳ばらいをしながらも、メダルを持ちまらずは常闇へと渡して行く。

「常闇少年、おめでとう！ 君は強いな」

「勿体ないお言葉……」

「だが、個性に頼り切りの場面が多かった。これからはもつと地力を鍛えていきなさい。

そうすればもつとうまく立ち回ることが出来るだろう」

「御意……」

常闇へのメダル授与が終了して、今度は出久の前へと立つオールマイト。

オールマイトは出久の肩に手を置き、

「緑谷ガール……残念だったな。だが、君は女子ながらに一生懸命頑張った。最後まで諦めないで戦い抜いた。そこを誇りに思いたまえ」

「はい！」

「あと、個人的にはあとでゆつくりと話でもしようか」

「わ、わかりました！」

そのオールマイトと出久のやり取りを聞いて、生徒達やプロヒーロー達で勘のいいものはなんとなくが出久とオールマイトの関係性を察している物が多い。

選手宣誓で出久が話した自身を鍛えてくれた偉大な方というフレーズ……勘違いでなければその偉大な方とはという疑問が出てきたからだ。

それならばたった一年で強くなれるのも頷けるという感想を持ったものも少なからずいた。

そこからオールマイトが師匠という噂話が蔓延する事になるのだが、特に悪い事ではないのでオールマイトもそんなに気にしない方針でいた。

そして最後になつた爆豪へとメダルを渡そうとして、

「おめでとう、爆豪少年」

「おう！」

「君の残した結果はかなりのものだ。これから精進し続けなさい」

「おう！　いつか俺はオールマイトを超すヒーローになるぜ！　今回はその通過点に過ぎねえからな」

「そうかそうか。向上心があるのはいいことだ。だが、一ついいかね？」

「なんだ？」

「そうだね。こう回りくどく言うのもなんだから正直に言わせてもらうけど、もう少し女子に対しての配慮ある立ち回りを今後は実践していった方がいいと思う。気づいていないとは言わせないが、君の評価は結構上がり下がりにしているからな」

「女だろ？　男だろ？　が、本気で挑んだ結果だろ？　俺はデクには態度は変えねえって決めてんだよ！」

「まあ、君はそう言うならそれでいいだろう。だが、少しは考えてくれな？」

「わあーつたよ……」

それで渋々頷く爆豪。

それでメダル授与式は終了して閉会式に移行する。

オールマイトは会場中を見渡しながら叫ぶ。

「さあ!! 今回は彼らだったわけだ!! だが皆さん! この場の誰にもこの場に立つ可能性があった! ご覧いただいた通りだ! 競い! 高め合い! さらに先へと登っていくその姿! 次世代のヒーローの卵達は確実にその芽を伸ばして成長をして前へと進んでいる!」

そんなオールマイトの言葉でこの雄英体育祭に挑んだ全生徒達は心を震わせる。

そうだ、まだ学校在学中はあと二回チャンスがある。それまでにさらに先へと強くなつていこうという気概を感じられる。

オールマイトは生徒達のその決意の表情を見て満足そうに頷き、

「てな感じで最後に一言!」

来るか!

と、ヒーロー達も生徒達も身構える。

そして、

「皆さんご唱和ください! セーの!!」

「プルス」「プル」「プルスウル」

「お疲れ様でした!!」

「プルス……え!!」「えっ?!」「ええ!!」「それはないでしょオールマイト!!」

と、見事に最後の締めを期待通りにできなかつたオールマイトがその後、に謝る光景が

印象的だったと出久は思った。

終わっていく雄英体育祭でそれぞれ引き上げていくヒーローたちの中で、とある四人組のヒーローが話し合っていた。

「それにしても、彼女は残念だったわね……」

「そうだね。でも、1位になれなかったからと言って私達の評価は変わらないんじゃない？」

「ねこねこねこ……あちきは彼女はぜひ欲しいと思うなあ」

「彼女の個性は山岳救助の現場にいる人間にとっては喉から手が出るほど欲しい人材だろう……」

「もちろん！ サーチはしたわね!？」

「むふふ、当然さ！ 彼女の能力は当然全部リサーチは済んであるよ！ なかなか面白い能力が豊富だったね」

「後で教えてよ？ それでなくても今回見せてくれた各能力は放つては置けないんだからー!」

「身軽で高いジャンプ力は度胸もあれば山では絶好の力だろうし、怪力も言わずもがな。」

炎は冬の山などで遭難者を発見した時に体を温めるのに重宝するだろう」

「そのね！ そのね！ ほぼすべての猫種と会話できる能力もあるみたいなんだよ！」

「爪の個性も崖などの登りにくいところは真価を発揮しそうだね」

「叫びもなかなか……発見したら大声で知らせることが出来るからな……」

「変化の能力も鍛えればより様々な大きさを自由にできそうだしね」

「にしし！ 彼女はぜひうちの事務所に職場体験に来てもらいたいね！」

「そうね。最初は無個性だったって言うんだから色々とそういった人の気持ちも理解できらるだろうしね……」

「けど、なんか気になるといえば気になるんだけど……三つくらいサーチしても分からなかった力があつたよ？」

「本当に……？ なにかしら……」

「まあ、なにはともあれ楽しみだわ」

そんな感じでその四人組はワクワクしながらも会場を後にしていくのであった。

そして教室に戻った一同に相澤はこう言った。

「とにかくお疲れさん。プロの指名とかに関しては何が休みが開けたら発表するから楽しみにしておけ。

飯田にもあとで電話で伝えておくが……さて、なにがあつたのやら」

それを聞いて出久は心の中でインゲニウムの無事を祈っていた。

そのインゲニウムはなんとか助かったのだが、もうヒーローとして戦えない身体になつてしまい、飯田の心に闇を落とす事になるのだが……。

そして休みの間に各生徒達は思い直すことはあり、特に轟は母への面会をしに行ったという。

猫娘と職場体験編

NO. 032 ヒーローネーム考案

雄英体育祭から二日が経過して出久は気持ちも改めて学校へと向かうために電車に乗っていた。

その道すがら、

「あー！もしかして雄英体育祭で活躍した緑谷出久ちゃん!?」「マジか！どこどこ!?!」「あの選手宣誓もかなり緊張したでしょ？ 頑張ったね……」「すごかったぞ!」

と、道中の客たちにある意味もみくちやにされながらもなんとか出久は「あ、ありがとうございます!」と返事をして頭を下げていた。

もともと性格はまともな出久だからそんなしつかりとした対応に感心の声を上げる人々。

そんな感じで出久は電車から降りる際も「これからも応援してるぞ!」と客の人達に言われてたじたじになっていた。

「はあー……やっぱりテレビに映るって事は大変なんだね……。プロヒーロー達はいつもこんな感じなのかな？」

そんな事を呟きながらも出久は雨も降っていたために傘を差して校門まで来た時だった。

後ろから元気な声で「なにを呑気に歩いているんだ緑谷君！」と飯田の姿があり、出久はそのまるでいつも通りの飯田の姿に面を食らっていた。

インゲニウムの事は大丈夫なのだろうか……と飯田に聞こうとするが、どうしてもあと一言が出てこない。

そんな出久の姿に飯田はすぐに気づいたのか、

「心配してくれてありがとう、緑谷君。大丈夫……兄の件なら心配ご無用だ。だから、そんな悲しそうな顔をしないでくれ」

「うん……でも、飯田君。無茶はしちやだめだよ？」

「ああ」

二人はそれでようやく普通に会話をする事が出来て、そのまま一緒に教室へと向かっていった。

教室の中ではすでに各生徒達が雄英体育祭のその後について話し合っていた。

「やっぱり結構声かけられたよー！」

「俺も俺も！」

「俺なんて小学生の奴らにドンマイコールされたぜ？」

「ドンマイ」

そんな感じで教室の中は終始楽しそうな空気が流れていたが、

「おはよう」

相澤が教室に入ってきた瞬間に全員はすでに自分の席について無駄口を一切しないという徹底ぶり。相澤の教育が実に忠実に行き届いている証であった。

そんな相澤の顔はすでに包帯が巻かれていないのを察した蛙吹が、

「先生、包帯取れたのね。よかったわ」

「まあな。ばーさんの処置が大げさすぎるんだよ。本当なら雄英体育祭の時にはもう包帯はとつても良かったほどだからな」

果たしてそれは本当なのか強がりなのかは本人だけが知る事である。

相澤は「それより」と前置きをして、

「俺の心配もいいが、今日やる『ヒーロー情報学』は少し特別な内容だ。気を引き締め
ていけよっ。」

そう話す相澤の言葉にまたしても教室中は緊張をする。

ヒーローの法律関係を学ぶのか、はたまた小テストをするのか……学が少し疎かな生

徒達はそれで何が来るのか戦々恐々としながら次に相澤の話す次の言葉を待っていた。

「今日のヒーロー情報学は……『コードネーム』ヒーロー名の考案だ」

「胸膨らむやつきたああああ!!」

それによってまたしても賑やかになる教室。

だが、その騒ぎは相澤の睨みで一瞬で冷めて静かになる。

だが、ヒーロー名。

それはヒーローとして活躍するためには必須な項目。

いい加減な名前を付けてしまったら生涯その名で呼ばれ続けることになるから大事な事である。

相澤が話す。

プロヒーローからのドラフト指名の事に関して。

今回はまだ興味だけであるが将来的には使えないと判断されれば切られる事もあるという。

「大人は勝手だ」と峰田が思わず愚痴るが、それは世の常識なのだから仕方がないのである。

「ま、そんな感じでこの間に話したプロからの指名の集計が……これだ」

電子黒板にそれが表示される。

一位はなんと圧倒的な差を付けて出久が1位に躍り出ていて、2位に轟、3位に爆豪とそれぞれ名前前の隣にドラフト指名の数が表示される。

当然、そんな結果に出久は驚愕の顔をして、

「ぼ、僕がドラフト指名1位!？」

「ああ。優勝はならなかったものの緑谷の評価は1番だった。主に救助関係のヒーローの指名が多かったな」

「確かに……緑谷の個性って攻撃方面だけじゃなくて災害救助に役立つ能力が多いもんな」

「そだねー」

と、切島と芦戸が話す。

出久は期待し過ぎでは?という感想を持った。

それでも結果がそれを物語っているのは覆せない事実である。

「まあ各自で思うことはあるだろうが、それも踏まえて全員にはこれから職場体験をしてもらう。USJでもうすでに味わったと思うが、改めてヒーローとしてどうやるのかを学べるいい機会だ」

「そのためのヒーロー名なんですよね!」

「ああ。だから慎重に決めろよ」

「そうよ！ 適当に決めると地獄を見るわ！」

そこにミッドナイトが教室に入ってくる。

それから始まるミッドナイトのヒーロー名に關しての説明。

それを久は聞きながらも内心で焦っていた。

「(そういえば、全然考えてなかった!?! この一年、ずっと修行だけをしていた感じだから今の僕に見合った名前とか名前とか……なんだろう?)」

そんな出久の心の気持ちなど知ったものかと進行していく考案時間。

発表タイムになっても出久はなかなか思い浮かべられていなかった。

他のみんなが発表していく中で、

「スムーズに進んでいるのはいい事だわ。あと残っているのは再考の爆豪君と飯田君に

緑谷さんね」

「はい……」

ミッドナイトの言葉に飯田は果たして自分がもう戦えない兄に託されたインゲンニウ

ムを名乗ってもいいのかという葛藤のすえに出した結論は、

「飯田君も自分の名前を使うのね。いいのかしら……?」

「はい。今はまだこれで行かせていただきます」

「そう。でももう少し考えてね。まだ学生期間は長いんだから」

「はい……」

それでミッドナイトは今度は出久の方へと向く。

「爆豪君はまあ、癖があるからそのうちいいのが出てくるでしょうけど……緑谷さん。もしかしてあなた、まだ考え付いていないの？」

「はい……。お恥ずかしい話なんですけど個性が出たのが一年前でそれからずっと鍛錬ばかりしていましたからこう、良いヒーロー名が咄嗟に出てこないといえますか……」

「まあそうよね。緑谷さんは個性は猫なんだからそれに近い名前にするのもいいけど……そうね。いい案があるわ」

「どんなですか？」

ミッドナイトの提案に出久は耳を傾けた。

「クラスのみんなの緑谷さんの印象から出てきた中で自分でこれがいいと言うものを決めるのはどうかしら？」

「それ、いいですね！」

「面白そう！」

ミッドナイトの提案にクラスのみんなはすぐに反応した。

「実際、相澤先生もヒーロー名はプレゼント・マイクに付けてもらったらいいからね」

「「へー……」」

意外な事実を声を上げる一同。

それからすぐに一同が手を挙手して出久のヒーロー名を出していく。
まず芦戸が、

『ポシビリティーキャット』なんてどうかな？ 実際色々緑谷多芸だし」

「可能性を秘めし猫ね。いいんじゃないかしら？」

続いて尾白が、

『テールランプ』なんてどうかな？ 俺とテールで被るけどテールはtail（お伽噺）とtail（しつぽ）の両方の意味を掛けていて、炎も使えるから災害救助とかで導いてくれそうだし」

「なかなかしやれた名前ね。いいじゃない！ どんどん行こうか！」

三番目がお茶子が挙手をして、

『デクニヤン』！ デクちゃんに猫を掛けてみました！」

「可愛らしいわね！」

常闇がこう言う。

「……………『ベレト』などはどうだろうか？」

「旧約聖書の猫の悪魔か。でも、悪魔の名前は緑谷さんにはちよつといまいちつて感じね」

「すまん……………」

上鳴が、

「緑谷の個性って大まかに分けると6個に分けられるから三味線とイタリア語の6を掛けて『シャミセイ』なんてどうだ？」

「うーん……猫愛好家の人達に喧嘩を売りそうな名前ね」

葉隠が、

「『シュレーディング』なんてどうかなー？」

「シュレーディングの猫から持ってきたのね。でもどこが矛盾なの……？」

「うーん……なんでだろう？ 男から女になったからかな？」

八百万が、

「でしたら最初は無個性だったのですから個性持ちと無個性を繋ぐ意味で『リンカー』などとはいかがでしょうか？」

「うんうん。緑谷さんは無個性の人の気持ちに寄り添えそうだからいいと思うわね」

蛙吹が、

「それじゃまんまな気もするけど『ケット・シー』なんてどうかしら、出久ちゃん？」

「猫の妖精ね！ 可愛いわね」

瀬呂が、

「『ヴェールシャツ』なんてどうだ？」

「まんまフランス語で緑猫ね。単純だけど味がありそうね」

峰田が小声で、

「……………タマモキヤット（ボソツ）」

「峰田君……………欲望に忠実なのはどうかと思うわよ？」

「いいじゃねーか!? 緑谷に巫女服とかメイド服とか裸エプロンとか着せたいじゃん
!？」

「うわ……………最低……………」

と、女子の批判を買っていた。

気を取り直して耳郎が、

「御利益的な意味で『フォーチュンキヤット』なんてどうかな？」

「幸運な猫ね……………よく招き猫とかにも使われるからいいと思うわ」

その他にも、『万徳猫』や『デクロウ』、『サクセサー』、『フォーリナー』などと意見が
上がっていった。

だが、出久はまだいまいち決め手に欠けていると感じていて悩んでいた。そこに轟が挙手をして、

「猫又を和風にして『出雲』なんてどうだ？ 名前に緑谷の名前も入っているからいいと思うんだが……」

「出雲……猫又ヒーロー、出雲……うん！ いいと思うよ轟君！」

出久はその響きがやけに気に入ったように笑みを浮かべていた。

そんな出久の笑顔を見て轟は薄い笑みを浮かべながら、

「それならよかった……」

と、言葉を零した。

それで一同は『轟に持ってかれたかー』という感じであった。

こうして出久のヒーロー名は猫又ヒーロー『出雲』に決定した。

場所は変わって職員室。

「あれ？ 今頃になって新たに緑谷さんに応募が来ていますよ？」

「なに？ 誰ですか？」

オールマイトがその応募してきた人の名前を見て、
「ここ、この人は!?!」

と、怯え声を上げていたのであった。

NO. 033 職場体験先を決めよう

とあるヒーローとはあるヒーロー事務所に電話をかけていた。

『……うちに電話をかけてくるなんていう物好きな奴は誰じゃ……?』

「相変わらずですね、我です」

『おお！ お主か！ それで今日はどうしたんじゃ?』

「ええ。とある占い系のヒーローに占ってもらった結果、例の子はそちらに行くことが70%確定しまして……」

『例の子という……オールマイトの弟子かい?』

「ええ。それで多少はずるいとは思いますが折り返って相談があるのですが……」

『言ってみなさい』

「こうして電話越しに話し合いはされていった。

雄英高校1-Aの一同はコードネームもだいたい決まったので今度はどこに職場体験に行くのかを話し合っていた。

相澤からはオファアがあつたものにはあらかじめリストアップされた紙を渡してその中から選ぶようにというお達しである。

「デクちゃんはどこにいくこうとしているの?」

「うん。まだここって場所は決めていないんだけど、そういう麗日さんはどこに行くかもう決めたの?」

「うん!」

お茶子は話す。

雄英体育祭で爆豪との戦いで力不足を痛感したために、まずは接近戦の心得を鍛えるためにゴツリゴリの武闘派ヒーローである『ガンヘッド』の事務所に行くことに決めたと。

「強くなればね、それだけ可能性が広がるし、でもやりたいことだけしていちやそれだけ見聞も狭まっちゃうからまずは自分にはないところを見つけてみようと思つたんだ!」

「そっか! うん、いいと思うよ。麗日さん、近接戦闘を鍛えたらきつと強くなると思う

から。一度でも相手に触れられればそれだけでどうかできちやうのにそこに接近戦が加われれば鬼に金棒だよ」

「やだなー、そんなうまくいくとは限らないですよー」

ウフフ、アハハ……と出久とお茶子のいつもの日常の会話が行われる。

それを出久の後ろの席で座っている峰田は黙って聞いていた。

そして、

「ビバ・女子の会話はいいいなー」

と、親指を立てながらも出久の感情で動いている尻尾を掴めないかと必死に実践していたり。

これで結構出久の尻尾はするりとかわされてしまう事が多々あり、いつも峰田は悶々とした気持ち溜めていたりする。

そんなこんなで放課後になって出久は帰ろうとしたのだが、突然教室の扉が開いて、そこにはかなりの低姿勢のオールマイトの姿があり、

「わわ私が独特の姿勢でやってきた!!」

そんなこの1ーAでは最近になってはそんなに珍しい光景でもなくなってきたオールマイトの登場に、それでも出久は突然であったために、

「お、オールマイト? どうしたんですか……?」

「まあまあ……それより少し君に用があるから来なさい」
「わかりました」

出久はそれでオールマイトについていく。

そんな光景を見せられてクラスの一同は思う。

「やっぱり緑谷つてオールマイトの弟子つていう話は本当なのか……?」

「どうなんだろうね……? でも、あたし達以上に仲が良いのは見ててわかるし」

「ケロ。出久ちゃんも少し羨ましいわね」

「それが本当なら俺も鍛えてもらいたいよな! なあ爆豪!」

「うっせー! 俺は別にそんな事で羨ましくなんか感じねえよ!」

「本当かよ……?」

と、やはりそんな出久が弟子説が濃厚であるというのがみんなの共通の認識であった。

オールマイトについていく出久は人があんまり来ないところまで来たところで尋ねる。

「それで、どうされたんですか?」

「うむ。君にはたくさんのプロヒーローから指名が来ていると思うが、私からたつての

頼みでよかったら行ってもらいたい場所ができたのだ」

「それってどなたの事ですか？」

「その人の名は『グラントリノ』。かつて私が雄英高校に通っていた時に1年だけだが私の担任だった方だ」

「え!? それって、まさかオールマイトの師匠ですか!？」

「そうだ。そしてグラントリノは当然ワン・フォー・オールのももご存知であり、私の先代のワン・フォー・オール保持者であった人物の盟友でもあった」

「そんなすごい方がいたんですか!……でも、僕は聞いた事ありませんよ? そのようなヒーローの名前は……」

「なにぶんもうとうの昔に隠居したものだと思っただが、おそらく君の事を雄英体育祭で見ている味を持ってくれたのだろうな……。わ、私の指導不足を悟られたのか、どうかは、分からないのだが……かつての名で指名してくるとか……こええ、こええよ……」

次第に言葉が震えてきているオールマイトの姿に、出久はどんな恐ろしい人なのだろうと逆に興味を抱いていた。

そんな事もあり出久はグラントリノの事務所の場所が書かれた紙を渡されたのだが、

「でも、オールマイト」

「ん? なんだい……?」

「当然ワン・フォー・オール関連で鍛えてくれるのはありがたいのですが、僕の猫の個性も活用法とか色々々と鍛えたいんですけど……どうにかありませんかね？」

「そうだな……よし。相澤君に少し相談してみようか」

それで二人は職員室に行つて相澤にその件を相談したらこう返された。

「……ちようどいいところに来たな、緑谷」

「はい？」

「その件なんだが、ちようどそのグラントリノという方と、もう一方でお前の個性を鍛えるのに適したヒーロー達が共同でお前の面倒を見てくれるとか言う話がさつきいきなり入つてきた」

「えっ!? そんな都合よく行くものなんですか!？」

「相澤君、それは本当かね……?」

出久とオールマイトは半信半疑だった。

まさかそんなに都合がいい事があるものなのかと……。

「俺もそれは思つたんだがな、そのもう片方のヒーロー達のヒーロー名は『ワイルドワイルドプッシーキャッツ』だ」

「ワイルドワイルドプッシーキャッツですか!？」 あの手岳救助で活躍している四人組のヒーロー!」

「ああ。話によれば前半は緑谷の個性を鍛えるために二組で共同で山岳救助での現場で鍛えた後に、後半はグラントリノという方が町の視察も兼ねて彼女らとはそこで別れて見回りをするという話だ」

「かなりうまい話ですね……」

「だからな。このチャンスは逃すんじゃないぞ?」

「わかりました!」

相澤にもそう言われてもう出久は行く場所が決まった瞬間だった。

「それでは緑谷ガール。死なないように頑張つて来なさい」

「オールマイト……その不安を煽る発言はやめてください……。でも、はい!」

出久とオールマイトがそんな会話をしている中で、

「(そう言えば……飯田の奴は行く場所は保須市のヒーロー事務所だったな……飯田の家族の事情が関係している場所……ヒーロー殺し……俺の考えすぎか?)」

そう考えていた。

だが、そんな事もあつたがあつという間に職場体験当日となつて、

「それじゃお前ら。コスチュームは無くすんじゃないぞ?」

「「はい!」」

「伸ばすな! しつかりとはい!と答えろ」

相澤に注意されながらも、各自でどこに向かうのか話し合っている中で、

「飯田君……」

「緑谷君に麗日君……どうしたんだい？」

「もし、なにかあつたらすぐに相談してね？ 友達でしょ？」

「うんうん……」

飯田はそれで笑みを浮かべながらも「ああ」と答えていた。

出久はそれをただで見送るつもりはなかったために、

「もし、何かあつたらお願いね……？」

「にやっ！」

一匹の猫が飯田の後を付いていったのであつた。

もしもの保険であるのは出久でも分かっているが、そのもしもが起きたら大変だからだ。

こうして出久も心配はすれど、まずはグラントリノのヒーロー事務所のある場所へと向かつていった。

そして新幹線で45分の場所にその事務所はあつたのだが、

「なんか、すごいぼろい……」

見た目がすごいぼろい事務所があつたために、少し入るのを躊躇う出久であつたが、

意を決して中へと入っていく。

「雄英高校から来ました。緑谷出久です……」

中に入ってみれば電気は点いておらず、少し薄暗い。

だが、それよりも衝撃的な光景を目にする事になる。

「し、死んでる——!?!」

そこには赤い血の様なものをぶちまけて倒れている人の姿があった。

「生きとるよ」

「い、生きてる……? よかった……」

それが出久とグラントリノとの最初の出会いであった。

NO. 034 合同職場体験・一日目

なかなか衝撃的なグラントリノとの初対面を果たした出久だった。

グラントリノはボケているふりをしようと思ったが、なかなかどうして、

「オールマイトはなかなかめんこい子を9人目を選んだものだな」

「やはり、あなたはオールマイトの師匠なんですか？」

「まあな。どれ、すぐに移動する予定だったが気が変わった。一回俺と拳を交えてみな
いかい？」

「えっ……でも」

「遠慮はせんでええ。お前の動きは雄英体育祭で見させてもらったが基本は出来ている
ようだからな。オールマイトにしてはいい仕事をしたようだしな」

「やっぱり見ていたんだ！と出久は再度思う。」

「それで出久は一度断りを入れた。」

「でしたら、僕の動きを見てください！」

「うむ。かかっつきなさい！」

狭い部屋ながらも出久はワン・フォー・オール、身体強化・怪力、脚力強化を発動して全身を強化する。

一気に力が高まった出久の姿にグラントリノは「おお……」と、どこか感嘆したかのような声を漏らす。

「なるほど……緑谷出久と言ったな？」

「はい」

「今、ワン・フォー・オールはどの程度制御できるのかね……？」

「身体強化・怪力と脚力強化の補助もありますが、フルカウル状態で15%は現状は引き出せています」

「15%か……。ふむ、まあオールマイトから個性を授かって一年もしないであれば、十分な成長ぶりではあるな。よし、では撃つて来なさい。部屋に関しては後で修繕するか気にせんでよい」

「わかりました！ いきます！」

出久はそれで猫の個性も相まって身軽となった足で部屋の中を何度も跳躍してグラントリノを翻弄するようにする。

グラントリノも負けんとして足から空気を吐き出して出久のスピードに追い付く。

出久はこの時点でグラントリノの個性は分からなかったために、だがそれでも己の分析によって次にヒーローはどんな動きをしてくるかを予測して、

「(っ)だー！」

グラントリノがすごいスピードで自身の背後を取ろうとした瞬間に、後ろへと大きく跳躍して頭上から拳を振り下ろして叩きつけようとした。

だが、ただでやられるほどグラントリノも老いてはいない。

頬に出久の拳が掠る感覚を味わいながらも、出久の腕を取って逆手に取って叩きつけた。

「ツうー！」

「うむ……………：雄英体育祭ではいい動きをしていたが、なかなかどうして実際に体験してみると余計にいい動きをするではないか」

「あ、ありがとうございます！」

「うむ。それと……………先にコスチュームに着替えておくべきだったな。可愛いパンツが丸見えだったぞぞ？」

「ひゃっ!？」

そう言われて初めて出久はまだ制服姿のままだったと気づく。

大慌てでスカートを整えて、引き攣った笑みを浮かべながらもグラントリノに曖昧な

表情を向ける。

「うむうむ。大体今のお主のワン・フォー・オールの練度は確認できた。力任せに振るっていない事はわかったし、頭の回転もよい。これなら俺もいい感じに鍛えられそうだ」

「あ、ありがとうございます！」

「よし。ではさっそく次の場所へと向かうとするか。時間は有限だ。移動だけで一日が終わるのはお主として本意ではあるまい？」

「ワイルドワイルドプッシュキャッツのところに向かうんですね？」

「うむ。珍しく虎の奴から連絡があり、共同でお主を鍛えることになったからのう。俺も鍛えることに關しては相当の物だと自覚はしているが、奴らは鍛えることに關してはかなり上手だからな。覚悟をしておけよ？」

「はい！ 頑張ります」

「うむ。正直でよろしい。オールマイトもいい弟子を取ったものだな」

それから出久は着いたばかりだったが、すぐにグラントリノと一緒にまた電車に乗って、様々な移動手段を用いて結構な山や森林が豊富にある地帯へとやってきた。

「(ハハ)は……。」

「ここはあいつらの所有している土地だな。奴らの同伴があれば個性使用も可能な場所だ。ほら、もう少しで到着するから挨拶の準備でもしておきなさい」

「わかりました」

そして山道を歩く事一時間から二時間ほど、空はもう夕焼けが差してきていた。

そこにはポツンと一軒の宿らしき建物が立っていた。

そこには四人と一人小さい男の子が待ち構えていた。

「よお、皆の衆。元気にしとるか？」

「はい。グラントリノも相変わらず元氣そうで何よりです」

グラントリノが四人に言葉を掛けると一人図体の大きい方……虎が前に出てきて挨拶をする。

そんな光景に、出久は内心の喜びを隠せそうにない感じで、

「あ、あの！ 僕は緑谷出久です！ 皆さんの事は常々伺っています！ 山岳救助で活躍しているエキスパート集団という！」

「うむ。いい挨拶だな。では我らもいくか」

虎の言葉に他の三人も頷いて、

「それじゃいこつか！ あちきら四身一体！」

「煌めく眼でロックオン!!」

「猫の手助けやって来る!!」

「どこからともなくやって来る……」

「キュートにキャットにステインガー!!」

「ワイルドワイルドプッシューキャッツ!! フルver.!!」

その名乗りに出久はとても嬉しそうに笑顔を浮かべて「見ることが出来て尊敬の極みです!!」と叫んでいた。

そんな出久に四人の中で一番落ち着いていそうな女性、ヒーロー名『マンダレイ』が話しかけてきた。

「私はマンダレイよ。ようこそ緑谷出久さん。あなたの事は雄英体育祭で見させてもらったわ。歓迎するわよ」

「はい! よろしくお願ひします!」

「マンダレイ! 抜け駆けはするいぞ! 私は『ピクシー・ボブ』よ!」

「あちきは『ラグドール』だよ!」

「我は『虎』だ………よろしく頼む」

そんな感じで四人と握手を交わしていく出久。

「では小娘。俺と合わせてこの五人でお主を鍛えてやるから気合を入れるんだぞ」

「はい!………とところで、そちらのお子さんは……?」

出久は一人だけ名乗って来なかった子供に目を向けてそう話す。

その子供は出久の言葉に「けっ………」と言ってそっぽを向いてしまう。

「こら。洗汰、あなたも挨拶をしなさい」

マンダレイが注意をするが、洗汰という少年は、

「ヒーロー目指す奴なんかとつるむ気なんてねえよ！」

と、言つて家の中へと入つていつてしまった。

「あつ……………」

出久の声がそう漏れる。

そんな出久にマンダレイが申し訳なきように、

「ごめんね。あの子、ちよつと複雑な理由があつてヒーローを嫌っているのよ」

「ヒーローを……………？」

「うん。そこら辺は時間を置いて教えてあげるね」

「はい……………」

今は洗汰に関してはどうにもできないと思つた出久は頭の中で今は職場体験に集中しようとしていた。

「まあ、それじゃ気を取り直して日も暮れちゃつてるけど訓練に行きましようか！ ラ

グドール！ あなたのサーチで緑谷さんの個性をサーチ！」

「まっかせてー！」

ラグドールは雄英体育祭で見ていたものの、それで改めて出久の個性をサーチしてい

く。

そして、

「それじゃ出久ちゃん。夜の訓練にでもいこつか。おあつらえ向きに夜目なんてスキルがあるんだから夜の山岳探検に出発だー！」

「わかりました！」

それから出久はすぐにコスチュームに着替えて準備をする。

着替えた姿を見た一同はというと、

「うん。可愛いわね」

「私のアイマスクに似てるわね！」

「はい。猫の弱点のフラッシュ対策でもありますが、実は個性も猫にちなんでワイプシの皆さんの恰好を参考にさせてもらったんです！」

「まあ！ それは嬉しいわね！」

「それじゃさっさと行こうよ！」

「では、グラントリノ。我らは中で明日の計画を練っていきましょうか。大好物のたい焼きも準備していますよ」

「おっ！ 準備がいいのう！」

そんな感じで一日目の夜はラグドールたちと夜の山岳訓練に行くことになった出久

であつた。

NO. 035 合同職場体験・一日目の夜

「にやはははー！ 夜目が使えるって便利だねー！ 炎も使えるから夜間の活動にはもってこいの力だよ」

「ありがとうございます」

出久は現在、虎を抜いたマンダレイ、ピクシーボブ、ラグドールの三人とともに山岳地帯へと向かって歩いていった。

炎を出久が出て先を照らしているから三人も楽が出来るという感じで最初の方はゆったりした感じで終始和やかに時間が流れていく。

「それだけでけどねー、出久ちゃんってさー？」

「はい？」

「あちきね、前にオールマイトと会う機会があつたんだけど、その時にサーチした事があるんだよね。その個性の情報は今、出久ちゃんの中にもあるっていうのはどういう事かなって思ってたねー」

「ツー」

ラグドールのその言葉に出久は緊張をする。

あまり他人には話さないようにとオールマイトに言われている為にどう言葉を濁そうかと思っていた。

だが、そこでマンダレイが出久の頭に手を置いて、

「ふふ……そんなに緊張をしないの。ごめんね、試すようなことをして」

「マンダレイの言う通りだよ。私達はオールマイトの事情はグラントリノを通じて知っている口でね……オールマイトを継ぐ次代の子が君だつてことも」

「そ、そうだったんですか……」

それで安心の吐息を吐く出久。

だがそれで逆に疑問が湧いてきた。

「その、それで皆さんはグラントリノとはどういう風に知り合つたんですか……？ 結構隠居生活をしていたつて話ですけど……」

「あー……それね。まあワン・フォー・オールの事を知っているのは極少数だから仕方がないけど。最初は私達も知らなかつたんだよ？ でも、虎がグラントリノのところに来た時に職場体験に行つて以来、たびたび会う機会があつたらしくてその流れで、ね……」

「はあー……やっぱり繋がりにんですね」

「にやはは！ ま、そんな感じだから無理してあちきらには隠し事はしないでいいよ！」

「わかりました」

そんな世間話をしながらもいい感じに目の前に聳え立つ崖が見えてきた。

「それじゃ緑谷さん。まずは山岳救助では絶対つて訳じゃないけど、崖登りの体験もしておいた方がいいわ。だから個性を使つてまずは崖の上まで登つてみましょうか」

「わかりました！」

「崖の上まで到着したらちよつとしたサブライズが待っているからそれもクリアして、そしたらまた崖を下つてきてここまで戻つてきたら時間も時間だから宿に戻りましょう」

「はい！」

「ちなみにクライミングの経験とかがあってあるかな？」

「いえ、初めてです」

「そう……それじゃいい経験だからどれくらいで崖の上まで登れるか挑戦ね」

そんな感じで出久はまずは増強系の三種の個性を発動して、さらには崖登りには適しているであろう爪を展開して硬質化させて、

「それじゃ行つてきます！」

「頑張つてねー！」

出久はそれで崖を足場がありそうな場所へと爪を伸ばしては岩に刺して落ちないように移動をしていく。

普通ならそういうのに適した安全な道具も必要となつてくるが、個性があるのであれば別になつてくる。

さらにはもう夜なのだから慎重に登らないと真つ逆さまに落下してしまう。

「慎重に……慎重に……」

そう言いながらも何度も素早い動きで登つていく出久の姿を見て、

「おー。最初にしては中々な登り具合じゃないか」

「やつぱり私達の目に狂いはなかった感じね」

「にやはは。いい掘り出し物だねー、あの子」

三人は鍛えがいがありそうだと思ひながら出久が崖の上まで登り切るのを待つていた。

しばらくして出久がなんとか崖の上まで登り終えると、

「みなさーん！ 登り終えましたよ！」

下の三人にそう叫ぶ。

「それじゃちよつとそこで戦闘訓練でもしてみよつかー!」

「えっ?」

出久は間拔けな声を出して、ふと気配を感じて背後に目を向けてみるとそこには2mはあるであろう魔獣の姿が何体もあつた。

「魔獣!?!」

身構える出久だが、そこで、

『緑谷さん』

「この声って、マンダレイのテレパス?」

『その魔獣はピクシーボブが個性で作りだした土くれの魔獣よ。雄英体育祭であなたの戦闘力は知っているけど改めて見せてちょうだい』

それからマンダレイのテレパスは聞こえなくなつたので、

「よし……! 魔獣は合わせて5体! いっくぞー!!」

そこから出久の戦いが始まつた。

ピクシーボブはそんな出久の戦いをリーダー内臓のアイマスクで見ている。

「うんうん。いい動きをするわね。私の土くれじゃちよつと相手にはならなそうね。」

あ、また一撃で一体撃破した」

「うーん……それじゃ明日は虎とグラントリノに実戦形式で鍛えてもらいましょうか」

「そうだねー」

「いいと思うよ。でも、少しだけ観察していてもつたいない光景があるね」

「どう言う事……?」

「うん。出久ちゃん、強いのは強いんだけど、足技を一切使用しないのよ」

「拳一辺倒って事……?」

「そう。爪の個性も拳に分類されるから仕方がないけど、もう少し足の方にも意識を向けてもらいたいね。せっかく脚力強化なんていうスキルもあるんだし」

「そうね。そこら辺は明日のカリキュラムに入れておきましょうか」

そんな話し合いをしているながらも出久は最後の一体を撃破して、登りよりも下りの方が辛い崖をなんとか下ってきた。

「どうだった? いい運動になったかしら?」

「はい。崖登りというのも初めての体験でどこの筋肉を使って登るのかとか考えさせられました」

「魔獣に関してはどうだった……?」

「はい。それなりに良い訓練が出来ました。土くれなのに意外と素早かったので倒すの

に時間を掛けちゃいましたけど……」

たはは……と笑う出久。

だが、それでピクシーボブは少しでも出久の実力を侮っていたようだった。

「うー……当然オールマイトには及ばなくてもそれなりのヴィランくらいの實力は持っていると思うただねー。君がもし男の子のまんまだったら私は放っておかなかったぞ?」

「それはどういう……?」

「ああ、気にしなくてもいいのよ? ただ、ちよつとね……」

まだ子供の出久の前で適齢期に関して話すのは情けないだろうという事でその話は流れていった。

「さ、それじゃ宿に戻ってお風呂にでも入りましょうか」

「賛成ー!」

「お風呂、いいわよね」

ワイプシの三人が騒ぐ中で、

「お、お風呂ですか……」

出久は顔を赤くさせて固まっていた。

そんな出久に気づいたのかマンダレイが話しかける。

「緑谷さん……？　もしかして女性の人達と一緒に風呂に入るのはまだ体験していませんか？」

「は、はい……性転換した後に女性としての生活に慣れるためにお母さんと一緒に入っていたんですけど、それ以外はからつきしで……。学校でもなんとか同じクラスのみんなと着替えをするのにはやっと最近慣れてきた感じですから」

「そう……それじゃこの際だからこの職場体験で慣らしちゃいませうか」
「え、ええ!？」

そんなこんなで出久はその後三人と一緒に露天風呂に入って裸の付き合いをしたのであった。

その際に色々とおハプニングがあったのだが、怪しい事でもないので割愛する事にする。

その後食事も食べて、何の因果か三人と一緒に布団に入って就寝して、その際に出久は眠りにつくまでに胸のドキドキが止まらなかつたという……。

NO. 036 幕間・男達の葛藤と思ひ

出久がグラントリノとともにワイプシのところまで向かっている途中で、爆豪、轟、飯田もそれぞれ職場体験を行っているところだった。

轟は嫌っていたエンデヴァアの事務所にわざわざ訪問し、この目でNo. 2の実力を確認するという自らの意思を持って。

飯田は兄、インゲニウムを再起不能にしたヒーロー殺し・ステインを私怨のために見つけてこの手で倒すために。

爆豪はもつと強くなるために、強いヒーローになるためにとりあえずは指名してきたNo. 4ヒーロー、ベストジーニストのもとへ。

今回はそんな三人の様子を描いていこうと思う……。

飯田はノーマルヒーロー・マニユアルとともに保須市市内をパトロールしていた。

「いやー、しかしまさかインゲニウムの弟さんがうちに来てくれるとは思っていなかったよ」

「いえ……」

「ただ、俺のところに来たつてのはなにか含みがあるんじゃないかな？ 保須市といえ
ばほら、ヒーロー殺しがいるじゃないか、今どこかにだけど」

「そうですね……」

飯田はその言葉になるべく無感情で答えた。

感づかれてしまったら同行が難しくなってしまうからだ。

「俺の勘違いならそれでいいんだよ？ でも、私怨で動くんだつたら俺は君を止めない
といけない。あくまでヒーローはヴィランを捕えるだけであつて、逮捕や刑罰を与える
権限はないんだ。それがたとえ学生だとしてもそれはもう立派な犯罪になってしまう
……。だから」

「大丈夫です……そこら辺はしつかりと習っていますから」

「ほつ……それならいいんだ。俺の勘違いですむならそれに越したことは無いからね」

マニユアルはそう言つて前を向いてパトロールを再開する。

飯田はそんなマニユアルに付いていきながらも、

「(でも、そうだとしても俺のこの感情のやり場をどこに向ければいいんだ……?)」

飯田は拳を思いつき握りしめて被っている仮面の内側では唇を噛んでいた。

そんな飯田を見ている猫が一匹……。

「ニヤンツ……」

ただただ恩人である出久の頼みで飯田を見張っているのであった。

轟はエンデヴァーの事務所でエンデヴァーと話をしていた。

「よく来たな焦凍。まさかお前から来てくれるとは思っていなかったぞ」

「仕方なくだ……。俺はお前がどんな仕事をしているのか知らねえ。だからこの目で見てやろうと思っただけだ」

「そうか。まあ構わないがな。それなら俺の仕事ぶりを見せてやらなければな」

エンデヴァーはそう言って笑みを浮かべる。

「しかし、あの緑谷は来てくれなかったのは残念だったな、焦凍……?」

「なんでここで緑谷の話題を出す……?」

「焦凍。親のよしみで言わせてもらおうが、あの娘はお前にとって出来た娘になるかもし

れないんだぞ？ 雄英体育祭ではお前の心を一時は解き放ってくれた。

あそこまで思ってくれるものなど昨今ではなかないぞ？」

「……………うるせえ」

轟はそれで顔を逸しながらも凶星だったらしく顔を赤くさせていた。

そんな息子の姿にまんざらでもないなと思うエンデヴァーであった。

「まあ、来なかったものは仕方がない。まずは遠征するぞ」

「どこにだ？」

「もちろん、今ちまたを騒がしているヒーロー殺し、ステインを捕獲するためだ。場所は保須市だ。準備をしろ」

「ああ……………（保須市か。確か、飯田の兄貴がやられた場所だったな……………飯田もそこに今職場体験に行っている。この不安は何だ……………？）」

そんな事を思いつつも轟はエンデヴァーとともに保須市へと遠征の準備を開始した。

爆豪はベストジーニストと二人だけで話をしていた。

部下達は今は下がらせている。

「正直言おう。僕は君をあまり快く思っていない」

「あ…………？」

「雄英体育祭は見させてもらった。確かに君はそれで優勝を果たしたのだから実力はあ
るだろう。だが、君はどちらかといえば性格がヴィラン寄りだ」

「うるせえよ…………」

「一回戦の女子との戦いはまあ見ていて冷や冷やものだったが、それでもそんなに被害
はなかったと言えよう。」

だが、決勝戦での戦いはまるで相手を言葉で術中に嵌めていくようにして選択肢を減
らしていった。戦いなものだからそれも戦術なのは分かる。

だが、君はあの緑谷出久さんにはなにかしらの因縁があるように思える。

おそらく選手宣誓で言った幼馴染と言うのは君の事なのだろう…………？

性転換してしまう前の姿を知っているとすれば、多少の遠慮もできてしまうのではな
いかね？」

「さつきからぐちぐちと…………それに俺は性転換した後のデクの奴に言ったんだよ！」

それで爆豪はまたあの時の言葉をベストジーニストに話す。

『クソデクはクソデクだ！ 男だろうが女だろうがてめえはてめえだろうが!!』
と。

それを聞いてベストジーニストは少し感心した様に声を出した。

「なるほど……。多少は筋は通しているわけだな」

「わりいかよ!？」

「いや、正直見直したよ。ガサツそうな君にもそういう貫くという感覚があるという事に」

「馬鹿にしとんのか!？」

怒る爆豪に「ハハハ」と受け流すベストジーニスト。

中々にやり辛いと感ずる爆豪。

だが、そこでベストジーニストはとある爆弾を落とす。

「なんとなくわかった。恐らく君は彼女になにかしらの罪悪感を感じているんじゃないかね?」

「……………は? 罪悪感?」

「君達の過去は知らないけど何となくわかる。君は彼女にそう言うて強く当たるのは自分の本心を隠そうとしているからだよね」

「そんな、そんなわけあるか!! 俺は、俺は!!」

そこで爆豪はフラッシュバックが起きたかのように過去の光景を脳内に連想してしまった。

……… 猟奇殺人を犯すヴィラン。

……… 出久が襲われてしまった。

……… 颯爽と助けようとしたがなぜか足が震えてしまい、出久が切り刻まれる光景をただただ隠れて見ているしかできなかつた過去の汚点。

……… 動けるようになった時にはそこには見るも無残な出久の姿。

オレハ タスケラレ ナカッタ。

「うわあああああああああああああああああああ
!!!!!!」

「ツ!?!」

気づけば爆豪は涙を大量に流して頭を抱えて地面に蹲ってしまっていた。

ベストジーニストはトラウマを踏んでしまったか、と後悔してなんとか落ち着かせるように心掛けた。

それからしばらくして、

「はあ………はあ………」

「ようやく落ち着いたか………大丈夫かね?」

「ああ………てめえ、俺のトラウマを抉りやがって………」

「すまなかつた。まさかここまで効果が出るとは思っていなかつたのでね。だけど、俄然気になった。君がそこまですて後悔した内容はどんなものなのか」

「性格悪いって言われねえか……?」

「僕は君を矯正するつもりだからね。もしよかつたら話してくれないか?」

「チツ……こんな醜態を見せちまつたからには話すしかねえじゃねーか」

そして爆豪はベストジーニストに出久と爆豪の過去を話す。

それを聞き終えて、

「なるほど……君は緑谷さんが傷つく光景を見たくないんだな」

「どう解釈したのかしんねーけど、概ねそうだ。だからあいつは無個性のままでもよかつ

たんだ……」

「君はそう判断しているんだね。でも、そうだね……緑谷さんはその話の猫のヒーロー

だつたんじゃないかい?」

「あ? どういう意味だ?」

「そうじゃないか。もしかしたらその猫は雄英の子津校長みたいになにかしらの個性を持つていて、よく言う猫の恩返しみたいに緑谷さんに自分と言う力を与えて、代わりに死んだと解釈すれば無個性だつた緑谷さんが猫の個性を宿したと思えば、なるほど辻褄が合うというものさ」

ベストジーニストのおおざっぱな解釈に、しかし爆豪はある意味確信を抱いた。「(そうだよ……突然変異だとしてもあんなに個性があるのはおかしい。後でデクに話を振ってみるか……?)」

そう考えた。

「それとだけど、君は緑谷さんと一回正面向かって話し合った方がいいと思うよ。色々彼女も誤解をしていそうだからね」

「俺がデクと正面を向いて話すだあ……? それができたら苦労はしねえよ」

「ダメもとでもしてみよう。そうすればもしかしたら君達の仲は改善するかもしれないよ?」

「話し合う、か……一応考えとくぜ」

こうして爆豪は多少の葛藤はあれど出久と一度話し合う事を決めた瞬間だった。

「うん。すつきりしたようで良かった。それはそれとして君の性格を矯正するのは僕の役目だってさつきに言ったね? この一週間でみっちりしごいてあげよう」

「負けねえかな! 俺は俺だ!!」

そんな感じでベストジーニストに核心を突かれた爆豪の一週間がスタートした。

NO. 037 合同職場体験・二日目 出久自身の戦い 方

職場体験二日目となって、出久はまたコスチュームに着替えて朝からグラントリノと虎とともに戦闘訓練を行っていた。

「よしー… どんどん打ちこんで来いー！」

「はいー！」

出久が拳を放てば虎はその柔軟な体でやすやすと回避を行う。

そこにグラントリノが何度も足から空気を吐き出して出久に高速で迫っていく。

ちなみに今戦闘訓練を行っているのはピクシーボブの個性によって形成された四角い部屋の中みみたいな場所である。

だからグラントリノは高度な三次元跳躍移動を可能としている。

「くっっー！」

猫の反射神経でなんとかグラントリノの姿を追う出久であったがまだ反応速度が追いつかないために何度も拳を受けてしまう。

そこにさらに追撃とばかりに虎が重たい拳を出久に当てようとして来る。

出久はなんとかその虎の拳を拳でぶつけることよつていなそうとするのだが、

「ふむ……足で牽制して拳を見舞うという戦術がないように見えるな。三人の言つた通り少しもつたないな」

虎にはそんな小手先の技術では通用するはずもなく一気に壁まで吹き飛ばされてしまふ。

壁に激突してずるずると崩れ落ちる出久に二人は、

「一旦休憩とするか……」

「ですな」

「あ、ありがとうございます……」

二人の許しを得て出久はその場で女の子座りをしながら軽く乱れた呼吸を正していた。

そこにグラントリノが歩いてきて、

「ふむ……体の方は出来上がっているようだな。これなら教えやすいな」

「ありがとうございます」

「オールマイトもたった一年であるがいい仕事をしたようだな。てつきり元から体が出来上がっていたあいつならもつと雑な教え方をして今の様な動きはできなかつただろ

うと思ったのだがな……」

「あ、それは恐らく僕の猫の方の個性である身体強化・怪力のおかげかと思えます。

この個性は初期頃に出てくれたおかげでオールマイトにワン・フォー・オールを託されるまではそれを雛形のように常時展開して鍛えていましたから」

「ほう……なるほどな。それならまあ理由も分からなくはないか。だが、もしその力がなかったらもつと出来ない状態だったと思うぞ？」

「あはは、確かに……」

「それに学生時代にすでに出来上がっていたからあいつからそう言う発想は出にくいからな」

「それって……オールマイトの学生時代の話ですか!」

「うむ。ただひたすら鍛えるために実戦訓練で毎度の事ゲロを吐かせておったわ」

出久はそれでオールマイトがあんなに恐れていたのか……と納得する。

そこにグラントリノが小さな声で憂いのこもった表情をしながら呟く。

「……生半可な扱いはできんかったからな。今は亡き盟友に後を任されたものだから」

「亡き盟友って……オールマイトの先代の事ですよね? お亡くなりになっていたんで

すか……?」

「なに？ 聞かされていないのか……？」

「は、はい……」

それでグラントリノは思案の顔をしながら、

「(俊典……お前はまだワン・フォー・オールを引き継ぐものの宿命を教えていないのか？ 後で叱っておくか。いずれはこの小娘も知らなければならぬ事だから……)」

そう判断して、だが今はその事は頭の片隅に置いておくことにした。

それよりも今は出久の強化プランを教えないといけないからだ。

「それよりお主。少しいいか？」

「はい。なんででしょうか？」

「恐らくだがまだお主はオールマイイトに倣っているところがあるだろう」

「それって……？」

「オールマイイトの振るう拳は確かに重く強い。それゆえにほとんどのヴィランはオールマイイトの一撃で倒されてきた。

だが、お主にはまだそんな強い力はない。

故に己自身の戦闘方法も開発していかないといけない」

「はあ………僕自身の戦闘方法」

「昨日の訓練の内容を聞けばお主はオールマイイトのように拳だけで戦っていたそうでは

ないか？　せつかく豊富な能力があるのにもつたいないとは思わんのか？」

「で、ですが使う時はハウリングとか炎の力とかもちゃんと使っていますし……」

「それもまあお主の力だろう。だが、せつかく“脚力強化”なんてスキルがあるのにそれを移動だけに使っているのは実に惜しい……。ワン・フォー・オールに身体強化・怪力と脚力強化の三つの力を同時発動する事によって、普段から常時使用している脚力の方が拳よりも数倍以上の力を発揮できるのであろう……？」

そのグラントリノの一からの自身の能力に見合った説明を聞いて出久はそこで考え込む。

「そうだ………確かに僕は今までオールマイトであるべきだと思って拳だけで戦ってきた……。でも、脚での戦闘を取り入れればさらに幅は広くなる……」

「そうだ。お主にはお主の個性に見合った戦い方と言うものがある。オールマイトではなく、お主だけの……」

「そうですね。シンプル過ぎて気づかなかったですけど、僕の戦い方を開発した方がいいですね」

「だろう？　だから今から足の訓練も取り入れてやってみんか？」

「いいと思います。でも、そうなると少し足の方の防具が不安定に過ぎますね」

出久はそう言って足に目を落とす。

動きやすい感じの膝まである軽い素材のブーツであるが、もし三つの個性を同時発動して本気を出したら破けてしまうかもしれないからだ。

「ふむ。では足の方の特訓は控えめにして、お主はお主で雄英高校に戻ったらサポート科のものに話を振ってみたらどうだね？」

「わかりました！ ちょうど話が分かりそうな人がいますから相談してみます」

出久の頭の中には雄英体育祭で協力したとある女子・サポート科の発目の顔が思い浮かべられていた。

相談をするならパイプを持ったものが一番だろう。

それから段々とパイプを広げていけば将来きつと役に立つてくれる。己にとっても相手にとっても。winwinの関係になれたらそれはもう力強いだろう。

そして今回だけでは身につかないと踏んでいるために、雄英に戻ったら飯田にも足技を教えてもらうのもいいだろうと思う出久。

それで飯田の事を思い出して、

「(飯田くん……無茶をしていないといいけど……)」

そう思っていた。

そんな感じでその後にもまた戦闘訓練を再開してグラントリノと虎に足技も含めて鍛えられながらも、午後は山岳救助に関して学びながらも一日がまた終わっていきこうとし

ていた。

そんな折に出久は夜になってどこかに行こうとしている冼汰の姿を発見して、悪いとは思ったが後を着いていくことにした。

実は昨日、マンダレイに就寝につくところに聞かされたのだ。

冼汰がヒーローを嫌う理由を……。

『冼汰の両親ね……二年前にとあるヴィランと戦って殉職しちゃったのよ。』

普通に育っていればヒーローを目指したんだろうけど、物心がつくくらいに年齢で先立たれちゃったから冼汰、ヒーローと言う人種に嫌悪感を抱いてすらいるの……』

『そんな事が……』

『だから実際私達にも一定の距離を置いているのよ。他に行くところがないから私達のところにいるのであって一緒にはいたくないんじゃないかな……?』

マンダレイはそう言って悲しそうに表情を曇らせた。

出久はそんな話を聞かされたのが起因して、このヒーローとヴィランの社会には色々な人がいるのだと気づかされた。

自分が介入してどうにかなる問題ではないが、それでも話に付き合う事ならできるかもしれない。

たとえきつい言葉を吐かれてもいい、出久はそういう人を放っておけないのだ……。到着した場所は見晴らしのいい崖の上の空間。そこで出久は見た。個性の訓練を隠れている洗汰の姿を……。

NO. 038 合同職場体験・二日目 出久と冼汰

冼汰が一人で壁に向かって個性である水を手のひらから噴き出して特訓している光景を見て出久は少しだけ意外そうに見ていた。

「（個性社会を嫌っていても……鍛えることはしているんだね……）」

そんな冼汰の姿を少しだけ見ていた出久だったが、そこで冼汰が出久が見ていることに気づいたのか、

「ツ！ てめえ！ いつから見ているやがった!？」

「あ……その、ごめん……少しだけ特訓しているところからかな……」

出久はそれでもう隠れる意味も無くなったので冼汰の前へと出て行った。

冼汰はそんな出久を目障りそうに見ながら言葉を零す。

「俺に何のようだ!? ここは俺のひみつきちなんだから出て行けよ!」

「秘密基地か……マンダレイとかも知らないの?」

「……うるせえ」

それで顔を逸らしてしまう冼汰。

そんな冼汰の姿が少しだけ痛々しく思った出久は、そこで冼汰のヒーローを嫌う核心の部分に触れようとしていた。

「さっきの水の個性だけど……君の両親つてもしかして『ウォーターホース』なの……？」

「ツ！ マンダレイか!？」

ここで一番怖い顔をしながら出久を睨んでくる冼汰に出久は少し竦み上がりながらも話を続ける。

「ごめん……でも、あの事件は残念な事件だったね」

「うるせえよ！ 他人事みたいに語るな!! だから俺はヒーローっていう人種が大っ嫌いなんだよ！ ヴィランとかヒーローとか！ なんて同じ人間なのに勝手に暴れて殺し合ってるんだよ！ イカレてるよ！」

「冼汰くん……」

冼汰はそれで出久の視線を逸らすように後ろを向いて座り込んでしまった。

そして一言「出て行けよ……」と突き放す。

出久はそんな姿が形は違うとはいえ自分に少し似ていると感じたのか、そんな冼汰の隣に座り込む。

「洗汰くん……君の気持ちもわからなくはないよ……。雄英体育祭の中継を見ていたかは分からないけど、僕ね……一年くらい前まで無個性だったんだ」

「は……？ 無、個性……？」

「うん……。今はこんな個性を持っているけど、昔はずっと無個性だと思い込んで、個性を持っていた周りのみんなは僕の事を無個性だって馬鹿にしてきて僕はずっと孤立していた……」

それは、超人社会では当たり前となってしまう光景なのかもしれない。

個性がないものはこの社会ではかなりの確率で下に見られてしまい、表舞台には出てこない人がほとんどである。

そんな人たちにも当然働く力はあれど、やはり比較されてしまう事は仕方がない。

ゆえに、ヒーローにもヴィランにもなれない弱い力の人達のもとで働くしかないのだ。

それが格差を生んでしまっていると気づいている者もいるにはいるが、それでも今更根付いてしまった社会の摂理は変えられない。

出久ももし個性が出ていなかったらそういう人のように静かに暮らしていただろう……。

「でも、そんな僕でも一度はヴィランに無個性で立ち向かった事があったんだ」

「立ち向かったって……無個性なのにか？」

「うん……。そのヴィランは動物を無差別に殺して回っていた猟奇殺人犯で、僕もとある猫を助けようとそいつに立ち向かったはいいんだけど、当時はまだ小学生で無個性も相まってあつさりど殺されそうになっちゃったんだ……。でも、殺されようとしていた猫は助けることが出来たんだと僕は重くなる瞼の中で感じていた……。」

だって、僕も昔から夢は叶わずともヒーローになりたいって思っていたから……」

「それで、お前はどうかになったんだ……」

「うん。結果的には瀕死の重傷を負って死にかけちゃった……僕を治療した人によれば、もう手遅れな状態だったんだって……」

「それじゃ、なんでお前は今こうして普通に生きてんだよ……？」

「救われた、からかな……？ その助けた猫に……」

「猫に……？」

「うん。その猫はなにかしらの個性を持っていたみたいで、僕に命を捧げたのかは分からないけど僕はそれで助かったんだ……。その猫は代わりに死んじやったんだけどね」

出久はそこで辛そうに顔を歪める。

自分の代わりに死んでしまったフォウ……。

どうにかできなかつたものかと思う出久。

だが、助けられてしまったからには生きないと……。
生きて、証を残さないと……。

「僕はとある事件でこの個性が発動するまでその猫が僕を助けてくれたことなんて微塵も知らなかったんだ。でも、当時の治療してくれた人に会う機会があつてその事を知れた……そして、思つたんだ。僕の中でその猫は僕の個性となつて今も生きているんだつて……。

だからつて、洗汰くんの話と合わせるわけじゃないんだけど、それでも思うんだ……。
君の両親は君にもきつとヒーローになつてもらいたかつたんだつて……。思つていたかどうかは分からないけどきつとそう僕は思うんだ。

ウォーターホースは確かに君を残して逝つてしまつたかもしれない。でも、そのおかげで守れた命も確かにあると思うんだつて……」

「あつ……」

それはいつかマンダレイが洗汰に話した言葉と被る内容。

聞かされたわけでもないだろう……だが出久はその同じ内容を洗汰に話す。

「そして、いつか君もきつと出会えるつて思うんだ。君にとつてのヒーローに……。

僕もとある人に出会うことが出来て、個性も出たばっかりで碌に扱えなかつた、そんな僕でもヒーローを目指すことが出来たから……。勇気を与えられたから……。だから

ら必死にそんな人のようになりたいと努力してきた。

だから洗汰くんも一方的にヒーローを嫌わなくて……？」

君の個性も親から受け継いだ力なんだから……。だから個性の練習をしていたんでしょ？」

そう出久は話しながら洗汰に笑顔を向けていた。

そんな出久の表情を見て洗汰は恥ずかしかったのか、「ふんっ……」と顔を逸らしてしまふ。

「ま、まあ……少しはお前の気持ちも受け取っておくよ……。今度、マンダレイに謝っておく……。こんな俺を預かってくれたのに、いつも無視を続けていたから……」

「そっか……。うん、いいと思うよ。それと、ごめんね」

そこで出久は謝ってきていた。

そんな光景に洗汰は不思議そうに首を傾げながら出久に尋ねる。

「なんでお前が謝るんだよ……？」

「うん。僕って結構相手の気持ちに気づけずけと入っていつちやう癖があるから、今回も洗汰くんの気持ちを無視して話し続けちゃったし……」

あはは……。と出久は力なく苦笑いを零す。

「そんなことねーよー」

「冼汰くん……?」

そこで冼汰が叫ぶ。

「お前は俺の気持ちを理解してくれた! お前の過去も話してくれた! だからお前なら信用できるって……そう思う。きつと、いつかお前が言うように俺の前にもヒーローが現れてくれるかもしれないって……それはもしかしたらお前の事なんじゃないかなって……、……はっ!?」

そこで冼汰は自分が言っている事が実に恥ずかしい事なんだって悟って思いっきり顔をまた逸らしてしまっていた。

そんな冼汰の姿に出久は笑みを浮かべながらも、

「ふふ……。うん、君のヒーローになれたんなら僕もちよつとだけ嬉しいかな?」

「……………」

冼汰はもう恥ずかしいのか顔を赤くさせて俯いてしまっていた。

「……マンダレイのところに帰ろうか? そして話すんでしょ?」

「ああ……………」

そんな感じで出久と冼汰は手を繋ぎながら事務所へと戻っていった。冼汰はマンダレイに「今までごめん……」つと、謝った。

それでマンダレイは嬉しそうに冼汰を抱きしめたのはいい光景だと出久は思った。

そこにグラントリノが出久に近づいて、

「さっそく一人の少年の心を救ったんだな、小娘」

「はい。たまたま境遇が似ていたからって事もありましたけどなんとかなってよかったです……」

「うむ。まあ、いい事だな」

その後にはマンダレイにも感謝をされて出久はその晩はいい気持ちで眠ることが出来たそうだ。

NO. 039 合同職場体験・三日目 保須市混乱

職場体験は三日目ともなり、そろそろ五人とも出久に本格的にヴィランとの戦い方を学ばせた方がいいと思っただために、グラントリノがお昼を過ぎたあたりでとある相談を出久に持ち掛けていた。

「よし。それでは小娘。そろそろ職場体験を本格的にしようではないか!」

「え!? 今まででも十分職場体験だったと思うんですが!」

「いやいや。まだヴィランとの遭遇と言う経験をしていない。だからこれから町に出てヴィラン退治と行こうではないか」

「おー!」

それで声を上げる出久。

「まあ今から出かけるには訳がある。のう、マンダレイ?」

「はい。今から緑谷さんとグラントリノのお二人だけで渋谷に向かってもらうのだけど、来てもらった時の移動時間は分かっているとと思うけど渋谷につく頃にはもう夕方か

夜になっているから、今日の夜と明日は渋谷でヴィランの搜索をして五日目にまたこちらに帰ってくる算段ね」

「なるほど……やつぱり移動手段がここからだとネットですからね」

「という訳じゃ。さっさと準備をせい！」

「わかりました！」

それで支度をした後に、

「その、出久お姉ちゃん……頑張つて来いよ」

「うん、ありがとね洗汰くん」

ワイプシのみんなにそれで弄られている洗汰の光景を見ながらも別れて、出久とグラントリノは移動を開始した。

それから少し時間は経過して、そろそろ気がかりである保須市の前を新幹線が通るのを感じた出久は携帯を出して連絡を取ろうとする。

「まったく！ 近頃の若者は……座りスマホなんてせん方がいいぞ？」

「す、すみません……」

だが、出久は携帯で飯田に向けて『今から保須市の前に通るよ。そつちは大丈夫？』という文章を送ったのだが、いつもなら3分以内に返信が来るのにまったく返信が返ってこない。

その事に一途の不安を覚えた出久。
そんな時だった。

『お客様、座席にお掴まりください！ 緊急停止します！』

そんなアナウンスとともに、突如として新幹線の外側から何者かが外壁を壊して侵入してきた。

それによって混乱する乗客達。

見ればそこにはヒーローらしき人物と、いつか見た強敵に似たヴィラン……脳無の姿があった。

「小娘！ ここに座っている!!」

すぐさまグラントリノが新幹線から脳無を引きはがすために突撃してそのまま保須市の中へと入って行ってしまった。

「グラントリノ……!!」

脳無の突撃してきた穴から外を見る出久は保須市の異変にすぐに気づく。
あちこちで火の手が上がっているのだ。
これはただ事ではない。

そう確信した出久は新幹線が完全に停止した後、

「すみません！ 僕、出ます！」

「君！ 待ちなさい!!」

乗務員の言葉を置き去りにして出久も保須市の中へと入っていった。

「嫌な予感がする！ 急がないと！」

瞬時に強化をして出久は走った。

その頃、飯田は兄、インゲニウムを倒した宿敵、ステインと遭遇していた。

ステインは一人のヒーローを殺すために路地裏で捕らえて殺そうとしたが、そこに異変を察した飯田が突撃を掛けていたのだ。

「なんだ……？ スーツを着た子供か？」

ステインは怪訝な表情を浮かべながら、

「ここから去れ……ガキの立ち入っていい領域ではないぞ……う？」

「血のように紅い巻物と全身に携帯した刃物……貴様がヒーロー殺し、ステインなんだな!! そうだな!!」

飯田はステインを発見できたことを僥倖に思う。

ここで兄の仇を討つ。

そのためにこの保須市までわざわざやってきたのだ。

その思いとともに思いっきりステインを睨む。

「その目……どうやら仇討ちのようだな……ハア……ここから先の言葉には気を付けろよ？」 時と場合によってはお前でも容赦はしない」

それは暗に飯田など標的ではないと言っている事。

その事に飯田は憤慨しながらも宣言する。

「標的ですから……無いって事か。ならば聞け、犯罪者！ 僕は。お前にやられた立派なヒーロー、最高の人だった兄さん……その弟だ！ 僕の名を生涯一片たりとも忘れるな！！——インゲニウム……貴様を倒すヒーローの名だ！！」

「そうか。……ハア……それじゃ死ぬ……」

そして飯田とステインの戦闘が開始されてしまった。

それをずっと見ていたとある猫はすぐに救援を呼ぶためにその場を離れていった。

出久はただひたすらに走っていた。

どうすればいいかなんて分からない。

だが、今自分が出来ることを考えないといけない。

今、この保須市には飯田がいる。

きつと、今もどこかで戦っているはずだ。

逃げる人々の道を逆走していきながらも騒ぎの中心へと到着した出久はそこでとても最悪な光景を目にする。

それは……何人ものヒーローと何体もの脳無が戦闘をしているところを……。

「脳無がこんなにたくさん!？」

さらには飯田とともにいるはずであるノーマルヒーロー・マニュアルが飯田の名を呼んで探していたのだ。

飯田が一緒にいない。

それで出久の脳内では警報が鳴り響いていた。

「(保須市……飯田君……脳無らしき奴ら……ヒーロー、殺し……!!)」

その連想するワードを並べていつて出久はこう判断した。

恐らくだがヴィラン連合とステインが手を組んでいる。

そして飯田はステインを見つけてしまっただけで現在戦闘中だという事……。

そう判断を終えて、出久は路地裏に入っていく。

そして、

「にゃあああああああ……!!!」

その場で大きく叫んだ。

しかし、今回は特別な叫びである。

それは猫にしか聞こえない周波数の叫びであり、緊急コールを発したのだ。そしてすぐさま出久の周りに集まってくる野生の猫達。

その中に、

「君、飯田君と一緒に行かせた猫だよね!？」

「ニヤツ!!」

「僕を飯田君の場所に連れてって!」

出久はそれで大勢の猫達と一緒に飯田のもとへと向かって走っていった。

「待っていてね、飯田君!!」

無事できてくれと言う祈りをしつつ出久は走っていった。

そして、

「あああああ!!」

飯田はひたすらステインに脚での攻撃を与えようと奮闘していたが、ステインの回避

の速度は尋常ではなく悉く避けられてしまう。

「あのインゲニウムの弟か……ハア……奴は俺の伝聞のために生かしたが……ハア……お前は……殺す」

その宣言とともに飯田の腕を棘付きのシューズで踏み抜いた。

吹き上がる鮮血。

苦悶の表情を浮かべる飯田。

そしてそのまま足で地面に組み敷かれて、さらには持っている刀で右肩を貫かれる。

さらに叫び声を上げる。

「お前も兄も弱い……偽物だからだ」

「黙れ犯罪者……兄さんはもうヒーローとして活動できない程にお前に体を壊された……兄さんは多くの人を助けて活躍する立派なヒーローだったんだ！ お前がそれで兄さんの将来を潰していい理由にはならない！」

そこで飯田は様々な兄、インゲニウムの活躍を脳裏に浮かべる。

いつでもかっこよかった兄さん……。

どんな苦境でも諦めないでヴィランと戦っていた兄さん……。

自分の力が困っている人の役に立てるように頑張ると言った兄さん……。

様々な思いが飯田の脳裏をよぎって涙を流し始める飯田。

「僕のヒーローだったんだ！ 僕に夢を抱かせてくれたんだ！ そんな兄さんを！ 殺してやる！」

「あいつをまず助けろよ……う？」

飯田の叫びにステインはただ一言その言葉を発した。

あいつとは飯田が駆け付けるまでステインと戦っていたヒーロー。

ステインは語る。

——自らを顧みずに他者を救い出せ。

——己のために力を振るうな。

——目先の憎しみに捉われて私欲を満たすなどヒーローとしてもっともしてはいけない事。

「だからお前たちは偽物なんだよ……」

ステインは刀についている飯田の血を舐めた。

瞬間に重圧がかかったかのように動けなくなる飯田。

「じゃーな……正しき社会への供物……」

ステインが動けないでいる飯田に刀を振り下ろしてとどめを刺そうとしたその時だった。

「『『『にやあつ!!』』』」

「ッ!?!」

突如として大量の猫がステインを覆うように、飯田を守るようにステインに襲い掛かっていった。

「なんだ、この猫は……!?!」

ステインは咄嗟に腕を振るって叩き落とそうとしたが、そこでさらに迫って来る何者かの気配。

ステインがその気配に気づいた時にはすでに目の前に拳が見えていた。

拳は直撃してステインは大きく吹き飛ばされる。

「間に合った! 助けに来たよ、飯田君!!」

「み、緑谷くん!?!」

出久が飯田を助けるためにやってきたのであった。

NO. 040 合同職場体験・三日目 VS スティン

ワイドショーやちまたでは悪名轟くほどの名を持つ『ヒーロー殺し・スティン』。殺したヒーローの被害履歴の6割が人気のない死角で発見される事がある。

出久はそれもあるだろうが、やはり一番は飯田をずっと尾行^つしていた猫の功績でもある。

それですぐに辿り着く事に成功したのだ。

「飯田君！ 無事!?!」

「い、いや……奴の個性なのか体が動かせない……体を切られてからだから……」

「やっぱり……情報通りだ。斬るのが条件なのかな……? とりあえず、猫さん達は逃げて!」

まずは手伝ってくれた猫達を退避させた後に、スティンから目を離さずに観察しながらも出久は飯田以外にも一人ヒーローが倒れている事に気づいて苦い顔をする。

飯田一人なら高速移動をかませばすぐに逃げうせることは可能だ。

だが、二人も担ぐとなれば速度が落ちて追いつかれてしまう。

どうすればこの現状を打破できるのか出久は頭の中で隙を作らずに警戒しながら考える。

だが、そこで飯田から思いもよらない言葉が発せられた。

「緑谷君……君は手を出すな……君は、関係ないだろ!!」

「なんで!?! 飯田君は今動けないから動ける僕がいないと!」

「それでも……だ」

飯田はすでに意固地になってしまっていて出久の助けを必要としないほどまでに頭に血が昇ってしまっていた。

そんな飯田の事をつまらなそうにステインは見ながらも、

『助けに来た』か……いいセリフだ小娘」

ステインは出久を真つすぐに目に据えながら『だが』と問う。

「俺は今からそいつらを殺さなきゃいけない。ヒーローの偽物は排除しなければならぬ。

女といえど、ぶつかり合えば……弱い方が淘汰されることになるが……さあ、お前は
どうする……?」

ステインの威圧に出久は圧倒された。

そういう犯人たちはなにかしらの『圧』を持っているものだとして以前にオールマイトに

聞かされていた出久は、それでもどうにかして時間を稼いでヒーロー殺しを食い止める。

そういう考えに至ったために、裏手で現在位置の情報を仲間のみんなに一齐に送信し、携帯は仕舞った後に拳を構えて、だがそこでまだ意固地の飯田が「君には関係ない事だ。逃げる!!」と宣ってくる。

「飯田君、友達でしょ？ それにヒーローの何たるかを十分に知っている飯田君からそんな独りよがりの言葉なんて聞きたくない……他にも言いたいことは色々ある……でも後にする……」

助けは呼んだ、守る命は二つ。逃げるなんていう選択肢は最初から除外。

出来る限り足掻こう。

出久は再度拳を構えながら、

「オールマイトが前に言っていた……」余計なお世話はヒーローの本質「なんだって……!」だから飯田君が何と言おうと僕は飯田君達を守るよ!」

ステインにそう言っただけで睨みを利かせた。

その出久の言葉に、覚悟にステインは久しく喜びの感情を抱いた。

———そうだ。ヒーローとは戦う相手に恐れはあれ、力量の差はあれ、それでも勇気を持ってヴィランには背を向けずに守ろうとするものを定めて立ち向かっていくもの

だ。

この小娘はヒーローたる資格を持ちうる人間だ、と。

「小娘……ハア……おまえ、良いな」

「ッ！」

出久は実力の差は当然あってしかるものだと判断して最初から全力で挑む決意をして、

「一気に詰める！」

瞬間的な脚力強化による高速移動をして何度も路地裏の壁を跳ねていき、ステインは何度も視線を彷徨わせて出久の動きを捉えようとする。

「そこかー！」

ステインが振り向いた先は己の目の前だった。

刀を振り抜いたステインだったが、もうすでに出久の姿は掻き消えていた。

「ぬう!？」

気づけばステインの足下を潜り抜けたのか背後へと移動をしていたのだ。

そして、

「はあっ!!」

一気に手のひらをかざして炎を噴き出しステインを覆い尽くす。

さすがに多数の個性を持つ出久にステインも一瞬思考を停止するが、すぐにバックステップして避けることに成功する。

隠しナイフを出久に放とうとするが、

「にやああああああ!!」

それをさせまいと出久はハウリング・インパクトを放ち、すべてを叩き落とす。同時にステインも衝撃波で壁まで叩きつけられる。

「ぐう……ハア……なんだ、お前……? その複数の個性は?」

「そう簡単に教えると思えますか?」

「だろぅな……ならば手数で圧倒するでしょう」

ステインは鍛えた自慢の移動速度で出久に接近戦を試みる。

刀は仕舞い、両手にナイフを構えている。

ならばと出久も爪牙を展開して、接近戦を行う。

それが、ステインの狙いだと気づかずに……。

「シッ!」

「はっ!」

それからナイフと爪がぶつかり合う。

ナイフによる刺突で、ぶつかるたびに鋼鉄化しているにもかかわらず衝撃が伝わって

くる。

やはり油断できない！そう出久は判断して一気にステインへの間合いを詰めていく。「間合いを詰めるのも戦略的にはいい……だが」

出久が気づいた時には手のひらが少しだけ切られていた。

いつの間には!?と言う思考をする出久だが、なぜかまだ動けることに違和感を覚えた。

斬られる事で発動する個性ではない……？

それでステインに視線を送ってみると、なんとステインはナイフについた出久の血を舐めていたのだ。

「ツツツ!？」

瞬間、出久はその場で足をついて動けなくなってしまった。

「(そうか！ ステインの個性は血の摂取による相手の束縛!!) ……くっ!」

やられる!と思った出久だったが、ステインは動けなくなった出久を素通りした。

目指すは飯田が倒れている方向だった。

「お前は良い……志と言い、度胸、覚悟、技量も……口先だけの人間ではないと判断した。こいつらとは違い、お前は生かす価値がある……」

そう言いながらもステインは飯田を刺し殺そうとする。

「飯田君！ やめて……!!!」

出久が叫んだ時だった。

そこに燃え上る赤い炎が通過していきステインはなんとか避けた。

「今日はよく邪魔が入るな……」

ステインがそう愚痴って見た先には、

「……………緑谷。こういうのはもつと詳しく書いてくれないと分からないだろう？ 遅

くなつちまつたじゃねえか」

「轟君!!」

そこには轟焦凍の姿があつたのだ。

「どうして轟くんがここに!?!」

「どうしてってというのは俺の方だ……緑谷は違う場所だったろう？ それに少しだけ考

えさせられた。一括送信で位置情報だけってことは……緑谷が意味なくこういうこと

する奴じゃないから、救援を呼べってことだろ?」

そう言いながらも轟は氷を展開して動けないでいる全員を滑らせて自身の背後へと

運ぶ。

そして炎を使ってステインに放つ。

「大丈夫だ。すぐにプロが来る。そして情報通りだな。俺の友人たちは……やらせねえ

ぞ。ヒーロー殺し!」

「轟くん！ ステインに血を摂取させちゃいけない！ それで動けなくなっちゃう！」

「なるほど……それか。しかし、女の血を飲むなんて……お前、変態だな」

「ぐっ……」

轟的的確なセリフにステインは少しだけだがたじろぐ。

そんな隙を見逃さなかった轟はすぐに仕掛けようとして……飛んできたナイフを頬に掠らされていた。

「(ツ?!) すぐに復帰していつの間にかナイフを投げただと?! やべえ！」

血を出してしまった事に焦る轟。

ステインはすぐに接近してきて血を舐めようとして来る。

「インゲンニウム……いい友達を持ったじゃないか」

「くっ……い！」

ナイフを投げたり、刀を宙に投げたりしてなんとか轟の動きを封じに駆けようとして来るステインに、なんとか凌いでいる轟。

だが、力の差は歴然であるのももう分かった。

なんとか凌ぐしかないという出久と同じ判断をした瞬間だった。

しかし、ここでまた飯田が意固地のまま轟に言う。

「二人とも、やめてくれ！ そいつは僕が！ 兄さんの名を継いだ僕が仕留めるんだ！」

「継いだのか……だがおかしいな。俺が見た事があるインゲニウムはそんな顔をしなかつたぞ？ お前んちも色々あるんだな……」

自身の家の事情も相まって轟は飯田にシンパシーじみたものを覚えていた。

されど戦闘はしつかりとこなす。でないとやられてしまうからだ。

格上の相手……隙など見せていられないからだ。

出久はなんとか動けないかと思っていた。

その時だった。

「(動かせる!)」

一方で、ステインは轟の頭上をとっていた。

だが、そこで出久のハウリング・インパクトがさく裂してまたしてもステインは吹き

飛ばされる。

「緑谷!？」

「なんとか動かせるようになった! なにかの条件があるみたい!」

「つてことは……血液型か!？」

それで倒れているヒーロー『ネイティヴ』はB型。飯田はA型。

そして出久はO型であることから。

「つてことは血液型で決まりだな」

「ハア……正解だ。だが、それが分かったからと言ってお前たちに勝ちを譲るつもりはないぞ」

そう言うつてステインはまたナイフを構えている。

「奴の反応速度は半端ねえ……」

「うん。轟君と僕の炎も避けられるほどだからね」

「だから二人を担いでの移動は難がある。だからどうにか粘つてプロが来るまで耐えるぞ」

「うん！ 頑張る！」

「ああ。頼りにしているぞ緑谷。二人で守るんだ……！」

こうして出久と轟のタッグが成立したのであった。

飯田はそんな光景を見せられて涙を流しながらも、

「もう、やめてくれ……僕は」

「やめてほしけりや立て！ なりてえもんちゃんに見ろ!!」

轟の気持ちがかもつた叫びに飯田は心に火が点いた気がした。

NO. 041 合同職場体験・三日目 決着

出久と轟の二人がステインと戦っている中で、一人地面に伏せている飯田は轟の言葉に気づかされて己の不甲斐なさに涙を流していた。

過去に出久達に話した言葉を思い出す。

『規律を重んじ、そして人を導く愛すべきヒーロー!! 俺はそんな兄に憧れ、ヒーローを志した』

だが、今の自分はどうか？

『インゲニウム……貴様を倒すヒーローの名だ!!』

ステインに向けて言い放ったその言葉。

本当に自分はヒーローになれているのか？

答えは否だ。

憎しみだけを発散するために兄のヒーロー名を使ってしまった。

これでは兄に顔向けができないではないか。

見れば友の二人は、こんな自分を守り、ステインとの戦いで血を流している。出久に

至ってはまた腕を切られて動けなくなってしまっていた。

飯田はその状況も鑑みて己がいかにばかな事をしていたのかを悟る。

過去の兄とのやり取りでも兄のヒーローとしての方針を汲むことが出来なかった。

「（お前のいう通りだ、ヒーロー殺し……僕は、緑谷君や轟君とは違い、どうしようもない未熟者だ！ 今の僕では足元にも及ばないだろう……それでも！）」

飯田は身体に力が戻ってくる感覚を得る。

そしてステインはちやうど轟をその刀で切り伏せる直前であった。

「（今ここで立たなきゃ！ 二度と!! もう二度と彼らに、兄さんに追いつけなくなってしまおう!）」

レシプロバーストを発動した飯田が放った蹴撃がステインの刀を破壊した。

続きざまにステインへと蹴りを見舞うがガードされるに至る。

だが、それでも飯田は立ち上がった。

「飯田君!」

「ようやく解けたか……案外大したことねーんだな」

それで出久と轟は二人して安心した。

「轟君も……緑谷君も……関係ない事に巻き込んでしまい……申し訳ない……」

「飯田君! そんな悲しい事言わないでよ! そんな言葉、聞きたくない!」

「緑谷の言う通りだ。独りよがり過ぎてるぞ」

「本当に、すまない……だからもう、君たち二人に血を流してほしくないんだ……」

飯田のその言葉に、しかしステインはこう答える。

「感化され取り繕おうとも無駄だ。人の本質はそう易々と変わらない……」

非情にも飯田の言葉を否定したステイン。

そう、私欲を優先させるものはいずれ偽物になり果てる。

ヒーローと言うものを歪ませる社会のガンになる。

今のうちに排除しておかないといけない……。

ステインのその精神の元、飯田を再度殺す気でいた。

飯田は、そのステインの言葉を、認めた……。

「貴様の言う通りだ。僕にヒーローを名乗る資格は……ない。それでも……ここで折れ

てしまったら、インゲニウムは本当の意味で死んでしまう！」

「論外」

その一言で飯田の言葉は完全に否定されてしまった。

後はもう煮るなり焼くなりしてしまわねば。

お互いに理解などする機会はどうの昔に失われているのだ。

ステインもいい加減時間を掛け過ぎたために焦っている。

攻撃が単調になってきていた。

轟と飯田の二人で奴に対抗するために、策を練ろうとしている一方で、出久もふらりと立ち上がる。

二回目の復帰。

されど、利き腕はナイフで切られている為に今は碌に使えないだろう。

ならば、今こそ使う時ではないか？

グラントリノとワイルドワイルドプッシーキャッツとの訓練で付け焼刃ではあるが身についた新たな戦術。

飯田と出久がステインに向けて飛び上がるのはほぼ同時だった。

ステインも出久の復帰の事が頭から抜けていたために反応が疎かになってしまっていた。

そして決まる。

「フルカウル！ シュートスタイル!!」

「レシプロ・エクステンド!!」

クロスカウンターならぬ、クロス蹴りが炸裂してステインは空中で姿勢を崩す。

「たたみかけろ!!」

「飯田君、避けて!! 渾身の!!」

出久は飯田が再度ステインに蹴りをお見舞いした後に、今までで思いつきり空気を吸い込んで放つハウリング・インパクト。

もとよりもう反撃する力さえ残っていなかったステインはそれをもろに直撃を受けてそのまま壁に激突して気を失った。

「勝った、のか……?」

「なんとかなったの……?」

「気絶しているようだな……」

そして見ているだけであつたネイティヴも含めて四人は安心のため息を吐いた。

「とりあえず、何か縛るものでも持ってきてきて拘束するか」

「武器とか全部外しておこう……」

「だな。それより緑谷、腕や足は大丈夫か……?」

「うん。痛いけどこのくらいならまだ動かせるから。でも、初めて実戦で足の攻撃を使用したから加減が利かなくてシューズが破れちゃったし、足の方が少し痛い……」

そう、今出久はほぼ両足とも裸足の状態で少し痛々しかった。

もしかしたらぶつつけ本番のために足にひびが入ったかもしれない。

「それじゃ俺が君を運ぶよ……女の子をそのままにしておくわけにはいかないからね。後でコスチュームを修繕に出しておいた方がいいだろう。魔改造されない程度に……」

「あはは。はい……」

ネイティブにそう言われて出久は素直に返事をした。

もとより出久はコスチュームを改善してもらったので渡りに船であった。

「轟君、やはり俺が運ぼうか？ 君も腕とか結構やばいだろう」

「お前ほどじゃないから安心しろ」

そんな感じでステインを引つ張る四人は表に出てきた。

するとそこに脳無（？）と戦っていたはずのグラントリノの姿があり、

「!? 小娘、なぜここにいる！ 座つてろつて言っただろう!？」

「す、すみませんグラントリノ……ところでもうそつちは解決したんですか？」

「概ねな」

それから他にもヒーロー達がやってきて、ステインを見て驚愕していたりしていた。

聞くところによるとエンデヴァーの使いの者達らしい。

一安心したのか、飯田は出久と轟に頭を下げてきた。

「二人とも……すまない。僕がもつとうまく立ち回つていれば君達にもケガを負わすことは無かつただろう。だから、すまなかつた……何も、見えなくなつて……しまつていた……」

飯田は心から自身の行いを恥てひたすら涙を流しながら謝罪をしていた。

「僕の方もごめんね……もつと強く話を聞いてあげられていたらよかったのに……友達失格だね」

「そんな事は……ッ！」

「緑谷に落ち度はないと思うがな。それよりしつかりしてくれよ、委員長」

「うん……」

こうして出久達の短いようで長く感じた戦いが終わろうとしていた矢先だった。

グラントリノが突然「伏せろ!!」と叫んだのだ。

何事かと思ったら出久達の方に向かって翼を生やした脳無が傷つきながらも飛翔して来ていた。

そしてなぜか出久を掴んでどこかへと連れ去ろうとしていた。

「緑谷君!!」

「緑谷!!」

「わああああ?!」

現状で傷だらけであつた出久には対抗する術がなく、万事休すかと思われたが、その脳無が流していた血を目を覚ましていたステインが縄から抜け出して舐めていたために脳無はその場で力を失い、さらにはステインがナイフで脳を突き刺して殺してしまつていた。

「偽物がはびこるこの社会も、徒に『力』を振りまく犯罪者も、……ハア……肅清対象だ……すべては正しき社会のために……」

そう呟くようにステインは喋る。

迷うことなく脳無を殺したステインにヒーロー達も戦慄を感じながらも拘束しようとして動き出そうとするが、出久が人質に取られるかもしれないために迂闊に動けない。

そこにエンデヴァーも遅れてやってきて、

「なにを一塊で突っ立っている！ 動かんか！」

「エンデヴァーさん！ ですが、女の子が人質に！」

「ぬっ!? あれは、緑谷！ そしてヒーロー殺しか！」

それでエンデヴァーはすぐに出久を救おうと走り出そうとするが、次の瞬間。

圧倒的な殺意の波動が全員を襲う。

「偽物……正さねば……誰かが血に染まらねば!! 『英雄』^{ヒーロー}を取り戻さねば!!」

そのステインの殺意にさすがのエンデヴァーも動きを止めてしまう。

ステインが一步足を踏み込む。

「来い……来てみろ！ 偽物どもが!! 俺を本当の意味で殺していいのは……
本物の英雄^{オールドマイト}だけだ!!!」

その圧倒的な威圧感によつて全員は汗を垂らし、腰を抜かすものも数名いた。だが、ふとその威圧感は消え失せ、見ればステインは立ったまま気絶していた。

その拭いきれない殺意に全員はもうステインは気を失っているというのに嫌な汗を掻いてしまつていた。

その後ステインは逮捕されて補導されていつて、出久達は三人とも病院送りとなつた。

……こうして保須市での事件は幕を閉じていった。

それを高みの見物をしていた死柄木弔は、

「……………もういい。帰ろうか」

「いいのですか……………」

「ああ。どうせ奴は俺らとは馴染まない。なら助ける道理もないね。それに……………今日の事で明日にはどうせ騒ぎになるだろうしな」

「脳無とステインが同時に暴れた事でヴィラン連合の関係が疑われるのは予想済みですからね」

「そうだ。だからせいぜい良いように使わせてもらおうとするよ、先輩……………」

そして死柄木弔は黒霧のワープでその場から消え去った。

NO. 042 保須総合病院にて

ステインとヴィラン連合の脳無が保須市で暴れてから一夜が明けて、保須総合病院では出久達三人が病室で話し合っていた。

出久に関しては女性なので別室での入院となっているが、そんなに傷は深くないので飯田と轟の二人がいる部屋へと遊びに来ている感じであった。

少し女性として意識に欠けているとは思いますが、それを咎める者はいない。

「でも、一夜明けて思ったけど……やっぱりすごいことをしちやっただよね」

出久のその言葉に「そうだな」と轟が返事をする。

三人とも腕の被害が一番酷かったので包帯がぐるぐると巻かれていた。

だからなのかもしれないが、腕ではあんまり響くので言葉だけお互いに表現しあっている。

そんな中で出久は話す。

「僕の腕……殺そうと思えば飛ばす事だっただけだと思っただけ……」

「それは俺も感じた事だ。あからさまに生かさされた感じだな……その点、飯田は凄いな。本気の殺意を向けられていたのに立ち向かったんだから。助けに来たつもりが助けられちゃったしな……」

「ごめんね、もつとうまくできたらよかつたんだけど……」

出久と轟は飯田に向かってすまなそうに謝る。

飯田はそんな二人を見て「そんな事はない」と一言入れて、「俺は……」となにかを話そうとしていたがそこで病室に來客の姿があつた。

「む？ 小娘、病室にいないと思つたらやっぱりこつちに遊びに来ていたか」

「あ、グラントリノ。それにマニユアルさんも……それと」

グラントリノとマニユアルの二人の後ろにはなにやら面構えがすごい人が立っていた。た。

一言で言えばリアル犬の顔をしている人であつた。

その人は前に出てきて三人に話しかける。

「ああ。お前たちに來客だ」

「お初にお目にかかる。私は保須警察署署長の『面構犬嗣』だワン」

「つ、面構！ 署、署長!？」

名前通りの面構に出久は驚愕の表情を浮かべる。

それと気になったのが『ワン』という語尾である。

それでわざわざ来てもらったのだから立ち上がろうとしたが、

「掛けたままで結構だワン。君達がヒーロー殺しを仕留めた雄英生徒達だワンね」

面構はそう言っただけで挨拶をした後に、ステインの現状などを教えていった。

火傷に骨折をしていたために現在治療中だということ。

傷が治り次第、監獄に入れるという事も。

そして次に話されるのが警察とヒーローの役割について。

警察は超常黎明期に統率と規格を重要視したために、個性による行動を禁止している。

その穴埋めにヒーロー達が収まった事など。

「個人の武力行使……簡単に人を殺すことが出来る力……本来なら糾弾されてしかるべき行いが公けに認められているのは先の時代での人たちが様々なルールを遵守してきた結果だワン」

ゆえに、ヒーロー免許未取得者が保護管理の指示なく個性で危害を加えることは、それが例えヒーロー殺しと言えど規則違反になってしまふということ。

出久に轟、飯田。さらにはグラントリノ、エンデヴァー、マニユアルにも然るべき罰が与えられるという事。

だがそこで轟が面構に嘯みついた。

「待つてくさいよ。そうだとしたら飯田が動いてなかったらネイティヴさんは殺されていたし、緑谷が助けに入っていなかったら二人とも殺されていた。ヒーロー殺しの出現は誰にも予測はできなかった。規則を守って見殺しにしろって事ですか!」

「轟君、待つて!」

「なら結果オーライであれば規則を有耶無耶にしてもいいと?」

出久がなんとか止めたのだが面構のその言葉に轟は青筋を浮かばせる。

そして、

「人を助けるのが、ヒーローの役目だろ!」

と、己の内の感情を暴露させた。

轟のその必死の表情に面構は「やれやれ」と言葉を発した後、

「だから……君はまだ『卵』だまつたく……雄英もエンデヴァーもいい教育をしているね」

「てめえ、この犬!!」

それで険悪なムードになりかけたのだが、グラントリノがそこで「まあ、話は最後まで聞け」と制止を促す。

面構は一回『ゴホンッ!』と咳払いをした後に、

「というのが表向きな警察の意見だ。だが処分云々はあくまで『公表すれば』の話になつてくるんだワン」

面構は語る。

公表すれば世論は出久達を褒め称える。だが同時に処分は免れない。

一方で、汚いやり方であるが公表しなければヒーロー殺しの火傷痕からエンデヴァーがヒーロー殺しを倒した、功労者として擁立できる。

幸い目撃者が少ないために今回の出久達の行為は警察で握り潰せることが出来る。

「だが、それで君達の英断と功績は誰の目にも触れられることは無い。さあ、君達はどっちがいい!? 前途ある若者たちの『偉大なる過ち』に私はケチを付けさせたくないんだワン」

面構のその対応に三人とも「そう言う事か」という感想を抱いた。

それならばもみ消す事で表には出ないだろうが出久達への処分は無くなる事になる。

よく考えられていると感心する出久達。

「まあ、どの道俺らは監督不行届で責任を取らないといけないからな」

「申し訳ございませんでした!」

「飯田君、分かったならもう二度とすんなよ?」

「はい!」

そんな感じで出久達は頭を下げて「よろしくお願いします」と言つて今回の一件を任せる事にしたのであった。

「大人のズルで君達三人が受けたであろう称賛の声が無くなつてしまふのはすまないと思ふ……だが、せめて共に平和を守る人間として言わせてくれ……ありがとう」

面構もそれで出久達に頭を下げてくれた。

こうして出久達は面構との面談も終えて後はゆっくりと療養することにしたのである。

少しして出久は急なアドレスの送信で心配しているであろうみんなにそれぞれ電話やメールの返信などを行つて、今現在はお茶子と話をしていた。

『デクちゃん、大丈夫だった？ アドレスが送られてきた時はすぐドキドキして心配しちやつたよ』

「うん。大丈夫だったよ。飯田君と轟君にも伝えておくね」

『お願いね。それと……デクちゃん、飯田君と轟君となにか変な雰囲気にならなかつたよね……？』

「変な雰囲気……？ う、うん。無かつたと思うけど……」

『そっか。それならいいの!……:……:デクちゃんの事はやっぱり私がマモロナイト……:』

「え? 麗日さん、なにか言った?」

幸い麗日の小声は出久には聞こえてなかったのか、お茶子は「ううん、なんでもないよー」と言った後に、

『それじゃゆつくり療養してね?』

「うん。それじゃまた学校で会おうね」

そんな感じでお茶子との会話を終了した後、今度はワイプシの方へと電話をかける。

事務所の電話番号だったので出たのは虎であった。

『緑谷か? ヒーロー殺しと遭遇したと聞いたが、大丈夫だったか……?』

「はい。なんとかこうして生きています」

『そうか。我も付いていっていたらよかったのだが……:』

「もう終わった事ですからいいじゃないですか。それより洗汰くんに伝言をお願いします。『僕は大丈夫だから安心してね』って」

『わかった。伝えておこう』

虎ともそうして電話を終えて出久は飯田達の病室へと向かう。

「二人とも、入るね？」

出久は断りを入れて中に入ろうとする。

もし、中で二人が着替えでもしていたら出久は気にしないだろうが二人は気にしてしまいかもしれないからだ。

実際、一回出久が看護師さんに着替えを手伝ってもらっている途中で飯田と轟が病室にノックもせず顔を出してきて『す、すまない！』と言って即座に退散していった事があったからである。

所謂ラッキースケベであるが、まだ少し自覚がない出久は頭にハテナを浮かべていて、苦笑いの看護師さんに訳を教えてもらって顔を赤くしていたりした事があったからだ。

閑話休題

顔を出してみるとそこでは少しだけ深刻そうな二人がいた。

「二人とも、どうしたの？ 顔が少し怖いよ？」

「緑谷。飯田なんだが診察が終わったところだが……」

少し言いずらそうな轟に、飯田は「いいんだ」と言っ言葉続ける。

「左手……後遺症が残るそうだ」

「そんな!？」

「ステインにかなりボロボロにされたんだが、特に左側がダメージが酷かったらしくてな……腕神経叢わんしんけいそうと言う箇所をやられたみたいだ。とはいっても多少の指の動かしづらさとか痺れくらいだから手術で神経移植すれば治る可能性があるらしいが……」

俺はヒーロー殺しを見つけた時に真っ先にマニュアルさんに伝えて指示を仰ぐべきだったんだ。でも、頭に血が昇ってしまいそれを疎かにしてしまった……。

奴は憎いが、それでも言った言葉は紛れもなく事実だった……俺は今はまだ偽物のヒーローなのかもしれない。

だから、俺が真の意味で本物のヒーローになるまでこの左手は残そうと思うんだ」

出久はその飯田の覚悟に、何も言う事が出来なかった。

だから代わりに、

「それじゃ僕なんかじゃ飯田君の支えになるか分からないけど、負担があつたら手伝わせて……。そして一緒にヒーローを目指していこう?」

「緑谷君……」

その言葉に飯田は感動を覚えていた。

聞いていた轟はなぜか胸がムカムカするという初めての感覚を味わっていたが、それ

でも出久の言葉はいい事なので今は忘れることにした。

「あ、それとね？」

「……………」

出久が改まってそう言葉を発する。

「面構署長と出会って、その、思ったんだ……僕も語尾に猫らしく『にゃん』とか付けた方がいいのかなって……」

「ツ!?!」

出久のその少しだけ恥じらいのある言葉に二人は訳も分からない感情に襲われた。

そして轟と飯田の二人は口を抑えながらも話す。

「緑谷……それはやめておいた方がいい……何故かは分からないが、俺の理性が保てない気がする……」

「轟さんと同意見だ。俺もそれはやめておいた方がいいと思う。今まで通りの君でいてくれ……」

「そ、そう……?」

無自覚でそんな事を言う出久に二人はたじたじになるしかできなかつたのであつた。

一方で、グラントリノはオールマイトと電話で話をしていた。
ヒーロー殺しの件や、ヴィラン連合の事。

そして、

「俊典……もしかしたらお前の腹に穴をあけたオール・フォー・ワンが再び動き出したかもしれない。だから、健気にもお前を慕っているあの子にも時を見て、お前の事、ワン・フォー・オールの事、そしてそれに秘められた運命の事を話しておけ」

『わかりました……緑谷ガールが雄英に戻ってきたら話しておこうと思います』

「俺が言えるのはここまでだ。頑張りなさい」

『はい』

こうしてグラントリノとオールマイトの話は終わっていった。

猫娘と明かされる秘密編

NO. 043 久しぶりの学校はカオス

出久は病院を退院後、グラントリノの家へ向かっていた。

さすがにもうワイプシのところには行く期間はないので、せめてグラントリノに挨拶でもと。

そして来てみればすでに出久の荷物はわざわざ山奥まで行って取ってきてくれたらしく、

「ほら、忘れもんはないか？」

「はい。スーツケースもちやんとあります。グラントリノ、短い間でしたがありがとうございます」

「俺は特に貢献できたつもりはねえんだが……職場体験もあんなだったしな」

「それでも、学べたことはきつと糧にします」

「そうかい？ それよりお前、ヒーロー殺しにまだ付け焼刃の足技を使って少しヒビが入ったらしいじゃないか？ しつかりと治しておけよ。そして制御をしつかりとする

んじゃ」

「はい」

「オールマイトのようになりたいならしつかりと学ぶことも大事だ。精進しろよ」
「わかりました」

それでグラントリノはもう話すことは無いかのように後ろを向いて家の中へと入っていきこうとしたところを出久は呼び止める。

「その、グラントリノはどうしてそんなに強いのに……その、無、無名なんですか……？」
「その件か。俺は元々ヒーロー活動はするつもりはなかったからな。とある理由があつて資格を取っただけだ。これ以上は俊……オールマイトから聞けることを祈っておくんだ」

「は、はあ……」

「じゃあ、以上だ！ 達者でな」

「は、はい！ ありがとうございます！」

出久はもう聞けることは聞いたのでグラントリノの家を後にしようとする。

グラントリノはそんな出久の後姿を見て思う。

「(容姿も、性格も、性別でさえ俊典とは違う……だが、確かにお前にそっくりだぜ、俊典。ならば、最後にこいつの名前でも聞いておくとするか) 小娘！」

「は、はい？」

「お前は誰じゃ？」

「え!? 今更ですか! 僕は緑谷出……」

「違うだろ？」

出久はその謎かけのような質問に一瞬考えを巡らせて、そして気づく。

『『出雲』です!』

「……………（お前が過去になるその日まで。……………いつかこの名前が新たに平和の象徴として呼ばれるその日まで……………楽しみじゃな）」

それで今度こそ二人はそこで別れたのであった。

そして翌日になって久しぶりである雄英高校への登校。

教室では様々な体験をしたのか悲喜交々な光景が見られた。

その中で爆豪は不機嫌そうな顔をしながらもベストジーニストとのやり取りもそんなに悪いものではなかったと思っていた。……………強制的に8:2の髪形にされなけれ

ばの話であるが……。

それで当然いつも絡んでくる切島と瀬呂の二人が爆笑している。

「ひーひー……腹いてえ」

「笑うな……殺すぞ」

「やってみろよ！ 8：2坊や！」

笑われていて、不機嫌でも今の爆豪は極めて落ち着いていた。

それはなぜか？ ベストジーニストによって過去を抉られてから人生相談を受けた形になったのだから感謝はしないといけない。

ゆえに爆豪は無理やり髪の毛をボン！と戻してとある事を聞くために帰りに出久に話しかけようと思っていた。

他の場所では芦戸が耳郎と蛙吹と話していてヴィラン退治とかもやったとかで興奮していた。

「お茶子ちゃんはどうだったの？ この一週間」

「とても……有意義だったよ」

蛙吹の質問にお茶子は構えをしながら静かに息を吐いていた。

それはさながら今から格闘技でも始めるのではないかと言う雰囲気である。

スクリーンナックルを何度も放っているのはさすがである。

「目覚めたのね、お茶子ちゃん」

それを見ていた上鳴が言う。

「一週間で変化がすげーよな」

「いや、上鳴。女つてのは本性を隠し持つてるもんなんだぜ？」

爪をかじりながらそんな事を言っている峰田は果たしてMt.レデイのところでは見たのか……？

上鳴はさすがに見えていて怖いから爪を噛むのを止めさせながらも、

「それより一番変化があつたのはお前ら三人だよな」

見た先には出久、轟、飯田の三人が話し合っていた。

それで各々が心配の声をかけていった。

やはり心配だったのだろう。

出久によって送信された位置だけの情報でなにかが起こっているという事はなにかしら感じられたのだから。

話題はもうヒーロー殺しの事で一色になっていく。

だが、そこで上鳴が不用意な発言をしてしまう。

そう、「ヒーロー殺しってかっこよくね？」と。

「上鳴くん！」

そこで出久がどこか止めてと言っているような声を上げる。

上鳴もそれで飯田の件を思い出して反省している感じであった。

だが、とうの飯田は普段通りに行っていて腕を何度も振って、

「確かに信念が通っている男だった。だが、俺はやはりヒーロー殺しの事は認められない……肅清と言う手段を選んできましたのだから。」

だからもう俺のようなものを出さないためにも改めてヒーローを目指すのだ！」

それを聞いて出久はやっぱ飯田君はかっこいい！と思っていた。

そんな出久の憧れの眼差しに気づいて飯田は顔を赤くしているのを、目敏くお茶子は感じてしまい、

「飯田君……そう簡単にデクちゃんはあげないからね？」

「う、麗日君。俺は別にそんな……」

「麗日さん？ 何の事……？」

「デクちゃんはそのままの純粹なままでいてね……」

「えっと……うん？」

少し訳の分からなかった出久であったがそのまま時間は流れていき、ヒーロー基礎学の時間になった。

だが出久と飯田はコスチュームが壊れてしまったので今は修繕に出して代わりに体

操服を着ている。

「久しぶりだな少年少女たち。さっそくだが救助訓練を行おうと思う」

「……………？ ここはUSJではないですが……………」

「あそこは災害時の為で今回はレースをしてもらう感じだ」

オールマイトは話す。

「ここ、運動場γは複雑に入り組んだ迷路のような細道が続く密集工業地帯。

「ここを5人4組で分かれてオールマイトが出す救難信号を目標してレースをす
というもの。」

そして最初のメンバー5人が選ばれる。

出久、飯田、尾白、芦戸、瀬呂の5人だ。

待機組はさっそく誰が一番か話し合う。

「このメンバーですと……………緑谷さんか瀬呂さんが有利になりますわね」

「だなー。でも、瀬呂は射出する時間があるから常に動いている緑谷にはスピード負
するかもな」

「飯田君、完治していないけど速さでは一番だと思うけどな……………」

「そうね」

そんな感じで一斉にスタートをする5人。

予想通り、滞空能力を駆使して出久と瀬呂の二人が同時に躍り出た。だが、変化はすぐに見て取れた。

ワイプシとグラントリノとの短くも濃かった特訓で足の使い方を学んだ出久はまるで高速移動でもしているかのようには足場から足場へと跳んでいるのだ。

おそらく職場体験前よりもさらに動きはよくなっていることが窺える一場面である。あつという間に瀬呂は置いてかれてしまった。

「やっぱ緑谷すげーな……さらに動き良くなつてんじゃね？」

「足の使い方が練度が増してるよな」

「デクちゃん、かつこいいよー」

と、出久の成長を見て自分達も頑張らないとなと思う一同であった。

爆豪もそんな出久を見て、

「(デク……その力はあの猫の力なのか……？ 話してくれるか?)」

と、一人考え込んでいた。

今までが今までだったために自分から話しかけるなど難しくなってきたってしまった爆豪はどう出久に話しかけようか悩んでいるのであった。

そして当然、出久が一番でゴールをした。

その後、他の三組も追々訓練をしていつてオールマイトは満足そうに、

「よし！ みんな個性の使い方が入学時よりうまくなってきているな。期末テストも追ってきているからこれからも頑張りたまえ！」

『はい！』

オールマイトは出久の横を通り過ぎる時に小声で、

「……………この授業が終わったら私の元へ来なさい。改めて話したい事がある……………」

「えっ……………？」

「……………君について話さないとならない時が来た。私とワン・フォー・オールの事について……………」

オールマイトはそれだけ伝えて離れていった。

突然の内容に出入はどんなことを話すのか少し怖く感じていた。

いつものオールマイトではなかったような錯覚を覚えたからだ。

更衣室にて体操服を脱ぎながらも出久は少しだけ怖い感情をなるべく抑えながらも着替えていた。

そんな時だった。

隣の男子更衣室の方からなにやら峰田の叫び声が聞こえてくる。

「なんだろう……?」

「ウチが確認してみる」

耳郎がそう言つてイヤホンジャックを壁に刺してあちらの声を聞いてみる。

『この穴、シヨーシヤンク! 恐らく先輩方が頑張つてくれたんだぜ!』

『峰田君、やめたまえ! 覗きは犯罪行為だぞ!』

『うるせー! おいらのリトルミネタはもう万歳三唱しているんだよ!』

と、なにかを破り捨てる音が聞こえてくる。

さすがにその声は女子の方にも聞こえてきたのか七人とも苦笑いを浮かべる。

『八百万のヤオヨロツパイ! 芦戸の腰つき! 葉隠の浮かぶ下着! 麗日のうららか

ボデイ! 蛙吹の意外おっぱい! 緑谷のあぎとい猫耳しつぽ姿あああ!!』

ザシュツ!

なぜ自分だけ名前が上がらないのだ?

耳郎はその思いとともに穴にイヤホンを通して峰田の目を突き刺して音波を送つて

黙らしていた。

「ありがと響香ちゃん」

「卑劣ですわ! すぐに創造で塞いでしまいますわ!」

「峰田君はまったたく……」

七人が呆れている中で、まだ抵抗しているのか声が続いていた。

『峰田君、もう諦めたまえ!』

『うるせえ! 飯田、お前だって本当は緑谷の裸を見たいんじゃないのか!』

『なっ……そんな事は……あつ……』

『おい……そのなんか思い出した様な顔は何だよ……?』

『い、いや! 決して緑谷君の裸姿を見てしまった訳では!』

『『あ!?!』』

飯田、見事な自爆である。

『おうおう飯田よ……そこんとこ詳しく話せよ? なあ?』

『と、轟君! 仲間だろ? 助けてくれ!!』

『俺を巻き込むんじゃねえ!!』

それで男子更衣室がなにやらヒートアップしている一方で、

「だってよ? 緑谷、ホントなの……?」

「デクちゃん、正直に話してええんよ……?」

「えっと、その……入院中に病室で看護婦さんに体を拭いてもらった後にブラを付けようとしたところで運悪く二人が入って来ちゃって……その、うん……」

これ以上は察してほしいと出久は顔を赤くさせながらも話した。

そして、出久が休み時間の間にオールマイトのもとへと向かっている中で、1―Aでは学級裁判が開かれていたとかなんとか……。

NO. 044 話される秘密と出久との関係性

出久はオールマイトが待っている仮眠室へと足を運んでいた。

扉の前まで来て、出久はなにかしら覚悟の眼差しをしながらも一言、「失礼します」と言つて中へと入る。

そこにはどこか重苦しい表情をしたオールマイトの姿があった。

オールマイトは手を組みながら一言。

「緑谷ガール、掛けたまえ」

「は、はい……」

依然出久にとつてはいつものオールマイトの姿ではないという感覚を味わいながらも椅子に腰を預ける。

そしてまずはヒーロー殺しの件についてオールマイトは触れていく。

「色々大変だったそうだね。近くにいてやれずにすまなかった」

「そ、そんな！ オールマイトは何も悪くはありません！ 僕が至らなかつた結果です

から……」

「そう言ってもらえると少しだけ心休まるが……それはそれとして、緑谷ガール、君、ヒーロー殺しに血を舐められたって聞いたよ？」

「あ、はい……ヒーロー殺しの個性で血を舐められた人は少しの間だけ行動不能に陥ってしまふものでした。ですが、それがなにを……」

「力を渡した時に言った事を覚えているかい……？」

そう言われて出久は過去の光景を思い出すように考えを巡らせて、一言、

「『食え』ですかね？」

「緑谷ガール……女子がそんな顔をしてはいけない」

「あ、すみません……」

女の子がオールマイトの様ないかつい顔になるのはさすがに耐えがたいものがあるためにオールマイトもさすがにそこは正しておいた。

「そこじゃないんだ。前に言ったね？ ワン・フォー・オールの譲渡はDNAを取り込むことによつて初めて成立するという事を……」

「あつ!? そ、それじゃヒーロー殺しにもしかしてワン・フォー・オールを!？」

「あ、いや。その心配はないから安心していいよ。忘れていた事はまあいいけど、今後は覚えておいてくれたまえ。いつか君が次の世代に譲渡する時には説明が必要だから」

「は……」

出久は思った。

まだ完全に扱いきれれていないのにもう次の世代の話まで持ち出されてはまるでその時にはもう……。

出久は嫌な気持ちになったのを誤魔化すために今は忘れる事にした。

「ワン・フォー・オールはね。渡したいと思った相手にしか譲渡できないものなんだ。だから無理やり奪われる事もないけど、逆に言えば無理やり渡す事は出来るけどね」

「そうなんですか……」

「うん。それで話はワン・フォー・オールの事なんだけどこれはとても特別な個性なんだ。その成り立ちも含めて……」

オールマイトは話す。

ワン・フォー・オールはもともとある一つの個性から派生して生まれたものだ。

「オール・フォー・ワン……他者から個性を『奪い』、己の物として、そしてソレを他者に『与える』ことのできる個性だ」

「オール・フォー・ワン……」

それを聞いた瞬間、出久の胸がなぜか痛みだしたのを感じた。

今は軽いものだがなぜか収まってくれないような、そんな感覚……。

それでもオールマイトの話は続いていく。
時代は超常黎明期。

個性の出現によつて様々な思想が絡み合い、人類は歩みを止めたまさに『荒廃』と言わんばかりの混沌とした時代。

その時代の中で一人の人物が台頭してきた。

人々から個性を奪い、圧倒的な力によつて勢力を広げていく。

そんな覆しようのない力の前にその男の悪行を止める者はいなく、瞬く間に悪の支配者として日本に君臨した。

それを出久は聞いて脳裏になにやら変なイメージ映像が流れるような感覚を必死に無視するように話の進行を聞く。

「ツ……でも、そんな事はただの創作話ではないんですか？」

「いや、実際にあつた事なんだ。それより緑谷ガール、顔色が少し悪いが一旦休もうか……？」

「い、いえ……なんとか大丈夫です。なんかさつきから変なイメージが頭にチラついてきていて……」

「変なイメージ……なんだろうね？　続けても大丈夫かい？」

「はい」

オールマイトの話は再開された。

男は個性を他人に与える事で信頼……あるいは屈服させてきた。

だが、与えられたものには負荷に耐えられずに物言わぬ人形になってしまいうものもいた。

「それって！」

「ああ。脳無のようにね……」

そして負荷に耐えられないものもいれば、逆に取り込んで混ざり合って変異するという現象もあったという。

彼には弟がいた。

弟はひ弱で無個性だと思われていたが、それでも兄の所業に心を痛め、抗っている青年だった。

男はそんな弟に無理やり『力をストックする』と言う個性を与えた。

屈服させたかったのかまではもう分からないという。

「まさか……」

「ああ」

弟は実は個性を持っていた。

ただ、『個性を与える』という無意味な個性だった。

それが偶然だとはいえ、力をストックする個性と混ざり合った結果、生まれたのがワ
ン・フォー・オールのアリジンである。

オールマイトはそこまで話し終わって、一旦深呼吸をした。

「皮肉な話だろうか？ 正義はいつだって悪から生まれるものなんだ」

「ちよ、ちよつと待ってください！ 成り立ちは分かりましたが、なんでそんな大昔の話
を……？」

「男はね……なんでもありだったんだ。おそらく成長を止めるとか何とかいう個性を
奪っていたんだろうね」

「そんな……」

「半永久的に生き続ける悪の象徴……それに対して弟はあまりにも無力だった。だから
次世代に託すことにしたんだ。今は敵わずともいずれ打ち倒してくれるという願いを
込めて代を重ねていき、そしてついに私の代で奴を討ち取った!!……そう思っていたの
だが、奴は生き延びて今ではヴィラン連合のブレーンとして再び動き出している」

それを聞いてさらに出久の脳裏に嫌な映像が流れ始めていた。

「ぐう……!」

「緑谷ガール!? 先程からどうしたのだね!? 様子がおかしいぞー!」

「す、すみません……なぜか」

そうやって顔を上げた出久はオールマイトの顔を視界に入れた瞬間、

「あつ……」

まるでフラッシュバックでも起きたかのように見た事の無い映像が頭に再生される。

誰かの視点なのだろう。

一人の男と、そしてお腹に穴を開けられて内臓が飛び出しているオールマイトが、それでも果敢に男に立ち向かっていくというそんな映像……。

「ウプツ!？」

出久は口を押さえてこみ上げてくるものをなんとか抑えようとした。

だが、

「あわわー！ 緑谷ガール、我慢しないでいいよ！ 水道があるからそこで戻してしまいなさい！」

オールマイトの言葉で出久は水道にすぐに駆けこんで吐いてしまっていた。

それからオールマイトに背中を擦られて少し落ち着いた頃合いに、

「本当にどうしたんだね……？」 話をし出してから様子がおかしいな」

「ごめんなさい……なんかオールマイトがお腹に穴を開けられながらも戦いを挑んでいる光景がなぜか脳裏に再生されてしまっと思って思わず吐き気が……」

「なに……？ それはもしか……」

オールマイトはそこまで聞いて嫌な感覚を覚えた。

それと同時に出久の頭の中に声が聞こえてきた。

『ゴメンね！ ゴメンねイズク！』

「えっ……？」

『変なものを見せちゃったよね！ ゴメンねイズク』

「もしかして、フオウなの……？」

『うん……』

その、たまに出てきては話しかけてくる感じではなかった。

出久に見られたくないという感情が込められている音色だった。

「緑谷ガール……前に君が話した声の主が話しかけてきているのかい？」

「あ、はい……少し待っていてください。それで、どうして君が謝るの？」

『私がいけなかったの……奴の口車に乗せられてしまったばかりに……屈服してしまっ

たばかりに……』

「それって……どういう？」

『今夜……夢の中でゆっくり話すね。私の過去を……』

それを最後に声は聞こえなくなってしまった。

「緑谷ガール……話は終わったのかい？」

「あ、はい……」

それで出久は先ほどの短いやり取りをオールマイトに伝えると、

「もしや……その彼女もオール・フォー・ワンとなにかしら関わりがあったのだろうか

……？」

「わかりません。とにかく、今夜に聞いてみます。内容はまた明日話します」

「わかった。それじゃ話は戻るけどワン・フォー・オールはオール・フォー・ワンを倒すために受け継がれた力だから……君はいつか奴と対面する事になるかもしれない。だから……」

「大丈夫です。オールマイトの頼みならなんでも応えます！ あなたがいてくれるのなら僕はどこまでも戦える……と思いますから」

「……」

オールマイトは心の中で必死に自身の事を伝えるんだ！と思っていたが、ついぞ果たせなかった。

出久の顔が眩しすぎて……今話したら出久の心が折れてしまうかもしれないからだ。

その頃にはもう自身は出久の隣にはいないだろうという事を……。

「ありがとう……」

だから、感謝の言葉を言う事しかできなかつたのであった。

そして出久は教室に戻っていくとそこではなにやら物々しい雰囲気で轟と飯田が説教を食らっているという光景だった。

出久が帰ってきた事に気づく一同。

二人はすぐに出久に駆け寄ってきて、

「緑谷君……すまなかつた。今度からもっと細心の注意を払ってドアを開ける事にするよ」

「ああ……俺も配慮が足りなかつたからな。すまねえ緑谷」

「えつと……気にしないで！ 僕もそんなに気にしていないから！ あれは事故だったんだよ。だから、ね？」

「緑谷……」

「緑谷君……」

どこか神々しいものを見るような表情を浮かべている二人であった。

女子陣とかはそれで「甘いなあ……」と思いつつも、それが出久なんだなとも納得していたり。

そんな事があつたが、下校時間になり出久は帰ろうとして時だった。

「……おい、デク」

「かつちゃん……？」

そこでは少しだけ聞き辛そうな表情を浮かべている爆豪がいた。

「少し顔を貸せよ。てめえに聞きたい事があるんだ」

「う、うん……」

なんだろうと思いつつも、出久は爆豪の後に付いていった。

しばらくして人気がないところで、

「なあデク……教えてくんねーか？お前の個性はもしかしてあの時の猫の物なのかってな……」

「かつちゃん……!?! それって……」

それからしばらくして出久は申し訳なきように爆豪と別れた。

要約すればまとまったら話すから待っていてもらえないか？という事である。

爆豪も普段らしからぬ冷静な様子で、

「わかった……いつか、教えてくれ」

それだけ言って帰っていった。

出久は今日の濃かった内容を思い返しながらも、家へと帰り眠りについた。そして見る事になる。フオウの過去を……。

NO. 045 フォウ：オリジン

まだ超常がこの世に認知される以前の時代の話。

一匹の猫はとある家庭の飼い猫として優しく育てられていた。

ただ、一つ異常があったとすれば……その猫は普通なら生きても十年前後くらいだろう猫の寿命を圧倒的に過ぎていくというのに、飼い主が猫を育て始めたのはまだ十にも満たない年齢の時なのに、猫は飼い主が30歳になる頃まで死なずに生きていた。

『お前は長生きだね……』

飼い主はそんな猫の事を不思議に思いながらも、それでもいつまでも一緒にいてくれることに対して幸せを感じていた。

だが、幸せな時間は次第に薄れていった。

飼い主が40歳を過ぎた頃には髪の色は白髪になっていて、病に侵されて床に伏せるようになってしまった。

猫はそんな飼い主を気遣いながらも、同時にともにいる時間が増えていつて余計に甘えていった。

だが、加速するように飼い主の顔がどんどんと老けていく現状にさすがの猫も疑問を

覚えていた。

飼い主の顔はもうおばあちゃんと呼べるほどに老けてしまっていたのだ。

『どうしたんだろうね……こんなに老けちゃって……ゴホゴホ……』

飼い主は結婚をしていなかったために介護をしてくれる伴侶や子供もいなかったの
で、残り少ないお金を削りながらも、それでも猫と静かに過ごしていた。

そしてついに飼い主は死亡してしまった……。

死因は老衰であった。

猫はそんな死んでしまった飼い主の死に悲しんだ。

だが、それと同時に猫は己の身体の変化を感じた。

身体に力が漲ってきて、不思議な力が使えるようになり、気づけば尻尾が二股に分か
れていた。

そう、猫は長年生きた事で妖気を持って『猫又』という怪異になったのだ。

さらには己の力の源に気づく。

猫の原初から持っていた能力は『生命力を奪う』ものだったのだ。

それゆえに飼い主は生命力を知らず知らずのうちに猫に少しずつ奪われていつて早
くに死んでしまったのであった。

その事を知った猫は当然、己の力を呪った。

それからは猫は野良猫になって一人で生きていく事を決めた。

だが野生の暮らしは今まで温室育ちだった猫にはつらいものがあつた。

当然縄張り争いに巻き込まれて時には同族の猫に襲われる事もあつたし、酷い時には人間に殺されそうになった時もあった。

それゆえ猫は自衛の手段として接触してきた悪意ある者達の生命力を奪い取り、行動不能にして逃げる事を繰り返していた。

それが幸いしてか猫は老けと言うものには無縁だった。

今まで奪ってきた生命力が猫の中に渦巻いていて猫を生かそうとして、時には傷を負つた時には自動的に生命力を使つてすぐに傷が治つていった。

しばらくして猫はこのままではだめだ。

奪うだけでは罪を増やすだけだと感じたために他の自衛手段を会得するために今まで使い道が分からなかつた妖気の使い方を自己で研鑽することにした。

時には他の猫とも自在に話せるように猫語を覚えた。

時には五感を妖気で強化してどんな事態にも対応できるようにする術を覚えた。

時には爪を伸ばす事をしてさらには妖気を纏わせて硬質化する事を覚えた。

時には逃げるスピードを上げるために足に妖気を纏わせて脚力を強化する術を覚え

た。

時には体全体に妖気を纏って怪力の能力を覚えた。

時には妖気を喉に貯めて思いつきり叫ぶ事によって衝撃波を発生できる事を覚えた。

時には冬の寒さを凌ぐために妖気を使って炎を出せるようになる事を覚えた。

時には自身より大きいものと戦うために変化の力を覚えた。

………気づけば猫は『生命力を奪う』能力以外にもたくさん妖術を覚えて立派な怪異、猫又として成長していた。

猫の年齢はすでに百歳は越えていたために、人間の世界では都市伝説になるくらいには有名な猫として名を馳せていた。

時々、道に迷い込んだ人間を驚かしてはちびちびと生命力を奪う程度はもう猫の中で常識となってしまうていた。

それでも自分のせいでもう時間が経過して顔も思い出せない程になってしまった飼主のように老衰で死なれては困るのでやり過ぎないように調整できる術を覚えていた。

猫はもう一人でも生きていけるので、短い寿命で先立たれるので猫の仲間も作らずに孤高に生きてきた。

そんな事を繰り返していったある時、世界は超常という現象に見舞われた。

次々と能力を開花させて『個性』を宿す人間たちを見ながらも、猫は思った。

『なんで人間達はこんな状況で手を取り合えずに争う事をしてしまっているのか……』と。

そんな事を思っていた時に猫の身体にも変化はあった。

そう……妖気が使えなくなってしまうのだ。

なぜ？ どうして？

猫の疑問は尽きなかった。

だが、同時に猫はまた悟った。

己の能力であった、

『生命力を奪う』

『それに伴う自動回復』オートヒール

『猫の言葉を理解できる』

『五感強化』

『爪の伸縮自在』

『爪の硬質化』

『脚力強化』

『怪力』

『叫ぶ事による衝撃波』

『炎術』

『変化』

これらすべての『妖術』が『個性』へと置き換えられている事に気づいたのだ。

こうして猫は複数の個性を操る特異な体質へと変化したのであった。

だからといって猫は生き方を変えるつもりはなかったために、多少手強くなった個性を持つ人間にもめげずに立ち向かっていった。

当時の個性持ちはそれでも自在に操れるほどに熟練していなかったために能力を自在に操れる猫にとっては毛が生えた程度の認識であったのだ。

襲ってきた時にはまた返り討ちをする事を繰り返していたが、それはある時を境に終わる事になった……。

『ほう……動物なのに複数の個性を宿した存在か。面白いな……』

突然現れた『化け物』の存在に猫はあつという間に無力化されて、首輪を付けられてしまった。

そして動物の言葉も理解できる個性を使っていた化け物にとある提案をさせられる。

『君を殺しはしない、個性も奪わない……代わりに妥協案を出そう。君の個性の一つである『生命力を奪う』個性で私に逆らうもの、屈服しなかった者の個性を私が奪った後に、君が生命力を全部吸いなさい』

『全部って……それじゃ死んじやうよ！ それにそこまで一気に吸ったことは無いから……』

『ふむ……奪える量にも限界はあるんだね？ それならこの個性を上げよう』

化け物は猫に触れて、とある個性を与えた。

その個性とは『許容量キャパ限界を無くす』というもの。

これによつて猫はどこまでも強くもなれるし、どれだけ生命力を吸つても限界はない力を得た。

『さあ………ともに永遠に生きていこうか』

化け物の甘い言葉に、逆らったら個性を全部奪われて殺されると野性的直感で悟った猫は従う他なかつたために屈服してしまった。

それから長年の間、猫は化け物の右腕として飼いならされていった。

時に化け物に逆らつた人間を猫は生命力を全部奪い、灰となつて消えていく光景を見ながら『ごめんなさい、ごめんなさい……』と自己嫌悪を感じながらも行った。

そして時間はあつという間に過ぎて行つて、猫は己の事を化け物と呼んでいた男と同

じ『化け物』なんだと今更に悟って、もう引き返せなくなってしまった。

……………どれだけ時間が経過したか分からない時に、一人のヒーローが化け物の男の部下達を次々と倒していった、そのどきどきに紛れて猫も久しぶりの自由を得る。

そして逃げる前を見た。

ヒーローの男性が負傷を追いながらも化け物と呼んでいた男を倒す瞬間を。

それを見届けて猫は、

『さよなら……………』

と言ってまた雲隠れした。

だが、そこから猫は己の存在がいかに異常なのかを悟る事になる。

数多の人間の生命力を奪ってきた猫は死にたくても死ねなくなってしまったのだ。

一人の人間から奪える生命力は成人していれば普通に生きるのならば70歳以上は生きるであろう生命力を全部奪うのだ。

大体20代から30代くらいの人間……しかも超常黎明期からずっと奪っていたためにゆうに千人以上くらいは奪っていたために普通に換算しても猫の寿命は一万歳くらいはあるだろうか……………？

だから、時には車に自ら飛び込んで死を望んでも勝手に身体が修復されてしまった。ならばと思い、炎に飛び込んで塵になればと思い、結果は塵からでも不死鳥のように復元されてしまったのだ。

まさに呪いである。

お前はそうしてずっと生き続けるんだ……と、今まで奪ってきた人たちの声が聞こえてくるようで……。

猫は生きる事に疲れて、でも死ねないからどうしようもない事のジレンマで、もうゆつくりと誰とも関わらずに生きていこうと……ひっそりとした古い神社に身を潜めていた。

だが、そんな時に一人の人間が猫に話しかけてきたのだ。

『君、どうしたの?』

少年……緑谷出久は猫に話しかけてきたのだ。

普通なら尻尾が二股に分かれている猫など不気味だろうに出久は恐れもせず話しかけてきたのだ。

なるべく関わりを持ちたくなかった猫は爪を伸ばして出久を威嚇する。

だが、出久はそんな事にも動じずに、

『怖がらないで……僕は君をイジメないから』

ホツとするような笑顔を浮かべて出久は猫に話し続けた。

それも毎日。

さすがに猫も何度も来られてはといい加減出久を受け入れることにした。

幸いもう自在に個性は操れるので生命力を奪う事をしなければいい……。

そうして出久はやつと受け入れてくれた猫に笑みを浮かべて、

『それじゃ君に名前を付けてあげるね……そうだね、鳴き声が『フオウ』って鳴くから

『フオウ』なんてどうか？』

『フオウ！』

なぜか猫……フオウは素直に受け入れていた。

なぜかって……そこではるか昔の飼い主の事を思い出していた。

もとの飼い主もそんな事を言っただけで自分の事を『フオウ』と名付けていた……と言

う思いであった。

それでフオウは久方ぶりの癒しを出久に感じていたために心が癒される気持ちで

あった。

そんな関係が続いていく中で出久が毎日語る。

『今日はおつかちゃんだね！』

『すごいんだよ、かっちゃんって!』

『かっちゃんはね!』

と、飽きることなくかっちゃんかっちゃん楽しんで勝手に話す出久を見てフォウは少しの嫉妬と羨望を抱くようになった。

それでもフォウは出久に抱きつく事でその感情を忘れるようになるくらいまでは出久になついていた。

……そして、運命の日。

いつも通りに出久がフォウのいる神社にやってきて、生命力が溢れているので食べる必要はないけど、それでも持ってきてくれた食べ物食べている時だった。

一人のヴィランが現れて、そして結果……出久は重傷を負ってしまう……。

病院に運び込まれた出久を追うフォウはそこでも死にそうな出久の姿を見て、

『奪う事は出来るのに……いざこういう事態になったら助けることが出来ないなんて……』

と、出久の上で涙を流した時だった。

その時に初めてフォウは己の中にある力を悟る。

超常が発生して、もともとあった力以外にも新たにフォウに『個性』が宿っていたのだ。

その個性は『与える』という抽象的で曖昧な個性。

『なんでもいい！ イズクを助けることが出来るならなんでもする！』

その願いが届いたのか分からないが、『与える』個性が発動したのだ。

だが、初めて使う力だったために暴走を起こしてしまった。

そして、フォウは結果……全生命力、全個性……己の魂さえも出久に与えてしまったのだ……。

出久の一部になったフォウは悟る……。

己の呪いを出久に引き継がせてしまった事を……。

『これが、私のすべて……ゴメンねイズク……ゴメンね！』

『フォウ……』

フォウの過去を追体験した出久は一時言葉を失っていたが、そこである事を思いつく。

『そんなに卑屈にならないで、フォウ。それにせつかく助けてくれたのに文句なんて言えないよ』

『でも……』

『それに……なら僕もフォウの償いを手伝うよ』

『えっ?』

『今まで奪ってきた生命力は僕の身体を治す事にも使えるけど、『与える』個性で人助けもできるんだよ?』

『で、でも……制御を誤ったら私と同じ事になっちゃうんだよ!?!』

『うん。だからフォウは制御を手伝ってほしいんだ……二人で『与える』個性を制御すれば失敗なんてきつとない! いつ使い切るかは分からないけど、それまで一緒に生きていこう?』

『イズク!!』

もうフォウは泣いていた。

もし体があつたら盛大に出久に抱きついていている事だろう。

出久はフォウを非難する事も出来ただろう。

だが、それも踏まえてフオウの償いの手伝いをしていこうと決めた瞬間だった。

NO. 046 教師たちとの会談

「失礼します」

翌日になり、出久は朝一番で職員室へと顔を出していた。

数名の教師の人達が出久の方へと顔を向けてくる。

その中で担任の相澤がいち早く反応してきた。

「どうした、緑谷?」

「はい。オールマイトはいますか?」

「オールマイトか。少し待ってろ。おそらく仮眠室にいると思うから……」

相澤は気だるげそうに仮眠室の方に行つてオールマイトがいるかどうかを確認していた。

そしてしばらくして、

「緑谷、すまん。まだオールマイトは来ていないようだ……用件なら俺が聞くが?」

「えっと、はい……僕の未知の個性全部がやっと把握できましたので事情も含めて関係

者の方には話しておこうかと思ひまして……」

「なに……？　緑谷、お前まだ隠している個性があつたのか……？」

相澤はそれで神妙な顔つきになる。

こうして出久が職員室に来るたびに個性が増えた報告を受ける相澤は少しだるそうだった。

「隠していたつて訳ではないんですけど……昨日にやつと分かつた感じです」

「そうか。それじゃお昼休みにオールマイトに声をかけておくから仮眠室に來い」

「はい。それとリカバリーガールと根津校長にも声をかけておいてくれませんか……？」

「ばーさんはともかく、校長にもか……？　なにやらきな臭くなつてきたな……」

相澤はそれで怪訝な表情をしながらも、了解の意を出した。

「ありがとうございます。結構やばめの力なんでできるだけ内密にしときたいものでして……」

「ふむ……優秀なお前がそこまで慎重になるのなら相当なものなんでしょうな。わかつた。やつぱり場所は仮眠室じゃなくて会議室にしよう。そこなら防諜もできているから誰かに聞かれることは無いだろう」

「わかりました。それでは失礼しました」

出久はそれで職員室を出て行った。

それから数分して、

「みなさん、おはよう」

オールマイトが職員室に顔を出してきたので相澤がオールマイトに声をかける。

「オールマイト。少しいいですか?」

「相澤君? どうしたんだね? 少し真剣な顔つきだよ?」

「いえ、オールマイトが出勤してくる少し前に緑谷が職員室に来ましてね」

「緑谷ガールが?」

「ええ。なんでも緑谷が持っている個性が全部判明したらしく、お昼休みに俺とオールマイト、校長とリカバリーガールも呼んでなにやら込み入った事情を話したいそうです」

それを聞いたオールマイトは、

「(そうか……相澤君にも話すって事はワン・フォー・オール関連でも巻き込もうって事なんだね? 緑谷ガール……) わかりました。それじゃ相澤君も覚悟を持って聞いてやってほしい。相澤君にとっても驚きの内容だからね」

「ほう……? ではオールマイトも何枚か噛んでいる口なんですか?」

「まあね」

そんな感じである意味怖い感じでお昼になるのを待つオールマイトであった。相澤も相澤でようやく緑谷の秘密を知れる事に対して思う事があつたりなかったり。

教室に入った出久はいの一番に爆豪のもとへと足を運んで、

「かつちゃん、少しいいかな？」

「あ？　なんだ、デク？」

「うん。今日の放課後に話したい事があるんだけど……待っててもらってもいいかな？」

「ッ！……わかった」

昨日の今日でもう話す算段がついたことに多少の驚きを感じながらも爆豪も乗り気であつた。たとえ、ある意味残酷な事を話される事になろうとも……。

だが、場所が悪かつた。

出久と爆豪の会話は他のみんなにも聞かれていたという事に二人はうつかり気づいていなかったたのである。

それゆえに、

「デバガメはいけないと思うんだけど……デクちゃんの事、もつと知りたい」

「(コイバナかな!?)」

「(水臭いじゃないか緑谷君。俺にも教えてくれてもいいのに……)」

「(出久ちゃんの秘密……知りたいわね)」

と、ほとんどの者達に興味を寄せられていたのであった。

こういう時だけ感じる事は皆一緒という事か。

そして時間は過ぎて行つて、お昼休み。

すぐに食事を済ませた出久は指定された会議室へと足を運んでいた。

その会議室にはオールマイトはもちろん、相澤に校長、リカバリーガールの姿があり、出久は多少の緊張を感じながらもオールマイトに「掛けなさい」と言われて対面席に座る。

「それで緑谷……このメンバーを集めたつて事は相当の事なんだろうから、俺は知らないがオールマイト達はお前の事は大体は把握している口なのか？」

「はい。そうですね? 校長先生もリカバリーガールも」

「まあね。あたしはオールマイトの身体を診てきたからね。それにもう何度かそう言う話はしたじゃないさ？」

「うん。緑谷さんのことはオールマイトから聞いているからね。オールマイトが選んだ後継者だって事も」

「校長……後継者って一体？」

一人だけ話についていけない相澤だったが、そこはオールマイトが自身の個性の秘密を簡潔に説明する事ですぐに理解を得られた。

「……………なるほど。だからオールマイトは緑谷をよく目にかけていたんですか」

「うん。隠していてすまなかったね」

「いえ。そんな事情だったなら話せなくても仕方がない事ですよ。と言う事は俺もその仲間入りと言う事ですか？」

「そうなるね。なるべく話しちやいけないからね？」

「わかりました」

相澤も理解をした事で出久はさっそく話をしようと思い、口を開く。

「それではここからは僕の個性に付いてお話ししていきます。そうですね……今日早起きしてまとめた資料を渡しますのでそれを見てください」

出久はそれであらかじめ昨晚の夢で知った内容を分かりやすくまとめた紙を四人に

配っていく。

四人はそれに目を通して行って、次第に険しい顔つきになっていった。当然である。

出久の持つ個性の一つ『生命力を奪う』ははつきり言ってヴィランと言われても否定できない力だからだ。

しばらくの沈黙の後に、

「……………なるほど。確かにこれは内密にしておいた方がいい内容だね」

最初に校長がそう口を開いた。

鼠顔だから表情の変化があまり分からないが、それでも十分にショックは感じている印象である。

「そうかい……………あの時の猫がね。超常以前から生きていたというのにも驚きだけど、複数の個性は元々ただの妖術ときたか。それなら複数持つっていても不思議じゃないね」

リカバリーガールもようやく納得顔で頷いていた。

すぐに理解できたのには訳がある。

ステインとの遭遇で怪我をした出久だったが、リカバリーガールに治してもらおうと保健室に来て確認してみればいつの間にか傷どころか骨の軋みも全部治っていたのだ。

それを不思議に思ったが、生命力が勝手に治してくれていたのだから、それはもう納

得するしかない。

「緑谷……それじゃお前は本当に今は寿命が一万歳以上はあるっていうのか……？」

「フオウにも確かめてもらいましたけど、最低でもそのくらいはあるという感じですよ」

「最低でも、か……お前はその『与える』個性で救える命を救いたいと資料に書いてあるが……相当使わないと一生分じゃ終わらないぞ？ その覚悟はあるのか……？」

「はい。もうフオウの償いの手伝いをしていくと決めていますから」

「そうか……」

相澤はそれで黙り込んでしまった。

おそらく自分の生徒の事なのに助けてやれない悔しさからの沈黙だろう。

「緑谷ガール……」

「はい」

最後にオールマイトが口を開いた。

「君は、オール・フォー・ワンに狙われる可能性が出てきてしまった……雄英体育祭で君が見せた力でおそらくテレビの中継で見ただろう奴は君の事に気づいているだろう。そしてまた傍に置こうとするか、それとも無理やり個性を奪うかしてくるだろうと予測する……」

「はい、僕もそれは感じました。だからという訳ではありませんけど、こうして皆さんに

今回話をしたんです」

あくまで冷静にそう答える出久。

いつもの彼女ならきよどつてしまうだろうが、フオウの過去を追体験した事によって精神的に少しだけだが成長してしまったのだろう。

「それで……これからどうするつもりなんだ？ 支援はするつもりだが、公けに『与える』個性を公表するのはそれ相応のリスクが高いぞ？」

「はい。ひとまず『生命力を奪う』個性は隠す事にして、『与える』個性は……そうですね。『他人を治癒できる』個性にしてもらおうかと……」

「そりや名案だね。あたし以上に強力な治癒を施せるなんて夢のようだ。死んでなきやどうにでもできるからね」

「はい。だから出来る事ならオールマイトの傷も治したいんですけど、もう、一度完治してしまったものは治せないらしくて……すみません」

「いや、その気持ちだけでも嬉しいよ。ありがとう、緑谷ガール」

それから色々と話し合われて一応のまとまりを見せて、話し合いは終わろうとしていた時に、

「あ！ それとかつちや……爆豪君にもこの件を話そうと思っただけですけど、大丈夫ですかね？」

「爆豪少年に……？　でもそれだとワン・フォー・オールの話も話す事になるけど、大丈夫なのかい？」

「そこらへんはなんとか誤魔化してみます。話すのは僕の個性だけで……それなら最悪オール・フォー・ワンの事を匂わす程度で済むと思いますし」

「わかった。君の事を疑うわけではないけど、私の秘密はなるべく話さない方向で頼むね」

「はい」

こうして教師たちとの会談は終わっていった。

NO. 047 かつちゃんとの話+α。

今日の授業が終わるなり、出久は前の席の爆豪に話しかける。

「それじゃ、かつちゃん……ちよつと静かに話せるところに行こうか……」

「ああ、わかった……」

小声でそんなやり取りをしているのだが、当然聞き耳を立てている生徒達。

普段の爆豪なら出久からの言葉だったら軽くあしらうもののだが、今回に限ってはぶつきらばうに、だが素直に返事をしているところから重要な会話がされる事は想像に難くない。

学校生活では気兼ねなく爆豪と接している切島なんかは『あの爆豪が素直だな、おい!?!』と感じていたり。

そんな感じで出久と爆豪が二人で歩幅は合わないものの歩いていくという珍しい光景に、出歯亀根性丸出しの一同が出久の猫耳に悟られない程度に二人を追跡しだした。いざとなれば障子が複製碗で耳を作り出して遠くから聞けばいいと言う感じである。

それに実は八百万がすでに出久のカバンに盗聴器という仕込みをしていたりしていた。

「八百万も乗り気だな！」

「え、ええ……気になってしまつては仕方がありませんから」

「そこままでして聞くものでもないと思うがな……」

「とかいいつつ轟ちゃんもついてくるのよね？」

「うぐっ……」

出久と爆豪の二人は雄英高校近くの静かな公園に入つていった。

ぶらんこに腰掛ける出久。

爆豪も座りはしなかったが背もたれに体を預けて、

「……それじゃデク。話してくれるんだな？ お前のその猫の個性の件について……」

「うん。ところでかつちゃんは僕とフオウ……猫の事はどこまで知っているの？」

「あ……そういえば知らなかったのか。お前がヴィランに襲われて重傷を負った後、俺がすぐに警察と救急に連絡してなんとかなつたんだよ」

「そっか……かつちゃんが助けてくれたんだね」

「助けられてねーよ……俺はあの時、てめえがヴィランに襲われそうになってた時……普通なら助けていただろう時に足が震えちまって出て行けなかった……てめえを助けられなかった……病院でてめえが死ぬかもしれないと聞いた時に……俺の心に後悔とトラウマが出来ちまった……」

そういつて爆豪は手で顔を覆う。

普段、勝気な爆豪がここまで弱気な態度を表に出しているのは珍しい事で、出久も言葉を一瞬失っていた。

だが、

「それは仕方なかったんだよ……かっちゃんもあの時のヴィランの個性は聞いたんですよ？ 『範囲内にいる者の恐怖心を増幅させる』……だから、かっちゃんは気に病むことは無いんだよ」

「だけども！ それでも俺は、俺は!!……チツ……」

熱くなつてしまったと感じた爆豪は一旦舌打ちをして冷静さを取り戻す。

それを見て安心した出久はポツリポツリと話し出す。

「僕ね……あのままだったら本当に死ぬところだったんだ……僕を治療してくれたりカバリーガールでもお手上げだったらしくて……だけどね。その時にフォウが自らを犠牲にして僕を生かしてくれたんだ」

「どうやってだ……?」

「その説明をするのにはフォウの過去も話さないといけないんだけど、しつかり聞いてね? あと、他言無用で頼みたいの……この事を知っているのはオールマイトに相澤先生、根津校長にリカバリーガールだけだから」

そして出久は一つ一つ丁寧にフォウの事を説明していく。

フォウの原点から、人生の歩み、縛られてしまった人生の重み、出久と出会うまでの短い自由、そして己の全てを捧げて出久を助けたが、己の呪いまで受け継がせてしまった事……。

全部を話し終えて出久は爆豪へと視線を向けるとそこには茫然としている爆豪の姿があった。

当然であった。

まだ15歳の出久が背負うには重すぎる運命。

「……これが僕とフォウの全部……だから僕はフォウの償いの手伝いをするために必ずヒーローになろうと思っているんだ」

「……………けるな」

「え? かっちゃん?」

「ふざけるな!! そんな重荷をてめえが背負う必要がどこにあんだよ!? それじゃなに

か!? デク、てめえは俺……いや、それだけじゃねえ! てめえの母親、それにクラス
の連中も置き去りにしていくつもりかよ!」

「か、かっちゃん……怒らないで……しようがなかったんだよ。フオウは僕を助ける一
心で力の暴走まで把握できなかったんだから……」

「だとしてもだ!! それになんでてめえはもう平然と受け入れとるんじゃない!? もつと悲
観的になつてもいいもんだろうがよ!!」

「そ、それは……」

出久はもう爆豪に反論できる言葉が出てこなかった。

フオウの過去を追体験した事によつて精神的に大人になつたとはいえ、それでもまだ
学生の年齢なのだ。

「俺の……俺の気持ちまで置き去りにするつもりかよ!? 俺は……お前が傷つく光景を
もう見たくねえんだよ!! だからてめえは無個性のままでも良かったんだ! そうす
りや俺も気楽でいられた! 何の迷いも抱かずにヒーローを目指せた!! なのにて
めえは英雄までのこのこと来ちまった……訳わかんなかった……」

「かっちゃん……」

掛ける言葉が見つからずただ沈黙だけが場を支配した。

息苦しい空気で、それでもなんとか出久は口を開いて、

「……………僕の『与える』個性ね。オールマイト達と話し合った結果、表向きは『他人を治癒できる』個性として登録してもらうつもりなんだ……。だから、もしかっちゃん達が傷を負ったら僕に相談して？　すぐに治してあげるから！」

「言いたい事はそれだけかよ……？」

「うん……いつ生命力のストックが終わるか分からないけど、僕もみんなと同じ時間を生きていきたい……だから、お願い……」

出久なりの必死の懇願であった。

“みんなと同じ時間を生きたい”。

それが出久の今の望みである。

その為にはたくさんの人を救う事もやっていけないといけない。

もとよりそのつもりであるために後は有言実行するだけの段階なのだ。

出久のその言葉に爆豪は何を思ったか、

「……………わかった。だが、代わりと言っちゃなんだが、ぜってえ今後一切『生命力を奪う』個性は使うな！　ただでさえもう途方もないくらいに山積みにならされてんのこれ以上増やしても話になんねえからな!!」

「うん！　約束する!!」

爆豪に了承を得られてようやく出久も笑顔を浮かべる。

「それに、もとより僕の中のフォウが使用制限を掛けてくれているから使いたくても使えないしね……」

「そうかよ……まあいいか。話してくれてありがとよ」

「うん！」

「ところでまだ隠し事とかはねえよな？ ああ？」

「う、うん……ナイヨ？」

「嘘だな……言え！ 白状しやがれ!!」

「ごめん！ これ以上はもうかっちゃんでもー!!」

二人はそれで久しぶりにこじれる前の昔の様な関係に戻れたような気がした瞬間だった。

正面切って話し合える出久と爆豪……これだけで尊いものを感じさせられるというもののだ。

ここまで来ればいい話で終わったのだが、ふと爆豪はすすり泣く声を耳にして聞こえてきた方を振り向く。

そこにはなんとほとんどのクラスのみんなが大なり小なり涙を浮かべていたのだ。

「ええ!!? みんないつから!?!」

「て、てめえら!!? いつから聞いてやがった!?!」

「うう……す、すまねえ緑谷に爆豪……」

「実は最初から聞いてたんだぜ……」

切島と瀬呂の二人がそう白状した。

「な、なんで!?!」

「ごめん、デクちゃん! でも気になっちゃって!」

「緑谷さん……すみません。わたくしの好奇心でこんなものを仕掛けてしまいました。後悔先に立たずですわ……」

「出久ちゃん……辛かったら泣いてもいいのよ?」

「うわーん! 緑谷ばっかり辛い思いしてあたし哀しいよ!」

女子陣がそれで涙ぐみながらも出久に駆け寄っていた。

他にも男子連中がそれぞれ慰めの言葉を掛けていってもう出久はいっぱいいっぱいであった。

こうしてクラスのみんなには出久の秘密がばれてしまったのであった。

その後に全員にはほかの誰にも話さない事を誓ってもらった。

他にも爆豪は意外な一面を見せていたためにかかわれる事もしばしばあったとか……。

それで当然キレていつも通りに戻っていた事を出久は安心して見ていられた。

そして出久の今回の収穫は爆豪との和解と仲の修復が出来た事であるだろう。
良きかな良きかな。

NO. 048 続く有限の日常

色々気まずくなるような事がクラスのみんなにばれてしまった出久だったが、それはそれ。

学校生活は毎日通わないといけないのだから当然次の朝にはみんなと顔を合わす事になり、

「緑谷さん！ おはようございます！ それでつかぬ事を伺いますが、私の家が管理・経営している病院には結構な重症患者の皆さんがいるのですが、緑谷さんの力をぜひお借りしたく！」

盗聴器と言うある意味最悪な手を使って知ってしまった八百万が、とても泣きそうな顔でありながら、そんな事を言ってきた。

他にもお茶子や蛙吹が、

「デクちゃん！ 今まで辛かったんね！ 大丈夫！ 必ずデクちゃんを呪いから解放してあげるからね！」

「そうよ、出久ちゃん。ヒーローはケガが付き物……きつと出久ちゃんの力は役に立つわ」

と、もう過保護な感じで出久にそう言ってきた。

それ以外にも男子がそれはもう出久の事を気遣うようになってきていて、さすがの出久も居た堪れないという感じで、

「えつと、みんな……気持ちはあるがたいんだけどそんなに焦っても仕方がないんじゃないかな……?」

と、いつも通りに謙虚な振る舞いをしていた。

「うむ。緑谷君の言う事も正しい。地道にコツコツと消化していけばいずれは解放されるからな」

「だがよ、飯田。そんな事言っちゃまって緑谷が取り残されちゃったら嫌だぜ?」

「そうだそうだ! おいらも協力したいぜ!」

そんな感じでヒートアップしていく教室内。

そこに冷静に事を見ている常闇が口を開き、

「それに、呪い……言いては妙だが、例の猫の罪滅ぼしと言えば聞こえは良いが……結果的には誰かが傷つかないといけない、不幸な目に合わないといけない……ヒーローとは本来誰も傷つかない事を望まないといけないというのに、この矛盾っぷり……茨の道と言わざるを得ないな」

それを聞いてある意味現実的な意見に全員が改めて出久のこれからの道が辛く厳し

いものだと実感した。

「あ！ それだけだね。一つ思った事があるんだけどいい!!？」

そこに空気を換えようとして芦戸が声を上げる。

なんだなんだ？と騒ぎ出す一同。

「ねえ、緑谷？」

「なに、芦戸さん？」

「えつとね……その生命力をあた……じゃなかった。他人を治癒する個性ってどの程度の範囲まで可能なの？」

「えつと……そうだね。死んでさえなければ重傷者だったら一か月分くらいの生命力を与えれば全快にまでできるかな？ 傷が完治しているんだつたらもう治せないけど治療中とかならリカバリーガール以上の治癒力は発揮できると思うよ」

「そっか！ 飯田！ いい事だね!!？」

そこでいきなり話を振られた飯田は困惑気味に首を傾げながらも、

「なにがだい、芦戸くん？」

「なにが、つて……あんたの家族の事だよー！ インゲニウム、まだ治療中なんでしょ

!!？」

「あっ!？」

その事に気づいて飯田は出久に顔を向けて思いつきり頭を下げながら、

「緑谷君……頼む。兄さんを、全快とはいかなくても、ヒーローに復帰できなくともいい。兄さんを治してくれ！」

「飯田君……うん！ 任せて！」

「ありがとう……！」

そして目を改めて出久は飯田とともに入院しているインゲンニウム……飯田天晴がいる病室へと赴く事になる。

結果はその時に話すでしょう。

それで涙を流す飯田に「よかつたな！」と次々と声をかける一同。

そこにいつもの感じで、

「——おはよう」

その相澤の言葉とともに全員がすぐに席に着席する。

相澤はそれで一度全員を見渡しながら、

「………うん。全員いるな。それじゃ朝のホームルームを始める前にお前らに伝えておく事がある。当然、緑谷の件だ」

それで苦笑いの出久と爆豪以外は冷や汗を流す。

当然である。

二人だけの会話……それも結構重要な話を聞いてしまったのだからそれなりに処罰は受けるというものだ。

「もう知っちゃったもんは仕方がねえが、このクラスの奴ら以外には絶対に緑谷の秘密はばらすなよ？ 個性が個性だ。誰かに話しちゃったことで良からぬ奴ら……特にヴィランなんかは目を付けられて緑谷が狙われる事になったら本末転倒だ。

だからというわけじゃねーが、緑谷と爆豪以外の全員には反省文を書かせることにした。特に盗聴器を使った八百万は他の奴らよりもびつしりと書かせるからな？」

「承知しておりますわ……むしろそれだけで済むのでしたら出来る事でしたらなんでも致します」

それで他のみんなもそれだけで済むなら……と、気持ちよく反省文を書く気であった。

「まあ、心から反省してんならそれでいい。それじゃホームルームを始める」

そして始まるホームルーム。

「で、だ。もうすぐ夏休みが迫ってきているが、もちろんお前らが30日間一か月休めるなんて道理はこの雄英では通用しない」

「まさかッ!!」

それで先ほどまでの空気が変わって全員は別の意味で緊張をする。

期待も含まれている事もあり、相澤の次の言葉を待つ一同。

「夏休み、林間合宿をやるぞ」

その言葉を持ってして、

「知ってたよやったー!!」

「肝試し!」

「お風呂!」

「みんなで花火」

「みんなで作るカレーもいいな……」

「行水!!」

と、やりたい事を次々とみんなが口に出す。

それで騒ぎ出す一同だったが、

「ただし……」

相澤の言葉と個性の発動による睨みでシーン……と静かになる一同。

「その前に期末試験があるんだが……合格点に満たなかった奴は……もれなく学校で補習授業が待っていると見え」

「みんな頑張ろーぜ!!」

切島のその叫びに勉強に乏しいものは冷や汗とともに「おー!!」と腕を上げていた。

実に騒がしい教室である。

爆豪はそんなやり取りを聞きながらも、「くだらねー」と呟くが、仲の改善を図る事に成功した出久が後ろの席から声をかける。

「……か、かつちゃん。そ、その、一緒に勉強しない……?」

「ああ!」

「ひい!? ご、ごめん……! さすがに出過ぎたよね!」

と、怯える出久を見て爆豪は少し頭を冷やして、

「……まあ、いいけどよ」

「あ、ありがとう。かつちゃん!」

それで嬉しそうに頬を緩ませる出久。

それを聞いた一同は、

「(「(ここで幼馴染というポジションが役立つ日がこようとは……!」)」」

と、爆豪の出久への対応が今までが今までだっただけに、爆豪のツンからのデレ化に對して全員がある意味焦りを感じていたり。

「……緑谷。それじゃ俺も教えてやれない事もないんだが……」

「轟くん……?」

「デクちゃん、勉強教えて!」

「麗日さん……?」

「俺も教え合う事も出来るが……」

「飯田君……?」

と、出久に集りだした数名。

それによつて爆豪がキレて、

「デクは俺を頼つてきたんだ! だからためーらは付いてくんな!!」

「爆豪だけ緑谷を一人占めとかずるいぜ!」

と、また賑やかになる教室。

相澤はそんな一同を白けた目をしながら見ていながらも、

「(……まあ、こいつらのこの反応なら緑谷の個性に対する偏見とかによる関係悪化はなさそうだな……むしろ関係向上してないか……?)」

教師の視点で「いい事だな」と思っていた。

そんな事が行われている一方で裏側では、

「まさかヒーロー殺しがやられるとはね。だが、彼のおかげで死柄木弔に仲間が増えそうであるのは喜ばしい事だ」

チューブを何本も付けられた男がそう話す。

「しかし、彼に任せられますかな？ むしろワシは先生が前に出ればとも思いますが

……」

「ははっ。それなら早く体を治してくれよ、ドクター。……ああ、こういう時にあの子の個性が欲しくなってくるねえ……僕がやられてから姿を消したあの子……フオウはどこにいるのか……いや、もうおおよその見当は付いているのだがね」

そして映し出されるは出久の顔写真。

「緑谷、出久……フフフ……。彼女はどうかやって手に入れたのか分からないけど……また首輪を付けたいものだねえ……」

先生と呼ばれた男はニヤリと笑みを浮かべるのであった。

NO. 049 救いとその定義

芦戸の提案から始まったインゲニウムの治療話。

それによつて飯田がその日は一日中そわそわしてしまつていたために、出久はすぐにも取り掛かれるように相澤に相談をしていた。

「なるほど……飯田の兄の治療か。お前なら結構いいところまで行くと思う、が……治療と言えど個性は個性。使用するには許可がいるのは分かるな？」

「はい……」

出久もそこが気がかりであつた。

まだ仮免も取得していないために個性を自由に使えないのである。

これではインゲニウムの治療どころの話ではない。

「まあ、そう落ち込むな。そう言う時こそ俺達教師を頼れ。ばーさんには俺から話を通しておくから、明日の午前中にもばーさんの同伴でさっさと行ってこい。緑谷と飯田の分の午前中だけの休みは確保しておくからよ」

「あ、ありがとうございます。相澤先生！」

教師が一緒にいるのであれば限定的に個性を使用できるので、リカバリーガールと一緒にに行けば個性も使えるという事であった。

それで出久は教室に戻るなり、飯田に事情を説明すると、

「なるほど……。確かに俺達はまだ学生……。個性を自由に使えないという制約があったな。それでもリカバリーガール同伴のもとで緑谷君の個性が使えるという訳だね？」

「うん！」

出久は嬉しそうに猫耳をピコピコと動かしていた。

周りで見えていたクラスのみんなもそれで癒しを感じるとともに、

「それじゃデクちゃん！ 午前中の授業の写しはしておくから結果が出たら教えてね
！」

「うん、麗日さん」

「飯田ー、兄貴治るといいな〜！」

「ああ、上鳴君……。もう今すぐにも病院に行きたいところだ」

「吉報を期待しているわね」

「うんうん！」

そんな感じで出久と飯田の二人は翌日にリカバリーガール同伴のもと、インゲニウム

……飯田天晴が入院している病院へと赴いていった。

受付でリカバリーガールが出久の個性の説明をしている間、出久と飯田は多少の会話をしていた。

果たしてその内容とは、

「飯田君……こんな時だけでも少しいいかな？」

「ど、どうしたんだい。緑谷君……？ 改まって……」

「うん。天晴さんを治すのは僕ももう承知の事なんだけど……まずはしてほしい事があるんだ……」

「してほしい事……？ それは？」

「ヒーローってさ、人を助ける仕事だよね？」

「ああ、その通りだ」

「でも、助けると同時に心も救わないといけないと思う……それを言うとな僕は一方的にインゲニウムを知っているけど、インゲニウムは僕の事は一切知らない、だから……僕がなにかを言ってもそれじゃ心までは救えない……」

「そんな事は……」

飯田は何かを言おうとしているけど、出久の表情が深刻なために言葉が出てこない。女子にこんな顔をさせてはいけない！

そう、飯田は思うがどうすればいいのかわからない。

少しの沈黙の後に、出久がまた口を開いて、

「だから、飯田君。飯田君が天晴さんの心を呼び覚ましてあげて……」

「呼び覚ます……」

「そう。たとえもうヒーローとして活躍できなくてもいい、それでも健康な体でこれらを過ごしてもらうためには気持ちも追いつかないといけない。

多分だけど、今の天晴さんは心が塞ぎ込んで、僕が治療してもどうしていいかわからないと思うから……」

出久のその気遣いに飯田は感動すると同時に、そこまで兄の事を考えてくれている事に底知れない感謝の気持ちで一杯だった。

「(やはり、君は僕の目指す人の一人だよ。緑谷君……)」

そう、改めて実感した飯田は「わかった」と言葉を返した。

そこにタイミングよくリカバリーガールが歩いてきた。

「話は終わったようさね？」

「リカバリーガール……」

「それじゃ飯田。案内よろしく」

「わかりました！」

飯田はそれではきはきと動いて先を歩いていく。

出久とリカバリーガールはそんな飯田の後ろを歩きながらも、

「さっきの飯田との会話、聞かせてもらったけど、良い覚悟だよ緑谷。お前さんが本当に治癒だけの個性だったらあたしは弟子に取っていたところさね」

「あはは……恐縮です」

そして病室の前まで来た三人。

中にはまだサプライズで伝えていない天晴に、それと父と母も事前に伝えておいたために来ている。

「それではお二人はしばしの間、待っていてください。必ず兄さんを説得して見せます」
「うん、わかったよ飯田君」

出久達に見送られながらも飯田は病室の中へと入っていく。

そこには下半身麻痺のためにベッドに上半身だけを起こして窓の外を見ている天晴

と、それを心配そうに見守る父と母の姿があった。

「天晴兄さん……」

「天哉……お前まで来たのか……学校はちゃんと行かないとダメだろう……？」

飯田の方へとゆつくりと振り向く天晴。

その表情ははつきり言つてやつれていた。

ステインにやられる前の元氣いっぱいだった兄の姿は見る影もない。

その事に一途の悔しさを覚える飯田。

だが、それも踏まえて飯田は言葉を丁寧に選択しようと思考を回していた。

「兄さん……聞きたい事があるんだ。いいかな？」

「なんだ……？　言つてみてくれ……」

なにか特別な会話がされる事を察した天晴は真剣な表情になって飯田を見据える。

その突然の兄の真剣な顔に萎縮しそうになる飯田。

だが、それでは先には進めない。

「兄さん……もし、もしもだよ？　足が治るとしたら、なにをしたい……？」

「なんだ……そんな事か」

「そんな事かつて……真剣に聞いているんだ。答えてくれ、兄さん！」

「そんなたればの事はもう何度も考えたよ……だが、どんな名医でも俺の足は治らな

いと言ってきた……だから、もういいんだ……言つたろ？ お前に『インゲンウム』は託すつて……」

そこには疲れ切つた表情をする天晴の顔があつた。

緑谷君の言う通りだ……これは家族である俺でしか解決できない案件だ。

そう感じた飯田は次の言葉を選ぶ。

「まだ希望を捨てちゃダメだ、兄さん！ きつと、まだ何かがあるはずなんだ！」

「天哉……あまり俺を怒らせるようなことをしないでくれ……弟でも容赦できないぞ？」

「ツ!! そんな、そんな顔をしないでくれ兄さん！ 俺は、俺は兄さんの事を思つて聞いているんだ！ 少しでもいい……希望を取り戻してくれ！」

「そうは言うがな!! もう、もう何もできない身体なんだぞ……？ 希望をもう持てないんだぞ……？ こんな俺にこれ以上どうしろつていうんだ……」

「兄さん……」

顔を両手で覆つて必死に何かに当たりたい心を抑えている天晴の姿の痛々しさよ。

だが、飯田はなお言葉を続ける。

「一言……言つてくれればいいんだ。治してまた頑張りたいつて……」

「天哉……」

そして天晴の心に飛来する数々の想い。

自身の事を誇り高いと言ってくれた父の言葉……。

こんな自分に付き従ってきてくれた相棒サイドキックの仲間達……。

今まで助けてきて感謝の言葉を贈ってくれた人々の顔……。

思い出せば思い出すほどにそれが一筋の形となつて瞳から零れ落ちてくる。

「……………治したい……………またヒーローとして立ち上がつて困っている人々を救いたい……………」

こんなところで、諦めたくない!!」

天晴の心から来る本音であつた。

飯田はそれで確信した。

このタイミングで言わずにどうしろと言うのだ。

「それが聞けてよかったよ、兄さん。そんな兄さんに今日はプレゼントがあるんだ」

「プレゼント……………?」

「ああ。緑谷君、リカバリーガール。入ってきてください!」

飯田のその言葉に、病室の扉が開かれて少し涙目の出久と、優しい顔をしているリカ

バリーガールが中に入ってきた。

「リカバリーガール……………でも、一回あなたの診断は受けたはずですが」

「ああ。あたしでもあんたを治す事は出来ない」

「でしたら……」

「だが、この子なら……緑谷なら出来るかもしれないんだよ」

天晴はそれで出久に顔を向けて、

「君は……?」

「は、はい! 僕は飯田天哉君の同級生で同じクラスの緑谷出久と言います。それで早速ですけど、天晴さん……もしかしたら体が僕の個性で治るかもしれないんです」

「それは、本当かい……?」

みるみるうちに天晴の顔に生気が戻ってきた。

「はい。出来る限りの事をさせてください」

「兄さん。彼女ならもしかするかもしれないんだ」

「天哉……信じていいんだな?」

「ああ!」

「それじゃ緑谷さん。よろしく頼めるかな……?」

「お任せください!」

出久はそれで天晴の身体に両手を押し当てて、

「始めます……」

体内に渦巻いている生命力を与える個性で天晴の身体に送り込んでいく。

天晴の身体はそれで発光しだしていく。
そして、

「終わりました。天晴さん……どう、ですか？」

「嘘、だろ……？ 足に、足に感覚が戻っている！ それどころか体中が軽い!!」

「天晴!!」

「天晴兄さん!!」

飯田とその家族はもう涙を浮かべて天晴を抱きしめた。

あの頃の天晴が戻ってきた。

それだけで他に望むものなどありはしないと云わんばかりに……。

それからしばらく家族は抱きしめ合って涙を互いに流し続けていた。

出久はそんな光景を自分の事のように嬉し泣きしていた。

救えたんだ……。

それだけの事だろうが、出久にとってはヒーローとして最初の一步であるからだ。

「緑谷さん……ありがとう。君のおかげで俺はまた天哉の自慢の兄になれそうかもしれない」

「いえ、治ってよかったです」

それで綺麗に終わればよかったのだけど、

「まったく天哉も隅に置けないな！　こんな可愛い子がいたのなら紹介してくれてもよかったですじゃないか！」

「と、父さん！　緑谷君とはまだそんな関係じゃ！」

「まだと言ったな……？　緑谷君、天哉はこれでなかなか融通が利かない男だが、大した男でもある。少しは考えてくれてやってくれ」

「え、えつとーそのー……あうあう」

飯田父の暴走でもう出久は顔を赤くさせて猫耳も垂れさせて俯くだけしかできなかつたのであつた。

そんな事があつて、雄英では約三名ほどのものが何かを感じ取つてか思わず授業中にボールペンをへし折っていたとか……。

おそらく彼らからなにかしらの被害を受けるであろう飯田の明日はどっちだ……？

NO. 050 帰ってきたヒーロースーツ

『インゲニウム。奇跡の復活！』

その見出しが出久が個性で治した翌日には新聞の一面を飾っていた。

内容としては、

『今は逮捕されたもののあの巷を震え上がらせていたヒーロー殺し、ステインによって負わされた傷によって脊髄損傷による下半身麻痺になったインゲニウムⅡ飯田天晴氏、先日回復したと報告』

それによって当然各メディアのマスコミが騒ぎ始めていた。

誰が治した？ どうやって治療した？

などと色々と憶測が飛び交っていて、特定しろ！という強迫観念に近いもので事情を知っているインゲニウムの家族達、病院の関係者などを強引に取材すると言ったいつもの汚い手法で次々と裏取りも済ませていって最終的にはとうとう出久の事がばれてしまった事に雄英高校の教師たちは頭を悩ませていた。

「……………まさか、……まで話が大きくなるなんてな」

許可を出した本人、相澤が目頭を揉みながら疲れた表情でそう語る。

オールマイトも同様のようで、

「これではオール・フォー・ワンに緑谷ガールの事をばらしたも同然の事になってしまいましたね……奴が生きているのなら私が負わせた傷も癒えていないでしょうし、傷を癒すためにも必ず緑谷ガールを手に入れようと躍起になるでしょう」

「やっぱり一番怖いのはメディアだよね。あの調べ上げるためにはなんでもする根性でできれば見習いたくはないね……」

校長はそれで午後に配布された号外の記事に書かれている『インゲニウムを治したのは雄英高校の一年、緑谷出久さん（15）』というプライバシーのカケラもない記事の内容に深いため息を吐く。

「あたしも口止めはしといたんだがね。どうせどこかの馬鹿がお金で揺すられたんだろ
うね……」

リカバリーガールも今回の件に関しては呆れる他ないと言った感じだ。

総じて関係者全員疲れた顔をしていた。

「相澤君。緑谷ガールは今どうしてます……?」

「そうですね。他のクラスの生徒がそれで緑谷の事を見学に来ている感じで緑谷本人は居心地悪そうにしていますよ。」

爆豪と、それに普通なら鎮め役の飯田が今回の件も絡んでいる事もあって、それでキレていまして――A全員をグルにして他のクラスの生徒の視線から緑谷を守ろうとしていて收拾が現在つかない状態です。

……………まったく、期末テストが控えているつてのに忌々しいですね」

そう毒づく相澤の気持ちも分からなくはない。

当分は出久に対しての突撃取材も多くなるだろうし、出久に関してはマスクミに巻き込まれないために特別に送り迎えを出そうという話を持ち上がっていた。

出久の善意の活動なのに汚い大人達に言葉巧みに利用されて潰されたくないというのが満場一致の回答であった。

それからマスクミが落ち着くまで2、3日くらいかかったが、やつとのことで出久も普通に登下校できるまでには状態は回復できた。

それでも電車通学のために言い寄られる事がたびたびあったので冷や冷やものだったらしい。

だが、悪い事だけではなかった。

インゲニウムのファンからは何度も「ありがとう」と感謝の言葉を貰ったからだ。それだけで出久もやってよかったと思えた。

「……まあ、そんな感じで少しだけまだ大変かなあ……」

朝の登校でお茶子と飯田と合流して歩いてきた出久はそう締めくくりながら話す。

「デクちゃん、大丈夫……？ 顔が少し疲れてる感じだよ？」

「麗日さん、大丈夫大丈夫。体力だけはあるから」

そう気張っている出久だけど、猫耳と尻尾の毛並みが少し萎れているのでお茶子は「やっぱりデクちゃんは私が守らないと！」っと、気持ちを新たに気合を入れていた。

「緑谷君……俺の兄の件で迷惑をかけてしまい、すまない」

「飯田君！そこは気にしちやだめだよ！ 僕の意思でやったことなんだから！」

「それでもこう毎日騒がれては緑谷君も身が持たないだろう……？」

「そうだよデクちゃん。何か言って来たら私も加勢するからね？」

「うむ。俺も緑谷君を守るためなんでもしよう」

そんな二人の気持ちに感謝の念を感じた出久は、見惚れるような笑顔を浮かべて、

「二人とも、ありがとう……」

「ツツツツツ!!」

表裏ない心からの言葉と表情に二人は胸を押さええて過呼吸気味になるのを必死に我慢しながらも、

「(うん!) デクちゃん、カワイイよー!」

「(素直に受け取っておこう!) ……イイ」

「二人とも!?! なんか本音と建前が逆になってない!?!」

こうして仲良し三人組はいつも通りの日常に戻っていく。

だが、やはり飯田は二人の女子と一緒に仲良さげに歩いているために嫉妬の視線を一身に受けている。本人が自覚がないためにスルーされているが、普通なら胃を壊しそうなものだろう。

そして朝のホームルームでは、

「特にこれといって重要な話は無いんだが、緑谷に飯田。お前ら二人のコスチュームが修繕が終わって返ってきたから後でチェックをしておけ」

「了解しました」

「わかりました。あ、それと少しいいでしょうか?」

「なんだ、緑谷?」

出久が手を上げて意見を言いたそうにしていたために相澤は内容を聞く。

「はい。ちよつとコスチュームを改造したいんですけど、そういうのつてどこで申請すれば通りますかね?」

「ほう……もう改造計画を立てているのか。向上心があつていいな。そういうのはサポート科担当のパワーローダー先生に話せばなんとかなると思う。昼に職員室に來い。話しておくから」

「ありがとうございます!」

それでホームルームは終了して相澤が教室を出て行くのを皮切りに一同が話しかけてくる。

「緑谷、もう改造計画立てているみたいだけどどういうのにするつもりなんだ?」

「尾白君。うん、職場体験で新たな境地を開拓できたんだ。だからそれを取り入れようと思つて」

「緑谷の個性つて増強系が多いからそつち方面なのか!」

「うん。今まで拳に固執していたんだけど、足技も今度から入れて行くかと思つて……ヒーロー殺しの時には付け焼刃の攻撃でブーツが保たなかったのもあつて、硬いソールを取り入れようか……」

それから次々と質問を受ける出久は楽しそうに改造案を話していく中で、

「あ、そうだ。飯田君。よかったら足技の使い方を教えてくれないかな？ 一番このクラスで足に関して上手いのは飯田君だから」

「そう言う事なら喜んで引き受けよう」

頼られた飯田はそれは嬉しそうにしていた。

だが、一方で、

「おい、デク……俺にもなんか手伝えるもんとかはねえのか……？」

「……」

突然の爆豪のセリフに全員が思わず固まる事になる。

まさか爆豪自らが話の中に入ってくるとは今まで無かった事だから全員どうしていいか分からないのであった。

爆豪のデレ具合が結構な速度で進行しているぞ！

「う、うん……それじゃかつちゃんにも足の使い方を教えてもらいたいな……」

「おう。任せろ！」

「……」(緑谷／緑谷君／出久ちゃん／デクちゃんに対して少し素直になり過ぎていて逆に怖い……)「……」

満場一致の心からの感想であった。

ちなみに切島と瀬呂がそれなら俺達にもなんか教えてくれよと爆豪に試しに言って

みたところ、

「ああ!! てめえらはてめえらでなんとかしやがれ、クソが!!」

と、いつもの感じに戻ったために出久限定でデレる爆豪という認識が全員に植え付けられた。

そんな反応をしていて轟はいつだったか爆豪に言った『お前がいつまでも緑谷に対してそんな態度なら……先に行かせてもらおうぞ』というセリフを思い出して、悔しそうに拳を握っていたり。大丈夫だ轟。まだチャンスはたくさんある!

それから出久はパワーローダー先生に改造許可を貰って、サポート科にコスチュームを持っていき、

「あら? あなたはいつぞやの!」

そこで久々に兎目女史と顔を合わせる事になる。

果たして無事に済むのだろうか……? ?

NO. 051 とある掲示板でのやり取り

【ターボ】インゲニウム、復活について「やったぜ！」

01：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*） **：***：**
ID：*****

あのヒーロー殺しにやられて脊髄損傷によって下半身不随になったターボヒーロー、インゲニウムがいきなり復活したことについて

02：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*） **：***：**
ID：*****

それな！

俺ファンだったから復活嬉しい！

03 : 名無しのヒーロー 投稿日 : 2****/*/*/* (*)
ID : *****

だが誰がそんな奇跡を引き起こしたのか……？

04 : 名無しのヒーロー 投稿日 : 2****/*/*/* (*)
ID : *****

◇ 03

新聞によると、あの雄英体育祭で女子ながらも活躍した緑谷出久ちゃんらしい。

05 : 名無しのヒーロー 投稿日 : 2****/*/*/* (*)
ID : *****

おい！ プライバシーの侵害!?

06：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*） **：**：**

ID：*****

というよりプライバシー云々の前に未成年保護法どこ行った……？息してる？

07：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*） **：**：**

ID：*****

さすが相変わらずのマスゴミ、やる事が汚い！

08：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*） **：**：**

ID：*****

緑谷ちゃんって確かなり遅咲きの個性が出た途端に性転換しちやつた子だよな？

09：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*） **：**：**

ID：*****

そうそう！ あの選手宣誓はいまだに感動してるやつが多いしな。

10 : 名無しのヒーロー 投稿日 : 2****/*/*/* (*) ** : ** : **
ID : **** * * * *

とち狂った奴が以前に緑谷ちゃんのことを調べようとかして警察に通報されて
たっけ……？

11 : 名無しのヒーロー 投稿日 : 2****/*/*/* (*) ** : ** : **
ID : **** * * * *

そんな事もあったな…… (白目)

12 : 名無しのヒーロー 投稿日 : 2****/*/*/* (*) ** : ** : **
ID : **** * * * *

それだけの魅力が彼女にはあるんだよな。猫耳は至高！

13：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*/* (＊) **：***：**
 ID：*****

それだけじゃなく、彼女は突然変異の個性であつても、個性を複数持つてるしな……。
 今どれくらい判明してるっけ……。？ 解析班、はよ！

14：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*/* (＊) **：***：**
 ID：*****

雄英体育祭で把握できたのは以下の個性だ。

- ・ 性転換したことからまず雌の猫
- ・ 爪の伸縮自在、さらには硬化もできる
- ・ 高速移動をした事から脚力強化か……。？
- ・ ステージを破壊したこと増強系のなにか……。？
- ・ 叫ぶ事によって発生させる衝撃波

・猫の姿に変化。子猫にも、虎みたいな形態、そして5mほどの巨大な姿にもなれる。
コントロール次第で自由に幅はあるだろう。

・炎を使うことが出来る。爪にも宿していたから別物だろうと判断はできる。

そして今回のインゲニウムを治した謎の治癒の力

こんなところか……？

15：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*/* (**) **：**：**

ID：*****

◇◇14

サンクス！

しっかし、こうして並べてみるといったばい持つてるよな？ 普通個性つて一人一個だ
ろう……？ 使い方の幅を利かせても最高2、3個くらいが限度だしな。

16：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*/* (**) **：**：**

ID：*****

いずれヒーローとしてデビューした時には個性を公表するんだから自ずと分かるっ
てもんだけど、それにしても異常だよな。

17:名無しのヒーロー 投稿日:2****/**/**(*) **::**::**
ID:*****

それもそうだけど、少し話はずれるけど緑谷ちゃんの猫の姿で尻尾が二股だよな？

18:名無しのヒーロー 投稿日:2****/**/**(*) **::**::**
ID:*****

それがどうしたよ……？

19:名無しのヒーロー 投稿日:2****/**/**(*) **::**::**
ID:*****

いや、なんか猫又つぽいよなって……。それで思い出すのは超常が起きる前はかなり

昔に都市伝説であった『猫又の怪』とか言う話、知ってつか？

20：名無しのヒーロー 投稿日：2***/*/*/*（*） **：***：**
ID：*****

……また古い話を持ち出してきたな。
だけど、それって超常が出た後からピタッと聞かなくなったよな……？

21：名無しのヒーロー 投稿日：2***/*/*/*（*） **：***：**
ID：*****

うむ。タイミング的には同じく都市伝説の個性を奪う奴とかいう話、あつたじゃん？
もしかして個性奪われたとか……？

22：名無しのヒーロー 投稿日：2***/*/*/*（*） **：***：**
ID：*****

なんか話がかなりずれてきているので軌道修正願う！今は緑谷ちゃんの話だろ！

23：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*） **：**：**

ID：*****

サーセン

24：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*） **：**：**

ID：*****

まあ、なんだ……？

とにかくこれでヒーローとメディアの確執がまた広がったのは確かだよな……？

緑谷ちゃんは今インゲニウムを治療しただけなのに、マスゴミに名前まで公表されちゃったんだから。

25：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*） **：**：**

ID：*****

そだねー。雄英体育祭で出来た緑谷ちゃんファンクラブの非公式サイトを見に行ったら案の定炎上してるし……。

26：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**(*) **：***：**
ID：*****

あ、やっぱり非公式サイト出来上がっていたんか……。しかも炎上……。ファン達はそれはもうお怒りだよな。

27：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**(*) **：***：**
ID：*****

そりやそうよ。ただでさえ雄英での宣誓で一気に話題に上がって、成績もあの爆破の生徒に負けたはいいけど、それでも準優勝だからなJK。

28：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**(*) **：***：**

ID:*****

あのヒーロー殺しともエンデヴァーに助けられたとはいえ戦って生き残ったそうだしねー。

29:名無しのヒーロー 投稿日:2****/**/**(*) **:*:*:

ID:*****

なによりもともと優しい性格っぽいのに、TSして一気に花開いた感じだからな。

30:名無しのヒーロー 投稿日:2****/**/**(*) **:*:*:

ID:*****

ハイエースされないか心配だな……。

31:名無しのヒーロー 投稿日:2****/**/**(*) **:*:*:

ID:*****

◇◇ 30

おい、不穏な事言うのはやめろ！

女性としての経験が乏しい緑谷ちゃんは悪い大人に狙われやすいんだから！

32：名無しのヒーロー 投稿日：2****/****/**** (*) **：***：**

ID：*****

TSつ娘つて色々と浪漫の塊りだからな。猫耳と尻尾も添えて効果はパワーアップしているし……。

33：名無しのヒーロー 投稿日：2****/****/**** (*) **：***：**

ID：*****

TSケモミミつ娘、(*、D、)ハアハア……ダンケダンケ！

34：名無しのヒーロー 投稿日：2****/****/**** (*) **：***：**

ID:*****

通報しました

35:名無しのヒーロー

投稿日:2****/****/**** (*)

::***

ID:*****

通報しました

36:名無しのヒーロー

投稿日:2****/****/**** (*)

::***

ID:*****

魔性のロリコンは下がってろ！

漢なら見て愛でるだけで手を出さない紳士であれ！

37:名無しのヒーロー

投稿日:2****/****/**** (*)

::***

ID:*****

とにかくスレタイで忘れそうだけど、インゲニウムもまた活躍してほしいね。緑谷ちゃんも将来有望だしね。

38：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/****(*) **：***

ID：*****

……緑谷ちゃんの事で埋まってたよな……。

インゲニウム、ガンバ!!

……今日も今日とてネット民は元気に過ごしています。

NO. 052 発目女史との作業

放課後に出久はサポート科のラボへと顔を出していた。

そこで再会する発目明という少女。

出久の姿を確認するや、

「あなたはいつぞやの！ と、言いますか最近結構一年の間で有名な緑谷さんですね!？」

「うん。発目さん、体育祭以来だね。こうして会うのは」

「あの時はご鼻屑にしてもらいありがとうございますー!」

発目も出久の事を覚えていたようで最初は世間話な感じで話は進んでいく。

そこにパワーローダーが話しかけてきて、

「おい発目。お前に仕事だあ!」

「お仕事ですか!? それはどういった!？」

「それはほれ。その緑谷がお前にぜひとも頼みたいって事で話を振ってきたんだ。腕を上げるチャンスだ。失敗だけはすんなよ……?」

「はいはいはい！ 私で良ければ喜んで!! こういう時に縁を作っておくのもいいものですねー!」

発目はそう言つて満面の笑顔を浮かべる。

「それじゃ緑谷さん。さつそくですけどどんなご要望でしょうか!」

「うん。僕のヒーロースーツをちよつと改良したいんで見てもらつてもいいかな?」

「お任せください! では、緑谷さんはまず着替えてくださいねー!」

「うん。わかつたよ」

出久はそれでラポにある更衣室で返つてきたヒーロースーツに袖を通していつて、なんか以前よりもフィット感が増していることにいい仕事をしているなど実感しながらも着替えていく。

その際に足のブーツにも注文を入れておいたために、膝までを覆う少しだけ硬くて分厚い……そう蹴るのに適したフォルムになっていたのでやはりいい仕事ぶりだと思わずにはいられない感じであった。

着替え終わつて発目に見せに行くと、

「おおー! スカートが可愛いんですねー」

「ありがとう」

「それでこれをどう改良するのですか!? 腕がなりますよ!」

もう発目は今すぐにも改造したい気持ちで一杯であった。

それで出久は「発目さんらしいなあ……」と思いつながら、

「うん。今回は足の方に重点を置いて改良してもらいたいんだ」

「ふむ。足、ですか……」

「うん。今まで拳だけでほぼ戦ってきたんだけど、どうせなら全身を使った戦い方をしたいと思って。」

「それにこの前のヒーロースーツを壊す要因がブーツが僕の足による蹴撃の負荷で威力に耐えられなくて弾けちゃったんだ……。」

「それで今はこんな少しごつい装甲のあるものに変えてもらったんだけど……それでどこか不安で、だけどこれ以上は耐えてくれるのを信じるしかないから……そうだね。最終的には足による攻撃が拳と同等かそれ以上の威力を出せるような仕組みを取り入れたいなって感じかな……?」

「ふむ、ふむ……」

「それで少し考え込む発目。」

しばらくして、

「わっかかりました！ お客の無理・無茶・無謀な要望にも完璧に応えるのが私のモットーですからお任せくださいな！」

「お、お願いします!」

「それですが……少しブーツをお借りしてもよろしいでしょうか……?」

「え? うん、いいけど……もうなにか思いついたんですか?」

「ええ、それはもう。こう、ビビツと閃いちゃいましたよ! 少し時間を置かせてもらってもよろしいでしょうか!」

「わ、わかりました」

「では! パワーローダー先生! 一緒をお願いします!」

「わあーつたよ……緑谷さんは少し待っててよ。こいつを一人にすると何を作るかわかんねーからな」

「ひどいですねー。私は誰でもご要望通りに応えるのが信条ですよ?」

「そう言ってるめえは今までどれだけのサポートアイテムのゴミ山を築いてきたと思っただ!」

パワーローダーに頭を叩かれる発目。

発目も「いやー、発目は私の存在意義ですからねー」とむしろ開き直っていたりする。そんな感じで二人がラボの奥へと入っていくのを見届けながら、出久はどんな改造をされちゃうんだろうと不安に思う……。

ま、まあパワーローダー先生も見ていてくれるんだから大丈夫だよね……?と、無理

やり気分を持ち直す事に成功はしたもののやはりどこかサポート科の人間はぶっ飛んでいる印象だから不安はぬぐいきれないのが正直な所である。

それからしばらくして時間的には40分くらいだろうか経過した頃に、

「緑谷さん！ 一応仮組みが出来ましたので試着してもらっても構わないでしょうか!? 自信作です！」

「もう!? ずいぶん早かったね！」

「お客様の待ち時間も考えてのスピード作業……これもサポート科では当然の事ですのでー！」

「そ、そっかー……」

それで改良されたであろうアイアンブーツを出久は見る。

特に改良された点と言えばスパイクの部分がかなり分厚いソールが追加されているところだろうか……?と

それ以外は特に変わった点は見られないが、果たして……?と

「発目さん。これはどう改良されたの？」

「フフフ。まずは履いてみてからご確認してください。きっと驚きますよ?」

「う、うん……」

出久はそれで履いていって履き心地を確認する。

少し重くはなったが、それでも動きやすさは阻害されていないために誤差範囲だろう。

他に目ぼしい点といったら何があるのかとありあえず出久は足を動かしてみたが、特に変更点に分からなかった。

それで少し困惑気味に発目に目を向けて説明を求めた。

「ふっふっふー。そのご様子ですとまだお気づきにならないようですねー。気づいたらきつと驚きます事請け合いですよ！」

「まあ、こいつの腕は俺も認めているところはあるからなあ……とりあえず動ける場所にでも移動しようか」

「わかりました！」

三人で運動場に移動をする。

そして一つの標的が設置されるのを合図に、

「それじゃ緑谷さん！ あの標的を思いつきり蹴ってみてください！ あ、つま先の蹴りの方がお勧めですよ！」

「わかりました！」

出久はそれで脚力強化とワン・フォー・オールを同時に発動して瞬間的に加速をして高速移動を行いその威力も上乘せしてつま先から標的を蹴りにいった。

着弾する出久のアイアンソール。

最初の蹴りによって圧がかかったと同時に、ドオンツ!!という出久も想定外の破壊力が出て標的は木っ端微塵に砕け散っていた。

「こ、これって……なんだろう？　蹴った瞬間になにかが作動して二回も蹴りをした感覚……」

「フフフ。お気づきになられましたか。その通りですよ！　よくその靴を見てくださーい」

出久はそれで煙を排出しているアイアンソールを見る。

そこには先ほどまでこうではなかったのに、つま先部分が飛び出している感じだったのだ。しかしそれもすぐに引っ込んでしまったが……。

「これって!？」

「はいー。ご説明しますとこのアイアンソールはつま先で衝撃を与えた瞬間に中に内蔵されているバネが作動して飛び出る仕組みで計算上二回連続で攻撃できるように設計されているんですよ。ソールのおかげで防御率も上がっていますので是非お勧めですよー」

それで出久はもう一度つま先で地面を蹴ってみた。

するとまたしてもバネが作動して飛び出して軽く蹴っただけなのに地面が破壊され

たのだ。

「すごい……すごいよ発目さん！ 僕の考えている以上の威力が出てる！」

「お気に召しましたかー！」

「うん。とつても！」

「それはよかったです！ 私の新しいベイビーを可愛がってあげてください！ 壊れたら修理しますので！」

「ありがとうございます！」

発目に感謝の言葉を贈る出久。

そこに見守っていたパワーローダーが近づいてきて、

「そんじゃ、緑谷さん。ちよつとコスチューム改良の件でまたうちと鼻肩にしている一流デザイナー事務所と話し合つて申請をしないとイケないからコスチュームは預からせてもらうよ」

「え、でも……」

「大丈夫だ。腕は確かだから三日くらいすれば戻ってくる。それなら期末試験までには間に合うだろ……？」

「わかりました。それじゃお願いします」

それからスーツをパワーローダーに預けた後、

「緑谷さん！ なぜかあなたとはこれからもいいお付き合いが出来そうな気がしますので是非ご鼻屑にお願いいたしますね！」

「わかったよ、発目さん」

「ほお……？」

そこにパワーローダーが感心したような声を上げる。

「どうしました？ パワーローダー先生？」

「いや、発目がまだ生徒の君にこんな積極的に自分を売り込んでいくのが珍しくてね。俺からも言わせてもらおうがこいつはどっかおかしいけど腕は確かだから、こういう縁は大切にされた方がいいぞ」

「は、はい！」

そんな感じであつという間に出久のコスチュームYが出来上がった瞬間だった。

「それじゃ、あとは勉強を頑張ろう！」

期末テストに向けて意欲を燃やす出久だった。

猫娘と期末試験編

NO. 053 期末試験が迫る中

……時は六月最終週。

期末試験まですでに一週間を切っていた。

それでクラスのみんなはと言うと、

「まったく、勉強してねー!!」

「あっはっはっはー!」

上鳴電気……20/20位。

芦戸三奈……19/20位。

二人はまったく勉強の時間が取れてなかった事に非常に追い込まれている感じであった。

「体育祭とか職場体験とかが重なって勉強どころじゃなかったんだよー!!」

「確かに……」

上鳴の叫びに、

常闇踏陰……14／20位。

常闇も思わず頷きながらも汗を垂らす。

「中間はそれはなー……入学したてでなんとかあった感じだけどなー。行事が重なりまくったからなー」

「(コクコク……)」

口田甲司……11／20位。

砂藤力道……12／20位。

砂藤の言葉に口田が無言ながらも頷いていた。

普段なかなか大声を出さない口田と会話が成立している辺り、これはもう慣れであろう。

「期末は中間と違って……」

「演習試験が辛いところだよなー」

峰田実……9／20位。

峰田が余裕そうに頬杖を付きながら話す。

こいつ、普段はエロイ事ばかり言っている割に成績はそんなに悪くはないのだ。

中学時代にモテたい……モテて周りを見返してやりたいという感じで努力した結果が今の峰田を着実に成長させていると言ったところか。

だが、そんな事情など知る由もない上鳴と芦戸が叫ぶ。

「あんたは同族だと思つてたのにー!!」

「お前みたいなやつはバカで初めて愛嬌が出るつてもんだろ!!」 どこ層にお前みたいなやつが必要があるんだよ!」

なかなか酷い罵倒である。

だが、それでも峰田は余裕を崩さずに一言、

「『世界』、かな……?」

そう言いきる。

こいつ、改めて言うが意外と油断ならないぞ!

「芦戸さん、上鳴くん。が、頑張ろう? みんなで林間合宿行きたいもん! ね!」

「うむ!」

「普通に授業を受けていれば赤点なんて取る事なんてないだろ……?」

緑谷出久……4 / 20位。

飯田天哉……2 / 20位。

轟焦凍……5 / 20位。

可愛らしくそう言う出久に飯田と轟も続く。

順位を見れば分かるだろうが、特に三人は真面目な層なので点数は悪くないのだ。

出久はつい最近までインゲニウム関連でごたごたしていたにも関わらずに、ヒーロースーツも改良した事もあり、向上心があり真面目な生徒だと教師の間ではもっぱらの話であった。さすがが主席入学者である、と……。

だが、今の上鳴にはそんな三人の言葉はあまりにも酷であったために、「言葉には気を付けろー!! お前らと同じ頭脳だったら苦労してねーんだよー!!」嘆きのレベルが半端なかった。

そこに静かにある生徒が言葉を発した。

八百万百……1／20位。

「お二人とも……座学であるのでしたら、わたくしがお力添えできるかもしれません」
「ヤオモモローー!!」

「演習の方は……その、からつきしでしょうけども……」

八百万……体育祭で常闇に全然歯が立たなかった事で落ち込み傾向にある。

しかし、それでも出久の事を聞いた後である意味革命的な思いを抱いた。

もし、もしかしたら出久が生命力を消化できずに自分たちが先に逝ってしまい、残されていくのだったらしつかりとしたサポートを後世にも残さないといけないと……。

それですでに親にも内密に相談していたりする。

そんな八百万の心意気に両親達は涙を流しながら「立派な考えを持って……」と、も

うすでに賛成の意を示していた。

「上鳴と芦戸じゃないけど、ウチもちよつと二次関数で詰まってるところがあるんだけど、いいかな……?」

「俺もいいか? 古文がちよつと厳しいんだ」

「俺もお願いでできるかな……」

耳郎響香……7/20位。

瀬呂範太……17/20位。

尾白猿夫……8/20位。

三人がそう言つて頼つてきたので八百万も頼られている事に嬉しさを感じて、

「良いですとも!!」

と、絶賛フィーバー状態であった。

それを見ていた切島は、

「これが人徳の差よ……」

「俺もあるわ! てめえ教え殺したるか!?! それにデクもついてんだから文句は言うん

じゃねーよ!!」

「まあ、お前ら二人とも頭いいもんなー。頼むわ」

切島鋭児郎……15/20位。

爆豪勝己……3 / 20位。

爆豪は出久との仲が改善できたためにたまに図書室で一緒に勉強する仲にはなっていて、それを轟、飯田、麗日が負けじと一緒に勉強をしようとして入ってくるので最近はどう意味で爆豪は焦燥を感じていた。

具体的に言えば、

『デクは俺と一緒に一番力が出るんだよ!! 幼馴染舐めん!!』

と、言葉には出さないがそんな事を思っていた。

………かつちゃん、いつの間にそんなスイーツ脳に………?

ちなみに障子目蔵と青山優雅の二人はと言うと、

障子目蔵……10 / 20位。

青山優雅……18 / 20位。

「まあ、なんとかなるかな………?」

「(誰かに教わりたいけど、そこは僕! 自身で乗り越えないとね☆)」
と、一人で頑張るつもりであった。

お昼時。

出久は食堂で飯田、轟、麗日、蛙吹、葉隠の五人と一緒に食事を摂っていた。

ちなみに、

麗日お茶子……13／20位。

蛙吹梅雨……6／20位。

葉隠透……16／20位。

である。

「普通の科目は授業の範囲内ででるから何とかなると思うんだけどね……」

「うむ。突飛な事はしないと思うが、そこは雄英。なにかしらやってきてもおかしくないな」

「だが、それでもまあ、なんとかなるだろ……」

と、出久、飯田、轟の三人はなんとかなる精神であつたのだが、お茶子はそれで、

「普通の科目はなんとかなるんやね……やっぱり三人とも頭いいよね」

「一学期でやった事の総合的な試験だつて言うけどー」

「それだけしか教えてくれないんだものね。相澤先生は……」

「戦闘訓練に救助訓練……あとはほとんどが基礎トレーニングだもんね」

それで頭を悩ませる一同。

「でも、万全に整えておけば……あいたつ!？」

『緑谷／緑谷君／デクちゃん／出久ちゃん!？』

突然頭に何かをぶつけられた出久に、他のみんなが過剰反応してその相手を睨みつける。

そこにはB組の物間が立っていた。

「ごめんよ、頭が大きいから当たってしまったって……」

「君は、物間くん。よくも！」

「物間くん……君は緑谷君になにをしているのかな？」

「わざとだったら成層圏の彼方までぶっ飛ばすよ……？」

「氷漬けにしてやろうか……？」

「あられもない姿を撮っちゃうよ……？」

「ケロ。溺死は好みかしら……？」

出久よりも怖い顔をした（葉隠は透明のために分からないが）一同が物間に笑いながら睨みを利かせている現状で、

「みんな!? なんか怖いよ!？」

出久はそんなみんなに恐怖を感じていたり。出久は愛されてるネー。

爆豪がもし一緒にいたら、すでに物間は消し炭にまでされている事だろう……。

それでも物間は気づいていないのか鈍感なのか、

「君達、ヒーロー殺しに接触したらしいじゃないか。体育祭に続いて注目ばかり集まる

要素ばかり増えていくじゃないか、A組は……ただ、その注目って期待値とかじゃなくってトラブルとかに関しての方が度合いが強いよね？ ああ、怖い怖い！ いつか君達のトラブルに巻き込まれて被害を受けるかもしれないと思うと、おぶあ!!」

物間が最後まで言いきる前に後から来たB組委員長の拳藤がチョップを食らわせながら、

「物騒なこと言うな、物間。飯田の件はシャレになんないぞ？ ごめんね、こいつちよつと心がアレなんだ。緑谷もあんまり根に持たないでね？」

「あ、うん……」

「それよりだけど、期末の演習内容を知りたそうだったけど、入試ん時みたいに対口ボツトの実戦演習らしいよ」

拳藤のその発言に騒然とする出久達。

話によると先輩とかに聞いたらしい。

それから物間が何か言っていたが、それでまた拳藤にチョップを食らわせられるという夫婦漫才のような感じでその場を離れていくのであった。

それを不思議そうに二人を見ながらもせっかくの情報だから、それをみんなに伝えると、

「なんだ！ それなら楽勝とまではいかないけどやれそうじゃん！」

「そだねー！」

と、晴れやかな顔になっていた。

ロボット相手なのならば力の調整をしないで済むから思いっきりやれるという意気込みだ。

だがそこで爆豪が、

「ロボだろうが人だろうがやる事は変わらないだろ……？ 調整なんて自然にできるもんだらうが！」

と言っていた。

普通なら反論の声を上げる上鳴とかだらうが、最近の爆豪の性格の軟化を把握している為に、

「そりやそうだろうけどよ……」

と、あまり大声は上げないでいた。

「そんな事より、おいデク」

「かつちゃん？ なに？」

「ちよつと後で実戦演習に備えて組み手に付き合えよ。体育祭で俺が勝ったとはいえ慢心はしないに越したことはねえからな」

「わ、わかったよ。かつちゃん！」

出久も頼られて嬉しそうに返事をする。

「それだけだ。じゃーな」

爆豪はそれだけ伝えて教室を出て行った。

それを見届けた一同はと言うと、

「やっぱり爆豪の変化になかなか気持ちがいまいかええよな」

「それは言えてるー」

「だが、良い傾向ではあると思うがな」

「緑谷も最近は前より気が楽でしょ？」

「そうだね」

と、盛り上がっていた。

爆豪が教室を出て行くのを物陰で確認していた相澤は思う。

「ふむ……爆豪は緑谷との仲の改善は出来たとはいえ、まだ安心できないな。一回、二人を組ませてみるか……」

と、良い意味で二人の組み合わせが決定した瞬間であった。

NO. 054 爆豪の心境の変化について

テスト期間だとはいえ、演習も含まれているために出久と爆豪、そして切島の三人は爆豪の家で勉強がてら組み手をしていた。

切島に関しては一見頭は悪そうに見えるものだが、それでも倍率300倍の中を潜り抜けてきた猛者なのだから勉強をしつかりすれば大丈夫なのである。

……ちなみに、爆豪の母、光己は爆豪が出久を（切島も付いてきているとはいえ）家に呼んできたのだからそれはもう大変な騒ぎであった。

一部始終を抜粋。

「あ、あなたもしかして緑谷さんところの!？」

「は、はい……お久しぶりです。光己おばさん」

「いやー……女の子になっちゃったって聞いていたけど、これは驚いたわ。ねえ、勝己にイジメられてない……?？」

「はい。最近かつちゃんはとても優しいので……」

「へえ〜?」

光己はそう言つて爆豪の方へと笑みを浮かべながら見る。

「変な目で見んじゃねーよ、クソババア!! デクもいらん事喋るな!!」

要約して出て行け!と光己に言う爆豪に、光己は「それじゃお邪魔虫は退散するとして、二人とも楽しんでつてねー」と言つて出て行った。

「なあ、爆豪。お前のかーちゃん、なんか面白いな」

「面白くなんかないわ!! とにかく、勉強始めつぞ! 特に切島! 俺やデクと比べてめえはギリギリなんだからビシバシ行くぞ!」

「おう、頼むわ」

「うん。それじゃ始めようか」

そして始まる三人での爆豪の部屋での勉強。

切島はこれで集中すればなんとかなるものだから、意外に教え上手な天才肌の爆豪に、それを分かりやすく切島に翻訳している出久の手腕で勉強はすこぶる捗っていために、

「でもよ。なあ爆豪に緑谷。お前ら二人とも最近まであんな関係だったのに呼吸が合つてるよな……?」

「そ、そうかな……?」

えへへ、と嬉しそうにはにかむ出久。

そして「ふんっ」とそっぽを向く爆豪。

「でも、僕もそこは気になっていたんだ。ねえ、かつちゃん」

「あん……………」

「前まで僕の事を邪険にしていたのに、どうしてこんなに優しくなったの……………」 その、やっぱり僕の身体の事で思う事とかあるのかな……………」

出久がそう言った途端になぜか空気が悪くなった気がした切島。

切島も出久の件に関しては知っているので、地道に生命力を減らしていくしか今のところは手が他にないから気にはしていた。

「……………」別に、てめえの身体がどうか関係ねーわ。ただ、てめえと話し合う事で互いに対等な立ち位置に立てたと思っただから、態度を改めただけだ。

前にも言ったと思うが、『クソデクはクソデクだ！ 男だろうが女だろうがてめえはてめえだろうが!!』って言う方針は変わってねえよ」

「そっか、よかつた…………。あれ？ でも、切島君の前でそれ話して大丈夫なの？」

出久と二人だけなのなら話してもいい事だが、切島が聞いている事にちよつと恥ずかしくなった出久。

切島は切島で、

「あー……わりい、緑谷。前にその件は爆豪から聞いちまつてるんだよ」

「かつちゃんから……？ やっぱり切島君ってかつちゃんと仲良しだよね」

「あはは。そう改めて言われると照れるぜ……」

「照れるなや！」

三人でわいわいとしながら話し合う。

勉強の手も緩めずにやっている辺り、真面目な二人がいてこそだろう。

もし切島だけだったなら継続していかないだろうから。

「じゃーよ、爆豪！」

そこで面白い事を思いついた切島は爆豪にある質問をぶつけてみようとする。

下手したら爆破されそうな質問だが、そこは我慢すればいいと思い、

「最近轟や飯田、それに麗日の三人がよく緑谷に話しかけようとする、怒ってるけどど

うしたんだ？ 前までのお前なら無視してたじゃんか？」

「僕もそれは少し思ったかも……」

二人にそう聞かれて爆豪は少し難しそうな顔をしながらも、

「……………分からねーんだ」

「分らない…………？」

出久と切島はそう言っつて首を傾げる。

爆豪は依然難しそうな顔をしながらも、

「なんか最近な、デクの事を見てると何故かは知らねーが胸がモヤモヤしてくんだ。そしてあの三人がデクに絡んでくるのを見ると逆にムカムカしてきやがる……なんなんだ、これ？」

「か、かつちゃん……」

「ば、爆豪……お前」

さすがに出久も切島もそこまで鈍感じゃないために爆豪のその症状に覚えがあるために切島なんかは言葉を失い、出久に関しては顔を真っ赤にさせていた。

爆豪はそんな二人の反応に首を傾げながらも、

「……………んだよ？　なんかわかったんか？」

「爆豪。そりやお前……………！」

「んんっ!!」

切島が笑みを浮かべて親切に教えてあげようとしたのだが、出久がそれを必死に顔を赤くさせながらも止めていた。

もう涙目になっている事から教えないで！と強く訴えている事に、切島も馬に蹴られたくないと素直に思ったために、

「ん……………やっぱわかんねえよ。頭の良い爆豪ならすぐに気づけんじゃね？」

と、はぐらかしていた。

それで出久は内心安堵の息を吐いていたが、それでも胸は早鐘の如く鳴っていたために爆豪の顔を直視できないでいた。

もう、完全に心と気持ちちは女の子なんだね、イズクちゃん……。

それで一人だけ取り残されてしまった形になった爆豪はハテナ顔になっていたが、自覚する日はいつ来るのだろうか……？

お茶子は自宅で勉強中にそんな怪電波を受信したために、

「なんか、爆豪君が無自覚にデクちゃんを口説いている気がする……」
と、到底麗らかではない表情をしていたとか。

そんな感じだったけども、勉強は捗ったために、

「爆豪に緑谷。ありがとな！ 結構捗ったわ！」

「俺とデクが教えたんだから当然だろうが！」

「まあまあ、かつちゃん……。それじゃ残り時間は演習対策でもしておこう……。？」

出久のその言葉に切島は不思議そうに首を傾げながらも、

「なんでだ……。？　ロボット対策なんて、ただぶつ壊せば済む話じゃね？」

「てめえの頭は単純か！　俺達は一回ヴィランに襲われたんだぞ?!　雄英も何の対策も取らねえわけがねえ……。カリキュラム変更で恐らく対人戦に変わると俺は見ている」

「あ、やつぱりかつちゃんもそう思う……。？」

「マジかよ!?!」

出久と爆豪の二人がそう同じ考えだったために切島はもう不安になっていた。

これだと絶対当たるんじゃない!? という確信を持って。

三人がそんな会話をしているところ、雄英教師陣はというと、会議室で、

「ヴィラン活性化の恐れか」

「もちろん防げるのであれば防ぐのが最善だが、学校としては万全を期しときたい」

「これからのヴィラン連合の手によって着々と変化していく社会で、現状以上の対ヴィラン戦を想定して状況が激化していくことを予想して考えていけば……ロボットとの戦闘訓練は実戦的ではない」

そうスナイプ先生が話す。

そもそもがロボットは入試で人に危害を加えるのか？という保護者達のクレームを回避するためのもので、あまりに実戦向けではないのである。

それから一同はそれぞれで似たり寄ったりな生徒を二人にチームアップしてどの教師を当てるかを話し合った。

当然、出久と爆豪はもう組む事が決まっている為に、

「それじゃオールマイト先生。二人の事は任せましたよ。二人の仲が良い方向に向かっているとはいえ、いつその均衡が崩れてまた仲が悪くなったでは話になりませんから。ですから二人の仲を見つつ、本気も出さずにうまく誘導してあげてください」

「わかりました」

オールマイトはそれで考える。

最近の出久と爆豪の仲の良さは見ているだけでも分かるというもの。

だが、爆豪がいつまた出久に暴力を振るわないかと親心のように心配になってしまっ

のだ。

だから今回は心を鬼にして二人をうまく誘導し、本当に仲が改善できたのかを見ていこうという方針である。

場面は出久達に戻って、

「……確かにそう考えると教師の人達とバトルしそうだな……」

「うん。特に僕とかつちゃんはオールマイトと当たるかもしれないだよ。それも高確率で……」

「だからその考えがもし外れても、色々と対策は練っておいて損はねえからな」

「わかった。それだと……組むのは俺は砂藤とかか？」

「多分苦手分野を攻めてきそうだからそこら辺かな……？」

と、すでに予想を立てていたのであった。

NO. 055 期末試験、開始

出久と爆豪の予想は果たして当たっているのか切島は一抹の不安を感じながらも、期末テスト当日になった。

それぞれこの日のために向けて勉強をしっかりとしてきたために、各自の筆記試験での手応えはなかなかだったらしく、一番筆記に関してには苦手そうだった上鳴と芦戸に関しても思わずの手応えを感じて、わざわざ家にまで招いて教えてくれた八百万にグツグツサインを送っていたのがとても印象的だったと言えよう。

そして日を跨いで向える実技試験の日。

生徒全員はコスチュームに着替えて駐車場広場へと集まっていた。

「あ、デクちゃん。改修したコスチュームの初見せだね！ とつてもかっこよくなって
るよ」

「ありがとう、麗日さん。足の方にも仕掛けも入っているから前より断然強化されてる
んだー」

「そうなんだー」

と、また出久とお茶子の和やかな会話がされている中で、期末試験担当の教師たちがやってきた。

耳郎はやってきた先生の数を見て思わず「多い……」と呟く。

そう、見える限りでは相澤と、他には13号、プレゼント・マイク、エクトプラズム、ミッドナイト、スナイプ、セメントス、パワーローダーの姿があつたのだ。

このそうそうたるメンバーに出久は小声で爆豪に話しかける。

「かつちゃん……これはもしかして……」

「(……ああ。予想は当たっていたようだな)」

そこに切島も二人の後ろから、

「まさかお前ら二人の予想が当たるとはな……厳しいぜこりや)」

と、もう試験を辛そうにしていた。

相澤が前に出て試験前の言葉を発する。

「よーし……お前らよく集まつたな。それじゃさつそくだが演習試験を始めて行く。この試験でも筆記試験同様にしつかりと赤点もあるんだ。だからよ……林間合宿に全員揃って行きかけたなら死に物狂いで合格を目指してくるんだな」

もうすでに相澤は眼を鋭くさせて生徒達を威嚇している。

そして続けざまに話す。

「お前らも情報を事前に仕入れてきてんだからどんな内容かは把握できていると思う……」

そう話す相澤。だが、そんな場で試験内容をまだ把握できていない上鳴と芦戸が、「聞いてますよ！ ロボ無双！ これに尽きるってね！ だから成長した俺らで倒してやりますよ！」

「そうだそうだよ！ そしてみんなで楽しい林間合宿よ！」

一学期で成長した力を見せようと二人はすでに樂觀的思考に入っていた。

だが、そこで相澤の布の中から校長が顔を出してきた。

「ふっふっふ……残念だったね。諸事情あって今回から試験内容を変更しちゃうのさ！」

「……………」

それで言葉を失う上鳴と芦戸。

先生達の人数を見れば想像できるといふものだが、ロボを倒して楽にクリアしようという算段は脆くも崩れさった。

「その、校長先生……変更って？」

「それはね……」

校長がそれで説明を開始する。

内容としてはやはりヴィラン連合の雄英侵入から始まるヴィランの活性化に伴い、試験内容も単調な口ボ相手をするより、より実戦的な対人戦を考慮した試験内容に変更するという事。

「そういうわけさ。だから諸君にはこれから二人一組チームアップを組んで、今ここに集まっている教師の皆さんとそれぞれ戦ってほしい」

「先生方と……ッ!?!」

それで一同は驚愕する。

どう見てもあちらはこちらより格上。

手加減でもしてもらわないと勝ち目は薄いだろうという事で、

「対ペアの組み合わせと対戦する教師はすでにこちらから独断で決めさせてもらっている。」

似た個性、傾向、成績、親密度……それらを吟味してすでにこちらで決めてあるから今からその組み合わせを説明していく。どんな組み合わせになっても文句は言うなよ？

ヒーローになるって事は、知らない誰かと組む事も想定しないといけない。よってそういう意味でも事前に話すより直前で話した方が効果的ではある。合理的だろう……？

そういう相澤の言葉に「合理的だろうか……？」と疑問に思いつつも、確かに事前に組み合わせなどできない事などヒーロー社会に出れば嫌と言うほど痛感し、分かるというものだろう。

どんなヴィランに対してどんな人と組めば対応できるのか即座の判断が要求されていく。

相性最悪なヴィランと遭遇してしまう可能性もゼロではない。

そう言った意味もこめての今回の対人戦である。

そこまで考えた一同。

そしてペアの組み合わせが公開されていく。

まず一回戦目。

セメントス VS 切島鋭児郎・砂藤力道ペア。

二回戦目。

エクトプラズム VS 蛙吹梅雨・常闇踏陰ペア。

三回戦目。

パワーローダー VS 飯田天哉・尾白猿夫ペア。

四回戦目。

相澤（イレイザー・ヘッド） VS 轟焦凍・八百萬百ペア。

五回戦目。

13号 VS 麗日お茶子・青山優雅ペア。

六回戦目。

校長 VS 上鳴電気・芦戸三奈ペア。

七回戦目。

プレゼント・マイク VS 耳郎響香・口田甲司ペア。

八回戦目。

スナイプ VS 葉隠透・障子目蔵ペア。

九回戦目。

ミッドナイト VS 瀬呂範太・峰田実ペア。

そして最後の十回戦目。

オールマイト VS 緑谷出久・爆豪勝己ペア。

その組み合わせを聞いて、

「やっぱりオールマイトと当たったね、かつちゃん」

「だな。燃える展開だぜ！」

「おや？ お二人さんはすでに把握していたという顔だね？」

オールマイトがそんな反応をする二人にそう話しかける。

それに対して出久は頷きを返しながら、

「オールマイト……挑ませてもらいますね？」

「わかった。なにやら私対策でも立てているようだが、ヴィラン役としてこちらも本気で行かせてもらうぜ、お二人さん」

「かかつてこいやー！」

と、もう意識は演習に向かっていた。

だが、他の生徒はそこまで行っていないために、

「うおっ……一回戦目からかよ。切島、頼んだぜ？」

「おう。でもやっぱり緑谷と爆豪の予想した通りの展開になったな……」

「そうなのか……？ 切島君？」

「おうよ。休日に爆豪の家で三人で勉強がてらに演習内容の予想をしていたんだがな……ここまで当たるなんてさすが優秀組の二人だけ」

「そうなの。出久ちゃん、爆豪ちゃんもすごいよね。そこまで仲良くなったのも含めて」

「良い事ではあるな」

「うんうん。私もいいと思うよー！」

と、盛り上がっている一方で、

「うわー……ミッドナイトとか。戦い難そう……」

「そう言うなよ瀬呂！　こういう時こそな展開だろ!?　運良ければラッキータッチもありえんだぜ!」

と、やり難そうな顔をする瀬呂と、もうやる気全開の峰田がすでに盛り上がっていた。そんな会話に気づいたミッドナイトが二人に流し目をしていて、瀬呂は思わず怯えて、逆に峰田は興奮していた。

「校長先生って、どう戦うんだ……?」

「見た目だけじゃ分からないものなかもね?」

見た目だけなら弱そうではある校長に、上鳴と芦戸は少し安心しているのだが、この後に地獄を見る事になるとは想像もできないであろう。

そして他の一同もそれぞれの対戦する先生達の能力をペアとなって話し合っていた。

そこにオールマイトが一同に向けて試験内容を話していく。

「では試験内容だが、まず制限時間は30分だ。この限られた時間の中で君達はこの……ハンドカフスを先生達にうまく掛けて行動不能にするか、ペアのどちらか一人がステージから脱出するが条件だ。

だが、そう簡単に脱出などはいかないと思っておいでくれ。

でもね、それだと君達には不利になっちゃうから先生の方はこの超圧縮重りをつける

からハンデと言う事になる。

逃げるか立ち向かうかの判断は各々で決めるんだ。考える事もヒーローとして大事な事だからね。みんなの健闘を祈るよ！」

オールマイトの説明に全員は一応は納得の表情をする。

その中で出久、轟、飯田の三名は保須市での一件も踏まえて色々と考えていた。

そして、そのまま時間は過ぎて行ってさっそく第一回戦が始まるうとしていた。

セメントスと切島・砂藤ペアが町の中のエリアへと移動していく中で出久達はその光景をリカバリール・ガールの出張保健所があるモニター室で見学をしていた。

切島と砂藤はすでに戦う準備は整っていたためにいつでもいけるといふ感じであった。

「それじゃ試験を始めて行くよ、二人とも。それと……言い忘れていたけどね。我々教師陣も君達を本気で叩き潰していく気だからね？」

そう切島と砂藤の二人に話しかけるセメントスはいつにも増して威圧感があった。

「おお!! なんかいつもと違うぞ!! 砂藤、本気で行くぞ！」

「おーよ!!」

切島の呼びかけに砂藤は懐から砂糖を出して一気に口に入れて。パワーを増強させて構える。

「……………そうそう。君達の傾向だけどね、消耗戦に極端に弱いところだ。いいかい？ 戦闘つてのはいかに自分に有利なところを發揮できるかだよ」

『スターーーーーート!!』

というボイスとともに、二人はセメントスに向かって走り出す。

だが、セメントスは慌てずに地面に手をつけて個性であるセメントを操る力で二人を一気にセメントの壁で包囲した。

「こんなもの！」

「破壊するぜ！」

二人はセメントの壁を破壊しようとするが、

「さつきも言ったよね？ もう、君達は俺の有利なステージの術中に嵌まっているって事を……………」

それからセメントスは二人の行動範囲をどんどん狭めていき、最後にはセメントの波で二人を一気に行動不能にしてしまった。

『切島・砂藤ペア、戦闘不能によってセメントスの勝利』

無情な宣告とともにいきなり演習試験一回戦目は敗退してしまつて見ていた出久達は、

「本当に本気で潰しに来ている……」

「い、こわー……」

いきなりの失格に、全員は戦慄するとともに、同時に勝って見せると意気込みを燃えさせていたのであった。

NO. 056 期末試験 考察と二回戦目

一回戦で切島と砂藤の二人が虚しくもセメントスの前に敗れてしまい、いきなり赤点が確定してしまつた事に対して、

「おいおい、マジかよ……切島と砂藤があんな呆気なくやられちまつたぜ……？」

さすがの峰田もこれに関しては真面目に驚いていた。

そして、

「勝たす気があるのか分からないよね……？」

芦戸もそう続けるが、真面目に分析していた出久と八百万は、

「いえ、お二人なら勝つ可能性は十分にありましたわ」

「ヤオモモ……？ それって本当なの？」

八百万の言葉に耳郎が半信半疑で聞き返す。

そこに出久も乗る形で、

「うん。八百万さんの言う通りだよ。だけど、今回はセメントス先生に無策で正面から

突っ込んだんじゃないのが二人の敗因かな……？」

「さすが緑谷さんですわ。最初の部分はわたくしと同じ考えです」

「二人とも、どう言う事か説明してくれるかい……？」

「うん、飯田君」

それで出久が説明を始めようとしたところで、

「面白そうだね。あたしにも聞かせてくれないかい、緑谷？」

「リカバリーガール……はい。まずセメントス先生は個性を発動するには少なくともコンクリートの地面に手を触れないといけない。そしてそのセメントを操る効果の範囲はセメントス先生から中心に広がっていく。」

だから切島君と砂藤君はまずは個性が届かなくなる場所までなんとか逃げの一手を選択して、セメントス先生の言う通りに消耗戦は避けるべきだったんです」

「なるほど！ 戦闘開始前にすでにヒントは与えていたという事だったのか！」

「うん。飯田君、その通りだよ。だけど二人は真正面から打ち破る事を選択しちゃったからあんな結果になっちゃった感じだね」

出久の説明にリカバリーガールは内心で感心しながらも、

「なるほどねえ……それで、続きはあるんだろう？」

「はい。そしてセメントス先生にも届く範囲がある上に、セメントス先生には失礼です

けど見た目の凶体通りなら移動速度は二人よりも遅いうえに、超圧縮重りでさらに動きには制限が掛けられているから逃げの一手はまずは最善だと思えますから」

「『おー！』」

それで聞いていた全員が出久の考察に拍手を贈っていた。

「そうだね。でも、もしさつきみたいにセメントの壁で囲まれちゃったらどうするんだい……？」

「そうですね。そこも砂藤くんの個性が役立つと思うんです。今回の演習の条件は一人でも脱出できればこちらの勝ちになりますから、砂藤くんの増強系の個性で切島君を思いつきりゴールまで投げ飛ばせばあるいは……ですね。

もしこれを実戦に置き換えてしまったら、愚策かもしれないませんが砂藤君もそんな簡単には破れるとは思いませんから、切島君が応援を呼ぶまではなんとか耐えてくれると信じたところです。僕の考察は以上です」

「ふむ。まだ少し甘いところはあるけど及第点だね。これからも精進しな」

「はい。ありがとうございます」

そんな時だった。

『二回戦をもうすぐ開始いたします。蛙吹梅雨と常闇踏陰の両名は移動を開始してくだ

さい』

そんなアナウンスが聞こえてきたために、

「出久ちゃん、あなたの考察……とてもためになったわ」

「ああ。よく考え行動する事を心がけよう」

そんな感じで二人は二回戦の場所へと向かっていった。

「……………今度は蛙吹に常闇か。八百万に緑谷はエクトプラズム先生についてはなにか対策はあるのか…………？」

「うーん……………それなんだけど、エクトプラズム先生の個性はそんなに把握できていないから、梅雨ちゃんと常闇君の二人が冷静に対処できるかがカギになってくると思うんだ」

「わたくしも緑谷さんと同意見ですわ。蛙吹さんと常闇さんはサポート能力に優れていますからまずは同じく逃げの一手を選択した方が無難だと思います」

「なるほどな…………」

二人の意見に轟はとりあえず頷いた。

と、同時にこういう時の出久と八百万の状況分析能力は下手したらこの誰よりも高いのではないかと思わず舌を巻く思いであった。

出久に関しても、轟的には癪だが爆豪との仲も改善できている為に余計な雑念が入ってこない環境で、余計そういう能力が際立っている感じだと思っていた。

蛙吹と常闇の二人はショッピングモール内の様な場所がスタート地点となっていた。そんな場所で待っていたエクトプラズム。

「ソレデハ……始メサセテ貰オウカ」

片言の様な独特な喋りに二人は警戒しながらも、

『第二回戦、スター……ート!!』

始まりのゴングが鳴り響き、その瞬間突如として二人の周りにたくさんのエクトプラズムの姿が出現する。

エクトプラズムの個性は『分身』。

よって、複数で二人を包囲しようという事だろう。

常闇はそれを察知した瞬間に蛙吹を黒ダークシャドウ影にくわえさせて、

「蛙吹！ 投げるぞ!!」

「ケロっ!!」

投げ飛ばされた蛙吹はすぐさま常闇にカエルの舌を伸ばし、キャッチして自分のところまで引き寄せる。

二人はこの狭いエリアの中ですぐさまに逃げる選択をしたのであった。

それを見ていた一同は、

「うまい！ 梅雨ちゃんと常闇君はやっぱり逃げの選択をしたんだね」

「そりやそうだなー。あんな狭い中で複数の敵を相手取るのはさすがにきついもんな」

出久の言葉に上鳴がそう答える。

そう、ただでさえ数が多いのに、それが同じような速度で迫ってくるのは多対戦闘向
けである。

力量も分からない以上はまずは逃げの選択は最善である。

それに二人に襲い掛かってくるエクトプラズムは分身のために常闇の黒影ダイクシャドウによる中
距離攻撃、同じく蛙吹の舌による同様の攻撃で容易く形を崩していつている為に力も分
散されている事が窺える。

「だけど、二人の課題ってなんなんですか……？ 特にエクトプラズム先生の個性は天
敵とは思えないんですけど……」

「普通はそう思うだろう？ だけどね、常闇の強みは間合いに入らせないのでいいところ
だけど、逆に言ってしまうえば間合いに入りさえしてしまえば途端に脆くなる」

「あー！ だからそのためのエクトプラズム先生の個性なんですね!」

お茶子が分かったように叫ぶ。

そう、黒影ダイクシャドウにも捕捉できる数には限界がある。

それゆえに多人数で攻めれば途端に弱さが露呈してしまうのだ。

「その通りさ。そして蛙吹梅雨だけど、彼女に関しては課題らしい課題はない優秀な生徒だよ。だから彼女の従来持っている冷静さでどこまで常闇の弱点を埋めるためのサポートができるかが今回の目的って言えば目的だね。彼女はいいと思うよ。きつと将来は精神的支柱になりえる子だね」

リカバリーガールからそう絶賛される蛙吹。

それを聞いて一同も思う。

特に出久と峰田の二人はUSJで実感していた。

いつも、ここぞという時に蛙吹の冷静な判断で助けられてきたと……。

「梅雨ちゃん、とつても周りを視野広く見れるもんね」

「うん。そこはウチも同意かな？ 蛙吹にはいつも助けられているからね」

「そだねー」

みんながモニター室で話し合う中で、モニターの向こうの二人はなんとかエクトプラズムの攻撃を凌ぎながらもゴールへと向かっていく。

ゴール前にはおそらく本人であろうエクトプラズムが待ち構えていた。

エクトプラズムは二人がここまで凌げた事に関して褒めるような物言いをしなが
も、

「ナラ……コレナラドウダ？」

突如としてとても巨大なエクトプラズムの顔が出現して二人は抵抗も出来ずに飲み込まれてしまった。

そして表面に二人は捕られるように浮かび上がる。

「うえっ!?! 分身ってあんな事も出来るの!?!」

芦戸が思わずと言った感じで口に手を添えながら叫んでいた。

このままだと時間一杯まで捕まったまま終わってしまうだろう。

常闇が黒^{ダークシャドウ}影をなんとか飛ばす事をしてゴールを潜ろうとさせているが、さすがの口でもあるエクトプラズムの前には黒^{ダークシャドウ}影も何度も弾かれてしまう。

万事休すかと思われたが、

「あ、あれ!?! いつの間にかエクトプラズム先生の腕にカフスが巻かれている!?!」

「あれって……どう言う事？」

「あれは、蛙吹の個性だね。ちよつと時間を巻き戻して映像を二人に焦点を当てて見てみると分かるけど、蛙吹はエクトプラズムに捕まる前に咄嗟にカフスを飲み込んでいた。そして、エクトプラズムに気づかせないように慎重にカフスを口から出して黒^{ダークシャドウ}影に持たせてさりげなく攻撃させながらもカフスをはめさせた……やっぱりあの子はやるねえ」

やはりリカバリーガールに絶賛されていた蛙吹であつた。
そして、

『蛙吹・常闇ペア、条件達成!』

と、アナウンスが鳴り響いた。

「やっぱり梅雨ちゃんはずごいなあ……」

「そうだな。ではみんな、次は俺と尾白君の番だ……」

「なんとかやってみる。行ってくるよ」

「頑張つてね。二人とも!」

飯田と尾白の二人は一同にグツと親指を立てて出て行つた。

NO. 057 期末試験 三回戦目

今からパワーローダーと飯田・尾白ペアによる演習試験が始まろうとしていた。

まだゴングの音が鳴る前に飯田は尾白へと話しかける。

「尾白君、今回はステージも相まってスピード勝負が決め手だと思うが、どうだろうか……?」

「そうだね。うん、それで間違いないと思う」

二人が見る先には一面掘削地帯ですでにパワーローダーの専売特許な場所であった。

パワーローダーの個性は『鉄爪』。

つまりモグラのように地中を掘り進むことが出来る個性だ。

さらにはパワーローダーのその身体を覆う重機がまるで獣の形をしているようなヒーロースーツを身に纏って今か今かと腕を鳴らしていた。

「くけけ。さーて……お二人さん、俺はかなりガチ目でいくぜ? せいぜい足場を崩して埋まらないように注意するんだな?」

「よろしくお願いします！」

そう話すパワーローダーに二人は真面目か！と言わんばかりの大声を上げて返事をした。

そして、

『第三回戦目、スターーーート!!』

開始のゴングが鳴り響いた。

「くけけ……そんなじゃ、いくぜ!!」

重機の音がやかましくも響きを鳴らせてパワーローダーは一気に地面に穴を開けて掘り進めていき、地上から姿を消した。

「尾白くん、正面突破だ！」

「よしきたー！」

二人は同時に走り出した。

個性の関係もあつてか、やはり尾白の方がスピードに欠ける部分はあれど、それでも常日頃から鍛えているために飯田のレシプロを発動していない状態ならばなんとか付いていけているところだ。

そしてさつそく、目の前の地面が陥没をして二人は急停止を止む無くすることになるのだが、

「立ち止まるな!!」

「おう!!」

すぐさま軌道修正を行い、穴を避けながらもスピードを落とさずに走り込んでいく。

「くけけ。いいねえ……正面突破で尚且つ俺の攻撃は完全に避けていくスタイルか。まあいいけどな……だが! 掘るだけが取り柄じゃねーんだよ!」

と、言いつつもパワーローダーは二人が今走っている地面の真下をすごいスピードで突き進んでいき、その影響かどんどんと地面が盛り下がっていく。

「ぬおお!! どんどん地面が下がっていくぅ!!」

「尾白君、跳ぶぞ!!」

飯田は尾白の腕を掴んでまだ陥没していない地面へと飛び跳ねていた。

それでなんとかうまく着地は出来たものの休む暇もなく、

「また穴がどんどんと出来上がっていつてるぞ!」

「体力を削りに行く作戦と見た……! 持久力の勝負か!」

二人はなんとかまだ残っている足場の良い場所だけを勘だけで走っていき、時には一人が通れるような足場も通っていくという神経をすり減らしていく行動を繰り返していた。

一度嵌まってしまったらそこで登るのに時間を取られてタイムオーバーになる事は

分かり切った事。

ゆえに、絶対に穴に落ちてはダメだ！という考えに至っていた。

だが、そこで穴からわざわざパワーローダーがものすごいスピードで這い上がってきた、

「くけけ。逃げの選択はいいな……でもな、俺もそう簡単に逃がしはしないぜ？」

ジャキン！ジャキン！と腕の鉄爪を鳴らせて二人に襲い掛かってくる。

個性が個性だ。

あんなものが掠りでもしたら即削られてお陀仏である。

「パワーローダー先生、その攻撃を受けるわけにはいきません！」

そう言って尾白に合わせていたスピードを一段階加速させて飯田はその鉄爪を逃れる事に成功する。

「ヒットアンドアウェイ!!」

飯田に攻撃していたために背後がから空きになっていたので尾白は尻尾による攻撃をかましてパワーローダーの動きをわずかに鈍らせる。

そしてそのまますぐ離脱を図ってまた走り出す。

「やるねえ……やっぱ格闘戦だとあいつらの方に分があるか。やっぱ俺の得意分野に徹するのが一番か」

それでまた穴を掘って潜っていくパワーローダー。

……そして何度も陥没していく地面を掻い潜りながらも二人の目線にはゴールの出口が見えたために、

「尾白君、ラストスパートだ!」

「任せてくれ!」

それでまた加速をする二人。

だが、パワーローダーもそう簡単に行かすわけもなく、

「ならこれでどうだ……?」

その言葉とともに突如として今までの陥没とは一線を凌駕した大穴が出来上がる。

二人はそれを目にして、

「あれじゃ迂回も出来ない! していたら時間切れになっちゃう!」

「尾白君、考えがある!」

「なんの……!?!」

尾白が答える前に飯田は尾白の腕を掴んで急激な速度を出しながら走り出していた。

そして抱えるように——……そう、例えて言えば人間大砲。

「まさか……?」

「そのまさかさ! 君だけでも脱出するんだ! 説明している暇があったらもうレシプロしたいんでね!!」

飯田の考えが読めた、読めてしまった尾白はもう諦めの表情をしながらも、

「ああ、もうわかったよ! さっさとしてくれ!」

「了解! 行くぞ!!」

いまだ加速を続けている飯田はついに切り札を展開した。

「レシプロ……バーストオ!!」

超加速からのさらにバーストを掛けて、一気に大穴の上をジャンプする飯田。

そこから、

「このスピードのまま投げる!! うまく潜り抜けてくれよ!!」

「わかった!!」

飯田は跳んでいる最中で腰を思いっきり捻って、尾白をゴールの方まで投げ飛ばした。

投げ飛ばされた尾白はパワーローダーの掘り進める穴を無視しながらも一気にゴールを潜り抜けていった。

その代わりに飯田はそのまま穴の中に落ちていったのだが……。

「尾白君が俺が落ち切る前にゴールを通過するのは見えた。これで合格だろうか……？」

『パスツパスツ……』と足から煙を上げさせながらも飯田はそうごちる。

そして、

『飯田・尾白ペア、条件達成！』

と言うアナウンスが流れたために、

「よかった……」

「いや、よくねーから」

そこにパワーローダーが穴を掘り進んできて飯田の前へとやってきた。

「パワーローダー先生……」

「まあこれで合格って言えば合格だが、自己犠牲も過ぎると悲惨だぜ？　これが本番だったらお前ひとり穴の底で取り残されてるからな？　くけけ……」

「はい。ですが突破口は出来たと思いますので今後もつとうまくできるように頑張りたいと思います」

「まあ、自己分析もできてんならまあいいけどよ……話は聞こえていたけど、お前尾白に相談せずに判断したろ？　今後はもつと二人で相談して決めるこつたな」

「わかりました」

そんな感じでパワーローダーに地上まで案内されていって飯田もゴールを潜ると、

「飯田……もつと先に相談しといてくれよ?」

「すまない。現状はあれが最善手だと思ったんでね。今度からしつかりと相談をする事にする」

「頼むよマジで」

とにもかくにも二人もこれで合格であった。

それをモニターで見ていた一同はと言うと、

「飯田君のとつさの判断も良かったけど、下手したらゴールとは違う場所に尾白君は飛んでいたね……」

「ええ。ですが状況的にも結構切羽詰まっていたからあれもあながち間違いではないと思いますわね」

「最適解は一つじゃないからね。今回はうまくいったが、もつとうまく行かせれるように努力が必要だね」

と、出久、八百万、リカバリーガールが話し合っている中で、

「八百万、次は俺達だ。そろそろ行くぞ……?」

「あ、分かりましたわ轟さん。では皆さん、行ってまいりますわ」

「行ってくる……」

四回戦は相澤との戦いである。

これに関しては八百万は多少の自信の無さから来る不安を感じながらも、

「(緑谷さんの事を考えれば、こんなところで挫けているわけにはいきませんわ!)」

と、すでにやる気を出している八百万であった。

NO. 058 期末試験 四回戦目

八百万は体育祭で一人、常闇に何も手を出すことが出来ずに場外にまで押し出されてしまった事が自信の喪失へと繋がっていた。

時間さえあれば……。

戦うものをすぐに創造できていれば……。

もつと機敏に動けていれば……。

……考えれば考えるほどに、色々な思いが湧き上がってきて自信を少しずつ削っていく。

だが、ある時に八百万は自身では到底推し量れないほどの運命を背負った人の事を知る事になる。

出久だ。

思い起こせば爆豪が珍しく素直に出久の言葉にしたがつて帰り道を歩いていてとあ

る公園に入つていった時の事だった。

八百万は何を話すのかという好奇心に負けてしまい、みんなで聞けば問題ないをすんなり受け入れてしまい、盗聴器まで使ってしまった……。

そして出久の口から話される推し量れないほどの事実。

『僕ね——……少なくともフォウの今まで吸つてきた生命力が原因で寿命は少なくとも

も1万以上……大雑把に多く見積もっても3万から4万くらいはあるんだ……』

それを聞いてしまった八百万は己の浅はかさに、そして出久の過酷な運命に涙した。

その時には他にも聞いていたみんながいた手前、泣きながらも出久に聞いてしまった事を謝つたが、家に帰つた後にじっくり考える機会を得て、さらに悩みが増えたような気がした。

「(なんて……今までわたくしがうじうじと考えていた事が浅はかだった事でしょう……)」

人生で負け知らずの人間など一人もない。

もし、負けを知らないで来てしまったものは、いずれどこかで破綻する。

ゆえに、体育祭で負けを経験した己はさらに強くなれる可能性を秘めている……。

だが、出久はどうだ……？

出久は必ずヒーローになるだろう。

その志しを聞けば領ける。

以前に、「どうしてヒーローを目指したのか？」という女子達だけでの会話をした事がある。

それで女子達はそれぞれ、生活のためとか親を助けたいとか、目立ちたいとか……悪く言うわけではないが、現実的であった。

己もただ親に望まれたから……きつと素敵なヒーローになれると言われたから。

ただ、そんな中で出久は一線を画した返答をしてきた。

ただただすごいの一言で、『救いたいから……オールマイトのように笑って助けてでも笑顔で過ごせるような世の中にしたから……』と、出久は言つてのけた。

この多感な年頃である自分たちの中でもう明確なヴィジョンが出久の中にはあつた。そしてそれを聞いたのはすでに出久が己の運命を受け入れていた後だったというのがとても大きい。

それを思うと「すごいね」という生半可な言葉は言う事も出来なかつた。

出久の将来のヴィジョンは先ほども言った通りで、それとは別にもう一つだけ、とても尊い目標がある。

『みんなと同じ時間を過ごしたい……みんなと笑つて泣いて、一緒に歳をとつてできることなら子孫に見送られながらも楽しかったと思える一生を過ごしたい』

というもの。

だが、それには出久の生命力の膨大な多さが邪魔をしてきている。

聞けば、人一人を生命力で治すのには軽傷の者なら一日か二日分の生命力を与えれば完治が可能。

重傷の者なら一週間から二週間くらいの生命力。

命の危機に関わるものならば一か月分くらいの生命力を与えればなんとかなる……。だが、逆に言ってしまうえばそれだけしか消費されないのだ。

以前に常闇が言っていた。

『それに、呪い……言いて妙だが、例の猫の罪滅ぼしと言えば聞こえは良いが……結果的には誰かが傷つかないといけない、不幸な目に遭わないといけない……ヒーローとは本来誰も傷つかない事を望まないといけないというのに、この矛盾っぷり……茨の道と言わざるを得ないな』

それはとても真に当てはまる言葉だった。

出久は生命力を使い続けて治療し続けなければ、いつになっても死ぬことが出来ない

……。

フオウもそうだったように自殺を図っても、体が勝手に修復されてしまうのだ。

人間の一生は百年くらいと言われる現代で、出久は最悪その数百倍の時間を生きなければいけない。

普通なら気が狂いそうな……絶望してもし足りないほどの運命だ。

なのに、出久はすんなりとそれを受け入れてしまっていた。

——心が強い。

八百万はただただそう思うしかなかった。

できることなら出久の目標を自分たちが生きている間に成し遂げさせてあげたい……。

しかし、現実的に見て無理かもしれない……という諦め感も否めない現状で、

「(それなら緑谷さんが早く生命力を使いきれるようにサポートする事も友として当然ですわ!)」

その思いが八百万の心に変革をもたらしていた。

哀れみから来る思いでは無い。

純粹に出久のためになるであろう事をしたいと、八百万の中で自分の将来の役割が決

まりつつある決定打だった。

ゆえに、

「こんなところでよくよとしていられせんわ!」

「うおっ……!?!」

と、今現在轟とともに相澤から逃走中の住宅街エリアでかくれんぼの様な事をしつつもそう叫んでいた。

轟はそんな八百万に対して、

「なんだかわかんねえけど、前まで少しだけあつた自信の喪失はもうなさそうだな……」

「はい!」そして相澤先生に対してばっちりな対策がもう出来上がっています!」

「ほう……話してみてください」

「はい!」

それで話し合う二人。

というのも、すでに一回相澤とはエンカウントしていたために、轟による大氷河によつて個性を消されない範囲まで逃亡を図る事に成功した後のこの発言。

轟も聞かないわけにはいかない。

そして話し合った結果、作戦はすぐに実行に移される事になる。

「(緑谷さんの手助けになるためにも、こんなところで挫けているわけにはいきませんわ

「！」

その思いとともに、八百万はとあるものを作りだしていた。

相澤は大氷河によつて遮られたために二人が行動を起こすまで待つていた。

「(轟に関しては問題はない……が、八百万は体育祭から自信の無さが浮き彫りになっていた。だが、緑谷の一件で良くも悪くも八百万は成長できたのかもしれない……)」
そう相澤は分析している。

出久の事を聞いてから八百万の顔はどこか晴れやかな様な、悩みなど吹っ飛んだような軽快な表情になっていた。

相澤にとつては事が事だが、素直に八百万も受け入れて将来のヴィジョンを描けるまでに成長できたのもまた事実だから、出久には複雑の極みだが感謝しないといけない。

「(ふんっ……焼きが回ってきたか?)」

そんな非合理的な考えに、しかし悪くはないと相澤は思う。

そう思っていると、物陰からフードを被った二人組の姿が見えた。

「(囃か……それとも正面突破か？ まあいい。八百万、ここでどう成長できたか見させてもらうぞ)」

相澤はあえて自身から飛び込んでいった。

そして、

「やりましたわ！」

「ああ……やったな」

結果は、八百万の用意したマネキンによる二人いたかのような見え見えの囃に、相澤はわざとかかかっていって、そして用意していた形状記憶合金の布とカタパルトを用意していた八百万が失敗もせず相澤に向けてそれを射出して、そこに轟が炎を放って一気に元に戻っていく布によって相澤はすぐに捕縛されてしまった。

「やるじゃないか……合格だ」

こうして二人は相澤にカフスを嵌めたところで、

『轟・八百万ペア、条件達成！』

というリカバリーガールのアナウンスが入る。

相澤はそれで大人しくなりながらも八百万に聞く。

「……八百万、聞くがどうしてそこまですぐに立ち直ることができたんだ？」

「分かっているのに聞くなんて酷いですわ、先生。わたくしは緑谷さんの事を聞いて己の矮小さを痛感いたしました。ですからこんなところで立ち止まってしまつては緑谷さんにいつまでも追いつけないと思つたからです」

「そうか……お前ならきつと追いつけるさ」

「はい！」

二人だけ分かっているような会話に、だが置いてけぼりを食らっていた轟はという
と、

「まあ……俺も明確なヴィジョンは持つてるんだがな……」

と、呟いていた。

どういふ内容かは本人の口からは話されなかったが、一体……？

NO. 059 期末試験 五、六回戦目

拝啓……。

父ちゃん母ちゃん。

私、もうダメかもしれへん……。

お茶子はそう思いながらも、必死に現在進行形で晒されている窮地に必死に耐えていた。

第五回戦。

ヴィラン役の教師は13号。

対するは麗日お茶子と青山優雅の二人。

二人は移動速度が低い13号からなんとか逃げ続けてようやくゴールの門のところまでやってこれていた。

だが、13号もただではやられない。

例え移動速度が遅くとも自慢の個性『ブラックホール』で自分の方へと引き寄せてし

まえばいいのだ。

「逃がさないですよ〜〜〜!」

可愛らしくそう言葉を発する13号は、それとは裏腹に凶悪な個性を使って二人を自身の方へと引き寄せようとしている。

二人は必死に吸い込まれないように取っ手に掴まって耐え凌いでいたが、このままでは刻々と時間が過ぎて行ってしまう。

「どうにかせんと! どうにかせんと!!」

「麗日さん、この僕の個性ってねー、ビームを出せるんだよ☆」

「それは知つとるよー! それがどうしたん!？」

「うん。それでね、僕のコスチュームはおへそから各部へと伝導できるんだ。だからこう言う事も出来ちゃうんだよ!」

青山はそう言つて膝の部分にビームを伝導させて発射した。

「だからピンチでも何でもないのでさ!」

「おー!」

お茶子が喜んだのもつかの間、ビームはあっさりと13号の指へと吸い込まれていつてしまった……。

「ビームだってなんだって吸い込んでじゃうぞー!」

「ッ!？」

その事実には青山は思わず振り向く。

それが影響してか『キラメキグラス』があっさり分子崩壊して吸い込まれていく光景を目にする。

「分子レベルで吸い込んだじゃうぞー!」

「むっ!」

それで青山は半ばあきらめ気味に、自棄気味とも言うが……、

「シャレにならないね☆」

「青山くん、さっきまでの自信はどうしたん!？」

「どうしようもないものは仕方がないさ!」

「うー……」

それで青山も役に立たないと感じたお茶子は選択を迫られる。

このまま終わるのか、それとも打開策を出して突破するのか。

こういう時に、そう……こういう時に頼りになるのは……、

「(デクちゃんだったら……!)」

「ねえ?」

「なに!？」

「今、君こう考えなかったかい？ 緑谷出久さんならどうするかって……君、彼女の事、好きなのかい？」

——好きなのかい？

——きなのかい？

——なのかい？

「うあつ……」

そう言われて心が揺さぶられるお茶子。

もちろん、出久の事は友達としても大好きだ。

でも、出久は同じ同性の女子だ。

だからひたすら不毛な結果にしかない。

「(そっか……私、デクちゃんの話が本気で好きだったんだ……)」

思い起こせば最初の出会いである入学試験。

己の窮地に颯爽と助けてくれた出久はお茶子にとってまさしくヒーローだった。

それから友達にもなれて、電話で話し合った出久の内緒の話。

おそらく爆豪はすでに知っていただろうが、お茶子にとっては認識は初めてもとは男性だったと話してもらえた事実が嬉しかった。

隠し事をすぐに話してくれたのだ。

それなら信頼に応えなければダメだろう……？

そう思ってお茶子はずっと出久の為になろうと今まで頑張ってきた。

その過程でちよつと行きすぎちやつた行動もあつたけど、でも出久ならきつと許してくれるという甘えの考えがあつた。

「(そうだった……私、デクちゃんにすっかり依存しちゃつていたんだ……)」

そう考えると少し恥ずかしくなるとともに、それでも悪くはないという思いが浮かんでくる。

そして思う。

「(デクちゃんが性転換しないでもこの男の子のままだったら……私、デクちゃんの事、本気で好きになつていたのかな……?)」

吸い込まれそうになりながらも、思考はそれ以上に早く回転していた。

今も青山が不思議そうに首を傾げているが、

「(ううん……そんなもの考えじゃあかん！ 私は今のデクちゃんの事が好きになつたんだ！) そしてそんなデクちゃんに言われた事を思い出せ、私!!)」

それで思い起こすは職業体験前の事。

お茶子は出久にこう話していた。

『強くなればね、それだけ可能性が広がるし、でもやりたいことだけしていちやそれだけ

見聞も狭まっちゃうからまずは自分にないとこを見つけてみようと思つたんだ！」

そう言つたお茶子に出久はこう返していた。

『そつか！ うん、いいと思うよ。麗日さん、近接戦闘を鍛えたらきつと強くなると思うから。一度でも相手に触れられればそれだけでどうにかできちゃうのにそこに接近戦が加われれば鬼に金棒だよ』

と……。

そんな些細なやり取りだったが、自分の考えは間違つていなかったと出久に肯定してもらつた事がいかに心強かつた事か。

そして結果、己が身に着けた力を思い出せ！

その考えに至つたお茶子の頭はもうすっかりクリアになつて冴えわたつていた。

同時に、自ら取つ手に付けている手を離していた。

「ちよつ！」

青山の驚く声が聞こえてくるが今のお茶子はもう精神統一していたために、その手にカフスを持つて、そして武闘派ヒーローガンヘッドのもとで学んだ武術『G・M・A』を13号にお見舞いしようとしていた。

さすがの13号も本気で吸い込むわけにはいかずに、指を閉じてしまい、お茶子に隙を与えてしまった。

そこからは流れるようにお茶子は13号を拘束してカフスを嵌めていた。

「敵の『フィールド』じゃなく、己の『フィールド』で戦うべし！ これガンヘッドさんの教えなり！」

「あなた……やられちゃったかあ………おめでどう、条件達成だね」

13号にそう言われてお茶子はニンマリ笑顔で、

「はい!!」

こうしてお茶子は空を見上げながらも、

「(デクちゃん……私、デクちゃんの事が好きだよ。だから、もしデクちゃんがピンチになつたら必ず私が助けるから!!)」

というお茶子の中でさらに強固になつた誓いが立てられた。

こうして第五回戦はお茶子・青山ペアの勝利で終了していった。

と、ここまでではよかったのだが、続く第六回戦。

根津校長 VS 上鳴電気・芦戸三奈ペアの戦いが始まったはいいのだが……。

「どわー!!？」

「きゃあー!!？」

二人は必死に崩れてくる機材を避けながらもゲートを目指していたのだが、どういう訳かどんどんと道が塞がれていつて攻略の道が塞がっていつている。

それもそのはず、根津校長の個性は『ハイスペック』。

これにより、どこをどう崩せば二人は窮地に陥るのかすぐに分かっってしまうのだ。

「いやー、高みの見物と言うものはいいいものだね。だけど……少しは気概を見せてよー？」

己の才能が怖い！と言わんばかりにテンションMAXの校長に、二人はなす術もなく、

『タイムアップだよ。上鳴・芦戸ペア、条件クリア失敗』

非情なりカバリーガールのタイムオーバー宣言で、

「うわー!!？」

「合宿がー!! うえー!!」

二人はそれはもう頭を抱える事態になっていた。

それを高みの見物をしていた校長はと言うと、

「少しやり過ぎちゃったね……でも、逃げ道はしつかりと残しておいたんだからもつと
考えたらいけたよ？」

と、呟いていたのであった。

こうして上鳴・芦戸ペアは泣きながらも退場していくのであった。

果たして次の七回戦目はどうなるのか……？

NO. 060 期末試験 七、八、九回戦目

第七回戦。

プレゼント・マイクと口田・耳郎ペアの戦いが行われていた。

だが、その内容はあまりにプレゼント・マイクに有利なものであった。

「YAAAAAAAAA——!!」

ゴールのゲートの前で鎮座して動かないプレゼント・マイク。

攻めてこないのは舐めているのか……いや、これが彼の戦い方である。

プレゼント・マイクの個性は『ヴォイス』。

どんな叫びにも衝撃波が乗って相手の動きを鈍らせられるもの。

それは物理的な破壊にまで昇華されている為に、本気を出されれば二人はあつという間に鼓膜を破られて戦闘不能にされてしまうだろう。

「うううっ!!」

「ッ!!」

口田と耳郎は必死に耳を押さえながらも突破口を探していた。

「もう……これって緑谷の叫びより厄介じゃない！」

あまりの力の差に思わず愚痴る耳郎。

出久の叫びによる衝撃波が瞬間的なものだとするれば、プレゼント・マイクのは持続型。耳郎の個性である『イヤホンジャック』で発生させる音では下位互換だろう。

口田の個性とも相性が悪い。

口田の個性は『生き物ボイス』。

動物たちに命令を出して操れる個性なのだが、プレゼント・マイクによつて命令しても妨害されて逃げられてしまうのだ。

二人に対する対策は万全である。

音がかき消されてしまう中でここをどう攻略するかが鍵になってくるかだろう。

言い忘れていたが、今三人が戦っているエリアは森林地帯。

先程も言ったがプレゼント・マイクはゴールで仁王立ちしている為に敢えて攻めてはこない。

それを耳郎は考えた末に、

「マイク先生は攻めてこないから、どうにか迂回してゴールまでは近づくことが出来たけど……口田、なにか策はある？」

「フルフル……」

聞かれた口田は何度も動物たちが逃げてしまっている中で力になれない事を悔しく思いながらも首を力なく振る。

耳郎はそれで今は対策を立て直すことが先決だと感じた。

だが、相手も待つてくれない。

「どこだあああああ!!」

またしても盛大な叫びを受けてしまい、二人はもう耳が痛くて堪らなかつた。

「ううっ!!? どうすれば!」

何度か相殺を試みるも効果は薄かつたために耳郎も万事休す状態であつた。

だが、そこで名案を閃く。

ふと耳郎は地面を這っている虫を捕まえて、

「口田! 動物にも命令できるんだから地面の下にいる虫にも命令できるの!」

声が響きにくい地面の下ならば果たして?と言う考えで耳郎は口田に問いかけてみたのだが、返ってきた言葉は叫びだった。

「キヤアアアア!」

「えっ……?」

口田は虫を見た途端に一目散に隠れてしまったのだ。

「もしかして、虫苦手なの……?」

「(コクコク……)」

突破口になりえる策で思わぬ落とし穴だ、と耳郎は感じた。

そこに口田の叫び声を察したプレゼント・マイクが、

「そこですかああああああ!!」

今度はしっかりと標準を合わせて叫んできていたためにもろにダメージを食らう二人。

だが、打開策は見えた。

あとは行動を起こすのみであるので、

「口田! 出来るかできないかだけ教えて!」

「……ッ!」

口田はなんとか親指だけ立てて出来る事を教える。

耳郎はそれならと一つの岩を破壊する。

そこにはおぞましいほどの蟲の姿があり、口田はもうそれで声にならない悲鳴を上げる。

だが、

「口田! あんたも雄英に合格できてここまで来れたんだからこのくらいの逆境は克服

しないとい！ それにそんなじゃ緑谷達と肩を並べられないよ！」
「ツ!？」

そう耳郎に喝破されて口田は目を見開く。

見ればそう言う耳郎の耳からは血が流れてきていた。

おそらく鼓膜が破れてしまったのだろう。

自分が退いてしまった事でこんな事態に……。

情けない！

そして、出久の名を出されてそうだと口田は思う。

普通なら泣き叫んでもいい、未来に絶望してもいい……そんな状態の出久なのに、出久はすっかりと前に向かって歩んでいる。

そんな出久の姿に僕も頑張らないと、と口田はいつからか勇気付けられていた。

「(そうだ！ 虫が苦手なくらいなんだ！ それを乗り越えてこそプラス・ウルトラだろ!?)」

そう踏ん切りがついた口田は地面にいる虫達に向かって、

「お行きなさい小さき者どもよ……騒音の元凶たるその男、討ち取るのは今です……いいですか」

「めっちゃ喋るじゃん!!」

普段あまり喋らない口田とは打って変わってよく響く声で語り掛ける姿に耳郎の鋭いツツコミが入る。

だが、効果はすぐに出ていた。

もうすぐタイムアップとなる時間で「もうだめか？」と思っていたプレゼント・マイクだったが、ふと地面が盛り上がったのを感じた次の瞬間に這い出てくるおびただしい数の虫達の姿。

一気に自身の身体へと張り付いてきて、そのあまりの気持ち悪さに嫌悪感、体を這ってくる抵抗感にプレゼント・マイクも堪ったものではなく、すぐに意識を消失させて泡を吹きながら気絶をしてしまった。

そこを口田と耳郎の二人はひっそりと確認しながらも、

「プレゼント・マイク先生……気絶しているね。口田、やるじゃん」

「ウンウン……」

だが、鼓膜が破られてしまっている為に、正常に立つ事が出来ない耳郎は口田にお姫様抱っこをされながらもゴールを突破する事に成功したのであった。

それをモニター室で見っていた一同はと言うと、

「あれは……プレゼント・マイク先生でも堪ったものじゃないですね」
「うんうん……」

出久の言葉にもう戻ってきていたお茶子が頷く。

「虫ごときで情けないねー……まあいい。緑谷、二人が戻ってきたら耳を治してやりなさいな」

「いいんですか……?」

「あたしが許すよ」

「わかりました!」

それで少しして戻ってきた耳郎と口田は出久によつて治療をされている中で、

「ありがと、緑谷。楽になったよ」

「(コクコク……)」

「よかったー」

すぐに治療が終わったために、モニター室に戻ると、すでに第八回戦目が始まっていた。

相対するのはスナイプ先生と葉隠・障子ペア。

これに関しては特に大きく言う事は無い。

三人で盛大に索敵のやり合いをしていたものだったのだから。

スナイプの個性は『ホーミング』。

狙った獲物は必ずその自慢の銃で狙い撃つ性能を持っている。

だが、今回は透明な葉隠に索敵に関しては一日の長がある障子が相手だ。

だから内容はすでにかくれんぼと言っても差し違えない内容になっていた。

何度も狙撃を食らうが、ギリギリで索敵が間に合い、先んじて隠れると言った感じで淡々と時間は過ぎて行つて、気づけば葉隠と障子は最後までスナイプに足取りを把握されないでゴールを突破していた。

「可もなく不可もなくって感じだねえ……」

「はい。最後まで息を潜めていた感じでしたね」

「でも、スナイプなら本気を出せば二人をハチの巣にする事も可能だからね」

「怖いですよ、リカバリーガール……」

そんな感じで続いて始まる第九回戦目。

対決するのは、ミッドナイトと峰田・瀬呂のペア。

だが、エンカウントして早々で、

「峰田！ 近寄っちゃダメだ！」

「瀬呂!?!」

突然の瀬呂のテープで後方へと追いやられた峰田だった。

瀬呂の判断は正しい。

少しでも近寄ってしまえばミッドナイトの個性で眠らされてしまうのだから。

ミッドナイトの個性は『眠り香』。

身体から発する香りで相手を眠らせてしまうもの。

女性より断然男性の方が効き目が高い。

よって、峰田を救出したものの、代わりに瀬呂は眠り香に晒されて眠ってしまいダウンしてしまった。

「瀬呂ー！ てめえ!!」

助けに行くのかと思いきや、峰田は瀬呂の現状に対して血涙を流していた。

なんと瀬呂はミッドナイトに膝枕をされていたのであった。

「あいつうう!! いいポジションを獲得しやがって——!!」

もうゲートとは逆の方へと逃げながらもそう叫ばずにはいられない。

それを見ていたみんなはと言うと、

「情けないぞ峰田くん！」

と、飯田がみんなの代弁をして叫んでいた。

「これはダメかもしれないねえ……ああいうタイプはここで生きていくにはつらいよ」

「それって……」

「雄英は絶え間なく試練を与えていくんだ。そこを乗り越えてこそその未来への自信に繋がる。だけど『なんとなくヒーローになりたい』ってだけじゃそのうちダウンしちまうよ。あの子の中にはどんな目標があるのかねえ……」

そう言つて峰田の事を見据えるリカバリーガール。

モニターの先では峰田はという息を切らせながらも、

「女体触りたい……モテたい」

そんな事を呟いていた。

峰田の心に過去の光景が再現される。

どこに行つてもモテるのはイケメンばかり……。

自分の様な底辺の者達には遠い世界の話。

だが、それでもモテたい。モテてチャホヤされたい。

ヒーローになればそうなるのでは……？と、雄英を指摘した。

だが、それは雄英に入学して、ヴィラン連合の侵入によって直に死ぬ思いをして考えが変わつた。

そう……水難ゾーンでの出来事。

出久と蛙吹に頼られたのに、それでも自信が持てなかつた己に、出久は手を握つてくれた、頼つてくれた。

そしたら自然と勇気が湧いてきた。

女子二人に頼られちやとあつたら男見せなきやいけないだろ!?!と……。

そしてなんとか水難ゾーンは突破したものの、脳無との戦闘で出久が率先して前に出て行つた時に一緒に戦う力がない峰田は己の力の無さに思わず男泣きをした。

———もつと力があれば女子の緑谷に苦勞をかけなかつたのでは？

———男らしくかつこよく立ち回りが出来たのでは？

そんな後悔が襲ってくる。

それと同時に、ヒーローだからカッコいいんじゃない、カッコいいからヒーローなんだって悟つたのだ。

「だから！ オイラの一方的な思いだからって緑谷にはカッコ悪いところを見せられねーんだよ！」

「よく言つたわ！ それじゃもうちよつと足掻いてみせてよ！」

ミッドナイトは峰田の見た目だけでは分からない変化に気づいて、嗜虐心をそそられて前に出てきていた。

一度でも吸つてしまえば即ダウンしてしまう中で、峰田は口を押さえながらもなんと

か逃げおおせている中で、物陰に身を潜めて口に先ほど助けてもらった瀬呂のテープを巻いて息を止める。

そして勝負の時だ！とミッドナイトの前へと躍り出た。

「息を塞いでいたっていつまで持つか分からないわよ！」

「もがもがも（少しの時間があれば十分だ！）！」

峰田はモギモギをたくさん放ってミッドナイトが持つ鞭と、それを持っている手になまく張り付けた。

そして鞭が地面へと張り付いてしまい、ミッドナイトも動けなくなってしまった。

「あんたの嗜虐心を煽るのも作戦の内ってね！」

思いつきり止めていた息を吐き出しながらも、峰田はゲートへと走っていく。

「……………やるじゃん」

ミッドナイトも思わずそう呟くのであった。

峰田は眠ってしまったっている瀬呂を担ぎながらもなんとかゲートを通過していた。

「参ったね……………すっかり騙されちゃったよ。それにしても、緑谷。あんた、みんなに好かれてるねえー」

「あ、あはは……………」

出久はもう恥ずかしかったのだ。

ほんの数秒とはいえ、峰田の気持ちも聞いてしまった事で。

「峰田君……デクちゃんはやらないからね？」

と、お茶子も闘志を燃やしていた。

「まあいいさ。それより緑谷。最後はお前たちの番だよ」

「わかりました！」

「デクちゃん、頑張つてね！」

「緑谷さん、フアイトですわ！」

「頑張るんだ緑谷君！」

「出久ちゃん、あなたならできるわ」

「うん！」

みんなの声援に見送られながら、出久は移動するバスまで歩いていくと待つていたのか爆豪が立っていた。

「デク……行くぞ？」

「うん。かつちゃん！」

ついに最後の演習が始まろうとしていた。

相手はあのオールマイト……一筋縄ではいかない相手だ。

二人は突破できるのであろうか……？

NO. 061 期末試験 十回戦目

バスで移動中の二人。

すでにオールマイトは演習試験会場へと向かっていたために話し合う絶好のスペースだ。

「……………それで、かつちゃん。こうしてオールマイトと本当に当たる事になっちゃったけど、どうする?」

「決まってるだろ、デク。あん時に話し合った通り、真正面からぶち抜く。それでもダメだったら素直に逃げの選択肢も入れておくのも……………まあ、仕方ねーと言えば仕方がない。だが、最後まで足掻くぞ?」

「うん。かつちゃんが冷静で良かった。それなら僕もとつてもやりやすい!」

出久はそう言うつてはにかみながら笑みを浮かべる。

爆豪はそんな出久の顔を見てまた胸に響く何かを感じたが、分からないものは仕方がないために保留にする。

……本当にこの気持ちに自覚して気づいたら大変な事になるだろう事、請け合いである。

ただでさえ、爆豪は過去からのトラウマを持っていてるわけで、それだけで引け目があったりするのにな、それとは別にこうも普通に会話が成立するまでに関係を修繕出来た事に自分自身ですら驚いているのだ。

だというのに、出久はそんな事を気にする素振りすら見せないで自然体で爆豪と接している。

——天然か！

と、思わずにはいられない爆豪であった。

それから移動の間に粗方作戦などを話し合った二人は試験会場へと到着する。

「やあ、お二人さん。よく来たね」

「……………」

そんな、気軽な感じで話しかけてくるオールマイトだが、すでに威圧感などが感じられることから二人は緊張をしていた。

「ふむ。いい感じに緊張しているようだね。爆豪少年はおそらくだがモニター室にはい

なかったと思うが、緑谷ガールは他のみんなの戦いぶりを見ていたと思う。

そういうのもひっくりかかて、かかってこいよ？二人とも。今回は私はヴィランだからね！」

「H A H A H A ! と笑いながらオールマイトは指定の位置へと向かっていった。

そんなオールマイトを見送って、そして二人も指定の位置まで到着する。

『それじゃ第十回戦、始めさせてもらおうよ』

リカバリーガールのその宣言によって、二人は同時に走り込む体勢になる。

すでに出久に関しては増強系の個性は全部発動させて、爆豪も両腕でバーナーを吹かせられるように構える。

『スタートだよ！』

「最初からスタートダッシュ!!」

出久と爆豪は同時に走り出した。

だが二人の移動速度は本気を出してしまうとそれこそ爆豪は置いてかれてしまうだろう、だから出久は爆豪のスピードに合わせて走る。

「デク!! オールマイトの位置を探れ!!」

「うん、かつちゃん！」

発動する『五感強化』の個性。

これによって超人的な視力、聴覚などを発揮できる。

視力に関しては発目の個性『ズーム』には劣るものの、それでも2kmくらいならば視覚が可能である。

これによって見えたものかというと、

「ツ!?! おそらくゴール真正面で拳を構えてる! ツ!!? 避けて!!」

出久のその言葉に瞬時に反応した爆豪は、出久とは反対側に避ける。

次いで襲ってくる衝撃波。

それは周りに存在しているビルや建物などを悉く破壊していく。

あまりにも破壊的で、これが本当にあのオールマイトから繰り出されたものなのかと思っただけである。

砂煙が舞う中で、その中からオールマイトがとてつもないほどの威圧感を放ちながら歩いてくる。

その姿になんとか避けれた二人は、それでも戦慄する。

「これが……!」

「オールマイトか!!」

『平和の象徴』。

これはヴィランにとって最高の抑止力足り得るものだろう。

だが、いざそれがヴィランとして君臨してしまえば、嵐の様な脅威となる。

たとえ、ハンデとして重りを付けているとはいえこれほどの力をいかに発揮できるとはとてつもないポテンシャルであろう。

「これは確かに演習試験だ……だが、だからといって優しくしてやるつもりはないぞ、ヒーロー？ 私はヴィランだ。本気でかかってきなさい！」

「上等だー!!」

「どの道いつかは越える道です！ いきますよ、オールマイト!!」

二人の気の合った雰囲気をもっとオールマイトは直に感じて思った事は、

「(ふむ。緑谷ガールと爆豪少年はもう見たところは壁みたいなのはなさそうだな。まあそれはそれで手強い事だろうがな……) いくぞ!!」

オールマイトはそう言って二人へと一気に駆けこんできた。

ダンプカーと言わんほどのスピードで走ってくるオールマイトに、それでも二人は冷静に、

「かつちゃん！ タイミング合わせて！」

「おー！」

二人もそんなオールマイトに向かって走っていく。

「正面突破かなあ!？」

またもや拳を振るおうとするオールマイトだったが、ついに接触する間際と言わん距離で出久と爆豪は左右に割れてオールマイトと一直線になるように陣取った。

そして、

「あ、やば……」

オールマイトのそんな言葉が漏れてたが二人はお構いなく、出久は息を思いつきり吸い込んでいて、爆豪はピンを外す素振りをしていた。

「くらいやがれ——!!!」

「にゃあああああ——!!!」

放たれる大爆破と叫びによる衝撃波。

これはかつて戦闘訓練で放たれて拮抗して打ち消し合った事がある。

そんな二つの技の真ん中にいるオールマイトは果たして無事なのか……？

「ぐふう……なかなかやるねえ」

多少は食らっただろうが、それでも余裕の笑みをしていた。

「かつちゃん、引くよ！ 炎幕!!」

出久は腕に炎を宿らせてそれを振るった瞬間、炎の煙幕が発生する。

それで一時的に二人はオールマイトの視界から消え失せる。

ヒットアンドアウェイ。

対オールマイト用に考えた二人の戦い方だ。

敵わないのならそれでいい。

ゴールすればいいのだから。

出久の狙いは当たったようで炎幕によってオールマイトも二人の姿を見失っていた。

「ふむ……なかなかいいチームプレイじゃないか。これは純粹に侮れないぞ?」

そう言いながらもオールマイトは笑みを浮かべていた。

出久と爆豪の二人は走りながらも、

「最初は何とかなつたね」

「ああ……まだまだ敵わねえって事は分かっていたが、やっぱりオールマイトは強えな」

「うん。とにかくこのまま先行しよう!」

「ああ! もし追いつかれたら俺の籠手で——……」

「うんうん。それでそれで?」

「「ッ!?!」」

突然割り込んできた言葉に二人はハツとするとともに同時に構えを取ろうとする、が……それは一瞬の出来事だった。

いつの間にか爆豪の籠手は砕かれて地面に叩きつけられ足で押さえつけられて、出久の腕は両腕を掴まれて身動きできなくなっていた。

「(な、なにが起こった!?)」

二人の率直な感想はこれに尽きるだろう。

それほどにオールマイトは早すぎたのだ。

「おいおい……まだまだ本気を出していないんだぜ? これへこたれないでくれよ?」

「つたりめーだ!! 籠手が砕かれたからってなんだ!? デク、行くぞ!!」

「うん!!」

「ん……?」

途端、籠手が破壊されたというのに爆豪は大爆破を引き起こしていた。

籠手がなくなったことでハンドエは付くだろうが手加減無用の攻撃が可能になった。

それで二人ともなんとか自由になる事が出来て、

「僕も本気でいきます!!」

ブワツ!と出久の周りの空気が振動する感覚。

「変化!!」

そして姿を顕す5mはあるであろう巨大猫の姿。

「ほう……もうカードを切ってきたね。それなら本気で行こうか!」

「にやああ!!」

そして始まるオールマイトとの拳と拳の殴り合い。

打撃音が何度も響き渡り、どんどんと苛烈さを増していく。

オールマイトはこの中で久しぶりに楽しさを感じていた。

今までここまで付いてこれたのはあの憎き男以外にいなかったからだ。

「オールマイト!! 俺の事を忘れてもらっちゃ困るぜ!!」

オールマイトの背後から爆破を浴びせる爆豪。

オールマイトはてつきり出久に任せてゴールに向かったものだと思っただが、ここ

で誤算だった。

100%の力を五分限定で発揮できる出久以外にもこうして血気盛んに爆豪という

男は挑んできていたのだ。

二人とも勝ちに来ている!

そう感じたオールマイトは「いいねえ……」と思った矢先に、

「にやあああああ————!!!」

「うおっ!？」

巨大猫となつて何倍にも増幅された衝撃波を放ち、オールマイトを吹き飛ばす。

そして爆豪を口で銜くわえて一気にゴールまで高速移動をする出久。

こうなつてしまつてはもうオールマイトも追いつけまい。

そして、

『緑谷・爆豪ペア、条件達成だよ』

その宣言とともに、二人の合格が決まつた瞬間であつた。

出久はもとの姿に戻つて、何度も拳を握つてはを繰り返していた。

「どうした、デク……?」

「うん。巨大猫後の弱体化率が減つてる感じみたい。それに多分だけど巨大猫になつてられる時間が増えたと思う」

「そうか。『許容重量キヤパ限界を無くす』個性で強くなつてんじやねーか?」

「そんな感じだね。それはともかく……やったね、かつちゃん」

「あたばーよ。籠手は壊されちまつたが、直してもらえばいい事だしな」

そんな事を話しあつている二人にオールマイトが近寄つてきて、

「見事だつたぞ二人とも。今回の二人の課題だが、本当に仲が改善できているのかを見極める物だつたのだが、これならもう安心だな」

「ありがとうございます！」

「うっす」

こうして期末試験、全行程が終了してそれぞれ成長できたもの、阻まれたものなどもあったが、これも成長のためのステップなので現実を受け止めてもらうしかないだろう。

とにもかくにもお疲れ様でした。

NO. 062 期末試験の翌日

無事……無事？、期末試験が終了した翌日に教室ではそれはもう落ち込む姿が目立つ四人がいた。

切島に砂藤、芦戸に上鳴の四人であった。

四人は非常に暗い表情をしながらも、

「みんなあ……お土産話、楽しみに……ヒッグ……してるねー……」

「芦戸さん！ それにみんなも！ まだ分からないよ！ もしかしたらどんでん返しがあらかもだよ!」

「おい、緑谷……それは口にしたら無くなるパターンだ……」

出久の発言に思わず瀬呂がツッコミを入れる。

分からなくもない。

相澤はこう言っていた。

期末試験で合格できなかったものはもれなく補習だ！と……。

「うるせえ！ 期末試験で赤点取ったらもれなく林間合宿は行けずに補習地獄なんだぞ!？ そして俺らは実技試験でクリアできず……これも踏まえてまだ分らんのなら貴様

らの偏差値はサル以下だー!! おおっ!! やわらけ!!」

「キャアアアア!!」

上鳴の行き過ぎた行動が思わず出久の胸に指を突き刺して触れてしまうという暴挙に、出久は羞恥から叫び声を上げ、聞いていた峰田が思わず叫んだ。

「おい上鳴! 何どさくさ紛れにそんな羨ま憎たらけしからん事してんだよ!! おいらも混ぜろ!!」

「てめえら……なにしようとしてんだ!? ああんツ!? 特にあほ面! てめえちよつと後で顔貸せよ、おらあ!!」

「上鳴くん……ちよつと逝コウカ……?」

最近もう遠慮がなくなってきた爆豪と、出久のセ〇ムなお茶子様によって上鳴はのちに地獄を見ることになる。

そんな騒ぎの中で瀬呂が呟く。

「だけだよ……俺も微妙でわかんねーんだよな。峰田のおかげでクリアはできたものの、途中から寝てただけなんだぜ?」

そう、瀬呂の判定は今一わからない。

果たして赤点なのか、それとも合格できているのか……。

その結果を知らせるものが『パンツ!』と扉を思いつき開きながらやってきた。

「席に着け！ 予鈴はなつてんで！」

相澤が教室に入ってきたのだ。

それですでに全員は席に着席していた。

教育が行き渡っている証である。

「おはよう。それじゃまどろっこしいのは非合理的なんでさつさと期末試験の結果を教えようと思う」

それによつて緊張する一同。

相澤はそんな空気の中で、だが普通に言葉を話してく。

「……非常に残念なことながら、数名が赤点になってしまった。それなので……林間合宿は全員で行きます!!」

「「「どんでん返しだー！ー！ー！！！！」」」

いよっしやー！と拳を振り上げる赤点者達。

そして、

「筆記試験では赤点はいなかったが、実技試験では切島・芦戸・上鳴・砂藤……そして瀬呂が赤点だ」

「行つていいんすか、俺達!?!」

「今から説明するから落ち着け……」

そんな中で、

「確かに……確かにクリアしたら合格とは言つてなかつたもんな……クリアできずより恥ずかしいぞ、これ……」

「瀬呂くん、ガンバ……」

「ありがとう緑谷……」

顔を押しえて落ち込む瀬呂に出久が慰めの言葉をかけていた。

「今回の試験は我々ヴィラン側が生徒たちに勝ち筋を残しつつも、どう課題に向き合うかを見させてもらった。そうでなければ、お前らの今の実力じゃ合格できたからと言つて慢心しないためにここではつきりと言つておくが詰むやつらが多かつただろうからな……」

「本気で叩き潰すというのは……」

「当然追い込むためだ。はなからぬるい演習内容だつたらお前らは必死にすらんねえだろ？　そもそも林間合宿はお遊びに行くんじゃない。強化合宿だ。そこんところを勘違いしている生徒が多いようだったみたいだがな……だからな、赤点を取つた奴らこそがここで力をつけてもらいたんだ。まあ、ようするに……合理的虚偽つて奴さ！」

「……ゴウリテキキョギイ……!!……」

相澤のその言葉によって万歳三唱をしまくる赤点生徒たち。

だが、納得できない生徒が一人。

「またしても……またしてもしてやられた！ さすが雄英だ！ ですが！ 二回も虚偽を重ねられると信頼が揺らぐのではないかと!!」

飯田がそこで席を立ちながら相澤に進言する。

「飯田の意見はごもつともだ。確かに、反省はする……だが、ただ全部は嘘ではないってだけで。赤点は赤点だ。よって赤点者達にはもれなく別途に補習時間が設けられている」

それを聞いて喜んでいた五人の動きがピタッと止まる。

恐怖。なんという恐怖！

相澤から話される次の言葉に戦慄を感じながらも聞かないわけにはいかないのが生徒の役目。

「隠しても仕方がないが、ぶっちゃけると雄英に残つての補習よりキツイからな。地獄に身を投げる覚悟だけはしておけ。いいな……?」

ニヤツと愉悅の笑みを浮かべる相澤。

その笑みは教師としてどうなんだ!?!と言わんばかりの表情に、赤点を取っていない者達でさえ五人に同情の眼差しを贈らざるえないのであった。

「そんじゃ……気を取り直して合宿のしおりを配っていくから後ろに回していけ」

淡々と進められていく時間が、返って五人にはまるで断頭台に歩いていくような、そんな空気を感ぜざるえなかった。

表情が暗いこともさることながら、嬉しいのか悲しいのか分からない。

そんな気持ちの現れでもうどう表現していいのか分からない。

ただ、一言……相澤は鬼だ、と改めて思わずにはいられなかったとは五人の後の発言である。

「まあ、なにはともあれ……全員で林間合宿に行けるのはよかったね」

尾白のその発言に複雑な気持ちながらも頷く一同。

しおりを見ながら話し合う姿が見られる。

一週間による強化合宿。

一週間は短いと思うなかれ、着替えなどの荷物も多くなるために、各自で何を持っていくかで討論が交わされていた。

「水着とか持ってねーや。購入しておかないとな」

「暗視ゴーグルも必須だぜ！」

「なんか、峰田ちゃんがそういうのは裏がありそうね」

「そそそ、そんなことないぞ!」

「峰田……もう少しポーカーフェイスを覚えようぜ?」

みんながそう騒ぐ中で、

「デクちゃんは水着とかどうするの? 中学の時とかではずっとプールの授業は見学していたって聞いたけど……」

「うん。あはは……どうしよつか。女性用の水着なんて学校指定のしか持ってないし、いざ着るとなるとまだ恥ずかしいし……」

そう恥じらいながら話す出久の発言に、聞く耳を立てる一同。

そして男性陣は思い浮かべる。

出久の猫耳しっぽなあざとい水着姿を……。

「うん……」

妄想に関してはI—Aでは右に出るものがない峰田がそう一言発言しながらも鼻血を出しながら静かに倒れた。

他にも峰田には及ばずとも他の女子たちの姿も想像してしまうのは男の性で仕方がなくそれぞれ顔を赤くしてしまう男性陣。

「(こらー！ 男子ども！ 変な想像すんなー!!」

芦戸が女性陣の代表としてそう叫んでいた。

「と、とにかくそれぞれ必要なものを買っておいたほうがいいだろう!」

「飯田。誤魔化し方がわざとらしいよ?」

「そ、そんなことはないぞ!」

飯田（それに轟）は一度出久の裸姿を拝んでしまったことがあるために、真面目な性格も相まって想像しないように必死に脳内で念仏を唱えていて表向きは普通に行っているのであった。

ただ、お茶子のジトつとした目があり、悟られているのは分かり切った事実ではあるが……。

そこで空気を変えようという感じで葉隠がみんなにある提案をする。

「それじゃさ! 明日休みでテスト明けだし、A組みんなで買い物に行かない!」

「それはいいね!」

「うん、行こうか!」

「決定!」

それで満場一致とかいかずとも（爆豪はめんどくさい、轟は母の見舞いに行くという理由で）みんなで買い物に行くことが決定した瞬間であった。

果たして楽しい気分が終わるのか否か……。

その一方で裏側では死柄木弔率いるヴィラン連合の動きが活発になってきているというの、出久達にとって決して良いことではないだろう……。

NO. 063 お買い物に来ていく服は……？

葉隠の提案によって、1—A総出ではないが木榔区にある大型ショッピングモールへと強化合宿に向けてお買い物に行くことになったのだが……。

出久は少し考えこんでいた。

「普通の服って……どんなものを着ていけばいいんだろう……？」

みんなと買い物に行くための服装選びで時間をかけていた。

それもそのはず、今まではみんなと会うのはもっぱら学校でしかなかった。

一度、爆豪の家に勉強をしに行ったこともあったが、それでも簡単なものであったためにそこまで気にしなかった。

それに男性だった時も誰かとお買い物なんてそれこそなかったから何を着ていけばいいかわからない。

だが今回は勝手が違う。

そんな恰好まで深くは見られないであろうが、それでも恥ずかしくない格好をしない

と！といううちよつと女の子らしい気持ちを感じている出久であった。

「お母さーん!!」

しばらく服装選びで悩んでいたが、一人で悩んでいても仕方がないと結論を出したので引子を呼ぶ事にした。

それで「はいはい！」と朝食後の食器洗いをしていた引子がふきんで手を拭きながら出久の部屋へと入ってきた。

引子は出久の部屋の中の服が散らかっている惨状を見て、「あらまー！」という声を出しながら、

「こんなに服を散らかしてどうしたの、出久う……う？」

「うん。それなんだけどね……今日は学校の人みなでお買い物に行くことになってるんだけど、女の子の普段着ってどんなものを着ていけばいいのかなって……みんなと会うのはいつも決まって制服だったから……」

「そう……出久もそういうのを気にするようになったのね。お母さん、出久の成長に少し嬉しいわ。男の子の時は決まって無地のものか、分かりやすく『Tシャツ』なんて書かれた少し私から見てもださい服しか着ていなかったからね……」

「あ、あはは……」

それで頬を搔いてしまう出久。

自覚があつたがために反論ができないのであつた。

「それじゃ！ そんな出久のためにお母さん、頑張っちゃおうかな!!」

そう言いながら、引子はいつか来るであろうこういう機会のために出久には内緒でお洒落な服装を購入しておいたのだ。

そして持つてきたものとは……？

「ちよ!? お母さん、ちよつと女の子っぽ過ぎない!」

「何言ってるの! もう出久は女の子なんだよ! だから問題ないわよ!」

「で、でも……」

「いいからこれ着て行つてきなさい。大丈夫。出久なら絶対にかわいいから!」

「うー……わかつた……でも一応着てみるだけ着てみるよ?」

「うん。いいわよ」

そして引子に渡された服装を出久は少し恥ずかしがりながらも着ていった。

そして鏡台に映るその姿を見て一言。

「うー……やっぱり少し大人し目じゃないかな……?」

「いいえ、似合つてるよ出久う!」

そこには白色と黒色のコントラストが映えるノースリーブの上着に、下は黄緑色の足首あたりまで隠れているスカート（猫娘仕様の尻尾穴完備）。

そして薄い水色の羽織をさらに着てさわやかさをプラスする感じ。

靴は動きやすさを重点に置いたソックス。

これで決まりだ!と言わんばかりの引子自慢のコーデイネートである。

「うんうん! やっぱり似合ってるよ! 女の子がもし生まれていたらこういう格好をさせたかったのよねー。夢が叶ったわ」

「そ、そうなんだ……」

少しだけ引いている出久は、ふと時計に目をやると、

「あつ! そろそろ予定の時間になっちゃう!?!」

「そう。それじゃ行つてらっしゃい」

「うー……もう着替える時間もないしこれで行くしかないか……それじゃ行つてきます!」

「はいはい」

出久を見送った引子は遠ざかっていく出久の後姿を見ながら、ふと思う。

出久が自身の体に起きた異変を全部話してくれた時のことを……。

引子はそれはもう泣きに泣いた。

下手をしたらかなりの先の未来にまで生きなければいけない出久の将来について

……。

そしてそれをもう当然のように受け入れてしまっていた出久に何も言えなくなった自身があまりに無力で情けなくて……。

だから、もうそんな出久の前で情けない姿を見せられないという気持ちで引子はまずはダイエットを始めていた。

出久が無個性と診断されて以降、ストレスで過食症になって太りに太ってしまったから昔の体形に戻すのには根気がいるであろうが、それでも出久に自慢されるような母の姿でいたいという一種の願望を抱いた引子。

それを海外で働いている父・久にも海外電話で相談して出久のためにできることはしていないという取り決めがなされた。

親は誰しも子供のために出来ることはしたのである。

それが個性で苦しむことになるなら尚更である。

「(だけど、自己犠牲だけはやめてよね。出久……?)」

引子は出久の個性の内容を聞いて、傷はいくら負ってもすぐに治ると分かってから、いつどこで無茶をしないかで気が気でなかった。

ヒーローになるためには傷は付き物だが、それでも無事に帰ってきてほしい……。

この家にはいつでも帰ってこれるんだから……ここが心安らいで出久の帰ってこれる“場所”なんだから……。

引子はただただ、そう思った。

お茶子たちはもうすでに所定の場所へと合流していた。

ただ、まだ出ただけが到着していないのだが、

「緑谷君はまだきていないようだね」

「そうなんよ。飯田君は何か聞いてる?」

「いいや、何も聞いてはいない」

「あの緑谷に限って時間に遅れるってことはないだろうけどなー」

お茶子と飯田の会話を聞いて、峰田がそう言葉をこぼす。

「案外、服選びをしているのかな……?」

「そうなのでしょね。緑谷さんは普段着の姿はあまり見ませんから」

耳郎と八百万がそう話している。

「そういえば、前に爆豪ん家で勉強をした時もあんまり派手っていう格好でもなかったもんなー」

「そうなのか、切島……?」

上鳴と切島でそう続いていた。

「まさか……ナンパに絡まれたか？」

常闇がいきなりそんなことを呟きだす。

それで一同は少し不安になっている中で、

「みんなー！　ごめん、少し遅れちゃった!!」

そこに出久の声が聞こえてきたために、全員は一応は安心しながらも声の聞こえて来た方へと振り向く。

そして急遽ほとんどの男子勢は顔を赤くする。

女子勢も出久の格好に少しだけ見惚れる。

当然猫耳も可愛いんだけど、服のセンスがよかつたために、出久がとてもいつにも増して可愛く見えるのである。

スカートのせいで歩きづらそうにパタパタと歩幅の少ない走り方をしているのもキュートポイントだろう。

「デデデ、デクちゃん!!　どうしたの、その恰好!!」

「あ、えつとー……うん、服選びで悩んでいたらお母さんにこれを着ていきなさいって言われて着て来たんだけど……やっぱり、似合わないよね……？」

それでシユンツ……となる出久。

だが、すぐに女性陣がそれを否定した。

「なに言ってるんのさ緑谷！ とつても可愛いよ！」と芦戸。

「そうですわ！」と八百万。

「うんうん！ とつても可愛いよ、緑谷ー！」と葉隠。

「確かにね。緑谷のお母さん、いいセンスしているじゃん」と耳郎。

と、好評だった。

男性陣もそれぞれ何かを感じていたために、

「可憐だ……」

と、飯田が眩き、

「やっぱ女子って化けるもんだよなー」

と、グヘへと親父臭い事を言い出す峰田。

「イケてるぜ……」

「ああ。確かに……普段はヒーロースーツも相まって勇ましさのほうが際立ってるもん

な」

「清楚系か……いいものだな」

と、ウケはともよかった。

最後にお茶子がぶつぶつとなにかを喋っている。

「飯田くんには見られちゃったけど……爆豪君や轟君がいなくてよかった……きつと大変なことになっていたと思うし……ブツブツ」

「う、麗日さん……？」

「はッ!? えつと、デクちゃん、とつても似合ってるよ!」

「ありがとう!!」

満面の笑みではにかみながらそう言ってくる出久にまた胸を打たれる一同であった。さあ、そして楽しい買い物が始まりだ。

NO. 064 死柄木弔ともう一人が忍び寄る

『信念無き殺意に何の意義がある……?』

いつか死柄木がステインに言われたセリフである。

死柄木はその言葉が頭に靄のようにかかっており、さらにイライラを重ねていた。

「くそが……」

先日にも一応は仲間ととれる奴らがアジトにやってきた。

トガヒミコに茶毘という二人。

だが、それにしても二人とも、ヴァイン連合ではなく、ヒーロー殺しにあてられて仲間に入りに来ただけだ。

保須市では話題は脳無ではなく、ヒーロー殺しにほとんどを持っていかれた。

それが余計に腹立たしい……。

今は気分を変えに、たまたま立ち寄ったショッピングモールを歩いている死柄木が、周りを見れば誰もかれも不安の字も出さないで平然とこの日常を楽しんでいる。

それが死柄木には腹立たしく感じてしまっていた。

「くそっ……」

「——吊くうん」

「なんでこうも……」

「——吊くうんつてばあ……?」

「目障りなんだ……」

「——吊くうん! 聞いてますー?」

「……」

一人になりたかったというのに、どういうわけかコイツ……トガヒミコが己の近くにいることに死柄木のイライラはさらに加速していた。

「……さつきからうるせえぞ。灰にされてえのか……?」

「そんな怖い顔しないでくださいよお……吊くんは神経質ですかあ?」

「うるせえぞ精神破綻者」

「それは吊くんには言われたくないですよー。私達同じヴィランで精神破綻者じゃないですか」

「チツ……」

調子が狂うとは正にこの事だろうと死柄木は思う。

なんで尾行をこうも簡単に許してしまったのか……。

「それより周りがやかましいですよねー? 殺してもいいですか?」

「口を開けばそれか。我慢くらいしておけ……」

「はあい♪ ニシシ……」

「はあ……」

死柄木は深いため息を吐く。

だが、トガがいるならちようどいいとも思い、一つ聞いてみることにした死柄木。

「なあ、トガヒミコ……」

「そんな他人行儀じゃなくていいですよ。トガでもヒミコでもどちらでもいいですよー？」

「はあ……ならトガ。お前はステインをどう見る？」

「ステ様ですかー？　そうですねえ、とっても殺したいですー！」

「……………」

聞いた俺が間違いだった……と死柄木はまたも深いため息を吐く。

だが、そこでトガはある事を言う。

「でもー。ステ様は信念がとってもおありだと思いましたがねー」

「信念……信念か。お前もそう言うんだな」

「間違っていますせんよー？　ステ様はとっても理想のお高い方です。それに比べて弔くんはそういう思いとかはないんですかー？」

「おまえ……まさか今回つけてきた理由は……」

「はいー……弔くんが私が付いていくに値する人なのかを……見定めたいかとー」

『アハツ♪』と笑みを浮かべるトガを見て、死柄木は理由もなくムシヤクシヤな思いをしていた。

それが分かれば苦勞はしない……。

自身とヒーロー殺しとの違いは何なのか……？

まずはそれを明確にしないとイケない。

そうでないと、こいつもいつ背中を刺しに来るか分かったものではない。

だが、時間だけはありがたいことにまだ結構ある。

とある作戦決行までじっくりと答えを出せばいいのだ。

そう考えながらも二人はシヨツピングモールの中をただ目的もなく歩いていた。

だが、そこで二人はとある人物の顔を目にする。

「あいつは……」

「あー、あの子は!!」

二人の反応の差はあれど、見た先には出久が他の子たちと一緒に楽しそうに歩いている光景を目にする。

死柄木は舐めさせられた苦澁の思いと、同時に目的発見という思い。

トガはステインに助けられた出久がどんな子なのかという興味本位。

「ちようどいいな……あいつにも聞いてみるか」

「弔くん！ 出久ちゃんと接触するんですか？ ですか!？」

もうトガはそれは嬉しそうにはしゃいでいる。

そんなトガを視界に入れずに死柄木はタイミングを見て出久へとゆつくりと近づいて行った。

いずれは標的にするのだから見定めておくのもいいものだ……。

出久達は集合してそこそこにショツピングモールへと足を向けていた。

だがその前に切島が出久にとあるお願い事をしていた。

「緑谷、すまねえ！ ちよつといいか？」

「なに、切島君？」

「今の緑谷の格好、写真撮ってもいいか？」

「え？ うん、いいけど……」

出久は迷うことなく承諾していたが、そこにセ〇ムお茶子が横から出てきて、

「切島君……写真を撮ってどうするつもりなのか……？　かな……？」

某鈍女のような口調で首を傾げながら目を据わらせていた。

そんなお茶子に切島は内心でとてつもない恐怖を感じながら、

「逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ……ッ!!」

と、某凡庸人型決戦兵器に乗る少年のような言葉を脳内で連呼しながらも恐怖に抗っていた。

そして意を決して、

「い、いやな……せつかくだから爆豪に送ってやろうかと思ってな……今の緑谷、普通に可愛いし……あいつ、絶対後で見られなくて悔しがりそうだしな」

「ん……まあ、仕方がないかな。いいと思うよ」

「え？　かつちゃんに送るの……？　それはちよつと恥ずかしい、かな……」

思わず頬を赤らめる出久。

前に爆豪の家で図らずも爆豪の気持ちを知ってしまった出久。

だから気恥ずかしい事間違いないのである。

そこに峰田が話に入ってきて、

「それじゃ轟にも送ってやろうぜ！　あいつらの悔しがる顔を想像するだけで飯がうまくなるってもんだし！」

「かつちゃんに分かるけど、なんで轟君……?」

「緑谷、あんた……さすがにその反応はないと思うよ?」

「ほえ……?」

耳郎にそう言われて間抜けな顔になる出久。

実際出久は言葉にされないと感じないくらいには鈍感だし、まだ直接轟から気持ちを伝えられていないが為にこういう反応をしてしまうのも仕方がないのである。

出久の中では轟はみんなと同じでまだ友達止まりが現状である。

そんな出久に対して他の女子達も轟に対する憐みの気持ちがあるのか、目を瞑って今後の轟の挽回の機会が訪れるように幸運を祈るばかりであった。

「ま、いいけどな。それじゃ撮るぞー」

「うん」

「できれば笑顔で頼むわ」

「わ、わかった……」

「でしたら緑谷さん! スカートの裾を摘まんでみるのはいかがでしょうか! 絶対に可愛く映りますわ!」

八百万の熱弁に圧されながらも、言われるがままに写真を撮ってもらい、それはすぐに切島の手で爆豪と轟の携帯に送られるのであった。

果たして送られた二人はこの写真を見てどうという反応をするのか楽しみだ、と出久以外の全員は思わずにはいられなかった。

そんな感じですでに楽しそうに騒いでいる一行がシヨップングモールに入って行って、すると雄英体育祭の影響か、まだ覚えている若者たちが「体育祭、ウエエー……イ!!」と叫んで来た事に対して、

「や、やっぱりまだ覚えている人はいるもんなんだね……」

「それはそうですわ」

「うんうん」

「まあ多少は仕方がないか……」

と、全員は気にしないようにする事にした。

それだけど、遠くでは女子勢……特に出久の姿を見て、

「おい、あの子。今もつばらの噂の緑谷ちゃんじゃね……?」「インゲニウムを治したつていう……」「生で見るとやっぱり可愛いな」「猫耳がとつてもキュート!」

と、もうすでに話が人を集めている事に対して、

「と、とにかくばらけようか。それぞれ目的のものがあろうし……」

「そうだね! それじゃ集まる時間と場所を決めよう!」

「あそこの噴水でお昼過ぎでいいんじゃないかね……?」

「決定!!」

そんな感じで全員はばらけていった。

そんな中で、出久とお茶子だけその場に残っていた。

「みんな早いね……」

「そうだね」

「麗日さんはどうするの?」

「うん。私はちよつと虫よけでも買ってこようと思う。デクちゃんはどうするの?」

「僕は別のものかな……それじゃ少ししたら僕達だけですぐに集合しよう」

「わかったよ、すぐに買ってくるね!」

そう言ってお茶子もその場を離れていった。

出久はそれで自身も目的のものを求めて歩き出そうとしたところで、

「お! 君って雄英体育祭で二位になった子じゃん!」

「お話聞かせてくれませんか?」

少し勢いのある感じで二人組の男女が近寄ってきて、女の子のほうが肩に手を置いてきた。

出久は多少は有名になってしまったから仕方がないと諦めようとしたところで、男性

の方も反対側の肩に手をなぜか中指だけ立てた感じで置いてきて、

「いや、ほんと……保須市での事件も知っているよ……ヒーロー殺しと遭遇したんだって……?」

「よ、よく知っていますね……」

「本当に運命みたいなものだよ……まさかこんなところで会うなんてな……」

だんだん男性の言葉のトーンが下がっていくことに出久は違和感を感じて、フード越しに男性の顔を見て、そして、

「ッ!?!」

気づいてしまった。

その男性の顔はUSJで襲ってきたあの、

「因縁みたいなものか……お前にとつては雄英襲撃以来だとは思うがな……」

「し、死柄木……弔……」

「少し、お茶でもしようぜ? 緑谷出久……」

「ですすう!」

出久はこうして死柄木弔と……そしてトガヒミコと最悪のエンカウントをしてしまったのであった。

NO. 065 自覚する歪んだ信念

死柄木弔とトガヒミコによって両肩に手を置かれて、事実上拘束されてしまった出久。

死柄木はそんな出久の窮地に追い込まれている心境を知ってか知らずか小声で話しかける。

「自然に振る舞え……なあに、旧知の友人のように構えててくれればいいのさ。お前はただ俺の質問に答えてくれればそれだけでいいんだ」

「なっ……あつ……」

なにかを喋ろうとする出久だったがすぐに死柄木は先制して言った。

「決して騒ぐな……呼吸を落ち着かせろ。そして少しでもおかしい挙動を取ったら、それが最後だ。俺の個性は英雄強襲の時に把握しているんだろ……？　そう、肩に手を置かれている時点でお前はもうすでに詰んでるんだよ」

それはもう脅迫と何も変わらない。

いつ個性を発動してもいい、ただし発動すればそれで終わりであるのだから。

出久はそれでなんとか必死に呼吸を整えようとして、

「ああ、そうそう。すぐに傷は修復するとかいう甘えた考えはしないほうがいいぞ？」

「なっ……どうしてその事を!？」

「やっぱりか……」

「ツ!?……あっ!!」

出久はそこでミスを犯してしまふ。

死柄木にまんまとカマにかけられてしまったのだ。

それはつまり、死柄木はフォウの存在を知っていたという証拠。

それに気づいた時にはもう遅かった。

死柄木はそれはもう厭らしい笑みを浮かべている。

「(気づかれた! どうする!? どうすれば!?)」

もう混乱の極みな状態の出久。

そこに一人だけ分かっていないトガが死柄木に話しかける。

「弔くん、それってどういう意味ですか? 差し支えなければ教えてくれないでしよ

うか?」

「後でな……それより緑谷出久。もう分かっただろ。お前はただ俺の言葉に従うしかないんだよ。言ってみれば周りすべての客が人質のようなもんだ。」

「お前がもし反抗でもすればその瞬間には周りの奴らは塵になる運命だ」

「ツ!!……………何が、目的なの?」

出久の癖である考えこむ思考がこんな時にでも高速回転をしていた。

「周りに被害を一切出さずに、どれだけ死柄木から有力な情報を引き出せるかという事に……………」

「そんな出久の反応に死柄木は「良いねえ」と笑いながら、

「せつかくだ。腰でも下ろしてじつくりと話し合おうぜ。可愛い服を引き裂かれたくなかったらな……………」

「気持ち半分すでに犯罪行為の発言だが、抗う術はない。」

「母にせつかく揶えてもらった大事な服を汚したくないという気持ちも出久を何とか奮い立たせていた。」

「弔くん。それじゃちよつと先に私が話をしてもいいですか?」

「ああん……………? なんでだ? 俺が先に話しかけたんだぞ?」

「いいじゃないですか。ほんの少しだけですから」

「……………つたく、あんまり時間をとるなよ?」

「ありがとうございますー!」

そんな感じで三人は座れる場所に出久を真ん中に座らせて逃げられないようにして

話をしだす。

まずはトガが出久に話しかける。

「それじゃ出久ちゃん、初めまして！ 私、トガヒミコっていいですよ。これでもヴィランやってますー」

「トガヒミコ……？ そんなヴィランの名前、聞いたことない……」

「それはそうですよー。素敵なメディアの方々はまだ私が未成年だからっていう配慮で表向き、名前と顔は公開してくれないので多少はありがたいと思っておりますー。

でもお、最近おかしく感じるんですよー」

「な、なにが……？」

「はいー。なんで私が公表されないのに、出久ちゃんは全国に顔が知れ渡ってしまったのかとお……。おかしいですよねー？ 未成年保護法が適用されるならたかだか一人を助けただけで、しかも良いことをしたのに……悪いことはしていないのに出久ちゃんには公表されちゃったのかなって……なにかしら陰謀めいたものを感じませんかー？ 感じますよねー？ キヤハハ♪」

「……………」

出久は何も答えられない。

そのあまりにも楽しそうに話すトガにどう言葉を返していいのかわからないのだ。

そんな困惑する出久の気持ちとは裏腹にさらに言葉を重ねるトガ。

「ですけど、そんなことはどうでもいいんですよ。私にとつては出久ちゃんという子の事が知れた幸運だけを感じられれば……雄英体育祭、見させてもらいましたー。あのお茶子ちゃんも中々に興奮しましたけど、やっぱり決勝での戦いは私をより興奮させてくれました！」

あの、爆破の男の子の攻撃によつてどんどんと体に火傷や傷を負つていく光景を見せられて、魅せられて、ミセラレテ……。ああ、ステ様以外にもこういう気持ちを抱く事ができたんだなって……。私、出久ちゃんになりたいなって……。それにもつと出久ちゃんの傷つく姿を見たいなって……。もう考えるだけで幸せになつてくるのですよ。そして最後には二人で気持ちよく殺し愛をして逝きたいです……。♪」

さながらマシンガンのようなトークをし終わったのか、恍惚とした表情のまま笑みを浮かべているトガに、出久は戦慄のような感覚を覚えた。

あまりに狂気じみている。

それは一緒に聞いていた死柄木も思ったのか、

「……とんだイカレ野郎だったか。もういいか……？」

「はいー。私の気持ちはもう存分に伝えました。これで私と出久ちゃんは友達ですわね！ やったー!!」

「話が噛み合わねえな……。まあいいか。それじゃ緑谷、今から俺の質問に答えてもらうぞ」

「う、うん……」

もうトガだけでいっぱいいっぱいだつた出久はまだ話が分かる死柄木に対して楽な気持ちで挑めることができた。

イカレ具合はどっちも似たようなものだが、人間話が噛み合わない人より多少でも噛み合う人の方に気持ちを集中できるものである。

「だいたい、俺はなんにでも気に入らないものがあるが最近では特に気に入らないものはヒーロー殺しだ。腹が立ってしょうがない……」

「仲間、じゃなかったの……？」

「世間ではそう言われているな。俺は決して認めちゃいねえがな。そして問題はそこだ」

「……？」

何が問題なのだろうかと思う出久。

だが下手に聞き返して機嫌を損ねられたら堪らないので死柄木の次の言葉を待つ。

「ほとんどの奴らがヴィラン連合よりヒーロー殺しに目を向けていやがる。雄英襲撃や保須市での脳無の件も、全部奴に喰われた……。なぜ誰も俺のことを気にしない？ な

ぜ俺のことで騒がない？ なぜ、あんな能書きを垂れてるがしていることは所詮はヴィランとなんも変わらないヒーロー殺しにしか目を向けない？ 奴も気に食わないものを壊して回っていただけだろ？ おかしいよな？ なあ緑谷。奴と俺で何が違う……？ 答えろ……」

そう言つて死柄木は肩から首に手を回していつて少し力を強める。

死柄木も焦っているのだ。

このままではもやもやが晴れない。なにか確証を持てるものが欲しいのだ。

今まではただ暴れるだけでよかった。

だが、これからは率いていく立場になるのだからこんな中途半端な状態では先生と呼ぶ人にも顔向けをされなくなってしまう。

それだけは嫌だ。

過去の地獄の中から助け出してくれた先生に捨てられるなんて考えたらずらに死ねる。死ねる。

だから、出久が真に必要な何かを答えてくれることを切に祈つてすらいる死柄木。

果たして出久は、

「な、なにが違うかって……僕はお前のことは理解も納得もできない……だつてお前は本当にただ壊すことだけを考えていたんだから。」

「……」
「……」

「理解、だと……？ 教えろ……その理解とやらを……」

答えが知れると思つた死柄木はさらに首にかける手に力を込めていく。

それで息苦しくなっている感覚を覚えながらも出久は話す。

「……僕も、そしてヒーロー殺しも……始まりは、オールマイトだったから……」。

僕はあの時、ヒーロー殺しに助けられた……。それで思つた。少なくともあいつは壊したいがために壊していたんじゃないって……。

お前のように途中で諦めて徒に投げ出したりもしなかった……。

やり方が間違つていようと、それでもヒーロー殺しは理想に生きようとしていた

「………んだと思う」

そこまで出久が言い切つた瞬間だった。

突然なにかのプレッシャーに襲われるイメージを感じた出久。

重く、暗いなにか……どす黒い感情が溢れ出てきたかのような……。

「ああ……スッキリした。点と点が線で繋がつたような気分だ。なんでヒーロー殺しが憎くてムカつくのか……そしてなんでお前が鬱陶しいのか……分かつたような気がする……」

「申くん！ ついに見つけたんですねえ！」

「ああ……」

そして出久は見た。

そこには答えを得て不気味な笑みを浮かべた死柄木がこう話した……。

「全部……オールマイトが原因だってことをな……」

「ツ!!」

そのどす黒い笑みに出久は恐怖を感じた。

底知れない憎しみを讃えているその笑みはもう数値に出すことができないほどだと……。

「そうだったんだよなあ……最初から答えはあったんだ。どうしてそれにすぐに気づけなかったんだ……オールあマイトのがヘラヘラと笑ってるから、周りの奴らも同じようにヘラヘラと危機感を感じないで笑ってるんだ……ホントに、救えなかった人間などいなかったかのようにヘラヘラと笑ってるからなんだよなあ!!」

その言葉の端々に感じられる憎しみはどう表現してもし足りない。

死柄木の原点はそこだったんだと、出久の言葉が思い出させてくれた。

「お前と話せてよかった！ ありがとう緑谷！」

そう言いながらも出久の首を絞めていく死柄木。

気持ちがある頂天になって制御が疎かになっているのであろう。

五本の指が重ねられないだけまだ救いはあるが、それでも出久にとってはたまったものではない。

「ちよつと弔くん？ 出久ちゃんが苦しそうですよ……う？ 聞いてますー？」

そんな、トガの言葉も耳に入らないほどに死柄木はただひたすら嘔う。

「（皮肉なもんだぜ、ヒーロー殺し……全くの正反対の俺を生かしたお前のその理想、信念が全部俺の踏み台になるんだからな!!）」

もう息が詰まるどころではないと限界を感じ始めていた出久に、だが救いの手が差し伸べられる。

「デクちゃん……う？ お友達、じゃないよね……う？」

買い物から帰ってきたお茶子が出久のあまりの様子に顔を蒼白にさせながらもそう聞いてくる。

「手……放して……う？」

震える言葉で、それでも出久を助けようと言葉を紡ぐお茶子。

それでポケットに手を入れる仕草をする死柄木。

それにいち早く気づいた出久は、

「何でもない！ 大丈夫だから！ だから来ちゃダメ……！」

なんとか言葉を絞り出せた出久だったが、死柄木はそこで意外な行動を取った。

「連れがいたのか。ごめんねー!」

先ほどまでの事がまるで嘘かのように明るく振舞う死柄木。

そんな光景に呆気にとられる出久とお茶子。

そしてトガと一緒に立ち上がり、出久から少しずつ離れていく。

離れ際に小声で「追ってきたら、分かるな……?」と言い残す。

出久は何度も咽ながらも、必死に死柄木に言葉を張り上げる。

「待って……死柄木……! 『オール・フォー・ワン』は何が目的なの……?」

「えっ……死柄木って……!」

「さあな……それより次会う時は覚悟しておけよ……（お前は先生の傷を治すために必要なんだからな……）」

言葉には出さずに死柄木はそう思う。

一方でトガはというと、

「デクちゃん……デクちゃん……うん! 呼び方がかぁいいね! それじゃ今度から私もデクちゃんって呼ぶ事にするね! 友達だから当然だよね!!」

と、最後まで滅茶苦茶であった。

そのまま二人は人の群れの中へと消えていったのであった……。

こうして楽しいはずのショッピングは最悪な形になってしまった……。

NO. 066 ショッピングモール後の対応

死柄木はショッピングモールからトガとともに外にゆつくりと歩いていった。

だが、死柄木の表情はここに来る前より晴れているとトガは思った。

「それでー、デクちゃんと話すことで弔くんはなにかを得ることができたんですか……？」

「ああ。今まで何を迷っていたのか……信念に理想も最初からあったんだよ……」

「差し支えなければ教えていただけじゃないでしょうかー？」

「ああ……てめえもそれが目的だったんだろ？」

「はいー」

不気味に笑うトガに、死柄木も笑みを頬に刻みながらも、

「俺のやることは今までと何ら変わらない。だが、これからの俺の起こす行動はすべてに直結することになる。」

『オールマイイトのいない世界を創り、正義とやらがどれだけ脆弱かを知らしめる』。

……今日からそれを俺の信念と呼ぶ事にするよ」

「そうですかー……はい。とてもいいと思いますよ。オールマイトのいない世界……とつても理想的ですよ！ この、生きづらい世の中を変えてくださるのでしたら、このトガも精一杯お力になりますよー」

「そうかい……」

死柄木はトガという女のことを今一把握できないでいた。

ヒーロー殺しの狂信者でなにかしらの猟奇的な想いがあるらしくとち狂ってはいるが、思えば、冷静な一面も見せる。

だが、それでも俺達ヴィランと何ら変わらない思想を抱いている。

こいつとならうまくやっていけるかもな……。

そう思い、クツクツク……と暗い笑みを浮かべながらも死柄木はアジトへと戻って行く。

これから下準備があるから大変になるぞ……と。

………一方で、出久達はそんな死柄木の偏った思考など把握できるわけでもなく、そしてこんな事態に陥るなど分からなかったために、ヒーロー達をお茶子がすぐに呼んだが、捜査してもすぐに逃げられてしまったらしく足取りはつかめなかった……。

「緑谷君!!」

「緑谷!?! 大丈夫かよ!?!」

と、続々とクラスのみんなが集まってくる中、もう当分は危険だという事でショッピングモールは一時閉鎖になって、出久はそのまま警察に事情聴取のために連れていかれた。

そこで待っていたのは塚内という人。

「緑谷さん、それでは死柄木弔とトガヒミコと遭遇して聞いた内容を話してもらえないかな?」

「わかりました……」

出久は塚内に促されるように遭遇した時の内容を伝えていった。

そして一通り聞き終わったのか、

「ふむ……聞く限りは彼らは一枚岩でもないみたいだね。そしてオールマイトを打倒することも相変わらずといったところか。とにかく、ありがとう緑谷さん」

「はい……。あ、いえ……僕ももつと引き留められていればよかったんですけど……」

「そんな悲観的にならないで大丈夫だよ。君はよくやってくれたと思う。市民の命を狙われてパニックも起こさずによく耐えてくれたと思ってるよ。だから結果的だけでも犠牲者はゼロで済んだんだからもっと元氣よくやっていこうか」

「はい」

そして事情聴取は終了して、外に出てみればすっかり暗くなっていた。

さらに外で待っていた人物がいた。

その人物とはオールマイトだった。

オールマイトは塚内と出久の事を呼びながら近づいてきた。

その表情は心配の具合が高かった。

「オールマイト……なんで？」

「彼とは個人的に話すことがあってね。呼んでおいたんだ」

「そうなんですか」

「うむ。それより良かった。無事で何よりだ」

そう言いながらも出久の頭に手を置いて、

「すまなかつたね。助けに行けずに……」

「いえ……」

そこで出久はある言葉を思い出す。

それは死柄木が有頂天のまままで語っていた一言。

『ホントに、救えなかった人間などいかなかったかのようにヘラヘラと笑ってるからなんだよなあ!!』

その言葉が出久にはとても深く暗いものがあると感じられた。

逆恨みとも違う何かを感じられたのは、果たして……。

それで出久は思い切ってオールマイトに聞いてみることにした。

「あの……オールマイトも誰かを助けられなかったことってあるんですか……?」

オールマイトは出久のその質問に少し疑問を感じながらも答えた。

「……あるよ。今もこの世界のどこかで絶えず救いを求めている人が大勢いる。でも、私も人間だからね。すべてを救い出すというのは限界もある……。だけど、だからこそ笑うんだ。『正義の象徴』が絶えず人々の、ヒーロー達の、ヴィラン達の心を常に灯せるようにね」

それを聞いて出久もどこかで納得できる節があった。

だが、それは同時に平和の象徴が倒れてしまったらこの世界はどうなってしまうのかという、一途の不安もあった。

「彼女は死柄木の言葉を気にしている。多分逆恨みか何かなんだろうけど、オールマイトが災害現場に来て救えなかった人など今まで一人もいない……。だから緑谷さんも深

く考え込まないようにな」

「わかりました」

「うん。さて、それじゃそろそろお迎えだ」

警察署の扉が開いてそこには泣き顔の引子の姿があった。

引子は泣きながらも、

「もう嫌だよ出久う……お母さん、心臓が破裂しちやいそうだよ……」

「ごめんね。僕はこの通りなんともなかったから。だから……それにヒーローや警察の方々に守ってもらったから、泣かないでお母さん……」

そのまま出久は塚内の指示で部下の方に送ってもらったのであった。

それを見送った塚内とオールマイトは、

「それじゃ少し大事になりそうな話でもしよるか」

「ああ」

「今回は本当に偶然の遭遇だっただろうから……そんなには大事にならなかつたんだろう。だけど、今後は生徒も標的にされるかもしれないから用心をしておいたほうがいい」

「うん、分かっているさ」

「それと……緑谷さんの件なんだけどね。興味深い内容が聞けた」

「興味深い内容……?」

「うん。死柄木弔は緑谷さんの傷を治す個性とは別のオートヒール能力を知っていた。話に聞くフオウという猫の個性はほとんどが把握されていると思ったほうがいい」

「まさか……」

「ああ。生徒たちの中で一番狙われる可能性が高いのは彼女だと僕は思っている。だから少しでも対策は立てておいて損はないと思うよ」

「そうか……やはりもうあちらにも緑谷ガールの事は把握されてしまったという事なんだね。分かった。そこ等辺も会議で話し合っておくでしょう」

オールマイトはもうそれだけでオール・フォー・ワンが出久の事を狙っていることを把握した。

他にどんな目的があろうとなかろうと優先的に守らないとという誓いを立てた。

「よろしく。……まあ強い光ほど闇が濃くなるっていうけど、雄英を離れることも視野に入れておいたほうがいいと思う」

「……雄英教師になってまだ三か月とちよつとだぜ?」

「そうかもだが……ほら、やっぱり君には向いていないと思うからね」

それで二人は少し静かになった後に、

「……俊典」

「うん？」

「オール・フォー・ワン……今度こそ捕えような」

「うん。今度こそな……またよろしく頼むな塚内君」

「おう！」

週の始まりのホームルーム。

そこでは相澤が今回の件に関して教師陣で話し合った結果の話をしていた。

「と、まあ……こんな事があったわけで……例年使わせてもらっている合宿先を急遽キャンセルすることにした。当日まで行先は発表しない運びで行かせてもらう」

しおりをわざとらしく破りながらもそう言った。

それに対して生徒たちの反応はというと、様々だがまあ仕方がないかという感じで纏まっていた。

そんな中で、爆豪が出久に話しかける。

「おいデク。てめえ本当になにもされてないんだよな……？」

「う、うん……傷は負わなかったよ」

「そうか……あのイカレ野郎。今度会ったらぶち殺してやる」

「あ、あはは……」

話す内容は物騒だが心配されている事に嬉しく思う出久であった。

「あ、そう言えば爆豪に轟。お前たちに送った例の写真はあの後どうしたんだ……？」

切島の質問に二人は途端に油汗を浮かべながらも、

「てめえ！ いきなりあんなもんを送ってくんや!!」

「まあ多少は驚いたが似合っではいたがな……」

二人の反応の差はあれど、二人の反応を見て全員はニヤニヤとしていたのであった。

「なんだあ？ てめえら何か言いたげだな……？」

『いやいや、なにも……？』

そんな感じで時間は流れて行って、あつという間に日にちは過ぎて行ってあつという間に終業式が執り行われて、夏休みの期間に入ったのであった。

NO. 067 とある夏のひと時

……I・アイランドの一件で、まだまだ力不足を実感していた出久は、少し悩みを感じていた。

そう。

もう少しワン・フォー・オールの力を制御できていれば、そしてフォウの個性もうまく使いこなせていれば……と。

要するに全体的に個性の底上げが望まれるのである。

それは、夏の後半に強化合宿があるとはいえ、自身だけでも何かをできるのではないか……？

そう思い、足を延ばしていたのは爆豪の家。

「……それで？ 俺の家に来たってか？」

「うん……」

そこにはしかめっ面をしている爆豪が家のドアを開けて出久を睨んでいた。

いろいろと考えたのだが、最終的にはやはりこういうことに関しては才能がある爆豪

に意見を聞くのが一番だろうという事で爆豪の家へとやってきたのだ。

しかし出久はいいとして爆豪の方は気が気でなかった。

自身の性格にも関係してくるのだが今まで家に招いたことがあるのはこの間の期末試験の時に切島とともに三人で勉強した以外ではあまり誰かを家に招くという事はなかったのだ。

しかも今回は話を紛らわせられる切島がいないために、そして爆豪自身もまだ自身の気持ちに気づいていないのでもやもやとしていた。

「ダメ、かな……?」

不安そうな瞳で出久に見つめられた爆豪は、また果てしないほどの未知の感情を抱きながらも、なんとかそれを顔には出さずに胸の内に秘める。

そして出てきた言葉といえは、

「ああ……。別に構わねえけどよ。クソナードのてめえなら俺の個性の伸ばしところも見つけられるかも知んねーしな」

「あつ……うん！」

それで嬉しそうに破顔する出久。

もれなく出久は爆豪の家の中へと入っていく。

すると台所の方から爆豪の母・光己がやってきた。

「あら。緑谷ちゃん、いらっしやい」

「お久しぶりです。光己おばさん」

「そんなに久しくはないけどね。この間にも勉強で来ていたじゃない？」

「そうですね」

「そうですよ？」

あはは、と笑う光己と出久。

そんな光景を見せられて爆豪は少しイラついた。

「おい、くそばばあ！ 今日はずは俺に用があつてきたんだ。余計なお節介はしてくんじゃねーぞ？」

「はいはい。それより……勝己！」

「うげっ!？」

「……？」

突然光己は爆豪の首を腕でロックして少し出久から離れて小声で話をしだす。

出久は不思議そうな顔をしながらも親子の間に入るのは、という感じで見守っていた。

「んだよ!？」

「まあまあ……それよりこの間は切島君がいたからよかったけど、今日は緑谷ちゃん一

人だけなんですよ？ 母さん、勝己の男の甲斐性を見たいわね！」

「はあ!? んだよ、それ？」

「ほら。緑谷ちゃんてまだ女性の経験つて乏しいじゃない？ だからたとえば押し倒しちゃうとかくらいは私も許すわよ？」

「バツ!! ざっけんな!! なんて俺がデクなんかを!」

思わず声大で叫んでしまい、

「ど、どうしたの？ かつちゃん？」

「ッ！ な、なんでもねーわ……」

出久が心配そうに話しかけてくるが、爆豪はなんとか高鳴る鼓動を隠すことができた。

「フフフフ……頑張んなよ、若人」

「うるっせえ！ 消えろや!!」

光己はそれはもういい笑顔を浮かべながらも離れていった。

やはり年季が違うためにうまくやり過ぎられてしまった事にやりきれない思いになる爆豪。

だが、いつまでもクヨクヨとしてはいられない。

それで、

「はあ……まあ、行くぞ、デク」
「うん」

言葉に疲れが見えるものの自分の部屋へと案内していく爆豪と付いていく出久。二人は部屋に入るなり、すぐに話を始めようとする。

出久と爆豪は真面目ゆえに夏休みの宿題など特訓の為にはとうに終わらせているタイプであるためにそんな話はせずに、

「そんじゃデク。さっさと始めんぞ?」

「わかった。それじゃかつちゃん、ちよつとこれ見てもらつてもいいかな?」

背負ってきたいつものリュックから一冊のノートを取り出して爆豪に渡す。

爆豪は受け取ると開いてさらつと読み進めていく。

ノートの中には今まで判明してきたフォウの個性と運用法などがびっしりと書かれていたのだ。

「相変わらずこまめに書かれてんな……」

「うん。あ、かつちゃんのデータが書かれているノートもこんな時のために持ってきてあるけど、見る?」

「……………後でな」

「そう? わかったよ」

言葉を返した爆豪は平然としていたが、内心では汗を盛大に掻いていた。

データとは聞こえはいいが、この出久のデータを見るだけで分かる膨大な情報量。

それゆえに、今までずっと観察されていたであろう爆豪のデータとはどんなものなのかと……戦慄を感じざるえない爆豪だった。

ここで出久は改めてヒーローマニアなのだという事が分かる一幕である。

そう思いながらも、爆豪は読み進めていくにつれて気になる点を発見した。

「おい、デク」

「ん？ どうしたの、かつちゃん」

「あのよ……お前の使う猫化する個性って、確か『変化』だったよな？」

「うん」

「それよ？ ただ猫の姿になるだけの個性なのか？」

「えっ……？」

爆豪にそう言われて出久は思わず脳が高速回転し始めたのを感じた。

スイッチが入ったとも言おう。

「かつちゃん……そこるところをもっと詳しく話してみて……」

「わ、わかった……」

すごい剣幕の出久に思わずたじろく爆豪。

だがなんとか話を再開する。

「ただよー……今まででめえは猫に変化して大きくなったり小さくなったりしてきたじゃねーか？ でもよ、わざわざ猫の姿に固執する必要もないんじゃないかってな」

「確かに……」

「それに、複数の個性持つてんだからよ。爪に炎を宿らせるみたいに『変化』の個性を複合してみたらどうだ……？ ちようど『許容量限界キャパを無くす』なんて個性も持つてんだから無理無茶なんてし放題じゃねーか。うらやましいぜ」

茶化すようにそう言う爆豪だったが、すでに出久の脳内では様々なシミュレーションが試行錯誤していた。

そして今、爆豪の部屋の中だけで出来ることが一つだけ思いついたのだ。

「かつちゃん。ちよつと試してみてもいいかな？ 部屋は壊さないから」

「なにをだ……？」

「うん。ちよつと見てもらつてもいいかな」

そう言いながらも出久は爪を『爪の伸縮自在』の個性で伸ばした。

「僕は普段、これにさらに『爪の硬質化』を合わせて使うのがオーソドックスな運用法なんだ。そして『炎術』でさらに強化する計三つの個性がこれの限界だと思っていた。」

「だけど、ここにさらに『変化』の個性を上乗せする！」

瞬間、爪の太さは三倍以上にも膨れ上がり、まるで五本の爪がその一本一本が出刃包丁のような太さを体現していた。

「これは……また凶悪なフォルムになったな、おい……」

「うん。そしてこの強化に多分腕は耐えられないと思うから、もう一回『変化』を使用する……選択するのは部分獣化って感じかな？」

今度は腕だけが獣毛が生えていき猫の手になった。

「そして最後に、『身体強化・怪力』（それとワン・フォー・オール）を合わせて今までとは一線を画した強化ができる……と思うんだ」

「なるほどなあ……面白れえじゃねーか。即興にしてはうまくいつてんじゃね？」

「うん……（それに、今はかつちゃんには言えないけど、変化の個性で全身を半獣化にすれば耐久度が上がってフルカウル状態は少なくとも50%以上は発揮できるかもしれない……）」

そう考えている出久。

そこにさらに爆豪がとある話を出してきた。

「なあ……？ その変化ってのはもともとは妖術だったんだろ？」

「うん。フォウがそう言っていたからね」

「ならよ。もしかして変化の制限とかがないんじゃないか？ さつきも言ったが猫以外にも変化できるかも知んねーぞ」

「それは……ありえるかもね。要検討課題だね」

そんな感じで二人の会話は盛り上がりを見せていって、気づけばかなりの時間が経過していた。

仲の改善ができたことよってここまで自然に会話ができるというのも出久が嬉しく思っている気持ちである。

だが、ふと爆豪は先ほどの光己との会話を思い出していた。

『男の甲斐性』とかなんとか……。

そして『女性の経験に乏しい』とも……。

今、出久は爆豪と男友達のような感覚で話をしているのは見ていて分かった。

だが、もう出久は男子ではなく女子なのだ。

これから先、変な奴がちよつかいをかけてきて男のままの気持ちでほいほいと付いて行ってしまうかもしれない。

それを想像しただけで嫌な気持ちが爆豪の中で膨れ上がった。

だから多少でも女性としての自覚を感じてもらわないといつか自身も痛い目を見ると思った爆豪はある決断をする。

「おい、デク……」

「ん……?」

未だブツブツと呟きながらも考えに耽っている出久がこちらへと振り向いてきたタ
イミングで、ちょうど出久の背後は壁だったために爆豪は壁に思いつき腕を突きなが
らも顔を出久へと迫らせる。

「か、かつちゃん……?」

「なあ、デク……てめえはまだ俺の事を異性と思っちゃいねえんだろうがよ、もうてめえ
は女だって事は分かってるよな?」

「う、うん……」

「だったらこれからすることは分かるな……?」

「ツ!? だ、駄目だよかつちゃん……」

鈍感な出久でさえ何をされるかわかってしまった。

部屋の中にはいるのは出久と爆豪だけ。

さしずめ光己が部屋に入ってこないために爆豪が鍵はかけた。

密室の中で男と女。

何も起こらないわけがない。

もう、出久の胸の鼓動は早鐘のように鳴り響いていて頭は真っ白になって何も考えら

れなくなっていた。

ましてやこんな状況では詰んでいるに等しい。

そんな状態の中で、

「……………ま、冗談なんだけどな」

「え……………」

そんな言葉とともにあっさりと幕引きがされた。

「え、な……………」

「てめえは女としての自覚が足りないんじゃないや！ そんなんじゃないつか悪い男どもに騙されんぞ。もつと気を張れ気を！」

「う、うう……………かつちゃんの意地悪！」

もう涙目になっていた出久はさっきの気持ちを返せと言わんばかりであった。

そのままグダグダな感じでお開きになったので、帰る際にはヒントをくれた事に感謝はすれど、終始恨みがましい視線を爆豪に浴びせていた出久であった。

NO. 068 プールでの遊びと訓練

……突然だが、峰田実とはある野望を抱いていた。

それは期末試験後の時までさかのぼることだが、峰田とはある女子達の会話を聞いていた。

その内容とは、

『えー？ 夏休みの間、長期外出を禁止するーッ!』

そんな芦戸の叫びとともにいろいろなと盛り上がりを見せる女子達。

『それはしょうがないんじゃないかな？ ほら、うちらUSJでヴィラン連合に襲われたわけだし……』

『そうだけどー……はあ、新しい水着買ってあったのにー……』

『わたくしも親とともに海外に旅行に行く手筈でしたのに、残念ですわ』

『……ちなみにどこに行く予定だったの？』

『ベネチアですわ』

『ブルジョワヤー……』

『まあ、みんなもどこかで遊びたいよね』

それで女子達はヒートアップしていく。

と、そこで葉隠がとある提案をした。

『それじゃーさ！ 夏休みに学校のプールに集まらない!?!』

『いいわね。それなら先生も許可してくれると思うわ』

『いいね！ お金もかからないし！ ね、デクちゃん!』

『う、うーん……そうだね』

『あれ？ なんか浮かない返事だね?』

『それなんだけど、やっぱり女子の水着を着た経験がまだなくて、どうしようかなって

……』

『それならちようどいいから慣れておこうよ！ いつまでも着ないままじゃもつたいな

いよー!』

『そうだよ、緑谷！ この際、着ちやえよー』

『そうですわ!』

と、一層の盛り上がりを見せていた。

もうこの時点で女子全員がプールに来ることは必然事項となった。

峰田はそれを聞いて野望を抱いた。

女子の水着姿をこの目に納めないことには死ねないな！と。

それで同志である上鳴を誘って、女子が来ることになっている日と同じ日にプールの申請許可を出していた。

だが、ここで問題になってくることがある。

あの相澤の事だ。

もし峰田と上鳴だけで申請許可を出したら、怪しまれて許可が下りないかもしれない……。

それだけはダメだ！

女子の水着姿を見なければ！

そんな思いが峰田と上鳴を突き動かした。

それならば、木を隠すなら森の中、人を隠すなら人の中という言葉で、クラスの男子全員を巻き込んでしまえ！

申請内容は『強化訓練』とでっち上げておけばいいだろう！という事で飯田に連絡を取ったのである。

ただ、二人は真面目な飯田に連絡を入れる時点でもう正気ではなかったために、生半可に強化訓練などと言わなければよかったと、後に思うことになるのだが……そこは自

業自得である。

出久はみんなとともに更衣室で水着へと着替えている途中で、

「うーん……やっぱり恥ずかしいなあ」

と、目の前に学校指定のスクール水着を掲げて悩んでいた。

そこにお茶子が話しかけてくる。

「デークちゃん。大丈夫だよ、デクちゃんは可愛いんだからきつと似合うって！」

「麗日さ……ん、!?」

出久が見た先ではまだ着替え途中で上半身が裸のお茶子がいたために、

「ぎ、ぎめん!!」

「うん……? あー、そっか……」

お茶子は少し考えて、出久が性転換する一年位前まではまだ男子だったために見てしまつて罪悪感を感じていることに気づいたのだ。

だけどそんなことを気にしていたらこの先女子として生きていけないだろうと、お茶子自身も『デクちゃんは女の子の子デクちゃんは女の子』と言い聞かせて平気そうに装つて、

「デクちゃん、大丈夫だよ。男の子のままだったらどうだったか分からないけど、今はデクちゃんはれつきとした女の子なんだよ。だから裸なんて見られても気にしないよ?」

「そ、そう……?」

「うん。むしろ逆かもだし……」

「う、麗日さん……?」

そこで少し不穏な顔になるお茶子に思わず出久が聞き直す。

お茶子はそこで『はっ!?』と我に返り、『デクちゃんの裸が見れることがなんか嬉しい』なんて気持ち察せられたらやばいと気持ちを落ち着かせることに成功する。

「とにかく! 大丈夫だよ。それにいつも更衣室でみんなを着替えてるじゃん? だからもう気にならないよ。ね、みんな?」

「そうよ、出久ちゃん。もう今更よ。最初の戦闘訓練の時にもとは男性だったってことを素直に話してくれたのだから、信頼できるって言ったでしょ?」

「梅雨ちゃん……ありがとう」

蛙吹にそう言われて少し気持ちが柔らかい出久であった。

「それより、早くいこうよ! もうあたし達は準備はばっちりだよ!」

「芦戸もそんなに急かさないでいいと思うけどね」

「ノンノン! 時間は有限なんだからさっさと遊びたいよ。ね、ヤオモモ?」

「葉隠さん、そうですわね」

それで一同はプールへと向かった。

だが、行つてみるとそこには数名の男子の姿があつた。

「あれー？ みんなも今日使う予定だったの？」

「ああ。まだ来ていないが峰田君と上鳴君の二人に強化訓練をしようと誘われたのでね」

男子のみんなを代表して飯田がそう話す。

「峰田に上鳴が中心でグルか……何かよこしまな考えがありそうだね。あの二人が真面目に訓練なんて誘うわけないし……」

なかなか辛辣な耳郎であつた。

実際その通りなのだから否定はできないことに出久は「あはは……」と苦笑いを浮かべる。

「まあ、とにかく準備運動をいたしましょうか」

「「さんせい！」」

それで準備運動を始める女子達。

と、遅れて上鳴と峰田がプールにやってきて、なぜかこちらを見てきてがっかりそう

な顔をしている上鳴と対照的に「スク水もいいものですね……」とごちる峰田の姿があり、

「やっぱりね……大方うち達の水着姿を見たいが為だったんだね」

「否定できないところがなんと……」

そんな峰田と上鳴の二人は飯田に「感動した！」と叫ばれながらも強化訓練に連行される様を見て、

「うん……南無」

出久も思わず手を合わせるしかできなかった。

それはともかく、

「それじゃ遊ぼう！」

「「おー！」」

女子達は男子と違って日光浴目的で来たために特に鍛えることはしないのだが、それでも出久は鍛えたいなあ……とは思っていた。

だが、その前に問題があった。

性転換して猫娘の姿になる前だったら平気だったのだが、猫娘になったことで猫の苦手なこととも体現してしまったために、

「……………（そおー）」

いぎ、プールに足を入れようとして何度も足を引っ込めるといふ行動を繰り返していた。

「デクちゃん？ どうしたの……？ 早く入ろうよ」

「そ、そんなんだけど……どうも猫ゆえに水に苦手意識があるみたいで……入るのに抵抗があるんだ」

「あら。出久ちゃん、USJの時に普通に水難エリアに入っていなかったかしら？」

「あの時は生きるか死ぬかで必死だったからね……」

「そうだったわね」

「でもさー、そんなこと言ってたらヒーローなんてできないよ！ さ、気をしっかり持って入ってこよう!!」

と、芦戸に背中を叩かれてプールに入ってしまった出久。

「うー……ひどいよ、芦戸さん……」

「ごめんごめん。でも入っちゃえばどうってことないでしょ？」

「まあ、そうだね」

「それじゃ緑谷もプールに入ったってことで、ビーチボールがあるから遊ぼう！」

それから女子達はビーチボールで遊んでいるのであった。

一方で男子たちは文字通り強化訓練をやっていて峰田と上鳴はある意味死にそうに

なっていた。

そんな対照的なことをしている一同。

そんな時に遅れてとある二名の男子。

爆豪と切島の二人がプールへと足を運んできた。

「あ……かつちゃんだ……」

「ホントだね。あれ？ デクちゃん、なんか顔が赤くなつてない……？」

「そ、そうかな……？ 不思議だねー」

紛らわすようにそう話す出久であったが、つい先日いきなり爆豪に詰め寄られてきた光景を思い出してしまい、爆豪の顔をうまく見れないのだ。

そこでお茶子のセ〇ムセンサーが反応を示す。

「……デクちゃん？ 爆豪君となにかあったの……？ よかったら話してくれないかな？」

「え、えつとー……」

「なんか反応が初心つぼいね……気になるね」

「ちよつと耳郎さんに麗日さん。無理に聞き出すのはダメですわよ？」

「そういうヤオモモもなんか気になる感じだねー」

「なんか気になるー！ 聞いたらキyunキyunしちゃう予感がするよー！」

「出久ちゃん、無茶でなければ話しちやいましょう」

「……………」

退路がなくなったことを自覚した出久は細々としながらも話していく。

それを聞き終えて、

「やっぱり！ なんかすごいキュンキュンするよー！」

「爆豪君……やっぱりどうにかしないと……」

と、黄色い叫びをあげる芦戸達と、一人麗らかではない顔をしていた麗日お茶子であつた。

爆豪の明日はどつちだ……？

そして残り時間も少なくなってきたときに男子勢がプールで一位を決めるとか話したかったので、女子達は応援をすることになった。

三組に分かれてそれぞれ勝負が行われて、残ったのは爆豪、轟、飯田の三名。

三人はそれで一度女子達……特に出久の方へと向いて、

「みんな、見ていてくれ！」

「俺が勝つ……！」

「ぜってー負けねえ!!」

と宣言をしていたために、

「んー……なんかあたし達は眼中にないかもね……」

「そうだねー」

芦戸の言葉がそのほとんどを物語っていた。

出久は出久で普通に応援していたために、まだまだ恋に発展はしなさそうにないのを窺えたので余計に女子達は気持ちが悪くムズムズしだしたそう。

だが、結果は相澤が指定の5時を過ぎたといって勝負はお預けになってしまい、男子三人はやりきれない感じだった。

そして帰りの事、

「かつちゃん、残念だったね……」

「まあな。だがぜってえ俺が勝ってたぜ！」

と、普通に会話をしている二人を見て一同は「仲良くなったな」と思う次第であった。

さて、それはともかくもう少しで強化合宿である。

「みんな、強化合宿頑張ろうね！」

「うん！」

「おう！」

みんなで掛け声をあげて、強くなるぞと誓った。
果たして強化合宿は無事に最後まで終わるのか否か……。

猫娘と強化合宿編

NO. 069 強化合宿の始まり

——林間合宿当日……。

「え!? A組、補習対象者がいるの? つまり赤点を取った奴がいるって事だね! おかしくない!? おかしくない!? A組はB組より優秀なはずなのにねー!? あつれれー!? おつかしーなあ!」

林間合宿に赴こうとするA組一同にそう罵倒を投げかける男、ご存じB組の少なからずA組を妬んでいる男、物間寧人^ス。

こう言つてA組に対して某少年探偵のようなきつい言葉を吐いているが、その実、B組でも唯一赤点を取ったものなのだから、知っているものからすればただの強がり……もしくは滑稽にしか映らないのが現状である。

さすが精神破綻者!

「ちよつとー!? 誰だか知らないけど今だれか僕の事をバカにしなかつたかい!」

そんな不快感をあらわにする物間。

聞こえもしない声を聞き取るとは……。

そして天の声に物申してくるとは恐れ入る……。

「うるさいー!」

「うっ!」

案の定、物間はB組の姉御的存在の委員長である拳藤にチヨップを食らい、いつものごとく力なく崩れ落ちる。

「ごめんな」

そう言って謝ってきて物間をさっさとバスへと放り込む拳藤をよそに、B組の他の女子達が話しかけてくる。

「あはは……物間、あいかわらず怖……」

「まあ、いつもの事だから放っておこう。それより体育祭ではいろいろあったけど、よろしくね、A組」

「ん」

「うん。よろしくね」

普段そんなにクラス間で話さない女子一同ではあるが、たまにはあるが共通の会

話等はする事がある。

その内容とはお互いの個性の把握であつたり、戦闘スタイルであつたり……。同じヒーロー科同士。

そこまで仲良くはしないでも、嫌いあう必要もないのだから。

特にB組のメンバーは体育祭の一件から出久に対しても一目を置いている。

あの出久の宣誓以来、やはりたつた一年で鍛えただけでここまで上り詰めてきた出久に思うことはあるのは確かかなことで。

物間などは素直には認めはしないだろうが、それでも出久の存在がA組だけでなく、B組にもなにかしらの良い影響を与えている。

だから、B組の女子達は出久に近寄つて行つて一言。

「緑谷さん、お互い頑張ろうね」

「あ。うんー」

握手を交わす出久達。

こうして仲は深くなつていくものである。

そんな挨拶をかわすとともに一同は一旦分かれてそれぞれのバスへと入っていく。

だがその際に峰田がB組の女子達をじっくりと観察して、そして何かを思い至つたのか一言。

「よりどりみどりがよ……ッ!!」

と、隠しもせずに変態発言をして、これまた隠しもしないで盛大によだれを垂らす。

そんな光景に場の空気に即座に慣れることに定評がある切島でさえもさすがに峰田の変態行動には目を見張るものがあつたためにいつも以上に不憫に思ったのか、

「おまえいい加減ダメだぞ、そろそろ……」

「エへ、エへ、エへへへ……」

切島の憐みの言葉は脳内有頂天の峰田の耳には届かなかつた……。

だから切島もさつさと説得を諦めてバスへと向かつていく。

バスの前では委員長である飯田がすでに誘導を開始していた。

さすがまとめることに定評のある飯田である。

程なくしてA組の乗るバスは林間合宿の場所へと向かつて出発したのであつた。

バスの中ではそれぞれに楽しむもの、騒ぐものと様々な様相を呈しているが、ふと出久は考え込んでいた。

そんな出久の表情を見て女子の数が半端で一緒に席に男女で座るしかなかつた飯田は出久の顔を覗き込みながら、

「どうしたんだい、緑谷君? どこか浮かない顔をしているけど……」

「飯田君。うん、なんか今バスで向かっている方向がどこかデジャブがあつて……」

「デジャブ……?」

「うん。なんか頭の端っこに引つかかるような……知っているような……」

そう言ってまた考え込む久。

「聡明な緑谷君がすぐに思い出せないのならそこまで重要な事でもないのではないかね……?」

「そうなんだけど、やつぱりどこかもやもやがすつきりしないと気分が悪くて……」

「そういうものか。まあ、その時になれば自ずと分かるものさ。今はこれからの事を話していいこうでしょうか。……そう言えば、話は変わるが、メリツサ君とはあれから何か聞いているかい……? アドレスは交換したと聞いたが……」

メリツサというのは夏休みに入ってA組のみんながそれぞれ各自で行った『I・アイランド』にて知り合った無個性の女の子の事である。

その際に、出久達はちよつとした事件に遭遇したのだが、今はもう済んだことなので今はもう過去の話ではあるが、繋がりがなくなつたわけではない。

「うん。デヴィット博士の傷は僕がすぐに治したから事なきを得たけど、同時に傷の回復を待つという時間を短縮できたから今はデヴィット博士周辺は裁判とか色々ごたごたしているらしいけど、それでもメリツサさんとのメールのやり取りだとそんなに暗い内容でもないみたいなんだ。情状酌量の余地は多少はあるらしくて……」

「そうか……いい結果になればいいものだな」

「うん」

そんな感じで出久は今は遠くにいる友達の事を思い馳せながらも時間とバスは着々と進んでいった。

………そして一時間後。

休憩エリアに到着して止まるバス。

一同はわらわらと体を伸ばそうと外に出ていく。

だが、不思議な事にパーキングエリアはおろか、休憩所すら崖の高台な場所。

気づけばB組のバスすらなかった。

だが、一人……峰田はそんなこともお構いなく尿意と一人戦っていたために必死にトイレを探している。

そんな不思議な事態に、でも出久もさすがに勘が冴えてきたのか、今自分たちがいる場所をなんとなくだが把握してきていた。

「……って、まさかね……」

そう出久が一人ごちるが、それを肯定するように背後からA組と相澤以外の声が聞こえてくる。

「……………いいえ。あなたの考えている通りよ、緑谷さん」

「えっ!？」

出久が振り向くとそこにはいつぞや職場体験でお世話になった人達がいた。

「よう、イレイザー!!」

「ご無沙汰しています」

相澤もとうに把握していたのだろう、待っていたかのようにその声の主に挨拶をする。

「え、え、え……………」

そんな相澤をよそに出久は少し混乱していた。

まさかこんなに早く再会する事になるとは思っていなかったがゆえに。

「煌めく眼でロックオン!」

「キュートにキャットにステインガー!」

座して登場したのはこの方達。

「ワイルド・ワイルド・プッシュィキャッツ!!」

そこにはマンダレイ、そしてピクシーボブ……………最後に出水洗汰の三人の姿があった。

「マンダレイ！ ピクシーボブ！ それに冨汰君！」

「ねこねこねこ。久しぶりね、緑谷」

「はい！ お久しぶりです！」

「冨汰も緑谷さんに会いたがっていたから今回は依頼された時は渡りに船だったのよね。ほら、冨汰？」

「おう……」

そう言つてマンダレイの背後から恥ずかしそうに顔を出す冨汰。

冨汰は顔を少しだけ赤くさせながらも、

「久しぶり、出久姉ちゃん……」

「うん。久しぶりだね、冨汰君！」

そんな和気あいあいな空間が形成されているけど、他の生徒達はどこか置いてかれ気味で、代表してお茶子が出久へと話しかける。

「その、デクちゃん？ この人達は？」

「あ、うん。前に職場体験でお世話になったワイルド・ワイルド・プッシーキャッツの皆さんだよ、麗日さん」

「あー！ そう言えばそんな事を言つてたね！」

「うん。あれ……？ でも、それじゃ合宿所までまだ結構な距離ありますよね？——

まさか……」

出久の勘は当たっているとさえいよう。

相澤が話し出す。

「少し話が脱線したが、もうすでに強化合宿は始まっている」

「え、それって……」

「言葉の通りよ。あなた達の宿泊施設はあの山の麓ね」

指を宿泊施設がある方角へと刺すマンダレイ。

「嘘だろ……?」

「おいおいおい!? 冗談だろ!!」

「……………今はAM9:30。早ければ十二時前後かしら?」

そんな不吉な言葉をマンダレイが漏らす。

それによって出久はもうすでに諦めの境地に達していた。

だが、まだ現実を受け入れられないA組一同は我先にとバスへと逃げ込もうとする

が、遅かった。

土を操る個性のピクシーボブが地面を操作してA組全員を崖の下へと無理やり運ん

でいく。

その際に、洗汰は出久に手を振りながら、

「宿泊施設で待つてるよ」

と言葉を零していた。

崖下へと落とされた一同に頭上からマンダレイの声で、

「ここは私有地だから個性使用は自由よ。今から三時間、自分たちの力で施設まできてちょうだい！ この……魔獣の森を抜けて!!」

そんな、どこか不吉な『魔獣の森』というワードを聞いて、不安がる一同。

どういう意味か考えるが、その答えはすぐに分かった。

「グルルルルル……」

そこにはおよそ三メートルあるかないかの大きさの土くれの魔物が出現したのだ。

「「「魔獣だー！ー！ー！ー！？」」」

騒ぐ一同。

だがいち早く正気を取り戻した口田が「鎮まりなさい獣よ、下がるのです」と動物なに通じる個性を発動したのだが、魔獣は一切反応をしない。

「みんな！ あの魔獣はピクシーボブの個性で作った土くれ！ だから破壊するしかないよ!!」

そう出久は言いながらも魔獣へと飛び掛かって行って、その爪で切り裂いていた。

だが、続々と姿を現す魔獣の群れ。

一同は各自で対応を迫られることになる。

果たしてたった三時間で宿泊施設まで到着できるのか……？

………補足しておく、尿意を我慢していた峰田は色々と手遅れだったと記載しておく。

NO. 070 合宿一日目の終わり

………——合宿一日目・17:20

宿泊施設の前にピクシーボブは立っていて今か今かと出久達が来るのを待っていた。そして林の中から1—A全員がひどく疲れた表情でありながらも、しかししっかりと足取り(?)で歩いてきた。

ここまで来るのにたいそう苦労したのは言うまでもないことだろう。

全員個性に関係する部位の疲労による震えを抑えながらもなんとか歩いてくるのだから。

……なぜかって、ここまで到着するのに計100体以上は魔獣が出てきたからである。

以前に出久は5体ほどを相手取った事があったが、あの時の比ではないと感じるほどだったのである。本気度合いが違っていた。

もう何度ハウリンググインパクトを放ったことか、炎術で燃やしたことか、体術で破壊しまくった事か……。

それは全員にも言えることなのでもう、お疲れ様としか言えない。

「ねこねこねこ。やっと来たね」

「あゝ……腹減ったよ……」

「喉乾いた……」

「めしー……」

ピクシーボブの言葉にも反応するのに億劫な一同。

「……なにが三時間ですかー……もう5時ですよ!?!」

「ごめんね。あれは私たちならって意味ね」

「実力差自慢かよ！ どのみちお昼なんて期待できなかったんだ……」

「非常食でも用意しとくんだったな……」

「それは止めておいた方がよかったと思う……最悪取り合いとかいう醜い争いになるし

……」

「だなー……」

そこまで結論が出て思わず項垂れる男子たち。

そんな一同をよそにピクシーボブは舌なめずりをしながらも、

「でもー……私の土魔獣が思ったより早く攻略されちゃったよ。特に……経験があった出久はいいとして、そのの三人……」

「ん……？」

「なんですか……？」

「あ……？」

指さされた方は爆豪、轟、飯田の三名。

「躊躇の無さは経験値かそれとも性格によるものかしら？ 卒業後が楽しみね！ 唾つ

けとけー！」

「「うわっ!」」

「わわわっ!」 ピ、ピクシーボブ！ 落ち着いてくださいー！」

出久がなんとかピクシーボブの行為を止めさせた後に、

「三人ともごめん。後で僕がきつく言っておくから」

そう言いながらも出久はハンカチを取り出して三人の顔を拭いていく。

そんな光景を見てピクシーボブは「おやーん？」と笑みを浮かべて、

「出久ーん？ もしかしてその三人って……」

「え？ なんですか？」

「いやーん？ ねこねこねこ、お姉さんは無粋だったみたいだねー」

「えっ!? ホントになんですか!?!」

困惑する出久をよそに顔を拭かれた三人はそれぞれ思うことはあれど無言であった。
そんな時だった。

洗汰が三人の前にゆっくりと歩いてきて、

「オラアツ!!」

渾身の水ぶっかけをお見舞いした。

「ちよっ!? 君、なにをするのかね!!」

「なにすんだ……?」

「クソガキ、てめえ……なんのつもりだ!?!」

「うるせえ! 出久姉ちゃんにちよっかいを出すんじゃねえ!!」

「んだと、おらあ!?!」

そんな感じで特に洗汰と爆豪との睨み合いが勃発していた。

「あわわわ……ま、マンダレイ………どういう事でしょう?」

「ふふふ………洗汰もいっちょ前にませてるって事ね」

「はあ………?」

出久は意味が分からずに曖昧に言葉を返すだけであった。

そんな賑やかな光景の中で、

「……お前ら。茶番はいいからさっさと荷物を部屋まで運んじまえ。時間は有限だ。荷物運んだ後に夕食、次いで入浴、最後に就寝だ。本格的なスタートは明日からだ。それまでに精々鋭気を養っておけ」

相澤がそう言つて先に宿泊施設の中へと入つて行つてしまった。

それを見越してか、

「ほら洗汰。遊んでないで手伝いして頂戴」

「わかつた……（キッ！）」

最後に睨みを爆豪に効かせて先に中へと入つていった。

そんな見たこともない洗汰の姿に出久はというと、

「洗汰君……どうしちゃったんだろう？」

「デクちゃん……」

「麗日さん？」

ゆつくりと肩に手を置かれて振り向くとなにか少し怒り気味なお茶子の顔がそこにあり、

「デクちゃん、人気者やね。私、もううかうかしてられないや……」

「そ、そうなの……？」

「ウフフ……」

それからどこか虚ろな目をしていたのが印象的だったと後に出久は語る。

「ほら、お茶子ちゃんに出久ちゃんも早く行きましよう。せつかくのご飯が冷めてしま
うわ」

「う、うん。梅雨ちゃん」

「ケロ……でも、なぜかしら？ 私も少し嫉妬心を感じてしまったわね。何に対して
……？ 哲学だわ……」

蛙吹もなにかしらの気持ちの変化があったのだろうか、首を傾げている。

「それでは皆さん。早く中に行きましようか」

八百万の言葉でそれぞれ荷物を持って中に入っていく一同。

ピクシーボブに目をつけられた三人も渋々としながらも入っていく。

……ただ、峰田は一人、みんなが消えた後にひっそりとパンツの中を確認していたと
かしていなかったとか……。

女子達は部屋の中に入るとそこには普通ながらも七人が入るには余裕があるくらい
の広さがあった。

「わー！ もっと小さいものを想像していたよー！」

「ウチもだよ。でも、いい感じでよかったね」

「今日はもう疲れちゃったから騒げないけど明日とか女子会とかしよつかー!？」

「いいですわね！ 女子会……一回してみたかったです」

「ケロ。楽しみね」

「そうだね！ ね、デクちゃん！」

「うん！」

明日から今日よりもハードな事が起きるかもしれないだろうが、今だけは自由に想像してもいいだろうと女子達ははしゃいでいた。

特に芦戸に関しては赤点がどのように効果を発揮してくるのか分からないために恐怖を紛らわす意味を含まれているのである。

そして荷物も運び終わったのちに夕食となった。

全員そろって「いただきます！」と言って食事に取りつく一同。

そこで男子と女子の言葉の中で行き来してもいいかという話があった。

強化合宿とはいえ、こうして一同が同じ釜の飯を食べて遠からず近い場所にいるというのは修学旅行みたいで感覚的には楽しいものだろう。

特に食事は雄英のランチラツシュにも劣らないきめ細やかな米であり、

「この米、うめえ！」

「ランチラツシュにも劣らない美味しきだ！」

と、昼抜きのみんなには優劣など付ける判断力も失わせるほどには食事が進む進む。
テンションがハイって奴だ！

……………賑やかだった空気もお風呂に入れば落ち着くというもの。

女子達はそれぞれお風呂に入ろうと制服を脱いでいくのだけれど、ここでやはりまだ慣れない出久が隅の方でこそそこそと脱いでいた。

だが、もうここまで来て遠慮など逆に彼女たちに失礼だろう。

裸になることに關しては誰よりも早い葉隠が出久の背後に回って、

「もう緑谷ー！ そんな恥ずかしがってないで一緒に入ろうよー！」

「うわっ!？」

と、言いつつも意外に大きい出久の胸を揉みながらも葉隠は思う。

「ふむふむ……………これは三奈ちゃんとかオモモの間くらいってところだね」

「ちよ、葉隠さ……ん、くすぐった、ひゃっ?!」

「ほれほれ……ここかなー?」

なにやら俗にいう透明人間の定番行動を شدした葉隠。

出久の様々なお肌が葉隠の透明な手によって触れられるたびに歪む光景は実にエロスである。

「透・ち・や・ん……? そこまでにしておこうか……?」

「はひ……」

「はあ、はあ……」

虚無の目をしたお茶子によって早々に終わることになったのだが、まだ息が荒く頬が紅潮していた出久の光景に女子全員は男子でもないのにドキツとしたのはきつと気のせいではない。

「………はっ?! み、皆さん早くお風呂に入りましょうか!」

微妙な空気になりつつあったのを八百万の機転によって回避することに成功する。

そのままもう出久は体を洗った後に温泉に浸かりながらポオーっとした頭の中で空を見上げながら、

「………女子って、不思議だね」

と、なにかしらの悟りを開いていた。

その後、男子の風呂の方では峰田がやはりとか騒動を起こしていたらしいが、女子と男子の中間に控えていた洗汰によって成敗されたのだけど、色々あって女子の方へと洗汰は落ちていってしまったって咄嗟に出久が受け止めることができた。

目を覚ました洗汰は出久の裸を見て鼻血を吹きながら再度気を失ったが……。
敢えて言おう。

ラツキースケベである。

「ハ、洗汰くーん!?!」

出久の空しい叫びが響き渡ったのであった……。
こうして一日目は終わっていった。

NO. 071 合宿二日目からが本番だ

………合宿二日目

AM5:30にA組の一同はB組の生徒達よりも早く訓練場の空き地エリアへと集合していた。

まだ時間も時間な為に、そして昨日も昨日で散々だったために疲れが抜けていないA組一同。

まだ眠いために目をこすつたり欠伸をする生徒が多く見られる。

そんな一同の前で、しかし相澤はいつもと変わらずにこの言葉を発する。

「諸君、お早う。いい朝だな」

「「……………」」

いい朝どころの問題ではない。

この男の睡眠時間はどうなっているんだ？

一同も実のところ、起き抜けにさっさと短い時間で朝食を腹に納めてきたために体が

まだ正常に動いていないので多少の胃もたれ感も感じているために動きも鈍い。

そんな中で、

「では、本日から本格的に強化合宿を始めていこうと思う。昨日のあれが如何に生易しかったかと感じるほどには鍛えていくぞ。覚悟しておけ。そしてこの合宿の目的は言うまでもないが、全員の個性の強化及び仮免の取得に向けてのものだ」

仮免……その言葉を、響きを聞いて一気に全員の眠気が消えて逆に力が漲ってくる気がしたのはきつと気のせいではない。

全員の表情を相澤は見つつ続ける。

「いい表情だ。もう体験したから分かると思うが、具体的になりつつある敵意に備え立ち向かうための準備段階が今回の目的だ。だからと言って仮免は言ってしまうただの通過点でしかない……だが、お前らはまだその通過点すら潜り抜けられるかも怪しいのが現状だ……分かりやすく感じてもらうために……爆豪」

相澤はそう言っついでつぞやの体力テストで使った球体を爆豪へと投げる。

キャッチした爆豪は「なんで俺に……？」と数瞬だが考えた。

「なあ、先生よ……これを俺に出したつてことはまた体力測定みたいなことをするんだろうと思うけどよ。なんで俺なんだ？」

「ほう……その理由は？」

「いやよ。それならデクでもよかったんじゃねーか？　認めたくはねえが一応は主席であの時のトップだったんだからな」

「まあ、それは一理ある。だが、あの時と今の緑谷は決定的に差が出来てしまっている。緑谷の秘密を知っているお前達なら分かっていると思うが、体力テストの時の緑谷は今ほど複数の個性をいくつも使えていたか……？」

そう言われて全員は考え込む。

確かにそうだ。

まだあの時は出久自身が把握していた個性は『猫の言葉を理解できる』『五感強化』『爪の伸縮自在』『爪の硬質化』『脚力強化』『身体強化・怪力』（+ワン・フォー・オール）のみだったのだ。

だが、今ではそれに加えて『叫ぶ事による衝撃波』『炎術』『変化』……。

そしてフォウとの接触により判明したサポート的な意味合いを持つ個性である『許容量限界を無くす』。

フォウの力の根源である『生命力を奪う』『それに伴う自動回復』。

最後に超常黎明期に入り新たに取得した『与える』という個性。

……それらすべてをオールマイトとフォウから受け継いだ出久は計13（14）

個もの個性が使えるのだ。

だから、今となつては変化の個性で巨大な猫と化して、さらに増幅された力でボールを投げでもすればそれだけで体力テストの時の比ではなくなってしまう。

「緑谷は例外中の例外と言つても決して過言ではない。かと言つて、無限大を叩き出している麗日も成長の伸びの確認は不可能だ。

だから爆豪だ。緑谷を例にしたら失礼だとは思うが他のみんなは緑谷みたいに個性が増えたり変化はしていない……だからあの時と同じ測定方法が適用される。こんなところか……分かつたらさつさと投げしてみる。時間は有限だからな」

「お、おう……」

そう捲し立てられて爆豪は分かつたような分からないような微妙な気分を味わいながらもボールを投げる準備をする。

「ちなみに、入学当時の体力テストでの爆豪の記録は705.2m……果たしてどれだけ伸びているかな……?」

そう言いつつ笑みを浮かべる相澤。

そんな相澤の表情を見た爆豪はいっちょ驚かしてやるかという意気込みを抱く。

それで聞いていた他の一同もようやく理解が追いついてきたのか各自で話し始める。

「……なんとなく緑谷はダメだつて事は分かつたけど、つまり……成長具合の確認か!」

「そうだよー。この三か月は色々濃かつたからね!」

「いったれバクゴー！」

「800mくらい出してみる！」

「いや、さすがにそれは無茶ぶりが過ぎるだろう……」

「かつちゃん、頑張れー！」

それぞれの声援を受けて爆豪は手に集めていく。

特に最後の出久の応援がさらに爆豪の気持ちを高ぶらせた。

スタンバイが終わり、爆豪選手、腰をひねり腕を大きく振りかぶって……、

「よっこらせつと……くたばれええええッ!!」

渾身の力を込めて投げました！

全員は爆豪の『くたばれ！』発言に思う事はあるだろうが、それでもこれでこそ爆豪だという感じでいつも通りに受け流していた。

爆破の個性も相まって投げられたボールはどんどんと飛距離を伸ばしていく。

数秒経った頃合いでボールはどこかに落ちたのだろう。

相澤の持っている測定器からピピツ！と音が鳴った。

果たしてその結果は？

「ふむ……諸君、期待していたところ気持ちを落とすようで残念ではあるが……測定された結果は709.6mだ」

「あれ……？ 思ったより……？」

「伸びて、ない……？」

ざわざわと騒ぎ始める一同。

それは投げた本人である爆豪自身が感じているはずだ。

雄英高校に入つてここまで様々な困難や訓練も重ねてきた。

雄英体育祭でも準備の段階で爆豪は必死に訓練を重ねてきたのだ。

だからさぞや記録も伸びている事だろうと自負していたところ、一気に出鼻を挫かれた思いで、その表情は不満と困惑が縋い交ぜとなつて啞然となつてしまつていた。

「雄英に入学して三か月間弱……様々な経験を君たちは積んで成長を果たしてきている。だが、それはあくまで精神面や技術によるところによるものであり、あとは多少の体力的な成長が主なものだった……」

それを聞いた一同は考えてみればそうだと思わざるえない。

入学からここまでやってきたのは主に演習や救助などがメインの訓練。後はメンタルや知識を鍛えるために一般教養だけだったのだ。

あくまでも学校という部分を逸脱できていない以上は鍛えられるところも限定的だろう。

だが、そう考えてしまえば如何に出久がチート体質になりつつある事か……。

『許容量^{キヤパ}限界を無くす』という個性柄、鍛えれば鍛えるほど強くもなるし限界も見えない成長を見込めるのだから。

それはともかく……。

「個性」そのものは今見てもらった通りにそこまでの成長はしていない。だからな……これから強化合宿が終わるまで諸君らには「個性」のさらなる飛躍によつて伸ばしてもらおう」

「個性」のさらなる飛躍……」

相澤はあくどい笑みをその頬に刻みながらも、

「これから行う訓練は死ぬほどキツイと思う、がそんな事を言っていたら我が校の校訓は体現できないぞ……？ 我が校の校訓を今一度思い出せ……」

——更に向こうへ！　Plus Ultra　!!　——

それを思い出して数名の生徒の目に火が宿る。

逆に峰田のようなものは怯え腰になりそうでもあつたが……峰田に関しては昨夜の女湯覗き未遂でもろに校訓を汚してしまつていたために表情を引き攣らせていた。

「分かつたみたいだな。最後に一言……くれぐれも死なないように」

最後に全員の不安を煽っていく相澤のスタイル……嫌いじゃないわ!!

それで尚の事全員はこれからやるであろう訓練内容に色々な思いを馳せていった。

個性を伸ばす……。一体どうやれば伸ばせるのか……？

その後にワイプシの面々が姿を現して、ラグドールによるそれぞれの個性を伸ばす訓練内容を言い渡されて、思った通りに表情を引き攀らせたとか……。

NO. 072 個性：変化って実は万能個性？

強化合宿二日目の朝、A組の面々がすでにお決まりの通りに相澤にB組よりも早く訓練が開始されている一方。

そんな中でB組の面々も遅れながらも強化訓練場所へと歩いていった。

B組の担任・ブラドは相澤と同じようにB組の面々に“個性”を伸ばす旨を話しながらもこう付け加える。

「前期ではA組が目立っていたが、後期からはA組ではなく我々B組だ。いいか!? A組ではなく、我々だ!!」

そう力強く宣言するブラドを見て、

『先生!! 不甲斐ない俺らですみません!!』

と、ほぼ半数以上の男子生徒達が涙も隠さずに一緒に悔しがっていた。

まあ、言われてしまえばそうとしか取れないのだが、USA襲撃、体育祭、保須事件……ついでに言えばインゲニウムの治療と言う成果。

どれを見ても関わっていてさらに目立っているのはA組の面子ばかりなのだ。

B組もA組と同じくヒーロー科……こう言っつては襲われたA組に対して失礼だがB組はこれといった活躍をしていないのが現状なのだ。

だからブラドもどうにかしてB組の生徒達を活躍させたいと日夜考えを巡らせている。

静かに着実に厳しく育てていく相澤に対して、ブラドは生徒に寄り添った教育をしているので相澤とは別の意味での信頼を生徒達から獲得している。

………まあ、それ故に物間という少し性格に難がある生徒に対して厳しくできていないためにブレーキが少し外れたままにいるのも仕方がない……。

そこに関してはブラドも苦々しく思いながらも承知している、そしてそんな物間のストップパー役を買って出てきてくれるクラス委員長拳藤には感謝の思いでいっぱいなのである。

—— 閑話休題

B組の生徒の一人である取陰切奈がブラドに話しかける。

「ですが先生。突然“個性”を伸ばすつて言つても……20名20通りの“個性”があるのに……何をどう伸ばせばいいのか分かんないんすけど……」

取陰の質問はまさに的を得ている。

今話したように個性は誰一人として同じではないのだ。

それぞれに得意苦手があり、普通の訓練ではどうしても全員に指導などは出来る訳がない。

取陰の質問に同意するように両頬から刃が飛び出している鎌切尖が「具体性が欲しいな……」と続ける。

他の面々も同様のようふうんうんと頷いていた。

ブラドはそんなB組の面々に対して冷静に説明をしていく。

「筋繊維は酷使することにより壊れて……それ以上に回復した時に倍以上に強く、太くなる……「個性」も同じだ。使い続ければ強くなり、でなければ一気に衰える。今のご時世……20代ならまだ挽回の目途は立つが、使い続けないでいた30代、40代ともなればもう「個性」は衰えに衰えているだろう……故に……」

広い場所へと到着した一同。

そこで目にするのは阿鼻叫喚の地獄絵図……とまではいれないが、物々しい雰囲気であつた。

ブラドは一度全員の方へと振り向いて宣言する。

「すなわちやるべきことは一つ！ リミット・ブレイク 限界突破だ!!」

硬化した切島を尾白が尻尾で殴ることで互いに個性強化を高める特訓。

「はい、尾白!!」

「おおおーおー!!」

ようはただの叩き合いなので一見地味だが、それでも切島は硬化の強度を、尾白は尻尾の操作と練度を高めることができるので有効である。

次、上鳴電気。

大容量バッテリーと通電することで大きな電力にも耐えられる体にする特訓。

「びゃああああああああーおーおー!!?!」

上鳴の個性『帯電』は自身の体で電気を作り出す事ができない以上は容量を増やす以外に道はない。

ただ、電気に耐性があるから耐えられているが、下手したら感電死してもおかしくない感じである。

次、口田甲司。

生き物を操る声が遠くまで届くように声帯を鍛える発声の特訓。
内気な性格を治すにも効果的である。

「あああああああああー……!!」
ただ、別視点から見たら可愛いだけなのだが……ここは言わないお約束である。

次、青山優雅。

腹痛を起こしても続けてネビルレーザーを撃ち続けて体を慣らし、かつレーザーの飛距離アツプを目指す特訓。

「ふんっ！ ふんっ！………（ゴロゴロゴロ）ううっ!」
近くに仮設トイレが置いてあるのがせめてもの救いだが、とてつもないモノが来たら大惨事になることは請け合いである。

次、常闇踏陰。

洞窟の中の暗闇で暴走する黒ダークシャドウ影を制御する特訓。

「あああああつ!? ダークシャドーーー!?!」

………中では一体どんなケンカ、もとい争いが起きているのか分からないが、普段冷静な彼が悲鳴を上げていることから相当のモノなのだろう……。

次、麗日お茶子。

無重力でピクシーボブが操作する土の上を回転し続ける事によって三半規管の鍛錬と酔いの軽減、また限界重量を増やす特訓。

「うううう、うう、うーーー!!」

回転ボールの中で必死に酔いと吐き気に耐える彼女の姿はもう決して麗らかではないだろう。

もし、もしもだがボールの中で出してしまったらもう乙女として生きていけないほどのトラウマを抱えてしまうだろう。

次、飯田天哉。

脚力と持久力を高めるために走り込みの特訓。

「ふんふんふんふんふんっ!!」

これに関しては一見いつもと変わらない風に見えるだろうが、今日の訓練が終わるその時までずっと走り続けなれないといけないのだから普通に考えても何回かはバテテしまいかもしれない。

ただ、そんな失態は彼の性格上隠すだろうからデスレースが続くのだろう……。

次、蛙吹梅雨。

全身の筋肉と長い舌を鍛える特訓。

「(ケロ、ケロ、ケロ……意外にきついわね)」

何度も崖を舌を使ってさらには全身を使ってよじ登っていく訓練は地味ではあるがハードな訓練である。

山頂に登り切ったらまた地上へと逆下りをしていくので頭に血が昇らないか心配だ。

次、砂藤力道。

個性の発動に必要な甘いものを食べながら筋トレをしてパワーアップを図る特訓。

「はぐはぐはぐはぐっ!! (あ、甘すぎい……)」

延々とお徳用のケーキを食べる姿はスイーツ好きにとつては羨ましいだろうが、個性柄将来的には免れることができないであろう糖尿病が心配になってくる光景である。

次、八百万百。

砂藤と同じく食べ続けながら個性を発動して物を作り出し創造物の拡大、創造時間の短縮を図る特訓。

「うむうむっ……」

こちらに関しては砂藤ほど糖尿病に関して心配はないだろう。

すぐに創造物に変換されていくのだから。

ただ、やはり見えていて胸やけを起こしそうな光景である。

次、耳郎響香。

耳のピンジャックを壁に叩きつける事によって音質を高める特訓。

「おらああああっ!!」

体の一部でもあるのだから壁に全力で叩きつけるのは相当の負荷を負うだろう。痛

そうである。

次、芦戸三奈。

手から断続的に酸を出して壁を溶かし皮膚の耐久度を上げる特訓。

「うううううううっ!!」

常に手が酸に晒されるのだから耐性があるとはいえとてつもない激痛を伴う事だろう。

さらには女子で一人だけ赤点なのだから居残りで相澤の授業を受けることになるのだからヤバイ。

次、峰田実。

頭のもぎもぎをもぎつてももぎつても血が出ないように頭皮を強くする特訓。

「うっ、ううっ、うううっ、うううっ!!?」

見た目以上に血が噴出しているために貧血で倒れないか心配になってくる光景である。

もぎった数はそこら中に転がっていて、さらには血が付着しているために実に生々しい……。

次、葉隠透&障子目蔵。

気配を消す葉隠を障子が複製腕を素早く同時に変化させて探すことで互いの個性を強化する特訓。

ただこれに関しては少し、いやかなり特訓（？）と思わざるを得ない。

障子は複製腕の特訓になるだろうが、葉隠はただひたすらかくれんぼをしているだけののだから。

まあ、特訓なのだろう……。

とどころころで悲鳴や叫びが轟いてくる中で平然と相澤がB組に近づいてくる。

メンタルが強いと言わざるを得ない。

ブラドが今回の特訓の説明を相澤とともに話していき、ワイルドワイルドプッシーキヤッツの面々も登場して説明も交えていく。

だが、ふとB組の拳藤が指を折りながら数えていた。

「あの……相澤先生」

「なんだ……？」

「その、数えてみたんですけど一人だけいないような……？」

「ああ、それならすぐに分かる……」

「それって……」

拳藤が疑問の言葉をかけようとした瞬間だった。

『ズウーーン……』という巨大ななにかが崩れる音がした。

それと同時に一人腕を高速回転させていたピクシーボブが、

「ねこねこねこ……まあ壊されちゃったか……」

全員はピクシーボブが見た方角を見る。

そこには今まで気づかなかったが巨大な、それは10メートルはあるであろう岩の巨人が立っており、そこに出久が『脚力強化』で一気に近づいて腕だけを猫の巨大な腕に変化させて、さらには変化で爪の大きさも変化させて巨人を切り裂いたり……。

また炎術の個性を変化させて掌から炎の所謂レーザービームを放ち大穴を開けたり……。

また『叫ぶ事による衝撃波』の個性を変化させて口から衝撃波を放つように見せかけ

て衝撃の塊をいくつも刻んで放つという息継ぎの分刻みとかなりの神経を使う技を使ったり……。

最終的には『身体強化・怪力』と『ワン・フォー・オール』を合わせて使用し、10メートルはある巨人の腕を掴んで、

「はあああああああー！！！！」

気合の叫びとともに地面にたたきつけて最後に、

「SMASH!!」

という叫びとともに腕を振るって巨人に大穴を開けている光景があった。

B組はそんな光景を見せられて、

「[[[[[す]っ……]]]]」

と、呟いたとか……。

だが、よく見れば出久は消耗からフラフラになっていて、しかし、

「……っ、次、お願いしまーす！」

と叫んできていた。

「……と、まあ、あんな感じで一人だけ個性を複数も持つてるから余計ハードにならざるを得ないんだよな」

呆れ声で相澤がそう締めくくる。

まだまだ訓練は一週間もある。
B組も呆けている暇はないぞう！

NO. 073 強化訓練後の風景

——PM4:00……。

この時間までずっと強化訓練をやっていた一同は疲れに疲れ果てていた。

これでもまだまだ一日が終わったただけだというのだから眩暈がしそうな感じである。

だが、そんな時でもプツシーキャッツの面々は容赦しない。

「さあ昨日に言ったよね!? 世話焼くのは今日だけってね!」

「己で食う飯くらい己で作れ! カレー!!」

疲れ果てている一同の前で調理前のカレーに使う具材が大量に置かれたテーブルで叫んでいた。

それを聞いて人の三大欲求には逆らえずにお腹を空腹で鳴らすものが沢山いる。

だが、まだ声高々に返事を返せるほどに回復などしてない。

よって一同はなんとか一言。

「」「イェッサー……」「」

その返事はまさに死に兵も同然のようだった。

「アハハハハ！ 全員全身ぶつちぶち！ だからつて雑なネコマンマは作っちゃだめだからね？ そうでもしないと本物の猫の緑谷も食べられないぞー！」

ラグドールのその一言によって数名がピクリと反応するが、敢えて無視を決め込むラグドールとピクシーボブ。

青春しているねー、ともう年齢的に少しだけ手遅れなことを思っていた。

「ふむ……確かにそうだな。災害時や避難先でヴィランの破壊行動によって行き場を失った人たちの心とお腹を満たすのも救助の一環……さすが雄英、無駄がない！ みんな！ 世界一旨いカレーを作ろうじゃないか!!」

飯田のまるで説明書みたいな言い分に一同も「おう……」と拳を何とか上げていた。相澤はそんな飯田を見て心の中で一言。

「(飯田、便利……)」

それから始まるみんなで楽しいキャンプタイム。

お米を炊くための飯盒を用意してレンガを積んで火を起こす。

さらには具材をカットしていくなど……。

一部始終を見ていくと、

「轟ー！ 火ちようだいー！」

「デクちゃん、火を起こしてもらってもいいかな？」

と、炎が個性として使える二人がおもに駆り出されていた。

他にも八百万がチャツカマンを創造するなどして火に困ることなどはなかった。

ただ、爆豪は爆破の調整がうまくいかずにもろとも爆破させてしまい拗ねてしまっていたが……。

代わりに具材を切る担当に落ち着いていたのは才能マンゆえだったりした。

そんな爆豪の隣で出久も一緒にじやがいもを切っていた。

「……おい、デク。てめえ確か料理できたっけか？ 妙に手際がいいが……」

「うん。お母さんに『せっかく女の子になったんだからいつでも料理ができるように！』って中学三年の時の間に色々と仕込まれたんだ……」

出久は「最初は何度も指を切ったりして大変だったな」と当時の事を思い出しているのか呟いている。

爆豪はそんな光景を横から見ながらも様になっている出久の姿に何かしらの感情を覚えたが、やはりその気持ちが高んなのかに気づくのは至らなかつたために「そうか……」と胸の鼓動を気にせずに具材を捌いていた。

そんな鈍感な爆豪とは裏腹に、出久の姿を見て胸ときめかせる者が数名……。

「ケロ。出久ちゃん……ただでさえあざといのに料理まで出来るだなんて……将来いい

奥さんになりそうね」

「そうだよね、梅雨ちゃん！」

「緑谷の料理……食べてみてーな」

「いや、これから食えるだろ……」

「その通りだね☆」

と、色々と言われていたり。

そして始まる試食会。

各々で作られたカレーにお腹も空腹の限界に達していた一同（一部例外）は思いつきりがつついていた。

所々で普通なら微妙と言われるだろうが現状も相まって美味しい！という声が何度も聞こえる。

その中で異様にながつく八百万。

強化訓練であれだけ糖分を摂取していたのだけれど、その分をすべて創造品に変換していたために意外にお腹に入る入る。

そんな光景を八百万の説明もあつてか瀬呂が余計な一言を言い放つ。

「う〇〇みてー」

「……………」

八百万、思わず轟沈。

「謝れー!!」

「すみません!!」

哀れ瀬呂は耳郎にしばかれた。

そんなわいわい楽しい食事会。

だけど出久は一人食事をしないで森の中に入っていく冼汰の姿を目撃する。

それで急いで一人分のカレーをお皿に盛って、

「ごめんみんな。ちよつと出てくるね」

と、言つて冼汰の後を追つていった。

「……………」

みんなは食事に夢中だったために「分かったー」の一言で流していたが、爆豪だけは無言で出久の事を目で追つていた……。

冼汰はいつもの秘密基地に来て座つて遠くを眺めていた。

この場所は一人だけを除いて誰にも知られていないホームだ。

たとえマンダレイに心を許したとはいえ、ここだけはまだ教えていないのだから筋金入りだろう。

そしてとある期待をしていた。

もしかしたら後を追って着いてきてくれるかもしれないという事を……。

「……あ、洗汰君。やっぱりここにいたんだね」

「出久お姉ちゃん！」

しかして思い人は来てくれた。

それだけで洗汰は気持ちがあつくと楽になる思いであつた。

あちらでヒーローになりたい連中だらけで多少は出久のおかげで和らいだも

の、ヒーロー嫌いはそう簡単にはぬぐい切れないものなのだ。

「はい。カレー持ってきたから食べて。お腹、空いてるでしょ？」

「……うん」

「だけど、やっぱりまだあの空気はダメ……？」

カレーを食べ始める洗汰にそう話しかける出久。

洗汰は少し間を置いて「うん……」と頷く。

そんな洗汰に対して出久も「そっか……」とそれ以上は追及しなかつた。

「でも……」

「でも……？」

「出久お姉ちゃんだけはなぜか見ていてもイライラしないんだ……まだ物心つく前の幼かった頃を感じたお父さんお母さんみたいな安心感があるんだ」

今でも十分幼いけどね……と出久は心の中で思った。

空気は一応読めるのである。

まだ5歳なのにもうこんなに達観してしまつて……将来苦勞しそうだねと思う。

それが自身も原因の一端を担っていると分かつていない出久も出久だが……。

「……俺、出久お姉ちゃんと関わることでできてよかつたと思う……まだヒーローに対しては苦手な感情が上回つちゃうけど、それでも俺もお父さんやお母さんのように立派な人になりたいって最近思い始めて来たんだ……」

「冼汰君はやつぱりどこか少し大人びているよね……普通なら5歳でそこまで深く考えられないと思う。少なくとも僕はそこまで考えてなかつたからね」

考えられる余裕もなかつたしね……とは口には出さない。

当手を振り返るとよく性格が捻くれなかつたと当時の自分を褒めてやりたいほどだ、と。

「出久お姉ちゃんの当時つてやつぱり……無個性だったから……そういう事なのか？」

「……やつぱり冼汰君は敏い子だね。うん、色々ショックが酷かつたからね当時は……」

と、昔の話をしそうになった時に、出久の猫の耳がわずかな音を感じて、そして嗅覚で誰の匂いかもすぐにわかったために、

「かつちゃん……う？　そこにいるの？」

「ツ……」

すぐにバレてしまったためにバツの悪そうな顔をする爆豪。

あの時に出久の後を追いかけたのだ。

そして洗汰と仲良さげに話をしている中で、洗汰が出久が無個性だったことを知っていることに驚いてつい体を震わせてしまったのだ。

「わりいな、デク……後をついてきちまって……」

「ううん、いいよ。でも、この場所は洗汰君の秘密基地だから他の誰にも教えないでね？」

「おう……」

そんな、出久と爆豪の会話を洗汰は無言で聞いていた。

そして出久の表情もしつかりと見ていたためにその変化にもすぐに気づけた。

爆豪が現れた途端に先ほどまで自身に見せていた表情とは全く違う、まるで、そう……安心しきったような表情を浮かべる出久に洗汰はこんな表情もするんだ……という気持ちより先に嫉妬心が表に出てきていた。

「おい、お前……」

「……あん？」

「お前は出久お姉ちゃんのなんなんだ？ それに『デク』ってなんなんだよ？ あの浮かぶ女も言っていたけどなんかお前の言うあだ名にはなんか含みのあるような感じがした……」

「洗汰君、それはね……」

「出久お姉ちゃんは今は黙ってて。考えたくないけど出久お姉ちゃんは昔は無個性だった。そして『デク』ってあだ名……そこから出てくる答えは『木偶の棒』から取ったんじゃないかって……」

「ッ……！」

それで爆豪の表情はわずかに歪む。

核心を突かれたようで過去の自身を殴ってやりたいほどには定着してしまった出久の蔑称。

「無言ってことはそうなんだ……？ お前、出久お姉ちゃんから離れる!!」

「あ、!? なんてでめえに指図されなきゃいけないんだよ!!」

「こ、洗汰君落ちていて……今はもう仲は改善出来るから……ッ!!」

「それでも、出久お姉ちゃんはそれできつといじめられてきたんだろ!」

「それは……」

出久も本当のことな為に口を噤んでしまう。

「ここから、出てけ!!」

ついには爆豪は洗汰によって秘密基地から追いやられてしまった。

そしてしばらくして洗汰も「ごめん、出久お姉ちゃん……でも、俺も我慢できなかった……ごめん……」と言って出久より先に施設へと帰ってしまった。

一人取り残されてしまった出久は空を見上げながら、

「どうして、こんな事になっちゃったんだろう……」

と、己の不手際もあるゆえに途方に暮れるのであった。

こうして二日目の夜は更けていく……。

それぞれの感情や思いがぶつかる中で、別の場所ではここにははいけない連中が集まりだしていた。

「——今回はあくまで狼煙だ。虚ろに塗れた英雄たちが地に堕ちる。その輝かしい未来の為のな……そして最重要標的は……『猫』だ」

茶毘と呼ばれる男がその言葉を発した。

NO. 074 出久と爆豪の悩み

「ああー……早くデクちゃんに会いたいなあ……」

続々とヴィランが集合してきている中でトガヒミコが恍惚とした笑みを浮かべながら両手を頬に持つてきていた。

茶毘はそんなトガの眩きになど興味はなく……いや、捕獲対象なのであるから多少の興味は持つ。

あの死柄木とバツクに控えている通称「先生」という奴が執拗に狙っているのだからどんな奴なのかも少しでも情報が欲しいところが茶毘の本音であった。

「おい、トガ……」

「はい？　なんででしょうか茶毘さん？」

「その捕獲対象の緑谷出久って生徒はどんな奴なんだ……？」

「デクちゃんですかー……」

口には指を持っていき少し思案顔になるトガ。

少ししてニカッと笑みを浮かべたらと思つたら、

「私の憧れの人でしょうか？ とつても同じ存在になりたいですし、最後にはパーッと最高の友達になりたいです。あ、いや……もう友達だったよね！」

何かを思い出したのかまた笑顔を浮かべるトガ。

そんなトガに対して茶毘は「話になんねえ……」と早々に話を切り上げた。

もうトガはトリップしているのか茶毘の声などは聞かずにイヤンイヤンと体を振らせていた。

「まあ、どんな奴かは雄英体育祭で多少は知つてからなんとかやるしかないか」

一人、また一人集まってくるヴィラン共を見据えながら決行の時を待った。

出久が宿舎に帰ってくる時にはもうすでに片づけは終わっていたらしく中々帰つてこなかった出久の事を心配してか飯田とお茶子と轟の三名が出久に近寄ってきた。

「デクちゃん、遅かったね？」

「うん……」

出久の出でいく前より沈んでいる表情を見て、

「どうしたんだい緑谷君？ どこか浮かない顔をしているが……」

「ああ。さつき爆豪がお前より先に帰ってきたが……あいつとなにかあったのか……？」

「そういえば爆豪君もどこか苦虫を噛みつぶしたような顔をしていたよね？ デクちゃん、相談できることだったら話してくれないかな？ 話し相手になるよ」

「ああ」

「うむ」

そんな三人の言葉にありがたさを感じた出久は、少ししてポツリポツリと先ほどの出来事を三人に話していく。

洗汰との再会でもにも久しぶりに親睦を深めていたところに、出久の後を追ってきた爆豪が姿を現して、洗汰の子供の痲癩みたいなものが出たまではまだ大丈夫だった。

だが、爆豪の出久のあだ名である『デク』という呼び方が普通の子供よりも聡明な洗汰があつという間にそのあだ名は蔑称から来ている事を看破して、慕っている出久から遠ざけるように爆豪を追い返してしまった……。

そんな感じだったことを三人に伝えて、聞いた三人はそれで悩む仕草をしながらも、

「……もしかして、私もデクちゃんって呼んでるから目の敵にされちゃっているのかなあ……?」

お茶子が不安そうに表情を暗くする。

お茶子の言う『デクちゃん』は『頑張れって感じのデク』なのだが、まだ子供の洗汰には判断ができないかもしれないと思う事だろう。

「ううん……洗汰君は麗日さんの方は別に大丈夫みたい」

「そっか……それなら安心、なのかな……?」

「それより問題なのは爆豪君の方だな。もうみんなも分かっていると思うが緑谷君と爆豪君はすでに仲直りが出来ているから、だが蔑称の事を穿り返されてしまつては反論もできないだろうしな……緑谷君との仲が悪化しないか心配だな」

「ああ。爆豪の奴はあれで意外にみみっち……いや、繊細なところがあるからな……切島から聞いたが例のトラウマが出ていないか心配だな」

ベストジーニストと爆豪のやり取りなどは知らないだろうが、それでも出久が傷つく姿を見てしまったら最後、周りが見えなくなるほどのトラウマを抱えている爆豪。

どこかで暴発しないか不安である。

「それでなんだけど、飯田君に轟君。もしかつちちゃんと会つたらそれとなくフォローしてもらつてもいいかな? この通り僕は女子だからもう寝室に行つちやつただろう

かつちゃんとは今日はもう会えないと思うし……」

どこか悔しそうにそういう出久。

時と場所が許すならますますぐにでも爆豪に会いに行きたい出久。

下手したらこの強化合宿にも不祥事が起こるかもしれないから早めの仲直りと言つてもいいか分からないが、普通に話ができるくらいにはしておきたい。

「うむ。他ならぬ緑谷君の頼みだ。任せておいてくれたまえ」

「ああ。爆豪に会ったらそれとなく言っておく。だから緑谷もあまり深く考え込むじゃねえぞ？」

「うん……ありがとう二人とも。お願いね」

そんな感じで二人とは別れて、出久とお茶子も寝室へと向かって歩いている中、

「あのね、デクちゃん……蔑称の件はまあ爆豪君の自業自得かもしれないけど、でももう爆豪君は昔の行いまではやり直せないけど、デクちゃんとの仲は改善出来るんだから……きつと大丈夫だよ！」

両手をグツと握つてそう言い切るお茶子に出久も「うん」と頷きをしていた。

そうだが、もうかつちゃんとは仲直りは出来たんだから、きつと大丈夫……そうだよね？　かつちゃん……。

出久はそう思いながらも女子部屋に到着したら補習組の芦戸以外の女子達とトラン

プなどをして明日に響かない程度に就寝したのであった。

——強化合宿、三日目。

そこでは相変わらず先日にかけて個性を伸ばす訓練が行われていた。

特に補習組は睡眠時間を削られていたために実にダルそうであった。

そこはそこ、相澤が布を使って無理やり叩き起こすという事をやっていた。うーん……実にスパルタ。

そんな中で土巨人と戦っている出久は早朝の時に飯田と轟にどうだったか、と話を聞いてみたが、爆豪は拗ねたような顔はしていたがそれでも大人しかったという。

爆豪の過去の己の行いなだから一人で向き合いたい感じだったのだろう。

最終的には、

「変な氣い使うんじゃないねー！　ぶっ殺すぞ!!」

との事。

言葉は悪いが強がりと言えるのであればまだ余裕があるのだろうかという感じで一応

は静観する事にしたという。

出久はそんな爆豪の状況に、「かつちゃんらしいね」と一応の安心をしていた。

それとは別に出久は今回はなぜオールマイトが来ていないのか？とフラツとやってきて相澤に聞いてみた。

返ってきた内容としてはやはりヴィランの目的の一つはオールマイトの抹殺だからだろう。

あと、他にも本当ならもしヴィランが出現してきたら出久も狙われるかもしれない……という懸念があったのでオールマイトと一緒にしておくという意見もあったのだが、それでは過保護すぎるという意見もあり通常通りに強化合宿に参加させたという学校側の葛藤による葛藤もあったという経緯があったが、素直に出久にその事を教えるほど鈍つてはいない相澤はそれとなくはぐらかした。

それより、ピクシーボブが訓練している一同に耳よりの情報を伝える。

「ねこねこねこ。それより訓練ばつかじやストレス溜まつちやうでしょ？ だから今夜はクラス対抗の肝試しをするからそのつもりでいてね。これぞまさにアメとムチつてね！」

そう言つて笑うピクシーボブ。

それならば頑張らねば……という気持ちで一同はよりいっそうの訓練に励んでいっ

た。

そんな一方で、爆豪も訓練中にいろんな雑念が入ってきて仕方がないと思っていたが考えねばならない事だと思っていた。

それは……そろそろ出久の事を『デク』とは言わずに名前で呼んでやるかという……。洗汰の言葉が意外にというかかなり爆豪のトラウマを抉っていたのでこんな考えになっていた。

なまじ出久が今まで『デク』と呼ばれてもなんでもない感じだったから一種の甘えが爆豪にもあったのだろうという心境である。

しかし、急に呼び方を変えたら混乱は必須だろうから羞恥心も相まっていつ言い出すかで頭を悩ませる爆豪であった。

果たしてこの爆豪の想いが成就する時は来るのであろうか……？

NO. 075 肝試しと開闢行動隊

三日目の強化合宿。

それもなんとか乗り越えて一同は一息ついていた。

本日の全員で作る料理は肉じゃがである。

そんな中で爆豪は無言で野菜を捌いている。

なにやら昨日から近寄りが見たい雰囲気であった爆豪に、空気を讀んでか話しかける人は少なかった。

事情を知っている麗日・飯田・轟も機を見計らっているがどうにもうまくいかない。

「そ、その……かつちゃん」

だが出久だけは勇気を振り絞って率先して爆豪の隣にまな板を持って行って野菜を切り出していた。

「……………デク、なんだ？」

「その、昨日の件なんだけど……………」

「……………」

そう切り出したはいいモノの爆豪はさらに鋭い表情になって野菜を切る速度を上げだした。

恐らくさつきと野菜を全部捌いてこの場から立ち去ろうとしているのだろう。

「聞いて、かつちゃん！」

それを出久も感じてか大声を張り上げる。

そしてそれを見ていた事情を知っている三人は固唾を飲んで見守っていた。

「ぼ、僕はかつちゃんの事……嫌ってないから！ 洗汰君との件もきつとなんとかするから……だから！」

「……………分かったよ」

消え入りそうな声で爆豪はそう答えて野菜を切り終えたのか調理班に渡してその場を立ち去って行った。

そんな爆豪を出久はただ見送ることしかできなかつたが。

「デクちゃん！ その、なんと言えればいいか分からないけど、爆豪君とも話ができてよかったね。爆豪君もなんとか返事はしてくれてたし……」

「うん……」

「元氣を出したまえ。いつもの元氣がいい緑谷君の方がいいと俺は思うぞ」

お茶子と飯田がそう言って出久を慰めていた。

一方で轟は事情を知らない面々に対して説明をしていた。

「おい轟。緑谷と爆豪、なんか喧嘩でもしたのか……？」

「喧嘩っていうには微妙だけどな……まあ、時間が解決してくれるだろうな……」

「まあ……それは大変ですわ。わたくしも後で緑谷さんに事情を聞いてみますわ」

「頼む」

そう言って轟も爆豪が歩いて行った方へと視線を向けて、

「(爆豪……あんまり緑谷に心配をかけんなよ……)」

と、思っていた。

まあ、そんないざこざがあつたが食事時には爆豪もいつの間にか帰ってきていたので一同はなんとか安心はしていたのだが、他の問題もあつた。

「冴汰君……またいない。あそこにいるのかな……？」

食事時に冴汰の姿がなかったために出久は心配をしていた。

少し時間が経過して、食事も終わり、後片付けも終わったために、一同は広場に集合

していた。

理由はというと……、

「お腹も膨れたし、洗い物も終わった。後は……」

「肝を試す時間だー!!」

芦戸が嬉しそうにそう叫んだ。

少し時間を遡ってB組の物間だけが食事後にブラドに連れてかれる光景を見て不思議に思ってもいたが、今はそんなことも忘れてはしやぎにはしやぐ。

だが、そこは雄英……そんなに甘くはなかつた。

「あー……その前に大変心苦しいのだが、補習連中は……今から俺と補習授業だ」

「ウソだろ!?!」

それはもう目が飛び出るのではないかと思う程に芦戸以下補習組は叫び声を上げて、だが相澤に問答無用で縛られて連行されていった……。

ただひたすらに「堪忍してくれ試させてくれえええ……」という無念の叫びが響いたのであった。

こうして芦戸、切島、瀬呂、上鳴、砂藤の五名は退場していった。

そんな光景を見て残念に思う残りのみんなも五人の分も楽しもうと肝試しの説明を受ける。

ただ、普段賑やかな面子が抜けたために空気が神妙になっ
ているのには目を瞋るしか
ない。

常闇なんかは何度も「闇の狂宴……」と呟いている。

プツシーキャッツの面々から少し汚い説明を終えて、そして行われる班分けのクジ引
き。

結果は……、

一番・常闇踏陰&障子目蔵

二番・飯田天哉&轟焦凍

三番・耳郎響香&葉隠透

四番・八百万百&青山優雅

五番・蛙吹梅雨&麗日お茶子

六番・口田甲司&尾白猿夫

七番・緑谷出久&爆豪勝己

八番・峰田実

「なんでおいらだけ一人なんだよ……!?」

あゝ無常。峰田は渾身の男泣きをして地面に膝をつき何度も地面を叩いていた。

「クジ引きだから……誰かこうなる運命だから……」

「同情するなら女子をくれッ!!」

「ええー……」

尾白の慰めも、すでに血涙になっていた峰田には通用しなかった。

そんな一場面とは打って変わって、

「飯田とか……」

「なにかと縁があるようだね、轟君」

「ああ……。まあそれはいいんだが、不安って言えば不安な組み合わせもあるもんなんだな……」

「そのようだね」

飯田と轟はとある方を見る。

そこではバツが悪そうな顔をしている爆豪と、おどおどしていて猫耳と尻尾も垂れ下がっている出久の姿があった。

飯田と轟の胸中ではできればともに出久と一緒に組みたいという気持ちも少なからずあったが、それでも今現在の出久と爆豪の状況を鑑みるに良い事なのかもしれない。何も言わずに引き下がっている。

「あ、あの……かつちゃん……その、一緒になれて、嬉しいな……」
「ああ……」

依然厳しい顔つきをしていた爆豪であったが、胸中では反対に「いよっしやー!」と叫びを上げていた。

素直になれないお年頃なのである。

そしてそんな爆豪の胸中などお見通しとばかりにお茶子が少し怖い顔をして爆豪の肩を掴む。

「爆豪君……」

「ん?……うおっ!?!」

「デクちゃんに、なにかあったら、許さないからね……?」

「お、おう……」

さすがの爆豪も素直に返事をした。

いつも以上に威圧感のあるお茶子の笑みには逆らえなかったのである。
「ケロ。お茶子ちゃんも素直じゃないわね……」

蛙吹は一人呆れていたりした。

そんな組み合わせの中で肝試しが開始されて一組、また一組と森の中に入っていく。B組のドツキリがかなり効いているのかいくつもの悲鳴が森の奥から響いてくる。

そして蛙吹とお茶子の組が入っていった後の事だった。

異変は静かに訪れていた。

なにかが焼けて焦げてるような臭いがすると思ったら森の奥から黒い煙が立ち上っているのではないか。

そしてその異変は主に脅かす方のB組と中に入っていたA組の生徒達が一番被害にあっていた。

有毒の煙を吸って倒れる複数の生徒達……。

混乱する現場……。

そして、静かに狼煙を上げたヴァイラン達。

「さあ、始まりだ……地に墮とせ。ヴァイラン連合……『開闢行動隊』!!」

茶毘は次々と森の木を青い炎の個性で燃やしながらもそう宣言した。

そしてまだ出発していない組とプツシーキャッツの虎とマンダレイは、何かの力で引き寄せられてしまい、殴打を受けて気絶してしまったピクシーボブとそれを引き起こした人物を見て表情を引き攣らせる。

「なんで……万全を期した筈なんだろう!?　なんで……なんでヴィランがいるんだよお!!?」

峰田の叫びが全員の思いを代弁していた。

そして即座に出久の脳内では冼汰にも危機が迫っているかもしれない!という思いがあった。

冼汰の秘密基地の方角へと振り向いて、

「……………!! (冼汰君!!)」

こうして楽しい行事になるはずだった肝試しは最悪の戦場へと変貌してしまったのであった……。

NO. 076 マスキュラーの襲撃

——ヴィランが攻めてきた一方で、相澤と補習組の面々は宿泊施設まで戻って補習授業を開始しようとしていた。

物間とA組とのどこか気が抜けたやり取りが交わされている中で、それは起こった。突如としてマンダレイからの緊急テレパスが全員に響き渡り、ヴィランが攻め込んできたことを知る一同。

いち早く相澤はブラドに生徒達を任せて、一人颯爽と駆けていく。

そして外に出て目に映りこんできたのは森が燃えていて黒煙が上がっている光景……。

「マズいな……」

とてつもない緊急事態だと悟ったと思った次の瞬間に、

「心配が先に立ったか、イレイザーヘッド」

「ッ!? ブラド——!!」

突然の茶毘の出現に個性を発動しようとして、だがそのまま相澤は茶毘の放つ炎に包まれてしまった……。

広場ではヴィラン連合・開闢行動隊の一員である二名のヴィランが出久達と対峙していた。

「ご機嫌よろしゅう雄英高校!! 我らヴィラン連合開闢行動隊!!」

トカゲのような肌を持つ男がそう叫んだ。

それにまだ肝試しに出発していなかった面々と虎とマンダレイは顔を青くさせながら、

「ヴィラン連合がなんでここに!?!」

「そうだよ! ここは情報封鎖されていたはずだろ!?!」

そう叫んでも現実は待ってくれない。

今もなおヴィラン達は今か今かと生徒たちの命を狙っているのだから……。

そんな中で、布に包まれた棒のようなものを持つヴィラン・通称マグネが気絶しているピクシーボブにそれを『ゴリツ』と頭に着けながら、

「この子、どうしちやおうかしら？ どう思う？ 潰してしまおうかしら？」

「させぬわ!!」

虎が憤怒の表情で前に出ようとすする。

だが、先にトカゲの肌を持つ男が前に出る。

「まあ待て、マグ姉。虎、てめえも落ち着け。すべての生殺与奪は『ステイン』の仰る主張に沿うか否かだ」

「ッ!？」

出久はそれを聞いて神経を尖らせる。

「ステイン！ あてられた人か！」

「お……………？ お前は……………」

男は出久を見るとニヤリと笑みを浮かべる。

だが、それだけでもう他に気を回した。

それに出一は一瞬だがその不可解な視線に悩むが、男は続ける。

「……………今回の目標の一つはステインの終焉を招いた眼鏡の……………確か飯田天哉って奴の抹殺が目的だ。……………つと、申し遅れた。俺の名は『スピナー』。ステインの遺志を継ぐもの！」

そう言って大量のナイフや刃物系がごった煮で巻き付けられている凶悪な剣を構え

る。

そんなスピナーという男に対して、虎はピクシーボブの最近の幸せに向けた思いを語りながら、傷つけられたことに憤り、

「平気でヘラヘラと笑ってるんじゃないよ!!」

「ヒーローが人並みの幸せを夢見るか!!」

「虎! 『指示』は出した! ほかの生徒たちの安否はラグドールに任せよう! 私たちはここで奴らを抑えよう!」

「了解した!」

そしてテレパスが繋がっている全員に送信される。

『生徒のみんなは交戦しないでどうかして宿泊施設まで逃げて! 特に飯田君! 君は要殺害リストに入ってるみたいだからなんとしてでも逃げて!!』

それをテレパスで聞いていた飯田は、

「まさか……ヴィランに命を狙われるようになるとは……」

「保須事件関係か……とにかく帰るぞ、飯田」

「ああ……」

B組の生徒の一人を抱える轟がそう飯田に言い聞かせる。

「飯田もどこか落ち込んでいる素振りをしているが、今はとにかく避難が第一だと考え、行動を開始した。」

場所は広場に戻り、

「とにかく合宿所まで避難をしよう！」

「そうだな」

「……ッ！（コクリ）」

尾白の言葉に口田と峰田も賛成して帰ろうとするが、

「尾白君……先に行っていて」

「アク……？」

爆豪が出久の異変にいち早く気づく。

そして出久はマンダレイに向けて叫ぶ。

「マンダレイ！ 僕、知っています!!」

「ッ！」

……………洗汰の秘密基地のある場所で洗汰は今まさに危機に陥っていた。

「見晴らしのいいところを探していたんだが、なあお前……資料になかった顔だな」

「う、うあ……」

洗汰の前の前に全身フードの男が立っていた。

その男もヴィラン連合の一人で間違いはないだろう。

だが、洗汰にはそんな事など分からない。

ただ、今己の身に危険が訪れようとしていると肌が感じて鳥肌が立っているとだけ

……………。

男は洗汰に向けて話す。

「ところでお前、いいセンスの帽子を被ってるじゃないか？ 俺のこのダセえマスクと

交換してくれないか？」

一步、また一步と洗汰へと近づく男。

洗汰も恐怖からか後ずさりを何度もする。

そしてとうとう恐怖に負けてしまい男に背を向けて走り出してしまふ。

だが、男に背中を見せるのは命取りである。

男は一瞬で洗汰の前へと壁を伝って跳ねる。

その風圧の影響で男の顔部分のフードが捲り上がる。

そして冼汰は見てしまった。

その男の顔を……。

その男は冼汰の父と母を殺したヴィラン……そしてその顔にウォーターホースから受けた傷を持つ……マスキュラーというヴィランだったのだ。

とうとう冼汰は泣き出してしまい、しかしマスキュラーもそんな冼汰を待つてくれるわけもなく、

「一発やらせろや!!」

「パパ……! ママ……! 出久お姉ちゃん!!」

冼汰の祈りの言葉は果たして、届くのであった。

マスキュラーの拳が冼汰に振り下ろされる直前に、

「にゃあああああ……!!!」

「うおっ!」

猫のような叫び声とともにマスキュラーは衝撃波を食らって壁へと吹き飛ばされた。

「冼汰君!! 無事!」

「い、出久お姉ちゃん!」

「おらあ!!」

「ぐおっ?!」

出久の出現と同時に爆豪も姿を現して、マスキュラーに向けて爆破を放つてさらに壁にめり込ませる。

さすがのマスキュラーも間を置かない攻撃に一瞬だが意識を飛ばす。

「爆破のやつも……なんで」

「なんでだあ? そんなの当たり前前だろおが!!」

「うん。冴汰君、助けに来たよ!」

出久と爆豪の二人がマスキュラーから冴汰を守るように立っていた。

「で、でも……俺、爆破の兄ちゃんにはひどい事……」

「そんな事、今はどうだっていいんだよ! デクがてめえを助けるつてんなら俺も助けてやるからよ!」

凶悪な笑みを浮かべながらもさすがヒーロー科。

今は爆豪も個人的な感情より救出を優先したのであった。

だが、少しして岩が崩れる音がしだしてマスキュラーが岩壁から這い出てきた。

「いたた……たつく、いきなりやってくれたなガキども……」

そう言いながらもマスキュラーの顔には笑みが浮かんでいた。

ただ子供を殺すよりは楽しめそうだという自分本位な考え方によって。

「ッ！」

その笑みから狂気的なものを感じ、出久と爆豪は即座に構えを取る。

構えをしながらも、爆豪は出久へと視線をそらして、

「おいデク……どうにかここから脱出する手段を試みるぞ！……どうやらあの野郎はそう簡単に逃がしてくれなさそうだしな……」

「分かつてるじゃねえか。いいねえそういうの……実に俺好みだわ。それに……」

マスキュラーは出久へと一瞬視線を向けて、スピナーと同じような笑みを浮かべる。

そのネットツとした視線に出久はまたしてもビクツと体を身震いさせる。

「(まだまだ……また、あの嫌な視線……いや、今は構うな！)」

嫌悪感を感じながらも出久はマスキュラーと睨みあった。

爆豪もそんな奴の出久を見る視線に気づいてか、

「おい、デク……どうやらためえも奴らのターゲットに入ってるみてえだな。俺が前に出る……援護頼むぞ？」

「わかったよ、かつちゃん……」

「いいねえいいねえ……気の合う男女なことだ。まあいい。とにかくためえら……」

瞬間、マスキュラーの筋線維が目に見える形で盛り上がり上がっていき、まるで皮膚のはがれたような、でも強靱な体へと変貌していく。

「血い、見せろや!!」

三人に向かってマスキュラーは駆けてくるのであった。

NO. 077 戦闘と失うもの

洗汰を守るためにマスキュラーと戦闘を開始した出久と爆豪。

「おら、いくぜえ!!」

マスキュラーはその剛腕と筋線維増強による驚異的なスピードを生かしてまずは一番前に立っている爆豪へと腕を振るってきた。

普通に殴り掛かってくるのなら受け止めるかするもののだが、爆豪の天才的直感はすぐに最悪の光景を幻視する。

「デク! 上に飛べ!!」

「う、うん!」

爆豪は爆破を使い瞬時に空中に飛び、出久も洗汰をその手に抱きながらも脚力強化で同じように空へと跳ぶ。

次の瞬間、マスキュラーの振り下ろした拳が三人がいた場所に着弾して盛大に爆発を起こした。

地面は盛大に爆発し岩石が塵となって崖の下へと落下していく。

「ちっ! なんて威力してやがる! あんなもんを受けたらたまったもんじゃねーぞ

！」

思わず悪態を吐く爆豪。

出久も同意のようで激化する中で頷いていた。

「逃がさねえぞー！」

技後硬直もほんの数秒で回復させたマスキュラーは空に向かって跳ぼうと足に力を込める。

それを察した爆豪は、

「やられてばかりじゃねーぞ、筋肉だるまあ!!」

腕をマスキュラーに構えてこの二日間ばかりではあるが鍛えた個性の影響も吟味して、瞬時に汗腺を拡大させて最大火力の爆破を放つ。

サポートアイテムの籠手がないから放つ回数に制限があるが、オールマイト級にヤバい奴と判断した爆豪は切り札をすぐに切った。

爆破はマスキュラーに着弾して盛大に火柱を発生させた。

その間に久と爆豪の二人はなんとか地面へと着地する。

「かつちゃん、腕大丈夫……?」

「ああ。まだいける……」

二人は視線を火柱が上がった個所から外さずにそう会話する。

油断も慢心もできない相手。

生死がかかっているから余計に神経を尖らせる。

……洗汰はそんな爆豪と出久のやり取りを無言で聞きながらも思った。

「俺はバカだ……こんなにに出久お姉ちゃんと爆破の兄ちゃんは信賴しあっているのに、あん時……爆破の兄ちゃんの事を邪険に扱っちゃった……後で、謝らないと……」

出久にはもちろん、爆豪にも後でちゃんと謝ろうと誓った洗汰であった。

そんな思いとは別としてマスキュラーは火柱が収まった中で一切火傷もケガもせず歩いてくる。

その表情は余裕に満ちていた。

「爆破の個性か……いいもん持つてるじゃねーか。まあ少し力不足みたいだがな」

「んなバカな……！ 今の俺の最大火力だぞ!？」

「ほう……それはいい情報だ。これくらいなら俺の個性で十分防げるってことだな？」

「チツ！」

「かつちゃん、洗汰君をお願い！」

そう言つて出久が爆豪の前に出て爪を展開する。

「女……今度はおめえか。かかつてこいよ。俺は別にフェミニストじゃねえ。男女関係なく殺すときは遠慮なく殺す。それが俺の楽しみだからな」

「御託は十分です。行きます!!」

脚力強化、爪の伸縮化、爪の硬質化。

三つの個性を同時に発動してマスキュラーの周りを高速移動をして時には壁をも伝い、跳ねていきながらも鉄をも切り裂く切り裂き攻撃をマスキュラーに与えていく。

次々と筋線維による肉壁が切り裂かれていくマスキュラー。

だが多少苦悶の表情はするもののまだ余裕がある。

ある程度防御に回っていたマスキュラーだったが、一言。

「軽いな……」

「んな!?!」

高速移動もしている最中でマスキュラーはなんと出久の腕を勘で掴んでさらにはそのまま壁へと放り投げて出久を叩きつける。

「……そういえば、お前は情報によれば勝手に体も個性で治っていくんだったよな……? ちいとサンドバッグにでもなれやあ!!」

「ツツツツツ!!」

壁に叩きつけられた出久はなんとか腕を交差させて防御の体勢に入るが、マスキュラーはそんなものは関係ないといわんばかりに何度も……そう何度も出久に向けて岩壁をも破壊するほどの拳を見舞った……。

それに晒された出久はたまったものではなかったために、何度も激痛による悲鳴を上げる。

岩が邪魔をして抜け出せないから余計にひどい。

「出久お姉ちゃん!!」

「てめえ! デクから離れやがれやあ!!」

爆豪は敵わないと分かっているけど、それでも幼馴染が傷つけられる光景を容認できなかったために、そしてトラウマが顔を見せ始めてきたために必死の形相でマスキュラーに溜めでも何でもない爆破を繰り返してなんとかマスキュラーを吹き飛ばす。

「デク!!」

「う……」

そこには両腕がボロボロになって防ぎきれなかったのか血を流している出久の姿があった。

だが、それもオートヒールで少しずつであるが回復している光景を見て、一応は安堵をする爆豪。

「(そうじゃないだろ!!)」

個性で傷は治ると言う甘えが爆豪の中の自分を叱咤した。

そんなのは関係なく出久が傷つくことだけでも業腹物なのだからこれ以上出久を戦

わせることはできない、と爆豪は決断した。

すぐに洗汰のもとへと出久を運んだ爆豪。

そしてマスクュラーを睨みつけて宣言する。

「これ以上デクを傷つかせねえ！　ここであめえをぶち殺す!!」

「かつこいいなあ……。だが、力不足は否めねーぞ?」

「んなこたあ関係ねーんだよ！　てめえは今、ここで、俺にぶち倒される！　もう決定事

項なんだよ!!」

「ば、爆破の兄ちゃん……」

「ガキ。デクを頼んだぞ!」

「う、うん……!」

爆豪の覚悟の表情を察した洗汰は力強く頷いた。

「いいぜ。かかってこいよ！　俺も本気の義眼でいくぜ……ッ!」

そう言つてマスクュラーは懐からいくつもの義眼をあさり出して、今本気になれる義眼を装着する。

「ここからはお遊びはなしだ。てめえの覚悟に免じて本気を出してやるよ!」

「かかってこいやあ!!」

爆豪はそう言つて雄英体育祭で対出久に放った時のとある技の構えを取る。

遠慮など一切不要。殺す気でいかなければあの化け物には敵わない。

後先考えるより今の全力を出し切る！

その思いで爆豪はマスクュラーへと駆けていき、そして体を回転させながらも放つ。

「榴弾砲・着弾!!」
ハウザインパクト

盛大な爆風を放ちながらもマスクュラーへと突撃していく。

そんな爆豪に対してマスクュラーは一切手を加えないシンプルな手……本気でぶん殴る事をしてきた。

そして二人の攻撃は着弾したと同時に地面は盛大に爆発を引き起こす。

洗汰はそんな光景を見て、ただ一言、

「すげえ……」

と言葉を漏らした。

だが、爆風によって盛大に起きた粉塵が晴れてくる事によってどういう状況か見えてきたことよって洗汰の表情は盛大に引き攣る。

そして出久も目を覚ましたのかその光景を見てしまった。

……爆豪の榴弾砲・着弾が瞬間的な爆破だとするならば、マスクュラーの拳は幾重にも重なる筋線維による強固な壁。

それを崩せなかった以上は爆豪の攻撃は受け止められるのが現実であった。

「ッ!？」

「そんなものかよお!!」

思いつきり弾かれてしまった爆豪はもうそれは両腕が酷使によつて痺れてしまっていた。

ただでさえ昼間での個性強化による皮膚への虐め抜きが祟っていたためにもうこれ以上は腕が壊れるかもしれないところまで来てしまっていた。

それでなんとか後ろに下がろうとした爆豪であつたが、

「逃がさねえぞ!!」

マスクュラーが手刀の構えを取つて爆豪へと振り下ろしてくる。

このままでは肩から胴にかけてまで手刀で叩き切り殺されてしまうと悟つた爆豪はなんとかまだ使える限りの爆破を放つた。

だが……それは遅すぎた。

マスクュラーの手刀が爆豪の右腕の肘部分をまるで叩きつけるように直撃した……。

「あつ……」

——爆豪はどこかスローモーションのような感覚に陥る……。

—— になにかの喪失感と激痛が脳内を占める……。

—— 舞う鮮血……視線を泳がせれば……なぜか宙を舞っている己の右腕……。

—— 出久と洗汰の己の事を叫ぶ声……。

—— その声もどこか遠くから聞こえてくるような感覚……。

—— 最後に見た光景は右肘の付け根から無くなっている己の右腕……。

—— それを見届けて爆豪はそのまま気を失った……。

……それはまさに最悪の光景だった。

果たして爆豪はこのまま息絶えてしまうのか？

出久達は どうするのか……？

NO. 078 走馬燈

『出久！ おめえ本当になにもできねえな！』

「あ……？」

爆豪の意識は突然の過去の光景を見せられて覚醒した。

しかし体どころか手足すら動かせない、視界も暗い中で脳内に過去の光景だけがぼんやりと連想されていく。

『出久ってデクって読めるんだぜ？』

『かつちゃんすげー！ 字読めるの？』

『読めねーの……？』

「おい……やめろ……」

爆豪は過去のそんな自分の犯した過ちを見せられて目を逸らしそうになる。

だが過去の映像はどんどんと進んでいく。

『んで、デクってのは何もできねえ奴なんだぜ！』

『やめてよー……』

出久がそれで泣きそうな表情になっていたのに、自身ときたらそんな視線に気づくことも、気にもしなかった。

この時からすでに爆豪の出久いじりが始まっていたのだ。

『かつちゃんの“個性”、かつこいいなー。僕も早く出ないかなあ……?』

『どんな“個性”が出たって俺には敵わねえよ』

「(……………)」

まだこの時は出久の個性診断の結果が出ていない時だったから仲は良かったと思う、と爆豪は無言でその光景を見ていた。

そしてついにその時が来た。

『デクって個性がないんだって』

『ムコセーって言うんだって』

『だっせー』

同じ年代の子達がショックを受けている出久の事をバカにしていた。

そして幼少時の爆豪自身も出久の事をバカにしたような視線を送っていた。

さらにはこう思ってしまった。

《デクがいつちゃんすごくくない》

それが拍車をかけて幼少時の爆豪は出久の事を本気でバカにします。そして次第にいじめにもなりうるキツカケとなった出来事。

幼少時の爆豪が川に落ちた時だった。

普通に平気だったのに、出久はこう言った。

『大丈夫？ 立てる？』

それが無性に幼少時の爆豪のプライドを抉った。

それからというものの爆豪は出久にきつい言葉をかけるようになっていった。

何度も出久を痛めつける光景が過ぎていく。

それでも出久は何度も爆豪の後ろをついてくる。

「(当時は鬱陶しかった……でも、デクからしたら必死だったんだな……。表情を見れば分かる。こんなクソガキな俺の事を見切りもせずには憧れ続けていてくれた……。なに、俺は自分本位でそんなデクの視線にも気づこうともしなかった……)」

そんな拗れた一方的な関係が小学五年生まで続いていた時に爆豪は出久の事が少しわからなくなっていた。

無個性で迫害を受け続けていたのに、それでも学校にはしっかりと登校してきて毎日爆豪に「おはよう」と言ってくるのだ。

なんでそこまで平気でいられる……？

当時そう思っていた自分を殴ってやりたいとその映像を見ていた爆豪は思った。

「(そうだよ……。平気なわけがねえ……。ふとした拍子で折れてもおかしくなかったんだ……。なのに、俺ときたら気づこうともしなかった……。)」

そして場面は爆豪の心にトラウマを植え付ける事になる光景にやってきた。

出久がどこか古臭い神社にやってきていた。

そんな出久の事を陰から見ている爆豪は出久とその猫とのやりとりを見ていただけだったのに、いきなり巷で噂になっていたペットなどを殺す猟奇殺人犯のヴィランが出久の前に現れる。

「(やめろ……。見せるな……。)」

映像の中では爆豪は陰で隠れて恐怖から震えているだけだった。

なのに、出久はそんなヴィランに猫を守るように立ち向かっていった。

爆豪は助けることもできたのに出久が切り裂かれていく光景をただただ恐怖で見ているだけだった。

「(見せるな！ たとえ個性の影響だからってみじめな姿の俺を見せるな!!)」

だが、映像は止まらない。

ヴィランは立ち去った後には血まみれの出久の姿。

陰から出てきた爆豪はそれはもうみじめな表情をして呆然としていた。

その後、少しして助けを呼ぶ事ができたが、それでも助けられなかったという後悔がまだ少年の爆豪の胸を占める。

そしてトラウマとなって出久が傷つく光景を見れなくなった……。

「(見せるなあああああ!!!)」

絶叫するもまた映像は続いていく。

出久はフオウのおかげで助かったものの、爆豪はそれからは出久と少し距離を置くようになった。

それでも脳内では安心もしていた。

無個性なんだから出久が傷つく光景なんて見ることはないだろうと……。

そして中学二年生になった。

進路希望の時だった。

まさか出久が雄英高校を志望していただなんて思ってもなかったために、

『デエクウウ!!? なあに考えとんじや!!? 無個性のお前がヒーローになるだど!』

『そ、そうだよかつちゃん。僕も……やってみなきゃわからないだろ!』

『……そうかよ。まあ前にお前が助けそこなったあいつみたいになるのが関の山だと思
うがな』

『ッ!!』

「(なに、口走ってんだ俺……あの猫を助けた時のデクはまぎれもなくヒーローだったのに……バカかよ!? デクの表情に気づけよ!!)」

映像の中の出久の表情はとも必死だった。

捨てきれないヒーローになりたいという出久の儂い夢。

だというのに、

『諦めるデク。お前じや誰も救えねえ……それに、またあんな思いはしたくねえだろ……?』

追い打ちをかける爆豪。

「(なんでだよ! もう救っていたっていうのに……俺は目を逸らしていた……)」

そしてある意味運命の瞬間。

『何でてめえが!! っていうかなんだその姿!』

『なんでって……君が助けを求める顔をしていたから!!』

周りのヒーロー達が相性の悪い個性だと、助けが来るまで待とう、と傍観している中でまだ無個性だと思いついて入っていた出久が爆豪のもとへと無謀にも駆けてくるそんな姿。そして個性が発動して駆けてくる中で性転換していく出久。

客観的に見て分かる。

本当にあの時、体が勝手に動いていたんだ、と爆豪は感じた。

「(デク、お前は本当に……)」

そして流れていく雄英高校での生活。

個性把握テスト……。

戦闘訓練……。

放課後の宣言……。

USJでの自身の出久が脳無に傷つけられてトラウマを刺激されて暴走してしまつた光景……。

雄英体育祭……。

職場体験でベストジーニストの手によってトラウマの原因を探ってもらつた時……。

出久の口から教えてもらった真実……。

期末試験で協力してオールマイトに立ち向かつた事……。

そして……、

最後の光景はヴィランによつて腕を飛ばされてしまい、出久と洗汰がすごい泣きそうな顔になって叫んでいる光景……。

そして訪れる闇……。

「(これが走馬灯って奴だったのか……？ 俺は、死ぬのか……？)」

そんな自分の事なのにどこか他人事のように感じている浮遊感。

走馬燈が終わったことでどんどんと眠気が酷くなってきて、とうとうヤバいと感じた時だった。

『かつちゃん！』

「(ツ!!)」

出久の自身を呼ぶ声とともに様々な表情が濁流のようになって爆豪の脳内に流れ込んできた。

それで薄くなってきた意識が急激に再び覚醒した。

「(そうだ！ こんなところでくたばってる場合じゃねえ！ 俺が死んじまったら絶対デクは泣く！ 俺はデクが傷つく光景を見たくないからデクが無個性だったのをどこかで安心していた……、でももうデクは無個性ではなくその身にとつてもない運命を背負っちゃった。誰かが支えてやんねーといけねえ!!)」

その思いとともに爆豪は叫んだ。

「(こんなところで終われねえよ!! 終わってたまるか——!!)」

——…瞬間、爆豪の脳内でなにかが『カチリッ!』と音を立てた。

「……………ちゃん！……………ちゃん！」

「の、……………ちゃん！」

どこかで誰かが何度も自身に向けて叫んでいる声を聞き、爆豪は重たい瞼をなんとか開けた。

そして映った光景は大量の大粒の涙を流しながらも自身の千切れた右腕と肘部分をなんとか個性で治そうと必死の表情になっている出久の姿だった。

冴汰も隣で必死に事態を見守っている。

「……………出久……………」

爆豪の口から『デク』ではなく『出久』という言葉が漏れて、出久と冴汰はハツとした表情で爆豪の顔を見てくる。

「かつちゃん！」

「爆破の兄ちゃん！」

二人はとても嬉しそうな顔になっていたのは言うまでもない。

「俺は……」

「かつちゃん……よかった……でも、まだじつとして……。まだ腕がなんとか繋がっただけで神経とかは復元ができていないから……」

「ああ……それで……」

爆豪はまだ肘から先が感覚がないのをそれで悟った。

「……というか、復元って、なにげにすげえな……。それとあのクソ野郎は……」

「なんとか倒せた……ついカツとなっちゃって本気の大猫モードで捻りつぶしちゃった……」

アハハ……と泣きながらも苦笑いの出久。

爆豪はそれで顔を傾ければ白目になって壁に埋まっているマスクュラーの姿が映った。

「そうか……出久……すまねえな、役に立てないで……」

「そ、そんなつことないよ……それよりも、さつきから……その……なんで名前で呼んでくれるの……？ 嬉しいけど……」

「なんでだろうな……まあそんな事は今はいいじゃねーか……」

「そ、そう……？」

爆豪はなんとか笑ってごまかしまだぼんやりとしている頭でそう言葉を零すだけであつた。

そんな爆豪の普段とは違った珍しい態度に出久はただただ顔を赤くするだけであつた。

「……………ケツ」

そしてそれを見ていた冴汰は子供心になにやらもやもやするものを感じていたのであつた。

——この時、爆豪は……自身に個性とは別に未知の力が宿った事にまだ気づかないでいた。

自覚するのはまだ先の事である。

NO. 079 回想と反転

出久が今もなお爆豪の治療を続けている隣で無言で立っていた冪汰は先ほどの『自分だけが』知っている出来事について少なからず恐怖を感じていた。

それは、出久が問答無用でマスキュラーを倒したことか？

いや、今の冪汰の出久に対しての好感度はその程度では揺らがないから今更に出久に恐怖を感じることはない。

では？ 爆豪が瀕死の重傷でかつての親の死を重ねた事か？

それは否。

確かに不安いっぱいだったが、それでも冪汰と爆豪の接点はこの合宿のみで、そこまで関係も深くはない。

では冪汰は一体“なに”に対して恐怖を抱いたのか……。

それは先ほどの腕が飛ばされて爆豪が気絶した後の事だった……。

マスキュラーに右腕を切断されてそのまま地面に落ちて気絶する爆豪。

腕からは大量に血が出ているためにすぐにでも治療をしなければ出血死してしまう。
だが、

「はっはぁー！ 血だ！ 俺はこれを見たかったんだよ！」

快感を味わっているマスキュラー。

そんなマスキュラーに対して冼汰はそれはもう震えあがっていた。

出久に関してはかなり重症で呆然自失になっていた。

「さて……………こいつは時期に死ぬさ……………でも寂しくなんねえよーにてめえらもまとめて

あの世に……………いや、命令があつたか。チツ……………消化不足だぜ」

そんな事を独り言のように呟きながらもマスキュラーは出久達に近づいてくる。

「呆然自失状態か……………なおさらちようどいいな」

「ち、近寄るな!!」

冼汰が出久の前に立ち必死に両手を広げて通せんぼをする。

だがすぐさまマスキュラーは軽く撫でるように冼汰の頬を引っ叩き横に吹っ飛ばす。

「あぐっ！」

「ガキ……………邪魔だ、大人しくしている」

そしてマスクュラーは出久の前に立ち、

「そんじやつまんねえ幕切れだが連れ去るぜ？」

「……………くも……………」

「ん……………？　なんか言ったか？」

「よくも……………かつちゃんを……………よくも!!」

伏せていた顔が上がるとそこには憎しみが籠もっている表情をする出久がいた。

それにマスクュラーは「ほう……………」と感心する。

人畜無害そうな出久が今回初めて表に出した感情だ。

「そうだよなあ……………ヒーロー気取りでも所詮は人間なんだから憎しみも感じるもんだ。

今まで何度も見てきた顔だ。だが、ためえじや俺には敵わねえ。諦めろ……………な？」

そう諭すマスクュラー。

だがなお出久のその眼光は衰えない。

それでやれやれとかぶりを振るマスクュラー。

「そんじや、少し手荒だが生きてりや別に構わねえんだよな？　手足でももいどけば時

間稼ぎはできるか？」

誰に問うわけでもなく恐ろしい事を宣うマスクュラー。

だが、その時……………出久の脳内ではある変化があった。

『イズクがそんな暗い感情を抱いちやダメ……』

『フオウ……？ でも……』

『私が代わりにこいつをのしておくから、イズクはこの瞬間だけの記憶を忘れて……ね？』

『うつ……』

問答無用で出久はついさつきまでの感情と記憶をフオウに奪われて意識を失う。

そして表に出てくるフオウの意識。

そう……出久とフオウの意識が反転してフオウが今現在出久の体を操っている。

その急な変化にマスクユラーもすぐに気づく。

一歩後ずさりをして一言……。

「おい、緑谷。てめえは……ダレだ？」

先ほどまでの余裕の表情を消し警戒態勢に入るマスクユラー。

それほどに今の出久は威圧感が半端なかった。

そしてまるでストレッチをするかのように軽い足取りで立ち上がった出久は何度か体を捻ったりしていた。

「うーん……久しぶりの体だからまだ少し鈍いかな？」

「てめえは誰だあ!!」

マスキュラーは未知の相手に何かされる前に潰す算段で出久フオウに拳を振り下ろす。

だが、次の瞬間には出久フオウの姿はまるで蜃気楼のごとく消え去った。

「ツ!? はえー!!」

「いやいや、まだ本調子じゃないから本気はこんなものじゃないよ?」

そう言つてチャシャ猫のように笑う出久フオウ。

「い、出久お姉ちゃん……?」

「おつとそうだった。ボウヤ、今この瞬間の出来事は私と君との内緒でお願いできるかな?」

「え? え?」

唇に指を持つて行つて『内緒ね』というジェスチャーをする出久フオウ。

困惑の表情をする冼汰。

分からなくもない。

突然誰かも分からない人格の人が出てきたら混乱するのが普通である。

「まあ、とにかく……イズク、使わせてもらおうね?」

ワンフオーオールを発動して全身を強化する出久フオウ。

そしてマスキュラーに脚力強化で一気に距離を詰めて思いつきりぶん殴る。

「ぐうつ!!」

マスクュラーも危機を感じてか瞬時に筋線維での守りをするが、出久が使用したのは100%の力であった。

それで思いつき吹き飛ばされるマスクュラー。

だが、同時に出久の腕もあらぬ方向に曲がっていた。

100%を使った代償は普通に計り知れない。

「あ、いつけない。そういえばまだ完全には使えないんだつたね。うん失敗」

そう言いつつも一瞬で腕をオートヒールで元の形に復元する光景をマスクュラーと洗汰は見せられて、マスクュラーはその表情を凍らせて、洗汰に関してはもう顔が真っ青になっていた。

だが、出久も自壊覚悟でやろうと思えば使えないわけでもない手であり、出久は一応後でこの方法も出久に伝えようと思った。

出久はそんな事を聞かされても緊急時以外は怖くてできないだろうが……。

「それじゃしようがないかあ……ねえ小僧。今から本気出すけどどうつかり死なないでね？」

「本気、だと……？ さっきのが本気じゃなかった……だと!？」

「ええ」

ニッコリ笑顔で出久は「猫又解放!」と言霊を発する。

次の瞬間にはそこには5mを超す巨大な猫の姿があつた。

「あ…………あ…………」

それでマスクュラーは人生の中でついぞ感じた事のなかつた恐怖を初めて抱く。

そこには超常黎明期以前から生きているオールフォーワン以上の怪物、怪異・猫又の姿があつたのだ。

その鋭い眼光だけでまるで金縛りにあつたかのように固まってしまったマスクュラー。

そんな感情を抱いていることを知ってか知らずか出久フオウは腕を振り上げた。

そこからはさきほどマスクュラーが出久にやったような壁に何度も拳を打ち付ける行為を何度も何度も行つた。

そう、やり返すがごとく。

……………

……………

……………

……………

そこにはもう白目を剥いているが、しかし痙攣はしているのでかろうじて生きている。マスクキュラーの無残な姿があつた。

それを見届けて出久も人間の姿に戻つて、

「久しぶりにスツキリしたなあ……♪」

そこには出久の前では絶対に見せないであろう笑顔の出久がいた。

猫かぶりもここまで来ると感嘆の声しか出ないであろう。

「さて……」

「ひっ!!」

「そんなに怯えないで……ってそれは無理な相談だよ。それじゃボウヤ。この事はイズクには絶対に言っちゃだめだからね? イズクの私に抱いている幻想を壊したくないの」

「お、お前は……前に出久姉ちゃんが言っていたフォウって奴なのか?」

「そうだよ」

あつけらかんとそう認める出久。

出久とは比べるでもなく残忍な気性の持ち主だと洗汰は瞬時に悟つた。

「あ、イズクが目を覚ましたら『がむしやらになって倒した』事にしておいて。あと、早くしないとこの子も死んじやうかもしれないから私はもう下がるね」
待つて！まだ……という冼汰の叫びも虚しく出久はまた反転して引っ込んでしまつた。

そして目を覚ます出久。

「……あ、あれ？ 僕は……」

「出久お姉ちゃんなの……？」

「冼汰君……？ あれ、あのヴィランは……」

「そ、それなんだけど……」

冼汰はフォウに言われたとおりに伝えた。

その後に爆豪の姿を見て出久は血相を変えてすぐに治療にかかったのであった。

これでこそ出久だと冼汰も一応の安心感を得れた。

……一人回想を終えた冼汰は、これは子供心に出久には伝えられない……と即決して心にしまう事にした。

NO. 080 混乱する各地の状況

爆豪の腕の治療を終えた出久。

一応は神経も正常に繋がったことを確信した出久であった。

当分は筋肉痛でうまく腕が使えないだろうが命あつての物種である。

しかしそれとは別に問題が発生した。

「はあ……はあ……」

爆豪は今にでも気絶してしまいそうな高熱を発症してしまったのである。

腕の乖離に加えて大量出血も重なって状況はまずい。

「かつちゃんはこのままにはしておけない……でも、飯田君も心配だ。——— 洗汰君」

「な、なに……?」

「今からすぐに合宿施設に戻ろう。かつちゃんをまずは安静にさせないとだし……」

「わ、わかった!」

「それだけでなく、僕の背中に乗って！僕はかっちゃんを運ばないといけないから！それと事が済んだら洗汰君の力を貸して……」

「俺の……？」

「うん……」

それで一度出久は視線を今も燃えている森に向ける。

そして再度洗汰に視線を向けて、

「君の個性が必要だ。協力して……？」

「お、おう！出久お姉ちゃんの頼みなら頑張る！」

「よしー！」

そして出久は爆豪を腕に抱えて、洗汰を背中に背負って合宿施設まで走っていった。

マスキュラーに関しては当分は起きないだろうから駆けつけてくれるであろうヒー

ロー達が確保してくれることを祈る出久。

しかし、そんな出久達の後をつけるものがいた事を大猫変化した後のデメリットで個性が弱体化しているために五感強化もできていなかったために出久は気づくことがなかった……。

——時間は少し戻って合宿施設の正門で茶毘の炎に包まれてしまっていた相澤はというと、

「……まあ、そううまくいかねえか」

茶毘はそう呟き、視線を上に向けるとしつかりと避けて無傷の相澤の姿を確認したのだ。

相澤はすぐさま茶毘がまた何かの行動に移す前に拘束して茶毘の上に跨って腕の関節を絞めることに成功する。

「目的・人数・配置を今すぐに吐け……」

「なんで？」

茶毘の適当な返しに相澤は腕の骨を折ることで返答した。

「こうなるからだよ……次は右腕だ。合理的にいこう。足の方まで掛かると護送が面倒だからな」

「なんだ？ 焦ってんのかイレイザー？」

炎が浮き出たのを確認した相澤は個性で消して宣言通りに右腕を折る。

その時だった。

ドンドンドン！と何度も響く衝撃音が立て続けに響いてくる。

マスクュラーを壁に押しつけて叩きつけている出久フオウの拳の打撃音が合宿施設まで響いてきていたのだ。

それと同時に広場から逃げてきた峰田・口田・尾白の三名が姿を現す。

「先生ッ！」

「おまえらー！」

「ッ！」

相澤の気が緩んだ隙を見計らって茶毘は抜け出すことに成功したが、

「（もう限界が近いか……）」

そう茶毘は心の隙で思っていた。

いまだに相澤の拘束の布が体に巻かれているが茶毘は余裕そうにこう言い放つ。

「さすがに雄英の教師を勤めるだけあるよ。なあヒーロー？」

「ッ！」

相澤は拘束の布を再度強めようと引っ張ったはいいが、まるで茶毘の体が溶けるように、いや実際溶けて布はすり抜けて外れてしまった。

「生徒が大事か？ 守り切れるといいな……。また、会おうぜ」

そう言い残して茶毘は完全に泥のように溶けてしまった。

茶毘の個性は炎ではなかったのかと相澤は思ったが、今現在考察をしているほど余裕

もなく、逆に緊迫している。

峰田達にも「今のは!？」と聞かれるが相澤もどう説明しようがないためにその質問には答えずに、

「……………中に入ってる。すぐに戻る」

相澤はすぐに駆けていった。

今のこの状況で襲われているであろう生徒達は如何に戦わずして苦勞している事か。責任はすべて俺が取る。

その思いでプッシーキャッツ……………特にマンダレイに伝えなければいけない事があるが為に。

その道中で運よく相澤は出久達と遭遇する。

「先生!」

「緑谷!!」 おい、一体何が起こって……………爆豪はどうした……………?」

相澤は出久の腕に抱えられて大量の汗を掻いて青い顔の爆豪の姿を見止めて事情を聴く。

「よかった……………。先生、かっちゃんは今危ない状況なんです!」

「詳しく説明しろ……………」

「すみません。あった出来事は冴汰君に聞いてください。冴汰君、説明できる……………?」

「う、うん……」

「僕は飯田君達を助けに行かないと！ 先生はかつちゃんをとにかく安静な場所まで運んでください！ 腕が一回ヴィランに千切られちゃって！」

「千切られただど!? ……いや、今は繋がってるな……治したのか」

「はい」

それで状況は察した相澤は今すぐにも駆けていきそうな出久にとある事を伝える。

少し出久がハイになっている事を察しながらも……。

そして駆けて行った出久。

しかし、相澤は今この瞬間、なにがなんでも出久を連れて合宿施設まで護送するべきだった……。もうこの時点で手遅れだという事に気づけなかったのだ。

まだ意識が少なからずあった爆豪は朦朧とする意識の中でかろうじて震える腕を駆けていく出久の後姿に伸ばして、

「……………出、久……………いく、な……………」

だが、それが爆豪の限界だったのだろう……。

腕はダランと垂れてしまい気絶した。

広場では虎とマグネ。

そしてマンダレイとスピナーの戦いが繰り広げられていた。

虎の駆使する体術・キャットコンバットを何度も対応して弾くマグネ。

それだけで虎は強敵だと悟る。

マンダレイもスピナーの執拗に狙ってくる攻撃にウンザリしていたために、

「しつこっ……い！」

「い……のはお前だニセモノ！ シュクセーされちまつ……い！」

スピナーが何十本もの刃物が縛り上げられている刃を振り上げた時だった。

「スマーツシュ!!」

そこに駆け付けた出久の足蹴りが刃に炸裂してバラバラに破裂する。

「ええ!？」

いきなりの出久の登場にスピナーは素っ頓狂な叫びを上げる。

出久の方も猫の方の個性が弱体化しているのでワンフオーオールのみでの戦いで挑んだ経緯がある。

危なげなく着地した出久は叫ぶ。

「マンダレイ！ 洗汰君は無事です！」

「緑谷さん！」

「そして相澤先生からの伝言です！ テレパスで伝えてください!!」

一回呼吸を整えて出久は宣言する。

相澤の伝言内容を。

『A組B組総員——プロヒーロー・イレイザーヘッドの名に於いて戦闘を許可する!!』

「(いいんだね!? イレイザー!)」

すぐさまマンダレイはその内容を全員にテレパスで伝える。

「ありがとう！ 緑谷さんも早く避難を！」

「いえ、僕はもし傷を負っている人がいたら治療して回ってきます！ 飯田君も助けな

いとですし！」

そう言いながらも出久は駆けて行った。

肝試しのコースを駆けていけば誰かと遭遇するだろうという思いで。

「いいねえ……さすがヒーローになりえる人材だな」

スピナーはそう言って走っていく出久を評価した。

「それと、さっきの立て続けの轟音……もしかしてマスクュラーがやられたのかしら？」

あのお嬢ちゃんに……」

「やけに冷静だな！」

「そうかしら？」

虎が隙についてマグネに攻撃するが、マグネも余裕そうに交わす。

マグネとスピナーの視線の先には出久を追うようにとある仮面が見えていたのだ。

そのテレパスの報告を聞いて飯田と轟は今現在交戦中のヴィランと対決することを決めたが、攻めあぐねていた。

己の歯を刃と化して戦うヴィラン。脱獄死刑囚・通称『ムーンフィッシュ』。

彼は轟の氷を木と木を使ってまるで跳ねるように交わしていく。

飯田が攻撃しようと足に力を込めれば、すぐさま刃を使って空へと跳ねて制空権を確保する。

「戦いずらいな……」

「飯田！ あまり出すぎるな！ お前じゃ不利だ！」

「わかつてはいるのだが……かなりあのヴィランは場数を踏んでいると見るな」

「ああ……攻撃がまったく届かねえ。おまけに……」

轟はチラッと周りを見回す。

燃えている森、そして反対側はガスが充満している。

下手に己の個性である炎を使えば爆発もあり得る状況であった。

「（うまく縛りくらってんな……こいつはやべえな）」

おまけに轟は今現在B組の気絶している円場を担いでいるために足枷もくらっていると思うように動けない。

状況はいまだ不利であるのは変わらない事実であった。

打開策はあるのであろうか……？

NO. 081 暴走する個性と対処法

出久は森の中を走りながらも一人色々と思考を巡らせながらも考えていた。

マスクュラーはこう言った。

爆豪が倒されて呆然自失状態であつた自身の耳にも届いていた。

『そんじやつまんねえ幕切れだが連れ去るぜ?』

と……。

そのすぐ後の記憶が全くないことからここから洗汰の説明通り記憶が飛ぶくらいにがむしやらになってマスクュラーを倒したのだろうと出久は考えていた。

だが、まさかフォウが代わりになって戦つてマスクュラーを倒していたとは思うまい。

「(やつぱりヴィラン連合の目的は僕を連れ去ること……僕も、相澤先生も考えが甘かつたのかもしれない……ヴィランはどこかで雄英の誰かと繋がっているかもしれない……懸念があつたけど、本格的にそれが真実味を帯びてきた……どうにかして僕がヴィラ

ン連合に捕まらずに、尚且つみんなを救い出さないと！ 僕一人じゃ無理かもしれないけど……でも、みんなが集まって一致団結すればどうにかなるかもしれない！！」
そう出久は考えて今すぐにでも救いたいという気持ちを昂らせていた。
と、その時だった。

——ダアンツ！

突如としてなにかの破裂するような音が遠くから響いてきた。

その音をなんなのかを出久はすぐに察した。

「（今のは、もしかして銃声!?!）」

それで焦りを感じた出久であったが、また次の瞬間に黒い巨大な手がいきなり襲い掛かってきて咄嗟の行動ができなかった出久はなんとか腕を交差して防ごうとしたが、

「……緑谷。大丈夫か……?？」

「障子君……?？」

いつの間にか自身のもとへと引つ張っていかれたのか障子の姿がそこにあった。

だが、見て分かる通りに障子の姿は少々ボロボロでなにかしらの攻撃を受けたのが分かる感じであった。

「友を助^{飯田}けたいが一心に駆けて来たのか……先ほどの相澤先生の言葉もおそらく緑谷がマンダレイに伝えたのだろう？」

「う、うん……」

「やはりか……」

「そ、それより障子君はなんでそんなにボロボロなの!？」

「シッ！……静かに、小さな声で話すんだ……。少しでも物音を大きくすると……、奴に気づかれてしまう……」

それですぐに出久も状況を察したのか口を押えながらも障子の見る目線の先を見る。

「今のって……」

「ああ……ヴィランに奇襲をかけられて俺が庇^たつた……だが、それが仇となつてしまい奴が必死に抑え込んでいた「個性」のトリガーを外してしまった……ここを通りたいのならまずは奴をどうにかしないとイケない……」

それで出久は雄英体育祭の時の彼の説明を思い出す。

『俺の個性は闇が深いほど攻撃力が増す、だが同時に獰猛性も増してしまつて制御が非常に難しくなる』

……そう、障子と出久の視線の先には黒^{ダークシャドウ}影が暴走してしまい暴れまわっている常闇踏陰の姿があったのだ。

「俺から、離れろっ！ 死ぬぞっ……!!」

そう言いながらも必死に黒影ダークシャドウを制御しようとする常闇。

そこで障子はなにかに思い至ったのか出久の方へと振り向く。

「緑谷。お前の個性に炎術があつたな……？ あれでどうにか常闇の個性を弱体化してやれないか……？」

「ッ……！」

障子にそう問いかけられるが、出久は一回手のひらを出して個性を使おうとするが、そこには少々の炎のきらめきしか出せない事を障子に見せる。

「ごめん、障子君……ここに来る前に一回強敵だったヴィランと戦って大猫化を使っちゃったから大体の個性が使用後のデメリットで弱体化しちやってるの……」

「ッ!?……そうか」

障子も英雄高校の授業で出久の個性のデメリットを知っていたためにそれ以上は追及しなかった。

「しかし、まいったな……見て分かる通り、俺の複製腕がヴィランに切られてしまって、その光景もあいつは見てしまったがために義憤や悔恨などの感情も相まって暴走が激化している……。どうにか抑える手立てがないか……」

「うん……可能性があるとすれば、飯田君と轟君のペアに出会えればいいんだけど……」
 「ああ。無難で最適だ。だが、どうする……?」

二人が小さな声で話し合っている間にも常闇と黒ダークシャドウ影は森を壊し続けている。

そして障子が小枝を踏んでしまい、『パキッ!』という音を鳴らしてしまう。

すぐさま暴走した黒ダークシャドウ影が攻撃をしてくるが、なんとか出久が弱体化しているが使える怪力の力で障子事掴んで横に飛ぶ。

「すまん……」

「ううん。お互い様だから……」

「俺のツ……事はいい!……ぐっ!! 他と合流し……他を助けだせ!! 鎮まれ……!」

ダークシャドウ
黒……影!!」

苦しそうに常闇が頑張っている。

今、助け出さなければいけない。

だが、どうするかが問題だ。

「緑谷……俺はどんなことがあるうとも苦しんでいる友を捨てて置いていく人間にはなりたくない。お前の事だから飯田を含めて救い出したいという気持ちだろう?」

「うん、当然」

「ならば、お前の知恵でこの状況を打開する手を考えてくれ。お前の個性に対する知識

なら俺より役に立つだろうからな」

「障子君……うん、まかせて！ 僕もみんなの事を救いたい……常闇君だって救いたい！」

出久はそくぎに今現状で使える手を模索する。

自身の個性が弱体化して使い物にならない以上は光物のある場所に誘導する必要がある。

合宿施設はもつとも遠いから除外。

燃えている森に移動するにしても時間がかかる。

一番今の所で成功確率が高いのはやはり……、そして障子の個性である複製腕。

ここから出久は一本の解決策を導き出した。

「障子君……いけるかもしれない」

「聞かせてくれ……その作戦とやらを」

障子も出久の考察には一目置いているためにすぐに反応した。

そして行動を開始する。

違う場所ではB組の鉄哲徹鐵と拳藤一佳がガスを森中に散布している見た目は中学生くらいの制服を着ているヴィランを何とか倒しているところであった。

「俺らのツ……ツハアツ……合宿を滅茶苦茶にした罪、償ってもらうぜガキンチョがあ……」

「鉄哲……頑張ったね」

大の字で寝っ転がる鉄哲。

八百万から貰ったガスマスクも拳銃で壊されてしまい、息ができない中でも拳藤とともに頑張った結果である。

これでガスの発生源は断つことに成功したのであった。

飯田と轟の二人は防戦一方であった。

ムーンフィッシュの鋭利な刃物の攻撃が幾重にも伸びてきて飯田を中心に襲い掛かる。

おそらく命令通りであろうがそれをさせまいと轟が氷の壁を展開して何とか防いでいる。

だが、いずれは限界も近いであろう。

「はあはあ……奴、飯田を特に狙いに着けてやがる……」

「轟君……」

「お前は前に出るなよ？ 防ぎきれなくなる……」

「すまない……」

飯田は己の無力感を感じていた。

これでは保須市の時と同じではないか、と……。

そんな事を考えている時だった。

『メキメキメキッ』という破砕音とともに出久と障子が暴走している黒影ダークシャドウからなんとか

逃げている光景が映ったのだ。

「いた！ 氷だから轟君だ！」

「轟！ 頼む、炎を使ってこいつを抑えてくれ！」

ここに来るまで出久達は障子の複製腕を伸ばして囿カクにしてなんとか轟達の所まで

やってきていたのだ。

そして運が悪かったのかムーンフィッシュは黒影ダークシャドウによって地面に叩きつけられてし

まっていた。

「よー！」

轟が炎を使おうとするが、ふと飯田が腕を出して静止させる。

「飯田……?」

「今は手を出さないほうがいい……あのヴィランの巻き添えになってしまう……」

飯田の言葉通りに黒^{ダークシャドウ}影とムーンフィッシュの戦闘にもつれ込んでいて下手に手を出せない状態になっていた。

「横取りするなああああ!!!」

ムーンフィッシュが必死に叫び攻撃をするが、黒^{ダークシャドウ}影はそれを意に介さず、

「強請ルナ、三下アア!!」

強烈な反撃によってムーンフィッシュを一瞬にして倒してしまった。

「ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア!!」

「ツ!」

だが、ヴィランが倒されたことを見逃さなかった轟はすぐさま炎を出して黒^{ダークシャドウ}影はすぐさま弱体化して萎んでいった。

「平気か常闇……?」

「ああ……助かった」

「しかし、俺らが苦戦していたヴィランをあかも一瞬で……」

「すさまじいな……」

飯田と轟はそれである意味感心していた。

だが常闇は後悔の念が強かったために障子と出久に謝罪の言葉を述べてきた。

「すまなかつた……」

「気にしないで」

「ああ。それより飯田とも合流できたのは幸先がいいかもしれないな」

「そうだね」

「それはどういう意味だい？ 緑谷君。というか爆豪君はどうしたんだい……？」

「それは……ちゃんと無事に帰れたら説明するよ」

「わかつた」

それから気絶していて轟が担がれている円場を数にいれなくとも戦えるメンバーが5人になったために、この調子ならなんとかなるといふ希望を抱いた一同はどうにか施設まで戻ろうと移動を開始したが、

「（フッフ……あの影の少年もいいねえ。ですがそれよりも朗報なのはあのマスキュ

ラーを倒した力も今は使えない模様……さすがの俺もあんなのとは戦いたくはないからね……隙を伺おうか」

仮面を被ったヴィランが今か今かと決行の時を窺っていた。

NO. 082 狂気と略奪

出久達が合流する少し前、お茶子と蛙吹の二人はトガヒミコと遭遇していた。腕を遭遇時にナイフで切られて腕から血を流すお茶子。

「くっ……！」

「大丈夫？ お茶子ちゃん？」

「うん。なんとか……でも」

お茶子は襲ってきた相手を見て、誰なのかが分かって顔を引き曇らせている。

「あなたはシヨツピングモールで死柄木弔と一緒にになってデクちゃんを襲っていた

……ッ！」

「はいー。トガです。お茶子ちゃんに蛙吹さん」

「……ケロ。当然のことながらこちらの内情も知られているのね」

ニコニコと笑みを絶やさないとガを警戒する二人。

「でも、少し浅かったみたいですねー。この機械はですねー。刺すだけで血をちゅうちゅうするものなんですよー。お仕事捗りますよねー。ですから刺しますね？」

二人にそう説明するトガ。

もうこの時点で支離滅裂な感じであり、二人は顔をさらに引き曇らせる。

そんな二人の気持ちなど知らないトガは二人へと駆けてくる。

「お茶子ちゃん！」

蛙吹がそう言ってお茶子を逃がそうと舌を使って遠くに投げる。

「施設へと走るのよ。相澤先生は戦いは許可したけど、きつと『敵を倒せ』じゃなくて『身を守れ』ってことだと思おうから！ 相澤先生はそう言う人よ」

「だったら梅雨ちゃんも！」

「もちろん私も……ッ!？」

話の途中で蛙吹は舌に鈍い痛みを感じてそれを見ると、トガが舌をナイフで切り付けている光景が映った。

痛みを感じながらもなんとか舌を引つ込める蛙吹。

「梅雨ちゃん、梅雨ちゃん……カアイイ呼び方だね。今度から私もそう呼ぶね♪」

「やめて。そう呼んでほしいのはお友達になりたい人だけなの。だからやめて！」

蛙吹の拒絶の言葉に、しかしトガは気に障ったわけでもなく、余計に興奮したのか、
「それじゃ今から私と梅雨ちゃんはお友達ですね！ やったー！」

「くっ……！」

そしてナイフを投げたトガは蛙吹の髪を木に通して動きを止める。

それからかなりの至近距離まで一気に詰め寄り、

「舌から血が出るねお友達の梅雨ちゃん。カアイイねー。私、血って大好きなんですよー。だから……ちよっさい！」

「（この子……明らかにおかしいわ！ やられてしまう……！）」

動きを封じられて万事休すかと思われたが、そこでお茶子が走ってきて、

「梅雨ちゃんから離れて！」

「あは☆ お茶子ちゃんから来てくれるなんて大胆ー♪」

陽気に笑いつつもナイフを差し向けてくるあたり狂気を感じられるというものである。

お茶子はそれを慌てずに避けて職場体験でガンヘッドから教わった武術、ガンヘッド・マーシャル・アーツを叩きこんでトガを抑え込む事に成功する。

「梅雨ちゃん！ 舌が痛いだろうけど我慢できる!? 手を拘束しないと！」

「ちよつと待って」

お茶子が必死に抑え込んでいる。

それだというのに抑え込まれているトガはそれでも笑みを消さずにお茶子に話しかける。

「お茶子ちゃん、あなたも素敵だね。私とおんなじ匂いがするわ」

「なにをツ!？」

「好きな人がいますよね? 多分デクちゃんかな?」

「ツ!」

それでお茶子の気持ちが揺らぐ。

確かに出入久に対して友達以上の思いがあるのは否定しきれない事であった。

だが、それがあなたと何の関係があるのか? という気持ちである。

「だから、なに……!？」

「認めるんだ。カアイイね。私も一緒だよ。そんなデクちゃんみたいになりたい、お

茶子ちゃんもそうでしょ?」

「そ、それは……」

「好きな人と同じになりたいって気持ちは当然だよ。同じものを身に着けちゃったりしちゃうよね」

どんどんとトガの笑みが歪んでいく。

まるで狂った獣のように……。

「でも、だんだん満足できなくなっちゃうよね。その人自身になりたいって思っちゃうんだ。それはしょうがない感情だよ、うん。」

お茶子ちゃんの好みはなんとただけど分かるけど、どんな人？ 私はねー、ボロボロになって血を匂わせる人が大好きです。私もー、テレビで見てボロボロになっていくデクちゃんを見ていた時は興奮を覚えたものです。

そして最後は我慢できなくなっっていうも切り刻んじやうの。

お茶子ちゃん、楽しいねえ、恋バナ楽しいねえ！」

「いつ痛ツ!？」

「お茶子ちゃん！」

気づけばトガは注射器をお茶子の足に刺して「ちうちう」言いながらも血を吸いだしていた。

思わず蛙吹が叫ぶ。

だが、そこでしげみがざわついて轟達が姿を現した。

「麗日!？」

「障子ちゃん、みんな！」

その瞬間を見逃さなかったトガはお茶子の拘束を解いて離脱しようとする。

「人増えるので殺されるのは嫌だから、バイバイ」

そのままトガはどこかへと行ってしまった。

逃がしたことを悔しがるお茶子達。

だが、障子達と合流出来て安堵の気持ちもあった。

「麗日君！ 大丈夫かね!？」

「う、うん飯田君……」

「お前らとも合流出来てよかったな……これで八人か」

「八人……?」

轟の言葉にお茶子は首を傾げる。

「なにかおかしいか?」

「いや、おかしいかって……今ここにいるのはB組の円場君に、轟君、飯田君、障子君……」

そして私と梅雨ちゃんだけだから六人だよね?」

「「ツツツツ!」」

それを聞いて三人は後ろを振り向く。

そこには先ほどもでいたはずの出久と常闇の姿がいなくなっていたのだ。

「緑谷君に常闇君!？」

「どこだ!？」

「いつの間に……はぐれたのか!？」

「え!？ デクちゃんと常闇君もいたの!？」

それで全員は周りを見回していると上の方から声が聞こえて来た。

「彼と彼女なら……俺のマジックで貰っちゃったよ」

そこには仮面をつけてマジシャンのような恰好をした男が立っていた。

「この二人はヒーロー社会では過剰な力を持っている。こちらで引き取らせてもらおうよ」

そう言いながらも仮面の男……Mr. コンプレスはその手に二人が閉じ込められているだろうビー玉くらいの玉二つを握っていた。

「か、返せ!!」

「嫌だね」

Mr. コンプレスはそう言いながらも撤退しようとする。

……………出久は油断はしていなかった。

五感強化を満足に使えない状態でももともとの能力が高かったために警戒するため
に殿を勤めていた。

だが、ふと立ち眩みを感じたのだ。

力の過剰行使がここにきて一瞬だが出久の感覚を鈍らせた。

その瞬間をMr. コンプレスは見逃さなかった。

「貰うよ」

「ツ!？」

気づいた時にはもう遅かった。

そこには仮面が見えていた。

そしてもう背中に手を添えられていて手遅れだと悟った。

「せめてみんなに知らせないと……!」

そう思うがもう圧縮されてしまつて丸い球の中に閉じ込められてしまつた。

「そんな……飯田君、轟君……かつ、ちゃん……」

出久の意識は闇に沈んでいく。

こうしてヴィラン連合・開闢行動隊の目的は果たされてしまつたのであつた……。

これから出久はどうなつてしまうのか……? ?

轟達は救い出すことができるのか……。

状況は明らかに最悪だ。

NO. 083 最悪の結末

合宿施設では切島や上鳴などがブラドに「行かせてください！」と何度も言っていた。だがブラドはそれでも許可はしなかった。

なんで一応は安全な場所にいるのに自ら死地に飛び込んでいかせようと思う事か。まして相澤の戦闘許可が下りたとはいえまだ一生徒に過ぎないのだ。

大事な生徒達を行かせるわけにはいかないという判断である。

と、そこに部屋の外から何者かの気配を感じて、

「きつと相澤先生だぜ！ 直談判だ！」

「いや、違う！」

瞬間、扉は炎で燃やされ吹き飛びそこから茶毘が姿を現した。

茶毘がまた炎を出そうとしているがそんな事など許さないとばかりにブラドが個性『操血』を使って血のボールで茶毘を抑え込むことに成功する。

「ここまで攻め込んでくるとはいいい度胸だな、ヴィラン！ 舐めているのか？」

「そりゃ舐められるだろうな、思った通りの言動で笑えるよ。そもそもだ、後手に回った時点でお前らは負けてんだよ」

茶毘は語る。

ヒーロー育成の最高峰である雄英高校。

そしてヒーローの頂点に君臨するオールマイト。

この二つが合わさったことで強力な地盤が出来ている。

だが、それを脅かされれば途端に地盤はもろくなってヒーロー社会にも影響を及ぼすほどの大事になると。

「……何度も襲撃を許す杜撰な管理体制。——そして挙句に『生徒を犯罪集団に奪われる弱さ』……」

「「ツ!」「」」

その場の一同はその言葉で動揺する。

茶毘の言葉が正しいのならば誰かがもうすでに誘拐されていることになるからである。

そしてA組の面々はすぐにとある顔を連想した。

「まさか、緑谷を!?!」

「そーいうことかよ。ぶっ飛ばすぞてめえ!?!」

「ふっ……見ていろ。少数精鋭でお前らの事をずたずたにして……」

「無駄だブラドツ！」

茶毘が最後まで言い切る前に相澤が姿を現して茶毘をコテンパンに打ちのめしていた。

全員が相澤の登場に安どの笑みを零す。

「こいつは煽るだけでなんも情報は出さねえよ。見ろ、どういう個性か知らんがこいつはニセモノだ。さつきも一回戦ったからな」

「イレイザー！ お前、何をしていた！」

「悪い。戦闘許可を取りに行ったんだが途中で冴汰君と……そして少しやばめの爆豪を緑谷に託されたんでな……」

それで全員は冴汰の隣で青い顔になって荒い息を吐いている爆豪を目撃する。

「爆豪!! おい、大丈夫か!？」

「切島。下手に動かすな。冴汰君の話によれば爆豪はヴィランに腕を切られちまって大量出血で高熱を発症しているからな」

「腕を!?」で、でも……これってもしかして」

「ああ。緑谷がなんとか繋げたらしい……だが今すぐにでも安静にさせないと命に関わる。ブラド、警察と救急はもう呼んであるのか……?」

「ああ」

「わかった。俺はもう一度現場に向かってケガをしている奴らを連れてくる……」

「先生！ それじゃ俺達も！」

「ダメだ」

それで相澤は今の状況を手早く説明して、すぐに出ていった。

生徒達はそれで悔しそうにしていたのは言うまでもない。

場面はMr. コンプレスが出久と常闇を奪ったところから始まる。

「返せ？ 嫌だね。せつかくここまでの事をしたんだからこれくらいの報酬はないとやってられないな」

「どけー」

飯田と障子がいる場所をどかして轟が氷を展開するがまるで猿みたいにMr. コンプレスは何度もはねて氷の柱を交わしていく。

「我々はただ凝り固まった価値観に対して『それだけじゃないよ』という道を示したいだ

けだよ。今の子たちは価値観に道を選ばされて自由な選択性を失っているからね」

そう言いながらMr. コンプレスは空へと跳んで何度も跳ねていく。

「わざわざ話しかけてくるなんて……舐めてんだろ!？」

「もともとエンターティナーなものでね。当初の目的通りに緑谷さんは貰っちゃったよ。常闇君もムーンフィッシュを倒すほどの凶悪性を秘めている。だからついであつて感じだね」

「緑谷君と常闇君を返すんだ!!」

飯田が叫ぶ。

轟はお茶子に円場を預けて全力の大氷河を展開するが、それでもMr. コンプレスはまたしても簡単に避けてしまう。

「悪いね。もともと戦闘能力は低いんでね。だから雄英生徒なんかと戦ってられるか。

『開闢行動隊！目標の回収を成功！ 短い間だったがこれで幕引きだ。予定通りに五分後に指定された地点へと合流せよ』……というわけだ。チャオ♪」

「幕引き、だつて!？」

「ダメだ！ させねえ！ 絶対に逃がすな!!」

それで全員はMr. コンプレスの後を追っていく。

Mr. コンプレスの指定した合流地点にはすでに本体の茶毘と、そして茶毘の分身を作っていた男・トウワイスがいた。

作戦成功に陽気に話し合っている中で、しかしそこにはA組の生徒の青山が茂みに隠れて息をひそめていた。

傍らにはガスマスクをして気絶している耳郎に葉隠の姿もある。

「みんな、戦っている……ぼ、僕はどうすれば……!」

一回だが茂みから顔を出してしまった青山は運悪く茶毘と目が合ってしまった。

それで近づいてくる茶毘。

だが、トウワイスが茶毘に話しかける。

「あー、そういえばよー。脳無って奴を呼ばなくてもいいのか? お前の声だけに反応する仕様だろ?」

「……いけねえ、忘れてた。だからなんのために戦闘に参加しなかったのかって感じだな」

茶毘はそれでもう青山には興味を無くして脳無を呼び戻す。

その脳無とは今現在B組の泡瀬と八百万の二人を追いかけていた。

体中から大量の凶器を出して今か今かと切り刻まんとし迫ってくる。

もう泡瀬は泣きそうになりながらもなんとか八百万を抱えて必死に走っていた。

だがついにその凶器が二人に届きそうになった時に、その脳無は急に動きを止めて撤退を始める。

「な、なんだったんだ……?」

「……………」

呆然とする泡瀬とは対照的に八百万は深く考えていた。

戦闘行動をやめたという事は、もしかして飯田が殺されたか、もしくはそれ以外の目標が完遂できたのか?

「(まさしく最悪な状況! でも、百! 最善を推し量りなさい!)」

八百万はあるものを創造する。

「泡瀬さん、〃これ〃をあの脳無に個性で結合してください!」

「な、なんで!」

「いいですから! 手遅れになる前に!」

「あー、もう分かったよ!」

それで泡瀬は今だにのそのそと歩いて撤退している脳無に己の個性である『溶接』で〃それ〃を張り付けた。

「これでいいんだな!」

「はい。ありがとうございます……」

「とにかく逃げるぞ!」

これ以上は出来ることはない、と八百万も感じて大人しく撤退をするのであった。

広間ではスピナーとマグネも虎とマンダレイと拮抗した戦いをしていたが、

「よし。これでお終いか。眼鏡君を殺せないのが心残りだが仕方がないな……」

「逃げるわよ」

「逃がさんぞ!」

虎が追撃を駆けようとするが、そこに突如として黒い霧が出現する。

「お、ちょうどよかったみたいだな」

「ええ……。お二人はもう潜ってください」

スピナーとマグネはその霧にすぐに入ってしまった。いなくなってしまった。

「くッ!!」

「逃がしちゃった……」

悔しがる二人。

そして未だに通信に反応してくれないラグドールの心配をしたのであった。

Mr. コンプレスを追いかけている一同。

「くっ！ 意外に早い！」

「飯田！ お前だけでも先行しろ！ すぐに追いつく！」

「いえ、轟ちゃん。それはダメよ。ヴィランの狙いの一つには飯田ちゃんの抹殺も含まれているのよ!? 下手に一人にしてなにかあったら……」

「では、どうする!? 緑谷に常闇がこのままでは！」

「デクちゃんだったらこんな時！」

お茶子がそういう弱音を吐いてしまう。

そうだ、いつも出久の機転の速さでいつも助けられていた。

だが、今その出久はヴィランの手に落ちている。

だから頼れない！

「（考えろ！ 考えろ！ こういう時デクちゃんはどうするか!）」

お茶子は必死に考えた。

そして自分なりの最適を思いつく。

「飯田君！ 轟君と障子君の手を持って全力疾走して！ 私が二人を軽くするから！

これなら飯田君も一人にならないで済むから！ 頃合いになったら私も解除する！」

「それが、最適か……」

「麗日……頼む！」

「うん！ その代わり必ずデクちゃん達を！」

「ああ！」

それで軽くなった二人を持った飯田が今出せる全力疾走をする。

「いくぞー！ レシプロバースト!!」

今切らずにいつ出すのだという思いで飯田はレシプロバーストを展開して二人を抱

えたまま疾走した。

「おおおおおおおー！！！！」

「なっ!?!」

Mr. コンプレスはそれで驚いている。

まさか自身の速さに追いついてくるなんて思いもせずに。

そして飯田は加速もそこそこに時間制限がある中でMr. コンプレスの頭上へと跳

びあがった。

「麗日君！ 今だ!!」

「解除!!」

飯田の叫びにお茶子はすぐに個性を解除する。

そしてMr. コンプレスの背中を踏みつけて飯田は地面へと落下していく。

だが、タイミングが悪かった。

墜落した場所がよもや開關行動隊の集合場所とは思うまいという感じだ。

茶毘達もそんなMr. コンプレスと生徒達の登場に驚きの表情をする。

だが、茶毘はすぐに行動に移す。

「Mr.、避ける」

「了解」

Mr. コンプレスは己の事自体を球体にして茶毘の放つ炎を回避する。

だが、それに晒された三人はたまったものではない。

なんとか轟は避けることに成功するが、飯田は足を、障子は腕を燃やされて火傷を負う。

特に飯田はひどい。

限界ギリギリまでの足の酷使でさらには火傷でもう走ることもままならないだろう。

だが、なんとか追いついた。

せめて出久と常闇の二人を取り返すまでは我慢しないとこの気持ちで飯田は踏ん張っていた。

そしてそこにいたヴィラン達と戦闘を開始する轟達をよそにMr. コンプレスは球体から元の姿に戻って、

「やれやれ……やっぱりただじゃ逃がしてくれないようだね」

「緑谷は？」

「ほれ、この通り……あれ？」

Mr. コンプレスがポケットから球体を出そうとしたのだがそれがなくことに気づく。

「二人とも、撤退するぞ！　今の行為で確信した。なんの個性かは分からんが俺たちに見せびらかしていたものは、右ポケットに入っていたこれが緑谷に常闇だろう？」

障子がいっつの間にか二人の入っているであろう球体をMr. コンプレスから奪っていたのだ。

「でかした！　飯田！　いけるか!？」

「ああー！」

それで逃げ出そうとする三人であったが、そこに黒い霧が姿を現した。

ヴァイラン連合の黒霧であったのだ。

「時間どおりですね。撤退しますよ」

「おい、だが目標は……」

「大丈夫ですよ。フフフ……走り出すほどに嬉しかったのでしようね。そんな君たちにプレセントを上げようか。俺の悪い癖だね。マジックの基本で人にそれを見せびらかすときっていうのは——……見せたくないモノがある時だぜ？」

Mr. コンプレスの口には出久と常闇の閉じ込められている球体があった。

「ッ!？」

瞬間、障子の持っていた球体はもとの形に戻る。

そこには轟の放った氷が出現したのだ。

「ダミーを用意していたのさ。それを意気揚々と搔つ攫っていく光景はおかしかったぜ。とにかくこれでお後がよろしいようで——……」

Mr. コンプレスも黒霧の影の中に入っただけで、突如としてどこからともなくレーザーが伸びてきてMr. コンプレスの仮面を破壊して二人の球体を宙に浮かす。

青山が勇気を振り絞って茂みの中から放ったのだ。

そこを三人はすかさず走り出すが、飯田は足の火傷が祟って転んでしまう。

「ッー」

障子はなんとか常闇の球体を手に取ることに成功するが、轟は出久の球体を取る寸前に先に茶毘が掴んでしまい、

「哀しいなあ……轟焦凍」

「くそっ！」

「確認だ。『解除』しろ」

「つたく、なんだよ今のレーザーは……俺のショーが台無しだよ」

そう言いつつ個性を解除する。

そこには気絶している出久の姿が出てきて、すかさず茶毘は出久の首を掴んでいた。

「問題なし……」

「緑谷あああ!!!」

「緑谷君!!」

「緑谷!!」

三人の叫び声も虚しく出久は陰に包まれてそのまま連れ去られてしまった……。

こうして完全敗北してしまったのだ……。

その後はブラドの連絡によって警察やその他の機関が到着した。

生徒の40名のうち、ヴィランのガスの攻撃によって意識不明の重体が15名。

重・軽症者12名。

無傷で済んだのは12名だった。

そして……最後に行方不明一人。

六人のプロヒーローは一人が頭の傷で重体。

一名が大量の血痕を残して行方不明。

ヴィラン側は三名の現行犯逮捕。

彼らを残して他のヴィランは全員姿を消してしまった。

………こうして楽しいことになるはずだった合宿は最悪の結果に終わってしまったのだ。

「うっ………は？」

出久はふと目を覚ました。

暗い部屋の中で、しかし誰かの気配を感じる。

「———やあ、緑谷出久さん。初めましてだね」

「あなたは………！」

「そうだよ。僕がおそらく君が知っているだろうオールフォーワンだ……」

出久は最悪の対面を果たしていた。

猫娘と神野区異変編

NO. 084 個性の再認識と目覚め

雄英高校・林間合宿がヴィラン連合・開關行動隊に襲われて少くない怪我人や意識不明者……そして連れ去られてしまった生徒^{出久}。

その責任を追及しようとして翌日には各テレビ局の報道陣が雄英高校のゲート前でひしめきあっていた。

少しでも顔を出そうものなら批判込みの取材を受けざるを得ないのは確かである。

それほどに今回の事件でヒーロー社会に与えた影響は大きい。

そんな中で雄英高校の会議室では各教師たちがオールナイトも含めて沈痛そうな面持ちで話し合っていた。

やれヴィラン連合に対する認識が甘かった、やれヒーロー社会崩壊の序曲かも、やれ内通者がいるんじゃないか？という一歩間違えば内輪揉めに発展しかねない現状。

そんな事を延々と話し合っていれば自然と空気は重くなる。

そんな中でひと際暗い表情をしていたのはヒーローのトップに君臨するオールマイト。

ギリギリツツと握りしめられる拳に乗せられている怒りはどれほどのものか……。

そして同時に己の不甲斐なさを嘆くという……。

オールマイト自身はヴィラン連合の動きを警戒して林間合宿は未参加であったが、もし現場にいたらどうにかなったのではないか？ いや、それでも被害は多少減るくらいだろうという現実を見た認識であった。

何より一番悔しいのは一番弟子であり、ワンフォーオール継承者の出久がヴィランの手に落ちてしまった事だ。

出久の個性の由来であるフォウという猫の過去を鑑みれば、オールフォーワンが狙いをつけるというのは分かり切っていた。

それなのに、出久を普通に林間合宿に参加させてしまったのは、雄英側の落ち度と言われてもまったく否定できない。

『出久の数々の個性の中でやはり目を見張るのは二つの個性……『生命力を奪う』と『与える』。』

この二つはまるでコインの裏表のようなものであり、ヒーロー側であれば頼もしく、もしヴィラン側に悪用されようものならとてつもない被害を与える事は確実と言える。ヴィラン達の生命力を“奪い”、傷ついたヒーロー達をその生命力を“与える”事で傷を癒す。

出久は生命力を奪う個性は使用したくないと言い、そしてフォウのリミッターも掛けられている事もありそもそも使えないからそんな事は起こりえない。

だが、そもそもその前段階ですでに出久の中には推定で四万以上はあっても過言ではないほどの生命力がストックされている。

……もし、もしもヴィラン連合……そしてオールフォーワンがなにかの個性を使い、出久に無理やり個性を使わせれば、あつという間に表側だったコインは裏返り、たちまち先ほどの逆の現象が起こる。

すなわち、ヒーロー達は無理やりにも生命力を奪われて塵と化し、敗北する絶望の未来……。

それはオールライトですら防げない強硬手段だろう。

なにより一番の問題はそんな出久のヤバいの一言では済まされない個性の全容を教師陣で連携・共有・把握していなかったことだ。

根津校長やオールマイト、リカバリーガールなどが前途の通りに内通者を警戒してか雄英教師達に個性の全容を教えなかったのがそもその原因の一つでもある。

オールフォーワンがバツクにいるのならばヴィラン連合は出久の情報ほぼほぼ知っていて筒抜け状態だったことになる。

もう今更言ったところで手遅れであるが、もし情報が行き渡っていたのなら林間合宿ももう少し慎重になれたかもしれない……。そう、かもしれないのだ。

そんなたらればで何度か紛糾する会議室。

……そんな中で場違いなコール音が鳴り響く。

『で——ん——わ——が——来たッ!』

という、オールマイトの声であった。

オールマイトは一言詫びの言葉を述べて、会議室から出ていく。

「(緑谷ガール……私が不甲斐ないばかりに……)」

そんな後悔を感じながらもオールマイトは電話に出る。

相手は塚内であった。

そして思いがけない情報が舞い込んでくる。

オールマイトはそれを聞いてトゥルーフォームから次第にマッスルフォームになっ

ていき、電話をかけて有力な情報を伝えてくれた塚内に感謝の言葉を述べて、「塚内君。奴らに会ったら私はこう言ってるぜ……『私が、反撃に来た』ってね……」
こうして反撃の狼煙が上がる準備が開始されたのであった。

爆豪は病院のベッドで魘されていた。

『かつちゃん……!』

『出久!』

夢の中では出久が悲しそうな表情をしながらも、

『バイバイ……かつちゃん……!』

と言ってどんとどんと遠ざかっていくというもの。

『待てや! おい、どこに行きやがる!』

出久!

出久!!

出久ううううつ!!!

出久の姿が完全に闇に消えた瞬間に爆豪は目を覚ます。

「はっ!？」

爆豪は目を覚まして周りを見回す。

清潔な手入れがされている病室で爆豪は寝かされていたのだ。

ふと、右腕を見ればマスキュラーによって切られてしまったが出久によって復元されている腕——……しかし、切断痕は残ったのか腕を一周するように線がうっすらと見える。そして点滴がなされていた。

「あれは……夢なんかじゃなかったんだな……情けねーな……」

そう言つて爆豪は右腕をギュツと無言で握りしめる。

そんな中で病室の扉が開いて続々と——Aの生徒達が入ってきた。

「お！ 爆豪！ やつと目を覚ましたんだな！」

「切島……」

切島はうつつすらと涙目で爆豪の肩に手を置いて無事を喜ぶ。

「あれから……どうなったんだ……?」

「それは……」

その爆豪の問いに爆豪が目覚めたことによつて喜ぶ一同の表情に影が落ちる。

よく見れば数名の姿が見えないことに気づいた爆豪は、

「出久は……? それにここにいねえ奴らはどうなった!？」

「その、デクちゃんは……」

それでお茶子が泣きそうになっていた。

そこに飯田がお茶子の肩に手を置き、

「爆豪君……今ここにいるのはヴィランのガス攻撃でいまだに意識が戻っていない耳郎君に葉隠君、そして頭を強く打ってここに入院している八百万君と……そして最後に、ヴィランに誘拐されてしまった緑谷君を除いた15名だよ……」

飯田は実に悔しそうに爆豪にその事実を伝えた。

それを聞いて爆豪は呆然とした表情になった後、少しして再起動を果たして、

「はっ……？ 出久が誘拐、されただと……？ 嘘だろ？」

「……………」

飯田を含めて全員は沈痛の面持ちで無言であった。

中には涙を目じりに溜めているものが数名……その数名は女子達である。

「……………ふざけんな。ふざけんなよ!! なんだあいつなんだよ!!」

「おそらくは……ヴィランに緑谷君の情報が伝わっていたか、もしくは知られていたの
だろう……」

「そんな事を言ってるじゃねえ!! 俺が言えた義理じゃねーが、誰か出久の事を守って
やれなかったのか!!?」

そう言われて飯田、轟、障子の三人が肩を震わせる。

障子は常闇を救い出すことができたから非を感じることはないだろう。

だが、飯田と轟は責任を感じていた。

飯田はあの時、痛みで転ばずにもつと足の火傷を我慢していればもしかしたら出久の事をいち早く救い出せていたかもしれない。

轟も轟であと一步のところまで来ていたが力及ばずに茶毘に先を越されてしまった。

二人はそんな後悔の念で胸がいっぱいだった。

「すまねえ爆豪……俺がもつとうまくやっていれば緑谷は……」

「轟君……君だけの責任じゃない。俺も……足の火傷を我慢していれば……」

「だが……」

飯田と轟はお互いに譲らない言葉を言い合っている。

だが、爆豪は現場にいなかったたのでそんな心情など知る由もなく、

「てめえら……ッ!!」

立ち上がろうとして、眩暈を起こして前に倒れそうになるところを切島に受け止められる。

「無茶すんな爆豪！ おまえはまだ大量出血の影響で点滴中なんだからよ！」

「そんなん知るか！」

と、もう爆豪は冷静でいられる精神状態じゃなかった。

今すぐにも出久を助けに行きたい気持ちでいっぱいだったのだ。

そんな爆豪を見て切島がある事を提案する。

「今はゆっくり休めよ。緑谷を助けに行ける計画は一応はあんだよ」

「計画、だと……?」

「ああ」

それで爆豪も含めて病室にいた全員が目を見開いた。

特に飯田は過去の経験から険しい目つきになつていたのは言うまでもない。

果たしてI—Aの面々はこれからどういう判断をするのか……。

NO. 085 出久救出に向けて生徒達は…。

「緑谷を助けに行ける計画は一応はあんだよ」

その一言がその場にいる全員に行き渡って全員はどういう事かを発言者である切島に問う。

「どういうことだ切島？ 出久を助けに行けるってのはどういうことだ？」

当然、爆豪はすぐにその話に食いついた。

切島はそれで昨日にあった出来事を全員に説明するように話し出す。

「実は俺と……轟は昨日にも面会に来ていたんだよ」

「ああ」

「そこでな……」

切島は昨日あった話をする。

内容としては、入院中にはあるが意識は取り戻している八百万がオールマイトと塚内ととある話をしていた。

要約すると開闢行動隊のヴェイランの一人、脳無に発信機を取り付けることに成功したというもの。

八百万はオールマイト等に是非これを使つてくださいと受信機を渡していた。その話を全員に教えて、飯田が口を開く。

「……つまりは、その受信デバイスをまた八百万君に作つてもらおう……と？」

飯田の口調は少しであるが棘が含まれていた。

当然納得できるわけがない。

思いつくのは保須市での独断での行動で痛い目を見た飯田。

それも踏まえてこれは自分たち生徒が口を突つ込んではいけない領分だ。

だから飯田は咆えた。

「オールマイトの言うとおりだ！　これはもう俺達のできる際限を越えている案件だ。大人しくプロ達に任せるのが正解だ！　俺たちの出ていい舞台ではないんだ、馬鹿者！！」

「そんなもんは分かつてんだよ！　でもよ、俺はあんときなんもできなかった……ッ！！仲間が狙われているつてのに、なんつとも出来なかつたんだ！！　しようもしなかつた！！」

飯田の言葉に切島は己の激情を吐き出す。

そして自身のヒーローを志した思いを曲げる事などあつてはならない。

思いつくのは中学生時代……。

ある時に同級生だった芦戸を含めた生徒たちがヴィランらしき奴になにやら脅されているようで、それでも切島は足が竦んでしまい、助けに行くことができなかった。

それが切島の心に影を落とした。

その夜に自暴自棄になってヒーローの道を諦めかけた時にたまたま投げた本が本棚にぶつかって落ちた本の一冊に投影マシンが入っていて勝手に勝手に起動しだして、そこには己の憧れである『クリムゾンライオット紅頼雄斗』の映像が再生された。

そこで話される紅頼雄斗の思いを再度聞く。

そしてある言葉が切島をヒーローの道へと誘った。

『ただ後悔のねえ生き方、それが俺にとつての漢気よ!』

それがどれだけ切島に勇気を与えてくれたことか。

そして最後に切島はこう吐き出す。

「ここで動けなきや俺は、ヒーローでも男でもなくなっちゃう!!」

「切島……」

芦戸も切島の気持ちを知っているから強く言葉を出せない。

だが他の面々が一応は病院だから静かにと宥める。

「飯田や皆が正しいってのは分かってたんだよ! だけど、なあ爆豪!! まだ手は届くん

だよ!!」

「切島、てめえ……」

そう言つて手を爆豪に差し出す切島。

爆豪はそれで気持ちが悪くはしたが落ち着いてきた。

切島が余計に騒いでくれたことで鎮静化したとも言おうが。

「……俺と切島は行くつもりだ。緑谷の個性を考えれば絶対に殺されることもねえと思うが、それでも何が起こるかかわかったもんじゃねー」

切島の言葉を引き継いで轟がそう言う。

だが、それでも飯田には到底我慢できなかったために、

「ふざけるのも大概にしたまえ!!」

「まあ待て。落ち着け」

障子の手を出して仲裁に入る。

「切島の何もできなかったという思いも、轟の目の前で緑谷を奪われた気持ちも分からなくない。俺だつて当然悔しいさ。飯田も反対はしているがもちろん悔しいだろう……。だが、感情的になつて動いていい話じゃない」

それで一応は病室内は静かになった。

それから保守的な考えの者や、戦闘許可も解除されている旨も含めて冷静になろうという話で纏まっていくな。

なにより蛙吹の言葉が一番全員の胸に響いたことであろう。

「みんな、出久ちゃんが攫われてショックだったのは分かるわ。でも、冷静に考えてちよ
うだい。どれ程正當な感情であろうともまた戦闘行為を行うというのなら————ル
ルを破るといふのならその行為はヴィランと何ら変わらないものなのよ？」

それで全員が神妙な顔つきになる。

そこに爆豪の診察医が入ってきたので一応全員は退室をしていく。

だが切島は小声で爆豪に話しかける。

「……八百万には昨日、この件は話した。行くなら即行……今晚だ。まだ体調が万全
じゃないお前が行けるか分からないが、一番悔しー思いをしているお前だからこそ誘っ
てんだ。考えといてくれ……今晚、病院前で待つ」

「……………」

そう言われて爆豪は無言で考えていた。

さらには飯田とお茶子にもその言葉が聞かれていたのは致命的だっただろう。

……—その夜の事。

切島と轟が来てくれることを祈って病院の外で待っていた。

そして現れる八百万と、爆豪。

「爆豪……」

「勘違いすんな……俺は勝ち目があるから協力するだけだ」

「ああ、それでいい」

「八百万は……?」

「私は……」

八百万が何かを言う前に、

「待ちたまえ……」

「待つて……」

そこに響く二人の声。

その場には飯田とお茶子の姿があつた。

「轟君……なんでよりにもよつて君なんだ? 俺の私的暴走を緑谷君とともに咎めてく

れた……ともに特赦を受けたはずの君が……！　なんで俺と同じ過ちを犯そうとして
いるんだ。これはあまりにもあんまりじゃないか……」

「何の話だ……？」

「切島……」

轟が切島の肩に手を置いて、

「飯田。落ち着け……なにも俺達はルールを破ろうなんて——」

「ッ！」

轟が最後まで言い切る前に飯田の拳が轟の頬に炸裂する。

「俺だって悔しいさ!!　心配さ!!　当然だ!!　俺は学級委員長だ!　クラスメイトを心配するさ!!」

そして、轟君と気持ちは同じだ!　俺だって目の前で緑谷君を拐われてしまい、切島君の言葉に一瞬だが委員長という立場を忘れて『俺も行こう』と流されそうになった……。

だが、それと同時に爆豪君のケガを見て今はもう治っているが床に伏せる兄の姿を重ねて正気を取り戻した……」

「飯田……」

「だからこそ、一度過ちを侵してしまい、もう破るまいと思った……それなのにまたもや

気持ち揺らいでしまった俺だからこそ言わせてくれ。

君たちが暴走した挙句に兄のように取り返しのつかない事になったら……ッ！ 僕の心配はどうでもいいって言うのか!？」

飯田は呼称を『俺』から『僕』になるほどに取り乱して轟の両肩に手を置いて涙を流す。

そして今度はお茶子が爆豪に向かつて話をする。

「爆豪君……私もデクちゃんの事はとつても心配だよ？ でも、だからこそ感情的になつて事を起こして、もし失敗しちゃつたらそれこそデクちゃんが悲しむつて事を考えてほしいんや！」

「麗日……」

それで少しの間、沈黙が降りる。

だが、轟が飯田の肩に手を置き、

「飯田……それに麗日も落ち着いて聞いてくれ。俺たちは何も正面から力チ込みをするつもりはねえよ」

「ッ!？」

「戦闘なしで緑谷を助け出す。ようは隠密行動だ！ それが俺達卵の出来る……ルールにギリ触れねえ戦い方だろ！」

そこに追い風のように八百万が口を開く。

「私は轟さんを信賴していますわ。ですがそれでも万が一を考えて私がストッパーになれるように、同行するつもりで参りました」

「八百万君!?!」

「八百万!」

そして爆豪も口を開く。

「……俺も、出久の事を助け出せるんなら協力はする。だからむやみに暴れたりもしねえよ。麗日、これでいいんだろ……?」

「爆豪君……」

「それに、俺は出久に命を救われた……だから今度は俺があいつを助ける番なんだよ!」
そう言いながらも右腕をさする爆豪。

そのやり取りをして、飯田は「平行線か……」と呟き、

「ならば、俺も連れていけ……!」

「私も行くよ!」

「飯田に麗日……!?!」

こうして轟、切島、爆豪、飯田、八百万、お茶子の六名が出久を救いに行くために病院を後にする事になる。

一方で、警察の方では名だたるヒーロー達が集合していた。

N o. 1 ヒーロー・オールマイトは当然として、N o. 2 ヒーロー・エンデヴァー、N o. 4 ヒーロー・ベストジーニスト、N o. 5 ヒーロー・エッジショットと、そうそうたるメンバーだろう。

他にも様々な場所で活躍しているヒーロー達の顔があり、そんな中でトップヒーローに近くはないだろうが、以前に出久に救われてヒーロー社会に復帰したある男がその場にもいた。

オールマイトが話しかける。

「君にも協力をしてもらえるとは嬉しいよ」

「……いえ、自分は以前に緑谷さんに救われました。だからこうも早くに恩返しをする機会がやってくるとは僥倖です」

そう、そこにはヒーロー社会に復帰したターボヒーロー・インゲニウムの姿があったのだ。

「(緑谷さん……必ず救い出すよ)」
そう、インゲニウムは誓った。

NO. 086 淀む空気

爆豪達六人は一旦新幹線に乗って、八百万が仕掛けた発信機により判明しているヴィラン連合のアジトと思われる場所がある神奈川県横浜市神野区へと向かっていた。

その新幹線の中で、

「一応言っておく」

轟がそう言葉を発し、

「これからやろうとしている事はただのエゴだ。誰にも認められねえことだって事は認識しておいてくれ。だから引き返すならまだ間に合うぞ？」

その言葉は飯田がよく分かっていた。

それで尚且つ分かった上で無茶しないように監視目的で着いてきたのだ。

「迷うくらいならそもそも言わねえよ。緑谷は……ヴィランのいいようにされちまったら危ねえしな……」

一同が感じるのはいつも訓練時にみんなの個性を様々な角度から吟味してアドバイ

スを教えてくれるけど、どこか少し抜けているところもあり、そんなところが可愛いと思える出久の姿。

いつも中心にいる訳でもないのに自然と誰かに頼られるような人柄の良さ。

同時に事情を知っているからこそ分かるどこか、ふと気が付いたらずつと遠くを見据えているような顔。

その表情が不安を感じるものではないのだが、その身に宿す大量の生命力によつて遠い未来に一人取り残されてしまうかもしれない危うさ……。

それをどうにかしようといつも頭の片隅では考えているクラスメイト達。
そして爆豪が口を開く。

「出久は……必ず救い出す！ それが今の俺に出来る最大限の恩返しだからだ。引き返せなんて言われてももう従わねえぞ、半分野郎！」

「ああ。構わない」

そんな反応を見て観察している八百万は多少ながらも不安を感じていた。

以前から何度か爆豪は出久の事になると周りが見えなくなることがあると一緒にいた切島とかに聞いていたのだ。

それは以前に出久の説明した二人の過去に起因するものというのは分かっているが、それがまた出てしまい暴走してしまうかも知限らない。

「(百……いざという時には必ず止めるのよ!)」

八百万はそう意気込んでいた。

「……ところで、爆豪君。少しいいかな?」

「んだよ、丸顔?」

「あー! さつきは麗日って呼んでくれたのにー!」

「うっせえ!……で、なんだよ!」

「なんだかはぐらかされたような気分や……まあええけどね。それなんだけど、爆豪君っていつの間にデクちゃんの事を『出久』って呼ぶようになったの……?」

「ッ!」

それで目を見開いて咄嗟に顔を逸らす爆豪。

「そういえば……」

「確かに……」

『確かに』と反応を示す一同。

先ほどまでのどこか張り詰めたような空気は鳴りを潜めて、どこか興味深々な感じの空気になった。

「そ、それは……」

何度か視線を左右に揺らして口ごもる爆豪。

「それはー……?」

そんな爆豪の姿に興味津々ですと言わんばかりに顔を詰め寄るお茶子。

それで珍しく慌てるような姿を見せる爆豪。

この男がここまで体裁を崩すのは珍しいと他の四人も成り行きを見守っていた。

それでどうとう観念したのか少し頬を赤くさせながらも爆豪は白状する。

「……くそヴィランと戦ってる時に俺の右腕を切られちゃったのはもう知ってたんだよな？」

「うん。デクちゃんか治したっていう事も知ってる」

「すげーよな。腕の切断まで治しちゃうんだから……」

「リカバリーガールもお手上げのようなものだな」

切島もそれでどこか感心したような声を出し、飯田がそう言葉を続ける。

「そんな時に見たんだよ」

「なにを……?」

「走馬灯をだ」

それを聞いて全員は爆豪が結構危ない橋を渡っていたのを再度認識した。

確かに腕を切られたとは言ったが、それを知ったのはすでに治してもらった後だったからというものがあるがどこか現実味がなかったのも感じられる。

「走馬灯か……どんなもんだ？」

「こう、物心ついた時から客観的な視点で俺と、そして出久の過去の光景を見せられたんだよ……つい、最近の所まで」

「……それは……つまり、爆豪さんが緑谷さんの事を言葉は悪いですが『デク』と蔑称で呼び始める光景を第三の視点で見せられて過去の自身の過ちをまじまじと見せられたという事ですか？」

「ああ……」

「うわー……」

お茶子がそれで思わず変な声を出す。

それならば今更ではあるが蔑称を名前呼びに改めるキツカケにもなったと言えるだろう。

一同はそんな爆豪のいい方向への傾向に感心した。

それから時間は少しばかり経過して新幹線は神野区へと到着した。

「さあどこだ八百万!!」

と、すぐに駆けださそうとしている切島。猪突猛進ぶりをいかんなく発揮しているところであろう。

だが、そこで八百万が待ったを掛ける。

「ここからは用心に用心を重ねないといけませんわ。私たちはすでにヴィラン達に顔を知られているのですのよ!」

「そ、そうだったな……特に飯田は一応は抹殺予定されてたもんな」

「ぐっ……耳が痛い」

それで警戒しだす一同。

そこに八百万が提案があるという。

そして向かったのは何でも揃うが売り文句のお店『ドンキ・オオテ』。

少しして一同は服装と姿を変えてお店を出てきた。

「なるほど……変装か」

轟は半分の白い髪を隠すように黒いヘアアの被り物をして、どこか高級ホストを思わせる佇まい。

「夜の繁華街……子供がうろつくのは目立ちますものね」

八百万はドレスを着てサングラスを掛けている。

「パイオツカイデーチャンネーイルヨー!!」

飯田は、どこかのホストの下っ端店員みたいな感じで変な呪文を叫んでいる。

切島は獣人の耳をつけて飯田の隣でグツと親指を立てていた。

「うへえ……格好と合ってないような……」

お茶子はオタク系のような地味な格好で四角い伊達眼鏡をかけていた。

「ケツ……」

最後に爆豪は以前にベストジーニストにされたような髪型（切島曰く8：2坊や）になっっており不機嫌度MAXであった。

「八百万……わざわざ買わずとも『創造』でどうにかできたんじゃないか……?」

「そ、それはルール違反というものですわ!」

と、流通とか経済がという言い訳をしてあたふたしていた。

切島は心の中で「(ドンキに入りたかったんだな、このピュアセレブ……)」と思っていた。

とにかくこれで準備も整ったので発信機が示す方へと向かおうとした時だった。

どこからともなく、

「お? 雄英じゃん!?!」

という言葉とともにビクウツ!!となる一同。

それで振り向けば街中の大型スクリーンに相澤・ブラド・根津校長の三名の姿が映し出されていた。

『それでは先ほど行われた雄英高校謝罪会見の一部をご覧ください』

民衆がそれを見入る中で爆豪達も黙って一緒に視聴していた。

『この度——我々の不備からヒーロー科1年生28名に被害が及んでしまった事……ヒーロー育成の場でありながら蠢く敵意への防衛を怠り社会に不安を与えた事を謹んでお詫び申し上げます。まことに申し訳ございませんでした』

謝罪の言葉を述べる相澤の顔には疲れが見えていた。

それでも気丈に話している。

それから記者たちが矢継ぎ早に質問をしていくという光景が繰り返されていく。

その内容を聞いて、それを見ていた民衆は、

「は？ 守れてないじゃん」

「何言ってるんだこいつら？」

とまるで悪者扱いかのように批判や不満の言葉を述べていつていた。

空気が淀んでいくのを感じた六人はもう聞くに堪えない様子であったのは言うまでもない。

……そしてこれからある意味で衝撃的な事が話されることになるのだが、まだこの時

には誰も想像できていなかったのであった。

「これが今の世の中なんだよなあ……同情するぜ？」

死柄木弔はその光景をアジトのテレビで見ている下卑た笑みを浮かべながらそう言葉零していた。

NO. 087 嵐の記者会見

「生徒の安全……先ほどそう仰いましたね？ イレイザーヘッドさん。事件の最中に生徒に戦うように促したそうですね」

一人の記者がそう相澤に話しかける。

少しでも隙を見せればすぐさまにそこを徹底的に突こうという魂胆を胸の内に秘めて。

このヒーロー社会、誰かが今回の責任を負うとなれば真つ先に雄英の、しかも実際に関わった人間を生贄にすれば後はどうにかなるだろうというあくどい考えもある。

……逆に言えば今している質問で下手な質問をしてしまえば記者としての人生も終わってしまうかもしれない。

だというのにこの記者の今から聞こうとしている事はある意味で核爆弾だったと……後の評論家がこう評価することになる。

それがどんな内容かは続きを見ていけば分かることである。

「意図を聞かせていただいてもよろしいですか？」

「私どもがヴィラン連合の襲撃によって混乱する状況を完全には把握することが叶わなかったために、最悪の事態を避けるべく、そう判断して各生徒の皆さんに戦闘の許可を下しました」

「その最悪の事態というのは……？ 27名もの被害者と1名の拉致は最悪だったとは言えませんか？」

相澤はその質問に内心で煮え切らない感情を感じながらもそれを決して表には出さずに次の言葉を発する。

「……………私があの場で想定した『最悪』とは……生徒達が成す術もなくヴィラン連合の人間たちによって殺害されてしまう事でした」

それを聞いて質問をした記者は不満そうな顔をする。

決定打になりえるミスをまだ零さないことにこちらも煮え切らない感情を抱く。

これはもうどちらが先に根を上げるかの戦いになりつつある。

それから相澤に代わって根津校長が生徒達の現状や活躍によって被害は結果的に小さくできたと説明する。

現状では精神的に負荷を負った生徒はいないとも。

「不幸中の幸いだったと……？」

「未来が侵されることが最悪だと考えております」

ミスのない回答に先ほどから連続して質問している記者はどうとう深淵に踏み込もうとしてくる。

「攫われた緑谷さんについても同じことが言えますか……？」

そう、何人もの記者が質問に対する責任から逃れようと中々しなかつた出久についてついに足を踏み込んでしまったのだ。

それが帰り路のない片道切符になるとは知らずに……。

もつと冷静になれていればこの記者はこの先も生き残れたことだろう。

だが、もう質問してしまつたからには今更引き下がれないと、火蓋は切つて落とされてしまつたと、そんな歪んだ記者魂がこの記者を走らせた。

「体育祭準優勝……ヘドロ事件の時に遅咲きの個性の開花……あのインゲニウムの治療……上げていけば彼女の功績はキリがないかもしれないかもしれません。

ですが私は常々不思議に思っているのですよ」

「不思議、とは……？」

「本来個性は基本一人一つが当たり前の世の中で彼女は複数の個性を持っています。体育祭で判明したものの以外にもおそらく持っている事でしようね」

来たか……。

相澤はこの質問は来るものだとかあらかじめ予測していたために覚悟はしていた。
記者は続けて話す。

「ですが、たとえ突然変異だとしてもそれで彼女をヴィラン連合が誘拐するのには理由
足りえる決定打がありません。

なにか、彼女の過去にはとてつもない陰謀があるのではないかと思っ

「……………」

敢えて無言でやり過ぎす三人。

だが、ここでどうとう記者は言つてはならない一言を言つてしまふ。

「……………話は変わりますが、ヴィラン連合には改人・脳無という複数の個性を操るヴィラン
が複数確認されています。もしかして……………緑谷さんはその脳無と同じ存在なのではな
いですか?」

「……………はっ?」

相澤の口から呆けた声が出る。

出久の個性について言及してくると思っていたが、まさかこんな斜め上からの質問が
飛んでくるとは思いもしなかったために呆気にとられる。

それで記者会見の場は少なからず騒然とします。

「考えてみてくださいよ。ヴィラン連合がわざわざ誘拐したのは彼女の事を回収する目

的でもあつたかもしれないと……そして、雄英は実は彼女がヴィラン連合のものだったと一般には隠していたかもと……私は推測するのですが、そのところはどのようなのですか？」

フオウについては少なからず覚えがあるが、出久個人に関してはかなりの的外れも甚だしい。

相澤は俯いてしまい表情が見えなくなっていた。

根津とブラドも慌てだしそうになっていた。

そして少し時間が経過して相澤は少なからず険の籠った視線をその記者に浴びせながらも、煮えたぎるような怒りに苛まれようと、それでも冷静に言葉を発する。

「……………あなたの質問はかなりの的外れな部分が多いです。そうですね……緑谷さんの親御さんにも事前に許可は貰っています。いずれ彼女もヒーローを目指すのなら個性の開示も必要不可欠な事……緑谷さんには悪いですが、それが多少早まったと思つてもらい、今この場で彼女の個性とその由来についてお話します。

最後まで聞き逃さずにお願ひいたします。特に、あなた……これを聞いた後、二度と質問は出来ないものと思つておいてください」

相澤は質問してきた記者に警告……いや、最後通牒を言い渡した。

そして話始める。

「皆さんは超常黎明期以前に世間を賑わせた『猫又の怪』という都市伝説をご存知ですか……?」

それから相澤はまるで事前に計画していたかのようにフオウという猫の生涯、猫又という怪異になった事、高い知能を得て様々な妖術を会得、超常黎明期に入り妖術がすべて個性へと置き換わってさらには新たな個性も宿したこと、個性を奪うという男に捕まり幽閉生活と延々と生命力を吸わされ続けた事、ある時をきっかけとして逃げ出すことに成功したが死ねない体になっていた事、出久との出会い、そして最後に出久と融合してしまい今に至ることなど……それらを短めに、淡々と相澤は話しきった。

当然、オールマイトからワンフォーオールを引き継いだ事だけは伏せる形で。

「……………これで緑谷さんの事は以上です」

それでシン……………となる記者会見会場。

特に先ほどの質問をした記者は顔を青くして体をガクガクと震わせている。

……もう、この記者に未来はないであろう。

バツシングを受けることは確定した事であるのだから。

そんな記者の事を相澤はもう目に入れない。そしてまた言葉を発する。

「最後に、ヴィラン連合が今説明した緑谷さんの個性を利用してしようと狙っているのだとしたら、彼女は決して諦めずに今も抵抗を続けているでしょう。」

私は、私どもはそんな彼女の事を決して諦めません」

「その通りです。我々もただ手を拱いているわけではありません。現在警察とともに捜査を続けております。我が校の生徒は必ず取り戻します」

根津が相澤から言葉を引き継いでそう宣言する。

それをテレビ越しに聞いていた死柄木達はというと、

「デクちゃんってそんな過去があつたんですねー。血まみれになる姿、見たかつたですうー!」

「うっせーぞイカレ野郎。それより死柄木……どうするんだ？ 今この場にはその肝心の緑谷がない。お前の言う先生とやらは緑谷をどうするつもりなんだ……?」

トガがそれで想像してか頬を染めている中で茶毘は茶毘で死柄木にそう問いかける。

「知らねーな……。先生には先生の考えつてもんがあるんだろ？ それよりなー、緑谷にそこまで貴重な個性があるだなんて……『与える』に『生命力を奪う』……ヒーローにしとくには勿体ねえとは思わないか?」

「いいや、それは違う」

そこでスピナーが声を上げる。

「そんなヒーローともヴィランともとられない個性を持っていて、それでも人々のため
にあらうという志は真のヒーローに必要なものだ。」

だからこそステインはそんな彼女を生かしたのだろう……」

「スピナーは根っからのステイン信望者ね……」

マグネがそれのため息を吐く。

そんな一方で、アジトに周りにはすでにヒーロー達と警察が手配しているのを死柄木
達はまだ知らない。

まさか記者会見が行われていると同時に攻め込まれるなどと考えもつかないだろう。

オールマイイト等トップヒーロー達以外にもグラントリノや若手のヒーロー、同じく誘

拐されたラグドールを救出するために虎などが複数いて発信機の方やアジトの前で今か今かと突入するのを待ち構えていた。

「グラントリノ……今回は必ず奴も動き出します」

「オールフォーワンか……」

「ええ。ですから用心にかつ大胆にいきましょう」

「うむ。あの小娘も救い出さんと行けないしな」

「はい！」

二人がそう話をする。

「今回はスピードが命だ！ ヴイランにはなにもさせるな！」

塚内がそう叫ぶ。

そして事前に根津の仕込みやしておいたことを全員に伝えて、

「流れを覆せ!! ヒーロー!!」

そしてとうとうその瞬間が訪れようとしていた。

NO. 088 突入

……目を、覚まさないと……。

こんなところで寝ていたら、きつと……オールナイトや、みんなに迷惑をかける……。
でも、意識が暗い闇の中で抜け出せない……。

フオウ……僕は、どうすれば……。

——大丈夫だよ……。

——イズクは今は安心して眠っていて。その時がくるまで……。

そんなやり取りが出久の深層心理内でされていた。

フオウは一体なにをしようとしているのか……。

出久はいつたいオールフォーワンになにをされてしまったのか……。

爆豪達は八百万の発信機を頼りにとある倉庫まで足を運んでいた。

こんな辺鄙な場所だから目立たないだろう、最初はそう思っていた、だがしかし、だからといってまったく人が通らないほど田舎でもなくむしろ都会の一角にある場所なのだから、たまに酔っている通行人に声を掛けられることが数度。

特に変装をしている事もあってお茶子はともかくドレス姿の八百万は特に多く声を掛けられていて相当参っていた。

そんな事があつたが、なんとか狭い路地道に入ることになり成功して一同は発信機が示す場所を目視で確認できる位置までこれた。

「……それで、やおもも。発信機の示す場所はこの廃墟倉庫なのか？」

「間違いありませんわ。発信機もここだと正確に示しております」

「なにか中を確認できるものはないか……？」

轟がそう話すと待ってましたと言わんばかりに切島がとあるものを取り出した。

「おい、切島……おめえいつの間そんなものを買ったんだ……?」

切島が持っていたのは暗視鏡だった。

通販サイトで買っておいたんだというが用意がいいと言わざるを得ない。

「必要だと思ったんだ……なんに役に立つか分かんねーけどな」

「いや、切島君。いい判断だと思っぞ」

「確かに。おめえもやればできるじゃねーか」

「まあ、今は時間が欲しい。爆豪に切島。俺達がお前らを担ぐから中を覗き込んでみてくれ」

「わかったぜ」

「おう」

爆豪が轟の、切島が飯田の肩にそれぞれ乗って中を伺い見てみる。

「うおっ!」

そして開口一番で暗視鏡で見ていた切島が驚きの声を上げた。

「切島君! どしたん!? なにか見えたの!? デクちゃんいた!」

「い、いや……緑谷はいなかったんだが、代わりにすげーもん見つけちゃった。爆豪、おめえも中見てみる」

「お、おう……」

切島から暗視鏡を受け取った爆豪が中を覗き込むと、そこにはなんと剥き出しの培養液の中で保存されている大量の脳無の姿があつたのだ。

「あれ！ 全部が脳無だつていうのか!？」

さすがの爆豪もその光景には唾然とするしかなかった。

もしあれがすべて解放されたら混乱どころの話ではない。

……一方で、死柄木達がいるアジトには今か今かとオールマイト等ヒーロー達が突入を試みようとしていた。

景気づけにオールマイトはピザの配達員を演じながらも、

「——どうもー。ピザーラ神野店です!」

「あ……? そんなもの頼んだ覚えは——……」

死柄木が疑問に思う前にそれは起こった。

突如として盛大な破裂音とともにアジトの壁がぶち破られて、しかもなんとそれを行った人物はあのオールマイトだったのだ。

砂塵が舞い、アジトの中は一瞬にして廃墟と言わんばかりの惨状になり、ヴィラン連合の幹部達も慌て始める。

「な、なんだあ!？」

「ちい!? 黒霧!」

「はい!」

死柄木の指示で黒霧がゲートを展開しようとしたが、それよりも早く動いた人物がいた。

「先制必縛! ウルシ鎖牢!!」

シンリンカムイによるウルシ樹の束縛によって全員が縛られてしまう。

その中でもやはりまたいち早く抜け出そうと茶毘が炎を展開して束縛を燃やそうとしたのだが、突入してきたヒーローの中にはそれくらい簡単に予測していたために、

「逸んなよ!」

そうして高速の蹴りによって茶毘を一瞬で気絶させてしまったのがグラントリノというオールマイトの師匠であった。

こうして脅威になりえるだろう個性を持っているものは全員はほぼ拘束できたことになった。

「さすがだシンリンカムイ。そしてグラントリノ! さて、もう逃げられんぞヴィラン連合。なぜかって? 我々が来た!!」

そう、オールマイト達は記者会見を見ているだろうヴィラン達の隙を見計らってタイ

ミングよくアジトに突入したのだ。

こうなれば後は一網打尽というもの。

「攻勢時ほど、守りがおろそかになるというものだ。ピザラ神野店は彼らだけではない……」

そう言ってるでドアの隙間から抜け出てくるようにエッジショットが姿を現して、ドアのカギを開ける。

それを皮切りに突入してくる警察の突入部隊達。

外には中距離で支援包囲ができるエンデヴァーなどが待機しているために逃げ場はないというものだろう。

「さて、こうして会うのは初めましてだな。死柄木弔……よくも今まで好き勝手をしてくれたものだ」

「……………ッ！　なにラスボスが直接来てるんだよ……色々とこねくり回してやったつてのに……」

そう言ってる憎らしい表情でオールマイトの事を睨む死柄木。

オールマイトは涼しい顔をしながらも、

「死柄木弔……君にどういう事情があつてこういう事を起こしたのかは知らない……だが、もう君でいうゲームオーバーなんだよ。諦めたまえ」

「うるせえ!! 黒霧!! 全部だ! 全部持つてこい!!」

脳無の事だな? とオールマイトは思う。

だが、一足遅かったみたいである。

黒霧が汗を垂らしながらも動揺した風で、

「すみません死柄木弔……呼び出そうとした脳無なのですが、ないので……」

「ないだ?!」

その言葉に死柄木も動揺を隠せない。

なんせヴィラン連合にとって脳無は切り札に違いないのだから。

そんなヴィラン連合の事を憐みの瞳でオールマイトは見ながらも、

「情報通り、やはり君はまだまだ青二才のようだね。死柄木!」

「あ?」

「ヴィラン連合よ。貴様達は舐めすぎた。我々ヒーローを、警察のたゆまぬ捜査を、そして我々の怒りを!!」

オールマイトがそう話している間に、爆豪達が隠れて見ていた脳無保管倉庫には、ベ
ストジーニスト、ギャングオルカ、Mt.レディ、虎、インゲニウムなどの精鋭のヒー

ロー達が突入していた。

そして、

「脳無格納庫、制圧完了!」

ベストジーニストが個性である糸を幾重にも展開して脳無を縛り、Mt.レディなども巨大化して手掴みで脳無を捕獲していて、虎も捕まえられていたラグドールの奪還に成功してインゲニウムやギャングオルカは周辺を警戒していた。

「おいたが過ぎたようだな、ここで終わりだ死柄木弔!!」

そうしてオールマイトが威圧感を全開にしてヴィラン連合の幹部達を睨みつける。

その圧倒的な存在感で委縮してしまっている幹部達。

「終わりだと……? まだ、始まったばかりだ!正義だの平和だの……生きにくいものにとつてはこれ以上の格好なフタはない掃き溜めをぶっ壊すために、そのためにオールマイトはぶっ殺して取り除く!仲間も増え始めて来たんだ!こんなところで! 黒ぎツ!!」

「ツ!?!」

死柄木が黒霧になにかを命令する前に、その一瞬の間に黒霧の体を通過したものがい

た。

それは自身の体を薄く細く引き伸ばせる個性を持つエツジシヨットであり、エツジシヨットが通過した後の黒霧はまるで糸の切れてしまった人形のようにぐてつとして気絶してしまっていた。

「中を少々いじらせて気絶してもらった……死んではいけないが当分は意識の復帰は出来ないだろう。これぞ秘儀、忍法『千枚通し』……この男はヴィラン連合のブレーンであり最も我らが警戒し厄介な男……よって眠っていてもらおう」
「大人しくしておいた方がいいって事だ……」

そしてグラントリノは一人ずつヴィラン連合の幹部達のあだ名ではなく本名を次々と言っていく。

まるで逃げ場などもうないかのように……。

「これらは少ない情報の中、警察の方々が必死になって集めた事だ。もう逃げ場はないって事よ……なあ、死柄木、お前さんのボスの居場所を教えてくださいませんか？ ついでに緑谷の小娘の居場所も教えてくださいがあればありがたいんだがな……」

「……………」

死柄木は無言でやり過ぎず。

その無言の中では過去の出来事がまるで高速で回想されていく。

味方が誰もいなく、冷たい現実の中で誰も助けてくれない中で、そんな己に手を差し伸べて救ってくれたオールフォーワン。

『君は悪くない』と言って引つ張り上げてくれた。

そしてとうとう小言で憎しみの言葉を言い出し始める死柄木。

「死柄木……奴の場所を教えろ！ 奴は今どこにいる!? 死柄木!!」

「おまえが!! 嫌いだ!!」

死柄木の憎しみが臨界点に達し、大声で叫んだその瞬間だった。

ゲートの個性を持つ黒霧が気絶しているはずなのに、まるでヘドロのようなものが出現して次々と脳無が姿を現し始めた。

「これは!？」

次々とヘドロの液体から現れる脳無。

それで現場は混乱し始める。

アジトの中だけならまだしも外で待機していた警察やエンデヴァー達の場所にも脳無は出現して暴れ始めているのだ。

「脳無格納庫はどうなっている!? ジーニスト!……、ジーニスト!？」

ベストジーニスト達からは応答がない事に緊急事態を悟った一同。

そして数分前に少し時間が戻り、脳無を確保していたヒーロー達は、突如として誰かの気配を感じ取り、そちらへと視線を向ける。

そこには……。

「……………」

なんと、出久が虚ろな目をしながらもゆっくりとヒーロー達のもとへと歩いてくるのだ。

「緑谷さん！ よかった、無事だったんだね！」

インゲニウムが駆け寄ろうとするが、

「待て、インゲニウム！ 様子がおかしい……緑谷の後ろにいる奴は誰だ!？」

そう、出久の背後に薄っすらとだが大柄の人影が見える。

男は無言で立っていたのだ。

すかさずベストジーニストが糸を展開しようとするが、

「おっと……この子がどうなってもいいのかな?」

「ツ!!」

それで動きを封じられてしまう一同。

そして次の瞬間、
脳無格納庫をまるで地震が起きたかのような衝撃が襲ったのであつた……。

NO. 089 オール・フォー・ワン

黒い液体から次々と溢れ出てくる脳無の群れ。

それと同時に死柄木達にも謎の液体が纏わりついていき、次々と姿を消していく。

オールマイトが手を伸ばすも遅く、すでにヴィラン全員は液体に包まれていずこかへと転移をってしまった。

「これは!? まさかワープ系統の個性!？」

「俊典い……こいつはやばいぞ! 全部持つてかれちゃった!」

「はい……」

無念そうにそう呟くオールマイト。

だが物言わぬ脳無は感傷に浸る時間など待つてくれない。

数体がオールマイトへと引っ付いて足止めをしようとしている。

しかし、オールマイトはそれらすべてを『オクラホマ・スマッシュ』を放つことによつてアジト事崩壊させた。

脳無が暴れまわり混乱する現場で、オールマイトは外で戦っているエンデヴァーに声をかける。

「大丈夫かね、エンデヴァー!？」

「俺達の事はいい！ 貴様はさっさと向かえ！」

「すまない！」

そうしてオールマイトはもう一つの現場の方へと移動していった。

そして、もう一つの現場である脳無格納庫はすでに無残な事になっていた。

その場にいたヒーロー達もボロボロになって各々に横たわっている。

それを出久の背後にいる男は拍手をしながらも、

「やるねえ……No. 4 ヒーロー、ベストジーニスト。僕は全員消し飛ばすつもりで放ったというのに、全員の衣服を個性で瞬時に端に寄せるなんて……かなりの判断力が必要でできない事だ。あっぱれと言っておこうか」

「ぐっ……！」

ベストジーニストはその男を見ながらも作戦会議時の話を思い出していた。

必ずブレーンの存在がいると……。

そいつはオールマイトに匹敵する奴だと……。

今回はそいつは現れるかは分からない……。だが、用心深いために表には出てこないだろうと……。

「話が違う！……からどうしたって言うんだ!? この程度の事は一流は失敗の理由になんて——……!?!)」

なんとか個性を発動しようとして、次いで腹部に強烈な衝撃を受けてベストジーニストは沈黙してしまった。

その男はベストジーニストの個性を「弔とは合わないものだ」と言っ「いらぬ」と判断を下して即座に切り捨てた。

そして、それを隠れて聞いていた一同は呼吸困難になるほどの圧迫感で今にも泣きだし吐き出しそうになるのを必死に耐えていた。

「なんだ……。なにか起きた!?!)」

「一瞬で全部が掻き消されちまった……!)」

「逃げなくては——分かつているのに……!)」

「出久がそこにいるってのに……！」

「(デクちゃんを助け出せるチャンスだっけ言うのに……！)」

「(恐怖で体が動かない!!)」

六人はもう体を強張らせてしまっていてまるで石になったかのようにその場から動くこともできないでいた。

そう思っている間にも現場では何かの個性なのか次々とアジトにいたはずの死柄木達が転移してくる。

男は死柄木に顔を向ける。

「また失敗してしまったようだね、弔……。でも、決してめげてはいけないよ。そう、またやり直せばいいんだ……。仲間も取り返した。そして君たちの成果である緑谷君は今もこうして僕たちの手の内にある……」

そう言いながらも男は、出久の肩に手を置く。

「そう、いくらでもやり直せるんだ。生きている限りね。そしてそのために僕せんせいがいる。すべては、君のためにある……」

そう言つて男は——、いやオール・フォー・ワンは死柄木に手を差し伸べる。

そんな話を隠れて聞いていた爆豪の胸の内は、

「動け動け！ こんなところでへばっているわけにはいかねえんだよ!! 出久がもうすぐそこにいるんだよ！ 動け動け動け動け！ 俺が、今度は、助けるんだ!!」
そしてついに爆豪は恐怖を跳ねのけて動こうとして、だがしかし飯田に手で押さええられていた。

飯田の目には『必ず守る!』という信念しかないが、それでもなんとか押さえられるくらいには動くことができた。

八百万も同時に動こうとしていたお茶子の事を必死の顔で押さええていた。

「くそ！ くそつ!! なにもできねえのか!? 俺は、また助けられねえのか!?」
それで爆豪の脳内であつての幼き頃に助けられずに見ているだけだった惨めな記憶が蘇ってくる。

それはひどく爆豪の気持ちを乱していく。

今にも暴発してしまうのではないかと言わんばかりに血走った目を見開いて、飯田に押さえられている腕を今すぐにも払い落としたい気持ちが胸を満たす。

だが、それでもこの恐怖を抱いたままの状態で挑んだところで返り討ちにあつて、先ほど脳内を占めた自分たちが無残に殺されてしまう光景が現実になつてしまう。

まさに八方塞がりのような状態で全員はその場から動けなくなつていた。

そんな時だった。

「やはり来ているな……」

「ツ!？」

それで全員は恐怖する。

気づかれたのか、と。

だが次いでその場に新たな人物が遅れてやってきた。

そう、ヒーローは遅れてやってくると言わんばかりに、オールマイトがその場へと現れたのだ。

「オール・フォー・ワン！ 緑谷ガールも、今まで奪われたものもすべて返してもらおうぞ!!」

「また僕を殺すか？ オールマイト……」

宿敵同士がついに相まみえたのだ。

「（オールマイト!!）」

オールマイトの登場に爆豪達は希望の光を見た。

だが、そのオールマイト自身は険しい顔になっていた。

「オール・フォー・ワン！ 貴様……緑谷ガールになにをした……?」

オールマイトの視線の先には目が虚ろでオールマイトが助けに来たというのに微動だにしていないう久の姿が映された。

オール・フォー・ワンはニヤリと笑みを浮かべながら、

「いいねえ、オールマイト……その表情……実に愉悦の気分になれるよ……」

「なにをしたと、聞いている……!」

「そうカリカリしないほうがいい。ただでさえ少ない寿命が縮むぞ? なあに、ただ僕

の命令に忠実になってもらっているだけだよ」

「洗脳か……ひどい事をする」

「フフフ……僕にとつては誉め言葉だよ。予定は狂ったが、こういう状況になったのは

僕としても都合なんですね」

「先生……」

そこでようやく死柄木が口を出せる事ができた。

オール・フォー・ワンは忘れていたみたいに、

「ああ……呶、そうだったね。ごめんよ、別に君を除け者にするつもりはなかったんだ。

ただ嬉しくてね。そうだ、もう今回は逃げなさい……道は僕が作ってあげるよ」

オール・フォー・ワンはそう言つて謎の黒い樹脂のようなものを指から伸ばして黒霧にそれを突きさす。

「個性強制発動……!」

その瞬間、黒霧のワープが強制的に展開していく。

「先生は!？」

「僕の事はいい……君たちはさっさと逃げてまた再起を図るんだ」

「させんぞ!!」

「おっと、邪魔立てはしないでくれ、オールマイト!」

「ぐうっ!？」

オール・フォー・ワンは腕を幾重にも増幅させてオールマイトに向けてそれを放った。

そしてオールマイトはいくつもの建物を破壊しながらも吹き飛ばされていく。

「さて、今のうちだ弔……」

「だが、緑谷は……!」

「本当なら君に預けたいのだがね、まだ僕の用が済んでいないんだ。だから今回は残念だろうが諦めようか弔……まだ利用価値があったら緑谷さんは君に預けよう」

「……………わかった。引くぞてめえら」

「デクちゃん、また会えるよね……? バイバイ!」

そう言つてヴィラン達全員は黒霧のゲートを潜つてその場を後にしたのであった。

「おのれ! オール・フォー・ワン!」

ヴィラン連合全員が消えた後にその場に残されたオール・フォー・ワンと出久。

そこに吹き飛ばされてからようやく戻つてこれたのか、オールマイトが悔しそうに表

情を歪めていた。

「さて、それでは邪魔者もいない……君と僕とのちよつとしたショーでも始めようじゃないか、オールマイト……！」

手を広げながらオール・フォー・ワンはそう宣言した。

NO. 090 供給過多

オールマイトはオール・フォー・ワンの言う『シヨール』というものには一切興味を持たなかった。

だが、それが出久が関わってくるともなればどうやっても阻止しないといけない。

「……………シヨール、とは何の事だ？ オール・フォー・ワン……………」

「なあに、緑谷さんの個性を鑑みれば簡単な事だよ、オールマイト。彼女に、僕のこの傷を治してもらおうのさ、君の目の前でね」

「なっ!?!」

それを聞いてオールマイトは焦りを感じてしまった。

ただでさえ過去の戦いでオール・フォー・ワンによって重傷を負わせられるまでに至ったオールマイトの腹部の傷。

それを犠牲にしてオール・フォー・ワンは死んだと思っていたのに、蓋を開けてみればこうして生きていて再び目の前に立っている。

オールマイトと同様に弱体化はしているだろうが、それが治るとすれば過去の脅威が再び姿を顕現することになる。

「それとね。ラグドールから奪った個性『サーチ』で緑谷さんの事を調べさせてもらったが……ククク、実に面白い。緑谷さんはなんと『ワン・フォー・オール』を君から受け継いでいるじゃないか。君がなにかと緑谷さんを目にかけている理由が分かったというものだったよ」

「くっ!?!」

それでオールマイトは怯む様に焦った顔つきになる。

当然、それを隠れて聞いていた六人は、

「(ワン・フォー・オール……? 何のことだ?)」

「(受け継いだって……まさか、個性をですの!?)」

「(つて、事はなにか? 緑谷はオールマイトの個性を引き継いでいるつて事なのか!?)」

「(デクちゃんはそのこと一言も……)」

「(緑谷……)」

五人はそれで色々考察していたが、ただ一人、爆豪だけはなんとなくだが納得したような顔つきになっていた。

一年前にヘドロ事件の時にオールマイトに救われた自分達。

おそらくその前後で出久はオールマイトとなにかしらの接点を得たのだろうと……。
普段の爆豪なら隠していたことを怒るところだろうが、なぜかそんな気分にはなれなかった。

恐らく、オールマイトから隠してくれとか何とか言われていたのだろうという予想で。

そしてその爆豪の考えは当たっていたのだろう、オール・フォー・ワンは語りを続ける。

「フフフ……先ほどの記者会見は見させてもらっていたが、緑谷さんは将来は苦勞するだろうね。唯一『ワン・フォー・オール』の個性だけは隠してもらっていたのだから。

まあ、君が『ワン・フォー・オール』については隠しておいてくれと頼んだのだろうが、いつか個性を公開するときにはどう説明をつけるつもりだい……?」

「それは……緑谷ガールの個性の一つである『怪力』の力の一部だと……」

「相変わらず爪が甘いなあ……『ワン・フォー・オール』はそれだけの個性ではない事は君が一番分かっているはずだ。君以前の先代七名から細々と繋いできた僕という脅威を打ち倒すためのタスキだろう? それをまだまだ覚悟が完璧じゃない彼女に引き継がせてしまったのは君の失態だろうな」

そう言ってオール・フォー・ワンは薄く笑う。

だが、オールマイトはそれを即座に否定する。

「そんな事はない！ 緑谷ガールは私の後を引き継いで次の『平和の象徴』になりえる力を秘めているからだ！」

「それは……フォウの力も含めてのことかな？」

「ッ！」

それでまたオールマイトの表情が険しくなる。

「凶星のようだね。いいかい？ 君が思っているほどフォウとその個性は簡単なものでもない。初めて彼女と戦った時は個性の数という暴威がなければ僕も負けていたかもしれないからね。いや、首輪をするのには苦労したものだよ……」

そうしみじみと語るオール・フォー・ワン。

オールマイトはそれでフォウはどれだけの強さを持っていたのだ!と戦慄の感情を抱く。

そしてマスクで見えない口元でオール・フォー・ワンはニヤリと笑みを浮かべて、

「……だが、今こうして『フォウ』と『ワン・フォー・オール』を兼ね揃えた緑谷さんが僕の支配下にある。それが意味する事は分かるかい？ もう『ワン・フォー・オール』の燃えカスしか残っていないオールマイトお……？」

それでオール・フォー・ワンの笑い声が響き渡る。

それを出久が人質に取られているために悔しそうに拳を握りながらも見ている事しかできないでいたオールマイト。

「……さあて、少しばかり無駄話をしてしまったね。そろそろ僕の傷を治してもらおうかな」

「させな——……ッ！」

「言つたろう？ 今は僕の支配下だつて……」

出久の首に手を回してオールマイトに手出しできないようにするオール・フォー・ワン。

そんな事をされてまたしても体を強張らせるオールマイト。

その表情はもうかなりの怒りで燃え上がっていた。

「いい表情だね……オールマイト。そこでじっくりと見ているがいい。僕が『悪の帝王』として返り咲くその瞬間を……さあ、緑谷さん。『命令だ』。僕の事を治療してくれないかい？」

「………はい、オール・フォー・ワン」

そこで今まで黙っていた出久が無機質な声を出してオール・フォー・ワンの体に手を触れようとする。

「よすんだ、緑谷ガール!! そんな事をしてはいけない!!」

オールマイトは必死に叫んだ。

だが、一回出久は顔をオールマイトに向けて少し見た。

その瞳は何も映していなかった。

……だが、オールマイトはそこで出久の変化にいち早く気づいていた。

それはそうだろう。

出久の瞳の色は緑色だというのに、今は金色に輝いていたのだから……。

それが意味することは……。

「(信じて、いいんだな……? フォウ君……)」

それでオールマイトは沈黙してしまった。

オール・フォー・ワンはそれでとうとう諦めたと感じたのか出久に「さあ……」と指
示を下す。

オールマイトの方を見ていた出久はそれで視線を戻してオール・フォー・ワンの体の
傷の治療を開始するかののように淡い光が漏れだしてきた。

その変化はすぐに起こった。

「おお、おおおお!! 体に力が戻ってくるのを感じるよ!! これだ、これを僕は求めて
いた!!」

「……………」

オール・フォー・ワンはそれで歓喜の声を上げ始める。

それに対して出久は無言で治療を続けていく。

「もつとだ、もつと僕に生命力の力を……」

オールマイトによって抉られた顔面の傷はまだ治らずとも力が戻ってくるのを感じていたオール・フォー・ワンはまるで酔っているかのように「もつと、もつとだ」と言葉を繰り返す。

そしてもう内面的な治療は終わっているかもしれないところで、静かに顔を俯かせている出久の口が動いた。

「オール・フォー・ワン……」

「ん？ なんだい？ まだ終わらないのかい？」

「一つ聞きたいことがあるの……。私に与えてくれた『許容量キャ限界バを無くす』という個性の代わりになるだろう個性は会得しているの……？」

「ん……？ いや、会得してはいないが……それよりも、君はもしかして緑谷さんではなく……」

それを聞いたのがよほど嬉しかったのか、洗脳されているはずだというのに次第に出久の口元がまるで三日月のように笑みを浮かべている事に、そこで初めてオール・フォー・ワンは何かの見落としと過ちに気づく。

「それじゃー……オール・フォー・ワン。ここで果てて!!」

俯かせていた顔を盛大に上げた出久の……いや、出久の瞳は爛々と金色に輝いていた。

そう、あくまでオール・フォー・ワンが洗脳を掛けたのは出久の方であつて、フオウには一切個性の使用をしていなかったのだ。

そこから導き出される答えは、もう簡単だ。

怪異・猫又はついに憎つくきオール・フォー・ワンに牙を向いた。

ただの個性ならオール・フォー・ワンには敵わないだろう。

だが、今フオウには『与える』という個性がある。

『生命力を奪う』個性は出久との約束もあり、使うことはないが、逆に『与える』事なら無限とはいかずともできる。

そして、人一人の許容量キヤパに限界がない出久フオウとは違い、オール・フォー・ワンにはその制限がある。

今の今までその質問をする機会を殺意の爪を研ぎながらも我慢して窺っていたのだ。その結果が今から行われようとしていた。

すぐに逃げようとしたオール・フォー・ワンだったが、ピッタリと密着していた出久フオウから逃れる事叶わず、出久フオウから人の限界を超えた生命力……約1000年分を一気に送

り込まれてしまい、それはすぐに効果を發揮した。

「あああああああああ!!」　なんだ、なんだこれは!!　まるで体が四散してしまいそう
だぞ!!」

「もうあと一押しつてところかな……?」

さらに出久は追加で50年分の生命力を送り込んだ。

それでついに、オール・フォー・ワンは頭の中でなにかが破裂するような感覚を味わった。

地面に両膝をつきだして、うわ言のように、

「ぼ、僕は誰だ……?　一体……いや、僕は“オール・フォー・ワン”だ!　悪の帝王なんだ……!!　だが、そもそも……そもそも……何を……何を……何を……?」

と、まるで錯乱しているかのように意味不明な事を呟きまくっていた。

それで用は済んだのか出久はオールマイトの隣まで脚力強化で瞬時に移動をして、
「フフフフ……これでもうオール・フォー・ワンは終わりだね」

「これは一体……!!?　オール・フォー・ワンの身にいったい何が起こったんだい!!」

「いいよ、教えてあげる。約1000年分の生命力を一気に送り込んで『魂』という器がその生命力の量に耐えきれずに破損して零れだしてしまっただよ。自らの魂に刻まれている記憶とかも一緒に、ね……」

「それは……」

オールマイトはそれで苦い顔になる。

それは、なんと恐ろしい事か。

つまり今のオール・フォー・ワンは廃人に近い状態だという訳だ。

「……それじゃ、オールマイト。後の始末はお願いしていいかな？　そろそろイズクが個性の縛りが消えて目覚めてしまうかもしれないから……」

「始末……とは？」

「きつと、まだ完全に記憶が抜け落ちるまでの間に悪あがきをしようから」
フォウ出久の言葉通り、オール・フォー・ワンは一回オールマイトの方へと顔を向けたと思っ
 たら、

「おお！　おおおおお！！　オールマイトおお！！　そうだ！　僕をこんな目に合わせ
 た憎つくき敵ヴィラン！！」

ついにはオールマイトの事をヴィランと言い出し始めるくらいには倒錯してしまっ
 ている。

そして、オールマイトという目標を持ったオール・フォー・ワンは個性を高めている
 のであった。

「オール・フォー・ワン……哀れな姿だ。私が今度こそケリをつけてやろう。君はもう逃

げなさい」

「うん」

そう言つて出久フォウはその場から飛び跳ねて姿を消した。

「あつ！ 出久!!」

「(デクちゃん!!)」

それに気づいた爆豪達も出久の飛んでいった後を追つたのであった。

NO. 091 真実

オールマイトに「逃げなさい」と言われた出久は少しして足を止めてオールマイトとオール・フォー・ワンが戦っているだろう方角に取材のヘリが飛んでいくのをじっと眺めながらも、

「……これで、よかつたんだよね？ イズクがこれ以上私のせいで辛い目に合わないために……。私の判断は間違っていないなかつたんだ……」

自分自身にそう言い聞かせて出久は少しばかりの胸の痛みを感じながらも手をギュツと握りしめる。

そんな時だった。

その場に爆豪達が駆けつけてきた。

「出久!!」

「デクちゃん!!」

「……? あれ、なんで……」

出久はなぜ彼らがここにいるのか理解が及んでいなかった。

それはそうだろう、個性訓練の施設から相当距離が離れていたのだから。

さすがに八百万の個性のおかげとは分からなかった。

「緑谷君！ 無事だったんだな！」

「待て、飯田。……………お前は、緑谷じゃねえな？」

轟の言葉に全員がハツとする。

「ざっきのオールマイルト達の言葉数を聞かせてもらっていたが、お前は緑谷じゃなくて、

緑谷のうちに個性と一緒に宿る『フォウ』なんだな……………？」

出久はそれで頭を悩ませていた。

まさか先ほどの会話をこの六人に聞かれていたとは……………。

自身の事なら別にばれても構わないのだが、ワン・フォー・オールの事もつまりはバ

レた事になる。

出久が後々苦勞しそうなある意味厄ネタだろう。

それでどう返事を出そうか迷ったが、すぐに出久は領きをして、

「そうだよ。私はフォウ。イズクに宿っている意思だよ」

「そうか……………、いま、緑谷はどうなっている……………？」

「安心して。まだオール・フォー・ワンの洗脳の縛りが完全に解けていないから意識は覚

醒していないけど、そろそろ目覚めると思う。私もイズクが目を覚ましたら内に引込むよ」

「そうか……」

それで全員は一応は安堵の表情を浮かべるが、そこで爆豪が新たな質問をする。

「それで、てめえはこの件については出久に教えるのか……？」

「うーん……できれば隠しておきたいけど、きつといずれは知っちゃうと思うから、だから私の代わりにみんなが教えてあげてくれない？ 何も知らずにいつの間にか解決していました、じゃイズクも納得しないと思うから」

「だろうな……まあいいが。それと、もう一つだ。出久は、オールマイトの個性を引き継いでいるっていうのは本当の事なのか……？」

「そこも、聞いていたんだね……。うん、そうだよ」

「なんで、出久はその事を俺達に教えてくれなかったんだ……？」

「そうだぜ！ 教えてほしかったよ！」

切島もそこで声を上げるが、一回出久は難しそうな顔をしながらも、

「それは、難しかったんじゃないかな……。この際だから話しちゃうけどこの『ワン・フォー・オール』という個性は私とは違って、オール・フォー・ワンの兄弟の人からイズクまで八代に渡って受け継がれてきたオール・フォー・ワンという脅威を倒すための

力だし、今まできつと信頼を置ける人以外は秘密にしてきた力だと思ふから。実際、イズクもオールマイイトに『絶対に言つてはいけない。狙われるからな』と言われていたしね」

「そんな個性があるなんて……」

「驚きの内容だな」

「デクちゃんはそんな秘密を抱えていたんやね……」

全員がそれで出久の背中に背負わされている力と覚悟を悟る。

それを感じたのか出久フオウも苦笑いを浮かべながらも、

「できればイズクが起きても怒らないであげて……。そしてできればこの件に関しては今この場にいる全員の胸の内だけにして誰にも話さないで。ただでさえ私の個性でイズクはこれから大変な思いをするはずだし、この事まで世間に知らされちゃったら余計に今回みたいに狙われる事になつちやうから……」

「……………ああ。わかつたよ」

爆豪もそれでこれからの出久の苦労を考えて頷いた。他の五人も。

それを見られたのがよほど出久フオウにとっては安心できたのか、

「お願いね。あ、イズクがそろそろ目覚めるから私は内に引つ込むね」

そう言つて出久フオウは金色に輝く瞳を閉じる。

しばらくして目が開かれると瞳の色は緑色に戻っていた。

そして、

「あ、あれ……？　ここは……あ！　かつちゃん！　それにみんなも！　なんでここにいるの!?　僕は捕まっていたはずじゃ……」

そんな、どこか抜けた反応をしている本来の出久の姿を見れて全員はまたしても安堵の表情を浮かべる。

「デクちゃん!!」

我慢できなかつたのか、お茶子が涙を流しながらも出久に抱き着く。

「麗日さん……ごめんね。なんか、心配かけちゃつたみたいで……」

「いいんだよ……。デクちゃんが無事ならそれだけで……」

「うん……」

それを皮切りにして爆豪も含めて全員が出久に寄り添っていった。

しばらく話をしている、フオウについて出久に話した。

「そっか……フオウが助けてくれたんだ……」

「ああ。それと今、オールマイトがためえを攫った奴らの元凶と戦っている……」

「オールマイトが!?!」

それで慌てた出久はみんなとともに戦いが中継されているところまで急いで向かつ

た。

そして、そこに映されている光景に絶句の表情になる。

そこにはボロボロの姿になっているオールマイトの姿があったのだ。

少し時間は遡って、出久^{フオウ}が逃げていった後の事、

「俊典!!」

「ツ！ グラントリノ！」

そこにグラントリノが遅れて駆けつけてきた。

そしてまるで暴走しているように力を溜めているオール・フォー・ワンの姿を見て、

「……どういふ状況だ？ あのオール・フォー・ワンのイカレ様はなんだ……？ 手短に教えろ」

「はい」

オールマイトは先ほどまで行われていたオール・フォー・ワンと出久^{フオウ}のやり取りを手短に伝えた。

そして、

「そうか……。小娘は無事って事でいいんだな？」

「ええ」

「しかし……。それでオール・フォー・ワンはああなっちまうなんて、哀れな姿だな」

「ええ。ですからここで決着を付けなければいけません」

「そうだな。俊典、まだ限界は来ていないな……。？」

グラントリノはそう聞く。

まだ限界は来ていないとはいえ、一応は体が治っているオール・フォー・ワンを相手にするのだ。

それなりに保ってもらわないと困る。

オールマイトは笑みを浮かべながら、

「多少は大丈夫でしょう。感覚としましてはもうそれほど時間もありませんが、それでもオール・フォー・ワンだけでも倒します」

「そういう事を聞きたいわけじゃねえんだが……。まあ、いい。俊典、気い、引き締めていくぞー！」

「はい！」

そして二人はオール・フォー・ワンを見る。

力を溜めていたのがようやく完了したのか、

「オールマイト!! 貴様を、この手で、葬る!! 僕の個性で!!……いや、僕の個性はなんだ? どう使えばいい? ええい、鬱陶しい……どんどんと知識が欠落して零れ落ちていくようだよ……。だが、これだけでも貴様に忘れる前に伝えなければいけないなあ……!!」

「なにを……ツ!？」

「貴様が先ほど会っただろう死柄木弔はなあ、志村菜奈の孫だ!」

「ツ!？」

それを聞いてオールマイトは一瞬にして表情を凍らせる。

グラントリノも顔を真っ青にしている。

死柄木弔が先代ワン・フォー・オールの継承者であり、オールマイトの師匠でもある『志村菜奈』の孫だという真実に……。

「う、嘘を言うな!!」

「今の僕の現状を鑑みて嘘を言える状況だと思えるかい……? あつ……そもそも、志村菜奈とは……死柄木弔とは……誰だ……? 僕にとって、どんな人なんだ……?」

「オール・フォー・ワン……」

オール・フォー・ワンはもう死柄木達の事でさえ、つい先ほどまで覚えていたのに記

憶から欠落してしまったようだ。

これでもう改めて確かめる事が不可能になってしまった。

まだまだオール・フォー・ワンしか知らない真実がいくつかあるであろうが、もういずれば記憶をすべて欠落する運命にある彼には聞けようがない。

「ああっ！ もう、どうでもいい！ オールマイト！ 貴様を倒せれば僕にとって他の事なんて些細な事なんだ!! 行くぞ!!」

オール・フォー・ワンらしからぬ自ら特攻をしかけてきたのだ。

それでまだショックが抜け切れていないオールマイトは素直に個性で強化された拳を頬に食らって吹き飛ばされてしまう。

「俊典!? ええい、今は真偽を確かめることも不可能なんだ！ とりあえずはこの脅威を退ける事しかできないとは……!」

オール・フォー・ワンに個性による蹴りを見舞うグラントリノであったが、それもなにかの個性で防がれてしまう。

「無駄だよ！ 僕は誰にも倒せない！ さあて、どの個性を使おうかな?……何が使えるのかな?……まるでビックリ箱だね。自分ですらなにを使うか判断できない」

「オール・フォー・ワン!!」

そう言いつつオール・フォー・ワンはなんとか立ち上がって向かってくるオールマイ

トに向けて無茶苦茶に色々な個性を使ってオールマイトを傷つけていく。

「ぐあっ!？」

「ぐうう!!」

それでもまたしても吹き飛ばされる二人。

そしてオール・フォー・ワンは手をかざして、

「これは、使えるかもしれないね……」

なにかの力を溜めていくオール・フォー・ワン。

当然避けようとするが、

「避けてもいいのかな……? 君の後ろには助けを乞う人がいるよ?」

「ッ!？」

言葉通りにオールマイトは後ろを振り向くと瓦礫に埋まりながらも助けの言葉を出

している人の姿があつた。

グラントリノが助けようとするが、

「遅い!!」

ついに放たれた衝撃はオールマイトに向かって走る。

オールマイトは避けることもできずに直撃を受ける。

そして、

「まずは、惨めな姿を晒せ。オールマイト。これで僕とお相子だ」

そこには血だらけの拳を構えながらも、マツスルフオームからトゥルーフオームに戻ってしまっていてボロボロな姿のオールマイトが立っていた。

空には取材のヘリも飛んでいて、オールマイトの姿は全国中継に晒されてしまつて困惑の言葉が各地で不安とともに伝播するのであった。

NO. 092 残り火のワン・フォー・オール

取材のヘリに乗っているリポーターがその光景を見て、己の目を疑っていた。

だが、それでも伝えるものとして真実を伝えないといけない。

いま、目の前で起きている衝撃な光景を。

『み、みなさん……ご覧になつていてるでしょうか？ あの、オールマイトが……姿がしぼんでしまつています……私自身信じられませんが……これが真実の光景です……』

あれは、果たして本物のオールマイトなのか……』

と、疑いもしないのにそんな事を呟いているのはもう仕事柄故だろう。

喋る言葉がところどころ震えている。

それは、映像を見ていた視聴者達も同じ心境であろう。

どこかしこで『偽物……？』や『あのガイコツ誰だ？』などと、オールマイトの真実の姿を知らなかった者たちからすれば当然の思いであった。

しかし、知っているもの……特に出久は違った。

出久の周りで驚愕の表情でその光景を見ていたクラスメイト達をよそに、

「そ、んな……オールマイトの、ひみつが……」

まるで放心しているかのようにそう独り言を呟く。

爆豪はそんな出久の言葉を聞き逃さなかったために、

「(出久……てめえ、そんな事まで抱え込んでいたのか!?)」

出久の今までの学校でのオールマイトとの不審な行動を思い出し、どれだけ胸に隠し事を抱えていたんだと今更になって爆豪は、出久の事を理解できていなかったことに悔しく思う。

だが、それでもこれからは俺が、俺達が出久を支えていかないといけないと、今はそう思うだけでオールマイトの映っている映像を凝視した。

「いい格好になったじゃないか、オールマイト。そんな姿を世間に晒してしまつて今の思いはどうだい……?」

「……………」

オール・フォー・ワンはそう言つてオールマイトの事を笑いながらも話しかける。

しかし、それでもオールマイトの目は死んでいなかった。

トゥルーフォームに戻ってしまっても、その眼光はいまだに衰えずにオール・フォー・ワンの事を睨みつけている。

「……………たとえば、身体が朽ちて衰えようとも……………そして世間にその姿が晒されようとも……………それでも私の心は依然『平和の象徴』だ！ 貴様が奪ったと思っっているだろうが、私はそれでもこの姿を恐れない！ いずれはバレる……………それが今来ただけの事だ！！ 一欠けらでも奪えると思わない事だ！！」

「そうか……………くそつ……………即興の出し物では君の思いは奪えないという事か……………惜しいな。僕の記憶の欠落がなければもっと君の事を苦しめられただろうに、もう出すものがないじゃないか……………」

オール・フォー・ワンはそれでため息を吐く。

そして再度視線をオールマイトに向ける。

その視線は先ほどから何度もぶれていた。

目を過去に潰されてしまったために『赤外線』という個性でなんとか感じ取っていたが、その個性すらも忘れそうになっていて何度も視界が暗くなったりを繰り返しているのだ。

……………時間がないと……………そう感じ、オール・フォー・ワンは早めにケリをつける事を決

めた。

「ああ……もう誰の事だか思い出せないが、君にとつてのバッドな内容をこれ以上教えてあげられないのが実に残念ではあるよ」

まだ死柄木弔の事を覚えていたのならもつと丁寧にオールマイトに色々話していただろう、もうそれは叶わない出来事だ。

「……ならば、君を物理的に潰して命を奪ってあげようじゃないか!」

「くるか……!」

オールマイトもほぼ満身創痍……。

だが、背後から聞こえてくる『オールマイト……お願い……救けて……』という言葉
を胸に秘めて再度今にも消えそうになっているワン・フォー・オールを燃え上がらせる。
「助けるよ……私はまだまだ『平和の象徴』としての役目を果たしきれないのだから
……」

オールマイトはまだ諦めていない。

そして民衆もまだオールマイトが負ける光景など見たくない。

ゆえに、声を張り上げて応援するという光景が各地で繰り広げられていた。

出久達も、その声を聞いて『頑張れ! 負けるな! オールマイト!!』と声を張り上げる。

「必ず救うよ！　それが、ヒーローというものだ!!」

そして右腕を部分的にマッスルフォームにして立ち向かおうとするオールマイト。オールマイトはその胸の内では師匠である『志村菜奈』の教えを思い出していた。

『限界だーって感じたら思い出せ。何の為に拳を握るのか……原点^{オリジン}つて奴さ！　そいつがお前を限界の少し先まで連れて行ってってくれる!』

そんな、いつか教えてもらった教え……。

「(そうだ！　思い出せ！　もう、私には師匠の家族である死柄木弔は救える力はもう残されていないのかもしれない……それでも、今この場所で奴を倒して泣いている人達の涙を無くすことぐらいはできる!)」

その思いとともに最後の力を出そうと踏ん張るオールマイト。

「渾身、か……文字通り最後の一撃と見た……実はね。僕もそろそろ色々限界のようですね、君の事すら忘れそうになっているんだよ……実に悔しい……あの猫にも仕返しをしたいところだが、彼女の名前ももう、思い出せないんだ……」

実に悔しそうにそう語るオール・フォー・ワン。

そこに遠くから炎が飛んでくるのを感じし避ける。

見た先ではエンデヴァーや他のヒーロー達が駆けつけてきていた。

「なんだ貴様……なんだ、その姿は!?!　オールマイトッ!!」

エンデヴァーが叫ぶ。

それもそうであろう、エンデヴァーは自身ではオールマイトを越えることはできないと悟って、息子の轟焦凍に後を託すしかないと心を鬼にして家族たちに接してきたというのに、その超える壁が今となっては瀕死の姿で立っているのだから。

「君は……誰だったかな？……そう、炎使い……名前を思い出すことができないが、邪魔をしないでくれないか？ 観戦するだけならじつと見学をしてくれ」

「黙れ、破壊者！ 俺達は助けに来たんだ!!」

そこでエツジショットがオール・フォー・ワンに攻撃を仕掛けていた。

シンリンカムイが負傷したヒーロー達を確保している。

他にも虎がなんとか立ち上がってオールマイトが守った人を救助している。

虎は語る。

「オールマイト……我らではあなたの重荷をすべては背負えないかもしれない……それでも、少しでもいいから持たせてくれ……」

「虎……」

「そして、あの邪悪を打ち倒してくれ……みんなあなたの勝利を心から願っている。たとえどんな姿でも、あなたはいつまでもみんなの中ではナンバーワンヒーローなのだ！」

そしてこんな場所だから聞こえてこないというのに、この中継を見ている人々の自身を応援する声が聞こえてくるような錯覚をオールマイトは感じていた。気持ちが暖かくなってくると同時に力がさらに漲ってくる感覚を味わう。

——ワン・フォー・オール。そして、オール・フォー・ワン。

今は敵同士である。

だが、その言葉の本来の意味は、『^{ワン}一人は^{フォー}みんなのために ^{オール}みんなは^{フォー}一人のために』。そういう意味が込められた言葉なのだ。

それならばと、ワン・フォー・オールを担うものとしてみんなのために頑張らねばならない、とオールマイトは最後の力を振り絞る。

「……煩わしい」

瞬間にして、オール・フォー・ワンの周囲に大量のエネルギーが発生して周りを吹き飛ばしていく。

そしてそれが形となってオール・フォー・ワンの右腕が人ならざる形へと変容していく。

「君を確実に殺すために、今僕が思い出せるうちの強化系の個性の掛け合わせで強化し

た拳で「君を殴る」!……もう、僕もこれが最後の渾身の一撃だろう。これを放ったが最後、僕もすべてを失うと察した……だから最後まで付き合ってもらおうぞ、オールマイト!!」

そしてオールマイトへと向かって加速したオール・フォー・ワンが突っ込んでくる。オールマイトもそれに迎え撃つために拳を放つ。

二人の拳が衝突して、凄まじい爆発が起こる。

だが、ここでもオール・フォー・ワンは抜かりがなかった。

『衝撃反転』という個性でオールマイトの力をそのまま返して振り潰そうとしたのだ。

それでも、

「お、おとおおお!!」

オールマイトは一瞬にして右腕の力を抜いて左腕に残っている力を移行させて膨らんだ腕で殴った。

それは、致命傷ではなかったために浅い打ち込みだったであろう。

「お互いに隠し芸があるが、これも最後のようだね! 力が入っていないぞ!」

「そりゃ……腰が入っていないからな!!」

オール・フォー・ワンの拳をいなしたオールマイトは、再度右腕に力を込めて振り切つて丸腰のオール・フォー・ワン向かって今度こそ最後の拳を振りぬこうとしていた。

「おおおおおおおおおッ!!」

——さらばだ、オール・フォー・ワン……そして、さらばだ、ワン・フォー・オール!

「ユナイテッド・ステイツ・オブ・スマッシュッツッツ!!!」

渾身の叫びとともにオールマイトの拳がオール・フォー・ワンに突き刺さって、そしてついにはオール・フォー・ワンは倒れ伏したまま沈黙したのであった。

まだある意識の中で、

「(僕は……ぼくは……ボクは……、誰なんだろうなあ……もう、なにもかも分からなくて、どうでもいいなあ……)」

ついに自身の事すら記憶から抜け落ちてしまつて完全にオール・フォー・ワンと呼ばれた男は自我を失つた。

それとは対照的に、オールマイトは震える腕を天に掲げながらおそらく最後になるであろうマッスルフォームになって勝利のスタンディングをした。

オールマイトの勝利に賑わう中で、出久はその光景を無言で見ながら、

「……行かなきゃ……」

「えっ……?」

出久はオールマイト達がいるであろう現場の方へと走り出して行ってしまった。
一同はそれで「緑谷!」「デクちゃん!」と叫びながらも出久の後を追っていくのだった。

NO. 093 出久の個性の真価

出久は走った。

オールマイト達のもとへと……。

今自分ができる事、それを今こそ全うするために。

ヴィラン連合に攫われてしまい、オールマイトだけではなく様々な人たちに大変な迷惑や苦勞を掛けてしまった。

おそらく、自身が洗脳を掛けられている間にヒーロー社会はかなりの揺さぶりが掛けられてしまつて混乱が続いているだろう。

拳句にオールマイトがあんな事になつてしまい、実質で引退を余儀なくされてしまうだろう。

ならば、おこがましくても……恥の上塗りをする事になつても、自身の個性で出来ることをしないとイケない。

そう考えた出久は必死に走った。

背後から追いかけてくる爆豪達も置き去りにしながらも。

そして到着した場所には今すぐにも取材を開始しているリポーター達が現場の中心を開始していた。

そんな中のリポーターの一人が、出久の姿を気づく。

「おい、あの子って……」

「ああ！ 緑谷出久さん！」

記者たちはすぐさま出久の姿をカメラに映し出し出していく。

だが、出久はそんなものになど目に入れずに一直線に警察で一番偉い人のもとへと歩いていく。

「少し、よろしいでしょうか……？」

「君は……。誘拐されていたはずの緑谷さんだね？」

「はい。それでなんですけどこの場に現れたのは他でもありません。僕に『個性』の使用の許可を許してください」

「そ、それは……」

警察の方でも出久の個性については記者会見を見ていたために知っている。

出久がなんの個性を使いたいかもすぐに察することができた。

「だが、それでは法に触れてしまうが……」

「構いません。それに今この状況で僕の個性を使わなかったら、きつとたくさんの人に迷惑をかけてしまった僕自身が僕自身を許せなくなってしまうです!」

「だがね……」

それで考え込む警察の人。

できれば治療系の個性の持ち主は今という現場でたくさんの負傷者がいるであろう場では活躍してもらいたい。

しかし、まだ出久は仮免すら会得していないのだ。

そんな出久と警察のやり取りもすっかりと撮影されているために固唾を呑んで見守られている時だった。

「……………私からもお願いしてもいいかな」

「オールマイト!?!」

そこに体を動かすことも億劫な状態のオールマイトが歩いてきた。

「責任は私が取る……。だから彼女の思うとおりにさせてやってほしい……」

「オールマイト……」

それでしばらく考えた警察の偉い人は、一度深く頷いた後に、

「分かりました。では不肖この私も後で上に掛け合ってみます。緑谷さん、君の癒しの個性で人々を救ってくれ……」

「はい！ それじゃまずは、オールマイトから……」

それですぐさま出久はオールマイトへと近づいて与える個性を使用する。

オールマイトを中心に光が広がっていき、先ほどまでオール・フォー・ワンとの戦いで傷ついた身体が次第にどんどんと傷が治っていく。

そんな光景を見せられて黙っていられるほど取材班達も呆けていない。

「早く！ 早く撮影して！ すごい回復力を発揮しているわよ！ オールマイトの傷が治っていく！」

「は、はい！」

オールマイトの傷を癒す出久の姿はすぐさまに全国放送に流される事になる。

その光景を見て、あるものは奇跡だ、またあるものはこれなら負傷者も存分に助かるかもしれない、またあるものは謝罪会見での情報も鑑みて、自身の命すら見境なく消費して癒す姿に神聖視のような感情を抱く。

様々な感情が渦巻く中で、今回の戦いでの負傷は完全に癒えていた。

オールマイトはそれで何回か腕を振るって、

「うん……。改めてすごい性能だね。緑谷ガール……」

「でも、もうワン・フォー・オールは……」

「うん。もう残っていない……でも、よかつたんだよこれで……それより、まだ君の役目

は終わっていないよ。頼む、救ってやってくれ」

「はいー」

それから出久は今現在も負傷者達の事を救出中のヒーロー達のもとへとすぐさまに足を運んでいき、

「ヒーローの皆さん！ 僕のもとに負傷した人達を連れてきてください！ 僕が治します!!」

「わかった!」

「もし、腕などが欠損している人とかはその部分も一緒に持つてきてください！ 必ず繋げます！ たとえ致命傷で虫の息だとしても、生きている限りは僕が生命力を送り続けます！ みなさん、よろしくお願いします!!」

「「「わかった!!」」」

それから次々と瓦礫の中から発見されてきた負傷者達は出久のもとへと運ばれていく。

そのたびに出久は生命力を与えて傷を治して、そして消えそうな命を活性化させていく。

時には足や手が千切れている負傷者もいたが、欠損部分でさえも余計に生命力を注いで時間はかかったが繋いでみせた。

そのたびに「ありがとう……」と感謝の言葉を贈られていた。

出久はそれでも謙虚に「今の僕にはこれしかできませんから……」と繰り返しそう言っていた。

そして、発見されてこない行方不明者がまだ大勢いたが、そこで出久はとある者たちだけにだけ聞こえる叫びを上げる。

するとたちまちに野生の猫たちがたくさん出久のもとへと集まってくるではないか。そう、『猫の言葉を理解できる』個性で猫たちを呼び寄せたのだ。

「お願い！ みんな、まだ見つかっていない行方不明者の人たちを探して!!」

「[[[[[にゃー!!]]]]」

すぐさまに出久のお願いで散っていく猫たち。

それで負傷者の発見の作業効率がさらに上がっていき、スネークヒーローのウワバミはその出久の猫の言葉が分かり、そして命令できる個性に思わず舌を巻いたそう。

そんな、人命救助に適した個性の使用にずっと出久の光景を撮影していたリポーター達は、

『ご覧下さい！ 緑谷出久さんのもとへと次々と負傷者が運ばれてきて、まるで奇跡のような個性を駆使して死傷者になりえる人の傷すらもすぐさまに治していきます！』

当初の絶望的な状況からもしかしたら被害者の数はかなり減るかもしれませんが!」

そこにシンリンカムイがオール・フォー・ワンとの戦いで負傷したベストジーニストやMt.レディ、インゲンニウム、ギャングオルカなどを連れてきた。

「頼む……。彼らを癒してくれ」

「はいー」

そして出久はすぐさまに四人を癒していく。

四人の中で一番オール・フォー・ワンにやられた傷が深かったベストジーニストも傷が治ったのを自覚したのか目を覚まして、

「む……。私は確かあの元凶に腹を深く抉られたはずだが……」

「あれ? 傷が……」

「これは……暖かいな」

「ここは……。緑谷さん!? そうか、また君に助けられてしまったんだね……」

と、次々と目を覚ましていくヒーロー達。

そんな、驚愕の光景にオールマイトはある意味合格点を出しながらも、ふと指を撮影しているリポーターの方へと向ける。

それに気づいたのか撮影されるオールマイト。

オールマイトはただ一言。

「次は、君だ……」

と、もうワン・フォー・オール。オールの力は残されていないからもう『平和の象徴』として活動はできないが、それでもいまだ見ない犯罪者への警鐘の言葉を言った。

それによって、さらに歓喜の声を上げる人々。

出久は負傷者の傷を癒しながらも、その光景を横目で見ていたために、

「（オールマイト……もう、出し切ってしまったんですね……）」

と、深い悲しみを感じていた。

……そして、最後にそんな出久の活躍する姿を遠目で見ていた爆豪達は、

「もう、この場では我々は必要なさそうだな」

「そうだな。緑谷もこのまま個性の使用が終了したらそのまま直で警察に連れてかれると思うからな……」

「でも、デクちゃん……大丈夫かな」

「きつと大丈夫ですわ。次に会う時には私達も今までと変わらずに接しましょう」

「だな。それが一番緑谷にとっては嬉しいだろうしな」

と、もうこの場では自分達には何もできないと口々に言っている中で、

「(出久……できれば一言くらい言ってからいけや、クソが……)」
と、一種の疎外感を爆豪は味わっていた。

このままでは出久に置いてかれてしまうばかりだ。

俺も、もつと出久の事を背負えるように力を付けないといけない……と爆豪は奮起していた。

そしてそのまま爆豪達は解散するためにそれぞれの自宅へと戻っていったのであった。

出久はというと、しばらくして落ち着いた時にそのことに気づいて後でみんなには謝ろうと思っていた。

そんなそれぞれの思惑の中で、神野区の悪夢と後に騒がれる事件は、それでも出久の活躍によって死傷者は奇跡的にほぼゼロの状態で幕を下ろしたのであった……。

最後に、オール・フォー・ワンは翌日には刑の確定も待たずに特殊拘置所、奈落の意味を持つ『タルタロス』に収監されたのだが、肝心のオール・フォー・ワンがもう自分自身の事でさえ分らない状態のために、そしていずれは生命力がすべて零れだしてしまうこともオールマイトから聞かされていたために、しかしそれでも放つてはお

けない、という事でタルタロス内の施設で入院する形に落ち着いたのである。

……こうして、ヴィラン連合による開闢行動隊の起こした事件から続いた一連の騒動は、一応は鎮まったのであった。

オールマイトの引退という報道が流れたが、それでも民衆は仕方がない……と思うしかなかった。

出久の個性で表面的な傷は治ったとしても、もうマツスルフオームにすらなるのが困難な状況でヒーローを続けることは非常に難しいのだから……。

NO. 094 とある掲示板でのやり取り・その2

【神野の悪夢?】オールマイト、引退【神野の奇跡!】

01:名無しのヒーロー 投稿日:2****/*/*/*(*) **:*:*:*

ID:*****

オールマイトの引退が発表されたけど、お前らはどう思う……? それとあの緑谷ちゃんの個性はすごいな。

02:名無しのヒーロー 投稿日:2****/*/*/*(*) **:*:*:*

ID:*****

オールマイトの引退は、まあ仕方がないと思うよ。

なんか引退発表では5年前からともと今回戦ったヴィランとの戦いで胃の全摘出とかで憔悴していたのに、それを隠して今まで戦っていたらしいし。

緑谷ちゃんが原因で起こった事件とも言われているけど、それを払拭するかのように犠牲になりかけた人たちを全員救ったわけだしな。

03：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/* (*) **：***：**

話じゃない？
緑谷ちゃんの話題とえば、あの雄英の謝罪会見での記者つて、もう解雇されたつて

04：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/* (*) **：***：**

頂
ま、当然の結果だな。よもや緑谷ちゃんの事を改人・脳無と同列に扱うなんて愚の骨

05：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/* (*) **：***：**

あの事件での救出されたものが通りまーす！

今は帰る場所が無くなっちゃったんでネット喫茶でこれを打ち込んでるんだけど、マジで緑谷ちゃんは俺の天使だ。

実はというと、俺……両足を切断されていたんだが、緑谷ちゃんに綺麗に繋げてもらったんだ！

06：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*）**：**：**

ID：*****

<<05

おめ！

07：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*）**：**：**

ID：*****

<<05

よかったな！

08：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*）**：**：**

ID：*****

◇05

緑谷ちゃんに感謝だな。

09：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*）**：**：**

ID：*****

マジであんときは絶望していたんだけど、こうして五体満足で無事に生きていられるからこれからは命を大事にするよ……。

そして、これからは緑谷ちゃんの事を一ファンとして見守っていくことにする。

10：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*）**：**：**

ID：*****

でも、いつだったかどこかのスレッドで緑谷ちゃんの話題が出た時あったじゃない？
まさか、あの時に話題になった「猫又の怪」のご本人が緑谷ちゃんに宿っていたなんてな。

11：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**(*) **：**：**
ID：*****

そうそう。

名前はフオウちゃんだっけ。

超常黎明期以前から個性とは別の力を宿していたなんてな。

12：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**(*) **：**：**
ID：*****

彼女の過去も少なからずイレイザーが話していたけど、確かにあんな内容を普通に話せるわけではないと思う。

世間では少なからずなぜ隠していた?とか話題になっていくけど、今回はそのせいで後手に回ったとはいえ誘拐されちゃう原因にもなったわけだし。

だから今後の緑谷ちゃんは大変だろうな。

13:名無しのヒーロー 投稿日:2***/*/*/*/* (*):**::**::**

ID:*****

そうそう。

治癒系の個性なんて同じく雄英に勤めているリカバリーガールがいるけど、他にはこれといって有名な人は数少ないじゃん?

いても大体が病院務めだし。

14:名無しのヒーロー 投稿日:2***/*/*/*/* (*):**::**::**

ID:*****

探せばどこかにはいると思うけど、珍しい個性だしな。

それに緑谷ちゃんに比べたらほとんどが下位に下がっちゃうだろうし。

15：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*） **：***：**

ID：*****

まず、緑谷ちゃんは『与える』という個性で自身の命を削って治癒をするという話だから今回の件でかなり消耗はしたと思う。

それでもまだ3万歳以上の生命力があるというのはすごい話だけど……。

16：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*） **：***：**

ID：*****

ケガしても勝手に治癒していくとかいう話だし、かなり長生きしそうだけど……ヴィラン犯罪が起こるたびに怪我人とかでて治癒していたら尽きるのも結構早いんじゃないかな？

17：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/*（*） **：***：**

ID：*****

まあ、そこで出てくるのが『生命力を奪う』個性なんだけど、フオウちゃんと緑谷ちゃん
の過去も聞いて生命力を奪う行為は禁忌していそうだしね。

18：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**（*） **：***：**
ID：*****

道德観を気にしないのなら無限のサイクルを実現できるだろうけどな。こればかり
はさすがに仕方がない……。

19：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**（*） **：***：**
ID：*****

でもさ、それだといつかはストックしている生命力も尽きちゃうわけじゃん？
だからさ、こういうのはどうだろう？

20：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**（*） **：***：**

ID : * * * * * * * * * *

こういうの、とは……？

21 : 名無しのヒーロー 投稿日 : 2 * * * * / * * * * / * * * * (*) * * : * * : * * : * *
 ID : * * * * * * * * * *

献血程度の感覚で緑谷ちゃんが生命力を吸ってもらって、それを与える個性にすぐさま変換すればいいんじゃないかなと。

ほら、俺達じゃ与える事は出来ないわけだし……。

そうすればプラマイゼロにもなるし。

22 : 名無しのヒーロー 投稿日 : 2 * * * * / * * * * / * * * * (*) * * : * * : * * : * *
 ID : * * * * * * * * * *

良い考えだとは思う。

緑谷ちゃんが納得すればの話だけだな。

23：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**（*） **：***：**

ID：*****

ああ……なんか世界中のセレブがこぞって緑谷ちゃんにお願いしてきそうな予感が
今からひしひしと感じるんだけど、俺の気のせい……？

24：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**（*） **：***：**

ID：*****

ありえそうでやだな……。

緑谷ちゃんが金で動くような子ではない事を祈りたいけど。

25：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**（*） **：***：**

ID：*****

バカ野郎！

緑谷ちゃんは今回ですでに自己犠牲の精神を全国民に見せつけただろ！
そんなことあるわけ……ないよね？ ね？

26：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**(*) **：***：**
ID：*****

そこは最後まで自信を持って言い切ってくれ！

まあ、逆に崇拜されそうな雰囲気はもうすでに出来上がっているけどな。

今回の件でファンというか、信者はかなりの数は出来たと思うし。

下手すれば自ら『命を吸ってください』とか言ってくる頭おかしい輩も出てきてもおかしくないからな？

27：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**(*) **：***：**
ID：*****

オールマイトという『平和の象徴』が崩れた今、継る対象が求められてくるからな。

緑谷ちゃんもこのまま将来的に正式にヒーローになれば『ヒーロービルボードチャー

ト』には普通にランクインしそうだしな。

28：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/* (*) **：***：**

ID：*****

むしろ、ヒーローにならないという選択肢はもうすでに無くなったと言つてもいいんじゃない？

ある意味自ら退路を断っちゃったわけだし。

29：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/* (*) **：***：**

ID：*****

そうだよなー。

あそこまで人命救助に貢献してしまつたら、今回の仮免取得前の個性使用の件も含めて各所から色々と言われてそうだし。

30：名無しのヒーロー 投稿日：2****/*/*/* (*) **：***：**

ID:*****

なんか、噂ではオールマイトの弟子というのもあるらしいし。

ソースは言わずもがな雄英体育祭でのオールマイトのやり取りと、今回での親しそうなやり取りも吟味して。

31:名無しのヒーロー 投稿日:2****/**/**(*) **:*:**

ID:*****

出遅れた!!

楽しそうな話題をしてるじゃん!

オールマイトオオオオオオオオオオ(; ω ; ;)

32:名無しのヒーロー 投稿日:2****/**/**(*) **:*:**

ID:*****

<<31

いきなりのオールマイルト信者が乱入だ！場は盛り上がってきたぞ！！

33：名無しのヒーロー 投稿日：2***/*/*/*（*）**：**：**
ID：*****

と、遅れた原因は別のスレッドを見て来たんだけど、やっぱ緑谷ちゃんを少なからず批判しているオールマイルト信者たちも結構いるみたいだね。

緑谷ちゃんのファン達とそれはもうすごい熾烈な批判合戦を繰り広げていたよ。
俺はそれを見ているのに嫌気がさして比較的まともそうなこっちに来たわけなんだけど。

34：名無しのヒーロー 投稿日：2***/*/*/*（*）**：**：**
ID：*****

それはそうだ。

オールマイルトはこの国のトップヒーローだったんだから、それを終わらせる原因ともなっていれば批判の対象にもなるわな。

35：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**
 ID：*****

それでも俺は緑谷ちゃんを支持していくよ！
 あんな薄幸そうな子を放つてはおけない！

36：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**
 ID：*****

私もよ！

37：名無しのヒーロー 投稿日：2****/**/**
 ID：*****

僕も！

38：名無しのヒーロー 投稿日：2****/***/*** (* **:* **:* **
ID：*****

あ、ところでちなみに前々からある緑谷ちゃん非公式ファンクラブの会員数は、すでに10万人を突破して今も増え続けているらしい。

39：名無しのヒーロー 投稿日：2****/***/*** (* **:* **:* **
ID：*****

すげ！

もう立派に正式なヒーロー並みのファンの数じゃん！

40：名無しのヒーロー 投稿日：2****/***/*** (* **:* **:* **
ID：*****

いろいろと苦難はあるだろうけど、将来が楽しみだね。

41:名無しのヒーロー 投稿日:2****/**/**
 ID:*****
 (**)***:***:***

だな。

……こうして出久の気持ちとは関係なくファンや信者の数は勝手に増えていくので
 あった。

NO. 095 始まりの終わり 終わりの始まり

神野区での戦いから数日が経過した。

それで世間は一応は落ち着いてきたみたいに見えるだろうが、それは間違いである。警察は今までオールマイト一人に頼ってきたツケを払拭するために改革をしようとしているし、神野での被害者たちなどのこれからの支援などもどうにかしないといけないと頑張っている。

とうの被害者たちはそれでもケガというケガは出久のおかげでないのだけど、それでも恐怖を味わったということには違いはないのだからケアは続けられることになる。

ヒーロー社会も同様にオールマイトという不動のNo. 1ヒーローが陥落したために、これからは一人に背負させずに連携して事に対応していくという動きを見せており、すでにタッグを組むヒーロー達が各所で見られる。

そして、ヴィラン達も同じように、ヴィラン連合のようにまとまれば力強くなるという事を今回の事で学んだために裏の犯罪者たちがヒーロー達と同じように連携する動きも見られていて警察などに警戒をされている。

そして、もう戦えなくなってしまうたオールマイト本人はというと、

「それで、俊典。これからどうするつもりだ……?」

「どうする、とは……?」

グラントリノがそうオールマイトに問う。

オールマイトはもう隠す必要もないためにトゥルーフォームのまままでまだ病院で検査を受けている真つ最中であつた。

そんな中でグラントリノと塚内の二人が面会に来ていて、こうして話し合っていた。

「オール・フォー・ワンはもう敵になることはないだろう。話によればもう自分自身も誰か分からないらしくてな、ヴィラン連合幹部共の所在も聞きだせないのが現状らしい」

「そうですか……」

「そして、あの時オール・フォー・ワンは言った。死柄木甲は志村の孫だと……」

「しかし、それはオール・フォー・ワンのたわ言かもしれないだろう……?」

「そうかもしれない。だが、あのオール・フォー・ワンの言葉は真実だと思う……私は

……」

それで俯くオールマイト。

そこにグラントリノが釘を刺すように、

「いや、もうお前は戦えない体だからな。それだけはダメだ。それに死柄木に会つてどうするつもりだ？ お前はもうあいつの事をヴィランとして見れていない、そして同様に奴もお前の事をもう目もくれないだろう……」

「……………」

それはそうだ。

オールマイトという強敵を打ち倒すために今まで何度も事を犯してきた死柄木が、いつまでももう戦えないオールマイトに目を付ける理由がすでにない。

オールマイトはもうすでに終わった人なのだ。

それはもう覆せない事実である。

「後の事は俺達に任せろ。とにかくお前は英雄に戻って後進の育成に励め。『平和の象徴』ではなくなったとしても、お前はまだ生きているのだから」

「はい……」

力なくオールマイトは言葉を発するしかできないでいた。

「ところで、塚内君。緑谷ガールは今どうしているんだい……？」

「緑谷さんか？ もう今頃は事情聴取も終わっている頃だろう。一緒に来るかい？」

「ぜひ、行かせてくれ。私は師匠として彼女を支えないといけない……。これから緑谷ガールは今回の件で少なからず世間から様々な目で見られてしまうのは間違いないのだから」

「だな……。お前の引退も絡んでくるだろうからな」

それでオールマイトと塚内は出久のもとへと向かった。

その出久はあらかじめ事情聴取も終わり、後は母・引子が迎えに来て家に帰るだけなのだが、外ではおそらく取材のカメラが待ち構えているだろうからどこことなく辛そうな顔をしていた。

そんな中で、なにやら外が騒がしいのを感じ取り、何事かな……と思っていると、

「やあ、緑谷ガール」

「オールマイト!?!」

そこにオールマイトが突然姿を現してきて、出久は今にも泣きそうな顔になっていた。

それはそうだろう。

何度も言うがオールマイトが引退するキツカケを作ったのはどこから見ても自分な

のだから。

ヴィラン連合の幹部達もそれは関係してくるだろうが、今はもうどこにいるのかすら分からないので追及されるべきは出久だけになってしまう。

「オール、マイト……僕は……僕は……」

「緑谷ガール……」

もう、出久はオールマイトの手を震える両手で握りながら涙をいくつも流していた。何度も感じてしまう後悔という気持ち。

もし、もっと自身がしつかりしていたらこんな事にはならなかったのではないか……？

そんな感情がリフレインしてしまっていてこうして我慢していたが、オールマイトの登場とともに感情のダムが決壊して涙がとめどなく流れてしまっている。

「オールマイト……ごめん、なさい……僕は、あなたの事を……い……」

「いいんだ緑谷ガール。いいんだ……」

出久の背中をさするオールマイトは、改めて出久の心に暗い思いを与えてしまった事に深い衝撃を受けた。

どう言葉を出していいか悩む。

だが、それでも決心した気持ちをとともに、優しく話しかける。

「緑谷ガール……私は正式に引退するだろう」

「ッ!!」

「緑谷ガールの治療で表面的な傷は癒えた。だけど、それ以前からの積み重ねが祟っているのは君も知っている通りだ。」

「だからね。私は、これからは君の育成に専念することにする」

「オール、マイト……」

「そしてこれから君は世間の目に嫌がおうにも晒されてしまうかもしれない……それらから私は君を必ず守る事を頑張るとしよう」

「そんな、事……これは、僕の背負うべき咎なのに……オールマイトがこれ以上重荷を背負っちゃいけないのに……」

「それでも、だ。だからこれからも一緒に頑張っていこうな……」

「う、うあ……ああッ!!」

「それでついに久は涙を止めることもせずにオールマイトに抱き着いて盛大に大声で泣き続けていた。」

「君の、その泣き虫も治さないと……」

「うわあああああ……んッ……」

その出久の泣き声は引子が迎えに来るまで続いていた。

取材陣たちもその一部始終の光景が見えていたために、このまだ16歳の少女によつてたかつて取材をするという気持ちに罪悪感を感じていたために、そしてそのまま泣き疲れて眠りについてしまった出久の事をオールマイトと引子が運んでいく光景をそつと道を開けて通して見送るしかできなかつた。

オールマイトは引子とともに出久を連れてタクシーに乗つて帰っている途中の事であつた。

「奥さん……」

「は、はい！」

オールマイトに話しかけられて引子はそれで大変緊張をする。

オールマイトもそれを一応雰囲気に分かつていても言葉を続ける。

「きつと、これから娘さんは大変苦勞な目に合うと思います。ですが、それでも見捨てずに見守つてやつてください。私達も今回の件を戒めにして娘さんの事をしつかりと導き立派に巣立つまで見守つていきます」

「オールマイトさん……。はい。大事な一人娘を見捨てるほど私も腐つていません。だから出久のことはしつかりと守つていきます」

「それを聞けて安心しました。娘さんが目を覚ましましたらどうか声を掛けてあげてく

ださい。まだ情緒不安定ですから」

「わかりました……」

そして家に到着する三人。

オールマイトは最後まで出久の事を心配しながらも、引子に挨拶をしてその場を離れていった。

引子は出久を自室のベッドに横にしながら、

「出久う……私はあなたの事が心配だよ。」

誘拐されたと聞いた時には心臓が止まりそうになったし、食事も喉を通らなかった。

そしてテレビで見ていたけど、出久がとても立派な事をしていたのも知っているから

……それでも、私の大事な子供なんだから……。

だから、どうか遠くに行っちゃだよ……?」

そう言つて引子は眠っている出久の頬を撫でた。

出久はそれでもいまだに深い眠りについでいるのであった。

猫娘と回想、I・アイランド編

NO. 096 回想《1》 I・アイランドへ

出久は自室でカーテンも締め切って光が入らないようにして、暗い部屋の中でベッドに横になりながら思考に耽っていた。

こんな自堕落に時間を過ごしていても、何の解決にもならない……。

オールマイトがこれからは自身の育成に専念すると言ってくれたのだから、自分もまた頑張らないといけない。

そうは考えていても、まだ心がそれに追いついていないのが現状であった。

まだ、自身がオールマイトの事を間接的とはいえ終わらせた事についての責任を重く受け止めていて、立ち上がる勇気がまだ湧いてきていないのだ。

「ダメだ……こんなことじゃ、ダメなのに……こんな時に弱気な僕が何度も顔を出してくる……」

影の自身が何度も『お前のせいだ』『お前のせいでオールマイトが終わったんだ』と囁いてくるようで、ただでさえ落ち込んでいる心にさらにダメージを与えてくる。

そう何度も自身に問いかけていても突破口は見つからない。

「「にゃー……」」

出久の部屋で飼っている数匹の猫たちも元気のない声で鳴く。

ちなみに三匹いるのだが、それぞれ『ベレト』『シャミ』『ケット』と出久に名付けられている。

言わずもがな、出久のヒーロー名を決める時にみんなから挙がった候補の中から選んで付けてある。

出久はすり寄ってくる三匹の頭を力なく撫でながらも、どうすれば……と困り果てていた時であった。

——ポーン♪

強化合宿の時にヴィラン連合・開闢行動隊に誘拐された際に無くしていたものだと思っていた携帯を相澤が運よく拾っていたらしく、届けてくれたのだ。

ちなみに、これを拾った際の相澤の心境は計り知れないものだったとここに記載しておく。

その携帯のメール着信音が鳴り響いて、落ち込む気持ちで力が入らないながらも画面を見る出久。

そこにはこう書かれていた。

『デクちゃん、久しぶり。メリツサです。

ニュースを見ましたが、とてもつらい思いをしたんだね……。

本当ならすぐにでもデクちゃんのもとへと駆け付けたいんだけど、なかなかI・アイランドから外に出るのは難しいからこうしてメールを送ることにしました。

きっと、マイトおじさまの件でデクちゃんはひどく落ち込んでいると思うの。

だから気休めにしかならないけど、私もデクちゃんが早く立ち直れるように祈っています。

そして、きっとデクちゃんが将来苦労すると思うから、今からデクちゃん向けのサポートアイテムを開発できるように私ももっといろいろと勉強をするね。

パパがマイトおじさまのためにいろいろ作ったように、私もデクちゃんのためにもつと将来は出来る事を増やせるように頑張る。

だから、頑張つて！ デクちゃん！ いえ……ヒーロー『出雲』!!』

「メリツサ、さん……」

そう書かれていたメール内容に出久は自然と涙を流す。

きつと、今でも見えないところでは自身の事を中傷している人はたくさんいると思う。

それが怖くてネットを開いて検索することもできないでいる。

しかし、こうして応援している人も少なからずいてくれることに感謝の気持ちを感じていた。

今すぐにも返信をしたいけど、今はどうしてか嬉しい気持ちも溢れてきていて言葉に詰まるかもしれないから少ししてから返事を返そうと出久は思い、少しの気持ちの和らぐ感じを味わいながらも、出久はまだつい一か月前のメリツサとの出会った場所である『I・アイランド』での出来事を思い出していた……。

………時は遡る事、夏休みがまだ始まったばかりの時である。

出久はオールマイトに誘われて、専用ジェット機に乗ってサポートアイテムの本場である『I・アイランド』へと向かっていた。

そして海の上に見えてきた建造物を見て、隣の席で寝ているオールマイトを起こすように声を上げる。

「オールマイト！ 見てください！」

「んあつ……？ どうしたんだい、緑谷ガール？」

「見えてきましたよ！ I・アイランド!!」

それで二人はジェット機の小さな窓から覗ける景色を見て、出久はこんな場所に来れる事に至福感を味わっていて、オールマイトは久しぶりに顔を見る親友に対して想いを馳せていた。

「二万人以上の科学者が住んでいて、学術人工移動都市、通称“I・アイランド”に夏休み早々に来れるなんて夢見たいです！」

それでも喜びが表に出てきているのか尻尾はピンと伸びきっていて、猫耳なんて逆立ってしまったている。

「緑谷ガール、尻尾と耳がすごい事になっているから少し落ち着こうか。……しかし、こうして喜んでもらえると招待した甲斐があるね」

だが、そこで出久は少し俯いたのを見てオールマイトは少し怪訝な顔になるが、

「ですが、本当に僕なんかが着いてきてもよかったですか……?」

「そういう事か。大丈夫だよ。招待状には同伴者も連れてきていいと書かれていたしね」

「ですが、それって家族とかが普通じゃないんですか……?」

オールマイトの同伴者としてはまだ無名で、しかも学生である自分が着いてきてしまってもよいものなのかと不安になる出久。

オールマイトはそんな不安を吹き飛ばすかのようにある事を言い放った。

「私と緑谷ガールの間には、血よりも濃いもので結ばれているだろう? ワン・フォー・オールという絆で……」

「ツッ… はい!!」

それで出久の不安はもうすでに消え去っていた。

頬を赤く染めて嬉しそうに微笑んでいる。

オールマイトはそんな出久の笑みに見惚れそうになっていたが、一度咳払いをした後に、

「それより、緑谷ガールはこれから気を付けた方がいい」

「はえ……? なにに關してですか?」

「まだそんなに自覚がないようだけど、君は雄英体育祭や保須事件、そしてインゲニウム

の治療などと、知名度はまだ少ないが、それでも少なからず緑谷ガールの名は世の中に知られてきているからね。

そして私が同伴だから決まてないとは思いますが、君の個性に目を付けてくる研究者達も複数いてもなんら不思議じゃないからね。

ただでさえオール・フォー・ワンという特大の例とは別にして、個性を複数持つているという数少ない実証例でもあるんだから、気を付けて行動をするんだよ？ それと知らない人に声を掛けられても着いて行つちやだめだからね？ 君、まだまだ女子として色々危ういし……」

「は、はい……気を付けて行動します」

「うん。いい返事で大変よろしい。くれぐれも頼むね」

そんな約束が交わされている中で、

『えー、当機はまもなくI・アイランドへの着陸態勢に入ります』

というアナウンスが聞こえて来たために、オールマイトは立ち上がって自分達以外に人はいない事を確認していた。

「オールマイト？ どうしたんですか？」

「いやね。これからはなかなかしんどくなるなとね。なにせ向こうに着いたら……：私
はマツスルフォームで居続けないといけないからね！」

そう言いながらもオールマイトの体から煙が上がっていき、トウルーフフォームから次第にマツスルフフォームである筋骨隆々の伊達男の姿へと変化していく。

そして着ていた服をすぐに脱ぎ捨てるとそこにはいつものオールマイトのヒーローコスである『ゴールデンエイジ』の姿になった。

「さて、それじゃ緑谷ガールもヒーローコスに着替えたまえ。学校に申請して持つてきているんだろう?」

「はいー」

それで出久は脱ぎ捨てるようにすぐに着替えてしまったオールマイトとは違い、女子更衣室へといそいそと入って行って発目の手で仕上がった『コスチュームγ』のヒーローコスチュームへと着替えたのであった。

そして、ここで出久は新たな友達となる少女と出会う事になる。

NO. 097 回想《2》 メリッサとの出会い

『ただいまより入国審査を開始します』

そんな、電子音声とともに出久とオールマイトがモニターのパーソナルデータに表示されて、二人は空の旅から陸地へと入っていった。

そんな入国審査をされている時にオールマイトが「緑谷ガールにクエスチョンだ！」と言う。

出久はそれで少し考えて、そうだなーと思った。

師弟の間柄だとは言え、それを堂々と言えるほどまだ度胸はないし、問題になることは請け合ひだし、ここは雄英高校の教師と生徒と言う間柄を演じようということだろう。

「えつとですね。世界中の才能を集め、『個性』の研究やヒーローアイテムの発明等を行うためです。それからそれから………ブツブツブツブツ………」

そこで出久のヒーローオタクの顔が表に出て、いつもの独り言が早口で繰り返されて

いた。

オールマイトはそんな出久の行動を止めるために大声を出す。

「そういうの本当に詳しいね、君は!!」

「あつ……すみません。またトランスしてました……」

「別に構わないさ。そういうところも君の個性だしね!」

H A H A H A H A ! といつもアメリカンな笑い方をするオールマイト。

そうこうしている間に、

『入国審査が完了しました』

と、アナウンスがかかる。

そしてI・アイランドの説明や現在は『I・エキスポのプレオープン中』という宣伝も律義にしてくれた。

そんな感じで入場も可能になったので二人は空港を出て中へと入っていく。

出久は入ってすぐに「わあー!」ととても嬉しそうな声を上げる。

そこには様々な施設が目白押しであったのだ。

中には『水しぶきで文字を描く』などや『楽器から音楽が流れるたびにオンパ記号が実体化する』など、そこかしこで個性を使用しているものも多数見受けられる。

まさしく、ここは科学の最先端の場所であり、入場している人々が誰もが笑顔を浮か

べていた。

出久もその一人に該当するわけで胸のわくわくが先ほどから止まらなかつた。

オールマイトと出久の二人はこれだけの人の数に驚きを感じながらも、オールマイトが説明をする。

「I・アイランドでは日本とは違って、個性の使用も暴れない限りは基本的には自由だからね。だから今見えているほとんどの施設で使われているアトラクションも個性で作りに出しているんだ。あとで見に行ってみるといい」

「はいー」

もう出久の興奮は止まっていなかった。

耳がピョコピョコ、二股の尻尾がゆらゆらと激しく揺れており、オールマイトも素直な子だ……と思いつつもなごんでいた。

「さて、それじゃそろそろホテルの場所に向かうか」

そう言っていると、そんな行動に気づいたのか一人の案内係であろう女性が近づいてきた。

「I・エキスポへようこそ……って、オ、オールマイト!？」

お手本のように声を掛けたつもりが、相手が相手だったために我も忘れて大声を上げてしまった案内嬢。

その叫びにまわりで歩いてきたコンパニオン、観光客、各取材陣などがオールマイトへと殺到してくる。

出久は「わっ!？」と一瞬怯みそうになるが、オールマイトがさかさ腕を引つ張つて背中へと隠してくれたのでなんとか難を逃れていた。

「(少し待っていなさい)」

それぞれに対応をしながらも小声でそう言われたので「はい!」と答えておいた。

ただ、取材クルーの何名かが出久の事にも気づいたのか、

「もしかして、あなたは雄英高校一年ヒーロー科の緑谷出久さんですか!？」

「えっ!？ えっとー……はい」

「オールマイトと一緒にいるというのはどういうご関係でしょうか!？ 一生徒として着いてこられたのでしょうか?」

「雄英体育祭での宣誓の時の事を詳しくお聞かせくださいませんか!？」

「インゲンウムを治療した個性はなんなんですか!？」

と、いつの間にかオールマイトと出久で半々に群がられていたために、出久は少し混乱しているためにオールマイトはさすがにまずいと感じたのか、

「H A H A H A H A! みなさん、今はせつかくのお祭りです。そこまで真剣に聞くのも慣れていない彼女には辛いものでしょう。ですから今回だけは控えていただけない

でしようか?」

「「は、はひ……」」

「オ、オールマイト……」

オールマイト的には紳士的に対応したつもりだったのだが、結構真剣な顔で言っていたために取材陣が委縮してしまっていた。

天然だったのか「おや……?」と言っているが、もう流れはオールマイトに流れてしまっていたので次第にいなくなっていた。

「どうしたんだい、彼らは?」

「オールマイト……すごい切羽詰まった顔になってましたよ?」

「む……まあ、結果オーライだよ! H A H A H A H A!」

笑ってごまかすオールマイト。

「さて、少し足止めされてしまったけど、約束の時間には間に合いそうだな」

「約束の時間、ですか……?」

「ああ。久しぶりに古くからの親友と再会しようと思っていたんだ。だから緑谷ガールももうしばし私に付き合ってくれないかい?」

「オールマイトの親友……もちろん喜んで!」

出久は迷わず即答した。

オールマイトと親友になれる人などかなり限られてくるだろうからである。

オールマイトほどの有名人となると、親友になりえる人など極少数だと出久は感じたからだ。

特に悪い意味ではないのだが、ワン・フォー・オール秘密の関係上も関係してくるので、その親友と言う人は果たして知っている人なのかどうか、と出久は考えていた。

だが、その疑問に対する答えはすぐにオールマイトから聞く事になった。

「あ、それとその彼にはワン・フォー・オールや緑谷ガールに個性を譲渡したことは話していないから、そのつもりでお願いね？」

「あ、やつぱりそうなんですネ？」

「うむ。何度も言うようだがワン・フォー・オール秘密を知る者には危険が付きまとうからね」

出久自身も含めてワン・フォー・オール関連の情報を知っているのはかなり限られてくるだろう。

話しても危険に巻き込むだけだから今一度出久は用心して取り掛かろうと思ったのであった。

そして大きい背中をしているオールマイトにいつか追いつくために、フォウから引き継いだ個性も含めていつか必ずワン・フォー・オールを使いこなそうと心に決めた。

そんな時に、二人がいる場所から向かって階段が続いている方からなにかの跳ねるような音が何度も聞こえてくるのに、出久の猫耳の聴覚は気づいた。

オールマイトも気づいたのかそちらへと視線を移す。

「おじさまー！」

そこにはホッピングに乗っかっている金髪で眼鏡をかけている見るからに美少女がやってきた。

少女は「マイトおじさま！」と言いなながらもオールマイトへと飛びついた。

オールマイトも「OH！ メリッサ！」と言つて満面の笑みを浮かべている。

出久はただただその光景を眺めているだけであつた。

「お久しぶりです、マイトおじさま。来てくださつてとても嬉しい」

「こちらこそ招待してくれてありがとう」

それからオールマイトと少女が少しの間戯れている中で、出久はこの少女がオールマイトの親友……？と考え込んでいた。

親友にしては若すぎるし、なにかしらの個性か……？と見当違いな方へと誤解が広がっていた。

出久がそんな事を考えている間にも、

「ダイヴはいまどこにいるんだい、メリッサ？」

「フフ……今は研究室にいるわ。研究が一段落して、それでお祝いとサプライズを兼ねて、マイルトおじさまを招待したの」

「そういうことか。それで、どんな研究内容なんだい？」

「そうオールマイルトが聞くが、それで少女は顔を俯かせて、

「守秘義務とかで教えてもらえなかったの……」

「そうか……研究者も大変だな。つとー！」

「そこでようやくオールマイルトは色々と考え込んでいる顔をしている出久に気づいたのか、

「ああ、緑谷ガール。彼女は親友の娘で……」

「メリッサ・シールドです。はじめまして」

「そう言つてメリッサは出久に手を差し出してきた。

出久は内心で早とちりだったかと反省し、握手をしようとしたのだが、

「あ……」

「そこで出久は肘まで手袋があつたので取りずらい事に気づいたので、

「す、すみません。このままでいいでしょうか？」

「うん。大丈夫よ」

「それじゃ……はじめまして。雄英高校ヒーロー科、一年の緑谷出久です」

「雄英高校……それじゃマイトおじさまの生徒!？」

「う、うん……」

「自慢のヒーロー候補さ!」

それでメリッサは目を輝かせながらも、

「それじゃ将来有望だね。でも、あれ……? そういえば、確か前にテレビで見たことがあるような……、あ! 例のインゲニウムっていうヒーローの脊髄損傷の傷を治療したっていう!」

「あ、うん……やっぱり知っているんだ」

「それはもう! 確か出久さんって複数の個性を持っているんだよね? どんなのを持っているの?」

それで出久のヒーロースーツを触りつつ観察していた。

「手袋が指先だけないのは、指関係の個性? あ、靴にもなにか細工があるみたいだね!

猫耳に二つの尻尾……?」

「あわわわわ!」

出久はさすがに女性になったとはいえ、まだまだ女子との付き合いなど慣れないモノであり慌てていた。

そんな出久に気づくこともなくメリッサは触り続けていた。

「出久さんって、どんな個性を主に使うの？」

「超パワーかな。最近は足技も取り入れようと思ってるけど……僕の個性ってオールマイトに似ているし」

「マイトおじさまに……それだと、足の方はいいとしてちよつと腕や拳の方を少し改良をした方がいいかもしれないね……」

「すごいね……そんなことも分かるんですか？」

「まあ、これでも一研究者だからね」

そこでオールマイトが一回咳払いをした後に、

「メリツサ、そろそろ……」

「あ、ごめんなさい。少し夢中になっちゃって……それじゃすぐに向かいましょう！
パパが待っていますー！」

それでメリツサははしやぎながらも二人の先を進んでいった。

出久とオールマイトはそんなメリツサを微笑ましく思いながらも着いていくのであった。

……その一方で、とある場所では、

「会場内には問題なく入れた……」

そこには顔に大きく傷がある男がI・アイランドのエキスポ会場をじつと見ていた。

この男が今後、この島で最悪の事を引き起こす事になる……。

NO. 098 回想《3》 デヴィット・シールド

とあるタワーの中で一人の男が一枚の写真を見ながらも憂いの表情を浮かべていた。そこに映っていたのは若かりし頃のオールマイトの姿であり、その写真を見ながらも男の胸の内は複雑の境地に達していた。

これから自分がしようとしている事を友は喜んでくれるのか、それとも「なんてバカなことを……」と叱ってくれるのか……。

「(オールマイト……トシ……)」

それで物思いに耽っていたが、

「——博士。デヴィット博士」

助手であり、今の今までこんな自身に従ってくれていたサムに声を掛けられて、男……デヴィット・シールドは写真から視線を外して返事をする。

「なんだい、サム？」

「こちらの片付けも終わりました」

「そうか、ご苦労様、サム」

デヴィットはそれで笑顔を浮かべながらサムにねぎらいの言葉を掛ける。

そこにサムがある事を言う。

「最近お疲れでしょう。たまにはお嬢さんにお会いになつて食事になどいかれたらどうですか？」

「今日もアカデミーに行っているよ」

「エキスポ中は確か休校のはずではなかったですか？」

「自主的に研究をしているそうさ。まったくどこの誰に似てしまったのか……」

そう言つてデヴィットは苦笑いを浮かべる。

そこにその質問を待つていたかのように扉が開いてメリッサが姿を現して、

「パパの娘だもの。似ちやうのは仕方がない事だわ！」

「メリッサ」

メリッサはサムに挨拶と父のお手伝いをありがとう的な話をして、デヴィットに満面の笑顔を向ける。

そんな出来た娘の対応に「まいった、まいった」と降参の意をして、

「それよりメリッサはどうしてここに来たんだい？」

デヴィットは普段からのメリッサの行動をあらかじめ把握して知っているために、こん

なところになんできたのか分からなかった。

するとメリツサはしてやったりな笑みを浮かべながらも、

「私ね、パパの研究が一段落したお祝いに、ある人をI・エキスポに招待したの」

「ある人……？」

「パパの大好きな人よ」

それを聞いて即座にデヴィットの脳内にとある人物の顔が思い浮かべられる。

それはタイミングがいいのか悪いのか分からないというものだが、しかし来てくれたのならそれは素直に嬉しい限りだ、と。

そして待っていましたと言わんばかりにメリツサの背後からデヴィットにとって慣れ親しんだ人の大声が響いてくる。

「私がああ、再会の感動に震えながら来た!!」

そんなオールマイトの突然の登場に一瞬で心構えをしてもやはり嬉しいデヴィットは「トシ……オールマイト!？」と、サムと一緒に驚いていた。

そこから始まる二人のとても仲よさそうなやり取り。

オールマイトはデヴィットを持ち上げてかなり喜んでいた。

デヴィットはただただ驚くばかりであった。

そんな二人の後ろからメリツサが、「どう、驚いた、パパ？」と言ってきたためにデ

ヴィットもまだ現実だと認識できていないために曖昧な表情を浮かべながらも「ああ……とても驚いたし、嬉しいよ……」と答えるだけであった。

「お互いにメリッサに感謝だな。しかし、こうして会うのは何年ぶりだろうな……」

「歳の事に関してはやめてくれ。お互いに考えたくないだろう?」

「違ういな」

そんな軽いやり取りが行われていたが、ふと二人は静かになり、

「会えて、嬉しいよ……デイヴ」

「私もだよ、オールマイト」

そうこうしたがこうしてお互いに落ち着いて再会の挨拶ができたのであった。

拳を合わせながらも、オールマイトは入り口でわなわなと震えている出久に顔を向けて、

「緑谷ガール。紹介しよう。彼はメリッサの父であり私の親友・デヴィット・シールド——」

オールマイトが最後まで言い切る前に、

「知っています! デヴィット・シールド博士。数々の賞を受賞して、”個性”研究のトップランナー! そしてオールマイトの数々のコスチュームを開発した天才発明家!! まさか、こんなところで会えるだなんて……感激です!」

そう言つてデヴィットに駆け寄る出久。

そんな出久に「紹介はいらなかつたみたいだな」とオールマイトは言う。

だが、デヴィットはオールマイトの口から出た『緑谷』という苗字にすぐに聞き覚えがあつたのか鋭い視線を出久に向ける。

「ミドリヤさん……君はもしかして、あのヒーロー復帰は絶望的だと言われていたインゲニウムの脊髄損傷を治療したという……」

「えっと、はい。よく知っていますね」

「それはもう……」

それでデヴィットは鋭い目つき……表現するとしたら科学者の目だろうか？ そんな視線を出久に向ける。

さきほどまでのオールマイトとのやり取りが嘘みたいのに、出久は一瞬ではあるがその瞳に怯えてしまった。

ただ、メリッサはそんな二人のやり取りに気づかなかつたのか、「パパ……？」と首を傾げるだけであつた。

オールマイトも「デイヴ？」とメリッサ同様に首を傾げていた。

少しそこでシンツ……とした空気が流れるが、オールマイトの突然の咳込みでデヴィットの思考は現実に戻つてきたのか、

「トシ!?……メリッサ。オールマイトとの久しぶりの再会だ。すまないが、積もる話をさせてくれないか?」

「え? あ、うん……」

「それとミドリヤさんをI・エキスポの案内をしてやったらどうだ?」

「わかった。それじゃいきましよう?」

「う、うん……」

先ほどまでの興奮もなぜか無くなっていた出久はメリッサに従うままに部屋から出ていった。

ついでにデヴィットはサムも退出させていた。

三人が部屋を出ていったと同時に、オールマイトの体から煙が上がり始めて次第にトウルーフオームの姿になってしまっていた。活動限界だったのだろう。

「トシ……大丈夫か!」

「た、助かったよ、デイヴ……マツスルフオームを維持するのにももうかなり時間が減ってしまつてな……」

「メールで症状は知っていたが、そこまで悪化していたなんて……」

「すまん……それより、先ほどの緑谷ガールに向けた視線はなんだったんだい、デイヴ……?」

まだ咳込みが続いている中でオールマイトはその事をデヴィットに聞く。

デヴィットはそれで内心で「気づかれていたか……」と思いながらも、隠す事でもないのでオールマイトに考えていたことを白状することにした。

「ミドリヤさん……彼女の治癒の個性は、君には適応しなかったのかい……?」

「やっぱり、そこに勘づくよな。さすがは科学者だ」

「笑いながらはぐらかさないでくれ。もしかしたらトシの体が治るかもしれないんだろ?」
「あ、リカバリーガールですら治せなかった脊髄の損傷を治すほどの治癒力……彼女の個性を研究すれば君の体が治るかもしれないだろ!」

「ディヴ……」

オールマイトは鬼気迫るデヴィットの顔に、相当自身の事について心配をかけている事を改めて悟る。

それで横になりながらもオールマイトは出久について話し始める。

「……確かに、緑谷ガールのその治癒の個性の事を聞かされた時にはわずかな希望を湧いたものだったよ。だけど、それでも一度失った器官までは再生できるほど万能でもないんだよ」

「と、いうと……?」

「緑谷ガールの治癒の個性は、まだ完治していなくて手遅れでなければ元の状態にまで

「復元できるほどの強力な個性なんだ」

「すごいじゃないか!? だったらどうして……」

「言つたろ? 完治していなければの条件下で、だ。私の傷は胃の全摘出後に入院し療養して、外面だけでも一度は『完治』してしまっているんだ。だから緑谷ガールの個性『与える』という個性はただ寿命を延ばすだけの代物になってしまっただけだ」

「寿命を延ばす……? それに『与える』だつて……?」

それでデヴィットの脳内ではある事がいろいろと加速した。

ある意味でマッドサイエンティストとも言える事も考えに上がっている。

「トシ……もしかしたら、お前の傷は治るかもしれないぞ?」

「なんだつて……? それはどういう……」

「ドナー提供だ」

「ドナー提供……?」

オールマイイトは不思議そうに首を傾げるだけだった。

しかし、とも思う。

「しかし、それと緑谷ガールの個性がどう関係してくるんだい?」

「そうだね。手順を説明すると、まずドナー提供で健康な胃をもらい、そして手術で胃を移植するときにお腹に傷を開くだろう」

「うむ」

「そしてオールマイトのお腹に胃を移植した状態でまだ接合しただけでお腹を開いたままなら、まだ“傷”だと個性は認識するだろう。そこにミドリヤさんの与える個性を使い、傷だと誤認させたままで復元してもらうんだ。それならもしかしたら健康な体を取り戻すことも可能なんじゃないか？」

そこまで聞いてオールマイトは目を見開くが、

「しかし、そこまで精密な事をするとしたらどれだけの生命力を消費する事か……」

「生命力の消費……？」

そこで先ほどまで出てこなかった新たなワードにデヴィットは聞き返す。

それでオールマイトはまた説明をする。

他の誰にも話してはいけないよ？と前置きをして、出久とフォウの関係を話している。

そして出久の中で渦巻いている四万はあるであろう生命力の事も……。

ただ、ここでワン・フォー・オールを出久に譲渡したことも話しておけば後の出来事もどうにかなったかもしれないが……。

「まさか、そんな個性があるだなんて……まだまだ謎だらけだな、個性は」

「緑谷ガールはただただ親友らとともに一緒に歳を取りたいと願っているが、それでも

少し後ろめたく感じてしまうんだよ」

「しかし、それならミドリヤさんも快く了承してくれるんじゃないかい？ 見た感じ
オールマイトの事を尊敬しているみたいだし……」

「そうなんだよな。だから尚更だけどな……」

「そうか。まあ、とりあえず、トシ、君の体の検査をしたい。いいかい？」

「わかった」

それで二人の会話はまだ続く事になっていく。

NO. 099 回想《4》 集まる者たち、その1

デヴィットの研究室から出てきた出久とメリッサは通路を歩きながらも、

「ちよつと……大丈夫？　なんかさつきから嘘みたいに暗そうな顔をしていたけど

……」

「だ、大丈夫です……。ちよつと……」

「そう……？」

出久は言えなかった。

デヴィットの視線がまるで研究品を見るような、ウイルスとは違うが利用したような視線をしていたことなど。

まして娘であるメリッサになど正直に話すなんてことは憚れるというものである。

だから曖昧にやり過ぎすことにした。

「あー、それと今更だけど、貴女のこととはなんて呼べばいい？　ミドリヤさん？　イズクさん？」

そうメリッサに聞かれた出久は少し考え込んで、するといつもの麗らかな顔の親友の

顔が思い浮かぶ。

そして出た呼び名が、

「僕のこととは……デクって呼んでください」

「デク？ 変わったニックネームね」

「はい。とある友達にいい意味でそう呼ばれているので僕も前向きに受け入れているものでして」

「そつか。それじゃ私の事はメリッサでいいわ」

「はい、メリッサさん」

それから二人はエキスポ会場にやってきて、さまざまなパビリオンを見学しながらも、その技術力に驚きの表情をしながらも、

「本当にすごいですね。まるで夢の国見たいです」

「ふふふ。デクちゃんも気に入ってくれてよかったわ。大都市のようなどころにある施設も大抵は揃っているの。だから退屈はしないかな？ ただ、代わりに旅行ができないのが難点ね」

「そうなんですか？」

「うん。ここで暮らしている科学者や家族には情報漏洩の為に守秘義務があるから外には数々の申請をして許可がおりない限りは外に出れないの」

「はえー……やつぱり大変なんですね」

改めて、この人工の島は嚴重なセキュリティで守られているのを実感した出久であった。

すると目の前に様々なヒーロー達が歩いているのを見て、

「すごい！ カイジユウ・ヒーロー、ゴジロだ！ あ、あつちには！」

と、ヒーローマニアの出久としては目の保養ともいべき光景であり、メリツサはそんな出久の事を微笑ましい表情で見守っていた。

「最新のサポートアイテム紹介とか、サイン会とか色々あるみたいなの」

「さすがー・エキスポですねー」

来れてよかったーと心からそう思う出久であった。

「夜には様々な関係者を集めたパーティも……つて、デクちゃんも出席するんだよね？」

「マイトおじさまの同伴者なんだし」

「えっ……あー！」

そういう事かーと出久は納得していた。

していたのだが、まさかこういう場でのためにオールマイトが正装を用意しておいてくれと言っていたのかと悟る。

だが、出久はそこで考え込んだ。

まだあの「ドレス」を着る気が起きないというか……。

引子が出久がこの話をする、すぐにオーダーメイドの緑のドレス（また尻尾穴完備）を出してきて試着した時にはあまりの恥ずかしさで倒れそうになった事を……。

ただでさえあがり症なのにドレスなんて……と、今から少し滅入っていたが、それでも顔には出さずに今はこの場を楽しもうと歩いていく。

そしてアイテムの展示コーナーへと入っていく二人。

そこで様々な体験をさせてもらう。

しかもメリツサの話ではここで展示されている最新のアイテムはほとんどがデヴィットが開発したものだという。

それで改めて天才開発者なんだなと思う出久。

「ここにあるアイテム一つ一つが世界中のヒーローたちの役に立つのを今か今かと待っているの……」

そう言いながらも愛おしそうにアイテム達を見つめるメリツサの横顔に、出久はそこからデヴィットへの憧れを感じた。

「お父さんの事を尊敬しているんですね」

「パパのような科学者になることが私の夢なの。だから私はアカデミーで頑張っている

の

「アカデミーに通っているんですか？」

「ええ。今は三年よ」

「I・アイランドのアカデミーと言えば、全世界の科学者志望たちの憧れの学校じゃないですか」

それで出久が思い出したのは雄英サポート科の発目明であった。

彼女ももしかしたらここに入れるくらいの実力は備えているのではないかと、強化靴を作ってもらえた出久は思う。

決して雄英高校がここより劣っているとは言わないけど、科学者からしたら夢の島だからだ。

きつと、知らないだけで発目も応募はしただろうと出久は思うのであった。

メリッサはそんな出久の賛辞の言葉に「私なんかまだまだだよ」と言いながらも、「もつともつと勉強をしないと。パパみたくにはなれないからね」

「僕も、オールマイトみたいになるために、もつと頑張らないと……」

メリッサに感化されたのか出久もそう言つて拳を握りしめていた。

メリッサはそれで何を思ったのか、

「デクちゃんは本当にマイトおじさまの事が好きなのね。さっきの勢いもかなりあつて

驚いちゃったし……」

「あ、あれは……その癖みたいなもの……」

出久はそれで照れてしまっていた。

そんな出久の感情が現れているのか尻尾がフリフリと振られているのを見てメリツサは「分かりやすい☒子だなあ」と感じて二人で笑いあっているところに、

「楽しそうやね、デクちゃん」

「う、麗日さん!? どうしてここにいるの!?!」

なぜか出久と同様にヒーロースーツを着ているお茶子の姿があり、出久は盛大に驚いていた。

お茶子はそんな出久の驚きの声に、しかしいつも通りに平坦な顔をしながらも、

「楽しそうやね」

「(二回言った!?)」

それで困惑する出久をよさらにさらに現れる人達。

「コホン」と咳払いが聞こえて来たのでそちらに振り向くとそこには八百万に耳郎の二人もいた。

「緑谷さん、とても楽しそうでしたわね。まあ女性同士ですからそこまで目くじらは立てませんけど……」

「緑谷、聞いちやった。どういった仲なの？」

「え、えつとー……ここで知り合った人だよ。メリッサさんっていうんだ」

「「へー……」」

それでお茶子達は揃ってメリッサへと視線を寄こしていた。

「デクちゃん、お友達？」

「あ、はい。学校でのクラスメイトです」

メリッサにそう聞かれたので出久はすぐにそう答えた。

しかし、そこでお茶子は内心で焦りを感じていた。

「（私以外にデクちゃんの事を『デクちゃん』呼びする人が現れるなんて……！　メリッ

サさんとは色々仲間良くなれそうやね）」

と、ウフフフーと挑戦的な笑みを浮かべていたのであった。

それはまあいいとして、

「今、僕はメリッサさんにI・エキスポを案内してもらっているんだ」

「そうなの。私のパパとマイトおじさまが——」

「わ~~~~~！」

出久は突然大声を上げてメリッサの言葉を遮って、三人から離れて小声でオールマイトとの同伴は内緒にしてほしい旨を伝えた。

よく分からなかったが、とりあえずメリツサも了承してくれたことに出久は感謝をした。

オールマイトの同伴者だなんてバレたら後が大変だからだ。

そしてメリツサは出久の事を気遣ってか、話題転換として、

「それじゃちよつとカフェでお茶でもしません？」

「いくいく！」

「それではご同伴にさせてもらいますわ」

「なにかお勧めとかはあるの？」

と、良い感じに三人は食いついてきたのでなんとか話題逸らしは成功したことに出久は安堵の息を吐いていた。

それから五人でカフェでお茶をしていた。

そこでは職場体験での話とかで盛り上がっていた。

特にヒーローと一緒に活動できたことに関してメリツサはとても羨ましそうにしていたのが印象的だった。

出久は四人が盛り上がっている隣の席でなんとか落ち着いていた時だった。

「お待たせしました」

と、どこかで聞いたことのあるような声で顔を上げるとそこにはまたもクラスメイト

の上鳴電気と峰田実の姿があつた。格好はなぜかウエイター姿であつた。

「上鳴君に峰田君!？」

出久の叫びに他の女子達も気づいたのか、なんでここに居るの? 的な言葉を言つていた。

「エキスポ期間中の臨時バイトを峰田と応募したんだよ」

「ああ! 給料は貰えるし、エキスポ見学もできるし、なにより可愛い女子との出会いとかもできるからな!」

「ああ、そういう理由なんだ……」

「それでな……緑谷、少しいいか?」

「おいらもいいか?」

「なに、上鳴君に峰田君?」

どこか神妙な顔つきをする二人に怪訝な表情を浮かべる出久。

「元・男子としてどこであんな可愛い子と仲良くなつたんだ?」

「紹介してくれよー」

と、直接からんでこなくても、そんな二人の熱のこもつた視線に出久はただただ困惑するだけであつた。

実際、二人は出久にかなり接近しており、最近少し女性としての自覚も感じ始めてい

る出久にとっては二人の顔が間近にあるのは気恥ずかしいのである。

そんな出久をよそにメリッサが八百万達に「彼らも雄英生？」と尋ねていた。

それを素早く聞きつけた二人は、

「そうです!」

「ヒーロー志望です!」

と、カッコつけていた。

だがそこにまたしても現れる人物の影が。

「こちら! 仕事中だというのに何を油を売っているのだね!」 引き受けた以上は労働に励みたまえ! そして最近流行りの悪質行為などしたら雄英生としてはいらなくなるからな!!」

と、飯田がすごい勢いでやってきた。

「飯田君!」

「飯田君も来てたん?」

「ああ。うちがヒーロー一家だからな。家族は予定があつたし、復帰した兄さんも忙しそうだしで俺が代わりに来たのだ」

「飯田さんもですか?」

それで八百万も家族がI・エキスポのスポンサー企業の株を持っているために招待状

を貰つたらしい。

そしてお茶子と耳郎も厳選な抽選の結果（女子達によるじゃんけん大会）で八百万と一緒に着いてきたそうだ。

「ホントはデクちゃんもじゃんけんに誘う予定だったんだけど、すでにここに来ることを決まっていたんやね」

「う、うん……ちよつとした筋で……」

汗を垂らしながらもなんとかそう返す出久であつた。

聞くところによると、他の女子達も別口ですでに来ていろいろらしいとの事。一般公開で合流する手はずになっているらしい。

それならと、メリツサが「それなら、私が案内しましょうか」という鶴の一声によつて、女子達はとても喜んでいた。

上鳴と峰田も便乗したそうにしていたが、そこでどこからか爆発音が聞こえてきて、「な、なんだ!?!」

見れば、どこかの会場で煙が上がっているみたいなので出久達はそちらへと移動することにした。

NO. 100 回想《5》 集まる者たち、その2

爆発音が聞こえた方へと出向いてきた出久達が見たものとは、そこはなにかしらのステージが催されており、そこに設置されている大型スクリーンには髪がギザギザで体が硬化している、まさしく雄英高校1-A在籍の切島鋭児郎の姿が映されていた。

「き、切島くん!」

「デクちゃん、あの人も……?」

メリツサの質問に「はい、クラスメイトです」と出久は答えた。

それでメリツサは思う。

こうまでおんなじ学校、しかも同じクラスの人たちが集まるだなんてご都合主義と言
うか、なにかしらの縁が働いているのだろうなと思うのであった。

MCの人が『タイムは33秒です!』と答えていた。

どうやらここの岩山の聳え立つステージは個性を使って仮想的である機械のロボッ

トを倒していく、所謂雄英高校の入学テストのようなもので、名前はまんまの『ヴィラン・アタック』というらしい。

「切島くんはどうやってここに来たんだろう……？」

「誰かに着いてきたのかな？」

と、出久はお茶子と話しているとまさしくそれに該当しそうな人が次のチャレンジャーとして顔を出してきた。

その人は髪を爆発させたような感じの目つきが鋭い、そして出久の幼馴染である爆豪勝己の姿があった。

「か、かつちゃんもいるの!？」

出久が驚く中で、MCが『それではヴィラン・アタック!レディー……ゴー!!』と叫んだと同時に爆豪は両手から爆破による高速移動で次々とヴィランロボットを破壊していく。

その口から出てくる言葉は爆豪を知っているものならお馴染みのセリフで、

「死ねえ!!」

「(死ね……?)」

そんな、いつも通りでもこんな場所ではいささか不謹慎ではないかと言う言葉を言い放っているもので思わず出久も困惑するだけであった。

そして叩き出したタイムは、

『す、すごいですよ！ クリアタイム15秒です。これは現在トップのタイムです！
これを越える挑戦者は果たして現れるのでしょうか!? さあ、お次はどなたでしょうか
!!』

と、MCは盛大に煽る発言をして周りの観客はさらにヒートアップしていく。

それで爆豪は「へっ！」としたり顔をしながらも「いるわけねえ」と思っていたのだが、

「お？ おい、爆豪。あれって緑谷達じゃねー？」

「あ!?!」

切島の言葉で爆豪は指が示した方を見て、出久達の姿を確認するなり、

「な、なんでデクがいやがる!? 俺は雄英体育祭で優勝したから招待されてここにいやがるつてのに……）……なんでここにいるんだよ、デク!!」

と、さすが頭の回転が速い爆豪はそんな事を考えつつもすでに爆破で出久達がいる場所の手すりまで移動していた。

「あ、あはは……かっちゃんこそどうして？」

なんとかはぐらかさそうとする出久。

「俺はなあ、雄英体育祭で優勝したから招待されたつてのに、なんで準優勝のてめえがこ

「ここにいるんだよ！」

「えつと、企業秘密でもいいかな……？」

「ふざけてんのか!？」

「やめたまえ爆豪くん！ 緑谷くんが怯えているだろう!! 婦女子に対して失礼だろ
！」

「うるせえよ！ こんなところでも委員長ツラしてんじゃねーよ！」

「委員長はどこでも委員長だ！」

と、飯田と言っている爆豪。

そして間で仲裁をしている出久という三竦み状態。

そんな三人を見ながらメリッサは女子達に「なんであの子、怒ってるの？」と聞くと、

「まあ、爆豪は緑谷に対してはツンデレなんだよ。前はそんな雰囲気じゃなかったんだ
けどねー」

「そうですね。緑谷さん関係で色々ありましたから……」

と、耳郎と八百万にすでに察せられてしまっている爆豪、いと哀れ。

そして一人お茶子というと、

「フフフ……爆豪くん、また私からデクちゃんを取ろうとするなんて……成層圏の果て
への旅がご希望かな？ かな？」

と、先ほどまでの麗らかな顔とは似ても似つかない表情をしていた。

……最近、この子の黒化が激しいなあ……と、端の方で思っていたが決して口には出さない上鳴と峰田。被害を多く被っているが故に学習している証である。

そんな事はいいとして、ヒートアップしていく爆豪達。

切島も会話に参加してきて、

「俺は爆豪のお付きで来たんだけど、なに？ お前らもやるの？」

「デクが俺のタイムを越えられるわけがねえ！」

「うん、そうだね」

と、もう条件反射で答えていた出久であったが、そこに勝気な顔をしたお茶子が立ち
はだかつて、

「いんや！ デクちゃんなら爆豪くんを越えられるタイムを出せると思うわ！ だって、デクちゃんは雄英高校入試試験一位通過で主席だもんね！」

「んだと、まるがお!? そんな過去の記録なんざ知らねえよ！」

「あわわわ！ 二人ともやめようよ！」

と、話題はさらにヒートアップしていく。

「デクちゃんて雄英高校主席なの!? すごい！」

「ええ。大人しそうに見えてかなりできますわよ、緑谷さんは」

「そうだね。戦闘能力に関しては爆豪に雄英体育祭で負けて結果が出ちゃったけど、総合で見ればかなりすごいし……」

と、すでにメリッサに対する解説役と化している八百万に耳郎であった。

「んなら、いっちょ恥でもかいてこいや!!」

「ええー……」

と、爆豪の言葉で出久のヴィラン・アタック参加が強制的に決まってしまった。

『さーて、なにやら知り合いのもめ事でしょうか？ そばかすと猫耳に尻尾がチャームな女の子の挑戦が始まります！ いったいどんなタイムを叩き出すのでしょうか!』

MCの言葉で少し緊張する出久であったが、

「(うう……でも、やるからには本気で行かないと!)」

そう思ってる気を出していた。

「いくよー! (ワン・フォー・オール、フルカウル! 15%!! +身体強化・怪力!! +脚力強化!!)」

一気に強化系の個性を上乗せして出久の体に紫電が走っていき、気合とともに腕を振るうと風が巻き起こる。

「それではヴィラン・アタック……スタート!!」

MCがそう告げた瞬間、出久の姿はまるで昼気楼でも起きたかの如く一瞬でその場か

ら消え去って次にはあちこちで爆発音や破碎音が何度も発生して、一気に最後の一体のロボットにまで拳を迫らせていた。

「すごい！ まるでマイトおじさまみたい！ でも、一瞬だったからよく確認できなかったけど……違和感があるわ。まるで力を抑えているみたいな……」

メリツサがそう思っている間にも出久は最後の一体をその拳で粉碎していた。

そしてそのタイムが、

『……………えっと、私の見間違いでしょうか？ タイムは1秒……です！ よく分かんなかったので、スローモーションによる確認映像を見る事にしましょう！』

そう言つてMCがモニターを見るように観客を促す。

そこには同時に左手では炎を出して、右手では硬質化した爪を展開して伸ばして貫いている光景が映った。

それも一瞬の事であり、次には足蹴りによるただの蹴りとは思えない破壊力でもつてして通過するだけだったというのに粉々に粉碎していて、最後の一体を拳で砕いているという光景が映し出されていた。

それらの動きがたったの1秒であったのは驚きを通り越して観客のほとんどが呆気にとられるという感じであつた。

中にはこんなに個性を何個も持っている出久に興味を持ちだすものも少なからず存

在していた。

そして帰ってきた出久を歓迎する飯田とお茶子の二人。

「さすがだな、緑谷くん！」

「すごいよ、デクちゃん！」

「あ、あはは……でも少し張り切りすぎちゃったかも……」

対して爆豪は口をあんぐりと開けてしまっていた。

「な、な、な……」

「……爆豪、認めろよ。スピードに関しては緑谷が一枚上手だつてな……」

切島が爆豪の肩に手を置いていた。

そんな、驚愕が冷めやらない中でさらに次の挑戦者がいたようで、

『すごいすごい！ すごーい!!』

というMCの声が聞こえてきて全員が見ると、そこには岩山を覆うように氷山が聳え立っていた。

『タイムは14秒！ 現在2位です！』

氷と言えはお馴染みである轟焦凍の姿がそこにあった。

「と、轟くんもいたの!？」

「もしかして、彼も……?？」

「は、はい……」

「なにかの奇縁なのかしら? でも、さすがみんなヒーローの卵だね」

と、素直に称賛していた。

だが、ただ一人爆豪はというと、出久には抜かされても諦めがつくというものであったが、たった一秒でも自身の記録を抜き去っていった轟に思うところがあるのか、すでに突撃をかましていた。

「おいこらー! 半分野郎!!」

「爆豪?」

突然の爆豪の登場にも轟は驚くそぶりはせずに、出久達の方へ顔を向けて、

「緑谷達もいるのか」

「おい、てめえ! 俺を無視すんじゃないねー!」

それだんでいるのかと爆豪が怒りながら尋ねるが、冷静に親父——エンデヴァアの代わりに来たという轟。

MCがおおずおおずと『えっと、次のチャレンジャーがいるのですが……』という爆豪

が「次は俺だ！ ぜってー抜かしてやる!!」ともうしつちやかめつちやかな事になってきていた。

飯田はそれを見て、

「切島くん、止めるぞ！ 雄英の恥部をこれ以上世間の目に晒してはいけない！」

「お、おう！」

そう言つて飯田と切島が飛び出して行つて爆豪を抑えつけていた。

そんな光景を見てメリツサはフフと笑みを浮かべながら、

「あ、ごめんささい。でも雄英高校つて楽しそうなところなんだなって……」

それを聞いた出久含む女性陣は『タシカニ』とまるで他人事のように、しかし恥ずかしそうに頷くしかできないでいたのであった。

……………そんな騒がしい現場とは打つて変わつて、とある場所では何やらききな臭い事が行われていた。

警備員数名が拘束されていて、顔に傷がある男が、

「ブツは受け取った……予定通りで助かる……。なに？ オールマイトがここにいるだと……？」 いや、大丈夫だ。予定通り事を進めるぞ」

果たして傷の男と会話しているその連絡相手とは一体……？

そしてなにを起こそうとしているのか……。

NO. 101 回想《6》 信頼できる友

出久達が様々なパビリオンで遊んでいるときに、オールマイトとデヴィットは診察室にいた。

そこでは診察台に横になっているオールマイトの体を念入りに検査しているデヴィットがさながら信じられないような表情を浮かべていた。

「トシ……これはどういうことだ!?! 個性数値が極端に下がっているじゃないか!?!」

デヴィットはこうして表示されている機械が信じられないほどに狼狽していた。

これは現在最高の叡智で作られた個性の数値を調べることができる装置である。

これで以前にオールマイトを検査した時には下がっていく一方で、それでもゆるやかではあったのだ。

だが、今回は一気にガクツと落ち込んでしまっていた。

これは異常だとデヴィットは感じた事だろう……。

それでデヴィットはオールマイトの左わき腹の傷を見ながら、

「オール・フォー・ワンとの戦いで負傷したとはいえ、この数値は異常だ。いったい君の体に何が起こったというんだね!」

「……………」

それでオールマイトは咳込みをしながらも、

「(教える事は出来ないんだよ、デイヴ……。もし、教えてしまったら君とメリッサも危険に巻き込んでしまうかもしれない……。だから、すまない)」

心の中でオールマイトは謝罪の言葉を言いながらも「長年ヒーローを続けていれば、ガタがくるもんさ……」と言い訳をした。

だが、デヴィットはなにか隠しているのを察したのか、

「トシ……君と私の間柄はそう短いわけじゃない、だから感じるんだ。なにかを隠しているんじゃないのか……? 思えば、君と一緒に来たミドリヤさん。彼女はなんで君と同伴で一緒に来たんだい……? ただの一生徒にしては優遇しすぎだとも思う。トシの体を治せる可能性を持っている彼女だからという理由ではないだろうしね」

「そ、それは……」

まさかそう切り返してくるなんて、と思わずにはいられなくなつたオールマイトは逆に狼狽えてしまう。

額にいくつか汗が垂れだして目の挙動が揺れに揺れていた。

「トシ……君は隠しごとをするときはなにかとそういう仕草をしたよな。親友じゃないか。隠している事があるのなら教えてくれないか……？ もちろん、初めに言っておくが、私はもしトシが隠しているその秘密を知ったとしても、言いふらさないし、そして力にもなることを約束するよ」

「デイヴ……」

「そして危険に巻き込まれるというのなら、私は昔のように君の隣でもに危険に飛び込むこともやぶさかじゃない。私にここまで言わせておいて、教えてくれないことはないだろう……？」

数少ない親友にここまで言い切られてしまい、オールマイトは葛藤に次ぐ葛藤をしていった。

果たして話しているのか……？

ここで話してしまつたらデイヴはきつと必ず力になつてくれるだろう、しかし、それでもいいとしてもメリツサはどうする……？

何も知らない彼女まで巻き込む危険性などを考えたら天秤に測れるものでもない。

「メリツサは……」

「そう来るか。それならメリツサにも私から説得をしよう。きつとあの聡明な子なら分かつてくれるさ。いつもどこまででも一蓮托生しようじゃないか」

「ッ……」

もう、あと言い訳をできる材料がない。

いいのか、話していいのか？と葛藤の極みに陥るオールマイト。

ワン・フォー・オールの秘密を知っているのは、極わずかだが存在する。

グラントリノ、塚内、根津、リカバリーガール、相澤、ナイトアイ……そしてワン・フォー・オールを託した出久。

思えば、結構いるじゃないか……とこんな場面で変な事を考えてしまっているオールマイト。

そしてここが分岐点だと悟るオールマイト。

ここまで言われたのに強情にも今話さなければ、下手したらこの友情を壊してしまうかもしれない。

だが、話せばまた一人力強い仲間ができる。

「私が決めるんだ……いつも、緑谷ガールに秘密は誰にも言うなって言っておいたのに、私は弱くなってしまったのかもしれない……デイヴになら話してもいいかもしれないと思っっているのだから……。そしてデイヴの口からここまで言われてしまったらもう引き返せないじゃないか……そして長い付き合いで信じられるという確信がある」
昔からの悪友ともいう仲の自身とデヴィット。

そして娘のメリッサ。

もし、知ってしまったらオール・フォー・ワンに狙われる可能性は段違いに上がる。

それでも、I・アイランドというセキュリティ万全な場所で暮らしているのなら雄英に
いるよりは安全かもしれない。

そこまでオールマイトは考えて、一回溜まっている息を吐きだしながらも、

「はあー……………分かったよ、デイヴ」

「トシ……………」ここまで聞いておいて啖呵も切った身としては教えてもらえるのは正直に嬉しいが、
敢えてここで聞くけど、いいのかい？ 別に無理なのなら私もなにも無理強い
はしない。

いつか話してくれるだろうと思いつつよ？」

「いや、いいんだデイヴ。思えば大切な親友に話していなかったことがなによりもいけ
ないことだったのだから。」

内緒にしてくれるという確信はある。

でも、私が恐れていた。君を巻き込むことを…………。

だから、話す前に覚悟してくれ、デイヴ。

これを聞いてしまったらもう引き返せないからな？」

オールマイトの言う引き返せないという言葉。

それに若干の緊張を孕みながらも、それでもデヴィットは無言で頷いた。

「それでは話すとしよう。ちなみにここは防諜設備は大丈夫だよな?」

「また気弱な事を……。当然じゃないか。私の研究室だよ。誰にも聞かせないさ」

「ははは、すまないね。本当に数少ない人しか知らない事だからね」

「そこまでなんだね。わかった、覚悟して聞くとしよう」

「それじゃ、どこから話そうか……」

それでオールマイトはまずは自らの個性である『ワン・フォー・オール』の事を話していった。

そして後継者に出久を選んで個性を譲渡したことも。

デヴィットはそれで何度か驚きの顔をしながらも、何度も頷きながら聞いた内容を咀嚼して完全に理解できるまでその高性能な頭の中で反芻はんすうさせて聞き終えた。

「以上が私と、そして緑谷ガールの秘密だよ……」

「なるほど……確かにトシが警戒するのも頷ける内容だった。そして、同時に私の計画も潰えたのを自覚したよ」

「計画……?」

オールマイトはそれでデヴィットに聞き返す。

計画とはなんだ?と……。

「トシ……どうかこんなバカな事をしようとしていた私の事を叱ってくれ。そしてできれば止めてほしい」

「なにを言っているんだ、デヴィヴ。なにを……!?!」

「私の事も聞いてくれないかい?」

そしてデヴィットはオールマイトに本日のレセプションパーティーでやらかそうとしている事を包み隠さずオールマイトに伝えた。

当然、オールマイトは「馬鹿なことを……」と表情を歪めたのは言うまでもない事であった。

……こうして、本来起きたであろう悲劇な出来事は事前に聞く事ができたことによつてオールマイトはデヴィットと二人でどうしたものかと考えをめぐらす事になる。救いがあるとすれば協力する彼らも偽物だということだろうか、と言う感じである。

しかし、もうすでに遅く……獣の爪は今か今かと振り下ろされようとしていることなどこの時の二人には知りようもなかった。

偽物がもし本物だったら、という考えは天才のデヴィットでさえも想定外で思いつかなかったのだ。

一方で、出久達は今日のバイトで疲れ果てていた上鳴と峰田を労う意味も込めてメリッサが用意していたレセプションパーティの招待券を与えていて、二人は「俺達の労働は報われた——!!」と叫んでいた。

そして時間までに集合するという事を聞いて、それぞれ一旦分かれていった。

出久もドレスを着る心構えを密かに決めながらも部屋へと着替えに行こうとしたが、そこでメリッサに引き留められる。

「デクちゃん、ちよつと私に付き合ってもらえないかな……?」

こうして出久はメリッサに着いていくことになった。

ちなみに、別行動をしていた爆豪と切島の二人は部屋にいた。

そこでは切島が正装に着替えていて、

「おーい、爆豪。お前も着替えろよ。服、持ってきてあるんだぜ?」

「うっせー! 用意周到かよ!? 誰がそんなもんにいくかよ!」

「でもよー……緑谷も参加するって言うんだから、可愛い姿が見れるかもしれないぜ？」
「……………ッ！（ピク）」

「いいのか？ 轟とか飯田にも見られるんだぜ？」

「……………ッ！（ピクピク）」

爆豪の耳は盛大に反応していた。

そしてどうしてか苛立ちを感じたのか、

「……………行くわ」

「そうでないとなー！」

そんな感じで爆豪もいそいそと着替え始めていたのであった。

NO. 102 回想《7》メリッサの研究室にて

出久はメリッサの研究室へと招かれていた。

「ここは私のアカデミーの校舎で、そして私専用の研究室なの。色々散らかっているけどごめんね」

「ううん。大丈夫です」

「ありがとう」

それで出久は研究室を見回しながらも感嘆の声を上げながらも、

「すごいですね……。こんな一つの研究室をもらえるだなんて、メリッサさんは本当に優秀なんですわね！」

様々な道具や資料が乱雑に置かれていて、そしてなにより目についたのはいくつも置いてあるトロフィーや盾。その数はかなりのものがあり、メリッサの優秀さの証ともいえるものだ。

それでもメリッサはそれを自慢することもなく、一つの倉庫の扉を開きながらも、

「……実はね、私はそんなに成績が良い子じゃなかったの。だから他の生徒のみんなに負けないように、パパに誇れるように一生懸命勉強をしたわ。どうしてもヒーローになりたかったから」

「プロヒーローに……?」

それで出久は驚きの表情をする。最初から科学者を目指していなかったのかなと……。

メリッサはそれでどこか諦めの顔をしながらも、

「ううん、ヒーローに関してはずぐに諦めたの。だって、私無個性だし」

「ッ!?!」

メリッサのなんでもないかのような告白に、しかし出久は自身の過去を照らし合わせて深くショックを感じた。

「無個性なの……?」

「うん」

メリッサも出久と同じように5歳を過ぎても個性が発現しない事を不思議に思い、医者に診断してもらったところ、発現しないタイプだと宣言されてしまったのだという。

それは当時の出久と同じ境遇だったであろう。

出久はそれはもう、オールマイトの映像を見ながらも絶望を胸に抱いたものである。

メリッサも同じ境遇の人だったことに共感を覚えてしまっていた。

「す、すいません、なんかその……」

出久の突然の謝罪の言葉にメリッサは不思議そうに首を傾げながらも、

「どうしたの？」

「いえ、周りの人たちが当然のように持っているものを持ってなかったというのは、ショックだったと思います……」

ここで出久も一年前までは無個性だと思っていた事など語る気にはなれなかった。

結果論だが、それでも今はこうしてフオウとオールマイトのおかげで個性が発現して、将来を目指せるというのに、そんな自身の過去を語るのは、同時に無個性であるメリッサの事を下位にしてしまうかもしれないからと思ったからだ。

そんな、内心を隠しつつも自身の事を気遣ってくれる出久の言葉に、メリッサも当時の思いを思い出したのか、

「うん。正直言っちゃったらショックは大きかったの。でも、私のそばには目標の人がいたから……」

「目標……？ それって……」

「パパの事」

そう言いつつ柵に飾られているいくつもの写真を見るメリッサ。

そこにはどれもメリツサに対するデヴィットの惜しめない愛情が伝わってくる。

「パパはね、ヒーローになれるような強い個性は持っていないなかったけど、それがどうしたと言わんばかりに科学の力でマイトおじさまやヒーロー達のサポートをしているの。だから間接的にだけど、平和のために戦っているの……」

「ヒーローを助ける存在……」

「そう。それが私が目指すヒーローのなり方」

それで出久は考える。

もしも、自身もそんな考えを持てたらメリツサのように科学者の道を選んでいただろうかと。

しかし、その考えはすぐに無くした。

もしものIFを考えても、それは所詮あったかもしれない事だからだ。

それにいままさらそんな事を考えてしまったら個性を譲ってくれたオールマイトに対して不謹慎が過ぎてしまう。

それに、自身のヒーローを諦めきれなかった想いが実を結んでフォウを助ける事もできた。

だから、それを誇りにすればいいじゃないかと出久は考えていた。

そして、そんな希望の光があったからこそ、メリツサもすぐに立ち直れたのだろうと、

そう感じた。

そんな事を考えていた出久をよそにメリッサは一つの箱を持ってきた。

それをテーブルの上に置いて、それを開けるとそこからはなにかのベルトのようなものが顔を出してきた。

「これは……?」

「このサポートアイテムは前にマイトおじさまを参考にして作ったものの」

「オールマイトを?」

「デクちゃん、ちよつと腕を捲ってもらってもいいかな?」

「あ、はい」

それで出久は肘まであるサポート製の腕具を外した。

そこにメリッサは出久の腕にそれを巻いた。

「このパネルを押ししてみて」

「あ、はい」

出久は不思議そうに思いながらも、そのパネルのボタンを押した。

すると突然ベルトが輝いて、次々と展開していつて腕に巻きついていき、ぴつちりと出久の腕に巻きついていく。

その変化に出久は驚愕しながらも、やっぱり科学の進歩はすごいなあと思っていた。

「これは……?」

「名付けるなら……『フルガントレット』かな?」

自慢そうにそういうメリッサ。

「デクちゃんと初めて会った時にはそんなに違和感を感じなかったんだけど、あの時に参加したアトラクションの時にね、デクちゃんはどこか個性をセーブしているように感じたの。もしかしたら強すぎる個性にまだ体が追い付いていないんじゃないかなって……」

「すごい……。あのたった数分だけのアトラクションだけで気づくだなんて……。やっぱりメリッサさんはすごいですね……」

「あ、やっぱり当たっていたんだね。私の勘違いじゃなくてよかったわ」

メリッサの言う通り。

まだワン・フォー・オールは100%は発揮したら試したことがないがきつと腕が破損してしまうし、フルカウル状態でもまだ15%がそこそこで全力だなんて夢のまた夢だ。

フオウの身体強化・怪力を併用して現状でそれなのだから、まだ個性を存分に発揮するためには修行が必要になってくる。

「このフルガントレットね、マイトおじさま並みの拳を放つても、私の計算では三回まで

なら耐えられる強度があるわ。だからきつと、デクちゃんの本来の力を発揮できると思うの」

「……僕の、力を……」

そんなにすごい力が秘められているのかと、出久はとても感動そうにそのフルガントレットを眺めていると、そこでメリッサはすごい事を言い出した。

「それ、デクちゃんが使つて」

「え、でもつ……とても大切なものなんじゃ……」

「だから使つてほしいの。きつとフルガントレットも使つてもらえるのを喜んでいと思うし……」

「……………」

それで出久はもう一度フルガントレットを見た。

どこことなく主を見つけて光り輝いているように感じるのはきつと気のせいであろうか。

「困っている人達を助けられる、素敵なヒーローになつてね」

「メリッサさん……はい！」

ある種のメリッサからの応援だと受け取った出久は素直にそれを受け取ることにした。

大事にしないとね、と出久が思っているときに、ふと携帯が鳴っているのを感じたのでそれに出てみると、

『なにをしている緑谷君！ 集合時間はとつくの昔に過ぎてしまっているぞ！』

「あつ……」

それで出久は顔を青くする。

「ど、どうしよう！ 今からじゃ部屋に戻ってドレスを着ている時間もない!？」

「あ、それじゃデクちゃん。私のを貸そうか？ 私も参加予定だから一緒に着替えましょう」

「え、でも……」

それで出久は顔を赤くする。

そんな出久の反応にメリツサは首を傾げながらも、

「どうしたの……?？」

「その、ありがたい話なんですけど……メリツサさんに話していなかったのも問題なんですけど、信じてもらえないと思うんですけど、僕って実は一年前に個性が発現するまでは男だったんです」

「え……?？」

それでメリツサはポカンとした顔になる。

初めて聞く話ともなれば誰でもそんな顔をするだろうと出久は思った。

むしろ、すぐに受け入れてもらえた1—Aのみんなには感謝をしないとイケないであろう。

「ただ、だからといってメリッサもすぐに受け入れてもらえるだろうか、出久は不安に感じたのであるが、

「……個性の発現とともに性転換をしてみました……？ そんな個性もあるんだね、それに一年前だとするとデクちゃんもそれまでは無個性だったって思い込んでいたって事……？……ううん、こんな時じやなかったらもつとデクちゃんの個性について色々聞きたい、そしてきつとマイトおじさまにも目を掛けてもらっているんだからかなりの強個性………ブツブツブツ………」

メリッサの中の科学者としてのスイツチが入ったのか、いつもの出久に負けず劣らずブツブツと色々と呟きだしてしまっていた。

「それで出久は（普段は僕もこんな感じなのかな……）と思っていたり。

「あ、あの……メリッサさん？」

「はっ！……ごめんね、デクちゃん。でも、そうなると一緒に着替えるのは恥ずかしいかな？」

「少し……。なんとかクラスのみんなとは一緒に着替えられるようにまでは慣れました

けど、雄英に入るまでは時期も関係して女子制服は購入しても無駄になるだろうと思つて男性制服で過ごしていましたから……」

あはは……と空笑いをする出久に、メリツサは「苦労したのね……」と思いつつ、「私は大丈夫だから、一緒に着替えましょう。デクちゃんもそこを気にして私に正直に話してくれたんでしょ？ だから私も気にしないわよ」

「ありがとうございます……」

それで出久はみんなに告白した時の事を思い出しながらも、メリツサも自身の事をすぐに受け入れてくれたことに素直に感謝の思いであった。

それから出久とメリツサの二人は一緒にドレス姿に着替えたのであった。

ただ、出久はやはり気慣れないモノなので苦労していたので、メリツサが丁寧に着替えさせていて、照れていたのはご愛敬である。

NO. 103 回想《8》 レセプション・パーティー

飯田は今か今かとやってくるであろうみんなの事を考えていた。

近くにはすでに轟に、そしてウェイター姿に上着を羽織っている上鳴と峰田の計四名の男達がいた。

「緑谷くんはまだ来ないのか……？　電話してから結構経つが……」

「そうは言うがよ、飯田。仮にも女子歴がまだ全然浅い緑谷は着替えるのにも苦労すると思うぜ？」

「そうだぞ！　しかも、普段から表裏なく猫耳とかが可愛い緑谷が気慣れないドレスを悪戦苦闘しながらも着てきて、もしかしたらなにかのハプニングで着崩れとか起こしそうで、おいらはもう……」

峰田は想像したのか今にも鼻血を出しそうなくらいに恍惚な笑みを浮かべていた。

「峰田くん！　よこしまな考えは緑谷くんに失礼だ！　すぐに脳内から削除しなさい！」

「いいじゃねーかよー。そういう飯田だつて、見たくないわけじゃないんだろ〜？
ん〜？」

「ぐっ!!」

痛いところを突かれたのか飯田は狼狽えてしまう。

真面目人間の飯田も結局は男の子なのである。

「そんで、轟はそこんところはどなんだ……？」

「上鳴……。そうだな。見たくねーと言うと嘘にはなるな……」

「だろう？ 飯田と違ってお前は素直でいいね〜」

男どもでそんな会話を繰り返していると、扉が開いて、やってくる来訪者たち。

「ごめーん。遅れてもった」

最初に登場したのはお茶子であった。

ドレス姿はピンク色の可愛い系で実にお茶子にマッチしていたために、上鳴と峰田は

素直に「おお〜！」と声を上げていた。

続いて八百万とその後ろに隠れている耳郎が姿を見せてきた。

八百万は黄緑色のエレガントな大人のドレスを着ていた。

「いいねいいね!!」

もう約二名は興奮しっぱなしであった。

そして八百万の後ろから耳郎がでてきた。

ドレス姿は可愛らしいシツクな感じのものであった。

「ううー……恥ずかしいな……ウチ、こんな格好は慣れていないから、その、どうかな……？」

自分にまだ自信が持てない耳郎であつたために、ついそういう風に返ってくる言葉を求めてしまう。

だが、返つてきたのはなんか先ほどまでの興奮が嘘のような落ち着いた表情の上鳴と峰田は、

「馬子にも衣裳だな」

「女の殺し屋みてー！　なんか、落ち着けた」

仮にも女性に対してかなり失礼な物言いだ。

それでキレた耳郎は「死ぬ！」とイヤホンジャックを二人に放ち、突き刺して音波を送り込んだ。

自業自得と言う感じで二人は悲鳴を上げていた。

「麗曰くん。とても似合っているぞ！」

「ありがとね、飯田くん！」

「八百万に耳郎も似合っているぞ……」

「ありがとうございます、轟さん」

「こいつらと違ってやっぱ二人は安心して感想を聞けるね」

痺れて転がっている二人を見ながら、いい気味だと思い耳郎は少し気持ちが和らいだ気がした。

「あれ……？ デクちゃんは？ まだ来てへんの？」

「そうなんだ。まだ緑谷くんだけ来ていないんだ……」

「おそらく着替えに手間取ってんだろうな……」

飯田と轟の言葉に八百万はすぐに「まあ……」と声を出して、

「でしたら私に一言言ってくださいればすぐにお茶子さん達と一緒に着替えのレクチャーもしましたのに……」

「緑谷はただでさえ女物は気慣れて無さそうだもんね」

「心配になってくるわ。飯田くん、電話はしてみたの？」

「そうだな……。もう一回電話してみるか」

と、飯田が携帯を取り出そうとした時であった。

自動ドアが開いてそこからドレス姿に着替えているメリッサが姿を現す。

メガネととって、肩が出ている大人な感じの雰囲気ではり年上としての魅力が出た。

「ヒョー!!」

それで思わず上鳴と峰田は興奮から叫び声を上げる。

「あれ? みんな、まだいたの? もうパーティー始まっているわよ?」

「それなんだが、緑谷くんがまだ……」

「デクちゃん……? それなら私の後ろにいるわよ」

メリツサは振り返るが、なぜか出久は自動ドアの向こう側から顔だけを出して頬を赤くして震えていた。

「緑谷くん……?」

「あ、あのあの……飯田くん……それにみんなも……きつと変な格好だから、笑うなら素直に笑ってもいいからね?」

「そんなことないわよ。私がちゃんと似合うドレスを貸してあげたし、それにデクちゃん自体もすごい可愛くて魅力的だから、きつとみんなも驚くと思うわよ」

メリツサはそう言って出久の方へと歩いて行って、思い切って背中を押してあげた。

そしてまみえる事になる出久のドレス姿。

しいて上げるとすればお茶子のドレスに近いもので、新緑のような色彩で、メリツサにお化粧してもらったのか、いつもよりもより可愛く見えて、動揺から来ているのか二股の尻尾は常に動き続けていて、恥ずかしいのか赤い頬に手を添えて猫耳を片手で

弄っている出久は、普段の活発さも鳴りを潜めて、まさに女の子というに相応しい様相であった。

「ど、どうかな……?」

顔を伏せがちながらもそう聞いてくる出久に対して、耳郎はすぐにある事を思った。

「(あ、あざとい!!?)」

「デクちゃん……可愛い!!」

「可愛いのですわ、緑谷さん!」

そんな耳郎をよそに、お茶子と八百万の二人はすぐに感想を口に出していた。

お茶子に関しては自制はできたのか心の中だけでだが、某鈍女みたいに「(はうー!」

お持ち帰りしたいよー!」と叫んでいた。

そして男連中といえは、

「……………、はっ!? 一瞬意識が……」

「似合ってるぞ、緑谷……その、なんだ? 素直に可愛いと思う」

「ワンダフォー! ビューティフォー!」

「ぐへへー……あざといじゃねーかよ、緑谷あ……ッ!!」

飯田はあまりの威力に意識を飛ばしていて、轟はクールに装いながらも胸は熱く燃え上がっていて、上鳴は声高らかに叫んでいて、最後に峰田はいやらしくよだれを垂らし

ながらも出久の頭から足までをじっくりねっとり目に焼き付けていた。

そんな男連中に対して、女子連中はと言うと、

「「これだから男子は……」」

と口を揃えて言っていたり。

メリツサもさすがに同じ気持ちだが、口には出さずに苦笑いだけで済ませた。

当の出久はというと、

「あれ……？ やっぱり変だったのかな……？」

と、かなり鈍い反応をしていて、耳郎がそんな出久の肩に手を置いて、

「緑谷はそのまんまの純粹なままでいてよ……」

「え？ う、うん……。うん？」

返事はすれど、途中で訳が分からなかったために首を傾げるだけに留まった。

た。………ちなみに、爆豪と切島は道に迷ったのか、どこともしれない通路を歩いてい

「……………おい、切島。本当にこっちで合ってるのか……………」

「た、多分あつてると思うんだが、あれ？どつかで道を間違えたか……………」

と、普段からは考えられないほどに迷子な事になっていた。

爆豪は出久のドレス姿が見れるかもしれないという考えで来たというのに、切島の案内が適当で当てが外れてイライラしているのであった。

まあ、見れていたとしても飯田以上に意識を飛ばしてしまい固まることは必須であろうが……………。

そんな出久達をよそにすでに始まっているレセプション・パーティーではオールマイトがせっかく来ていているというのに目立たせないと駄目だろうという計らいで壇上に立たされていた。

「(うーむ……………結局いい考えは浮かばずにここまで来てしまった。もしかしたら、もうすでに手遅れかもしれないというのに、呑気に挨拶をしていいのか……………?)」

今か今かと迫ってきている魔の手に、オールマイトはすでに手遅れ感を味わいながらも、表向きは挨拶をしていた。

そんなときに、ついに魔の手が降りかかった。

突如として緊急放送が入る。

『I・アイランド管理システムよりお知らせします。警備システムにより、I・エキスポエリアに爆発物が仕掛けられたという情報を入手しました』

その知らせは瞬く間にI・アイランド中に放送されて、一般客として来ていた他のI—Aの生徒達は他の一般客達とともに避難を開始していた。

そしてレセプション・パーティー会場では、数人の警備員とは似ても似つかない戦闘服の集団が会場内に入ってくる。

そして顔に傷のある男が喋り出した。

「そういうわけだ……。警備システムが俺達が握らせてもらった。反抗しようとは思わない事だ。もしそんなことをしたら……」

モニターが映し出されて、そこでは観客たちが警備ロボに包囲されている光景が映し出される。

「もう、言わずとも分かるよなあ……。う……。そう、人質はこのI・アイランド中の人間全員だ。お前らも含めてな——やれ」

次の瞬間に、地面から捕縛装置が起動して瞬く間に会場にいたオールマイイト含めた

ヒーロー達は拘束されてしまった。

「しまった！」

「オールマイト。いい様だな。そこで大人しくしているんだな。暴れようとしたら客の命はないと思え。他のヒーロー達も大人しくしているんだな」

「Shit！」

オールマイトは後手後手に回ってしまった事を今更になって実感して悔しさから歯ぎしりをする。

デヴィットはそんなオールマイトを見ながらも、

「(トシ……なんとか私が時間稼ぎをする……それまで耐えてくれ……)」

「(デイヴ……)」

もう、始まってしまった計画は止まらない……。

NO. 104 回想《9》 出久達の決断

出久達は通信機能その他が使えない事に不安に思い、先ほどの放送もかなり動揺していた。

その中で出久は冷静にパーティー会場に向かおうと提案する。

出久の口から「オールマイトが会場にいる」という旨を伝えられて、それで全員は安堵の表情を浮かべるのであったが、いざ、会場を見渡せる場所まで来てみると一気に不安が拡大した。

そこには顔に傷がある男……ウォルフラム率いる戦闘集団が会場の人たちと各ヒーロー……そしてオールマイトすらも捕縛している光景を目にする。

「オールマイト！」

「(緑谷……ダメだ。今言ったらウチ達も捕まる)」

「(耳郎さん……。そうだ！ イヤホンジャックで)」

出久の提案に耳郎は地面にイヤホンジャックを刺して、出久はオールマイトに分かる

ように携帯の光を照らす。

それにすぐにオールマイトは気づく。

「(緑谷ガール!?)」

「喋ってください。聞こえています」

それを察したのかオールマイトは小声で話す。

ヴィランがタワーを占拠、警備システムの掌握、島の人たち全員が人質に、ヒーロー達も捕縛された……そして最後に『早くここから逃げなさい』というオールマイトの願い。

「大変だよ、緑谷」

それを聞いていた耳郎は顔を青くさせながらも、そう言う。

事態は思っていた以上に深刻のようであった。

それから一同は非常階段の踊り場で話し合っていた。

当然、飯田はオールマイトの言葉通りになんとかここから脱出して救援を呼ぼうという。

出久達はもちろん、まだヒーロー資格を持っていないためにヒーロー活動ができないのである。

それでは保須市の時と同じことになってしまう。

だが、メリツサが言った。この警備はあのヴィラン収容所としては最高峰であるタルタロスと同等の警備システムであるから困難であると。

「そ、それじゃ脱出は困難だし、助けが来るまで大人しく待つしかないのか……」

つい、上鳴が弱気な発言をしてしまう。

ヒーローを目指しているとはいえまだまだ子供であるのだ。

不安に駆られてしまうのは至極当然の事だ。

だが、そこで耳郎が、

「上鳴は、それでいいの？」

「いいの、つて……どういう意味だよ」

「助けに行こうとかは思わないの？」

耳郎は先ほどのイヤホンジャックを使った時にオールマイト以外にも他の捕らわれた人々の声を聞いてしまったのだ。

だから、みすみす放っておけないと思っていた。

「だ、だけだよ！ オールマイトすら捕まっちゃってんだぞ!! オイラ達でどうにかなることなのかよー！」

峰田の本音から来る叫びに、一同は悔しさを感じていた。

轟はおもむろに自身の腕を見ながらも、

「俺達はヒーローを目指している……」

「で、ですから私達はヒーロー活動を……」

「だからって、なにもしないで事態が悪化するかもしれないのをここでじっと待っているしかないのか……?」

「……ッ!」

それで八百万は声を詰まらせる。

それで他の一同も今どう行動するかを考えている時だった。

「……僕は、助きたい」

「デクちゃん……?」

出久は俯いていた顔を上げて、

「助けに、いきたくないだ」

「ヴィランと戦う気かよ!?」 USJや保須市とかで懲りていないのかよ、緑谷!」

だが、出久はかぶりをふって、ヴィランとは戦わずに、みんなを助ける方法を模索したいと言った。

それは全員の心の琴線に触れた。

だが、実現するにはあまりにも壁が大きいこともまた事実。

「でもよ、現実的に考えて無謀じゃ……」

「それでも探さなきゃいけないんだ。今僕たちができる最善の行動を、みんなを助けられる方法を……」

それでメリツサはそんな出久の姿にヒーローの在り方を見た。

だから話すことにした。

今この状況を打開できるであろう方法を。

「I・アイランドの警備システムはこの最上階にあるわ。そこをどうにかできれば……」

それである提案がされる。

きつとヴィラン達がシステムを掌握しているのなら、認証プロテクトやパスワードも解除されている。

よってシステムの再変更をできれば警備システムも正常に戻るかもしれない。

「これならみんなを助けられるかもしれない」

メリツサも出久と同様にすでに覚悟は決まっていたようであった。

上記通り、まだヴィラン達はシステムの掌握を完全にできていないために、現状は出久達にはまだ実害はない。

戦いを回避できるのであればなんとでもできよう。

それで一同がやる気を出し始めていた。

だが、

「最上階にはヴィランがきつといますわ」

「戦う必要はないんだ。システムを取り返せれば、ヒーロー達の捕縛も解除される。オールマイトも復帰する。逆転できるんだから」

そんな出久の姿や言葉に改めて飯田は驚かされていた。

男女で差別をするつもりはないが、それでも普通なら怯えてしまうところを出久は強い意志でやり遂げようというヒーローの心をすでに持ち合わせているのだから。

「(緑谷くん……いつも君には追い越されているばかりだな)」

それで胸が高揚する気分になっていた。

そして、

「デクちゃん、行こう！」

「麗日さん！」

最初にお茶子が声を上げる。

それにつられて「ウチも！」「俺もいくぜ」と轟と耳郎も賛成する。

飯田はそれで険しい顔をしながらも、

「危険と判断したら引き返す。それが飲めるのなら俺も同行しよう」

「そういう事であれば、私も」

「よっしゃ！ オレもいくぜ！」

飯田、八百万、上鳴も賛成した。

これで残るは峰田だけであった。

何度も顔を青くさせながらもうー、うー、と唸っていたがもう自分以外が行く気満々で諦めもついたのでだろう、頭を盛大に掻きながらも、

「あー、もう！　じゃオイラもいくよ！　いけばいいんだろ!？」

「ありがとう、峰田くん！」

それで全員が行くことになったのだが、出久はメリッサに近づいて、

「メリッサさんはここで待っていてください」

「いえ、私も行くわ。それに誰がプロテクトを解除するの……?」

それで「あっ……」となる一同。

「私ならそれができるから、途中で足手まといになるかもしれないけど、連れて行って……私にもみんなを守らせて……」

「……わかりました。行きましよう、みんなを助けに！」

それで全員が「おー!!」と声を上げる。

それから出久達は再度オールマイトの方へと向かう。

そこでオールマイトは出久の姿を見たのか、

「緑谷ガール!?」

「オールマイト……僕達、いきます」

「危険だ!」

「わかっていきます。でも逃げません」

「しかし……」

「出来る限りの事はしたいんです」

「緑谷ガール……」

「必ず助けます……!」

離れていてもまるで会話しているかのように二人はそう話して、出久は向かっていった。

それを見送ったオールマイトは、

「やはり、行つてしまったか……教師として、そして師匠としてその行動を咎めないといけない、が……ここで動かなければヒーローじゃないよな!!」

身体からトウルフフォームに戻りかける蒸気が上がり出していたが、それでもその時まで踏ん張ることを覚悟したオールマイトであった。

「(デイヴ……君も頑張ってくれ……必ず助けに行く!)」

そんな心配をされていたデヴィットは最上階でサムとともに計画通りに連れられていたのであったが、

「あ……？ なに言ってるんだ、おまえ？」

「だからこう言ったのだ。私はこの計画から降ろさせてもらおうと……」

「博士!? どうして……」

「すまない、サム。でも、ちよつとあつて私はもうあれは必要ないと思つてしまつたんだ。協力してくれた偽のヴィラン役の君たちには悪いと思つている。だが、私は……」

そこまで言いかけて、次にはデヴィットの頬に衝撃が襲う。

「何しけたこと言ってるんだよ、デヴィット博士。なに？ 俺達が本当に偽物のヴィランだと思つていたわけ？」

「ッ!? なんだって……?」

それで驚くデヴィットをよそにサムはヴィラン側に足を進めながらも、

「博士、あなたにはがっかりです。せつかく本物のヴィランを手配したんですから、あな

たには最後まで協力してもらいますよ」

「サム!? 君は、まさか!?!」

「はい。私はヴィラン側に寝返るためにここまで来ました。博士、あなたが悪いんですよ? せっかくの研究成果も凍結されてしまって富も名誉も奪われた……お金くらい貰わないと割に合いませんからね」

「サム……」

それでデヴィットはサムの事を理解していたつもりで、その実理解できていなかったことに深い悲しみを覚えた。

それからヴィランに銃口を突き付けられながら、とあるものを取り出す作業を無理やりやらされることになってしまったのであった。

「(すまない……トシ)」

デヴィットは心の中で手遅れを感じながらもオールマイトに謝罪の言葉を言った。

NO. 105 回想《10》 走る出久達

………結果論から言わせてもらえれば、出久達の行動はすぐにヴィラン達に知られる事になった。

隔壁を下ろされてしまっていて、どこを進めばいいのかという事になり、峰田が不用意に非常階段のレバーを捻ってしまったためにすぐさまに出久達はモニターで確認されてしまった。

それでも先に進むしかない出久達の中で、峰田は一人「みんな、ごめんよ」と呟いていた。

「気にしないで！ でも、困ったね、隔壁が次々と閉まっていく！」

「シャッターが閉まっちゃおうよ！」

「ッ！ 轟くん！」

「わかった！」

閉まっていくシャッターの向こう側に扉が見えたのを確認した出久の叫びに、同じく

すぐに察した轟が閉まっていくシャッターにめがけて氷を伸ばしていき、なんとか完全に締まる前にわずかな隙間が残っていた。

「飯田くん！」

「ああ！ レシプロバースト!!」

すぐさまにその隙間に飯田が飛び込んでいき、扉を自慢の足で蹴破った。

そのまま全員は扉の中へと入っていく。

そこにはさまざまな植物が生えている光景があった。

「ハハハ!?」

「植物プラントだわ。個性での研究のための——」

「待って！」

耳郎がメリツサの説明に待ったの声をあげて、わずかな音に警戒するように前に出る。

見ればこのフロアに設置されているエレベーターであろう場所から、よく見れば階数を示す表示がどんどここへと昇ってきているのだ。

「まさかヴィランに!?!」

「ひとまず隠れよう！」

それで草の茂みの中に隠れる出久達。

そしてエレベーターから二人組の男が出てきた。

「ガキどもはどこにいる?」

「まったく、面倒な場所に隠れやがって……」

「どんどんと近づいてくる男達。」

出久達はそれで「来るな、来るな……」と祈り続けていた。

だが、

「見つけたぞ、ガキども」

という言葉とともに出久達に緊張が走る、のだが、そこで思いがけない方から違う声
が聞こえて来た。

「ああ? いまなんつったテメー?」

「あ、おい、爆豪!」

そこにはなぜこんな場所にいるのかいささか疑問ではあるが、爆豪と切島の姿があつた。

切島は事情をまだ知らないために男達の事を警備員か何かかと勘違いしたのか、

「すみません。俺達道に迷つちまって……レセプション会場はどちらにいけばいいんですかね?」

と、一緒に聞いていた出久達……特に峰田は「なんで道に迷つて80階までこれるん

だよ!？」と突っ込んでいた。

それで案の定男たちは切島の言い分に腹を立てたのか、

「見え透いた嘘をついてんじゃねーよ!!」

と言いつち、なにかの個性を切島めがけて放った。

出久達も思わず立ち上がるが、最初に動いたのは轟だった。

氷を展開して切島へと迫ってきていた攻撃を何とか防ぐ。

「こいつは!？」

「轟か!？」

爆豪と切島も気づいたのか驚いた顔をしている。

だが、時間が惜しいのを察したのか、

「お前たちは先に行け!」

そういつて轟は出久達の地面に氷柱を生やしてどんどん上昇させていく。

「俺達が時間を稼ぐからなんとか、上に行く道を探せ!」

「轟くんは!？」

「大丈夫だ、後から必ず追いかける」

「……はい!」

それでその場に残された轟、そして轟に事情を説明してもらった爆豪、切島の三人は

ヴィランとの戦闘に移るのであった。

三人の心配をしながらも、出久達は上層部に到着したが、やはり隔壁はしまっていて先に進めなかった。

「これからどうする!？」

「これじゃ袋の鼠だぜ！」

「どうすれば……どうすれば……」

出久は必死に周りを見回した。

するとある所に自慢の視力強化で見えた天井に小さい扉が見えるのを確認して、
「メリツサさん。あの天井の扉は使えそう？」

「日照システムのメンテナンスルーム……」

「あれなら非常用のはしごがあるのでは!？」

と、全員は希望を抱くが、問題があった。

それは誰があそこまで、しかも外側から開けるかだ。

もちろんそんな都合のいい個性など持ち合わせていない。

希望は絶たれたかに思われたが、八百万が「まだどうにかかりますわ」と言つて、個性で作った小型爆弾をハッチに向かつて投げた。

爆発とともにハッチの蓋が外れてダクトが顕わになった。

そう、通風口から外に出て外壁を伝つて上の階にいくというものだ。

しかし、ここで問題になつてくるのがどうやって小さい穴から外に出て、さらには上まで登つていくのか……。

身体が小さくて、さらには自力で上に登つていけるような個性を持っているのは……
そう、小柄な峰田に白羽の矢が立てられた。

「お、おいらかよ!？」

「お願い、峰田くん!」

「あんたが頼りなんだよ!」

「バカバカ! ここ何階だと思つてんだよ!？」

現実的には80階で命綱もなしに壁を伝つていくのは自殺行為だ。

だが、全員からの鼓舞の言葉に、そして上鳴の女子にモテモテになれるかも……と言
う言葉でなんとかやる気を出した峰田は飛び出していった。

そしてさながらとある警察官が孤軍奮闘する映画『OイOード』みたいな無茶苦茶を

峰田はなんとか個性である『もぎもぎ』で何度も意識を失いそうになりながらも登り切って全員にはしごを降ろしてやり切った顔のように、

「さあさあ！ おいらを褒め称えたまえ、女子達!!」

それで出久、お茶子、八百万に耳郎……そして最後にメリツサに、

「すごいわ、峰田くん。さすがヒーロー候補生ね！」

と、褒められて峰田はまんざらでもない顔をしていた。

出久達の活躍の裏でヴィラン達は出久達が雄英生徒だということを知った上で、ウォルフラムとはある指示を出した。

それは、

「100階から130階までの隔壁をすべてあげろ」

と、すでに迎え撃つ作戦に切り替えたようであり、それを転がりながらも聞いていたオールマイトは生徒達の無事を祈らずにはいらなかった。

そして出久達も先を進みながらも隔壁が上げられている事に違和感を感じて、誘い込まれていると判断していた。

「それでも、先に進まないと!」

それで罠と知っている中でも先に進むしかないということと走っていくが、130階より上に行くフロアの前には警備マシンがたくさん待ち構えていた。

「こうなるのは予想済みだ! 上鳴くん!」

「おう!!」

そこで飯田と上鳴が即席でタッグを組み、それとは別に八百万が絶縁体のシートを創造する。

そして飯田が遠心力とともに上鳴を警備マシンのいる方へとぶん投げた。

上鳴は個性である『放電』を使おうとしていたのだ。

「くらえ! 無差別放電! 百三十万ボルトおお!!」

とてつもない電気の放電が発生した。

だが、警備マシンも伊達に作られているわけではなく、地面に放電を逃していた。

「チッ! なら、二〇〇〇マンボルト!!」

「馬鹿! そんなことをしたら……!」

耳郎が叫ぶが時遅く、上鳴は「ウェーイ」とショートしてしまっていて腑抜け面を晒

してしまっていた。

しかしなんとか停止したと思われた警備マシンだったが、再び起動してしまう。

「くっ！ 仕方がない！ プランBだ！」

その言葉を待っていたのか八百万が通信干渉入りの発煙筒を創造して警備マシンに投げる。

これで通信を阻害出来る事ができるために全員は何度も投げつけた。

そして上鳴を助けるために峰田がもぎもぎを投げまくっていた。

「ハーレムが待ってんだ！ 上鳴を返しやがれ！」

地面へと付着するもぎもぎに警備マシンは足を取られている。

だが、無事な警備マシンはその上を通過してさらにやってくる。

「しっけーな！」

「いくぞ、緑谷くん！」

「うん！」

それで出久はメリツサから託されたフルガントレットを起動して、一気に飯田とともに駆ける。

30パーセントの力を開放して出久はスマッシュを放った。吹き飛ばされていく警備マシンたち。

「よし！ 痛くない！」

メリツサには感謝しかない出久はなんとか上鳴の救出を成功しながらも、地面にイヤホンジャックを刺していた耳郎に飯田が叫ぶ。

「耳郎くん！ 警備マシンは？」

「左から来る！」

「それでは右から行こう！」

上鳴を背負う飯田に続く一同。

そんな中で、

「デクちゃん、なんかいつもよりすごい威力だしていたね！」

「うん。メリツサさん、これとてもいいです！」

「そういえば付けっぱなしだったよね……」

「あはは……外し方がわからなくて……」

そう言いながらも、出久達は進みを止めないのであった。

現在、135階にいる。

あと、どれくらい掛ければ最上階までいけるのかは、まだわからない。

NO. 106 回想《11》 奮闘

戦闘不能になっている上鳴を背負いながらも、出久達は135階のたくさんのコンピューターが置かれている所謂I・アイランドの頭脳ともいべきサーバルームにたどり着いた。

しかし、今は構ってはいられないと走り続けるのだが突如として奥の扉が開き始めてそこにはたくさんの警備マシンが待ち構えていた。

それで出久は個性で吹き飛ばそうとする。

だが、そこでメリッサから待ったの声がかかる。

「ここで激しい戦闘は控えて！ サーバルに被害が出たら警備システムもどうなるか分からないから……！」

「ッ！」

それで出久は今まきに出そうとしていたハウリングインパクトを即座に解除する。

そんなものをぶっ放したら軽くサーバルなんて壊れるのは今までの実績で証明済み

だ。

それでどうするかと言う時に、さらに天井のタラップから追加の警備マシンが降ってくる。

「ただだけいるんだよー！」

峰田の叫びが着実に現実を物語っていた。

「警備マシンは私達がどうかしますわ！」

「緑谷くんはメリッサさんを連れて別ルートを探すんだ！ 今一番の戦闘力を有しているのは緑谷君だからな」

「飯田くん！……うん、わかった！ メリッサさん、行きましょう！」

「うん！……あ、お茶子さんも一緒に来て！」

お茶子の個性をその肌で体感しているメリッサは何かを思いついたのかお茶子と一緒に連れて行こうとする。

「え、でも……」

お茶子も暴れる気満々だったのだが、それで思わず飯田に顔を向けるが、飯田は迷わずに、

「麗日くん、頼む！」

「飯田くん……うん！ 行こう!!」

それで出久達三人は別のルートを走っていった。

警備マシンが追おうとするが、

「ここからは通さんぞ！」

「はい。メリツサさんを必ず届けますわ！」

「だから、なんとしてもここで足止めするんだ！」

「かかつてこいやー！」

「ウエーイ（みんな、任せたー）」

五人が足止めをしているのであった。

……背後で激しい音が響いてくるのを感じて出久は振り返るが、

「デクちゃん、止まっちゃだめだ！　ここであちらまで捕まったら飯田くん達が残った意味が無くなっちゃうから！」

「……うん！」

悔しい思いを感じながらも、それでも走り続ける。

「（みんな、どうか無事で！）」

そう祈らずにはいられなかった出久であった。

そして走る事180階まで到着した出久は扉を蹴破った。

ドレス姿だというのに結構激しい動きをしているから結構ドレスもボロボロになりつつあるが、今は気にしてはいられない。

到着した場所は風力発電システムがあるエリアだった。

剥き出しの外に設置されているためにどうしてこんなところに来たのかと言う出久の疑問に、

「タワーの中を昇っていったらまたきつと警備マシンが待ち構えているだろうから、ここから一気に上層部に昇るの。あの非常階段で……」

メリツサが指さした方には、およそ20階分くらいの高さはある天井に、小さな非常口の扉が見えていた。

そして先ほどなぜお茶子を選択したのかが判明する。

「お茶子さんの個性である無重力なら、あそこまで行けると思うから……だからお茶子さん、お願い！」

責任重大だと感じたお茶子は身震いをしながらも、

「ッ！ うん、わかった！ メリツサさんはデクちゃんに捕まって！ 一気に飛ばすよ！」

お茶子は二人に個性を掛けて浮かせ、出久はそれと同時にジャンプすると二人は勢いよく空へと飛びあがっていった。

「いつけえ！」

お茶子は二人がうまく飛んで行っているのを確認しながらも、すぐに解除できるように指同士を重ねていた。

ただどそう簡単に事は運ばせないという意味を感じさせられるみたいに警備マシンがお茶子のもとへとやってきたのだ。

それを確認した出久とメリツサは「そんな！」と叫びながらも、

「麗日さん！」

「個性を解除して逃げて！」

「それはできん相談だよ。それでないとみんなを助けられへん！」

それで、なんとか個性を使わないで戦おうとするお茶子の姿を見て、出久は胸が締め付けられるような気持ちを感じながら、（早く！ 早く!!）と祈り続けていた。

だがどうとう警備マシンはお茶子に襲い掛かるようにジャンプをしてきたのだ。

万事休すかと思われたが、そこに突然爆破の個性を使う爆豪の姿が現れて、警備マシンを爆破していた。

「かつちゃん！」

さらには追撃してこようとしてくる警備マシンの群れを氷の波が覆いこんでいった。そこにはさらには轟と切島の姿もあつたのだ。

どうやらヴィランを倒して追いついてきたみたいであつた。

「ケガはねーか、麗日？」

「うん、大丈夫や！ いま、デクちゃんとメリツサさんが最上階に向かっている」

「見ていた。足止めするぞー！」

「俺に命令すんじゃねー！」

そう言いながらもしつかり防衛している爆豪。

ただでさえ出久のドレス姿をまだまじまじと見ていないためにイラついているので、暴れられるのはちようどいいのだろう。

「みんな、ありが……とおおう!？」

「キャツ!？」

そこで突然の強風に煽られて出久達は本来の方向から逸れていつてしまっていた。

それにすぐに気づいた轟は、

「爆豪！ プロペラを緑谷に向けろ！」

「だから俺に命令を！」

と言いつつも従う爆豪。

出久の役に立つのならすぐに実行するツンデレである。

破壊したプロペラを出久達の方へと向けて、個性である炎を放って熱風を発生させた。

それで勢いよく軌道が戻ったのを確認した出久は、

「(轟くん……炎を使ってくれてありがとう)」

と思いつつも、次には壁が迫ってきていたのを確認して、

「デクちゃん、壁が！」

「分かってる！ しつかりと捕まっけて！」

「うん！」

出し惜しみはしている時じゃないと、出久はフルガントレットの拳に力を込めて、

「ワン・フォー・オール、フルカウル！ フルガントレット、デトロイト・スマッシュ!!」

その勢いとともに壁を破壊して中に侵入する二人。

それを見届けたお茶子はタイミングよく、「解除！」と言って個性を解除した。

そして中に侵入できた二人は、

「メリッサさん、大丈夫？」

「うん。それよりも……せつかくのドレス姿が少し台無しになっちゃったわね」

もうかなり暴れたのか出久のドレス姿はメリッサから見てもボロボロになっていた。

しかし、まだ大事なところはかろうじて隠せているので出久は顔を少し赤くさせながらも気を取り直して、

「す、進みましょう！」

「そうね！」

と、その時わずかな音を感じて出久はメリッサを抱き抱えながらも横に飛ぶ。

そこにはどうやらヴィランの幹部らしき手を刃物に出来る男がやってきていたのだ。

「つたく、胸糞悪いガキどもが！」

「お前たちの目的はなんだ!？」

切りかかってきた男の刃物をフルガントレットで抑えながらも、そう聞く。

「うるせえんだよ、ヒーロー気取りのメスガキが！ この場で犯されてーか!？」

なかなか下品である。

出久はそれで顔が赤くなるのと、同時に怒りが沸々と湧いてきて気づけば男の刃物の

腕を弾いて、

「にゃあー……！！！！」

ハウリンググインパクトを放って、男を壁に埋めていた。

それでも男は気絶してしまっていた。

「気持ち悪い奴……」

嫌悪感からそう吐き捨てながらも、メリツサに「大丈夫ですか？」と普段の顔になっていた。

「そ、そのデクちゃん？」

「なんです？」

「い、いえなんでもないわ……それより急ぎましょう！」

「はいー！」

出久の先ほどの汚物を見るような顔はメリツサは気持ち分かるので気にしない事にしたのであった。

先に進んでいく二人。

途中でライフルを構えた幹部達が待ち構えていたが、高速で動きをする出久を捉える事が出来ずに次々と無力化されていった。

そしてついに200階の通路へと到着した二人は、

「メリツサさん、制御ルームの場所は……？」

「中央エレベーターの前よ」

それで走りこんでいき、なぜかルームの扉が開かれているのを見て中をのぞく二人。そこには何かを操作しているデヴィットの姿があつた。

「パパ……？ それに……」

そして隣にはなんとデヴィットに銃を突き付けているサムの姿があつた。

「サムさん……？ なんて……？」

状況が分からずに中を見ているしかできない二人であつた。

場は混乱していく。

はたしてデヴィットは、そして出久達はこれからどうなるのか……？

NO. 107 回想《12》 サムの狂気と出久の背負うもの

デヴィットは解除プログラムを打ち込みながらも、背中にも撃たれてしまうかもしれないサムが持つ銃に戦々恐々としていた。

「私は……サムの言葉に耳を傾けてしまったのは間違いだったのか……？」

まだ、サムの事を嘘だと思い、信じられていないデヴィット。

それで震えながらも、サムの方へとゆっくりと顔を向ける。

「どうしました、博士？ まだプロテクトは解除できていないでしょう？」

「サム……本当の事を言ってくれ。これを仕組んだのはヴィラン達で、君はただ脅されて従ってしまっただけなんだろう……？」

「……………」

それはひとえに今まで築き上げてきたデヴィットとサムの仲で、まさか裏切られるなんて事は、これは嘘だ、嘘なんだという思い……。

だが、サムの表情はそれで一気に歪み、銃口を押し付ける力がさらに強くなる。そしてこう言い放った。

「ですから、先ほども言ったでしょう？ 私は、成果を誇れなければ、そしてお金と名譽も貰えなければあなたに付いて行く事ももうないと……」

「嘘だ！ 今まで私達は二人三脚で頑張ってきたじゃないか！」

「そうですね……。まあそれも嘘ではないと言えましょう。ですが、もう博士と私の間にあつた関係はとつくに壊れてしまつていますよ。」

ですが、博士の悔しく思う気持ちだけは私と同じものだと感じていました。

ですから、私がせっかくヴィランにまで協力を願ひ、私達の研究成果を取り返そうとあなたに相談したんですよ？

博士もそれで乗り気だつたではないですか……？」

「しかし！ 私はこの計画に協力してくれる人たちはヴィランの役を演じてくれる人達だと、それを信じて……！」

「はあ……ですから博士、あなたは甘いのです。もとよりこんな計画に乗つてしまつた時点であなたももうヴィランの仲間入りなのですよ？ そのところはその聡明な頭脳で理解していますか？」

「……ッ!!」

それで悔しそうに顔を俯かせるデヴィット。

「そして、もう後戻りができないところまで計画は進んでいたというのに、なにがあったのかは知りませんが、計画が発動したというのに直前になって突然あなたは心変わりをしたかのようにこの計画をやめようなんて言い出した……。それを聞いた時の私の頭に血がどれだけ上った事か……。分かりますか？ あなたは裏切ったというでしょう、ですが私も博士に裏切られたのですよ」

「さ、サム……」

情けない声を出しながらも涙を一滴垂らすデヴィット。

その一滴の涙にどれほどの感情が込められているものか、デヴィットももう分からな
いほどであった。それほどに感情がぐちゃぐちゃになってしまっていて、サムの顔を直
視できなくなってしまうた。

デヴィットが大人しくなったのを確認したのか、

「さあ、早くプロテクトの解除をしてください。間違っても時間稼ぎなどという考え
は起こさないでくださいね？ 私も必死に耐えていますですが、いつヴィラン達にこの島の
住人を殺してくれと命令するか、分かりません……」

「くっ……」

それで悔しそうにコンソールに向き直って必死にプロテクト解除コードを打ち込ん

でいくデヴィット。

それを愉悅の顔をしながら笑うサム。

そしてそれを隠れて聞いていた出久とメリッサも今にも飛び出していききたい衝動に駆られていたが、それはサムの銃がいつ暴発して、もしかしたらデヴィットの命も危ういという事になってしまいかもしれないという状況で理性を必死に抑えていた。

「(パパ!)」

「(メリッサさん、今は耐えて……! きつと、きつといつか隙が出来るから!)」

メリッサはもう涙を流していた。

デヴィットとサムの二人の関係を昔から見てきたために、信じたくないというデヴィットと同じ感情を抱きつつも、もし……もしサムが今しがた白状した事がすべて本当だったのだとしたら、サムは愛する父を誑かした悪人なのだという事実……。

それがもう許せないという一つの思い。

もし無個性ではなく個性が自身にあったのだとしたら、それをサムに向けてしまうのも構わないという危険な思想も浮かんでいた。

だが、それは自身の手を握ってくれていた出久の言葉で霧散する事になる。

「(メリッサさん……いま、個性があつたら、なんて考えていなかった……?)」

「(それは……)」

「それだけはダメだよ……。メリッサさんは言ったよね？ デヴィット博士と同じように立派な科学者になりたいって……。そんなことをしちゃったらメリッサさんの夢は絶たれちゃう、そしてデヴィット博士もきつと悲しむ……。だから、そんな考えはしちゃいけない……。その握られた拳は、僕が代わりに“ヒーロー”として振り下ろすから」

「(デクちゃん……)」

それでメリッサの中の黒い感情は次第に無くなっていく。

そして出久の事をこう思った。

『私の……“ヒーロー”……』

と。

それはまさしく意図せずに出久がメリッサの心を救った事に間違いない事であった。

そしてこうも思った。

『デクちゃんの為に出来る事をしたい……。将来の夢を応援したい』

と。

それは近い将来に本当に実現するかもしれない未来予想図の一つである。

それほどにメリッサの感情は揺さぶられていた。

………そんな、少し甘い空間が場違いで出来上がっている中で、それでも時間は過ぎて行つてついにデヴィットは最後の解除キーを打ち込んでしまった。

そして一つのブロックからなにかの解除音が鳴り響く。

それはサムが顔が一気に緩んで走り出すほどには歓喜の瞬間だったのだろう。

ブロックを開けたサムはとても嬉しそうに顔をほころばせながら、

「これですよ！ 私はこれが欲しかった！ 取り返したんだ！ 成果を!!」

一つのケースを掲げるサム。

だがこの瞬間、一気にサムの間が出来上がっていた。

弱い個性しか持ち合わせていないデヴィットでは反抗も難しいだろう、だが、この瞬間を出久は必死に耐えていたために一瞬にしてメリッサを抱えながらデヴィットの隣へと姿を出す。

「ッ!?! 君は!?!」

サムは出久の顔を見た途端に表情を歪ませる。

「ミドリヤさん！ それにメリッサ！」

「パパ！ 大丈夫!?!」

「どうしてここに!？」

「デクちゃんのお友達のおかげでここまでこれたのよ!」

「デヴィット博士。先ほどの会話は聞かせてもらいました」

「それは……!! じゃあ聞いてしまったんだね……私の犯してしまった罪を……」

出久に、そして溺愛しているメリッサにまでこの話を聞かれてしまったために、今すぐにも死にたい思いになるデヴィット。

そんなデヴィットの心情を察してか、

「パパ……大丈夫……。私は気にしないから……そしてやり直しましょう」

「メリッサ……」

「デヴィット博士」

「ミドリヤさん……」

「あなたが侵してしまった罪は消えないのかもしれませんが……。でも、それも踏まえて僕はあなたを助けます! オールマイトならきつとこう言うでしょう。『絶望の中でも笑え、そうすればきつとどうにかなる』って……。きつと、やり直せます。ですからそんな絶望したような顔をしないでください」

「ッ!!」

デヴィットはそれで出久の背中に、オールマイトの力強い背中を重ねて見た。

そしてこう思うのであった。

「(ああ……トシ、君は本当に素晴らしい子に個性を引き継がせられたんだね。今なら分かるよ、ミドリヤさんは君の後を継ぐ人だつて……)」

そう思う程に出久に心を打たれていた。

「さあ、サムさん！　ここでお縄になつてください！　デヴィット博士は勿論の事、サムさん、あなたもまだやり直せます！　だから……」

「くっ……そんな言葉に乗りませんよ!？」

「———そうだ。サム、それでいい……」

そこにこの場ではいてはならない人の言葉が響いてきた。

今回の事件のヴァイラン達のボスであろうウォルフラムであった。

次いで出久は感じ取った。

自身に向かって高速で伸びてきている金属の塊の群れを……。

「ッ！　お前は会場にいた仮面の男!？」

「お前は……でおしまいだ」

金属の塊達は出久を包囲して一気に握りつぶすように出久を金属の塊で押しつぶした。

「デクちゃー……ん!!？」

「ミドリヤさん!!」

メリツサとデヴィットの叫びがその場に響くのであった。

NO. 108 回想《13》 制御プログラム正常化

「デクちゃん！ デクちゃん！」

メリツサが鉄の塊に潰されてしまった出久を必死に救い出そうとしている中で、ウォルフラムはまるで出久の事をそこらへんの石でも見ているかのように興味を示さないうでサムの方へと歩いていく。

「サム、例の装置は……？」

「……」

ウォルフラムに寄って行くサムを見て、思わずデヴィットは叫びを上げる。

「サム！ 君はそこまで根性が腐ってしまったのか！ 潰されてしまったミドリヤさんを見てなにも思わないのか!？」

「何を言うかと思えば……何も感じませんよ。……思えば私ももうとつくの昔にヴィラン寄りの考えになってしまったんでしようね」

どこか達観していそうな顔になっているサム。

それでさらにデヴィットは悔しそうに表情を歪ませる。

「そうかそうか。それじゃ褒美を与えないとな……」

「えっ?」

そんな時にウォルフラムのそんなセリフが聞こえてきて咄嗟にサムはウォルフラムの方へと顔を向ける。

そこに待ち構えていたのは拳銃の銃口だった。

それに気づいた時には遅く、サムは肩口を撃たれてしまっていた。

「グ、ハッ!」

「!」

痛みで倒れこむサムと、それを見ていたデヴィットは思わず目を驚愕に染め上げる。メリッサも思わず出久を救出しようとしていた手を止めていた。

ウォルフラムはそんな視線にも気にせず、まるで挨拶でもしているかのように再度拳銃を構える。

「な、なぜ!? 約束が違う!」

「約束? そんなのとつくの昔に忘れたなあ……」

「そ、そんな!」

それで一気にサムは絶望に叩き落される。

そんなことも気にせず、ウォルフラムは「謝礼だ」と言って引き金を引いた。次にはサムは撃ち殺されてしまうだろう現実が迫っていた。

だが、そこで何を思ったのか、デヴィットがサムの前に咄嗟に飛び出していた。飛び散る鮮血がサムの持っていたケースに付着する。

「ぐっ！」

「博士ッ!? どうして!？」

「パパッ!？」

そのまま転がるデヴィットにサムは一体どういうことか理解が及んでいなかった。

先ほどまであんなに罵っていたというのに、どこに自分を庇う要素があるのかと……。

「ふふふ……なぜだろうな? もう、私達の関係は修復できないだろうけど、それでも……気づいたら足が動いていたんだ……ぐっ!!！」

「博士……」

サムはそれで先ほどまでデヴィットに対して抱いていた感情が薄れていくのを自覚する。

だが、そんな光景を見せられて、それでもウォルフラムはつまらない茶番劇を見せられているとしか感じられないでいたので、

「泣かせるねえ……面白い茶番劇だったよ。しかしちようどいい。どうせお前はもう
ヴィランとそう変わらないんだ。俺達の所でこの装置を作る未来しかないんだよ。着
いてきてもらおう」

「パパ!!」

「うるせえんだよ!!」

「ああつ!」

メリッサが思わずデヴィットのところに走ったが、ウォルフラムによって容赦なく頬
を殴られてしまっていた。

「メリッサ!!」

「お前は寝ているろ」

「グツ!?!」

そのまま気絶させられるデヴィット。

そして「連れていけ」と幹部に命令している中で、

「返して!」

「ん……?」

「パパを、返して……!!」

そこには必死に訴えているメリッサの姿があつた。

それを見てウォルフラムは少し考えて、

「そうだなあ……未練は、断ち切っておかないとなあ……」

「ツ!？」

メリツサに向けて銃口を構えるウォルフラム。

万事休すかと思われたその瞬間に、

「やめろ————ツ!!」

今の今まで鉄の塊の中で脱出しようともがいていた出久が鉄を破壊してウォルフラムへと拳を構えて突っ込んでいく。

だがすぐさまにウォルフラムは鉄の壁を展開して出久の拳を阻む。

しかし、出久もただでは終わらない。

メリツサに顔を向けて目で訴えた。

「(博士達は助けます! だから僕が足止めをしている間に、みんなを!!)」
と。

その出久の意思を感じ取ったのかメリツサは領きをして制御ルームへと走っていく。

させまいと幹部が走ろうとするが、出久が何度も壁を跳ねて入口へと立ち塞がつて通せんぼをする。

「いかせない!!」

「ちっ……ガキで、しかも女のくせに度胸だけはあるじゃねーか……それじゃもう一回潰れている」

ウォルフラムがまた鉄を操って出久へと向けて射出していく。

鉄柱に潰されそうになるのを必死に怪力で抑えている出久。

ただ思う事は一つ。

メリツサのもとへは行かせない。

オールマイトを、みんなを、助けるんだ！

その思いが出久を振るい立たせていた。

そして制御ルームへと必死に走るメリツサ。

デヴィットの事はもちろん、出久のことも、裏切ったサムでさえも心配しながらも、泣きそうになるのを必死に我慢しながらも、めげずに走る。

その姿は決してかっこいいものではなかった。

しかし、それでもみんなのために必死になれる人の姿がありありと映されていた。

「(デクちゃん！ それにみんな！ 必ず、必ず助けるから!!)」

その思いとともにメリツサは制御ルームへとたどり着いて、即座にキーボードに再変更プログラムを高速の速さで打ち込んでいく。

次々と書き換えられていくプログラム。

それは数分もかからずに修復していき、次々と異常を示していたモニターが正常な機能を取り戻していく。

そして完全に制御を奪い返したメリッサ。

それを最後まで見届けたメリッサは顔を上げて、

「デクちゃん！ みんな！」

いの一番にそう叫んだ。

メリッサの勇氣ある行動によってI・アイランド中の警備マシンたちは機能を取り戻していく。

それはタワー内部で戦っていたお茶子達も例外ではない。

警備マシンの赤いランプが次々と緑色に戻っていき、持ち場へと戻っていくその光景を見せられて、

「緑谷くん！ メリッサさん！ やってくれたか!!」

飯田がそう叫んだ。

そして風力発電のエリアで戦っていたお茶子達もそれに気づいたのか、

「こうしちゃいられへんね！ 早く私達もデクちゃん達のところへと向かおう!!」

「そうだな……いくぞ、爆豪」

「ああ!? 俺に命令すんじゃないやねー! それに俺も早くデクんとこに助けに行きてえんだよ!!」

轟にそう言われて思わず本音が漏れる爆豪。

それを聞いていた切島は呆れた顔をしながらも、

「爆豪、爆豪……本音が駄々洩れだぞ?」

「うっせえ!! とにかく行くぞてめえら!!」

「そうだな!!」

飯田は爆豪を迫及するより状況を読んで出久達の救援にすぐに向かう選択肢をした。

誰だつて頑張っている女の子の事を助けに行きたいものである。

特にここにいる爆豪に轟、お茶子の三名は出久関連に関してはなにかあつたら暴走をするかもしれないな、と普段の様子を客観的に見ていた冷静な切島がそう思うのであつた。

そして、I・アイランドの警備システムが正常に戻ったことによつて恩恵を受けるのはなにも出久達だけではない。

レセプションパーティー会場で拘束されていたヒーロー達も次々と拘束を解かれていき、慌てる幹部達。

だが、そんな考えも許されるわけもなく解放されたヒーロー達によつて瞬く間に拘束されていくヴィランの幹部達。

さらには、ついに耐えて耐えて耐えまくっていた現ヒーロー最強の人物であるこの人、オールマイトも拘束を解かれる事になり、

「やつてくれたみたいだな、緑谷ガール!!」

トウルーフフォームに戻らないように必死に頑張つて踏ん張っていたオールマイトが咳込みをしながらも、

「ゴホツ……まだ大丈夫だ。今向かうぞ!!」

最強のヒーローが解き放たれた瞬間であつた。

こうして場面は最終局面へと移つていくことになる。

オールマイトは、そして出久は果たしてデヴィットを助け出すことができるのか……

?

NO. 109 回想《14》終息

出久はなんとか鉄柱を破壊して、だがしかしかなりの体力消耗でその場で崩れ落ちる。

しかし、まだ目は諦めていなかった。

「(動け! こんなどころで躓いているわけにはいかないだろ!?)」

幸い、身体の傷は自動再生オートヒールで治ってきてはいるが、それに反してドレスはもう見るに堪えないほどにボロボロであった。

それでも今はそんな些細なことに等気を回してられるほどに出久は心穏やかではなかった。

見れば血の跡が点々と続いていて、恐らくだがデヴィットが連れ出られてしまった事が状況から伺える。

見れば置いてかれたのかサムは血を流しながら気絶をしていた。

ヴィランに組したといえども、捨て置けないと思い、出久はサムの傷を癒した後に、す

ぐに後を追っていった。

そして到着した場所は屋上であつた。

そこでは手配していたのかヘリが一機すでに起動していて今にも飛び立ちそうであつた。

このままでは逃がしてしまう。

でも、ここで出久は自分に有意なアドバンテージを得た。

タワー内部では気にかけないといけないう事が沢山あつたので使えなかつたが、ここなら使える。

「デヴィット博士、必ず助けます！ 猫又、解放!!」

そして出久は5メートルはある巨大な猫の姿へと変化してヘリへと襲い掛かった。

「なっ!!? なんだこの化け物は!!」

中からウォルフラムのそんな声が聞こえてくるが現状で10分間という時間制限もあるために出久は構わずにその巨大な手でヘリのプロペラを握りつぶし、怪力でドアをこじ開けて恐怖で顔を引き攣らせているウォルフラム達をよそに中からすぐさまにデヴィット博士の体を握ってすぐさまにその場を離脱した。

ウォルフラム達を倒してからのの方が確実性が上がるだろうが、大量出血しているデ

ヴェイットの治療が優先としたためである。

巨大な猫の姿で手に握られているデヴィットは、それでも事前にオールマイトから出久の情報を聞いていたために恐怖心はそれほどなかった。

「ありがとう……ミドリヤさん」

「ニヤウー！」

今は人語が喋れないために猫の声で返事をした出久であった。

すると屋上の扉からメリッサが遅れてやってきたのを見計らって、出久はすぐにそこに向かう。

「えっ!? この巨大な猫ちゃんは……まさかデクちゃん!?」

メリッサは驚きながらも、デヴィットを地面に下ろした出久はすぐに猫又を解除してもとのドレス姿に戻る。

「やっぱりデクちゃんだったんだね!」

「うん! それより早くデヴィット博士の治療を!」

それで出久はデヴィットの治療を開始したが、ウォルフラムもただでは黙っていない。

デヴィットは奪還されてしまったが、それでも今この手の中にはデヴィットの研究成果が握られている。

「使わせてもらおうぜ!!」

すぐさまに取り出して頭へと装着して起動させたウォルフラム。

そしてすぐに異変が起こり出した。

屋上のあらゆる鉄という鉄がウォルフラムの周囲へと集まっていき、次第に巨大な禍々しいなにかへと変貌していく鉄の塊。

そしてウォルフラム自身もその異形物の中へと取り込まれていて上半身だけが顔を
出していた。

「ははははははは!!!」　こいつはいいわ!!　力が、個性が漲ってくるぜえ!!」

「そんな……ッ!!」

デヴィットの治療を終えた出久はその脅威に顔を青くする。

ウォルフラムはもう逃げられないと悟ったのかすべてを破壊するという手段に移つてしまったのだ。

「どうすれば!!」

「こういう時こそ笑え、緑谷ガール!!」

そんな、頼もしい声が響いてくると同時に下の階層からまるでロケットのようにオー
ルマイトが飛び出してきて、あいさつ代わりにウォルフラムへと拳を構えて、

「スマーツシュ!!」

渾身の拳を浴びせた。

出久達は「やった!」と思った事だろう、しかしその拳は分厚い鉄の壁で防がれてい

た。「こんなものか……?」

「なん……だと……?」

「こんなものかあ、オールマイトオ!!」

まるで笑っているかの如くそう叫ぶオルフラム。

彼はもう個性を増幅する装置によって半狂乱状態となっており、オールマイトすらも凌ぐパワーを持っている自身に酔いしれていた。

その勢いのままオールマイトの傷がある脇腹へと手を伸ばして一気に握る。

「ガッ!」

「ここが弱点なんだよなあ……聞いてるぜ?」

「な、なぜそれを!? まさか!!」

「お? 察したか。そうさ、今回の作戦であのオール・フォー・ワンが手を貸してくれるとは思っていなかったんだぜ?」

そう言いながらもオールマイトの首に手を伸ばしていつて、身体をピンク色に変色させていきながらも力を強める。

「グツ……まさか、筋力強化か！」

「ご明察だ。いやあ……こうしてあなたの苦しむ様を見れるのはいいもんだぜ」

力に酔っているウォルフラムはニヤニヤしながらもどんどんといったぶる様に力を強めていく。

「オールマイトお!!」

「トシ!!」

「おじさま!!」

三人がそう叫ぶ。

そんな時だった。

「おらあ!!」

「ツ!?!」

突然の爆破がウォルフラムへと命中する。

「おい、オールマイト!! なにやられてんだよ!!」

「爆豪少年! それに、みんなも……!!」

屋上の入り口にはタワー内部で戦っていた1-Aのクラスメイト達が勢ぞろいしていた。

「おいデクウ!! そこで観戦してないでさっさとオールマイト助けろ!!」

「かつちゃん！ うん!!」

「緑谷くんと爆豪くんの道は俺達がかししよう！ 轟くん、いいな？」

「分かってる。適材適所だ」

「ウォルフラムはすぐさまに爆豪達に鉄柱を何度も打ち込むが、それは轟の水壁で防がれる。」

その間を辿って出久と爆豪が駆けていく。

想いは一つ。

オールマイトの救出だ。

「そうかよ……そんなにオールマイトが大事か。なら、くれてやるよ」

なにを思ったのかウォルフラムはオールマイトを空中に投げた。

「なにを!? うおっ!?!」

次の瞬間にはオールマイトを鉄の塊で覆いつくして逃げ場を無くし、そこに特大の鉄柱をぶつけて貫いてしまった。

「トシ!!」

「おじさま!!」

「デヴィットとメリッサが叫ぶが、そこで終わるほどヒーロー科……特に出久と爆豪は弱くない。」

「デク、いくぞ!!」

「うん、かつちゃん!!」

爆豪は最大級の爆破を、出久は大きく息を吸い込んでハウリングインパクトを放つてそれらはすぐにオールマイトを包んでいた鉄の塊を破壊した。

その中からなんとか無傷のオールマイトの姿が出てくる。

「ゴホゴホ……助かったよ二人とも」

「おらっ立てよオールマイト」

「そうですよ。まだ僕たちは負けていません!」

「そうだな。二人とも、一緒にくれくれるかい?」

「おう!!」

「はい!!」

そして三人はウォルフラムを見据える。

「……………イラつく目をしてるな、てめえら!! 殺してやるよ!!」

「させない!! 猫又、解放!!」

まだ制限に余裕があった出久はまたしても巨大な猫の姿になる。

そして二人に「乗って!」と首を振る。

オールマイトと爆豪は出久の背中に乗って一気にウォルフラムへと駆けていく。

襲ってくる鉄柱の群れに対しては爆豪の爆破で迎撃して、避けられないものは出久の素早い動きで何度も避けていく。

オールマイトの最大の攻撃は最後まで取っておく算段でもって。

その光景を見ていたクラスメイト達は、

「いつけえ!!」

お茶子が叫ぶ。

「オールマイト!!」

八百万と耳郎が続く。

「緑谷（くん）に爆豪（くん）!!」

飯田、上鳴、峰田が叫ぶ。

「ぶちかませ!!」

最後にいつも冷静だが今回だけは過激にそう叫ぶ轟。

そしてついにウォルフラムの懐まで迫った三人は一気に上空へと跳び上がり、最初に爆豪がつゆ払いとでもいう感じに爆破をかます。

「ぐはっ!!」

動きが鈍ったのを見計らって、

「ヤッパニー」

「にやあ（向こうへ）!!」

「プルスウルトラ!!（にやああああ!!）」

オールマイトはその拳をもって一点突破の一撃を、出久は何倍にもなった大猫の拳をもつて100%の高速連打の猛撃を、ウォルフラムへと叩き込んでいく。

さしものウォルフラムも最後の抵抗とばかりに鉄の壁を展開していたが、それをも凌ぐ猛撃を受けて、ついに装置も限界を超えてしまったのかひび割れてウォルフラムは打ち砕かれてしまった。

……………それからすでに時刻は朝になったのか朝日が照らす中で、ウォルフラムはまるでオールマイトのトウルーフォームかのように副作用なのだろうガリガリの姿となつて伸びていた…………。

それを見届けるようにデヴィットとオールマイトは今も騒いでいる一同を見ながら、

「トシ……ミドリヤさんに君の姿を何度も見せられたよ」

「そうか。なんせ、私の弟子だからな」

そう自慢げに語るオールマイト。

そう語っている中で、出久はとうとうにただでさえボロボロだったのに負荷をかけまくったドレスが上半身が弾けてそのたわわな胸が晒されてしまい、男子勢は鼻血を垂らし、出久は羞恥から子猫姿となって女子勢に守られているという締まらない事になつていたのであつた。

それから翌日になって、I・アイランドは急遽今回企画したI・エキスポは中止と相成つたが、それでも出久達はBBQパーティーを開いていた。

皆が騒いでいる中で、オールマイトと出久は近くで話し合っていた。

デヴィットの罪やらが多くを占めているが、

「僕が、もつとしつかりとしていれば……」

「緑谷ガール……そんな事を考えていても、時は戻らない。それにヒーローを続けていけば、こんな哀しい事件はいくらでもある。私も身を切られるような思いをしたことも何度もあったものだよ」

「……………」

「もし、そういう思いをしたくないというのなら、ヒーロー辞めちゃうか？ 辞めちゃうのか…………？」

そんなオールマイトの意地悪な問いに、

「やめません!! 僕はなるんです。オールマイトのような笑顔で人を助けられるような最高のヒーローに」

「後悔はないんだな?」

「ありません!」

「それならこの悲しみを乗り越えて進め」

「オールマイト……」

「進み続けるんだ。悲しみを乗り越えて」

「さらに向こうへ！」

「その通りだ。私達はその言葉の意味を知っている」

そして二人は息を合わせるように、

「さらに向こうへ！ プルスウルトラ!!」

そう叫んだのであつた。

出久はそんな回想を終えて、それでも塞ぎこむように身を丸めて、

「（オールマイト……これが身を切られるような思いなんですね……僕にとつては特大すぎます。オールマイトは平気だつて言っていたけど、それでも僕は……まだ……）」

それで一滴涙を流す出久。

場所は変わって、一人の少年が出久の家へと走っていた。

この少年の行動が出久が立ち直れるきっかけになればよいのだが……。

猫娘と最終章：さらに向こうへ

NO. 110 救い上げる思い

爆豪勝己は必死に走っていた。

目指す場所は出久の家。

家を出る前に母・光己にこう言われた。

『いま、恐らくだけど出久ちゃんは憧れのオールマイトの引退が自分のせいだっと思ってしまつて塞ぎこんでると思うから……。だからここであんたがガツンと勇気づけてやんなさい！ 今のあんたならどうしてかな、あの子を任せられると思うんだよ。』

前はなにかと出久ちゃんに対して喧嘩腰だった勝己だったけど、もう今はそんな雰囲気は感じないし……。なにより、勝己が出久ちゃんに対して『デク』って言わなくなった代わりにちゃんと名前呼びをするようになったのが一番大きいから』

『……………』

『ほら！ そんなあんらしくもなく難しい顔をしていないで、行ってきなさい！』
『……おう！』

そんなやり取りの後に家を飛び出していった爆豪を光己は子供の成長を祝うように眺めていたのであった。

そんなこともあつてか、すでに爆豪は覚悟のようなものを決めていた。

「出久、まってやがれ。いま俺が行くからよ！」

もう爆豪はいつそのこと個性を使って加速したい気持ちをなんとか抑えて必死に駆けていく。

しばらくして緑谷家のあるマンション前まで到着した。

「(そういえば……出久の家に来るなんて、何年ぶりだろうな……)」

自分の小さい頃の過ちとは言え、こうも出久の事を貶していた過去の自分を爆破した気持ちでいっぱいだった爆豪。

そんな事を頭の端で思いつつ、記憶を頼りに階段を昇って到着してみれば表札にはしっかりと「緑谷」という名前が書かれており、合っていてよかったと思う。

だがそこで爆豪は今更になってインターフォンを押すのを躊躇ってしまった。

それはなぜか……？

出久を前にしてしっかりと言葉が紡げることができているのか、それが気がかりで今はた

ただただ不安でしかなかったからだ。

しかし、ここまで来て怖気づいてしまっているのは送り出された光己にどう言い訳をしていいかわからない。

それにもし、もうすでに出久が立ち直っていたら、それでこそ間抜けではないか。

「ああああ！ ごちやごちや考えていても埒があかねえ！ 切島じやねーが、正面突破するしかねーか！」

それで震える指をなんとか伸ばしてインターフォンの呼び鈴を押す。

するとすぐに中から「はいーい！」という女性の声が聞こえて来た。

声の感じからして出久の母である引子の声であった。

引子がドアを開けて顔を出してきて、

「あら……もしかして、爆豪くん？」

「はい……お久しぶりです、引子おばさん……」

なんとかさうかいわをするものの、爆豪の声は少し緊張からか上ずっていた。

引子はなんとなくそれを察していながらも敢えてそこには触れずに、

「今日はどうしたの……？ もしかして出久に会いに来てくれたの？」

「うつつ……それで、その……出久は今どうしていますか……？」

「……………」

「……………」

一瞬引子は驚いた顔になる。

爆豪もそれを感じたのか首を傾げそうになるが、それは仕方がない事である。

引子も昔から爆豪に出久は『デク』と呼ばれている事を知っていたためにあまり快くは思っていないかった。

だけど今爆豪はデクとは呼ばずに『出久』と本名を口をしたのだ。

これだけで学校生活の間に自分の預かり知らないところで二人の間でなにかがあったのは明白だと想像するに難しくない。

「と、とりあえず中に入って。でもなるべく静かにね。今出久はかなり落ち込んでいて部屋から出てきてくれないのよ」

「やっぱり、か……わかりました」

それで居間に通される爆豪であったが、道中に出久の部屋があるためについ扉を見えししまう。

しかし、今は気軽に触れ合えるものではない事は分かっているので悔しい思いをしなから居間まで無言で歩いていく。

そして居間に入って椅子に座らせられた後に引子はお茶を爆豪に淹れて出しながら

も、

「こんな大変な時によく来てくれたわね。でも、ごめんねえ。出久、帰ってきてから殆ど食事を食べていなくて……」

「そうっすか……」

無理もないと爆豪は思う。

もし、自分が出久と同じ立場だったなら我慢して無理してでも立ち直っていただろうが、出久の性格は言つては悪いが弱気で臆病だ。

最近が強気な面を見る事が多かったが、それでもももとの気質は変わるわけではない。い。

だからオールマイトの引退も含めて重圧に押しつぶされてしまうのも分からない事ではない。

だから無性にあの時気絶してしまつていて出久を守れなかった自分が情けなく思つてしまうのもしょうがないことではある。

「爆豪くんも出久を励ましに来てくれたんだと思うけど、今はあまり出久には触れないで上げてほしいのよ。今はただ立ち直れるだけの時間が欲しいから……」

「でも！ それじゃいつになるか……」

爆豪はそれで焦った。

それはというと雄英高校からの連絡で家庭訪問があるという話を聞いたからだ。

ありえない事だとは思うが、もし相澤が今の出久を見て非情な判断を下してしまったら出久は雄英にいられなくなるかもしれない……。

それは爆豪にとつてももう他人事ではない。

むしろクラスの連中はこぞつて猛抗議をするだろう。

「家庭訪問もあるし……」

「そうなのよ……。それまでにできれば出久には立ち直ってほしいけど……難しい問題なのよ。なんせ理由が出久の憧れであるオールマイトの引退を直接的ではないとはいえ関係してくる事だから」

「ですよね……。でも、自分には出久には早く立ち直ってほしいです。過去にひどい事をいっばいしていた自分が言えた口じゃないですが、それでも自分は出久に命を救われませんでした」

そう言いながらもマスクユラーに切られた腕部分の服を捲つてその傷痕を見せる。

それを見て引子は顔を青くさせながらも、

「爆豪くん、その腕は……この間のヴィラン襲撃の時に……?」

「はい。そして出久に助けられてなきや自分はもうとうに死んでいたと思います。だから言えます。いま、落ち込んでいるだけじゃダメだって……確かにオールマイトの事を

思つて責任を感じて塞ぎこむのも分かります。それでも、神野区で出久はたくさんの命を救いました。だから結果論ですが、まだオールマイトも生きているし、神野区の死傷者も一人もいない……だから後ろ向きだけじゃなくて、前向きに考えてほしいんです」

「爆豪くん……」

「そして、今なら言えます。出久はきつと将来すげーヒーローになれるつて」

普段素直になれない爆豪がここまでではつきりと言えるのもすごいが、それを聞いていた引子もそれで爆豪のその気持ちに感銘を受けたのか涙を流しながら、

「ありがとう爆豪くん……きつと、出久もそれを聞いたら喜ぶと思うわ」

そんな時だった。

「母さん……それにかつちゃん……」

そんな、か細い声とともに出久が部屋から出てきたのだ。

少し時間を遡つて出久はいまだに部屋で塞ぎこんでいる時だった。

居間の方から引子が誰かと話をしている声が聞こえて来た。

「（この声つて……もしかしてかつちゃん……？）」

それで出久は悪いと思つたが、五感強化で聴覚を良くして聞いてみる事にした。

そして爆豪の自身に対する思いを聞かされて最後に『出久はきつと将来すげーヒーローになれるつて』というセリフに出久は心を動かされた。

それでいつの間にか部屋を飛び出していた。

「かつちゃん……」

「出久う……」

「出久……平気なのか？」

「う、ん……それよりかつちゃん……僕はまだヒーローを目指してもいいのかな……？」
「何をいまさらって感じだぜ。てめえはそのためにわざわざ雄英にまで来たんだろうが？」

「うん……でも、迷いが生じちゃったんだ……僕は、結果的にみんなを不幸にしちゃってるんじゃないかって……、それにオールマイトも！」

「出久……」

出久は涙を流していた。

もう感情がごちゃごちゃになってどうしていいか分からないのである。

爆豪はそんな出久の心境を察したのか出久の頭に手を乗せて、

「そんなときは俺を頼れよ！ 愚痴でも何でも聞いてやるからよ！」

「かつちゃん……」

「そしてどうせならクラスの連中も巻き込んじゃえ。お前の頼みなら奴らは大抵は聞いてくれると思うぜ。そして泣きたい時があったらさっさと泣いて思いを吐き出しちまえ。でねーとこつちが調子狂うわ！」

「わ、わ、わ!!」

頭をゴシゴシとかき乱しながらも爆豪はそう言って不器用ながらも出久を勇気づけていく。

それに困惑の表情を浮かべながらも次第に笑みを浮かべていく出久を見て、

「そうだよ。その顔でいいんだよ。てめえは考え込むとドツポにはまるが、それでも頑張って雄英に首席で合格するほど頑張ったんだ！ だから今度こそはてめえの力で守り切る！ っていう根性を見せて見ろや!!」

「……………、あはは。かっちゃんらしいね…………でも、ありがとう。まだ、立ち直れるほど気持ちが整っていないけど、前向きに考えてみる…………」

「おう！」

それで笑いあう二人を黙って見ていた引子は「この間に入っていくほど無粋なものはないね」と思い、同時に出久のお腹から可愛らしい音が鳴るのを聞いたために、

「ほら！ 出久、お腹空いているでしょ？ よかったら爆豪くんも食べていきなさい。奮発するから」

もう心配はいらない、という確信をもって引子は台所に歩いていくのであった。

出久と爆豪もそれで二人して笑いながらも、

「かつちゃん、改めてありがとうね……」

「おう」

こうして一応は出久は立ち直ることに成功したのであった。

NO. 111 家庭訪問

爆豪によって慰められてとりあえずなんとか出久が立ち直った翌日の事。

オールマイトと相澤は家庭訪問と称して各生徒の家へと訪問をしていた。

各々が各々の家庭で大小あれど雄英高校に対して実の息子、娘をこのまま通わせてもよいものかという問答が課題になったが、なんとか今の所は相澤とオールマイトの説得などでもあつて順調に事は進んでいた。

そして場所は現在爆豪家。

そこでは爆豪の母・光己が爆豪の頭を叩きながら、

「あつ、大丈夫です。むしろもつと扱ってやってください」と言っていた。

「はあ……こちらとしましてはすぐにお許しがたいたのですが、よろしいのでしょうか？」

「まあ、はい……実際勝己は聞いた話では合宿時にヴィランに腕を切断されたとかいう

話を聞いた時はあたし達も顔を真っ青にはしましたけどね。

でも、それも出久ちゃん個性のおかげでこうしてなんとか五体満足のまま帰ってきてくれたことに關してはとても出久ちゃんには感謝しています。

……まあそれと雄英高校に關しては別問題だというのは分かっていますが、それも含めて勝己を鍛えなおしてほしいというのがあたし達的には本望なんです」

「奥さん……」

「確かに世間の風当たりはまだひどいと思いますが、それでも勝己はそれを望んで自分から飛び込んでいったのですから出来る限り応援したいんです。

それに学校関係で何があったのかは詳しくは聞いておりませんが、あたし達から見た今の勝己は前より少しですが大人になったような気がしてならないんです。……………言葉遣いはまだまだ荒っぽいですけどね」

「うっせ……」

思わずそう愚痴る爆豪の頭をまた叩きながらも、

「ですからこれからについてはこちらもまだ様子を見させてもらいます。果たして雄英高校だけの問題なのか、それとも今の社会全体で対策に乗り出してくれるのか……。

勝己の将来を見据えてしっかりと雄英高校の皆さんには同じ過ちを繰り返して貰わないためにも、あたし達もしっかりと協力はしていきます。

だからうちの愚息をこれからもどうかよろしくお願いします」

そう言つて頭を一緒に下げ親子たちであつた。父親の勝に関してにはほぼ空気扱いであつたが、それでも同様に頭を下げていた。

それでオールマイトと相澤は外に出ていく中で、

「オールマイト……」

「爆豪少年？ どうしたんだい？」

「あんたと出久の秘密……後でしつかりと教えてくれな？ もう知つちまつたから

……」

「それは……ッ!？」

「言いふらしたりはしねーよ。でも改めて教えてほしいだけだ」

「……………、分かつた。ちなみにその事を知っているのは…………？」

「後で全員連れていく」

「了解した。それじゃ落ち着いたら緑谷ガールとともに指定した部屋に来てくれ」

「わかつた」

そんな感じで爆豪とオールマイトはもやもやした空気の中、別れた。

移動する車の中で、

「爆豪少年はどこまでを知つてしまったのか……」

「恐らくですが、緑谷救出に向かった面々……爆豪、飯田、轟、切島、八百万、麗日の六人は少なくとも知ってしまったのでしょね。ああ、くそ……オールマイトが引退していなければ緑谷と意識が戻っていなかった耳郎に葉隠以外の全員は除籍にしているんですがね……」

「まあまあ……落ち着いてよ相澤くん。大丈夫だ、しっかりと後で言い聞かせておくから」

「俺も同伴しますよ。ただでさえ知られたらまずい話なんですから」
「だよねえ……」

微妙な空気を感じながらも仕方ないと納得するしかない形で二人は次の家庭訪問の場所へと向かう。

爆豪家から一番近い家はというと言わずもがな緑谷家である。

ここが一番の難関だろうとオールマイトは思う。

「相澤くん。ここは私に任せて他の家に行っても大丈夫だよ」

「いいんですか……?」

「うん。個人的にも話をしないといけないと思っっているからね」

「わかりました」

後ろ髪を引かれながらも相澤は他の生徒達のもとへと向かっていった。

緑谷家があるマンションをオールマイトは見上げながらも、

「よしー」

と、気合を込めるオールマイト。

そして呼び鈴を押して中に入らせてもらおうと、

「お、オールマイト……よよよようこそ……」

「ど、どうぞ中に入ってください」

と、言う感じでがちがちに緊張している出久と引子に迎え入れられたオールマイトだった。

だがやはり気がかりだったのは、

「……緑谷ガール、しっかりと眠れているかい？ 目の下に少し隈が出来ているが……」

「は、はい……かっちゃん……爆豪くんは昨日に慰められてなんとか建前だけでも立ち直れました……」

「そうか……それならばいいのだがね……」

そのままの流れで家庭訪問となって、

「それですが、雄英高校は全寮制をするという話なのですが……」

「ハイ……その件に関してなんです……私は、イヤです」

「お母さん……!?!」

引子の言葉にオールマイトは「やはりか……」という感情を抱いた。

そもそも今回の雄英の失態の件がなければ出久はもしかしたら誘拐などされていなかっただろう。

それでこのまま通わせてもいいものかと不安になる気持ちはわかる。

「色々と考えたんです。ですが今回の件で出久はひどく傷つきました。すべてが雄英高校のせいと言う訳ではありませんが、こう言つてはなんですが、出久の持つ“個性”はとてもではないですが異常の一言です。

もう出久本人が受け入れているとはいえ、親である私としましてはこのまま雄英に通わせてもいいものかと常々思っていました。

そして、それが最悪の形となって誘拐にまで発展してしまいました。

私の考えとしましては、どこの学校に通わせてもどこかで出久の個性の情報が洩れれば同じように誘拐騒ぎになっていたとは思いますが。

ですが！ 出久が誘拐される以前にはすでに雄英高校は出久の個性について大まかにはありますが知っていたというのはいまもう聞いています。

なのに、ただ情報を規制しただけで、これといった対策も取らないままにこういう事態にまでなったのは雄英の落ち度だと私は確信しています」

長々と喋り続けたのか喉が付かれたのか一回水を飲む引子は、それでもその眼には雄

英に対する不安がありありと浮かんでいた。

出久も出久で引子の言葉が否定できる部分が見つからずにただ黙っているしかできないでいた。

「……出久はあなたに憧れています。そして先日 of 戦いの映像も見させてもらっていました。一市民としましては感謝の思いでいっぱいです。ですが、それとこれとは別問題で出久もこのままヒーローになってあなたのような過酷な道を歩まれる事になるんですしたら……私は無個性のまま、ヒーロー達を応援するだけの傍観者としてのままの方が幸せだったんじゃないかって思うんです」

「お母さん……」

「確かに出久の個性によってたくさんの人達が命を救われたのは事実です。私も出久に倣ってネットなどで出久の事などを見る事も増えました。中には出久に対する感謝の言葉など好意的なものも多く見られました。でも、それ以上にオールマイトの引退の原因になったという批判や中傷の声も少なからず見られました」

「ッ……」

「……………」

それで出久は苦い顔になり、オールマイトはそれでも聞きに徹しているのか無言のままであつた。

「そして今のヒーロー社会は、もう出久をなになんでも必要としてゐる事も自覚してしまいました。あそこまでの奇跡的な“個性”……放っておく手はありませんからね。出久はもうヒーローになる以外の道は無くなつてしまつたという感想もあります。

それも踏まえて、また同じことが起こるかもしれないという思いがあります。

どこの学校に通わせても同じような気はしますが……それでも、少なくとも今の雄英高校に出久を通わせてあげられるほど私の肝は据わつておりません」

「お母さん……」

引子は涙を流しながらそうオールマイトに訴えた。

それは親ならだれでも思うであろう帰結でもあつた。

「あなた方がどれだけ素晴らしいヒーローでも関係ありません。幾度もヴィランに襲撃されてまともに授業も続けられない……生徒達への被害を抑えられない……そんな学校に私は出久を、娘を通わせたくありません……」

「お母さん！ でも、僕は……」

「緑谷ガール、座ろうか」

「でも……」

「いいから」

「はい……」

オールマイトの説得によって着席する出久。

引子は落ち着いたのを見計らってまた話し出す。

「モンスターペアレンツかもしれないですね。むしろモンスターでいいです。私は、出久の夢を奪いたくありません。」

どうしても、ヒーローになりたいのなら別の学校だっていいと思います」

「ツー」

「（辛い事だな……私に憧れ、私を追ってきた君にとつて『雄英で学ぶ』というのは……大きな意義がある。そこを断たれるのは——……）」

オールマイトは言葉を失っている出久を見た。

だが、そこでオールマイトは自身の思い違いを感じた。

「——……いいよ。雄英でなくたって……」

「出久……?」

「緑谷ガール……」

出久はなにかの覚悟を決めたような顔になっていた。

「お母さん、聞いて……神野区でね、僕はたくさんの感謝の言葉を貰ったんだ……確かに僕を中傷する人もいるだろうけど、そんな事はもう覚悟の内だよ。ヒーロー社会に出るっていうのはそういう事なんだって直に思い知った……そして神野区では確かに僕

も少しでもヒーローになれていたんだって……」

「出久……」

「だから、雄英でなくたっていい。僕は、どこでもヒーローの道を進み続けるから」

「(そうか……。君はもう……)」

オールマイトは一度立ち上がった。

そしてもうなるのも辛いであろうマッスルフォームになりながらも、その場で土下座をしていた。

「……順序が間違っていたことをまことに申し訳ありません。私は、緑谷ガールが私の後継にふさわしいと……すなわち、平和の象徴になるべき人間だと思っております」

「えっ……なっ!? ちよ、やめてください! なんですか!?!」

「平和の象徴……だったものとしての謝罪です。彼女の憧れに甘えて教育を怠ってきた事を謝罪いたします!」

そしてボンツ! という音とともにオールマイトはトゥルーフォームに戻ってしまふ。

それでも言葉を続ける。

「そして、雄英教師としての懇願です。確かに私の道は血生臭いものでした。否定はしません。

だからこそ彼女に同じ道を歩ませぬように、横に立ち、もう二度と今回のようなこと

が起こらないように守り、共に歩んでいきたいと考えています」

「オールマイト……」

『今の雄英』に不安を抱かれるのは仕方のない事です。私もお母さんの言い分は正しいと思つていきますから。

しかし、雄英ヒーロー達もこのままではいけないと……変わろうとして努力しています。

どうか、『今の』雄英ではなく、『これから』の雄英に目を向けて頂けないでしょうか！！

そして一回息継ぎをして、

「出久少女に私のすべてを注がせてもらえないでしょうか！！ この命に代えても守り育てます!!」

そこまでオールマイトが言い切った瞬間、引子は足に力が抜けたのか座り込む。

出久は慌てて支えるが、少しして、

「……………やっぱり、嫌です。だって、あなたは出久の生きがいなんですよ？」

決して雄英が嫌いなわけではありません。

出久に……………ただひたすらに幸せになつてもらいたいだけです。

ですから……………命に代えないで、ちゃんと生きて守り育ててください……。それを、約

束してくれるのなら、私も折れましょう……」

「お母さん……!」

「必ず……必ず約束いたします!!」

「出久も……分かってるね?」

「うん! もう心配させないよ!」

引子は吐き出した思いがまだたくさんあったが、それを敢えて胸にしまつて出久を送り出すことを決めた。

その決断が実に尊いものであっても、言葉にしてしまったら出久の将来を狭めてしまいかねないから……。

……そしてまだ外出が許可されていないので玄関先で、

「いい、お母さんを持ったな……」

「はい……」

「お師匠……どこことなく、私の先代に似ているよ……」

「お母さんが……?」

「うん。髪型とか……」

「髪ですかあ……」

「強い人って事さ!」

と、話している中で、

「それと、緑谷ガール」

「はい」

「色々と落ち着いたら爆豪少年達……ワン・フォー・オールの事情を知っているもの達と

私のもとに來なさい。知ってしまった以上は話さないといけないからね」

「わかりました」

「それじゃ、また雄英高校で待っているよ」

「はい!」

二人は雄英での再会を誓ってその場で別れたのであった。

NO. 112 引き継がれる思い【最終話】

……そして出久達は新たな日常を再開するために雄英高校へと集まっていた。

まだ夏休み期間ではあるが、色々とあつてこうして全員欠けずに集まったことは不幸中の幸いでもある。

そしてこれから出久達が暮らす事になる察の前で相澤と対面をしていた。

相澤は全員が注目している中で一度咳込みをしながらも、

「さて……とりあえずではあるが1年A組、無事に集まれてなによりだ」

それでざわめきだす生徒達。

こうして全員集まったのも生徒達各々が親たちを説得したことが功を奏した結果である。

引子と同じく雄英にこれからも通わせていいものかという親が半数以上はいたのだから今回の襲撃事件も含めて雄英高校に対する疑心は多いに越したことはないだろう。

それでも全員集まったのだ。

それだけでもちよつとした奇跡と言つても過言ではない。

そんな中で梅雨が相澤に心配の声を掛けた。

やはり多くの人達が相澤の教師権限をなく奪われてしまうのではないかと不安だったのだろう。

「まあな。俺もそうなると思つていたが……色々とあつたんでこうして無事で行けてるわけさ」

それはヒーロー世界のいざこざの結果でもあるが、いまだに内通者が割れていないために下手にやめられても後が怖いというのもあつた。

「まあ、いい。とりあえずは寮について説明をしたいところだが、まずはこれからについてだ」

『これから……?』

それで全員が首を傾げる。

「襲撃事件についてで手ぶら状態であつたが、今後は合宿での方針である『仮免取得』に向けて動いていく」

仮免取得という単語が相澤から出てくると、そうだった!という反応を示す生徒達が大多数であつた。

それでまた騒ぎ出しそうになったところで、

「大事な話だ。いいか………爆豪、飯田、轟、切島、八百万、麗日……今言った六名があの晩あの場所へ緑谷救出に赴いた」

瞬間、誰が発したか分からないくらい小さい声で「えっ……」という台詞が全員に浸透するように響いた。

その、一瞬にして場が冷え込んだのを相澤は見越してか知らずか続けて言葉を発する。

「その様子だと言いたいのは把握していたようだな。色々と棚上げした上で言わせてもらう。オールマイトの引退という騒ぎがなければ……俺は迷わずに緑谷・耳郎・葉隠以外の全員を除籍処分にしていただろう」

「！！！！」

それで重苦しい空気が全員に押し掛かる。

合理的主義者である相澤がそう言ったのだ。

それはまさしくオールマイトという平和の象徴がまだ現役のままだったならこの場にいるほとんどが雄英高校から姿を消していたことになる。

決してオールマイトの引退が良かった悪かったとは言えないが、結果的には全員はあらゆる意味でオールマイトに救われたという形に捉えてもいいというくらいである。

それを一番痛感しているのが、被害者でありながらももしかしたら全員を巻き込む事

になっていたかもしれない出久本人であった。

それでまたしても恐怖からか出久の体がガタガタと震えだして、隣にいたお茶子
がすぐに気づいて支えてあげた程くらいだ。

「緑谷……お前に罪を問うつもりはないから話はしゃんと聞いている」

「は、い……」

相澤の出久をいたわる言葉があつたとしても、それでも出久は深刻そうな顔をして顔
色が青くなっていた。

「話は戻すが、オールマイトの引退によつてしばらくは混乱が続く……ヴィラン連合の
出方が読めない以上、いま雄英から人を追い出すわけにはいかない。

行った六人はもちろん、把握しながらも止められなかった残りの奴らも理由はどうあ
れ俺達の信頼を裏切った事には変わりない。

だからな、正規の手続きを踏んで正規の活躍をして、これからの信頼を取り戻してく
れるとありがたい」

そこまで言い切ると相澤は「以上!」と言つて一同に背を向けながらも、「さっ!中に
入るぞ。元気に行こう!」とすでに一人だけ気持ちはとうの昔に切り替えていた。

だが、生徒達はそう簡単には気持ち切り替えるのは無理であつた。

「みんな……僕の為に」

出久がなにかを言いかけたその時だった。

「おい、出久！ シャキ！としろや！」

出久の言葉を遮つて爆豪が出久の両頬をバンと叩いていた。

「か、かつちゃん……？」

「ちよ、爆豪君。デクちゃんはいま……」

「うな事はわかつてんだよ麗日！ みんなもよく聞け！ 確かにさつき先生が言った事で俺達の件は不利になる材料がいつぱいだ。だがな！ 俺は……俺達は少なくともあの時出久の事を助けに行つたことは後悔してねえ！

だからよ！ 気にすんなつて言つても気休めにしかならねえけどよ。てめえらももう過去の事は過去にしてこれからを考えていけよ!!」

「爆豪……」

「爆豪、おめえ……」

そんな、口は悪くとも前よりは印象はかなりマシになつた爆豪の言葉によつて先ほどまでの重苦しい空気は少しずつ緩和していった。

「そして出久。てめえもだ！ いつまでもうじうじしてねえで見返してやるくらいの気概を見せろ！」

「かつちゃん……うん！」

「それでいいんだよ。てめえらもわかったなあ!」

爆豪の言葉に、「そうだな……」「さすがは爆豪君だ!」「良いこと言った爆豪!」「てめ!爆豪! いつから緑谷の事を名前呼びになってんだよ!」などなど先ほどまでの空気は爆豪のおかげで払拭されていった。

それを先を進む相澤は聞き耳立てながらも、

「(爆豪……成長したな。茶番役を買ってくれてありがとうがと……)」

と、入学当時から信じられないくらいの爆豪の行動に感謝をしていた。

それから気持ちなんか回復した一同は寮について相澤から説明を受けて、各々で部屋作りをしてその晩には一同の部屋チェックが行われて賑やかだったらしい。

それと、梅雨に関しては爆豪の励ましの言葉があつたとしても、出久救出に赴く前に梅雨が降した言葉、

『どれ程正当な感情であろうともまた戦闘行為を行うというのなら——ルールを破るというのならその行為はヴィランと何ら変わらないものなのよ?』

という言葉が自身の心に棘となつて刺さつてしまつていて、その気持ちを救出に赴いた一同に告白して涙を流し、それでもなんとかこれからも友達でいようという落ち着きを見せていた。

「ごめんなさい……出久ちゃんにもあとでお話しする機会を設けてもらいたいわ……」
「わかつたよ梅雨ちゃん。任せて!」

「お任せください!」

お茶子と百の行動によつて出久ともじっくり話す機会がもらえて梅雨はなんとか前向きに気持ちを乗り換える事ができたという。

その翌日の事であった。

出久含めてあの晩に赴いて出久の秘密を偶然とはいえ知ってしまった爆豪、飯田、轟、切島、八百万、麗日を連れて出久はオールマイトがいるであろう休憩室に入った。

だが、そこで待っていたのは相澤であった。

「来たか、お前達」

「あ、あれ？ 相澤先生、オールマイトは？」

「なに……こんな小さい部屋で大人数で大事な話をするほど今の雄英の防諜設備に関しては信頼を俺は置いていないんでね。」

前に使った会議室でオールマイトは待っている。いくぞ」

「は、はい……」

それで相澤に引率されながらも全員は会議室に入ってしまった。

そこでオールマイトが待っていたのか、

「やあみんな。よく来てくれたね。訓練前の早い時間に時間を割いてくれてありがとう」

「いえ！ それでオールマイト。話とはやはりオール・フォー・ワンが話していた緑谷くんが持っている個性『ワン・フォー・オール』に関しての事ですね？」

飯田がそう手を挙げて発すると、相澤はやはりとすべきか苦い顔になって「そこま
で知っていたか……」という感じになっていた。

「そうだね。君達はどこまでの話を聞いていたんだい？」

「あの時、オールマイトとオール・フォー・ワンが話していた程度くらいです……」

「教えてください。緑谷さんはどのようなものをオールマイトから引き継いでいるのか
を……」

「そうだけ。もう聞く覚悟は出来てる。話してくれオールマイト」

「うん。秘密にしろっていうなら従います。ですからデクちゃんの事を教えてください
！」

最初に挙手した飯田と黙って流れを見ている爆豪も含めてもう覚悟は決まっている
ようである。

出久はオールマイトの顔を見ながらも、

「オールマイト。もうここまで来たらみんなには話しておいた方がいいと思います。中
途半端に知っていても後が怖いですから」

「そうだね緑谷ガール……それじゃみんな、席に座ってくれ」

オールマイトの言葉を受けて全員は席に座る。

それから話される出久のフォウによる複数の個性とは別に『ワン・フォー・オール』に

ついて話される事になる。

出久がワン・フォー・オールを貰うキツカケになった話から、ワン・フォー・オールの秘密などを話されていき、一つの事実を知るたびに何度も出久が受け継いだ力はどういうものかを思い知る事になった。

そして全部を聞き終えて、

「ごめんね、みんな……今まで黙っていて」

「いや……それは仕方がないんじゃないか？こんなん公表できるわけがねえし……」

出久の謝罪に切島がなんとか言葉を返したが、それでも真実を知った身としてはまだ許容量が不十分である内容であったのは間違いないのだから。

「とくに……轟くん。ごめん」

「なんで謝る必要があるんだ……？」

「だって……雄英体育祭の時に……」

出久はその時に轟に真実を話せない事を苦しんだことを思い出していた。

だがその言葉だけで轟も察したのか、

「気にすんな……。それでも緑谷はあの時、俺と本気で戦ってくれたのは間違いない事実なんだから」

「うん、ありがとう……」

「デクちゃん！ 私、ぜったい秘密にするからね！」

「わたくしも守りますわ！ そして緑谷さんの今後を陰ながらも支えていきますわ！」

「そうだと緑谷くん！ だからそう落ち込まないでくれ！」

「うん……」

最後に、

「出久……」

「かつちゃん……」

今まで聞きに徹していた爆豪が口を開き、出久も身構えたが、爆豪の顔は実にスッキリとしていた。

そんな爆豪の様子に出久は一言、

「怒ってないの？」

と聞いたが爆豪は不敵な笑みを浮かべながらも、

「そんなすげー個性を貰っていいじゃねーか。だがな、それでも俺はてめえより上に行く！ それだけは譲らねえからな！」

「ツ！ うん！ 僕も絶対にオールマイトのような最高のヒーローになってみせるから！」

「それでいいんだよ。てめーらもこれから出久の事を支えていくんだろ？ 誰にもばらす

「なよ……?」

「あたり前じゃねーか!」

「うむ。緑谷くんの持つ個性はただえさえ今回の件で狙われることが多くなったのは確かな事なのだからな。絶対に秘密にしよう」

「せやね、飯田君!」

「そうだな」

「はい!」

全員から秘密にされると言われて出久とオールマイトと相澤はやつと気持ち楽になった。

「さて、では訓練を頑張りなさい。君達なら必ず仮免を取れるという保証があるのだからね!」

「」「」「はい!」「」

………そして、時間はあつという間に流れていく。

仮免試験から始まり、ヒーローインターンでは『死穢八齋會』との戦い。

これによってオールマイトの元サイドキックであるサー・ナイトアイが出久が治癒する前に手足を失い、なんとか一命はとりとめたが引退を余儀なくされた。

だが、同時に壊理ちゃんという女の子を救う事ができた。

そして雄英文化祭では出久に対する嫌がらせがあつたものなんとか和解できたなど……。

そしてヒーロー社会を揺らがす大事件であるヴィラン連合擁する超常解放戦線との激しい戦い……。

これによつて数多のヒーローが犠牲になつたが、それでもなんとかなつたなど……。

それから何度かヴィランとの戦いに巻き込まれていった出久であつたが、なんとか雄英高校をついに卒業することになった。

そこで今までのここには記されていない積み重ねがあつて出久は爆豪、飯田、轟の三

人に呼び出されて向かうとそこで三人に同時に告白された。

「緑谷くん！ 君とこれからも一緒に活躍していきたい！ 俺と付き合わせてもらえな
いだろうか!!」

飯田からは真面目なプロポーズ。

「緑谷……俺は俺の意思でお前と一緒にいたいと思う。俺と付き合ってくれ」

轟からは静かな、だがそれでも燃えている感じのプロポーズ。

「出久！ お前の一生を半分背負わせろや!!」

爆豪は直球からのプロポーズ。

三者三葉からの告白をされて出久は顔を赤くして、

「あ、あの……そのお……」

答えが出ないためにどうするかという感じになっていたが、そこに乱入者が！

「やつぱりダメや！ デクちゃんは私がもらうんやから!!」

「ええ!? 麗日さん!」

「てめえ!? ここまでできてそれはねえだろ!」

「麗日くん!」

「素直にそこをどいてくれ、麗日……」

お茶子の乱入によつて一気に乱痴気騒ぎに発展して言い合いが勃発したが、それで出久はなんとか気持ち余裕が持てて、クスリと笑いながらも出久が出した答えは――

……。

選んだ相手とは幸せになったという。

誰を選んだかはみんなの心の中に……。

……それから幾数十年の時間が流れて、出久はヴィランとの戦いの度に被害者の体を癒し続けて、気づけば『施しの英雄・出雲』と呼ばれていた。

しかし、結婚した相手には寿命の関係で先立たれ、できた子供にも肉体年齢を抜かさず、孫の世代にも迫るくらい出久は若さを保ち続けていた。

すでに同世代のヒーロー仲間達はいなくなってしまう、孤独な日々が続いていた。出久の夢である、『みんなと同じ時間を過ごしたい』という思いは打ち砕かれてしまっていた…。

それでも出久の傍らには常にフォウがいてくれていた。

だから寂しくなかったというのは嘘とはいえ、孫たちの成長も見れてもう出久は満足していた。

そんな時に、出久は個性を使っている時に自身の体が次第に若さが失われていくのを感じて、「とうとうその時が来たか…」と実感し、ワン・フォー・オールを引き継がせるための弟子をとった。

……それから、さらに数年の月日が流れて、

かつて、ゴミだらけだったと言ったら「嘘だー」と言われるほどに綺麗な海浜公園で出久は弟子に車椅子で押されながらも散歩をしていた。

すでに出久からは若さが失われて、ヒーローも引退し後は寿命が尽きるのを待つだけだった。

「師匠……」

「うん……きつと今日なんだと思う」

「そうですか……」

「……………」

弟子との間には悲痛な空気などなく、出久はもうすべて受け入れていた。

「私の寿命を受け取る事は……………」

「……………」

「しないですよね……………わかっています。師匠はもう十分頑張りました」

無言で弟子の言葉を受け流す出久。

「いいかい……………。僕が教える事はすべて教えた。後はお前が頑張る番だよ」

「はい……………」

「大丈夫……………信頼できる人達に思いは託してきたから……………」

「……………はい」

少しの間を置いて弟子は答える。

「覚悟するんだよ……。まだお前は100%を引き出してない。つまり、これから先代の個性も発現していく。当然、僕のも……。僕のが操作するのに一番つらいと思うよ……。なにせいっぱいあるから……」

「はい。頑張ります!」

「その意気だよ。大丈夫……。辛くなってもいつでも会えるから……」

「はい……!」

弟子はもうこれが出久の最後の残す言葉になるのだろうと覚悟した。

「ああ……。でも心残りがあると云えばあるね……。お前の成長もだけど……。もう会えない人達と……。また会いたいものだね……」

「あの世というのが本当であればきつと会えますよ……」

「そう信じたいね……。手を、おだし……」

「ッ! はい……」

弟子はそれがなにかの合図だと悟り、苦い顔をしながらも手を出した。

そして出久は弟子の手に手を置いて、最後の個性を発動させる。

すなわち——……、

「あつ……流れ込んできます。師匠の最後の命が……」

「それがわかれば上出来だね。頑張るんだ、……よ……」

そしてついに出久は魂を全部使い切って事切れてあの世へと旅立った……。

「きつと……きつと頑張ります!! 師匠!!」

弟子は涙を流しながら出久を静かに弔う準備を始めたのであった。

……あの世という概念があるのなら出久はそこへと向かっているのだろう。

だが、魂の半分は分割されて残滓として弟子に与えた『ワン・フォー・オール』へと流れていく。

出久とフォウの魂は『ワン・フォー・オール』に導かれて、

『フォウ……やっぱりここに来るんだね』

『そうだねイズク。思えば振り回されてきた人生だったが、イズクと一緒に一生を終えれたのは良かったと思う』

そこに、

『……ようやく来たようだね。緑谷ガールにフォウ君……』

『あっ!!』

魂は『ワン・フォー・オール』に宿るのだから当然いてもおかしくない。

でも、出久がいつかまた会いたい人であったその方……。

『お、オールマイトおおお!!!』

出久はすぐさまにオールマイトに抱き着いた。

『ハハハ！ これからはまた一緒になれるわけだ。師匠達もいる。存分に君達の今まで
の活躍ぶりを聞かせてくれ』

『はい！はい!!』

こうして、出久とフォウは無事オールマイトと再会を果たして、ともに弟子の成長を
見守る立ち位置になったわけである。

思えば、出久はフオウと出会い変わったのだと思う……。

そしてフオウも出久と出会い変わったのだと思う……。

皮肉にもオール・フォー・ワンという憎しみの対象が一緒だったとはいえ、それでもこうしてフオウもワン・フォー・オールの一部としてある意味解放されたのだから偶然というのは恐ろしく等しく必然というものであった。

最後にオールマイトとも再会できて、もう出久も満足であろう……。

ワン・フォー・オールを引き継いだ弟子もこれから頑張ってもらいたいものであった。

ただ………誤算があつたとすれば、

「師匠!!.. なんで私まで猫娘になってしまってますかぁー！！！！！！つ!!」
個性の反映まで引き継がれてしまっていて、弟子は性別はどちらにせよ結局猫娘になるというオチであったために、弟子の成長を面白おかしく見守るのも悪くないと出久は思うのであった。

<了>